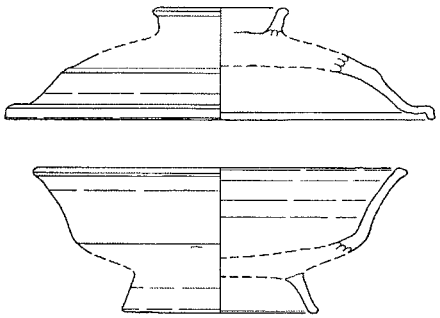
新発田市埋蔵文化財調査報告　第50

丸山Ａ遺跡　発掘調査報告書

県営ほ場整備事業(蔵光地区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



２０１４

新発田市教育委員会

新発田市埋蔵文化財調査報告　第50

丸山Ａ遺跡　発掘調査報告書

県営ほ場整備事業(蔵光地区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１４

新発田市教育委員会

例　言

1．本書は，新潟県新発田地域振興局が計画した，「県営ほ場整備事業(蔵光地区)」に伴う，丸山Ａ遺跡の発掘調査報告である。

2．丸山Ａ遺跡は，新発田市蔵光字丸山4193-1番地ほか に所在する。

3．調査は新潟県新発田地域振興局の依頼を受け，新発田市教育委員会が主体となって実施した。

4．調査は，範囲確認調査を平成15年10月14日～22日に，本発掘調査(現地作業)を平成22年5月18日～10月6日に実施した。整理作業は，平成22年の現地調査終了後の冬期間に遺物の水洗・注記などの基礎整理を，平成23・24年度に本格的な整理作業を行い，平成25年度に報告書を執筆・刊行した。

5．執筆分担は，「Ⅴ－１」を笹澤正史が執筆し，その他の執筆と編集を調査担当者である渡邊美穂子が行った。なお，Ⅲの古代の土師器･須恵器に関する記載は，笹澤の協力・助言を受けている。また，外部機関に分析を委託したⅣ－１～３は文頭に受託者・機関名を記した。

6．調査費用は，平成15年度の範囲確認調査を文化庁の補助金を受けて実施し，平成22～25年度の本発掘調査（現地発掘調査から整理，報告書の刊行にいたるまで）の費用は，農家の個人負担分を文化財保護部局が，その他を工事の主体者である新潟県（新発田地域振興局）が負担した。負担割合は平成22年度が10％：90％，平成23～25年度が7.5％：92.5％である。なお，文化財保護部局分は，その50％が文化庁補助，15％が県費補助の交付を受けており，残りを市が負担した。

7．調査の記録および出土品は，新発田市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本報告掲載の図面は，地図・地形図は図の「天」を真北とするが，全体遺構配置図のみ，方位記号の北が磁北を指す。磁北は真北から西偏約7°20′である。各遺構図は基本的にグリッドにあわせて掲載しており，グリッドラインＹ軸が磁北より東偏25°である。

2．遺構･遺物の記載方法や縮尺などについては，「Ⅲ－１掲載方法」に記載し，説明した。なお，各々の図に縮尺を記したが，おおよそ，遺構は1／60・1／30，遺物は1／4を基本としている。

3．遺構写真にはスケールとしてスタッフ・ピンポール(50cm)を写し込んでいる。

4．遺構の土色と遺物の色調は，「新版　標準土色帳」(小山・竹原1967)を用いて観察・表記したが，指示された同定方法ではなく，日陰で色調を直接観察した。

5．出土遺物には，白のポスターカラー，または黒のインクで「遺跡名，遺物番号，グリッド，遺構名･出土層位，出土年月日」を記し，報告書の図版番号を他の色で追記した。又，胎土分析を行った須恵器・土師器には，分析番号も記した。なお，遺跡名は「丸山Ａ」，遺構名は，掘立柱建物の柱穴は「掘－Ｐ」または「SB－Ｐ」，土師器焼成土坑は「焼土」または「HSK」，土坑は「土」または「SK」，溝は「溝」または「SD」，井戸は「井」または「SE」，柱穴以外のピットは「ピット」または「P」，攪乱は「乱」，表面採集は「表サイ」と略記した。

6．調査・報告に際しては，下記の方々からご協力・ご指導を受けた。記して感謝の意を表す次第である。

春日真実　関　雅之　高橋春栄　三ツ井朋子　渡邉朋和　新潟市教育委員会
東北芸術工科大学文化財保存修復センター

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　遺跡の歴史的環境と周辺の遺跡 …… 4

Ⅱ　調査経過と方法

1　開発計画と発掘調査 …… 6

2　本発掘調査の概要

（1）調査方法 …… 9

（2）現地調査抄 …… 9

Ⅲ　調査結果

1　掲載方法

（1）遺　　構 …… 12

（2）遺　　物 …… 13

2　調査区の概要 …… 21

3　掘立柱建物 …… 23

4　土師器焼成坑 …… 28

5　土　　坑 …… 41

6　溝・井戸・その他の遺構 …… 90

7　その他の出土遺物 …… 96

（1）須恵器 …… 97

（2）土師器・土製品 …… 98

（3）木製品 …… 98

（4）焼成粘土塊・粘土層 …… 99

（5）鉄　　滓 …… 102

（6）中世の出土遺物 …… 102

Ⅳ　自然科学分析 …… 103

1　丸山Ａ遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）と
ウィグルマッチングによる建物柱材の暦年代推定 …… 104

2　土器胎土のＸ線回折試験及び化学分析試験 …… 114

3　丸山Ａ遺跡出土土器の胎土分析 …… 121

Ⅴ まとめ

1 丸山A遺跡出土土器の特徴と時期的な位置付け

（1）遺構出土資料の検討 …… 132

（2）遺構出土資料の組成と特徴 …… 139

（3）丸山A遺跡遺構出土資料の先後関係について …… 139

（4）丸山A遺跡出土資料の編年的位置付け …… 140

2 遺構の変遷と特徴

（1）遺構の変遷 …… 147

（2）土師器焼成 …… 149

（3）土器埋納土坑－9号土坑－ …… 151

3 要　約 …… 153

引用・参考文献 …… 154

遺構・遺物一覧表 …… 156

報告書抄録 …… （後付け）

挿図目次

第1図 遺跡の位置 …… 1

第2図 遺跡周辺の旧地形 …… 3

第3図 丸山A遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 3

第4図 古代の遺跡分布 …… 5

第5図 工事計画と調査範囲 …… 6

第6図 グリッド設定と基本土層 …… 10

第7図 器種分類(1) …… 15

第8図 器種分類(2) …… 17

第9図 器種分類(3) …… 19

第10図 器種分類(4) …… 20

第11図 遺構配置 …… 22

第12図 1号掘立柱建物と出土遺物 …… 23

第13図 2号掘立柱建物 出土柱材 …… 24

第14図 2号掘立柱建物(1) …… 24－25

第15図 2号掘立柱建物(2) …… 25

第16図 3号掘立柱建物・1(a・b)号溝 出土遺物 …… 26

第17図 3号掘立柱建物，1(a・b)号溝 …… 27

第18図 4・5号掘立柱建物 …… 29

第19図 1・2号土師器焼成坑と出土遺物 …… 30

第20図 3号土師器焼成坑・3a号土坑 出土遺物 …… 31

第21図 3号土師器焼成坑，3(a・c)号土坑 …… 32

第22図 4・5・6号土師器焼成坑，7(a・b)・14号土坑と出土遺物 …… 34

第23図 7号土師器焼成坑，10・12号土坑 …… 36

第24図 7号土師器焼成坑・10号土坑 出土遺物 …… 37

第25図 8号土師器焼成坑と出土遺物 …… 39

第26図 9号土師器焼成坑，27(a～c)号土坑 …… 40

第27図 27(a～c)号土坑 出土遺物 …… 41

第28図 1(a～c)号土坑(1) …… 42

第29図 1(a～c)号土坑(2) …… 43

第30図 1a号土坑 出土遺物(1) …… 45

第31図　1(a～c)号土坑　出土遺物(2) …… 46
第32図　2(a～d)号土坑と出土遺物 …… 47
第33図　4(a～c)号土坑 …… 49
第34図　4(a・c)号土坑　出土遺物 …… 50
第35図　5・6・8号土坑と出土遺物 …… 51
第36図　9号土坑(1) …… 52
第37図　9号土坑(2) …… 53
第38図　9号土坑　出土遺物(1) …… 55
第39図　9号土坑　出土遺物(2) …… 56
第40図　9号土坑　出土遺物(3) …… 57
第41図　9号土坑　出土遺物(4) …… 58
第42図　9号土坑　出土遺物(5) …… 59
第43図　9号土坑　出土遺物(6) …… 60
第44図　11号土坑と出土遺物 …… 61
第45図　13・15号土坑と出土遺物 …… 62
第46図　16・19号土坑と出土遺物 …… 63
第47図　17号土坑 …… 65
第48図　17号土坑　出土遺物(1) …… 66
第49図　17号土坑　出土遺物(2) …… 67
第50図　17号土坑　出土遺物(3) …… 68
第51図　21号土坑と出土遺物(1) …… 69
第52図　21号土坑　出土遺物(2) …… 70
第53図　23・24号土坑 …… 71
第54図　23・24号土坑　出土遺物 …… 72
第55図　25(a～d)・29号土坑と出土遺物 … 73
第56図　30(a～d)号土坑 …… 75
第57図　30(a・b・d)号土坑　出土遺物 … 76
第58図　31・32号土坑 …… 78
第59図　31号土坑　出土遺物(1) …… 79
第60図　31号土坑　出土遺物(2) …… 80
第61図　33(a・b)・34・35号土坑と出土遺物 ・ 82
第62図　36号土坑(1) …… 84
第63図　36号土坑(2)と出土遺物(1) …… 85
第64図　36号土坑　出土遺物(2) …… 86
第65図　36号土坑　出土遺物(3) …… 87
第66図　36号土坑　出土遺物(4) …… 88
第67図　36号土坑　出土遺物(5) …… 89
第68図　37号土坑・2号溝・1号井戸 …… 91
第69図　1号井戸　出土遺物 …… 92
第70図　2号井戸 …… 93
第71図　3号井戸 …… 94
第72図　3号井戸　出土遺物 …… 95
第73図　Ec3-4ピット・Hb2-3ピットと出土遺物 ・ 96
第74図　遺構外出土遺物(1) …… 97
第75図　遺構外出土遺物(2) …… 99
第76図　焼成粘土塊(1) …… 100
第77図　焼成粘土塊(2) …… 101
第78図　中世の出土遺物 …… 102
第79図　丸山A遺跡出土一括資料(1) …… 133
第80図　丸山A遺跡出土一括資料(2) …… 135
第81図　丸山A遺跡出土一括資料(3) …… 137
第82図　丸山A遺跡須恵器食膳具の
　器高指数・底径指数傾向 …… 138
第83図　8世紀後半以降の下越の窯跡
　出土須恵器 …… 141
第84図　下越窯跡須恵器食膳具の
　器高指数・底径指数傾向 …… 143
第85図　丸山A遺跡出土須恵器編年表(1) … 144
第86図　丸山A遺跡出土須恵器編年表(2) … 145
第87図　丸山A遺跡の遺構変遷 …… 148
第88図　焼成粘土塊出土分布 …… 150

表　目　次

表1　調査体制 …… 8
表2　丸山A遺跡編年対応表 …… 146
表3　遺構別　焼成粘土塊出土量 …… 150
表4　掘立柱建物一覧 …… 156
表5　土師器焼成坑・土坑・溝・井戸・
　その他の遺構一覧 …… 158
表6　遺物観察表 …… 163

写真図版目次

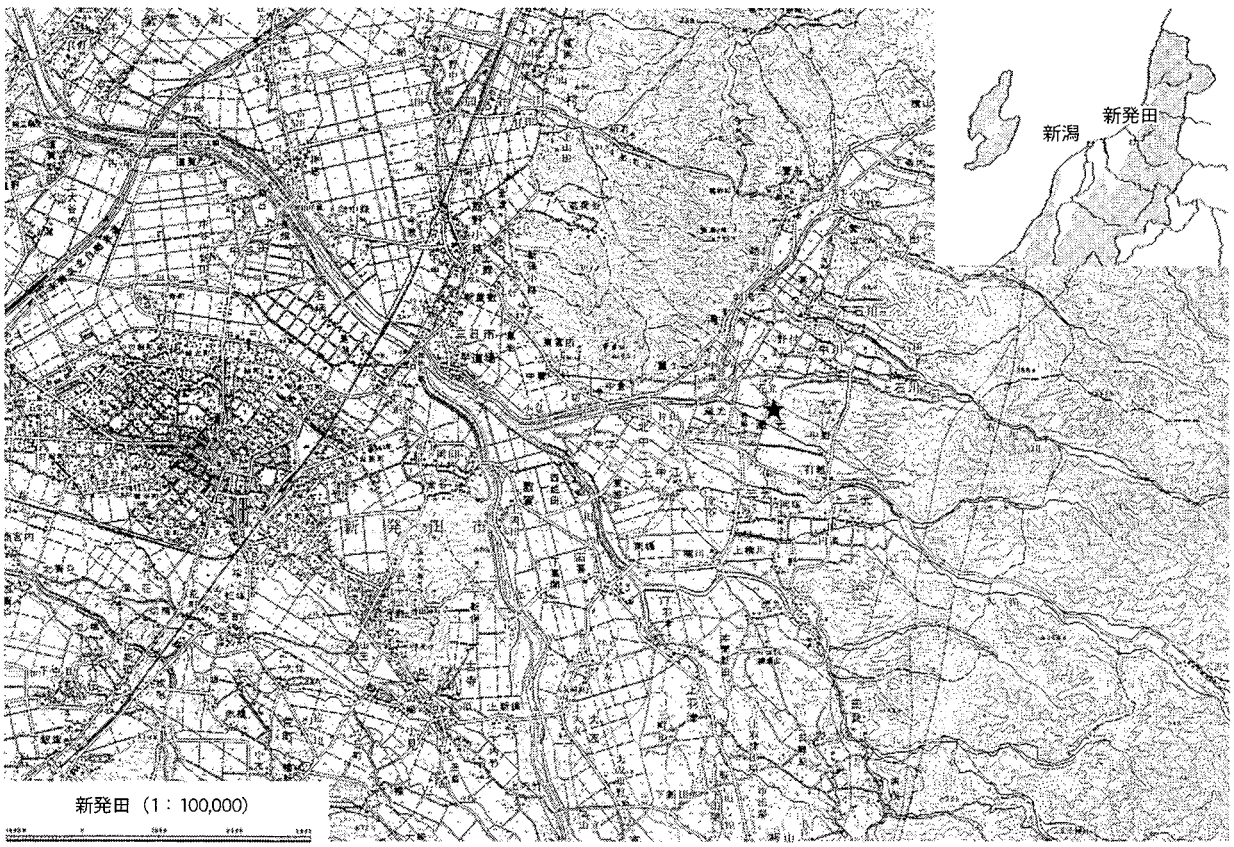
図版１　遺跡遠景，調査区全景
図版２　基本土層，１～５号土師器焼成坑
図版３　６～９号土師器焼成坑
図版４　９号土坑と出土遺物(1)
図版５　出土遺物(2)
図版６　出土遺物(3)
図版７　出土遺物(4)
図版８　土師器胎土分析試料　胎土薄片
図版９　調査風景，１号掘立柱建物
図版10　２・３号掘立柱建物
図版11　２～５号掘立柱建物
図版12　３・６・７・９号土師器焼成坑，
　　３・７・10・12・27号土坑
図版13　１・27号土坑
図版14　２・４・５・８号土坑
図版15　６・９・11号土坑
図版16　13・15～17号土坑
図版17　17・19・21号土坑
図版18　23～25号土坑
図版19　29～32号土坑，２号掘立柱建物Ｐ８
図版20　33～36号土坑
図版21　37号土坑，１～３号井戸，２号溝，
　　Ec3-4・Hb2-3ピット
図版22　出土遺物(5)
図版23　出土遺物(6)
図版24　出土遺物(7)
図版25　出土遺物(8)
図版26　出土遺物(9)
図版27　出土遺物(10)
図版28　出土遺物(11)
図版29　出土遺物(12)
図版30　出土遺物(13)
図版31　出土遺物(14)
図版32　出土遺物(15)
図版33　出土遺物(16)
図版34　出土遺物(17)
図版35　出土遺物(18)
図版36　出土遺物(19)
図版37　出土遺物(20)
図版38　出土遺物(21)
図版39　出土遺物(22)
図版40　出土遺物(23)
図版41　出土遺物(24)
図版42　出土遺物(25)
図版43　出土遺物(26)
図版44　出土遺物(27)
図版45　出土遺物(28)
図版46　出土遺物(29)
図版47　出土遺物(30)

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地

遺跡の位置（第１図）　丸山Ａ遺跡は，新発田市街地の東方約７km，新発田市蔵光字丸山4193番地に位置し，北緯37°57′19″東経139°24′31″（世界測地系）の地点にあたる。遺跡の所在する新発田市は新潟県北部の中心的な都市で，北を胎内市，南を阿賀野市・阿賀町，西を新潟市・聖籠町，東を山形県小国町に囲まれている。全国的に市町村合併の進められた，いわゆる「平成の大合併」に伴い，平成15年に南側に隣接する豊浦町と，平成17年に北側に隣接する加治川村・紫雲寺町と合併し，人口10万人強，総面積532.82km²に達した。市域の東側には櫛形山脈・二王子山塊・五頭山地などの広大な山地が広がり，西側には日本海の海岸に沿って新潟砂丘が延びている。市街地は，中央の扇状地・沖積地に位置する。市街地を挟んで，東側にＪＲ羽越本線と国道7号線，西側に日本海東北自動車道が，おおよそ並走する形で南西から北東方向に延びている。

丸山Ａ遺跡は山地突端の台地上緩斜面に位置し，周辺にはアスパラガスをはじめとする農作物の畑地が営まれている。また，眼下の沖積地には豊かな水田地帯が広がっている。今回，県営ほ場整備事業(蔵光地区)により，緩斜面の一部を水田に造成する計画となり，遺跡の一部が損壊を免れ得ないため，この部分について工事前に発掘調査を行うこととなった。



第１図　遺跡の位置

遺跡の立地と近隣の遺跡（第２・３図） 丸山Ａ遺跡は，市域東側の二王子山塊から流れ出した坂井川が作った河成段丘上に立地する。二王子山塊西裾端の丸山(標高1,215m)から延びる河岸段丘を,北の石川川と南の三光川が開析した台地の南向き緩斜面にあたる。遺跡周辺の河川は流れ下って坂井川・姫田川に合流。さらに現在は新発田市早道場で加治川に合流しているが，遺跡の営まれた当時は，櫛形山脈の麓で北西に流れを変え，塩津潟(旧紫雲寺潟)に流れ込んでいたと考えられる。高濱氏・卜部氏による研究(高濱・卜部2004)を参考に，第２図に遺跡周辺の旧地形を示したが，９世紀中葉の地震による地盤沈下以前，塩津潟(旧紫雲寺潟)の潟域は最大域の半分以下であったと推測されている。

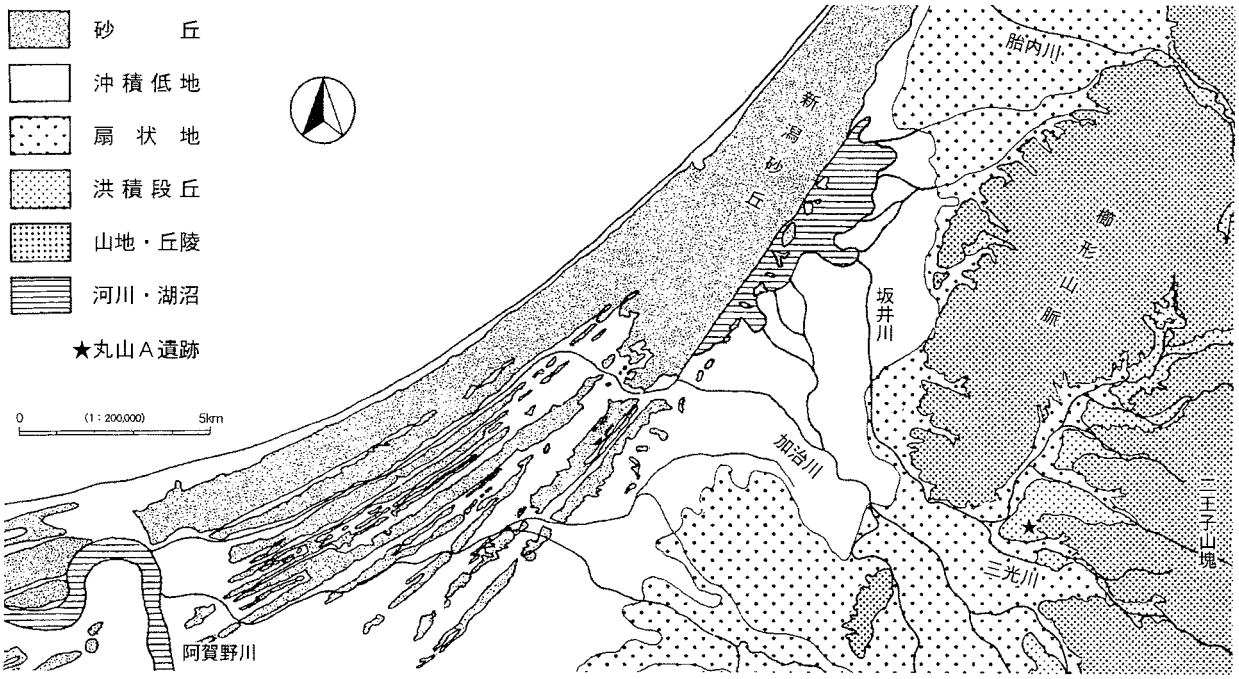
丸山Ａ遺跡の周辺には多く遺跡が存在するが，山地縁辺の台地という立地から，旧石器・縄文時代の遺跡が大半を占める（第３図）。後期旧石器時代前半期の台形様石器群が発掘調査された前山遺跡(鈴木ほか1996)をはじめ，後期旧石器時代後半期の丸山Ｃ遺跡・小丸山Ｃ遺跡，縄文時代の添江遺跡・丸山Ｂ遺跡・十二林遺跡・小丸山Ａ遺跡・打越遺跡などがある。このうち，小丸山Ａ遺跡からは，縄文時代前期末の土器片とともに，滑石製の玦状耳飾りが採集されている(高橋1996)。また，丸山Ｂ遺跡では，昭和45年の開墾時に，鉄鉱石粉の入った晩期の深鉢形土器が発見されている(田中1996)。縄文時代後・晩期の十二林遺跡からは，昭和27年の道路工事に伴う土取りの際，特異なフォルムの注口土器や，人をかたどった文様を描いた壺型土器などの優品が一括出土し，市の有形文化財に指定されている(石川1998）。

また，中世の遺跡もいくつか見られるが，ほとんどが鎌倉時代～戦国時代にこの地を支配していた加地氏に関連する遺跡である。蔵光館跡は加地氏の居館跡と伝えられ，堀と土塁の一部が確認できる。加地氏の菩提寺である香伝寺境内に所在するが，同寺は約700年の寺歴がある古刹で,もともとは丸山山中にあったが，天正年間に加地氏の旧館を寄進され，移転したと伝えられている(伊藤1980）。香伝寺本山跡はその名の通り，同寺が現在地へ移転する以前の古地伝承のある場所で，丸山西麓の沢の中に，人為的な平坦面が３段遺存している。また，麓城跡は，坂井川の北西側に連なる櫛形山脈の尾根上に位置する。さらに尾根筋を西に1km行くと，加地氏の本拠とされる加地城があり，これの出城的な存在と指摘されている(水澤2004)。

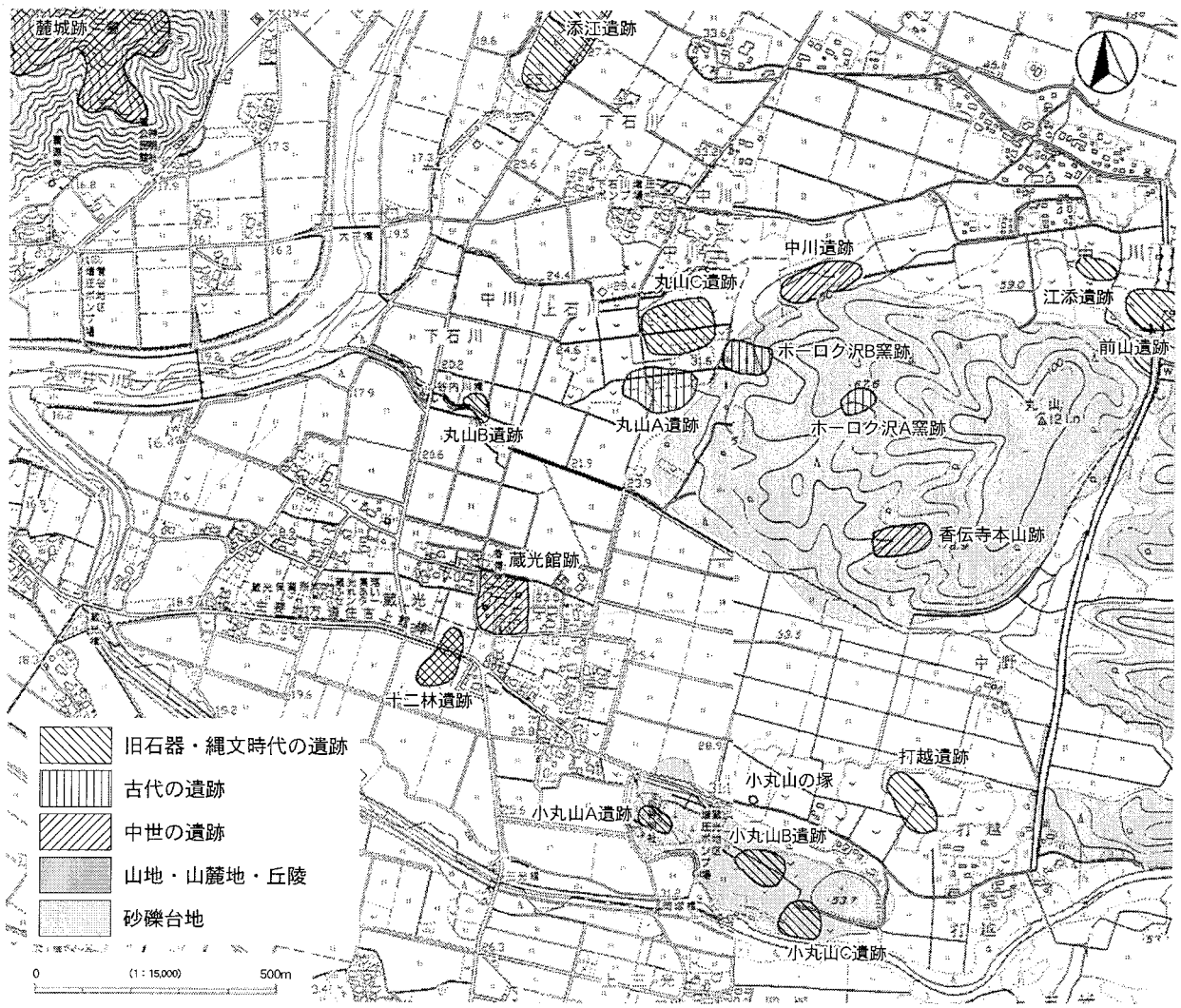
これらに対し，古代の遺跡は丸山Ａ遺跡と，須恵器窯のホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡が見つかっているのみである。ホーロク沢Ｂ窯跡は，今回調査地点の200mほどの北側斜面上方，わずかに傾斜が急になる部分に位置する。ホーロク沢Ａ窯跡は，低い尾根を挟んで1本南側の沢(宝禄沢または宝次沢)，調査地点から約400m東に上った谷の北斜面に位置する。３遺跡とも８世紀中頃～９世紀前半に位置づけられており(坂井1989，鶴巻2001），当該期における当地域の遺跡は耕作に適した平野部に多く，丘陵地・山地に立地するのは須恵器窯や製鉄関連の生産遺跡がほとんどであるため，丸山Ａ遺跡も須恵器窯に関連する集落跡と推定されてきた(鶴巻2001)。

丸山一帯の遺跡発見は古く，北蒲原郡を中心に遺物の採集活動を行っていた畠山佑二氏の資料の中に，昭和10年「菅谷村丸山」と記された須恵器片がある(関ほか1988)。また，昭和11年に著された金塚友之丞氏の遺跡分布図にも，この地点が記録されており，当時すでに，この付近で遺物を採集できることが知られていたようである。また，下越を中心に採集活動を行っていた田中正治氏の調査メモによれば，以前から遺物が表採されていたが，昭和30年の農道改修時に，多量の土器が出土して，地元を驚かせたとのことである。

その後，ホーロク沢Ａ窯跡は，昭和30年代に長谷川賢造氏・田中正治氏により，相次いで発掘されている(ただし，正確な発掘地点は不明）。また，昭和37年に立教大学の調査団が新発田市で資料調査を行い，丸山南東隅の丘陵に須恵器窯址ありと報告している(中川ほか1963)。一方，ホーロク沢Ｂ窯跡は昭和54年に畑地で遺物を採集し，発見された。傾斜部の下端が削られており，採集品に須恵器の融着資料を含むことから窯跡としているが，窯体自体は未確認である。



第2図　遺跡周辺の旧地形



第3図　丸山A遺跡の立地と周辺の遺跡

2　遺跡の歴史的環境と周辺の遺跡

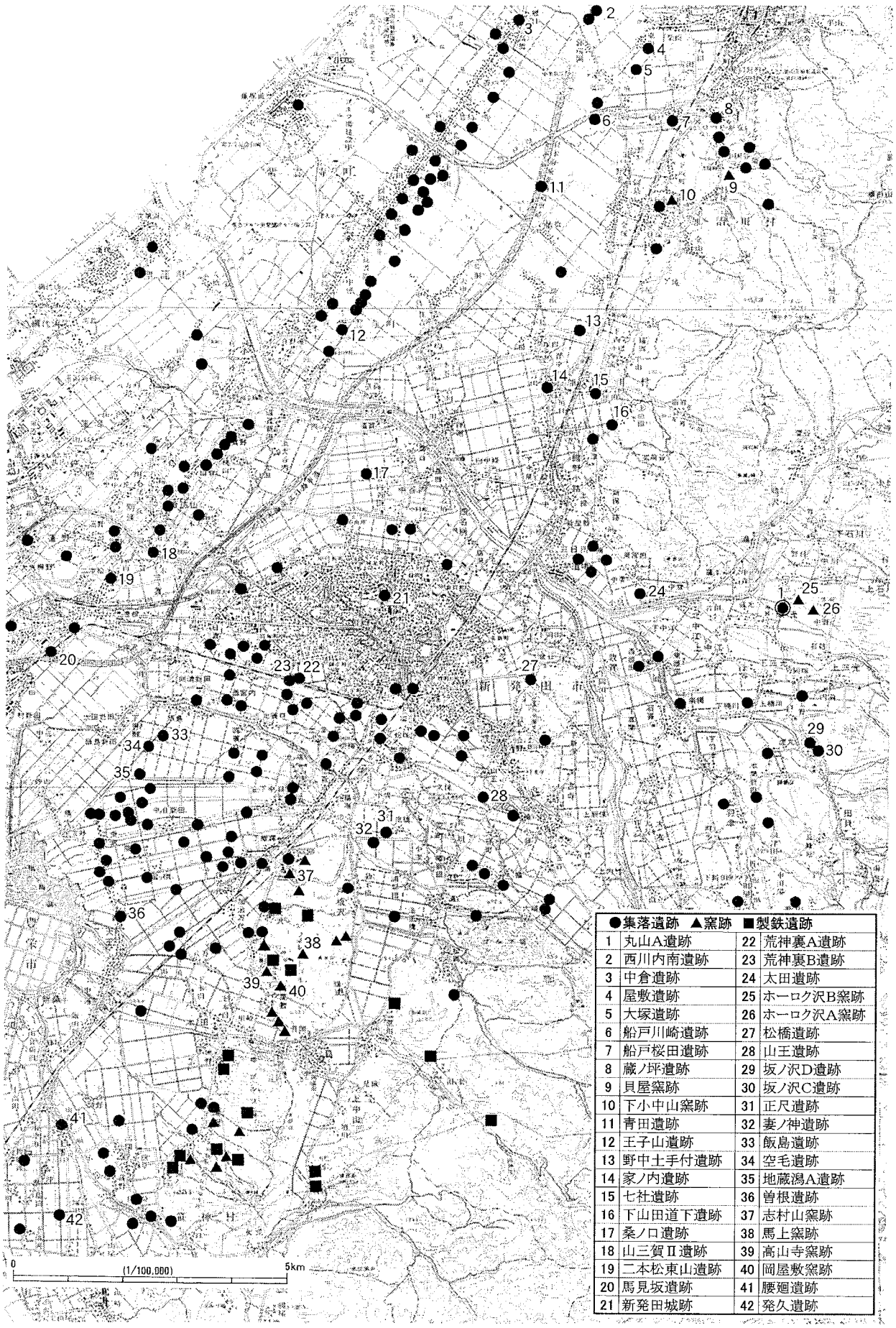
丸山Ａ遺跡は，調査の結果，８世紀後半～９世紀中頃に位置づけられる。本遺跡の営まれた奈良・平安時代は，辺境の地であった越後が律令国家の政策領域に組み込まれていく時代である。大化３・４年(647・648)，渟足柵・磐舟柵が相次いで設置されたことが『日本書紀』に記述されている。これら柵の位置には諸説があるが，設置が北方政策の一環であったことは疑いない。当時の様子が確認できる遺跡は少なく，近隣では砂丘上の馬見坂遺跡(20)で，遺物が比較的まとまって見つかっているのみである(関2001)。なお，７～８世紀と時間的に幅はあるものの，馬見坂遺跡・山三賀Ⅱ遺跡(18)(坂井ほか1989)・王子山遺跡(12)(渡邊ほか2008)など，砂丘上の複数遺跡で，北方の人々(蝦夷)との関係をうかがわせる土器(加藤2004)が他の遺物に混じって少量ながら出土している。

その後，８世紀初頭には，佐渡を除く現在の新潟県とほぼ同じ範囲が分離され，越後の国域が確定。新発田市域の大半は越後国沼垂郡賀地郷に属していたとされてきたが(桑原1980)，近年，山際では北部の磐舟郡と南部の蒲原郡が直接郡域を接していた可能性が指摘されており(平川2005),丸山Ａ遺跡の所属郡も検討を要する。遺跡周辺の河川が，塩津潟(旧紫雲寺潟)東部に流れ込むことから見て，この付近に位置する蔵ノ坪遺跡(8)との関連が想定しうる。蔵ノ坪遺跡は「少目」の記載のある荷札木簡や，「津」と墨書された須恵器杯の存在から，８世紀後葉～９世紀後葉の水上交通に関連する官衙関連遺跡と想定されている(飯坂ほか2002)。

なお，当地域における８世紀前半の遺跡は少なく，平野部の荒神裏Ｂ遺跡(23)，砂丘上の山三賀Ⅱ遺跡が確認できる程度である。８世紀半ば以降，遺跡数は徐々に増え，９世紀になるとさらに増加する。これらの遺跡は主に，砂丘上とともに沖積地の自然堤防上・微高地上に立地しており，この傾向は新田開発に関連するものであろう。調査により集落であることの明らかな遺跡だけでも，塩津潟(旧紫雲寺潟)北辺の蔵ノ坪遺跡・船戸川崎遺跡(6)・船戸桜田遺跡(7)，櫛形山脈南・西側（旧坂井川沿い)の野中土手付遺跡(13)・下山田道下遺跡(16)・太田遺跡(24)，加治川扇状地の桑ノ口遺跡(17)・荒神裏Ａ遺跡(22)・松橋遺跡(27)・山王遺跡(28)・飯島遺跡(33)・空毛遺跡(34) ・地蔵潟Ａ遺跡(35)，福島潟及び周辺河川の微高地・自然堤防上に位置する曽根遺跡(36)・腰廻遺跡(41)・発久遺跡(42)などがある。また，９世紀後半には，丘陵部にも開発の手が及んでおり，坂ノ沢Ｃ遺跡(30)のような段丘上の集落遺跡や，これと一体として経営される坂ノ沢Ｄ遺跡(29)のような小規模遺跡も出現する。

一方，丘陵・山地の山裾では８世紀前葉から須恵器生産が始まり，８世紀末～９世紀前半に盛行，９世紀半ばに越後の須恵器製品の大半が佐渡産に代わられるまで続く。丸山Ａ遺跡の立地する二王子山西麓では，これに近接する８世紀後半のホーロク沢Ａ窯跡(26)・Ｂ窯跡(25)が営まれる。また，櫛形山脈西麓には８世紀前葉の下小中山窯跡(10)や９世紀前半の貝屋窯跡(9)，本田山・真木山などを含む笹神丘陵には８世紀前半の志村山窯跡(37)を始めとし，馬上窯跡(38)・岡屋敷窯跡(40)・清見寺窯跡，９世紀中葉の狼沢窯跡などが営まれる(春日ほか2004)。この時期，本田山・真木山では，製鉄も行われる(関ほか1981)。

その後，10世紀後半以降は詳細のわかる遺跡が少なくなるが，日用雑器における木製容器・鉄鍋の比率の増大と，これに伴う土器類の相対的減少による，見かけ上の減少であろう。律令体制が崩れ，私的荘園開発が盛んになる平安時代末期の『吾妻鏡』には，沖積地南部が金剛院領加地荘として記載され，城氏関連の寄進系荘園の南端に含まれていたことが想定されている (阿部1980)。



●集落遺跡 ▲窯跡 ■製鉄遺跡			
1	丸山A遺跡	22	荒神裏A遺跡
2	西川内南遺跡	23	荒神裏B遺跡
3	中倉遺跡	24	太田遺跡
4	屋敷遺跡	25	ホーロク沢B窯跡
5	大塚遺跡	26	ホーロク沢A窯跡
6	船戸川崎遺跡	27	松橋遺跡
7	船戸桜田遺跡	28	山王遺跡
8	蔵ノ坪遺跡	29	坂ノ沢D遺跡
9	貝屋窯跡	30	坂ノ沢C遺跡
10	下小中山窯跡	31	正尺遺跡
11	青田遺跡	32	妻ノ神遺跡
12	王子山遺跡	33	飯島遺跡
13	野中土手付遺跡	34	空毛遺跡
14	家ノ内遺跡	35	地蔵潟A遺跡
15	七社遺跡	36	曽根遺跡
16	下山田道下遺跡	37	志村山窯跡
17	桑ノ口遺跡	38	馬上窯跡
18	山三賀Ⅱ遺跡	39	高山寺窯跡
19	二本松東山遺跡	40	岡屋敷窯跡
20	馬見坂遺跡	41	腰廻遺跡
21	新発田城跡	42	発久遺跡

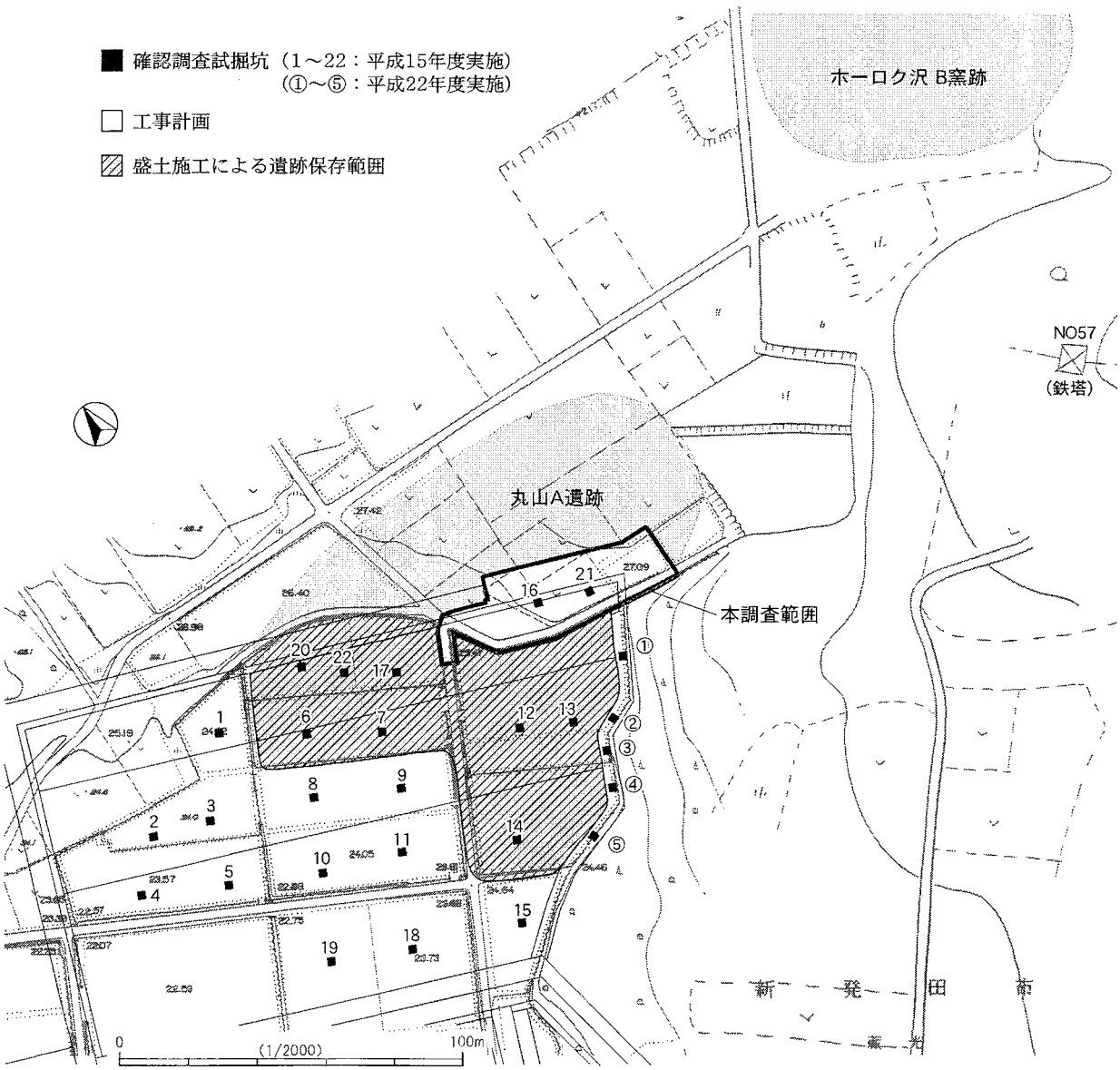
第4図　古代の遺跡分布

Ⅱ　調査経過と方法

1　開発計画と発掘調査

工事計画と事前協議　平成11年８月13日，市農林課経由で新潟県新発田農地事務所から新発田市教育委員会に連絡があり，12年採択・12～16年実施予定の県営ほ場整備事業(蔵光地区)内における遺跡の照会があった。計画予定地内には４遺跡が存在することから，協議が必要な旨を開発担当部局に伝えたところ，12・13年に設計，14年に着工とのことであった。そこで，工事計画に合わせて，確認調査・本調査を実施することで合意した。

範囲確認調査と施工計画の検討　平成15年10月，事業者からの要望により丸山Ａ遺跡の確認調査を実施。周知の遺跡範囲の南半が工事範囲となることから，この範囲に２×２ｍの試掘坑を22箇所掘削した(第５図１～22)。



第5図　工事計画と調査範囲

この結果，９箇所で遺物包含層を確認，浅型コンテナ１箱分の古代土師器・須恵器と鉄滓19点が出土した。水田部分は，昭和36年の基盤整備による改変で，段毎の高低差が著しい。残存する遺物包含層の厚さに大きな差があり，北部ほど遺物量が多かった。調査対象範囲内北端の旧畑地にあたる試掘坑21では，遺構も検出し，工事範囲に遺跡が広がっていることを確認した。

平成19年10月，事業者から遺跡範囲の具体的な田面区画の計画が示された。工事範囲内の遺跡全面に影響の及ぶ内容であったため，遺跡保存に向け，工事区画・計画高などの再検討を要望した。再三にわたる協議を経て，平成21年12月に事業者から，田面高を変更することで遺跡南半部を盛土保存し，掘削範囲を縮小した工事計画が提示された。これを受け，平成22年度に面工事の一部と水路・道路部分を本発掘調査することで合意した(第５図)。

平成22年４月12日付け芝振農整第35号で，文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知により工事計画が提出されると，県教育長から同年４月21日付け教文第90号の２で発掘調査の指示が出された。

これと並行して平成22年４月12日，新潟県新発田地域振興局長から，芝振農整第36号で市教育長あてに発掘調査の依頼があり，５月６日付け芝振農整第134号での契約依頼を受け，新潟県新発田地域振興局長と新発田市長との間で，発掘調査費用の負担契約を締結し，調査に着手した。

本発掘調査　平成22年５月17日付け生学第340号で，文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の報告を行い，５月18日から現地調査に着手した。調査の詳細は日誌抄に譲り，ここでは，調査範囲の変更に係る事項のみ記載する。

同年6月４日，平成15年の確認調査時には工事計画が未定であったため，詳細調査の実施できなかった南側水路部分について，追加の範囲確認調査を実施した。試掘坑５箇所を掘削し(第５図①～⑤)，遺跡の広がりを検討した結果，水路部分までは広がらないことが明らかとなった。平成22年７月，調査経過と追加トレンチ調査の結果を事業者に報告し，工事施工方法の詳細をもとに，調査範囲と費用・期間について再度協議を行った。この協議で，「南東水路用地は遺跡外のため調査範囲から除外」，「北西農道用地は掘削深度が遺物包含層に及ばず，保護層を確保できるため調査対象から除外」，「南西現況農道部分は削平レベルに遺物包含層残存のため調査範囲に追加」，「土師器の生産関連遺跡であるという丸山Ａ遺跡の特殊性と出土遺物量の増大，湧水による調査環境の悪化」などの諸条件の変更を勘案して，現地調査期間を延長し，後日，費用も増額対応することで合意した。

平成22年10月６日に現地調査を終了。10月12日付け生学第1292号で新発田警察署長に遺物発見届を，生学第1293号で県教育長に遺物保管証を提出し，10月26日には教文第908号の８により文化財認定を受けた。その後，11月24日付け生学第1556号で，県教育長に発掘調査の終了を報告した。

整理作業と報告書の刊行　本遺跡は，土師器焼成坑がまとまって見つかった，県内でも数少ない例である。また，浅型コンテナで180箱に及ぶ膨大な量の土師器・須恵器が出土。本遺跡がこれらの生産にかかわることを示す資料が多数含まれており，入念な資料整理・分析・報告を要する遺跡であることから，複数年で整理作業を行うことで事業者と合意した。

平成22年５月の現地発掘調査開始以降，発掘作業と並行して，雨天時には順次記録類の整理を行い，出土品の水洗注記も一部実施した。同年10月の現地調査終了後は，記録類の確認・照合作業を中心に，写真・図面類の整理を行った。特に，膨大な量の出土品の基礎情報の整理・統合は時間を要した。

また，平成23年２月19日～27日には，新発田市遺跡出土品展を実施し，調査成果を速報。660人の来場があった。同年６月には新潟県考古学会大会で調査概要を報告し，研究者の注目を集めた。

平成23年６月13日，事業者と当該年度分の業務について契約し，現地調査資料の基礎整理作業を実施する。遺構は，平面図・断面図・写真・観察記録の照合確認や，土層・出土状況の検討を行い，遺構カードにまとめた。

遺物は量が多く，発掘実施年度中に出土地点及び土層の照合・検討・修正などの基礎情報の整理が未了であったため，これを中心に実施した。遺物の水洗・注記は，一部作業を外部に委託して実施した。基礎整理作業が終了した遺物から順に分類・観察を行い，合わせて実測にも着手した。この他，外部の専門業者に委託して，須恵器・土師器は産地同定及び製作技術の検討のための胎土分析を，柱材・炭化材は歴年代把握のための放射性炭素年代測定を，それぞれ実施した。

平成24年６月11日，報告書刊行に向けた本格整理作業を目的として，当該年度分の業務について事業者と契約した。遺構については，昨年作成した遺構カードの情報をもとに，遺構の形状や性格，遺物の出土状況を検討・確認した。遺物は報告書掲載品を抽出・観察・計測し，観察表を作成した。また，すでに実測済みの遺物についてはトレースも実施した。この他，図化未了の土器類・焼成粘土塊については，外部の専門業者に図化作業を委託し，作業の高速化を図った。図化終了後，出土遺物の報告書掲載用写真撮影を実施した。これらの資料をもとに，仮図版を作成し，一部の原稿を執筆した。

平成25年６月10日，当該年度分業務について事業者と契約した。報告書の刊行を目的とした原稿執筆と挿図作成を実施し，調査成果を報告書として刊行した。

調査費用と調査体制　発掘調査の費用は，平成15年度実施の範囲確認調査については，文化財保護部局である新発田市(教育委員会)が，国庫補助金50％・県費補助金20％の交付を受けて実施した。

一方，本発掘調査については，原因者である新潟県新発田地域振興局(農村整備部)が費用を負担し，依頼を受けた新発田市(教育委員会)が調査主体となり，調査を実施した。費用は，文化庁の通達に従い，事業主体の新潟県新発田地域振興局が90％を，文化財保護部局が工事における直接農家負担分10％を，それぞれ負担した。また，文化財保護部局分のうち，50％分に国庫補助金，15％分に県補助金の交付を受け，残りを新発田市が負担した。

なお，平成23年度以降も，整理作業及び報告書の作成に係る同様の契約を締結したが，直接農家負担割合に変更があったため，92.5％を地域振興局，7.5％を文化財保護部局が負担した。

本遺跡にかかわる調査は，平成15年度の確認調査から25年度の報告書刊行までを，下記の体制で実施した。

表１　調査体制　　調査主体者:新発田市教育委員会

調査年度	平成15年度（範囲確認調査）		平成22年度（現地調査　5月18日～10月6日，実質82日間，　基礎整理作業）			
調査期間	平成15年10月14日～10月22日		平成22年5月6日～23年3月18日			
代　表	教育長	大滝　昇	教育長	大滝　昇(～平成22年11月)，塚野純一（平成22年12月～）		
監理・総括	教育部長	内本　隆	教育部長	土田　雅穂		
	生涯学習課長	小島　一修	教育副部長	白田　久由		
	同課課長補佐	斎藤　俊昭	生涯学習課長	杉本　茂樹	同課課長補佐	林　真治
	同課埋蔵文化財係長	田中　耕作	同課参事	田中　耕作	同課埋蔵文化財係長	鶴巻　康志
調査担当	同課文化財技師	鈴木　暁	同課主任	渡邊美穂子		
調　査　員	同課埋蔵文化財係長	田中　耕作	同課主任	鈴木　暁	同課臨時職員	一箭　義貴
事務担当	同課主事	福地　孝男	同課文化財技師	本田　祐二		

調査年度	平成23年度(基礎整理作業・本格整理作業)		平成24年度(本格整理作業)		平成25年度(本格整理作業・報告書刊行)	
調査期間	平成23年6月13日～24年3月21日		平成24年6月11日～25年3月21日		平成25年6月10日～26年3月	
代　表	教育長	塚野　純一	教育長(～2月28日)	塚野　純一	教育長	大山　康一
			(3月8日～)	大山　康一		
監理・総括	教育部長	新保　勇三	教育部長	新保　勇三	生涯学習課長	船山　隆
	教育副部長兼	荻野　正彦	教育副部長兼	荻野　正彦	同課文化行政室長	田中　耕作
	生涯学習課長		生涯学習課長		同室埋蔵文化財係長	鶴巻　康志
	同課文化行政室長	田中　耕作	同課文化行政室長	田中　耕作		
	同室埋蔵文化財係長	鶴巻　康志	同室埋蔵文化財係長	鶴巻　康志		
調査担当	同室主任	渡邊美穂子	同室主任	渡邊美穂子	同室主任	渡邊美穂子
調　査　員	同室臨時職員	笹澤　正史	同室臨時職員	一箭　義貴		
				井澤　昇		
事務担当	同室文化財技師	本田　祐二	同室文化財技師	本田　祐二	同室主任	鈴木　暁

2　本発掘調査の概要

（1）調査方法

グリッド設定（第6図）　グリッドの設定に当たっては，近隣に，基準点杭が存在しなかったため，用地買収範囲の北辺をグリッドの基準軸とし，境界ライン上の用地杭C1 1912とSB3を基準として使用した。大グリッドは，10m方眼で設定し，各列を西から東にA～Z，北から南にa～zと呼称した。この際，当初の調査予定範囲が，グリッド内に収まるよう設定したため，起点杭C1 1912は東西GH，南北abの交点に当たる。大グリッド内には2m単位で小グリッドを設定，北西隅を基点に東西・南北それぞれに1～5の番号を付し，各々「東西番号－南北番号」と記した。なお，調査区内には確認調査の試掘坑16・21があり，それぞれ，Hb・Jbグリッド内に位置する。

基本土層（第6図，図版2）　遺跡は，北東側に位置する丸山から延びる，丘陵部の先端および緩斜面部分であるため，本来は北東から南西にむかって傾斜している。しかし，後世の水田・畑地耕作により，傾斜地形高所にあたる東端は傾斜面を削平され，削った土で斜面下方の低所を埋め立て，平坦面が作出されている。このように自然な堆積の乱されている部分もあるが，基本土層は上から順に，Ⅰ～Ⅵ層に分層した。このうち,Ⅱ層以下は地点により著しい湧水があった。

Ⅰ層：表土（耕土・旧水田耕作土等）

Ⅱ層：黒褐色土を主体とし，含有物等の異なるa～d層に細分できる。原則的には遺物包含層だが，Ⅱb層のみ遺物を含まない。相互の上下関係は未確認だが，緩斜面に広がるⅡa層と，調査区南東の谷部斜面に堆積するⅡc層は，時間差を持つ可能性がある。Ⅱd層は第6図に現れないが，Ic・Jcグリッドの斜面から南側の水田下まで延びる。色調・含有物等はⅡc層と一致するが，粘性が弱く，Ⅱc層とは分離した。

Ⅲ層：黒色土無遺物層。F列以西の，斜面下方に堆積する。上方側は堆積が薄く，しまりがよいが，下方に向かうにつれ，堆積が厚くなり，しまりは緩くなる。

Ⅳ層：Ⅲ層とⅤ層の漸移層。H列以東は，Ⅴ層同様の亜角礫を少量含むようになる。

Ⅴ層：黄褐色土のいわゆる地山層。含有物等の多少によりa～dの4種に細分でき，a～d層が互層に堆積。含有される砂礫の隙間を通って，地下水がしみ出してくる。

Ⅵ層：灰黄色粘土。Fd5-1グリッド深掘地点，および1～3号井戸の深部でのみ検出した。粘性極強。

（2）現地調査抄

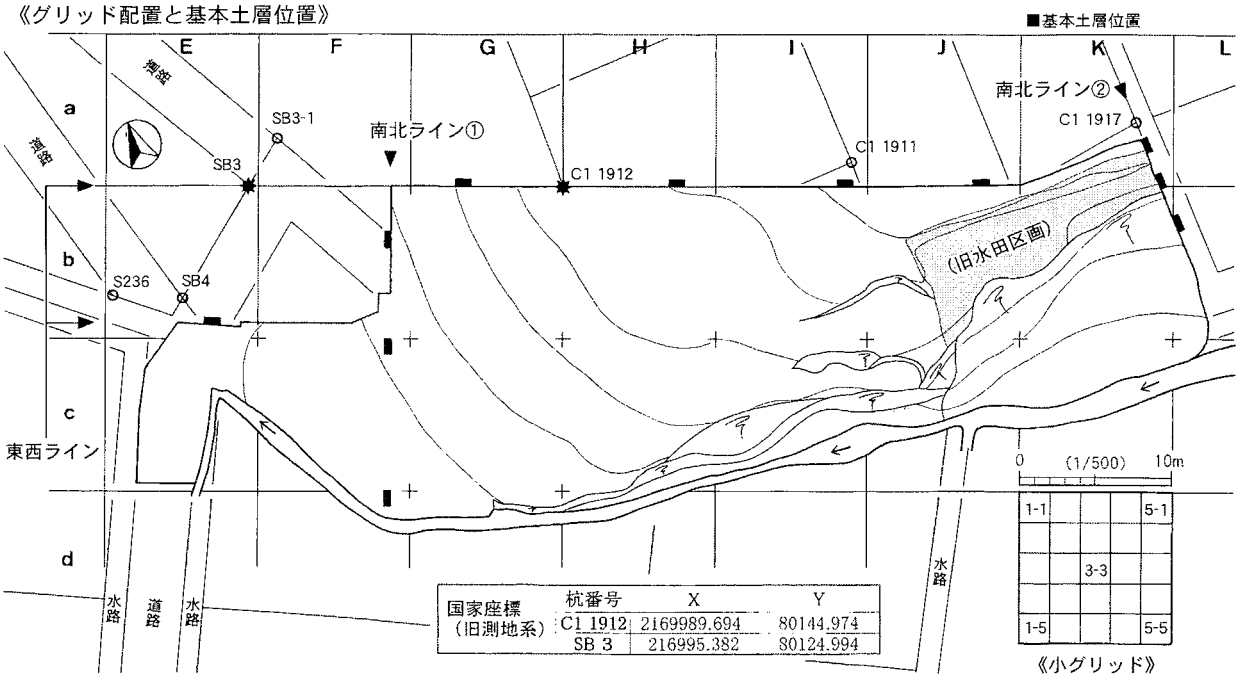
5月18～31日　現地作業開始。設備・機材を搬入し，重機で調査区東半の表土を除去。基準杭を打設,レベル移動を行う。東端から人力掘削に着手。Jb～Kcグリッド(以下，「グリッド」は省略)は水田区画整地のため撹乱されており，遺構は無かったが,撹乱土から一定量の遺物が出土した。なお,Ⅴ層と上層の層理面から湧水。

6月1～7日　Ibの人力掘削に着手。薄く残る遺物包含層を除去すると，Ⅳ・Ⅴ層上面で，焼土・黒褐色土の堆積した遺構プランを検出。一部は土師器焼成坑とみられる。また，Ⅱ層黒褐色土・Ⅲ層の黒色土中での検出であるためプランが不明確な遺構も多いが，遺物がまとまって出土。この部分にベルトを設定して掘削に着手した。

なお，6月4日には，南東水路用地について，追加の範囲確認調査を実施した。試掘坑5箇所を掘削の結果，遺跡が水路部分までは広がらないことを確認した。

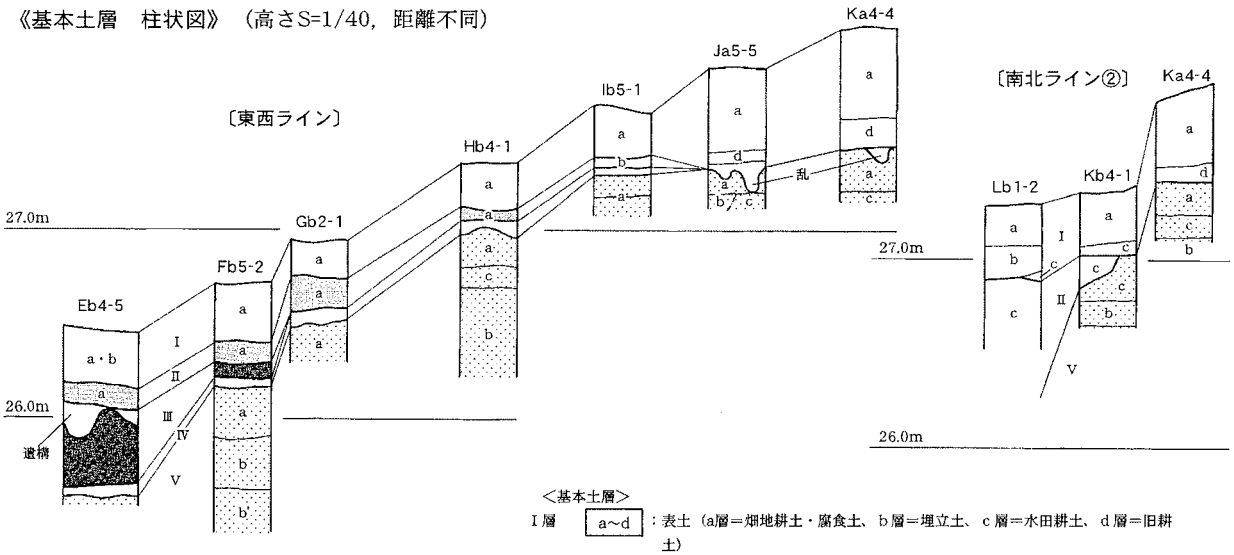
6月8～18日　掘削中の遺構から遺物が多数出土し，調査に時間がかかる。Hb・Hc・Ib・IcのⅡ層(遺物包含層)掘削にも着手する。Icは地山から水が湧き続けており，作業に難渋する。Hb・Hcの旧農道下は摩耗した遺物の細片が多く，地山の硬化が著しい。遺構はほとんど検出されなかった。

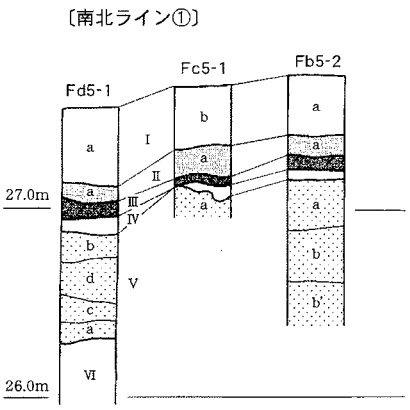
《グリッド配置と基本土層位置》



国家座標（旧測地系）	杭番号	X	Y
	C1 1912	2169989.694	80144.974
	SB 3	216995.382	80124.994

《基本土層　柱状図》（高さS=1/40，距離不同）





<基本土層>

Ⅰ層　a～d　：表土（a層＝畑地耕土・腐食土、b層＝埋立土、c層＝水田耕土、d層＝旧耕土）

Ⅱ層：黒褐色土

a層　a　：10YR3/1・2黒褐色土（遺物包含層）：φ2～5㎜の炭化物粒少、焼土粒微、黄褐色土粒少。しまり良、粘性有。

b層　b　：10YR2/2黒褐色土：φ3～5㎜の黄褐色土粒少。しまり良、粘性有。土質はⅡa層に対応するが、遺物無し。

c層　c　：5 Y2/2オリーブ黒色粘質土（遺物包含層）：φ2～3㎜の砂粒少、炭化物粒少。しまりよく、粘性強。φ5mmの黄褐色土粒微。調査区南東の谷部斜面に、谷を埋めるように堆積。

Ⅲ層　：10YR2/1黒色土（無遺物層）。しまり良く、粘性有。F列以西の、斜面下方に堆積する。上方側は堆積が薄く、しまりがよいが、西側の斜面下方に向かうにつれ、堆積が厚く、しまりがゆるくなる。

Ⅳ層　：10YR4/2灰黄褐色～3/4暗褐色土（漸移層）：φ2～3㎜の亜角礫少。しまり良、粘性あり。

Ⅴ層　a～d　：10YR5/6黄褐色土～6/4にぶい黄橙色土。しまりよく、粘性あり。a層（φ2～3㎜の亜角礫を含み、砂粒の量に多寡あり）、b層（砂粒微量、または無し）、c層（砂礫多）、d層(砂礫主体）があり、互層に堆積。この砂礫間から地下から湧出。

Ⅵ層　：2.5Y6/2灰黄色粘土：しまり良く、粘性強。粘性のやや弱いa層と、極めて強いb層がある。

第6図　グリッド設定と基本土層

6月21日～7月2日　新たに調査区西半のⅠ層(表土)を除去し，基準杭を打設。基本土層確認のためのセクションをF5列に設定した。西半はⅡa層(遺物包含層)が良好に残存しており，遺物の出土状態や土質から遺構の存在が想定できる部分もあるが，下から水が湧き続けており，プラン確認に難渋する。Hcは風倒木痕が重なり,遺構プランが不明瞭であった。また，Fc～Gcにかけては，ビニールを含む撹乱が深くまで及んでいた。その後，梅雨に入り湧水量が増加。中でも，3号井戸は側壁に水脈が当たっており，滔々と水が流入するため，安全性を考慮して，一旦，掘削を中断した。

7月5～9・13日　Ib・cの遺構をほぼ完掘し，Gb北半の遺構掘削に着手。9号土坑をはじめ，各遺構から良好な遺物が多数出土するため，出土状況の図化・写真撮影に多くの時間を費やした。また，いずれも水が浸み出すため排水溝を掘削したところ，この部分でも遺物が多量に出土。一方，斜面下方のGb南半・Gcでは暗渠管埋設が多数見つかり，かつての耕作者も湧水・排水対策に苦労したことがうかがわれた。この暗渠を掘り上げ，開渠排水したところ，少しづつ地山上面の精査が出来るようになり，再度，遺構のプラン確認を行う。

なお，高温多湿の日が続き，作業者の体調管理に注意を要した。

7月14日　地域振興局担当者と協議し，施工方法を確認した結果，Ec・Fcは調査対象から外れることが判明，調査範囲から除外することとなった。一方で，調査区西側の農道下が調査対象と判明した。

7月16・20・21日　暑い日が続き，調査区内の湧水量が減少し始めたため，Hc南半でも遺構の掘削に着手する。しかし，依然，湧水の止まらない部分がある。また，Gcは風倒木痕が多く，遺構確認・掘削に難渋する。

7月22・23日　先日追加調査が決定した調査区西側(Ec)の農道下のコンクリート舗装と表土を除去する。

7月26日～8月3日　Hc南半・Gc南半でもやっと，湧水量が減ってきたため，Ⅱa層を掘削，遺構確認を行うが，撹乱・風倒木痕が多い。9号土坑がほぼ掘り上がってきたが，意図的埋納遺構の可能性が高く，埋め土中の微細遺物を確認する必要が生じ，掘削土を回収，水洗選別を実施することにした。

8月3～11日　暑く，熱射病警報が出される日が続く。Gc西半での遺構確認・検出，掘削に着手。Fcの掘削にも着手。広範囲に及ぶ撹乱の直下が遺構検出面となった。引き続き，Gb・Gcの遺構を掘削し，9号土坑を完掘。また，Gb北側調査区壁から，自然科学分析用の比較資料として，基本土層のサンプルを採取した。

8月17～20日　お盆休みを挟んで，作業再開。わずかだが涼しくなるが，先日の雨により湧水量が増加，再び作業効率が低下する。FcのⅠ・Ⅱ層の掘削がほぼ完了し，遺構の掘削に着手する。Gb・Fcのそれぞれで小型の掘立柱建物各1棟のプランを確認。また，次の作業に向け，Ecに基準杭を打設。

8月21日　土曜日の午前10時30分～12時，地元の蔵光・花立地区を対象に，現地説明会を実施。遺構の公開・説明と，簡単な出土品の展示に，59名の見学者があった。

8月23日～9月10日　FdのⅡa層(遺物包含層)掘削とFc・dの遺構掘削を並行して実施。調査区南東辺Ic・Jc部分の斜面堆積を掘削・精査し，遺構を確認。EcのⅡa層を掘削,Ⅲ層黒色土上面で遺構プラン検出・掘削。遺構掘削が終わったところからⅢ層を掘削，Ⅴ層上面で遺構確認を行い，遺構掘削。並行して，調査終了時の空中写真撮影に向けて，Gb・Hb・Ibの完掘再精査を行い，掘り残しの遺構が無いことを確認する。

9月13～29日　台風接近，長雨の季節に入り作業が遅延する。空中写真撮影の予定を延期し，雨の合間の日を縫って，湧水するEcでⅢ層黒色土を掘削。並行して，9号土坑埋土を水洗選別し，微細遺物を検出・回収する。

9月30日～10月6日　調査区全面の精査を行い，空中写真撮影を実施した。終了後，未了図面の作成と並行して，機材の片付けや埋土の水洗選別を実施。最後に，重機を用いて調査区東端谷地形の堆積土の除去，基本土層の深堀を実施。湧水および深度により,人力掘削が危険なため中断していた1～3号井戸の下部掘削も行ったが予想以上に深く，安全性を重視して，最下部の確認を断念した。その後，プレハブ・トイレ等の設備を撤去した。

10月7・8・13日　発掘機材の洗浄・片付けと9号土坑埋土の水洗選別作業を完了し，屋外作業を終了した。

Ⅲ　調査結果

1　掲載方法

（1）遺　　構

掘立柱建物・土師器焼成坑・土坑・井戸・溝などを番号順に個別に掲載・記述する。ただし，同一地点に集中している複数の遺構については，先掲する遺構と一括して平面図を作成したため，遺構の種類・番号と掲載順とが前後するものがある。なお，遺構の記載方法・表記方法などは下記の通りとする。

【各遺構共通】　遺構名は検出順に番号を付けており，基本的に報告書でも，この番号を用いた。ただし，一部変更した遺構もある。なお，調査後に検討の結果，遺構では無いと判断したもの，遺構の種類が変わったもの(土坑から井戸への変更など)は欠番とした。

各遺構の平面図は，基本的にグリッドラインのＹ軸を天にをそろえて掲載しており，Ｙ軸が磁北より東偏25°のため，挿図左上方向が北に当たる。紙面の都合上，これに沿わせることのできなかったもののみ，方位記号を付した。遺構プランは，主にＶ層上面で検出しており，特に明記の無い層はＶ層をあらわす。ただし，上層で確認できた遺構については，検出層名を断面図中に示した。なお，無遺物層にあたるⅢ層以下を斜線トーンで示し，下面を水平にそろえた。基本土層の詳細説明は，「Ⅱ－２－(１)調査方法」に記載した。

遺構の規模・形状は，平面形のうちもっとも長くなる部分と，これに直交する部分で最大幅を持つ部分の計測値を記載し，深さは遺構プランの確認面からの計測値を示した。平面形は，掘り上がりの形状だけではなく，掘削作業で周囲の検出面が掘り下がったことによる平面形の変形を勘案して，遺構確認時のプランを参考に記載した。基本的に，掘立柱建物：１／60，その他の遺構・遺物出土状況：１／30であり，各図ともスケールを付した。断面形，は底面の形状と，底面からの壁の立ち上がり方を基準に，「底面が比較的平らで壁がゆるく立ち上がるもの＝椀形」，「底面が比較的平らで，壁が急激に立ち上がるもの＝箱形」，「底面の凹凸が著しく，壁の立ち上がり傾向を表現しがたいもの＝凸凹」とした。掘り込みが浅く，分類基準である壁の立ち上がり方を確認できないものは，「不明(浅くて判断できない)＝－(浅)」と表記した。

また，遺構の出土品は，可能な限り出土状況とともに，出土遺構ごとに掲載・記述した。個体数・破片数の把握が困難であったため，遺構ごとの出土量は，重量で計測し，また，主な遺構については，掲載遺物の割合も重量比で表記した。記載方法・分類などは，後述「Ⅲ－１－(２)遺　物」で説明を行う。

【掘立柱建物】　掘立柱建物は，長辺方向を桁行き，短辺方向を梁行きとし，桁行き方向を建物の主軸方位として標記した。ただし，調査区外に伸びて規模の不明な掘立柱建物は，「主軸不明」とし，方向の確認できた軸の方位を表記した。

【土師器焼成坑】　本遺跡で複数検出した「底面や壁面の一部が被熱し，赤化＋硬化(＝焼土化)している土坑」は，かつて「焼土坑」などと仮称され，土師器焼成遺構・製炭土坑などの可能性が考えられてきた。本遺跡例については，木立氏の論考(木立1997)を参考に，「埋め土中に含まれる微細炭化物片の量が少ないこと」，「底面が被熱すること」，の２点から，製炭土坑ではなく土師器焼成遺構と判断した。また，土師器焼成遺構の中には，固定的施設を持つ，いわば「窯」と呼ぶべきものと，固定的施設を持たないもの，つまり，底・壁面の焼土化以外は，地

面を掘り込んだだけの単なる土坑となんら変わらないものとがあり，これらを区別する意味から，後者には「土師器焼成坑」の名が使用されている。本遺跡例も，後者に該当することから，この名称を用いる。

【土　坑】　重複する土坑が多く，同一遺構として調査していた土坑の大半が，掘り下げの進行に伴い，複数に分かれた。これらの遺構は，上部で取り上げた遺物が混ざり合っていることから，便宜上同一遺構名を冠しており，分離できた段階で，遺構名にa～dの枝名称を付した。

【井　戸】　非常に掘り込みが深く，調査の安全性及び，調査後の土地利用(＝水田耕作)への影響を勘案して，深部の掘削を断念したため，井戸の底を検出するには至らなかった。しかし，「掘形」部分が細く，まっすぐ下に向かって掘り下げられているという形状の特徴から，井戸側施設を持たない素掘りの井戸の可能性が高いと判断した。粘土採掘坑などの可能性も検討したが，掘り込み壁面中位で検出された良質な粘土の層でも，横方向へ掘り広がる様子が見られないため，この可能性は低いと考えている。

（2）遺　物

出土遺物は，遺構の時期・性格を検討する上で重要な要素であることから，遺構ごとに掲載しており，記載方法・表記方法などは下記の通りとする。ただし，時期判定に影響しない焼成粘土塊のみは，特徴比較のため，「Ⅲ－７－(４)焼成粘土塊・粘土屑」の項にまとめて掲載しており，各遺構の記載では，出土および掲載の有無について触れるにとどめている。

また，出土遺物が多数のため，本文中では遺構単位の遺物の概要及び特記事項のみを記載しており，遺物の個別情報は巻末の遺物観察表に一括した。

【掲載基準】　土器類は直径の１／６以上が遺存し，器形の復元できるものを優先して図化・掲載したが，特徴的な出土遺物については，これより小さいものも図化している。これらのうち，小片からの復元であるため，口径復元の疑わしい土器は，観察表の計測値を括弧書きとし，図上では口縁または底面のラインを途切れさせることで，他と区別した。柱は劣化が著しいため，加工・使用痕の観察できるもののみ掲載した。

【掲載サイズ】　基本的に，須恵器・土師器類：１／４，柱：１／10，粘土塊・木製品：１／３であり，各図とも，挿図にスケールを付した。

【遺物の実測図】　遺物の断面は，基本的に白抜きとしたが，須恵器のみは区別のため黒塗りとした。ハケ・ケズリ・ナデ・ミガキなどの土器の調整は，おおむね図化器面中の1／３分を図化し，遺存率がそれ以下の場合は，遺存部分だけを表現した。カキメやロクロメなどの回転力を利用した調整の場合，１／６以下の破片でも復元できると考えて，全面に表現した。ただし，ヘラケズリなどの他調整との境のため復元出来ないものもあった。

【使用痕跡】　一般的な使用痕には，使用関係物(スス・炭化物・墨など)の付着と，使用による欠損・磨耗などの劣化など，２種の「使用したこと」を示す痕跡がある。本遺跡の出土品はこれらの痕跡が確認できない個体が多い。逆に，器面に製作時のロクロ整形などによる微細な凹凸などを明瞭に残すものが多く，これらを「未使用の痕跡」と想定している。また，製作時の焼成によるものと見られる黒斑を明瞭に残す個体が多く，これらの黒斑も，煮炊具の場合は「使用時の被熱により製作時の黒斑が失われていない＝被熱していない＝未使用」の痕跡と考えている。ただし，使用時の燃料により，特に体部外面下位は黒斑の形成される場合があるため，識別を要する。

【器種分類】　須恵器の食膳具と土師器の煮炊具は山三賀Ⅱ遺跡における坂井氏の分類(坂井1989)，須恵器の貯蔵具は北野氏の分類(北野1999)を参考に，本遺跡の傾向を加味して分類を行った(第７～10図)。それぞれ形態の特徴によりアルファベット大文字(A～E)に分類し，サイズの大きい方から順にローマ数字(Ⅰ～Ⅲ)で，器形や調整の特

徴は算用数字(１・２)で細分・表記した。また，器形の検討には器高指数(器高／口径×100)，底径指数(底径／口径×100)を用いている。

なお，須恵器と土師器の判別の難しいものが含まれており，本遺跡では，次の通りとする。

本来，「高火度還元炎」による焼成を意図した製品が須恵器，「酸化炎」による焼成品が土師器である。しかし，本遺跡は生産遺跡という性格上，生産者の意図に反した失敗品と見られる「須恵器として生産される器種ながら酸化炎焼成」品，「土師器として生産される器種ながら還元炎焼成」品が存在する。かつ，須恵器については焼成不良の品も多く，「還元炎焼成」と「酸化炎焼成」の境界を明確にし難かった。このため，当初，「製作者が土師器としての製作を意図していたか，須恵器としての製作を意図していたか」を基準として，器種・胎土の特徴から判断・分離を試みた。しかし，この結果，「還元炎焼成」で，明らかに土師器を志向していたと見られるものは，混和材の含有量が他の須恵器とは異なる甕1点(706)のみであった。一方，「酸化炎焼成」で，明らかに須恵器の製作を意図していると判断できるものはなかった。なぜならば，須恵器に見られる器種で，本遺跡で酸化炎焼成されたものには「有台杯，折縁杯，無台杯(A・B類)，無台椀，蓋(摘み)，稜椀・蓋，鉢」などがあるが，これらは土師器にも少数ながら認められる器種だからである。よって，本書では焼成状態を基準に，「還元炎焼成のものを須恵器」「酸化炎焼成のものを土師器」として分類した。特に，酸化炎焼成品のうち，顕著な黒斑があるものは，「燃料が直接，焼成物にあたりうる状態＝須恵器窯ではなく，土師器焼成土坑での焼成」を行ったと考えられ，「意図的に酸化炎焼成を目指したもの＝土師器」と判断した。それでもなお，「還元炎焼成か酸化炎焼成か」の判断の境界線上に位置する遺物もあり，これらについては，その旨を観察表に記した。

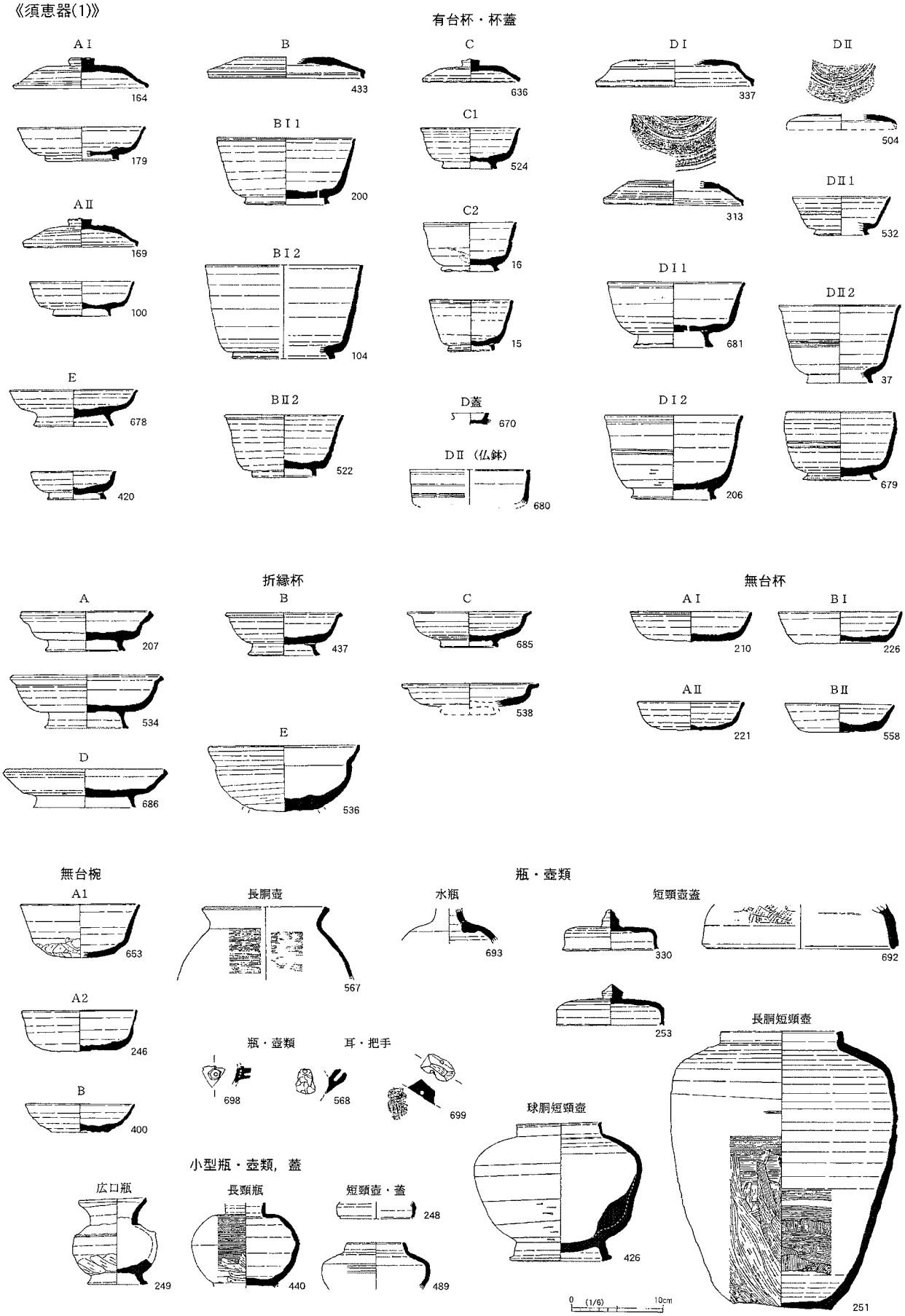
また，須恵器の重ね焼き方法については，自然釉の掛り具合をもとに判断しており，春日氏の分類に従い(春日1989)，身と蓋の正位の組合わせ焼成をA，身の上に蓋を逆位に重ねて積み上げたものをB(このままの状態で，蓋内面に身を積み重ねるものはB１，身と蓋のセットを，蓋と蓋を合わせ口にして積み重ねるものはB２)，身を逆位にか同一器種のみを重ね焼きしたものをCとして，観察表に記した。

《須恵器》　有台杯・杯蓋，折縁杯，無台杯，無台椀，球胴短頸壺・長胴短頸壺・長胴壺・壺蓋，水瓶，小型瓶壺類・蓋，横瓶，鉢，甕，焼台などがある。いずれも，ロクロ成形を基本とする。

有台杯　無台杯に次いで食膳具の主体をなす器種。底部回転ヘラ切り後，高台を貼り付けてロクロナデする。高台の接合部には，接合位置を確認するため，もしくは接着性を高めるために，底部に沈線１～２条を巡らせるものがある。法量・形状により，A類(口径11～13cmで，おおむね器高指数35以下の有蓋浅身品)，B類(口径15～17cmを主体とする，器高指数40以上の有蓋深身品)，C類(口径11cm以下で，おおむね器高指数40以上の深身品)，D類(口縁～胴部に沈線が巡るなど，金属器模倣杯と考えられるもの)，E類(その他)の５種に分類した。このうち，A類は口径変化の方向性を把握するために，便宜上，口径12.5cm以上のもの(Ⅰ)と，未満のもの(Ⅱ)とに二分した。B類は口径15～17cmを主体とするが，13cm前後の小型品も少数ながら存在し，D類も大小２法量が存在するため，それぞれ大型品(Ⅰ)と小型品(Ⅱ)に分離した。また，B～D類は深身のものと，浅身のものの２種が見られたため，器高指数50未満の浅身を１，以上の深身を２として細分した。A～C類は，基本的にロクロ調整のみ。まれにB・C類で，体部下半にロクロケズリが施されるものがある。また，C類は無蓋を基本とするようだが，少数ながら有蓋品もあり(636)，D類は仏鉢を模したものも含む(680)。その他としたE類は極端に浅身のもので，２点のみの出土。

杯　蓋　有台杯に伴う蓋。比較的平らな天井部に，裾広がりの口縁が付く。天井部は回転ヘラ切りされるものが多く，ロクロケズリの加えられるものも，一定量認められる。口径12～14cmが有台杯A類かBⅡ類に，口径15～17cmが有台杯BⅠ類に，口径11cm前後がC類に，天井部に稜または沈線の巡るものがD類に，それぞれ組み合う蓋

《須恵器(1)》



第7図　器種分類（1）

であろう。この他，平らな天井部に小さく屈折した口縁の付くもの(504)も金属器模倣品と考えている。これら蓋の頂部摘みには，中央の飛び出す擬宝珠形と，中央のくぼむボタン形とがある。２点のみの環状の摘み(670・671)は金属器模倣品で，有台杯D類に組み合うと考えられる。

折縁杯　口縁が外反した後に，端部が内湾する有台杯。口径12～14cmの中型品を主体とするが，極端に浅身の盤形や金属器模倣品類には，口径16～17cmの大型品も存在する。体部の形状で大別すると，浅身の杯形(A類)とやや深身の椀形(B類)が主体を占めるが，この他，極端に浅身の皿形(C類)，浅身で大形の盤形(D類)，極端に大形で深みの鉢形(E類)などのバリエーションが存在する。また，これら折縁杯はもともと，稜椀・蓋などの金属器に影響を受けて器形が成立したと考えられるが，より忠実にこれら特徴を残すものが多く，同一分類内でも個体差が大きい。なお，E類とした536は，口径17～18cmと大型で，鉢に分類すべきか迷ったが，有台のため折縁杯に含めた。

無台杯　食膳具の主体をなすものであり，本遺跡でも，最も多く出土した器種。底部回転ヘラ切りを基本とする。底部形態により，A類(丸底)・B類(平底)の２種に分類した。A・Bともに，口径は11～13cm，器高は3～4cm前後に集中するが，法量変化を把握するため，便宜上，口径12.5cm未満をⅠ類，12.5cm以上をⅡ類とした。なお，焼成時に底部に亀裂の入ってしまった失敗品が，数多く含まれている。

無台椀　無台杯に比べて，深身のものをA類，浅身で底径が小さいものをB類とした。A類はさらに特徴により，金属器模倣と思われる，底部を削り出したもの(１類)と，無台杯が深身になっただけの，底径の大きいもの(２類)とがある。

壺　類　点数は少ないが，球胴短頸壺・長胴短頸壺・長胴壺やこれらに組み合う蓋，瓶・壺類の耳・把手などが出土している。

球胴短頸壺は肩の張る球胴形で，短い直口縁が付く，いわゆる薬壺型。有台で，体部下半を，ロクロ・ヘラ・ハケケズリする。肩部に沈線が巡るもの(252)も見られる。長胴短頸壺は，最大径より器高が高い長胴形の壺。口径12～13cmの，短い直口縁が付き，無台で，体部下半をロクロ・ヘラ・ハケケズリする。短頸壺の蓋は比較的平らな天井部に，直立する短い口縁が付く。摘みは宝珠形，または擬宝珠形。天井部は回転ヘラ切りまたは，ロクロナデ・ロクロケズリされる。口径10～12cmを主体とするが，極端に大形な692は口径21cmあり，タタキ成形後ケズリ調整する点が，他の個体と異なる。なお，口縁部形態が多様であり，口縁端部が中に入り込むものと，カエシ状に外反するものとがある。また，天井部に金属器写しの沈線が巡るもの(253)も見られる。

長胴壺は，口縁がやや長く，広口になる。肩はあまり張らない。567の1点のみで，砂粒多く含む特徴的な胎土から，土師器の還元炎焼成品の可能性もある。この他，有耳壺の耳破片が数点出土。

瓶　類　水瓶や長頸瓶(441)がある

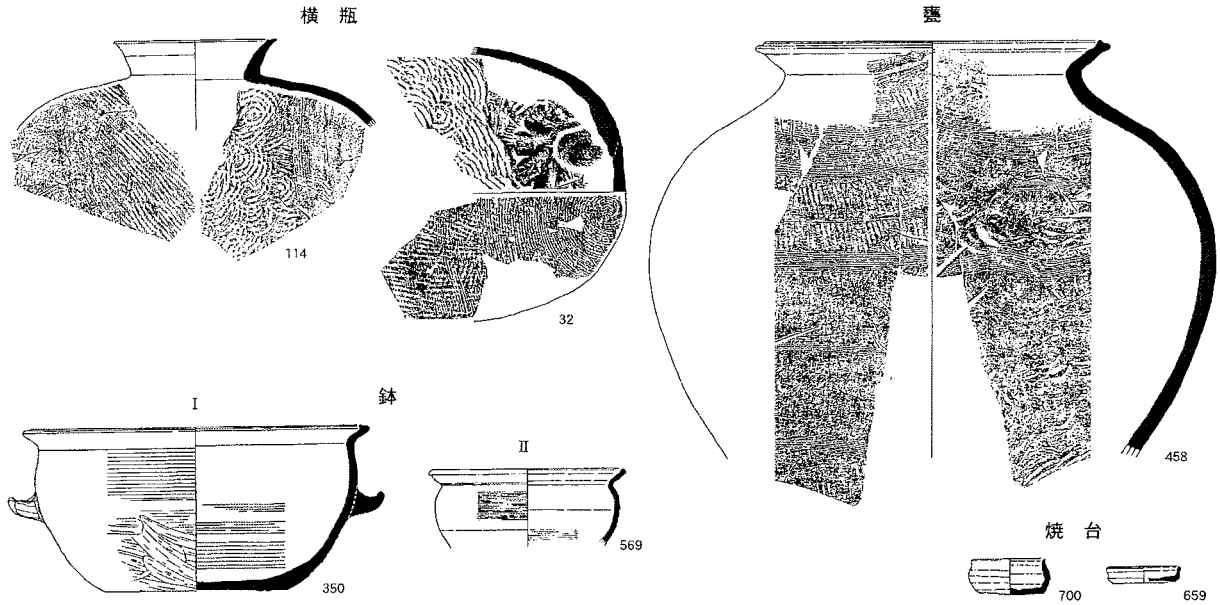
小型瓶・壺類，蓋　広口瓶・長頸瓶・短頸壺がある。肩が張り，肩部・口縁部に沈線が巡るものが多く，金属器模倣品と見られる。蓋も１点が出土している(248)。器高２cm以下で，口縁端が薄く，カエシ状になる。焼台とした個体の一部も，このような蓋の可能性がある。

横　瓶　俵形の胴部を持ち，短い口縁部が付く。口径13cm前後で，体部はタタキを施した後，外面にカキメが施される。また，円盤閉塞痕が確認できるものがある。

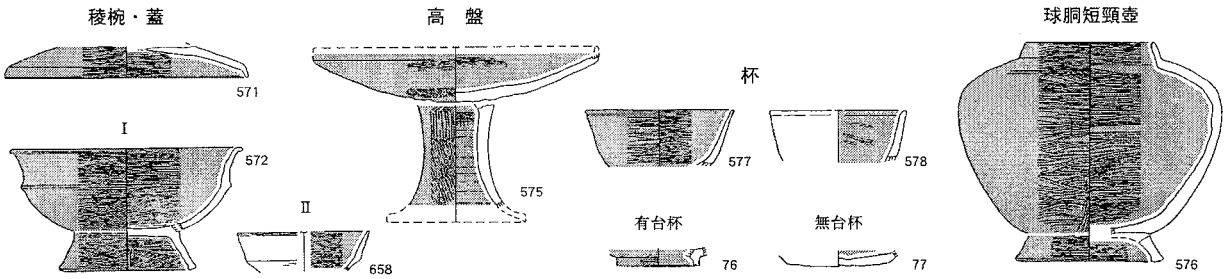
鉢　体部は浅く，口縁が短く外反する，いわゆる括れ鉢で，口径27cm以上の大型品(Ⅰ)と，16cm以下の小型品(Ⅱ)とがある。無台・平底で，把手が付き，体部上半はカキメ，下半はヘラケズリが施される。大型品の口縁部は，端部を内側に向かって摘み出す，特徴的な形をとる。

甕　体部をタタキ成形し，広口の口縁部が付くもの。

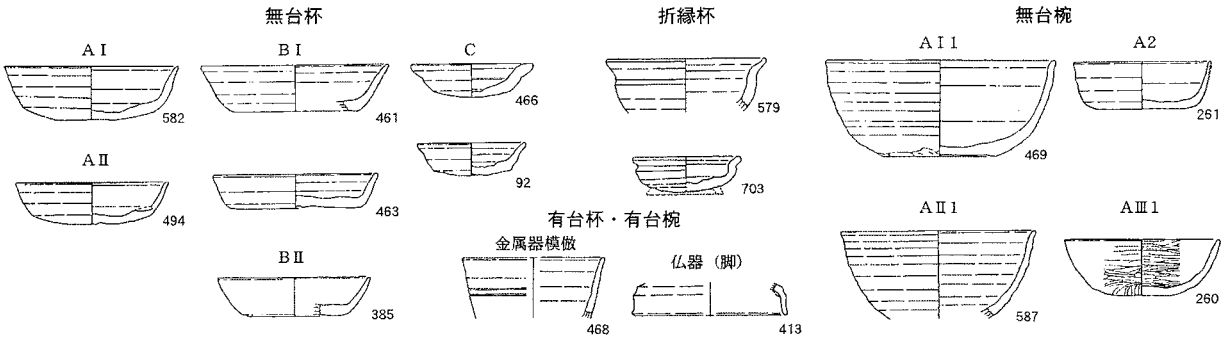
《須恵器(2)》

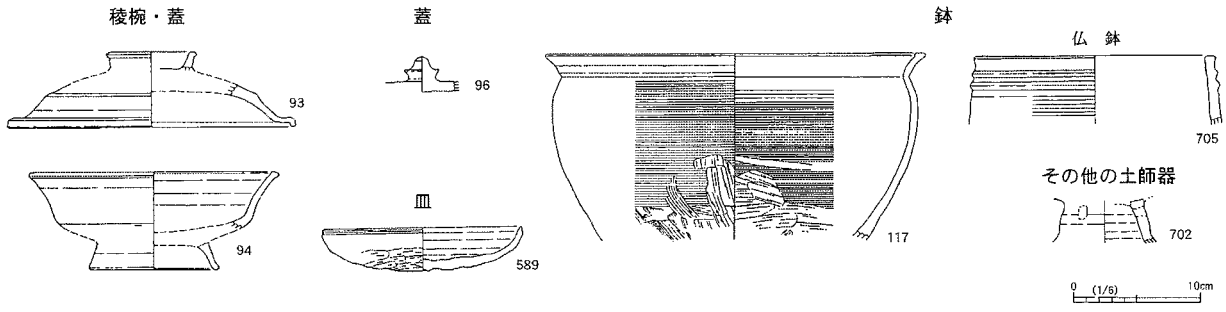


《黒色土器》



《土師器(1)》





第8図　器種分類（2）

焼　台　４点が出土。底部が回転ヘラ切りまたは，ロクロケズリされており，口縁が薄く，カエシ状になる。焼台としたが，700以外は器高２cm以下と低く，小型瓶・壺類の蓋の可能性もある。また，須恵器片(701）や有台杯（179）・無台杯(627)の転用焼台も出土している。

《黒色土器》　内外面または内面に黒色処理を施した土器。還元炎焼成気味で，軟質である。須恵器同様，ロクロ成形された製品で，精良な胎土を用いており，器面が丁寧にヘラミガキされていることを特徴とする。稜椀・蓋，高盤，杯，短頸壺などの器種がある。須恵器・土師器に比べて点数は非常に少なく，主に36号土坑から出土。

稜椀・蓋　大型品(Ⅰ：口径18cm）と小型品(Ⅱ：口径10.2cm）がある。大型品に伴う蓋も出土。

高　盤　中空筒状の脚に，浅い身が付く。

杯　口径11cm前後で，有台品と・無台品がある。また，内外面黒色処理されており，口縁部に沈線が巡る，金属器写しとみられるものと，内面のみ黒色処理を施したものとがある。

球胴短頸壺　1点(576)のみ出土。丁寧に磨かれた優品。

《土師器》　折縁杯，無台杯，無台椀，稜椀・蓋，蓋(摘み)，皿，鉢，長胴甕，小型甕，鍋，製塩土器，円筒形土製品，土錘，その他土製品などがある。製塩土器を除き，基本的にロクロ成形されている。また，食膳具は，無台杯C類と皿を除き，須恵器と共通する器形。

折縁杯　口縁が外反した後に，端部が内湾する有台の杯。破片２点のみが出土している(579・703)。

無台杯　器形的に，須恵器の無台杯A・B類に一致するものを，それぞれA・B類とし，須恵器には無い，口縁端部の外反するものをC類とした。いずれも底部回転ヘラ切りである。A・B類はともに口径11～14cm，器高３～４cm，口径指数25～32にまとまるが，口径指数21と極端に浅い個体もある。一方，C類は口径8～9cm，器高３cm前後と小型で，底部は全般的に丸底気味である。なお，A・B類は，焼成から土師器としたが，須恵器として製作された可能性も否定し切れない。

無台椀　杯と同様，須恵器と共通する器形であるため，同じ分類基準を用いたところ，深身のA類しか存在しない。A類は底部のつくりにより二分でき，明らかに金属器模倣と思われる，底部を小さく作るものを1類，無台杯が深身になっただけの，底径の大きいものを２類とした。総点数は少ないが，31号土坑から比較的まとまって出土している。胎土はいずれも精良。口径18cm前後の大型品(Ⅰ)を主体とするが，15.2cmの中型品(Ⅱ)，口径12.0cmの小型品(Ⅲ)もある。大半はロクロ調整のみだが，A1類には体部下半にハケメ(470）・ミガキ(260）・ケズリ(469）などの調整を行うものがあり，器面も丁寧に整えられている。

有台杯・有台椀　非常に少なく，破片のみ。金属器模倣品(468)や，仏器写し(413)などがある。

稜椀・蓋　作りが丁寧で，非常に精良な胎土を使用している。金属器模倣品であろう。

蓋　蓋の摘みと見られる宝珠形の破片が出土した。

皿　杯に比べて浅身で，底径の大きい器形を皿とした。２点のみ出土。口径16cm前後，器高3cm前後と極端に浅い。底部はヘラケズリ調整で，平たいながらやや丸底状を呈する。

鉢　体部は浅く，口縁が短く外反する，いわゆる括れ鉢と，口縁の直立する仏鉢(705)がある。前者は須恵器と共通する器形で，口縁端部が内側に向かって摘み出す，特徴的な形をとる。

その他の土師器　1点だが，台付盤または椀の脚部出土(702)。

長胴甕　ロクロ成形で，体部下半～底部をタタキ整形する甕。基本的に丸底である。全形を復元できる個体は少ないが，残存率の高い個体を観察する限り，サイズは口径19～24cmで，器高30cm以上ある。

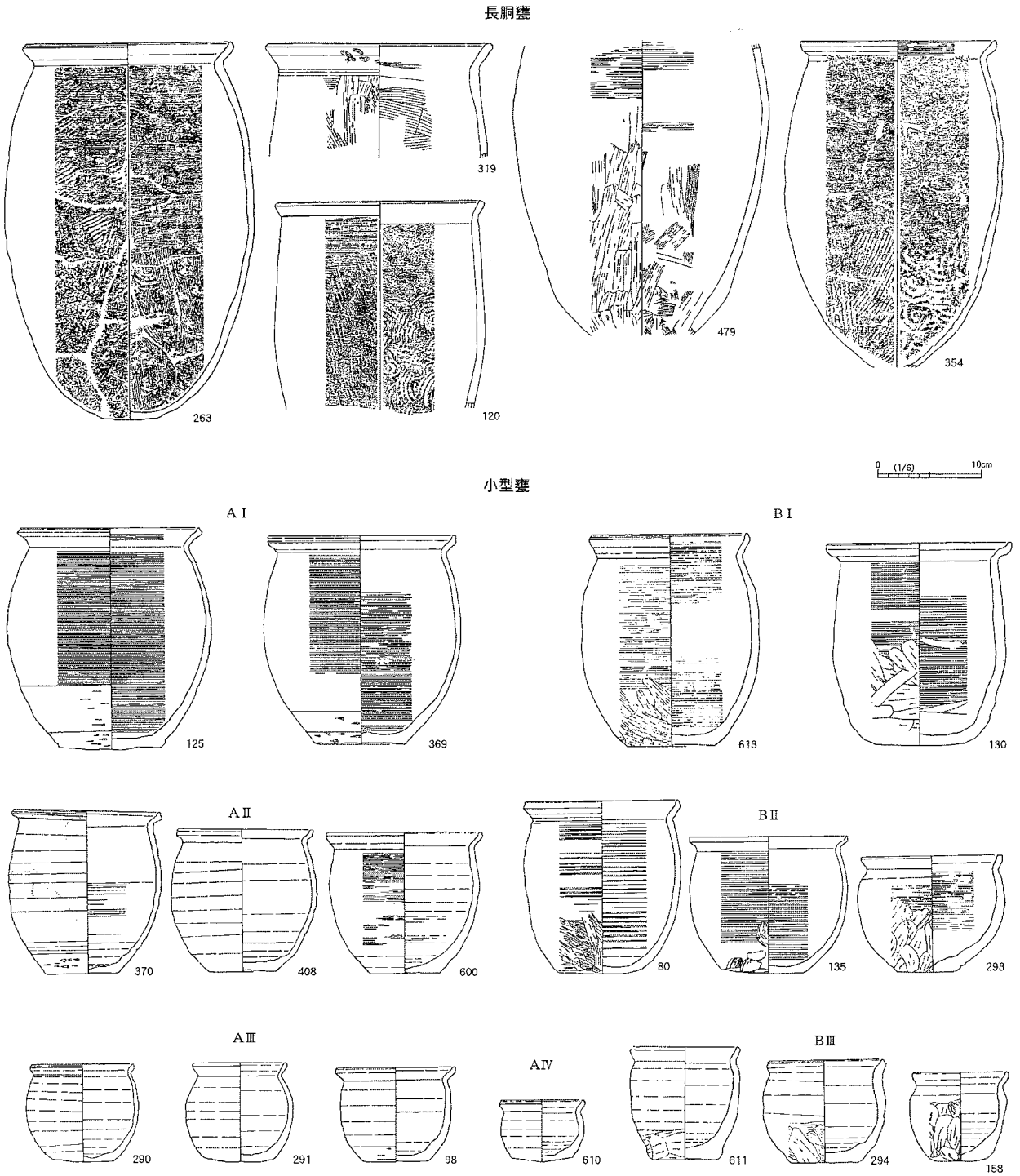
口縁端部形態には，上方に摘み上げるもの，面を持つもの，丸くするものなどのバリエーションがある。

小型甕　長胴甕に比べ，口径・器高が小さい甕。基本的にロクロ成形で平底。サイズはおおよそ，大型(Ⅰ：口

径15～24cm，器高19～22cm），中型(Ⅱ：口径11～17cm，器高11～18cm），小型(Ⅲ：口径7～11cm，器高6～11cm），超小型(Ⅳ：口径7.8cm，器高6.0cm）に４分できる。なお，Ⅳ類は610の1点のみである。610は，口径・器高の差が小さく，鉢とすべきかもしれないが，ここでは小型甕に含めた。

ところで，本遺跡で「小型甕」とした一群は，一般的な小型甕に比べてサイズの幅が大きい。特にⅠ類の一部は，長胴甕と比べても決して小さくないため，「小型甕」と呼称することには違和感がある。しかし，整形・調整方法の共通性から，同一器種と捉えることが適当と判断した。別の器種名を付す方が内容を正確に表現しうるかも

《土師器(2)》



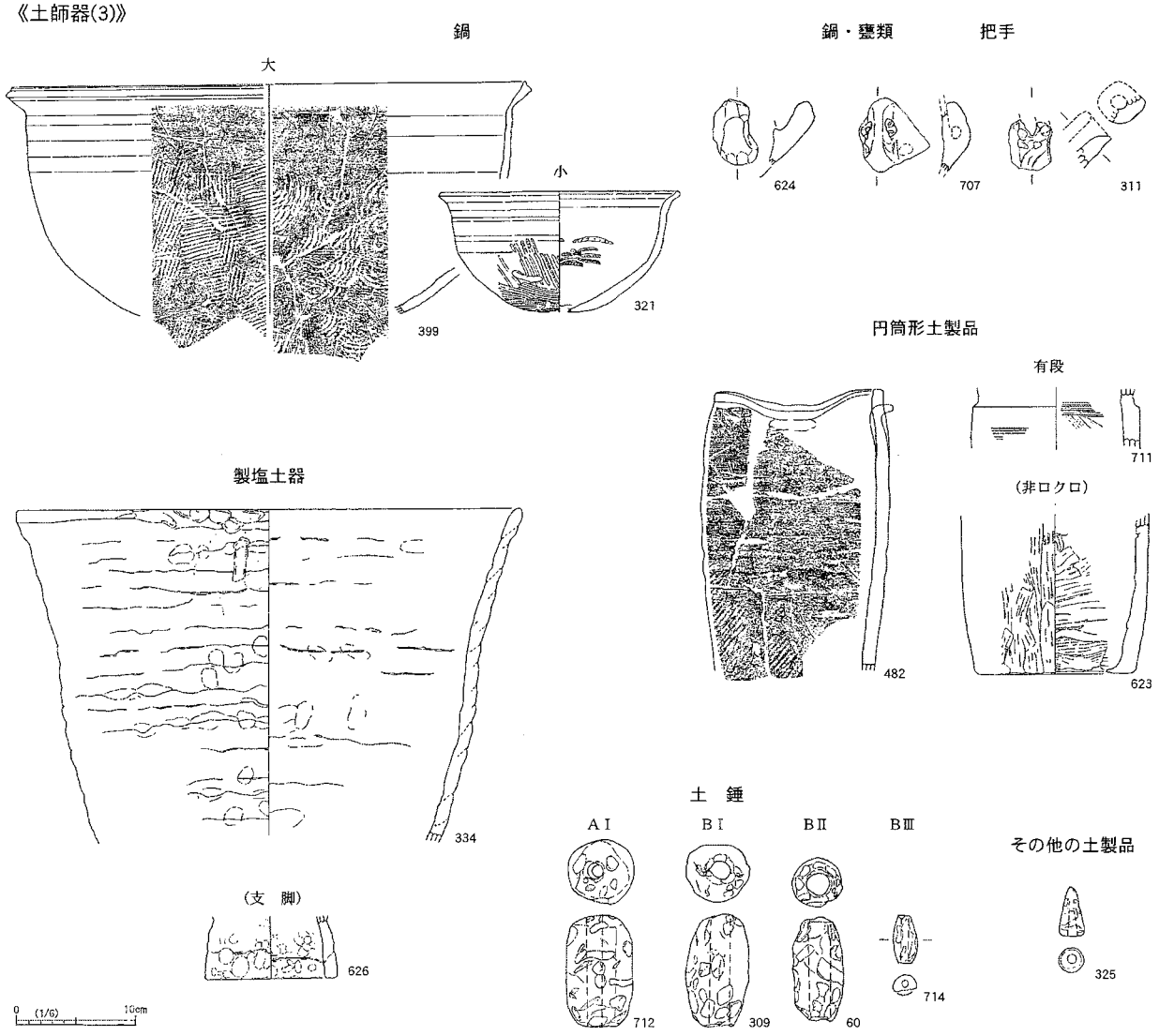
第9図　器種分類（3）

しれないが，他遺跡における「小型甕」に相当することが明らかであることから，本書では「小型甕」の名称を用いる。また，サイズで比較した場合，口縁部破片でみると長胴甕と重複してくる部分がある。しかし，長胴甕に比して器壁が薄く，華奢な感じがある。頸部のクビレが明瞭であり，口縁端部が薄く引き出され，シャープな印象があるなどの違いが見られる。

これら小型甕は，体部調整により二分できる。A類はロクロ調整のみを行うもの。口縁～体部上半のカキメ，体部下半にロクロケズリをするものも含む。B類は，ロクロ成形だが，体部上半をロクロナデ・カキメ，下半にヘラケズリ・ハケケズリを行う。少数だが，ハケメ・ヘラナデのものや，まれに頸部までヘラケズリの及ぶものもある。A・B類とも，確認できる限り，全て平底である。切り離し後の再調整の有無はあるが，切り離し方法には回転ヘラ切り・回転糸切り・静止糸切りが確認できる。

口縁端部形態には，上方に摘み上げるもの，面を持つもの，丸くするものなど，長胴甕同様のバリエーションがあるが，概して薄くシャープに摘み上げるものが多い。また，体部下半に，粘土粒の付着するものが何個体か見られ，乾燥時の接着を防ぐためのカマセ材と考えられる。

鍋　口径に比べ器高が低く，内湾する体部を持つ。底部はほぼ丸底。口径40cm以上の大型品から口径20cm以下の小型品まで，サイズに幅が存在するが，おおよそ大小に二分できる。



第10図　器種分類（4）

いずれも，口縁部及び体部上半はロクロ成形である。体部下半はタタキ成形するものと，ヘラケズリするもの，ハケメ調整するものとがある。口縁は外傾またはやや内湾気味に開き，端部の形態は，長胴甕と同様のバリエーションがあるが，強弱の差はあるものの，端部を上方に摘み上げるものが主体を占める。また，小型甕と同様，乾燥時の接着を防ぐためのカマセ材とみられる粘土粒が，体部下半に付着するものが見られる。

鍋・甕・鉢類把手　体部に接合された状態での出土品はないが，把手の破片が数点出土している。須恵器鉢にもみられる，摘み上げ状の把手の他に，竪板状で横方向に穿孔するもの(707)や，筒状のもの(311)などがある。

製塩土器　非ロクロ成形で輪積痕及び指頭圧痕が顕著である。被熱による器面の劣化が著しい。２点が出土している。334は典型的なバケツ型の製塩土器。626はつくりから製塩用の支脚の可能性を想定した。類例を秋田県に求めることができるが(柴田2010)，近隣では確認できない。なお，上端部の屈曲を重視するならば，極端に短いが，横口付円筒形土製品(望月2002)の可能性もある。

円筒形土製品　最大径18cm前後の筒形土器。４点出土している。ロクロ成形のものが主体だが，623は非ロクロ成形品である。711は有段。なお，他の筒形土製品より器壁の薄い710は，他の器種の可能性もある。

土　錘　40点が出土した。形状により，A類〔端部を指押さえ整形して側面を形成，筒形を呈するのもの〕と，B類〔端部が細くなり，紡錘形を呈するもの〕に，二分できる。A類は１サイズ(Ⅰ)のみで，直径5～5.5cm，長さ9～11cm，孔径1.5～2cm，重量300ｇ以上である。後述のＢⅠ類とほぼ共通する。一方，B類はサイズから，大型品（Ⅰ：直径5～5.5cm，長さ9～11cm，孔径1.5～2cm，重量230ｇ以上），中型品(Ⅱ：直径3.5～4cm，長さ7～9cm，孔径1.5～2cm，重量100ｇ前後），小型品(Ⅲ：直径1.5～2cm，長さ4cm前後，孔径0.5cm前後，重量10ｇ前後）に分かれる。これらはサイズごとに成型方法が異なっている。Ⅰ類は，紡錘形とはいえ，端部が若干細くなる程度であり，端部は指押さえされて，面を持つ。一方，Ⅱ類は，成形時に軸に粘土を巻きつけて握り，端部を軸に向かって押さえつけたようで，ほぼ全てが細い紡錘形を呈しており，端部が極端に薄くなるため，面を持たない。また，側面の握り痕が顕著である。Ⅲ類は細い紡錘形で，端部に，両端を切り落としたとみられる真っ平らな面を持つものと，軽く丸みを帯びるものとが半々である。

これらの土錘は，調整痕が明瞭であること，完存率が高いことから，未使用品が多いと考えている。特に，９号土坑出土の大形品６点は，器面の劣化もなく，明らかに未使用と見られる。本遺跡で生産されていたことを想定できよう。逆に，10号土坑出土品はいずれも劣化しており，このような山中とはいえ，使用の可能性が想定される。

2　調査区の概要

丸山Ａ遺跡は，台地の南西向き緩斜面，10，500㎡に広がる遺跡である。今回調査ではこのうち，工事により削平される東半中央部分(950㎡)について発掘作業を実施した。この範囲から，掘立柱建物5棟，土師器焼成坑9基，土坑32基，井戸３基，溝２条，ピット多数を検出した(第11図)。遺構のプラン確認面は1面。主にⅣ・Ⅴ層上面で確認したが，多量の遺物を包蔵している遺構は，プランは不明確ながら，上層包含層(Ⅱa層)中に遺物や焼土ブロックなどが大量に集中することで，下部に遺構の存在することが予測出来た。このため，遺構はⅡ層中か，これより高いレベルから掘り込まれたと考えられる。

遺構の時代は，古代を主体とするが，中世の遺構・遺物も検出している。調査区西端に位置する，四面廂の大型掘立柱建物１棟(２号掘立柱建物)と土器埋納遺構(Ec3-4ピット)がこれにあたる。また，３号井戸は中世まで下る可能性がある。

古代の遺構についてみると，調査区内は，遺構の配置状況から，東西に大きく二分される。

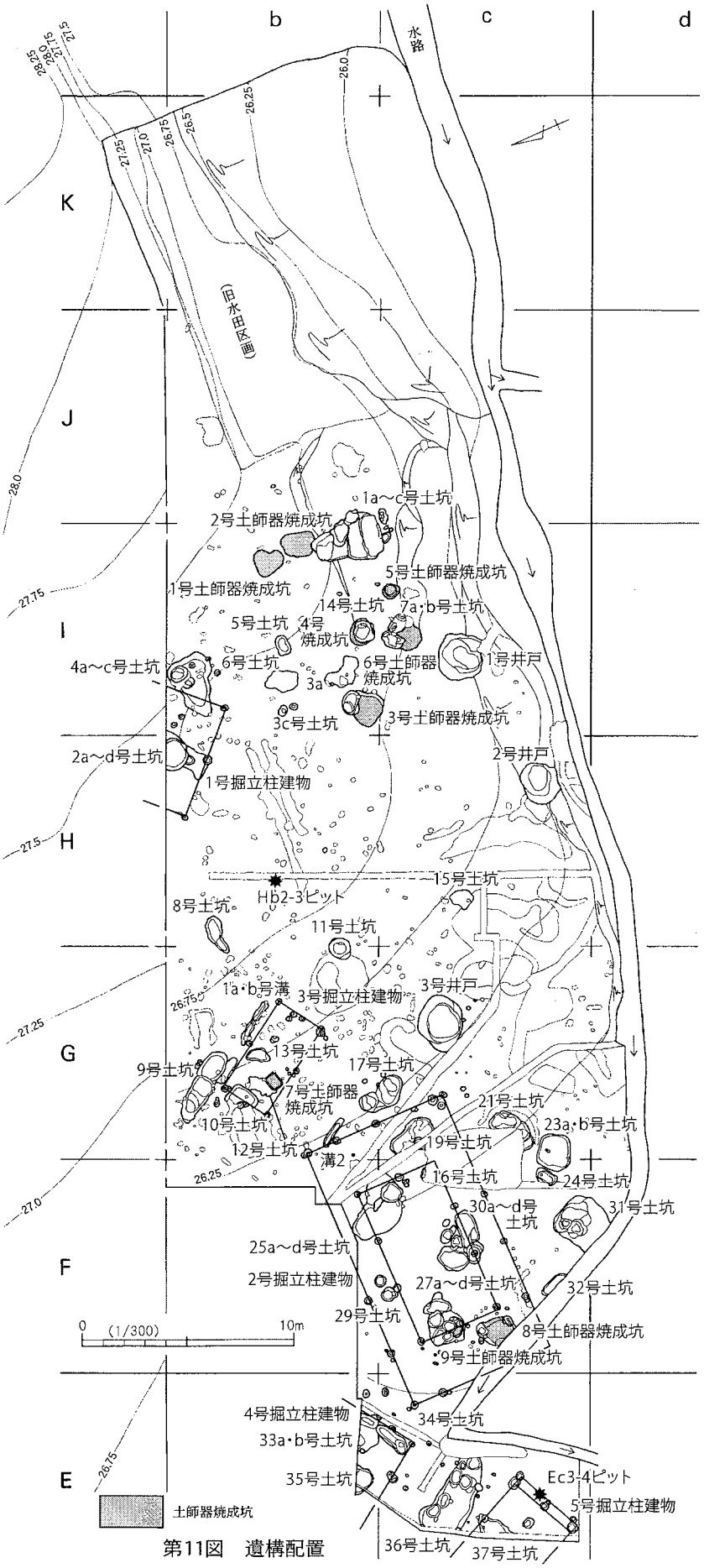
東半：Ib・Icグリッドを中心に，土師器焼成坑５基と土坑８基(重複土坑を含め17基)が集中，縁辺部に掘立柱建物１棟と井戸1基が分布する。このうち１a～c号土坑の南北には，斜面を切りだすことにより生じた段がある。この段の形成時期は明らかではないが，１号土坑周辺に平坦面を意図的に作出したようにも見受けられる。

西半：軸方向東偏61°前後の掘立柱建物３棟と，土師器焼成坑３基，土坑21基(重複土坑を含め32基)，井戸１基が分布し，その広がりは調査区外まで続いている。

なお，H列からGcグリッドにかけての調査区中央部は遺構の分布が薄く，わずかに土坑３基，井戸１基，遺物埋納ピット１基が点在している。

Gbグリッド・Gcグリッド北東部・Hcグリッド南西部では，Ⅱ～Ⅴ層からの水の浸み出しが著しく，遺構のプラン確認，および掘削に苦心した。この部分，Ⅴ層の上面の標高26.25～26.50m付近で特に，地下水の滲出が著しく，井戸は３基とも，この標高帯に分布している。

本遺跡は，土師器焼成坑が複数検出されていること，土師器製作関連品が多く出土したことから，土師器の生産現場であったと考えられる。また，粘土の採掘痕跡は確認できなかったものの，一部遺構が良質の粘土層まで掘り込んでおり，近隣に土器製作用に適した粘土の存在が予測される。



第11図　遺構配置

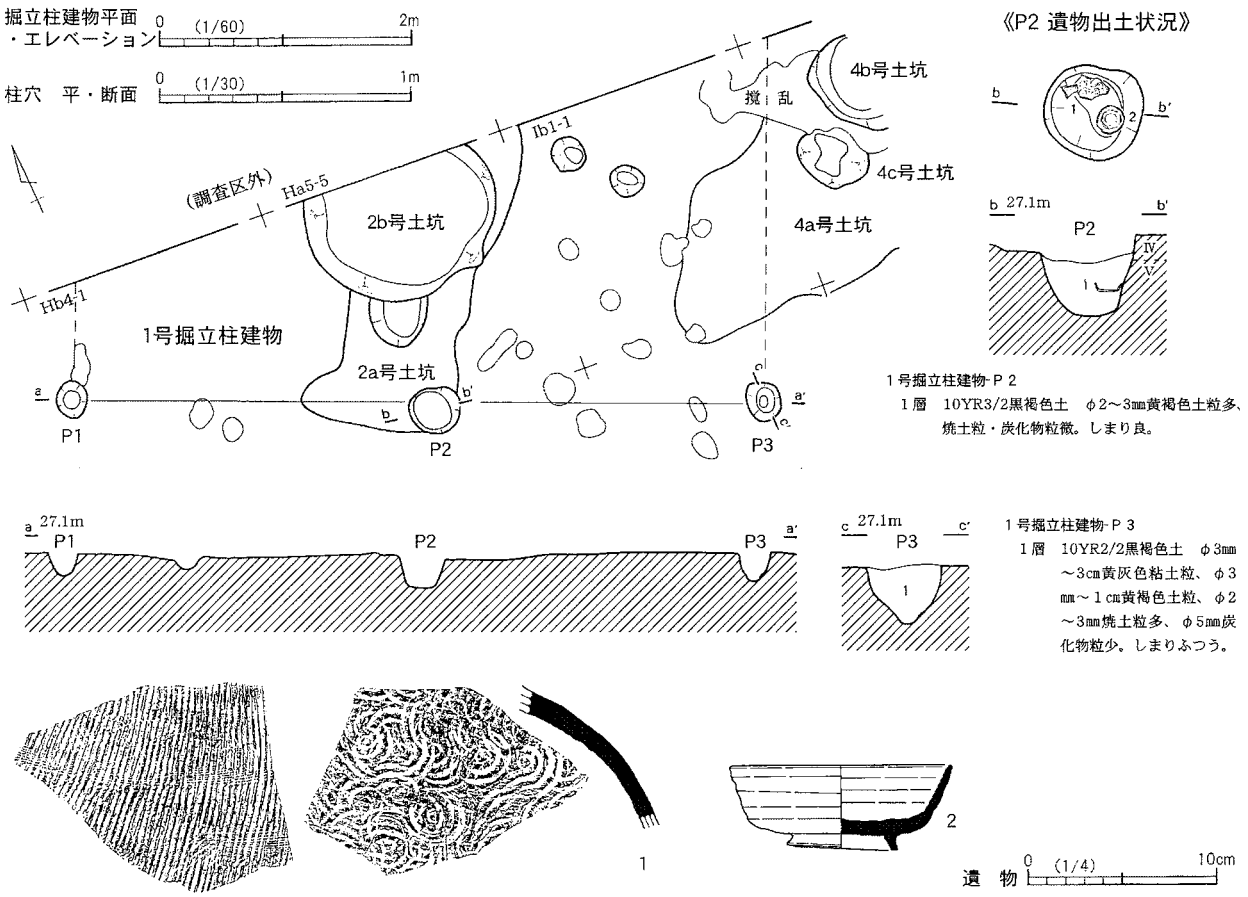
この他，須恵器の製作関連品(焼き歪み品・焼成不良品・融着品などの失敗品，焼台，窯滓）が出土しており，近接するホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡での須恵器生産にも関係していた可能性がある。

3　掘立柱建物

1号掘立柱建物（第12図，図版９）

Hb・Ibグリッド境北端に位置する。柱穴３本分しか確認できていないため，柵列の可能性もあるが，柱間が2.61～2.9mと，他の掘立柱建物の桁行と近似することから，今回は掘立柱建物と判断した。調査区北辺に位置しており，調査区外へ延びるため，２間×１間以上になろう。主軸方向は不明，軸方位は他の掘立柱建物とは異なり，東偏44°。柱穴のプラン確認はⅣ・Ⅴ層上面だが，上部のⅡa層中から遺物や焼土ブロックが集中しており，遺構構築面はⅡa層中かこれより高位であろう。建物プラン内には，２a～d・４a号土坑が存在しており，Ｐ２が２a号土坑と重複するが，先後関係は不明。

遺物は，Ｐ２から須恵器甕片２点・杯１点，土師器甕小片１点。Ｐ３から薄手の土師器甕小片３点。合計635gの遺物が出土した。このうち，Ｐ２から出土した須恵器甕体部片・有台杯C1類(第12図１・２，図版22)を掲載した。２は内底面の磨耗が顕著で，使用の痕跡が明瞭である。



第12図　１号掘立柱建物と出土遺物

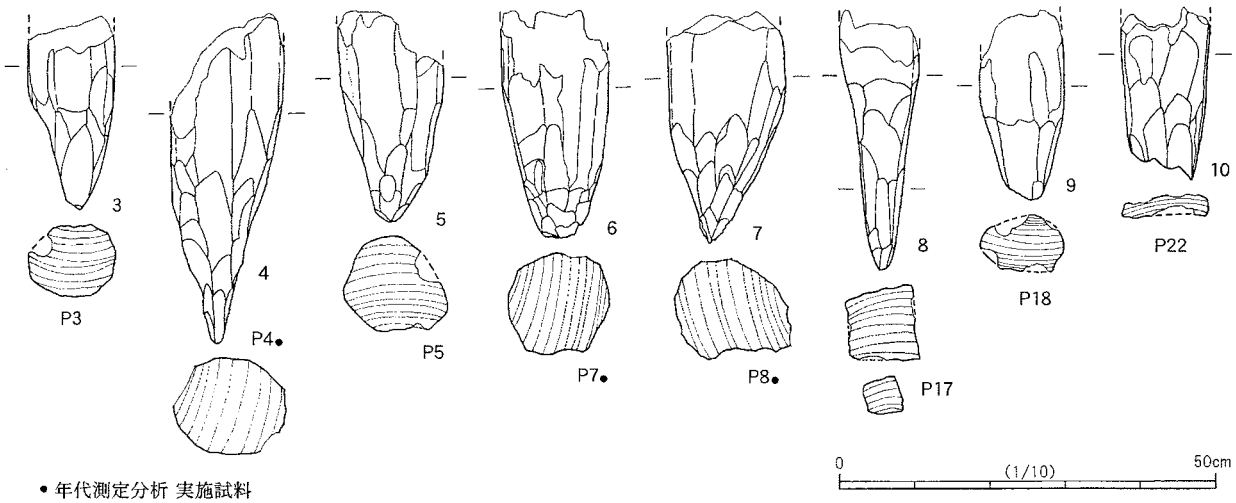
２号掘立柱建物（第14・15図，図版10・11・19）

調査区西半中央，Fcグリッド北半を中心に広がり，周辺のFb・Gb・Gcグリッドまで延びる。主軸方位は東偏１°，３間×２間(7.5×3.94m)の側柱建物で，四面に廂を持つ。母屋・廂とも，桁行の柱間は2.38～2.73m，梁行の柱間が1.94～2.07m。Fbグリッド北半は，上層の広範囲が攪乱を受けており，攪乱直下のⅤ層上面でプランを確認した。攪乱外のP19については，Ⅲ層上面で柱穴プランを検出しているため，遺構構築面はこれより高位であったと推測される。掘立柱建物プラン内に８・９号土師器焼成坑，16・19・25・27・29・30号土坑など，多数の遺構が存在するが，先後関係の判明しているのは，柱穴が重複する27・30号土坑のみで，いずれも土坑が先行する。

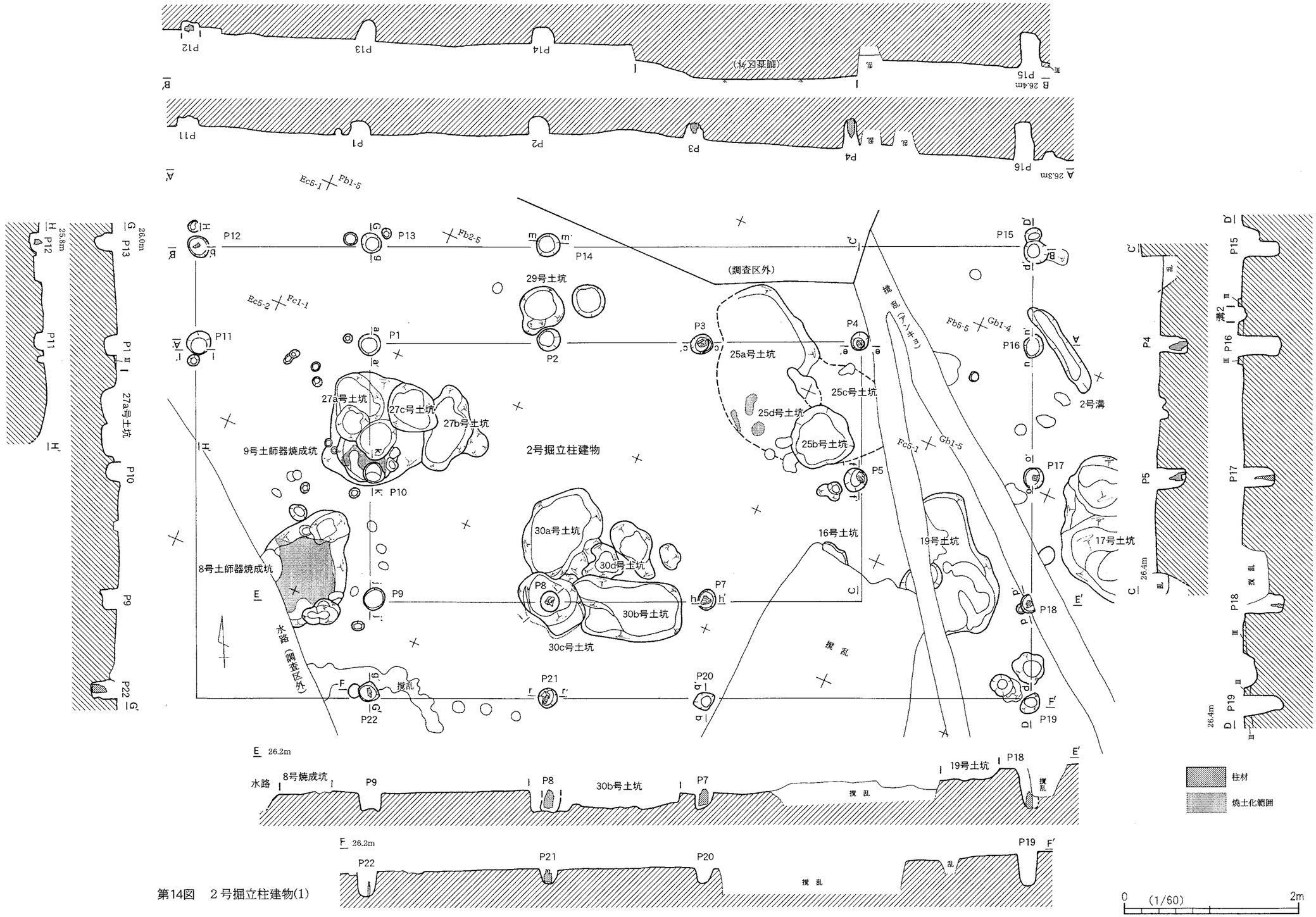
遺物は，P１・３・４・５・７・８・10・11・13・16・17・19から，須恵器杯・甕類，土師器甕類の小破片が各数点，計755ｇが出土した。また，P３～５・７・８・11・12・17・18・21・22の11箇所の柱穴に，柱の一部が残存していた。出土状況から見て，確実に２号掘立柱建物に伴うのは，これら柱のみである。遺存状態が悪かったため，観察に耐えうる８本のみを図化・掲載した(第13図３～10，図版22)。いずれも柾目材を用い，下端を削り尖らせてある。母屋の柱(３～７)は，長軸11～15cm，短軸10～13cmの楕円形と，ほぼ同規模･同形であるが，廂の柱(８～10)は，楕円形・四角形・板状と，形状やサイズにばらつきがある。

これらの柱のうち，母屋の柱P４･７･８の柱について，炭素年代測定分析を実施した。柱ごとに年輪別のウィグルマッチングも行った(後掲「Ⅳ－１」)。この結果，柱の最外年輪は，３本の共通点として1145～1160calAD(12世紀前葉から中葉)に当たる確率が高いと指摘されている。このため，建物の年代はそれ以降になろう。本遺跡から出土した中世の遺物は少ないが，時期の判定できた５点のうち，４点が珠洲焼Ⅰ～Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀前半)であることから，この建物も当該期の遺構と考えて良いだろう。

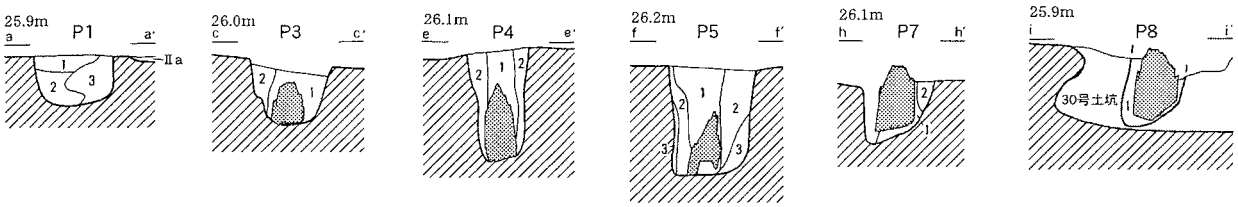
この他，ピットから焼成粘土塊２点(計18.5g)が出土した。



第13図　２号掘立柱建物 出土柱材



第14図　２号掘立柱建物(1)



2号掘立柱建物-P 1
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。
2層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5㎜黄褐色土粒少。しまり良、粘性やや強。
3層　10YR4/3にぶい黄褐色土を主体とし、黒褐色土粒含む。しまり良、粘性有。

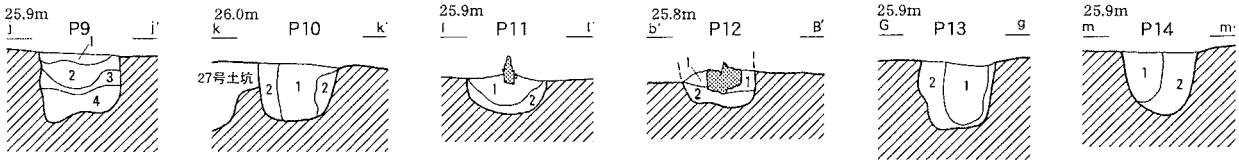
2号掘立柱建物-P 3
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少。しまりゆるく、粘性有。
2層　10YR3/3暗褐色土　φ3㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 4
1層　10YR3/1黒褐色土　しまりゆるく、粘性有。
2層　10YR3/1黒褐色土中にφ2～5㎜黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性有。

2号掘立柱建物-P 5
1層　10YR2/1黒色土　φ2～3㎜炭化物粒少。しまりややゆるく、粘性有。
2層　10YR3/1黒褐色土中にφ3～5㎜炭化物粒微、φ3～5㎜焼土粒少、φ3～5㎜黄褐色土粒中。しまり
3層　10YR3/3暗褐色土　φ3㎜焼土粒少、黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 7
1層　10YR3/1黒褐色土中にφ3～5㎜黄灰色土粒中。しまり良、粘性有。
2層　10YR3/3暗褐色土中にφ5㎜黄灰色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 8
1層　10YR3/1黒褐色土



2号掘立柱建物-P 9
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒微。しまり良、粘性有。
2層　10YR5/3にぶい黄褐色土にφ3～5㎜暗褐色土粒少、φ5㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。
3層　10YR2/1黒色土　しまりふつう、粘性強。
4層　10YR5/3にぶい黄褐色土に暗褐色土しみ状、φ5㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

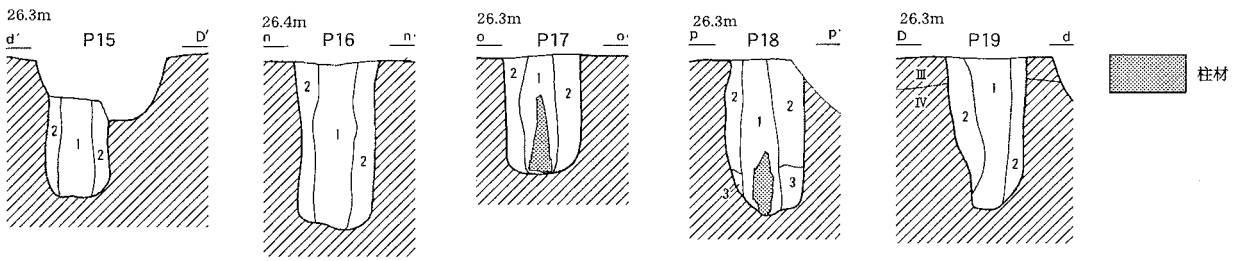
2号掘立柱建物-P 10
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜黄褐色土粒少。しまり良く、粘性有。
2層　10YR3/2黒褐色土中に、φ2～3㎜炭化物粒少、φ3㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。

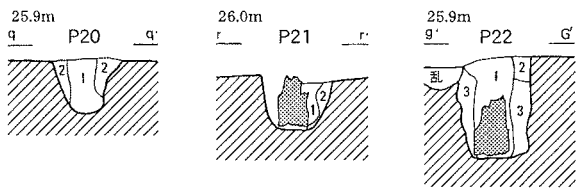
2号掘立柱建物-P 11
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄褐色土粒少。しまりややゆるく、粘性有。
2層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5㎜黒褐色土粒と、φ2㎜～1㎝の黄褐色土粒多。しまりややゆるい。

2号掘立柱建物-P 12
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄褐色土粒少。しまりややゆるく、粘性有。
2層　10YR3/1黒褐色土中にφ1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性ふつう。

2号掘立柱建物-P 13
1層　10YR3/2黒褐色土　しまりゆるく、粘性有。
2層　10YR3/2黒褐色土中にφ1㎝前後黄褐色土粒多。しまりややゆるい。

2号掘立柱建物-P 14
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5㎜～1㎝黄褐色土粒含む。しまりゆるく、粘性有。
2層　10YR4/3にぶい黄褐色土を主体とし、黒褐色土を横縞状に含む。ややしまりゆるく、粘性有。





2号掘立柱建物-P 15
1層　10YR3/1黒褐色土　しまりゆるく、粘性有。
2層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5㎜黒褐色土粒と、φ2㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 16
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜の炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒微。しまり良く、粘性有。
2層　10YR2/1黒褐色土中にφ2㎜～1㎝灰黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 17
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒微。しまり良く、粘性有。
2層　10YR4/3にぶい黄褐色土粒（φ2～5㎜）を主体とし、黒褐色土を間に含む。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 18
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒微。しまり良、粘性有。
2層　10YR4/3にぶい黄褐色土粒ブロック（φ2㎜～5㎝）多。間に黒褐色土とφ2㎜の炭化物粒・焼土粒少。しまり良、粘性有。
3層　10YR4/2灰黄褐色土（φ3㎜～1㎝）のブロック多。しまり良、粘性ふつう。

2号掘立柱建物-P 19
1層　10YR2/1黒色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒微。しまり良、粘性強。
2層　10YR2/1黒色土中にφ2～3㎜炭化物粒少、φ3～5㎜にぶい黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 20
1層　10YR3/1黒褐色土　しまり良、粘性強。
2層　黒褐色土中にφ5㎜～1㎝暗灰黄色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 21
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒微。しまりややゆるく、粘性有。
2層　10YR3/1黒褐色土中にφ3～5㎜暗灰黄色土粒多。しまり良、粘性有。

2号掘立柱建物-P 22
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3㎜前後の黄褐色土粒少。しまりややゆるく、粘性強。
2層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄褐色土粒少。しまりふつう、粘性有。
3層　10YR5/3にぶい黄褐色土中にφ5㎜黒褐色土粒少、φ5㎜～1㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性強。

第15図　2号掘立柱建物(2)

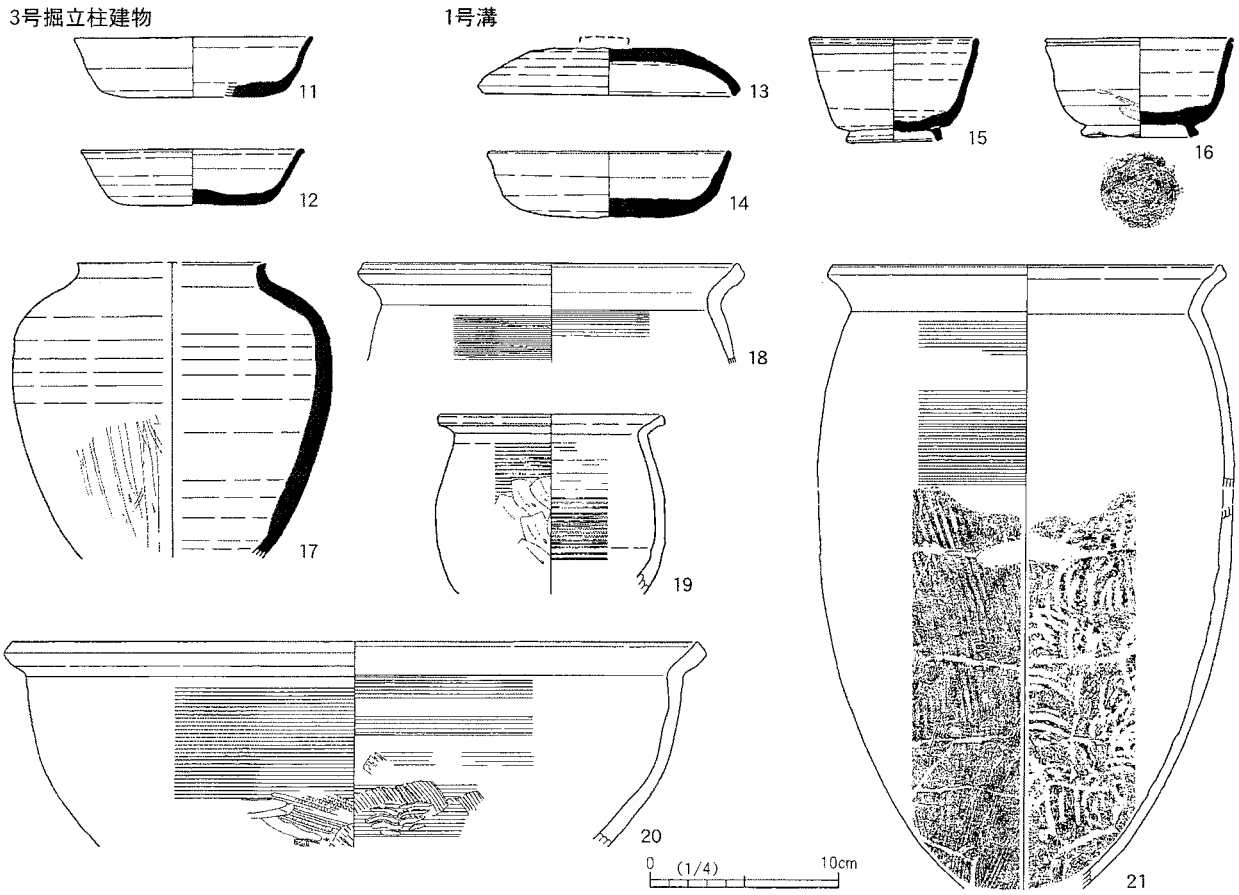
3号掘立柱建物と1(a・b)号溝（第17図，図版10・11）

3号掘立柱建物　調査区西半北東部，Gbグリッド中央に位置する。3号掘立柱建物の主軸方位は東偏58°，2間×2間(4.92×2.45m)の側柱建物。桁行の柱間は2.28～2.6m，梁行の柱間が1.06～1.38m前後。柱穴のプラン確認はⅣ・Ⅴ層上面だが，上層Ⅱa層中に遺物や焼土ブロックが分布しており，遺構構築面はこれより高位であったと推測される。北辺に並行する1号溝は3号掘立柱建物の雨落ち溝であろう。この他，建物のプラン内に7号土師器焼成坑，10・12・13号土坑が存在しているが，先後関係の判明しているのは，柱穴の重複する10号土坑のみであり，3号掘立柱建物が先行する。

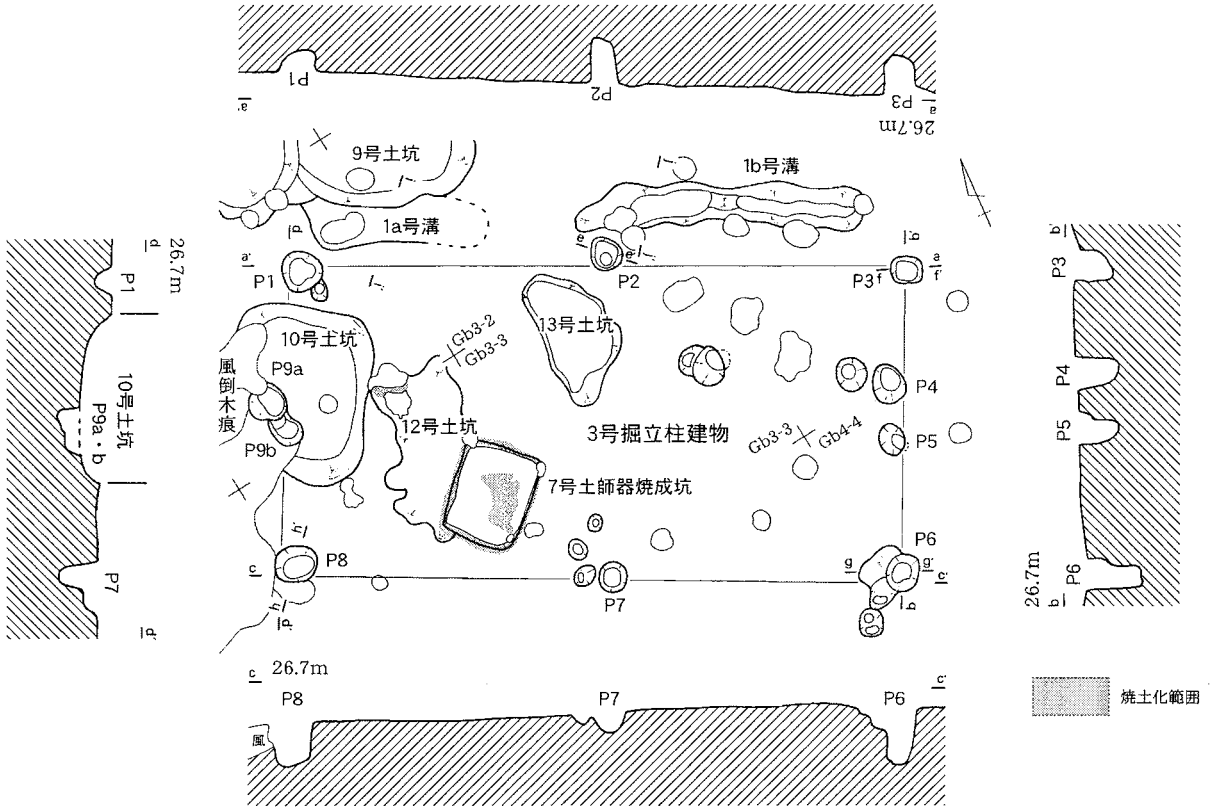
遺物は，P2から土師器甕小片が2点，P3から須恵器杯2点・土師器甕1点，計175gが出土した。このうち，P3出土の須恵器2点(第16図11・12，図版22)を掲載した。ともに無台杯BⅡ類。12はやや酸化炎焼成気味である。

1(a・b)号溝　3号掘立柱建物の北辺に平行し，規模が同等であることから，この建物に伴う雨落ち溝と判断した。幅は30cm前後。北辺との距離12～35cm。周辺に細かい水脈が通っており，下部からの水の浸み出しが著しく，常に湿った状態であったためプラン検出が困難であった。しかし，Ⅱa層中から遺物が集中して出土しており，おおよその形状と，Ⅱa層またはこれより高位から掘り込まれた遺構であることとが確認できた。この他，9号土坑と重複しており，土層の堆積状況から1a号溝が先行すると判断した。

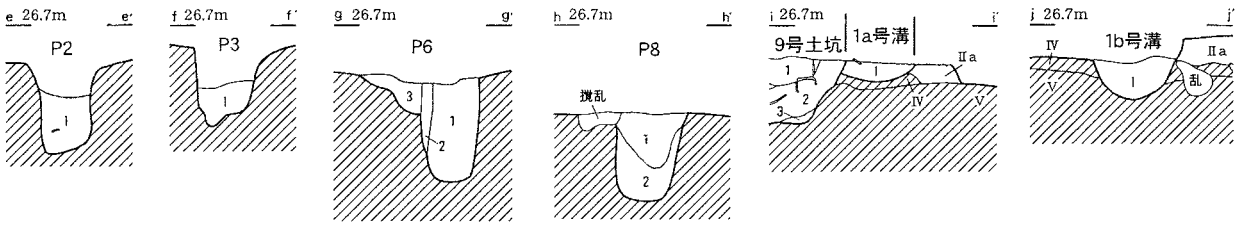
1(a・b)号溝からは，廃棄されたと見られる，多数の須恵器・土師器(浅型コンテナ約2箱分，5.0kg）が出土。図化に耐えうる9点(重量比5割弱)を掲載した(第16図13～21，図版22）。須恵器は，有台杯AⅡ類蓋(13)，無台杯AⅠ類(14)，有台杯C2類(15・16)，長胴短頸壺(17)がある。13・16は少し焼き歪んでおり，16には，体部下半に



第16図　3号掘立柱建物・1(a・b)号溝　出土遺物



掘立柱建物平・断面 0 (1/60) 2m



3号掘立柱建物-P 2
1層　10YR3/2黒褐色土中にφ3～5mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性ふつう。

3号掘立柱建物-P 3
1層　10YR3/2黒褐色土中にφ3mm～2cmの黄褐色土粒を多く含む。しまりややゆるく、粘性ふつう。

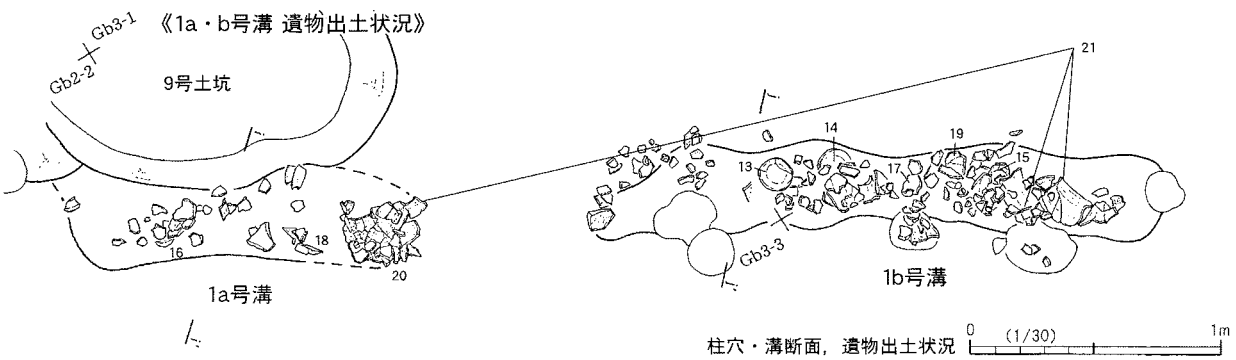
3号掘立柱建物-P 6
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2mm炭化物粒少、鉄分粒多。しまりややゆるく、粘性あり。
2層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～2cm灰黄褐色土粒多。しまり良く、粘性やや弱い。
3層　10YR3/1黒褐色土　φ2mm～2cm黄褐色土粒とφ2～3mm砂粒含む。

3号掘立柱建物-P 8
1層　10YR3/3暗褐色土　φ2～5mm黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。
2層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。

9号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒多、φ2～3mm焼土粒中、φ3～5mmの黄褐色土粒中。しまり良、粘性あり。
2層　10YR2/1黒色土　φ3mm～1cm炭化物粒中、φ5mm～1cm焼土粒中、φ3～5mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。遺物を多量に含む層。
3層　10YR4/3にぶい黄褐色土　黄褐色土ブロックと黒色土ブロックをまだらに含む。しまり良く、粘性あり。

1a号溝
1層　10YR3/1黒色土　φ2mm～3mm炭化物粒微。しまり良、粘性あり。

1b号溝
1層　10YR2/2黒褐色土　φ2mm～1cm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒中、φ2～3mm黄褐色土粒少、黄灰色粘土をブロック状に含む部分あり。しまりややゆるく、粘性あり。



柱穴・溝断面，遺物出土状況 0 (1/30) 1m

第17図　3号掘立柱建物，1(a・b)号溝

は誤ってついたと見られる工具痕が，底部には高台貼り付け時の調整痕(爪痕)が残る。体部中位に稜を持つ。土師器は，長胴甕(18･21)，小型甕BⅢ類(19)，鍋(20)がある。19は器面が剥離しており，黒斑が残る。この他，焼成粘土塊１点(1.2g)が出土した。

４・５号掘立柱建物（第18図，図版11）

調査区西端，Eb・Ecグリッドに位置する。ともに調査区外へ延びており，軸方向がほぼ一致する。また，２棟間には，これらと同方向に延びる36号土坑が存在しており，３者が同時存在の可能性を持つ。

４号掘立柱建物　調査区西端，Eb・Ecグリッド境に位置する。調査区外北・西方向へ延びており，２間×１間(3.1×3.0m)以上になろう。主軸方向は不明，軸方位は東偏62°。東辺の柱間が0.75・1.25m。柱穴のプラン確認はⅤ層上面である。建物のプラン内に，33(a・b)～35号土坑が存在しており，Ｐ３が34号土坑と，Ｐ４が33b号土坑とそれぞれ重複するが，先後関係は不明である。

遺物は，Ｐ１・P3から土師器甕類の小片165gが出土。Ｐ１からの出土量が比較的多いが，図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土師器片からみて，本遺構は古代に位置付けられる。

５号掘立柱建物　調査区西端，Ecグリッド南西部に位置する。調査区外西方向へ延びており，２間×１間(3.55×2.55m)以上になろう。また，東辺のピットはa・bの２列が平行しており，建て替えまたは抜き取り痕の可能性が考えられる。主軸方向は不明，軸方位は東偏64°。東辺の柱間は，2.15・2.55m。Ｐ２・４のプランは，Ⅲ層上面で確認できたが，それ以外はⅤ層上面での確認となった。建物のプラン内に，37号土坑が存在しており，Ｐ１と重複するが，先後関係は不明である。また，　36号土坑が北辺に近接して，平行に位置していることから，本遺構に伴う可能性がある。

遺物は，Ｐ１・２a・２b・４aから須恵器杯・甕類と土師器甕類の小片が数点(計315g)出土。Ｐ４aからの出土量がやや多いが，図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片からみて，古代に位置付けられる。

４　土師器焼成坑

１号土師器焼成坑（第19図，図版２）

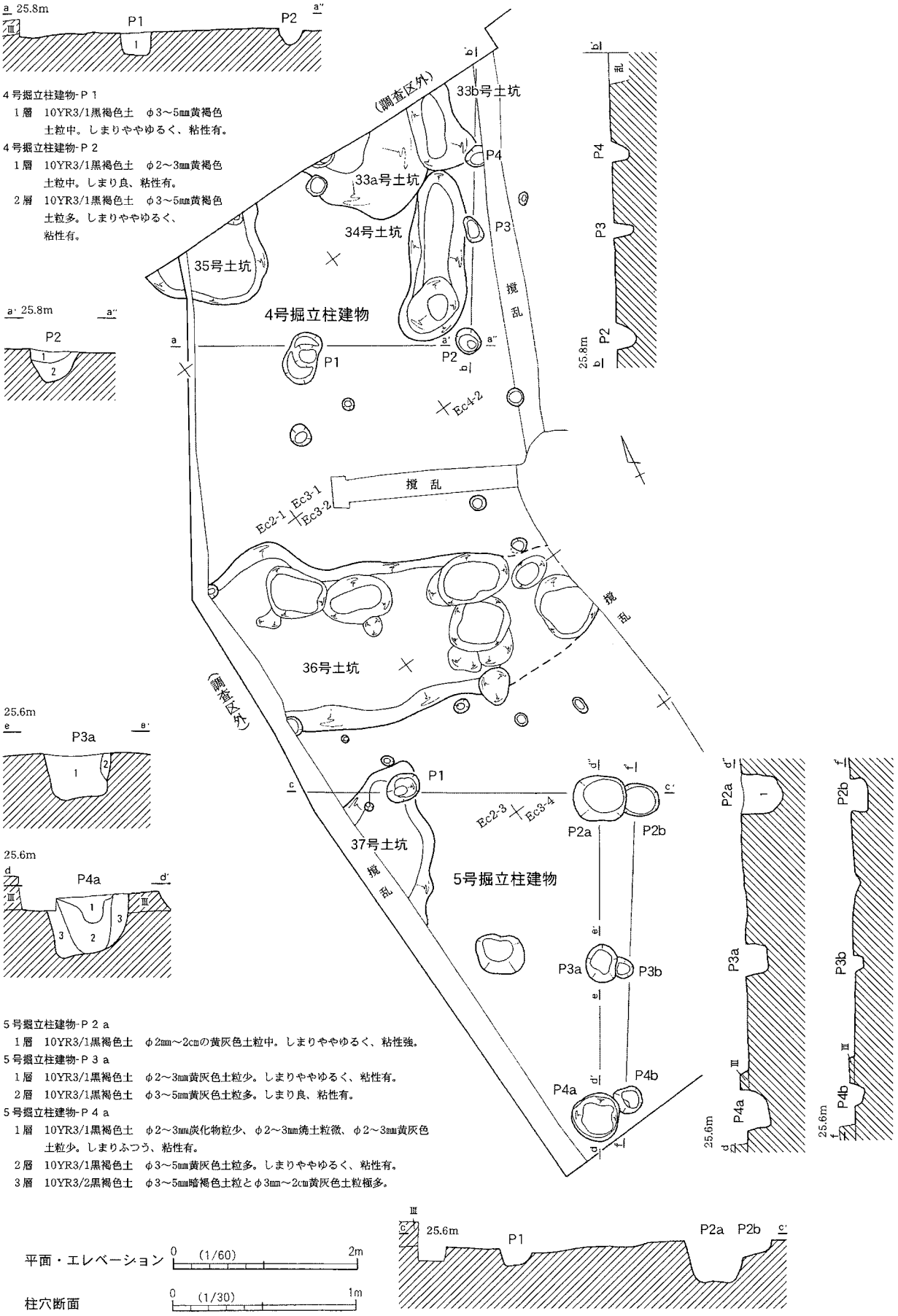
調査区東半，Ib4-3・5-3グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出した。斜面上方の北・東側に直線的な辺を持つ隅丸台形で，長軸130cm，北側短辺122cm，面積1.4㎡。掘り込みは３cmと非常に浅いが，Ⅴ層の遺構確認面がⅠ層直下であるため，掘り込みの上部が失われている可能性もある。底面の大半にあたる1.2㎡が被熱し，著しく赤化・硬化(＝焼土化)している。

遺物は，底面直上に破片の状態で分散して出土した。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ1箱分弱(1.2kg) あり，このうち，図化に耐えうる土師器長胴甕１点(第19図22，図版22)を掲載した(重量比で2割弱分)。また，焼成粘土塊１点(5.5g)が出土した。

２号土師器焼成坑（第19図，図版２）

調査区東半，Ib5-3・5-4グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出した。長辺162cm，短辺108cm，面積1.5㎡の隅丸方形。１号土師器焼成坑と同様，掘り込みが４cmと非常に浅いが，Ⅴ層の遺構確認面がⅠ層の直下であるため，掘り込みの上部が失われている可能性もある。底面の一部，北・西側0.7㎡の範囲が斑状に被熱し，赤化・硬化(＝焼土化)している。１b号土坑と重複するが，埋土が似通っており，先後関係は識別できなかった。なお，１b号土坑の項に掲載した須恵器無台杯(141)は本遺構との重複部分からの出土であり，本遺構に帰属する可能性もある。

遺物は，底面直上に破片の状態で分散して出土した。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類・甕類を少量含む。

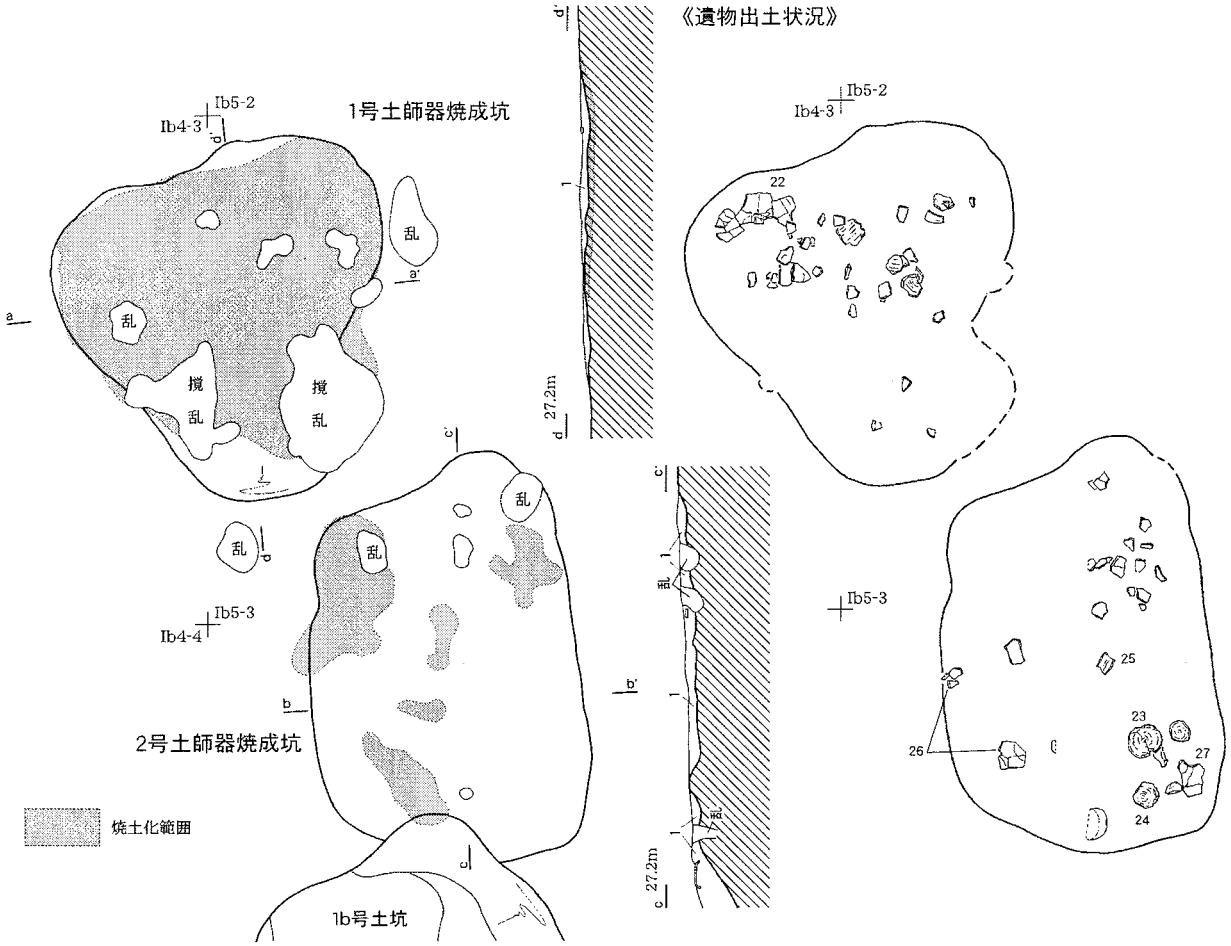


4号掘立柱建物-P１
１層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性有。
4号掘立柱建物-P２
１層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜黄褐色土粒中。しまり良、粘性有。
２層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性有。

5号掘立柱建物-P２a
１層　10YR3/1黒褐色土　φ2㎜～2㎝の黄灰色土粒中。しまりややゆるく、粘性強。
5号掘立柱建物-P３a
１層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜黄灰色土粒少。しまりややゆるく、粘性有。
２層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄灰色土粒多。しまり良、粘性有。
5号掘立柱建物-P４a
１層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少、φ2～3㎜焼土粒微、φ2～3㎜黄灰色土粒少。しまりふつう、粘性有。
２層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜黄灰色土粒多。しまりややゆるく、粘性有。
３層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5㎜暗褐色土粒とφ3㎜～2㎝黄灰色土粒極多。

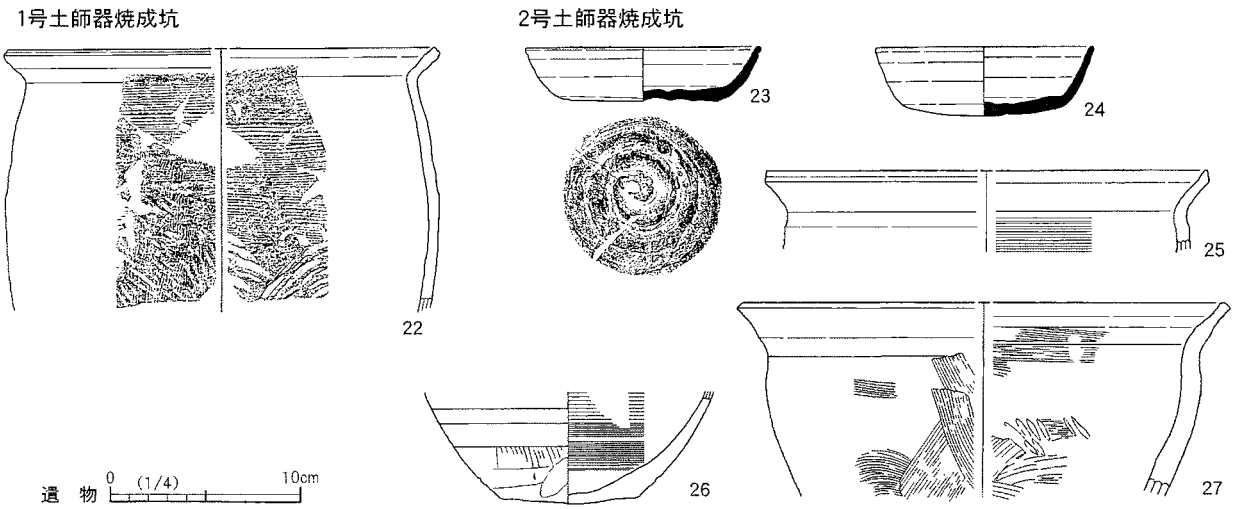
平面・エレベーション　0　(1/60)　2m
柱穴断面　0　(1/30)　1m

第18図　４・５号掘立柱建物



1号土師器焼成坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5～8㎜炭化物粒中、φ2～3㎜焼土粒中。しまりふつう。

2号土師器焼成坑
1層　10YR3/1黒褐色土　φ5～8㎜炭化物粒中。φ2～3㎜焼土粒中。しまりふつう。



第19図　1・2号土師器焼成坑と出土遺物

浅型コンテナ２箱分弱(1.5kg)あり，図化に耐えうる５点(第19図23～27，図版22・23)を掲載した(重量比で４割強)。須恵器は無台杯ＡⅡ類(24)と，無台杯ＢⅡ類(23)がある。23はやや浅めで，水挽き痕が明瞭である。土師器には長胴甕(25)・小型甕ＢⅡ類(26)・鍋(27)がある。27は口縁部から頸部に向かって器壁の厚くなる独特の形状をしており，内外面には黒斑が残る。

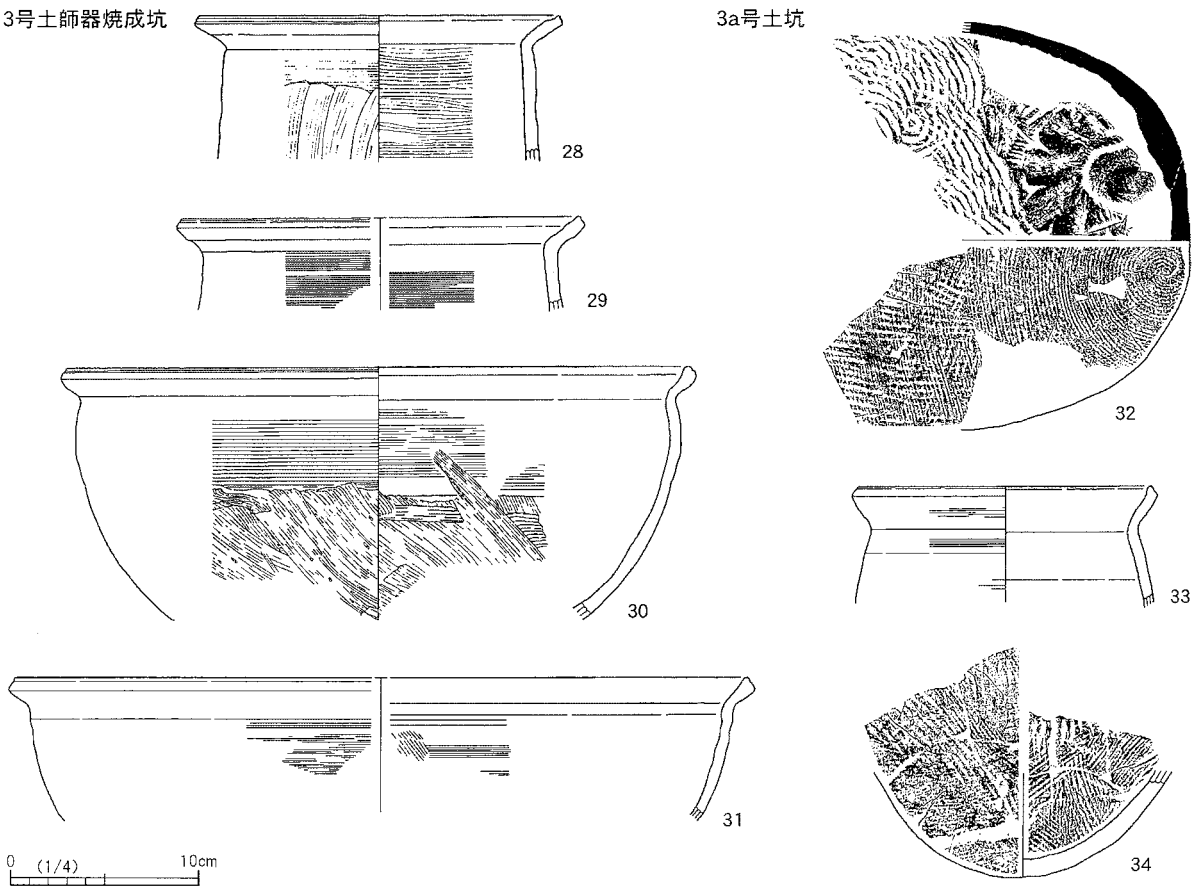
３号土師器焼成坑と３(a・c)号土坑（第21図，図版２・12）

調査区東半，Ib1-5・2-4・2-5，Ic1-1グリッドに位置する。３号土師器焼成坑と３(a・c)号土坑の存在は，焼土粒などの分布から，Ⅱa層掘削中に確認出来ていたが，当初は一つの遺構と認識して掘削・調査した。地山のⅤ層上面まで掘り下げてプランを検出した結果，それぞれ別遺構であると判断し，分離した。

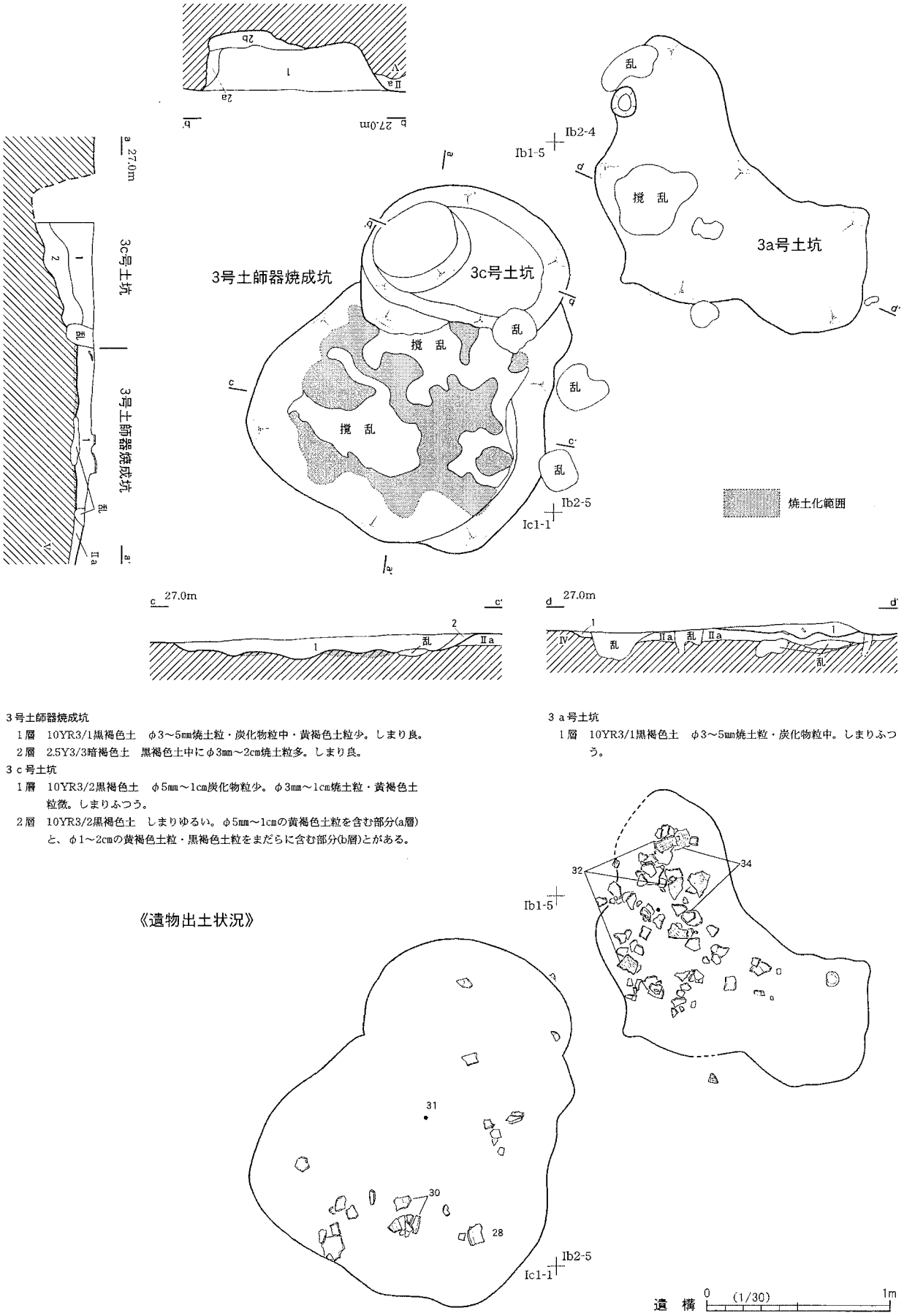
３号土師器焼成坑　Ib1-5・2-5，Ⅰc1-1グリッドに位置する。長軸163cm，短軸158cm，推定面積1.9㎡，楕円形に近い不整形である。残存部での掘り込みは11cmと浅いが，上部Ⅱa層中から，焼土粒の散布により存在が確認出来ていたため，実際の掘り込みはもう少し深かったと考えられる。植物根の攪乱により，焼土面が緩んでいる部分もあるが，底面中央の1.1㎡が一面被熱し，赤化・硬化(＝焼土化)している。なお，重複する３c号土坑により焼土面が削平されており，土師器焼成坑が先行する。

底面直上から須恵器・土師器の小片が出土。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類・甕類を少量含む。浅型コンテナ１箱分強(1.2kg)あり，図化に耐えうる土師器４点(重量比で３割強)を掲載した(第20図28～31，図版５・23)。長胴甕　28･29は底部を欠くが，体部形状と器厚からみて，おそらく長胴甕であろう。28は胎土の薄片分析を実施した(試料番号⑫)。30･31は鍋。この他，焼成粘土塊６点(計28.5g)が出土した。

３a号土坑　Ib2-4・2-5グリッドに位置する。長軸154cm，短軸132cmの不整形であり，埋土が８cmと薄い。



第20図　３号土師器焼成坑・３ａ号土坑　出土遺物



3号土師器焼成坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm焼土粒・炭化物粒中・黄褐色土粒少。しまり良。

2層　2.5Y3/3暗褐色土　黒褐色土中にφ3mm～2cm焼土粒多。しまり良。

3c号土坑

1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒少。φ3mm～1cm焼土粒・黄褐色土粒微。しまりふつう。

2層　10YR3/2黒褐色土　しまりゆるい。φ5mm～1cmの黄褐色土粒を含む部分(a層)と、φ1～2cmの黄褐色土粒・黒褐色土粒をまだらに含む部分(b層)とがある。

3a号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm焼土粒・炭化物粒中。しまりふつう。

《遺物出土状況》

第21図　3号土師器焼成坑，3(a・c)号土坑

また，埋土中に炭化物粒・焼土粒を目立って含むが，混入物の有無以外，Ⅱa層(黒褐色土)との差異が小さい。このため，意図的に掘り込まれた遺構というよりは，廃棄土壌の堆積の可能性が考えられる。

薄い埋土中から，須恵器・土師器が破片ながらまとまった状態で出土。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類・甕類を少量含む。浅型コンテナ１箱分強(3.1kg)あり，図化に耐えうる３点(重量比で1割強)を掲載した(第20図32～34，図版23)。32の須恵器横瓶は，粘土板貼り付けによる側面の閉塞痕が明瞭に残る。土師器は小型甕Ⅱ類(33)と長胴甕(34)がある。また，焼成粘土塊４点(計81.5g)が出土した。

３c号土坑　Ib1-5・2-5グリッドに位置する。３号土師器焼成坑と重複，この焼土面を削平して作られており，土師器焼成坑が先行する。長軸108cm，短軸84cmの楕円形で，掘り込み33cm。底面は傾き，壁が明瞭に立ち上る箱形をしている。

遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯類・甕類を少量含む。出土総量は590gで，図化に耐えうるものはない。出土土器片からみて，本遺構は古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊２点(計18.8g)が出土しており，このうち１点(第76図726)を掲載した。

４・５・６号土師器焼成坑と７(a・b)・14号土坑（第22図，図版２・３・12）

調査区東半，Ib3-5・4-5，Ⅰc3-1・4-1グリッドに位置する。４号土師器焼成坑と14号土坑は地山のⅤ層上面でプランを検出した。当初は一つの遺構と認識して掘削したが，土層などを検討の結果，別遺構と判断した。また，６号土師器焼成坑と７(a・b)号土坑は，焼土粒などの分布により，Ⅱa層中位から確認出来ていたが，一つの遺構と認識して掘削した。地山のⅤ層上面まで掘り下げてプランを検出した結果，それぞれ別遺構と判断した。

４号土師器焼成坑　Ib3-5グリッドに位置する。地山のⅤ層上面で，著しい赤化・硬化(＝焼土化)を検出。掘り込みは認められないが，遺構確認面がⅠ層直下であるため，遺構の上部が失われ，底面だけが残存していると考えられる。長軸127cm，短軸110cm，面積1.0㎡の範囲に焼土面が広がる。中央に14号土坑が重複。土師器焼成坑の焼土面を掘削して土坑が作られており，土坑が後出である。

出土遺物はないが，14号土坑に先行するため，これ以前の古代に位置付けられよう。

14号土坑　Ib3-5グリッド，４号土師器焼成坑の中央に重複。焼土面を掘削して構築されており，土坑が後出する。長軸114cm，短軸102cm，掘り込みは23cmである。土師器焼成坑の中央に，意図的に掘り込んだ可能性が考えられることから，「土師器焼成坑での土器の焼成→土坑の掘削」を一連の行為として捉えるべきかもしれない。

遺物は，土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。1.9kgを出土したが，図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片から，古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊20点(計129.5g)が出土した。

５号土師器焼成坑　Ic4-1グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出した。長軸77cm，短軸72cm，面積0.4㎡の円形。掘り込みが30cmあり，底面がほぼ平らで，壁が垂直に近い角度で立ち上がる箱形である。壁面の一部と底面中央0.02㎡が被熱し，赤化・硬化(＝焼土化)しているが，他の土師器焼成坑に比べて弱い。

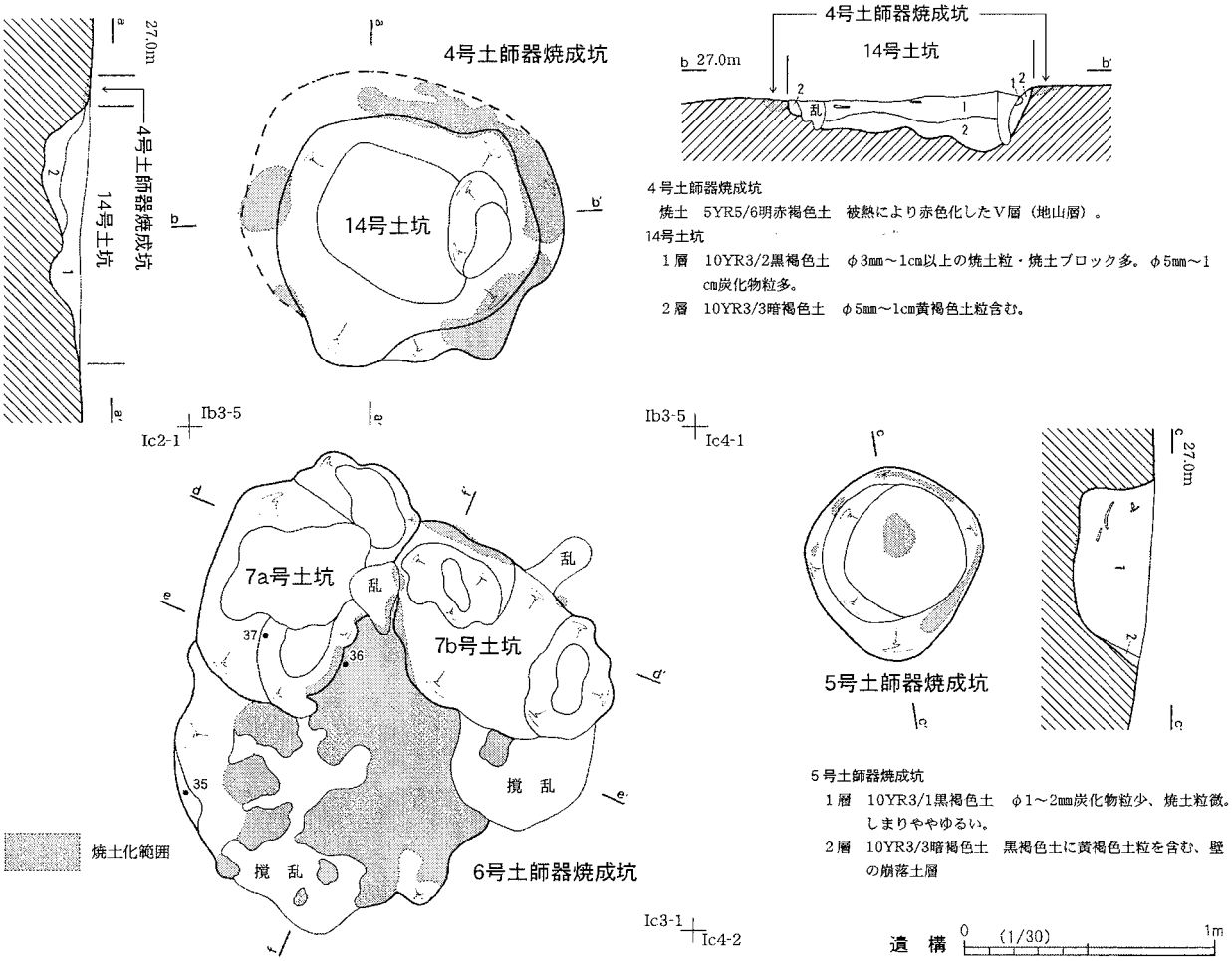
遺物は，土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む，計480ｇが出土した。図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片からみて古代に位置付けられよう。また，焼成粘土塊4点(計17.6g)が出土した。

６号土師器焼成坑　Ic2-1・3-1グリッドに位置する。長軸168cm，短軸138cm，推定面積1.8㎡の楕円形で，Ⅴ層上面のプラン確認面は掘り込み6cmと浅いが，上層Ⅱa層の掘り下げ途中から，焼土粒の散布により存在が確認出来ていたため，実際の掘り込みはもう少し深かったと考えられる。底面中央1.3㎡が一面，被熱し，赤化・硬化(＝焼土化)しているが，植物根の攪乱により，焼土面が一部緩んでいる。焼土化は，他の土師器焼成坑に比べて弱い。重複する７a・b号土坑により，焼土面が削平されており，土師器焼成坑が先行する。

遺物は，底面直上から土器類の小破片が出土した。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ1箱分弱(1.1kg)あり，図化に耐えうる２点(重量比で2割弱)を掲載した(第22図35・36，図版23)。35は須恵器

無台杯AⅡ類。口縁内外・内底面の磨耗が顕著で，使用が明らか。36は土錘BⅡ類で，使用によるものか，孔縁が磨耗している。また，焼成粘土塊３点(10.0g)が出土した。

７a号土坑　Ic3-1グリッド，６号土師器焼成坑のプラン内に位置する。土師器焼成坑の焼土面を削平して作られ



4号土師器焼成坑
焼土　5YR5/6明赤褐色土　被熱により赤色化したV層（地山層）。

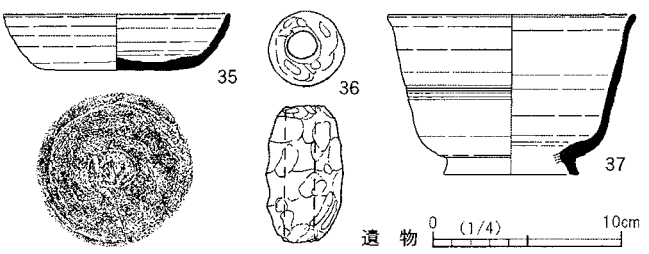
14号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ3mm～1cm以上の焼土粒・焼土ブロック多。φ5mm～1cm炭化物粒多。
2層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm～1cm黄褐色土粒含む。

5号土師器焼成坑
1層　10YR3/1黒褐色土　φ1～2mm炭化物粒少、焼土粒微。しまりややゆるい。
2層　10YR3/3暗褐色土　黒褐色土に黄褐色土粒を含む、壁の崩落土層

6号土師器焼成坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm炭化物粒少、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまりややゆるい。

7a号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm炭化物粒少、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまりゆるい。
2層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5mm黄褐色土粒多、φ3mm焼土粒少。しまりゆるい。
3層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒微、φ5mm焼土粒少、φ3mm～1cm黄褐色土粒中。しまりややゆるい。

7b号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm炭化物粒少、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまりゆるい。
2層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒多、φ2～3mm黄褐色土粒中。しまりよく、粘性あり。
3層　10YR3/3暗褐色土　黄褐色土ブロック多。しまりゆるい。



第22図　４・５・６号土師器焼成坑，７(ａ・ｂ)・14号土坑と出土遺物

ており，土師器焼成坑が先行する。長軸104cm，短軸64cmの不整形で，掘り込み26cm。底面の凹凸が著しく，壁の立ち上がり方も一定しない。

埋土中から土師器甕類と須恵器杯類(計210ｇ)が出土した。図化に耐えうる1点を掲載した(第22図37，図版23)。37は須恵器有台杯DⅡ2類である。

7b号土坑　Ic3-1グリッドに位置する。6号土師器焼成坑と重複し，土師器焼成坑の焼土面を掘削して作られていることから，これよりも新しい。長軸105cm，短軸64cmの不整形で，掘り込み28cm。底面の凹凸が著しい。

遺物は，須恵器・土師器甕類の小片(計100ｇ)が出土。図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片から，古代に位置付けられる。

7号土師器焼成坑と10・12号土坑（第23図，図版3・12）

調査区西半，Gb2-2・2-3・3-3グリッドに位置する。このうち，7号土師器焼成坑は，Ⅱa層の掘削途中にドーナツ状の焼土ブロック(1層)を検出。これにより存在が確認出来ていたが，当初は12号土坑と一つの遺構と認識して掘削した。地山のⅤ層上面まで掘り下げてプランを検出した結果，それぞれ別遺構と判断した。

7号土師器焼成坑　Gb2-3・3-3グリッド，3号掘立柱建物のプラン内に位置する。長辺80cm，短辺64cm，面積0.5㎡の方形で，掘り込みは46cm。底面が平らで，壁が明瞭に立ち上がる箱形である。1層(焼土ブロック)は，含有物がほとんどなく，Ⅳ・Ⅴ層が焼土化したと見られる明るい色調を呈していることから，この地点で形成されたものではなく，他の地点で焼土化した土が，使用停止後の土師器焼成坑跡地(窪地)に投棄されたものと推測される。土師器焼成坑の壁面全周(中位～上部)と底面中央0.1㎡は，被熱し，赤化・硬化(＝焼土化)している。特に壁面は，3㎝ほどの厚さで，赤色化・暗赤褐色硬化・赤色化の順に著しく焼土化している。埋土中には，炭化物粒を多く含む層(3・4層)があることから，製炭土坑の可能性も検討した。しかし，製炭土坑は薪を完全に燃やさず炭化させて炭を得ることを目的としており，「低い温度を保たせるため，基本的に底面は赤色焼土化しないし，壁の焼成も土師器焼成坑に比べて弱い」(木立1997)ため，本遺構はこれに該当しないと判断した。ただし，他の焼成土坑とは比較にならないほど壁面の焼土化が著しいこと，平面プランが方形で整っていることなど，他の土師器焼成坑との差異は大きい。なお，12号土坑と重複し，本遺構が新しい。また，3号掘立柱建物のプラン内に位置するが，直接的な関係はない。

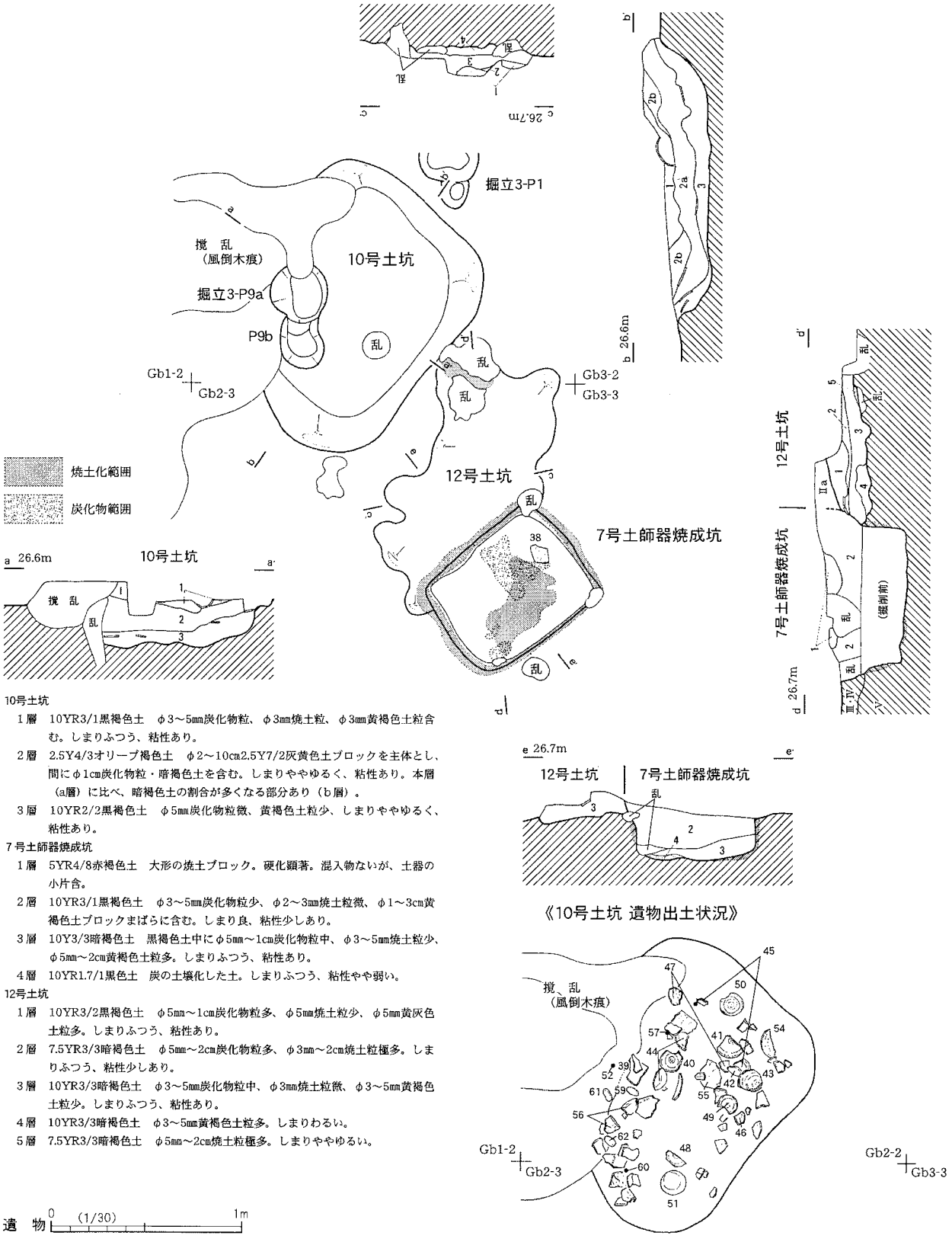
遺物は総量420gと少なく，土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。うち，図化に耐えうる土師器長胴甕1点を掲載した(第24図38，図版23)。3層(炭化物層)直上からの出土である。また，焼成粘土塊6点(計17.4g)が出土した。

10号土坑　Gb2-2・2-3グリッドに位置する。3号掘立柱建物のP9a・bと重複し，本遺構が新しい。プラン検出は地山のⅤ層上面。西辺が風倒木により攪乱されているが，長軸136cm，短軸110cmの隅丸方形で，掘り込み35cm。底面が平らで，壁が緩やかに立ち上がる椀形である。掘削中，水の浸み出しが著しく，作業に手間取った。埋土は3層あり，2層目は灰黄色土ブロックを主体とする特徴的な層であった。各層とも遺物が多く，投棄されたと見られる状況であることから，全層が間を置かずに堆積した埋め立て土層と考えられる。

遺物は浅型コンテナ3箱分強(5.1kg)が出土した。土師器甕類を主体とするが，須恵器杯類も少なくない。うち，図化に耐えうる24点(重量比で5割強)を掲載した(第24図39～62，図版5・23)。

須恵器食膳具には，有台杯蓋(39･40)，有台杯AⅡ類(41･42)・BⅠ類(43)，折縁杯A類(44)，無台杯AⅡ類（45～47)・BⅡ類(48～52)，杯（53)，があり，無台杯は全般的に薄手である。有台杯蓋とした40は A類と考えているが，39はAⅡ類を主体とする本遺構の蓋としてはやや大型であるため，B類小型品に組み合う蓋の可能性もある。これらの中には，焼成時の歪み(40･44・52)や亀裂(41)の認められる不良品が多く，焼台への転用品(42)などもある

一方で，よく使い込まれたことを示す磨耗痕が，内面･高台などに顕著に残る個体(41)もある。また，53の杯の底部には「〆」または「×」がヘラ描きされている。47は須恵器としたが，酸化炎焼成であり，やや軟質である。須恵器貯蔵具には，短頸壺蓋(54)・横瓶(55)がある。円盤閉塞された55は，円盤が焼き膨らんでいる。これらのう



10号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒、φ3mm焼土粒、φ3mm黄褐色土粒含む。しまりふつう、粘性あり。

2層　2.5Y4/3オリーブ褐色土　φ2～10cm2.5Y7/2灰黄色土ブロックを主体とし、間にφ1cm炭化物粒・暗褐色土を含む。しまりややゆるく、粘性あり。本層（a層）に比べ、暗褐色土の割合が多くなる部分あり（b層）。

3層　10YR2/2黒褐色土　φ5mm炭化物粒微、黄褐色土粒少、しまりややゆるく、粘性あり。

7号土師器焼成坑

1層　5YR4/8赤褐色土　大形の焼土ブロック。硬化顕著。混入物ないが、土器の小片含。

2層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒微、φ1～3cm黄褐色土ブロックまばらに含む。しまり良、粘性少しあり。

3層　10Y3/3暗褐色土　黒褐色土中にφ5mm～1cm炭化物粒中、φ3～5mm焼土粒少、φ5mm～2cm黄褐色土粒多。しまりふつう、粘性あり。

4層　10YR1.7/1黒色土　炭の土壌化した土。しまりふつう、粘性やや弱い。

12号土坑

1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒多、φ5mm焼土粒少、φ5mm黄灰色土粒多。しまりふつう、粘性あり。

2層　7.5YR3/3暗褐色土　φ5mm～2cm炭化物粒多、φ3mm～2cm焼土粒極多。しまりふつう、粘性少しあり。

3層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm炭化物粒中、φ3mm焼土粒微、φ3～5mm黄褐色土粒少。しまりふつう、粘性あり。

4層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm黄褐色土粒多。しまりわるい。

5層　7.5YR3/3暗褐色土　φ5mm～2cm焼土粒極多。しまりややゆるい。

第23図　7号土師器焼成坑，10・12号土坑

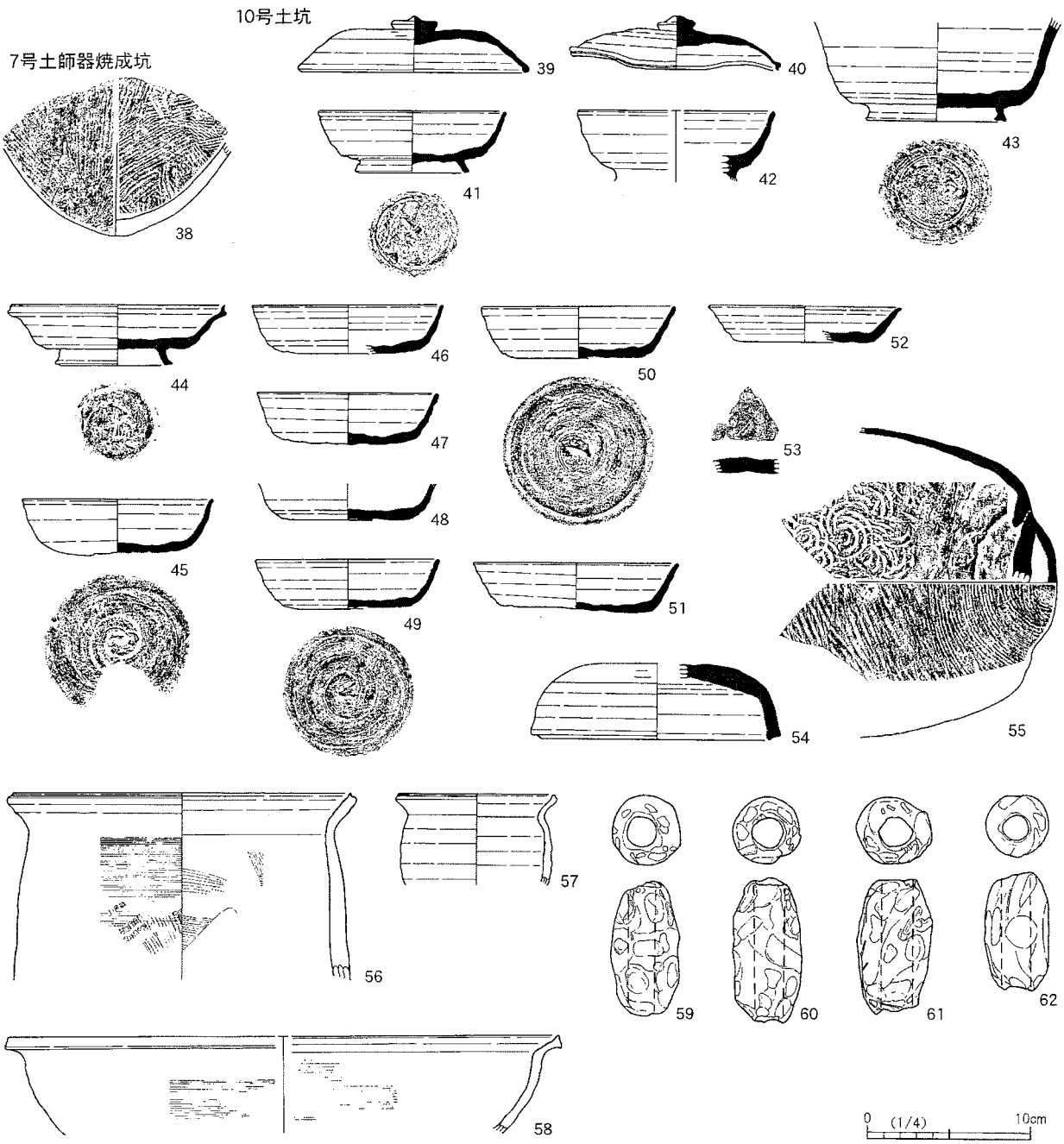
ち，39・49は胎土のX線回折分析(試料番号③・②)を実施した。

一方，土師器は長胴甕(56)，小型甕Ⅲ類(57)，鍋(58)がある。57･58は器面の剥落が顕著である。

この他，紡錘形土錘4点(59～62)は，みなBⅡ類。使用によるものであろう，いずれも孔縁の磨耗が著しい。うち，59は胎土の薄片分析を実施した(試料番号②)。また，焼成粘土塊1点(1.2g)が出土した。

なお，1～3層から出土した炭化材片で炭素年代測定分析を実施した(分析試料No.14・15)。この結果，No.14は7世紀末～9世紀後半，No.15は7世紀後葉～8世紀後半の年代結果が得られた。

12号土坑　Gb2-2・2-3グリッド，3号掘立柱建物のプラン内に位置する。長軸136cm，短軸66cmの不整形で，掘り込みは21cm。底面の凹凸が著しい。底面のごく一部が焼土化しているが，土師器焼成坑としては焼土化が弱いため，土坑として扱った。7号土師器焼成坑と重複し，12号土坑が先行する。



第24図　7号土師器焼成坑・10号土坑　出土遺物

遺物は浅型コンテナ１箱分強(1.8kg)ある。土師器甕類小片がまとまって出土したが，いずれも図化に耐えないため，未掲載である。出土土器片からみて，古代に位置付けられる。この他，焼成粘土塊が62点(計372.4g)と，多量に出土した。このうち，３点(第76図723・728・730)を掲載した。

８号土師器焼成坑（第25図，図版３）

調査区西半中央，Fc1-3・1-4・2-3・2-4グリッド，２号掘立柱建物のプラン内に位置する。地山のＶ層上面でプランを検出。検出時は，東側に直線的な壁を持つ長方形を確認できたが，完掘時には長辺170cm，幅124cm，面積1.7㎡の隅丸台形となった。掘り込みは９cmと浅い。なお，南西部は調査区外まで広がっている。底面はほぼ平らで，壁が緩やかに立ち上がる椀形。中央全面0.8㎡が著しく赤化・硬化(＝焼土化)している。土層を観察したところ，北端のくぼみを含め，焼土化した底面を一旦掘削したことによるとみられる焼土化層の厚薄が確認できた。製品取出し時に，灰の掻い出しなどが行われたことを想定させる。

遺物は埋土中からまとまって出土した。土師器甕類が主体だが，須恵器杯・甕類も一定量含む。浅型コンテナ３箱分強(9.6kg)あり，うち19個体(重量比で３割)を掲載した(第25図63～83，図版５・24）。

須恵器食膳具には，有台杯B類蓋(63・65・66)・C類蓋(64)・D類蓋(67)，有台杯BⅡ類(68)・C類(69），無台杯BⅡ類(70～72)がある。このうち，小形の66は68とセットになると考えられる。63は天井部の一部にススが付着していた。ヘラ描きされた個体が多く，67・71は「－」，69・70は「×」が，天井部または底面に描かれる。72にもヘラ描きの一部が確認できる。須恵器貯蔵具には，小型短頸壺(73)と甕(74・75)がある。

また，黒色土器有台杯(76)・無台杯(77)が出土した。ともに，内外面を黒色処理されており，焼成は還元炎焼成気味で良好。77は器面磨耗・剥離が著しいのに対し，76は極めて良好。未使用とみている。

一方，土師器は小型甕Ⅱ類(78・80)，長胴甕(79・81)，鍋(82・83)がある。うち，全形の残る80はB類で，Ⅱ類の中でも器高が高い。78は内面にアク・炭化物が付着する。外面は全体に，被熱による器面の剥離(ハジケ)が著しいなど，使用痕が顕著である。また，78～82も内外面に黒斑が残る。なお，79は胎土の薄片分析を実施した(試料番号⑬)。

この他，焼成粘土塊が60点(計638.4g)と多量に出土した。遺構出土分の２割弱にあたる。このうち，10点(第76・77図719・721・724・727・731・733・735・738・739・760)を掲載した。

９号土師器焼成坑と27(a～c)号土坑（第26図，図版３・12・13）

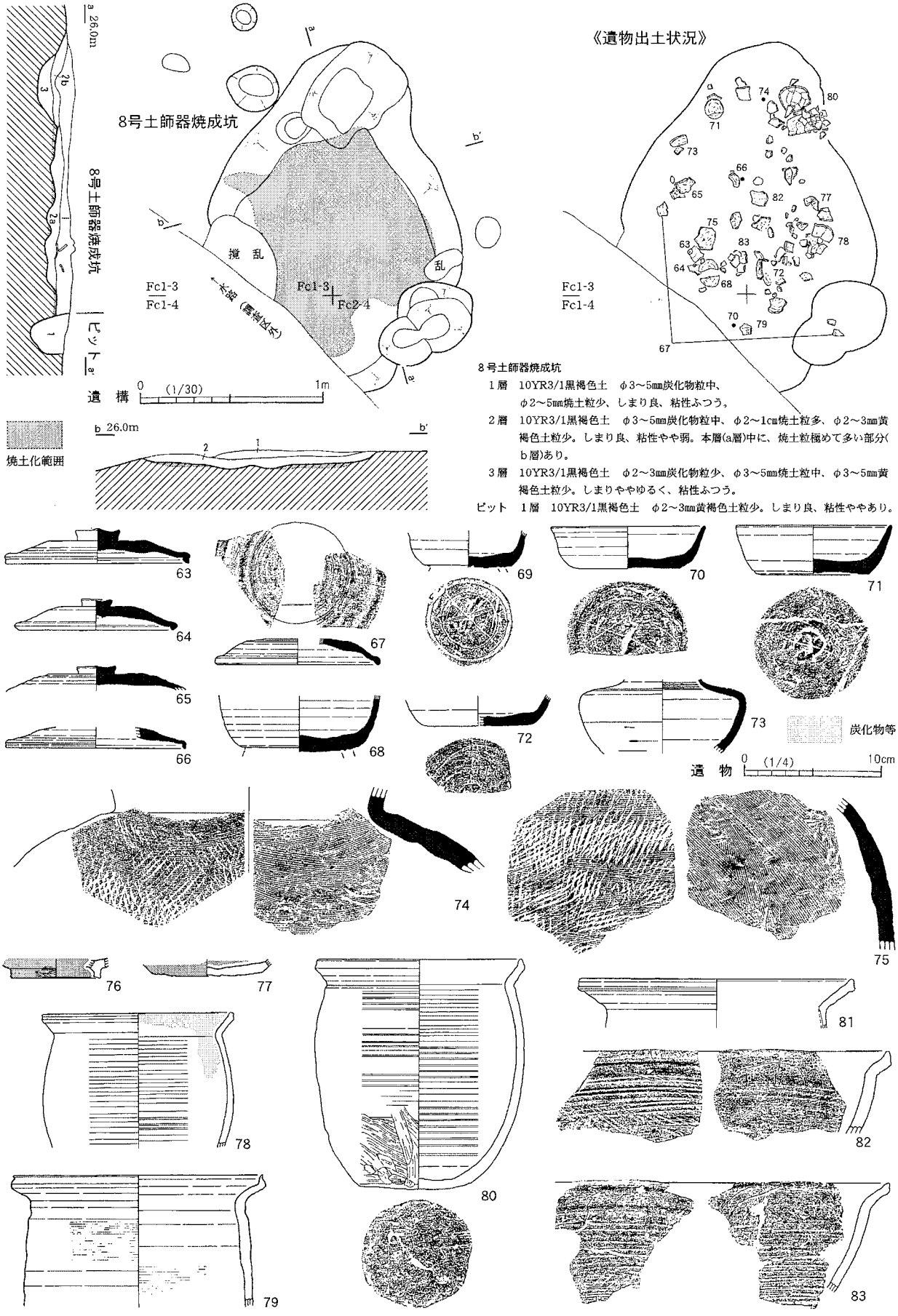
調査区西半中央，Fc1-2・2-2グリッド付近，２号掘立柱建物のプラン内に位置する。９号土師器焼成坑と27(a～c)号土坑は，撹乱直下のＶ層上面でプランを検出した。当初は一体の遺構として掘削していたが，調査途中で複数遺構の重複と判明，別遺構とした。

９号土師器焼成坑　Fc1-2・2-2グリッドに位置する。27c号土坑，２号掘立柱建物-P10と重複し，これらに壊されており，一部しか遺存しない。検出範囲で長軸92cm，短軸76cm，推定面積0.6㎡の円形である。検出面が27a号土坑底面にあたり，掘り込みは確認できていないが，上部が27a号土坑に壊され失われている可能性が高い。遺存する底面の中央0.2㎡が著しく赤化・硬化(＝焼土化)している。

出土遺物は土師器片1点しかないが，27a号土坑に先行するため，本遺構は古代に位置付けられる。

27a号土坑　Fc1-2・1-3・2-2・2-3グリッドに位置する。長軸175cm，短軸144cmの円形である。掘り込みは31cmで，底面に著しい凹凸を持つ。9号土師器焼成坑と重複し，この焼土面を掘削して構築されているため，土坑が後出と判断できる。また，27c号土坑・２号掘立柱建物－P10とも重複。土層の堆積状況から，27a号土坑が先行すると判断できる。27b号土坑とは境を接しているが，先後関係は不明である。

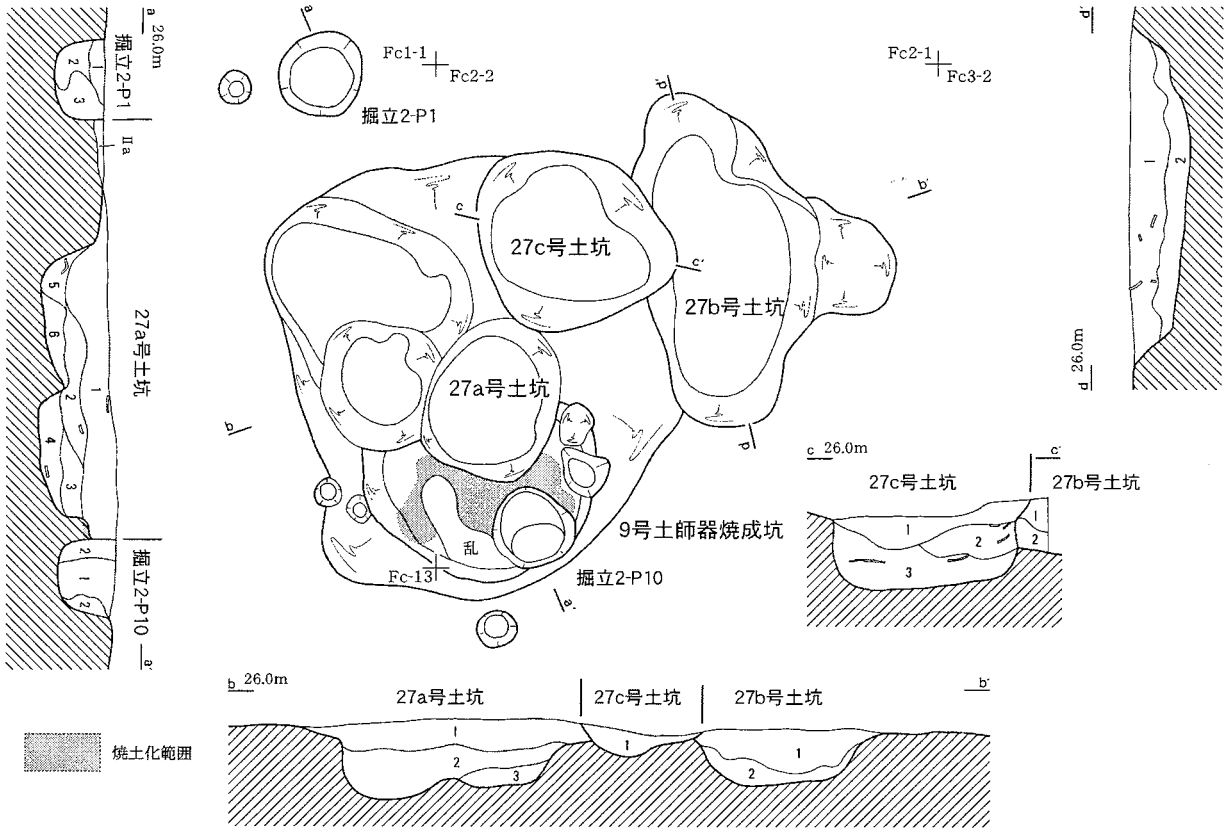
遺物は，1層上面の，特に南西部からまとまって出土した。浅型コンテナ２箱半分(5.2kg)ある。土師器甕類を主体とするが，図化に耐えるものがなく，少量出土した須恵器の杯・甕類のうち，図化可能な８個体(重量比で3割



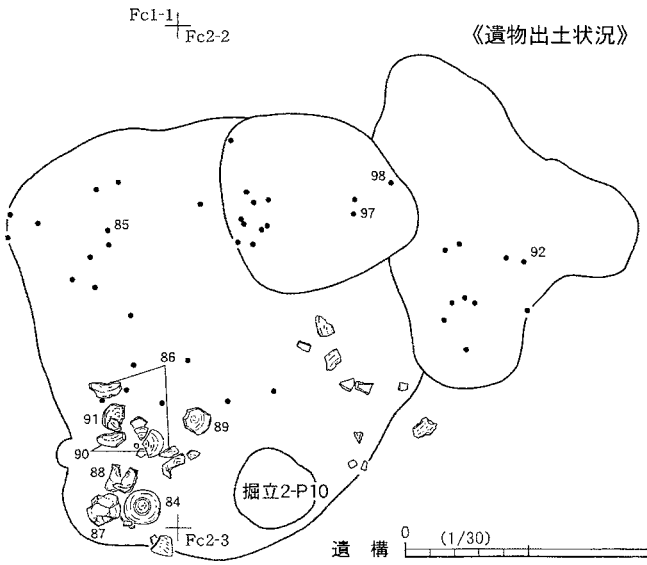
第25図　8号土師器焼成坑と出土遺物

弱)を掲載した(第27図84～91，図版24)。須恵器有台杯ＡⅠ(84)・ＣⅠ類(85)，無台杯ＡⅠ類(86・87)・ＡⅡ類(88)・ＢⅠ類(91)・ＢⅡ類(89・90)がある。有台杯はともに，口縁・内面・高台が磨耗，使用痕が認められる。90は胎土のＸ線回折分析を実施した(試料番号⑨)。なお，焼成粘土塊は24点(計189.1g)が出土した。

27b号土坑　Fc2-2グリッドに位置する。長軸135cm，短軸98cmの不整形。掘り込みは24cmで，底面は比較的平ら，壁が緩やかに立ち上がる椀形。27c号土坑と重複，本遺構が先行する。27a号土坑とは境を接しているが，先

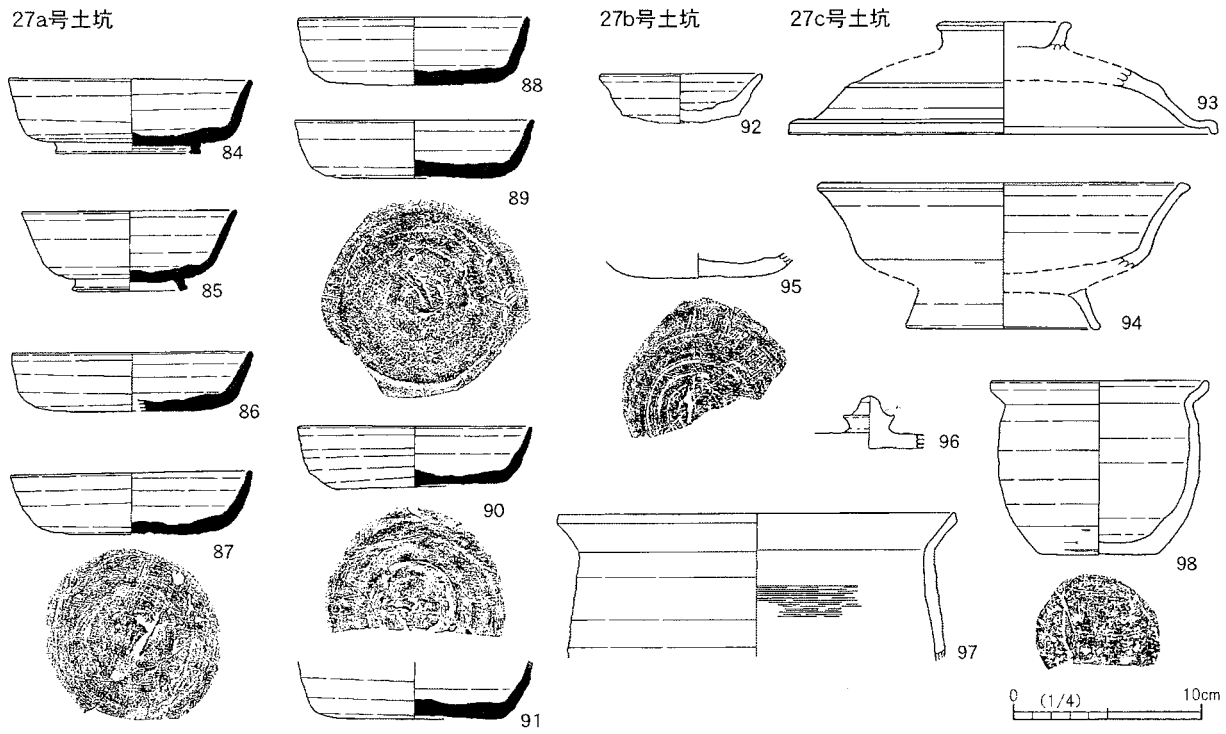


9号土師器焼成坑
　焼土　7.5YR5/6明褐色土　被熱により硬化・赤色化したⅤ層（地山層）。
2号掘立柱建物-Ｐ1
　1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。
　2層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5mm黄褐色土粒少。しまり良、粘性やや強。
　3層　10YR4/3にぶい黄褐色土を主体とし、黒褐色土粒含む。しまり良、粘性有。



2号掘立柱建物-Ｐ10
　1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm黄褐色土粒少。しまり良く、粘性有。
　2層　10YR3/2黒褐色土中に、φ2～3mm炭化物粒少、φ3mm～1cm黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。
27ａ号土坑
　1層　10YR1.7/1黒色土　φ3mm～1cm炭化物粒極多、φ3mm～2cm焼土粒多、φ3mmの黄褐色土粒中。しまり良、粘性あり。
　2層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～1cm炭化物中、φ2～3mm黄褐色土粒中量含む。しまりややゆるく、粘性あり。
　3層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～1cm炭化物少。φ3mm～3cmの黄褐色土粒・ブロック多。しまりややゆるく、粘性あり。
　4層　10YR3/3暗褐色土　φ2～3mmの炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒多、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまりややゆるく、粘性あり。
　5層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒中、φ2～3mmの黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性あり。
　6層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒含み、φ1～3cmの黄褐色土ブロック多。しまり良く、粘性あり。
27ｂ号土坑
　1層　10YR1.7/1黒色土　φ5mm～1cm炭化物粒極多、φ5mm～1cm焼土粒極多、φ5mm～2cm黄灰色土粒多。しまり良、粘性ふつう。
　2層　2.5Y6/3にぶい黄色粘土　φ3～5mm炭化物粒含む。しまり良、粘性強。
27ｃ号土坑
　1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒中、φ2mm～1cm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。
　2層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒少、φ3mm～1cm黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性あり。
　3層　10YR4/3にぶい黄褐色土中にφ3～5mm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒中。しまり良、粘性あり。

第26図　9号土師器焼成坑，27(ａ～ｃ)号土坑



第27図　27(ａ～ｃ)号土坑　出土遺物

後関係は不明である。

遺物は土器類の小片が埋土中から分散して出土。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ1箱分弱(1.8kg)あり，このうち，図化に耐えうる土師器無台杯C類(第27図92，図版24)(重量比2％弱)を掲載した。外底面に炭化物の付着がある。また，焼成粘土塊14点(計127.5g)が出土した。

27c号土坑　Fc2-2グリッドに位置する。長軸73cm，短軸70cmの円形で，掘り込みは30cmある。底面は比較的平らで，壁が明瞭に立ち上がる箱形である。27a・b号土坑と重複し，これらよりも後出である。

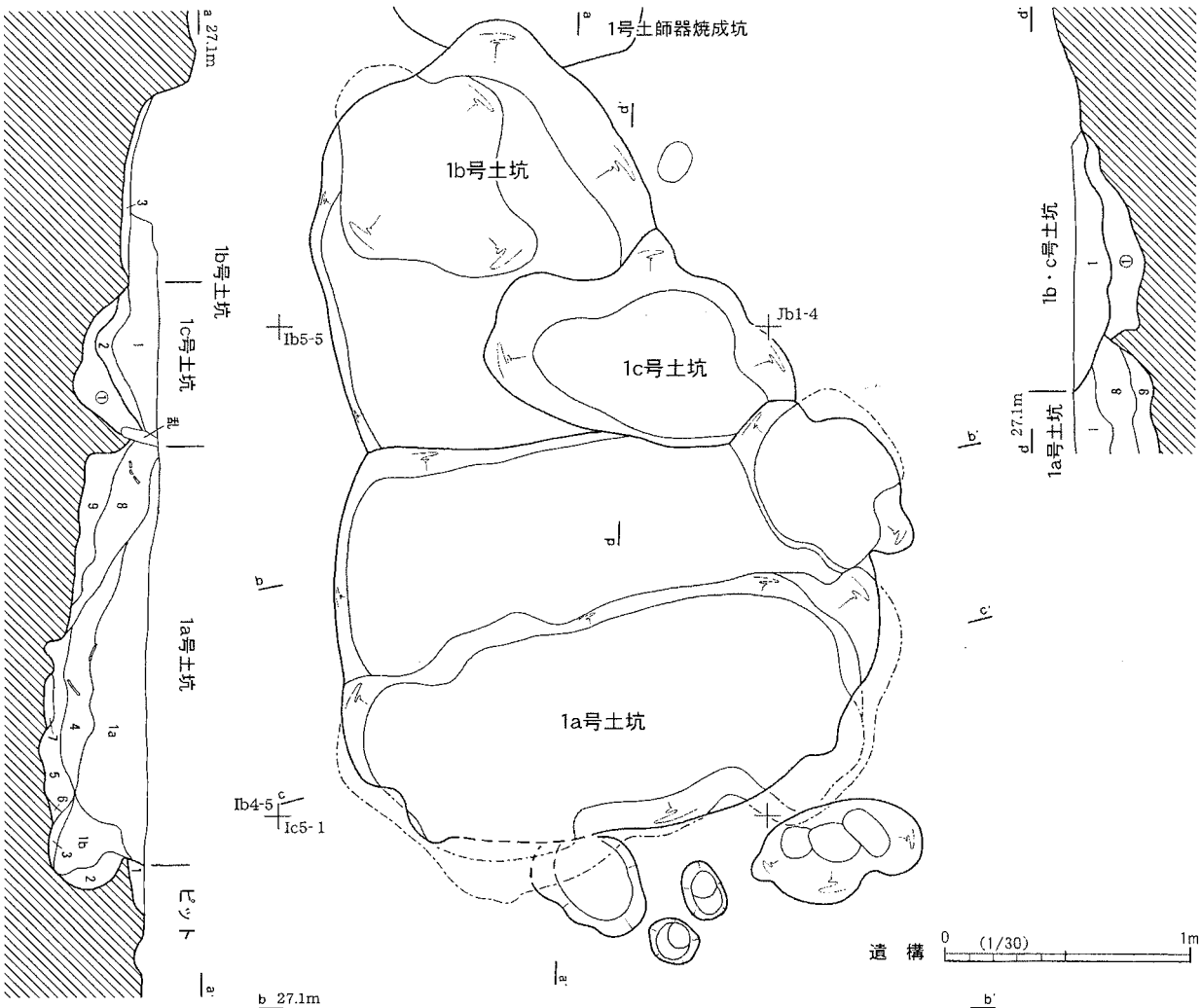
遺物は，土器類の小片が埋土中から分散して出土した。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ２箱分弱(2.7kg)あり，このうち，図化に耐えうる土師器６個体(重量比3割弱) を掲載した(第27図93～98，図版５・24・25) 。稜椀・蓋(93・94)，無台杯A類(95)，蓋の摘み(96)，長胴甕(97) ，小型甕AⅢ類(98)がある。93・94はともに胎土が精良で整形が丁寧。法量からみても，セットとして製作された稜椀・蓋であろう。器面の状態が良好で，未使用の可能性が高い。なお94は，破片が27a・c号土坑，31号土坑からも分散して出土している。後出の27c号土坑に帰属すると考えるべきではないかもしれない。95は黒斑が残り，土師器と判断したが，胎土は須恵器と共通しており，酸化炎の須恵器の可能性も否定しきれない。外底面に「×」のヘラ描きがある。96は宝珠型の蓋の摘み。短頸壺蓋などの摘みであろうか。胎土が他の須恵器とは異なる点，黒斑が残る点から，土師器として製作されたと判断した。98も内外面に黒斑がある。また，焼成粘土塊２点(計11.0g)が出土。

この他，27a～c号土坑のいずれに帰属するか不明な焼成粘土塊が12点(計83.6g)出土している。うち，１点(第77図754)を掲載した。

5　土　　坑

1(a～c)号土坑（第28・29図，図版13)

調査区東半，Ib5-4・5-5，Ic5-1，Jb1-5グリッドに位置する。焼土粒などの分布により，Ⅱa層の掘削中から存在は確認出来ていたが，明確にプランを検出出来たのは地山のⅤ層上面である。当初，１(a～c)号土坑を一つの遺



1a号土坑

1層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒微、φ3～5mm焼土粒少、φ2～3mm黄褐色土粒微。しまりよく、粘性少しあり。本層(a層）中に、やや大粒の混入物が集中する部分(b層)あり。

2層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm～2cm黄褐色ブロック多。φ3mm炭化物粒少。しまりややゆるく、粘性あり。

3層　10YR4/3にぶい黄褐色土　黒褐色土中に黄褐色土ブロック多。

4層　10YR3/3暗褐色土　φ1cm弱炭化物粒少、φ1～3cmのにぶい黄橙色土ブロック多。しまりややゆるく、粘性少しあり。

5層　10YR3/2黒褐色土　φ1～2cm炭化物少、φ8mm焼土粒微、φ2mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。

6層　10YR4/3にぶい黄褐色土　しみ状に暗褐色土を含む。しまりゆるく、粘性あり。

7層　10YR5/4にぶい黄褐色土　黄灰色土地山の上に色調の異なる地山ブロックを含む。しまり良。

8層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒中、φ5mm焼土粒多、φ5mm黄褐色土少。しまりよく、粘性少しあり。

9層　10YR3/1黒褐色土　φ2～8mm黄褐色土粒多。しまりややゆるい。

ピット

1層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm黄褐色土粒少。しまり良く、粘性弱。

1b号土坑

1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒中、φ5mm焼土粒微、φ5mm～1cm黄褐色土粒中。しまり良。

2層　10YR4/3にぶい黄褐色土　黒褐色土中にφ1～3cm黄褐色土ブロック多。しまりふつう。

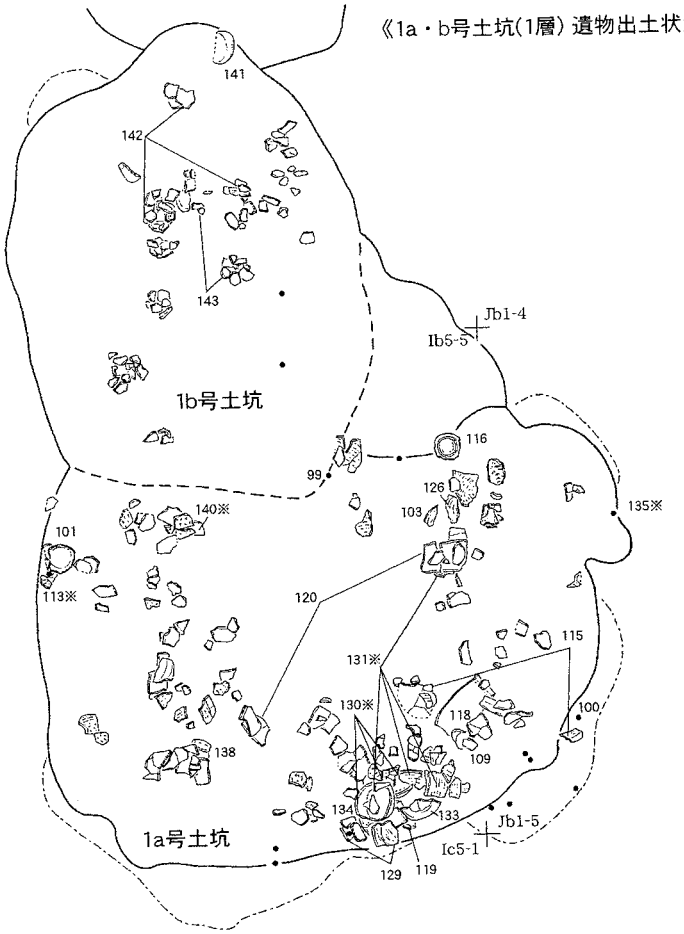
3層　10YR4/2灰黄褐色土　φ1～2cm黄褐色土粒多、φ2～3mmの砂礫多。

1c号土坑

①層　10YR2/3黒褐色土　φ3mm炭化物粒少、φ3mm焼土粒微、φ3～5mm黄褐色土粒中。しまり良。

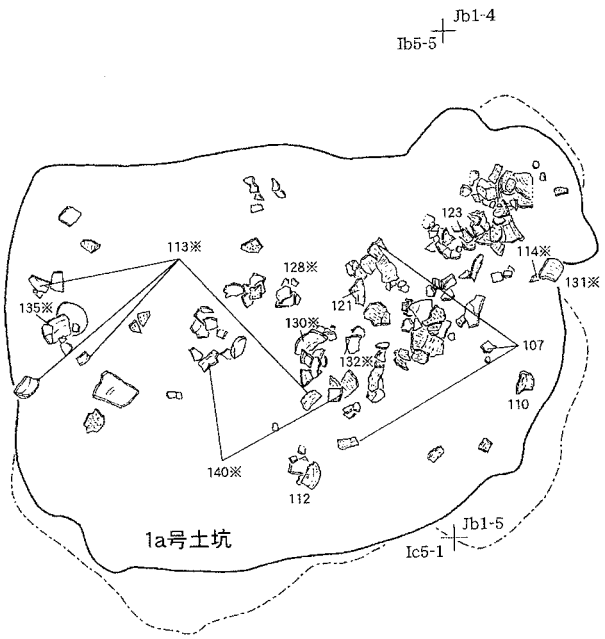
第28図　1(a～c)号土坑(1)

《1a・b号土坑(1層) 遺物出土状況》

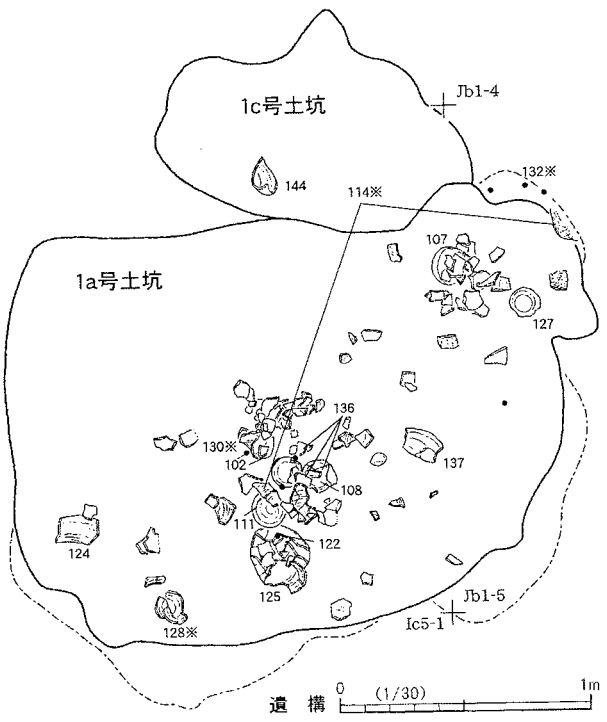


※別層と接合する個体は「※」印を付した。

《1a号土坑(4層) 遺物出土状況》



《1a号土坑(5～9層)・1c号土坑 遺物出土状況》



第29図　1(a～c)号土坑 (2)

構と認識して調査していたが，掘削途中で複数遺構の重複と判明，別遺構と判断して分離した。なお，1(a～c)号土坑の東側と西側には，斜面を切りだしたことにより生じた段がある。表土直下が段の検出面であるため，この段の形成時期は明らかではないが，1(a～c)号土坑周辺に平坦面を意図的に作出したようにも見られる。

1a号土坑　Ib5-5・Ic5-1・Jb1-5グリッドに位置する。長軸234cm，短軸162cmの不整形である。掘り込みは44cmで，底面は中央に段差があり，南北に分れる。両底とも細かい凹凸があり，底面から水が浸み出し続けた。壁は北半が明瞭に立ち上がる箱形だが，南半と北東辺はオーバーハングしており，下部が外側に膨らむ袋状を呈する。1b・c号土坑と重複し，1c号土坑が先行，1b号土坑が後出する。また，当初は一部の壁面が焼土化していると認識していたが，調査の結果，水分中の鉄分沈着による赤化と判明した。

埋土は，多寡はあるものの，いずれも炭化物粒や焼土粒・黄褐色土粒を目立って含む。特に4層は，直径1～3cmの粘土ブロックを多く含んでおり，この中に，焼成の極めて甘い土師器片と思われるものが混じっていた。このため，土師器焼成坑に関係する廃棄土壌の可能性が考えられる。なお，土坑下位に堆積した5～7層は，調査中水の浸み出しが著しく，土質の観察が困難であった。

埋土中からは，多量の遺物が出土しており，出土状況を図示した(第29図)。上層部から底面にいたるまで，概ねまとまった形で土師器・須恵器が出土しており，遺物を廃棄したものと考えられる。

出土遺物は浅型コンテナ17箱分弱(28.1kg)と多量である。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量，須恵器甕類を微量含む。このうち，42個体(重量比4割強)（第30～31図99～140，図版5・25・26）を図化・掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯AⅠ類蓋(99)・AⅡ類(100・101)・B類蓋(103)・BⅠ2類(104)・C1類(102)・　D類(106)，折縁杯(105)，無台杯AⅡ類(107～109)・BⅠ類(110)・BⅡ類(111・112)，がある。105はやや足高高台気味，106も足高の有台杯台部。100・101はともに，薄手。高火度で著しく硬質に焼きあがり，未使用のようである。100は焼成時の歪みがあり，111も焼成時に底面に亀裂が入っている。105は内面と高台端部が磨耗，使用痕であろう。なお，107・112は焼成良好で須恵器としたが，酸化炎焼成である。須恵器貯蔵具には，短頸壺蓋(113)，横瓶(114・115)，甕(116)がある。113は天井部内面に焼成時の亀裂が入った不良品で，ロクロ水挽き痕を明瞭に残す。115は，円盤閉塞された横瓶で，無台杯と窯滓が融着した不良品。116も外面に小片ながら窯滓の融着がある。

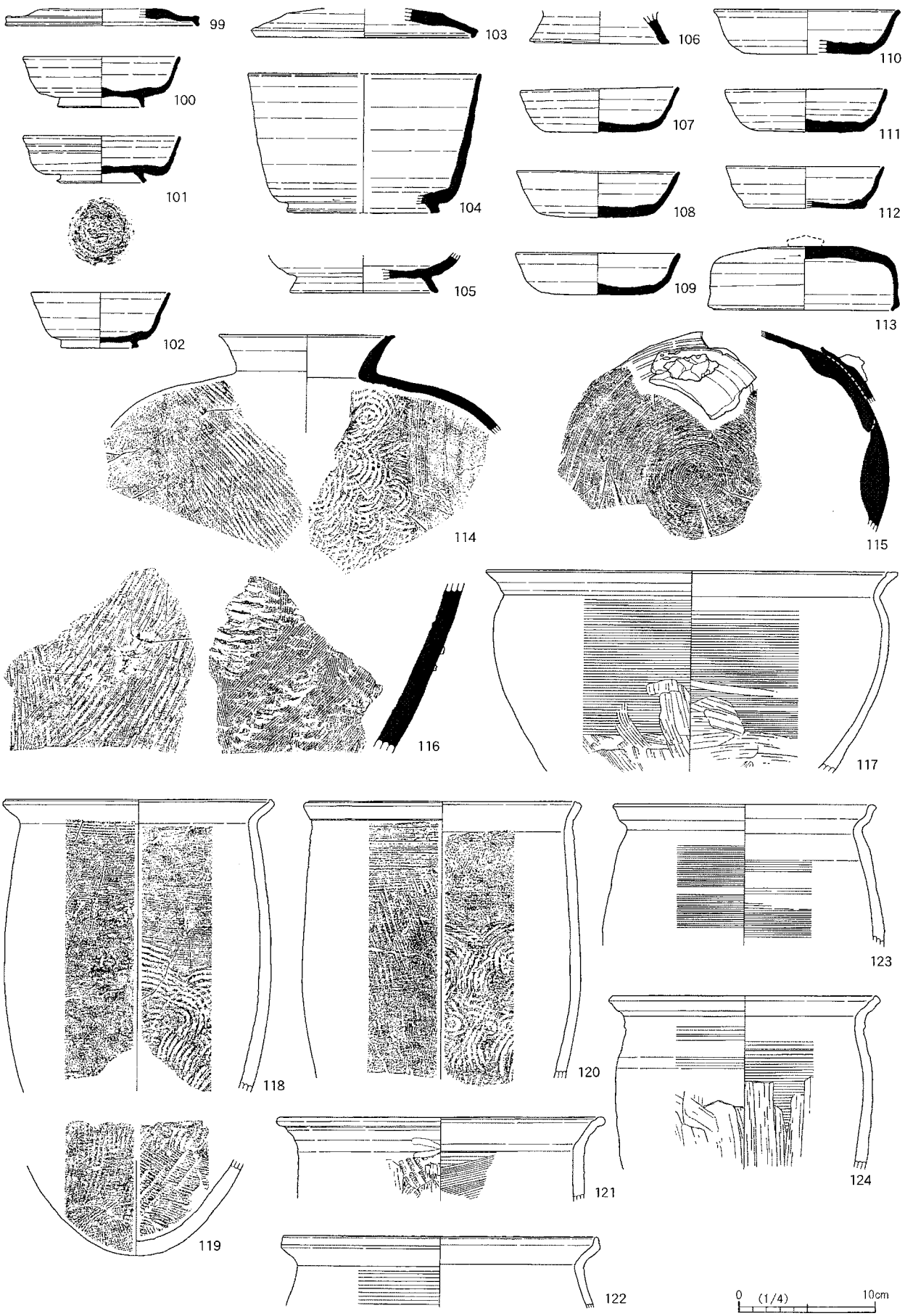
一方，土師器は，比較的遺存状況の良好な甕がまとまって出土しており，鉢(117)，長胴甕(118～124)，小型甕（125～137)を図化した。117の鉢は，口縁端部が内側に向かって引き出される特徴的な形状である。須恵器の鉢と共通する独特の形態であることから，酸化炎焼成してしまった須恵器鉢の可能性もある。124は体部上位に段状の屈曲を持つ点が1号井戸出土の633と共通し，長胴甕と判断した。小型甕はAⅠ類(125)・Ⅱ類(126～128)，BⅠ類(129・130・134)・Ⅱ類(131～133・135)・Ⅲ類(136)がある。129は頸部の屈曲が弱く，頸部までハケメが施されるなど，他とは異なる点が多い。これら小型甕はいずれも器面の遺存状態が良好で，未使用品が多いと考えられる。125は外面に黒斑が残る。ただし，136は外面全体にスス，一部に吹きこぼれとみられる炭化物が付着しており，使用が認められる。

上記甕類の口縁形態は，端部摘み上げを主体とするが，123・130・131は，端部というよりは，口縁中位から口縁全体を上に引き上げており，内折，受け口状を呈するのが特徴的である。

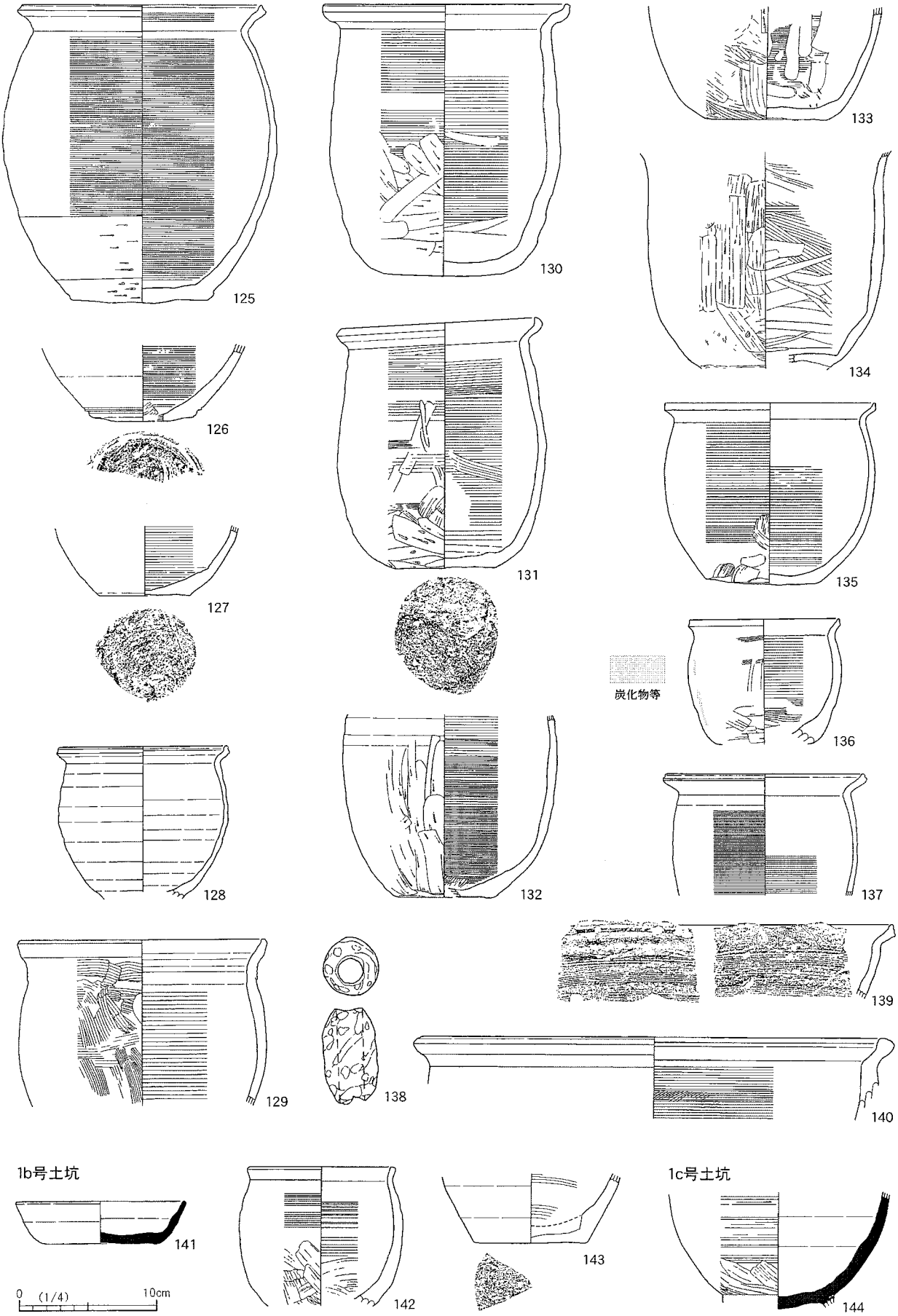
この他，土錘BⅡ類(138)，鍋(139・140）が出土。138は使用によるものであろうか，孔縁の磨耗が著しい。また，焼成粘土塊18点(計98.7g)が出土しており，うち1点(第76図729)を掲載した。

なお，1b層から炭化材片が出土したため，炭素年代測定分析を実施した(分析試料No.10・11)。この結果，2点とも7世紀後半～8世紀中葉の年代結果が得られた。

1b号土坑　Ib5-4・5-5グリッドに位置する。長軸193cm，短軸140cmの楕円形。掘り込み26cmで，底面は北



第30図　１ａ号土坑　出土遺物(1)



第31図　1(a～c)号土坑　出土遺物(2)

西部がややくぼむが，全体的にほぼ平ら。壁は緩やかに立ち上がる椀形である。1a・c号土坑と重複し，これらが先行する。また，2号土師器焼成坑とも重複するが，埋土が似通っており，先後関係は識別できなかった。

遺物は，1a号土坑に比べ，細かい破片が分散する状態で出土(第29図)。浅型コンテナ2箱分弱(3.4kg)ある。土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。このうち，3個体(重量比で1割5分)(第31図141～143，図版26)を図化した。141は須恵器無台杯BⅡ類，底部にヘラ抜き痕が残る。2号土師器焼成坑と重複する位置での出土であり，同遺構に帰属する可能性もある。

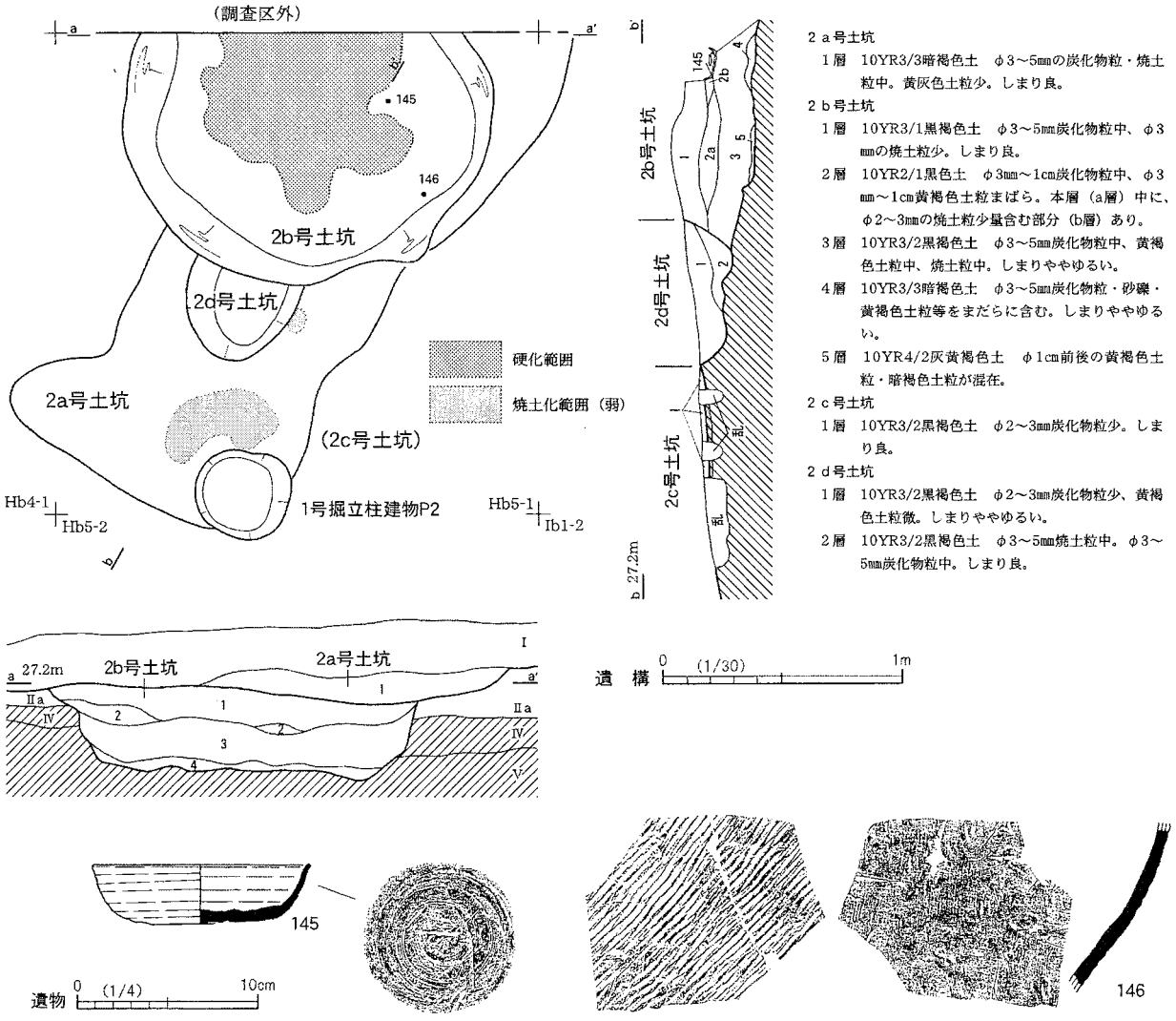
一方，土師器は小型甕AⅢ類(143)・BⅢ類(142)が出土。142は体部下半の器面剥離が顕著である。また，焼成粘土塊7点(計35.3g)が出土した。

1c号土坑　Ib5-4・5-5，Jb1-5グリッドに位置する。長軸126cm，短軸86cmの不整形である。上部に1b号土坑が重複しており，残存する埋土の厚さは16cm。底面はほぼ平らで，壁が緩やかに立ち上がる椀形。1a・b号土坑と重複し，これらに先行する。

遺物は少なく，主に土師器甕類の破片(555g)が出土した。図化に耐えうる須恵器長頸瓶(第31図144，図版26)を掲載した。本来，高台が付くが，現在は剥がれている。

2(a～d)号土坑（第32図，図版14)

調査区中央，Hb4-1・5-1・5-2，Ib1-1グリッドに位置し，1号掘立柱建物のプラン内にあたる。Ⅱa層掘削中か



第32図　2(a～d)号土坑と出土遺物

ら，焼土粒などの分布により存在は確認出来ていたが，プラン検出は地山のⅤ層上面である。当初，２(a～d)号土坑を一つの遺構と認識して掘削していたが，調査途中で複数遺構の重複と判明し，別遺構とした。

２a号土坑　Hb4-1・5-1・5-2，Ib1-1グリッドに位置する。掘り込みは14cmと浅く，Ⅱa層中までしか達していない。形状はやや不正確だが，おおよそ長軸242cm，短軸95cmの不整形で，北部の調査区外まで延びている。底面は比較的平らで，立ち上がりは不明。1号掘立柱建物-P２，２b・c・d号土坑と重複する。土層から２b号土坑より後出と確認できるが，その他との先後関係は不明である。

遺物は少なく，土師器甕類と須恵器杯・甕類数点(計280ｇ)が出土した。図化に耐えうるものはなく，未掲載である。遺構同士の重複関係と出土土器片からみて，本遺構は古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊５点(計74.6g)が出土しており，このうち２点(第76・77図718・761)を掲載した。

２b号土坑　Hb5-1グリッドに位置する。長軸146cm。確認部分で短軸110cmの半円形で，北部の調査区外に延びている。掘り込みは35cm。底面はほぼ平らで，中央が硬化しているが焼土化はしていない。壁は明瞭に立ち上がる箱形である。２a・d号土坑と重複し，本遺構が先行する。

遺物は総量590ｇと少なく，土師器甕類が主体，須恵器杯類も少量出土した。うち，図化に耐えうる須恵器２個体(重量比５割)(第32図145・146，図版26)を掲載。145は無台杯AⅡ類。焼成時に底部に亀裂の入った不良品で，器面にロクロ水挽き痕が良好に残り，未使用とみている。146は甕の体部破片。また，焼成粘土塊3点(計34.6g)が出土。

２c号土坑　Hb5-1グリッドに位置する。掘り込み３cmと浅く，形状は不明確。長軸44cm，短軸24cmの範囲が焼土化しており，土師器焼成坑の可能性もあるが，土師器焼成坑としては焼土化が弱いため，土坑として扱った。２a号土坑と重複するが，先後関係は不明である。

出土遺物は，土師器甕類の小片(18ｇ)のみで，図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片から本遺構の時期も古代としておきたい。

２d号土坑　Hb5-1グリッドに位置する。長軸62cm。短軸46mの楕円形で，掘り込みは18cm。底面は凹凸があり，壁は緩やかに立ち上がる。２a・b号土坑と重複し，２b号土坑が先行，２a号土坑との先後関係は不明。

出土遺物はなく，重複関係からも所属時期は判断できないが，本遺跡の主体を占める古代の遺構と推測される。

３(a・c)号土坑　３号土師器焼成坑の項に記載。

４(a～c)号土坑（第33図，図版14）

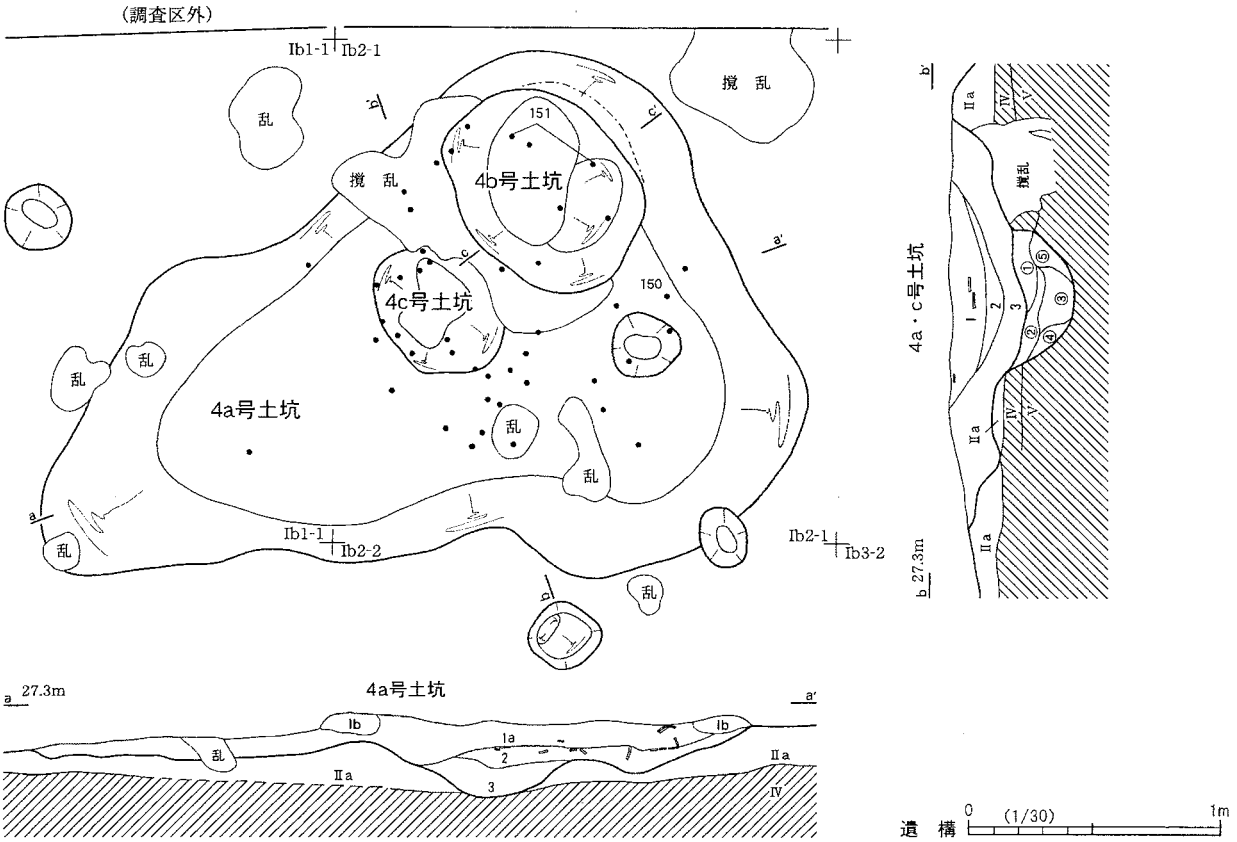
調査区中央，Ib1-1・1-2・2-1・2-2グリッドに位置する。焼土粒などの分布により，Ⅱa層中で４a号土坑のプランを検出。当初は，４(a～c)号土坑を一つの遺構と認識して掘削していたが，調査途中で複数遺構の重複と判明，別遺構とした。４b・c号土坑のプラン検出は地山のⅤ層上面である

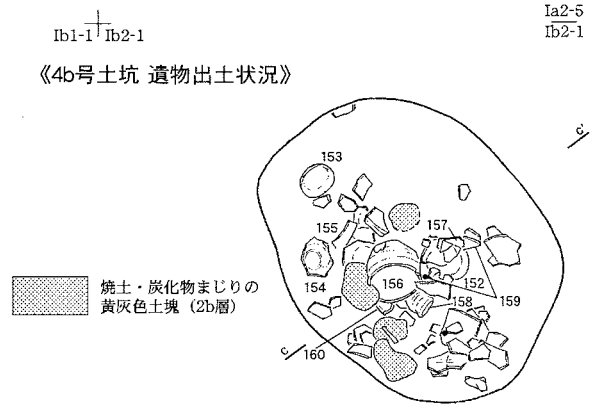
４a号土坑　Ib1-1・1-2・2-1・2-2グリッドに位置する。長軸296cm，短軸202cmの不整形で，掘り込みは30cmである。底には凹凸があり，ほぼⅡa層とⅣ層の境目にあたる。１号掘立柱建物，４b・c号土坑と重複し，４c号土坑が先行，その他との先後関係は不明である。

遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。浅型コンテナ4箱分弱(7.6kg)出土したが，埋土中に小破片状態で分散して出土しており，復元率は低い。５個体(重量比1割弱)（第34図147～151，図版26・27)を図化・掲載した。須恵器は有台杯D類(147)，無台杯AⅡ類(148)・B類(149)がある。なお，149はかなり厚手で，他の器種の可能性もある。土師器は小型甕Ⅱ類(150)，長胴甕(151)がある。150は口縁内面にアク，外面にススの付着があり，使用痕跡が明瞭である。また，焼成粘土塊が96点(計555.4g)と多量に出土，遺構出土分の1割を占める。うち，土師器焼成粘土塊２点（第77図747・757)を掲載。また，須恵器製作屑も１点(第77図766)も出土した。

4b号土坑　Ib2-1グリッドに位置する。長軸87cm，短軸67cmの楕円形で，掘り込み23cm。底がほぼ平らで，壁が明瞭に立ち上がる箱形。4a号土坑と重複するが，先後関係は不明。

焼土・炭化物粒混じり黄灰色土塊とともに，まとめて廃棄されたような状態で，多量の土器が出土し，出土状況を図示した(第33図)。これらの出土遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ２箱分





4ａ号土坑

１層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm黄褐色土・焼土粒多。φ3～5mm炭化物粒中。しまり良。本層（a層）中に、10YR3/2黄灰色土ブロック（b層）含む。

２層　10YR2/1黒色土　φ3～5mm炭化物粒多、焼土粒中。土器多。

３層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒多、φ1cm硬化黄褐色土粒少。

４ｃ号土坑

①層　10YR3/3暗褐色土　φ3mm炭化物粒少。φ5mm焼土粒少、φ2～5mm黄褐色土粒中、しまり良。

②層　7.5Y3/3暗褐色土　φ5mm～1cm焼土粒多、φ5mm～1cm明黄褐色土多。φ5mm炭化物粒少、しまり良。部分的に焼土・明黄褐色土の多寡あり。

③層　10YR6/4にぶい黄橙色　φ5mmのにぶい黄褐色土粒極多、焼土粒中。しまりややゆるい。

④層　10YR2/2黒褐色土　φ5mm～1cm黄橙色土粒多、φ5mm焼土粒中。しまりややゆるい。

⑤層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5mm黄褐色土粒多、φ3mm炭化物粒・焼土粒多。しまりややゆるい。

４ｂ号土坑

１層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm炭化物粒多、φ2mm焼土粒中、φ3mm～2cm黄灰色土粒・黄褐色土粒多。しまり良。

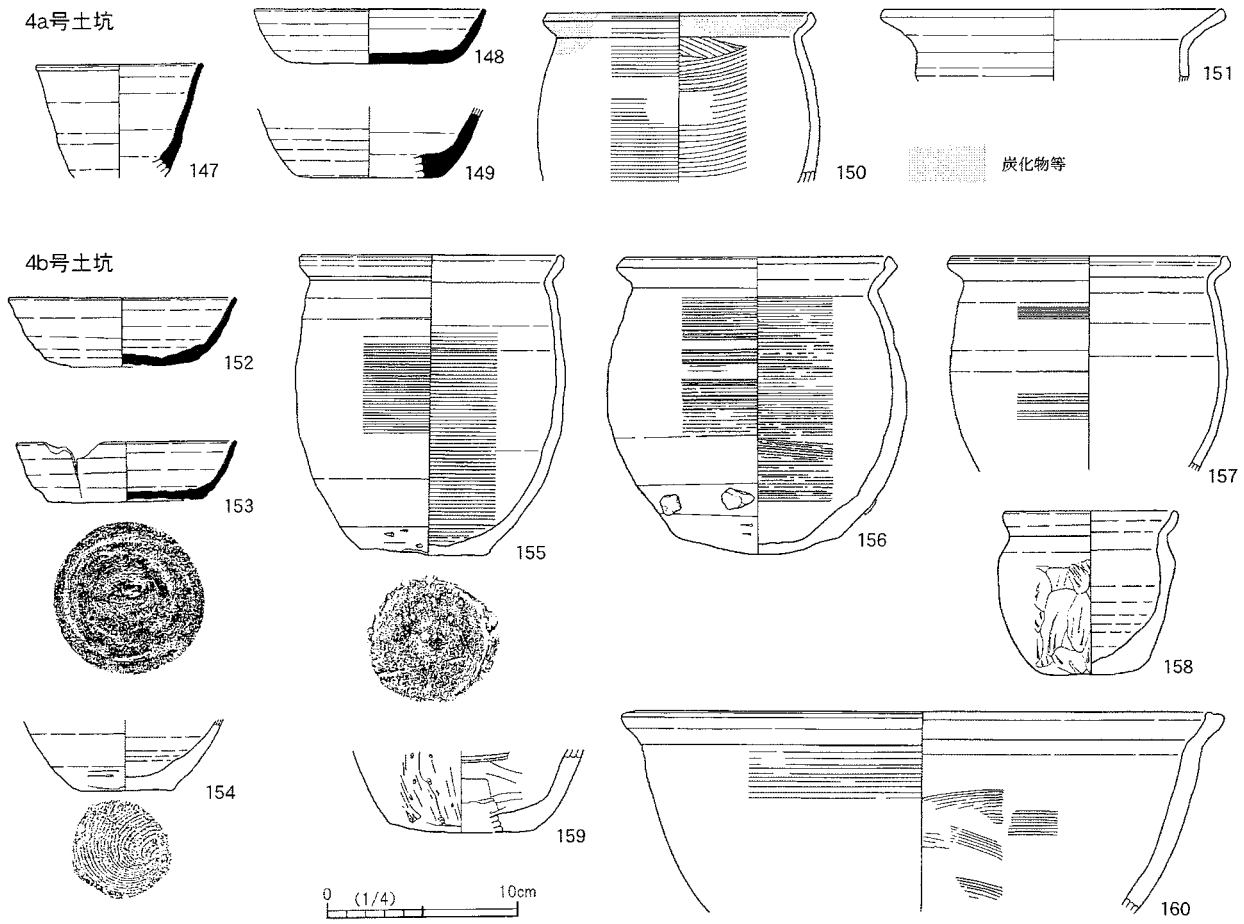
２層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒・黄褐色土粒少。しまりゆるい。本層（a層）中に、斑状に、φ3～5cm黄褐色土塊・黄灰色土塊、φ3～5mm炭化物粒、φ5mm焼土粒等を含む部分（b層）あり。

３層　7.5YR3/2黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒多、φ3mm焼土粒中、φ3mm黄褐色土粒少。しまり良。

４層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒中、φ2mm黄褐色土粒多。しまり1～3層より良く、粘性少しあり。

遺物出土状況　0　(1/20)　1m

第33図　4(ａ～ｃ)号土坑



第34図　4(a・c)号土坑　出土遺物

強(4.1kg)あり，うち９個体(重量比６割強)（第34図152～160，図版５・27)を図化した。

須恵器は無台杯AⅡ類(152)・BⅡ類(153)で，器面の状態から，いずれも未使用と推測される。なお，153は焼成時に亀裂の入った不良品。土師器は小型甕AⅡ類(155・156)・AⅢ類(154)・BⅡ類(159)・BⅢ類(158)・Ⅱ類(157)，鍋(160)がある。156は丸底気味だが，底面が劣化しており，底面縁辺部が剥離した可能性もある。体部下半に，粘土粒が付着。焼成時のカマセ材か。また，ところどころに，焼成時の焼き歪みとみられる亀裂が入っている。157は外面に黒斑が残る。158は厚手の体部を削り調整する。160の鍋も，外面に黒斑が残るが，劣化のため下半部の調整は確認できない。この他，焼成粘土塊21点(計75.4g)が出土した。

４c号土坑　Ib2-1グリッドに位置する。長軸58cm，短軸44cmの楕円形で，４a号土坑の底からの掘り込みは20cm。壁が緩やかに立ち上がる椀形である。４a号土坑と重複し，これに先行する。

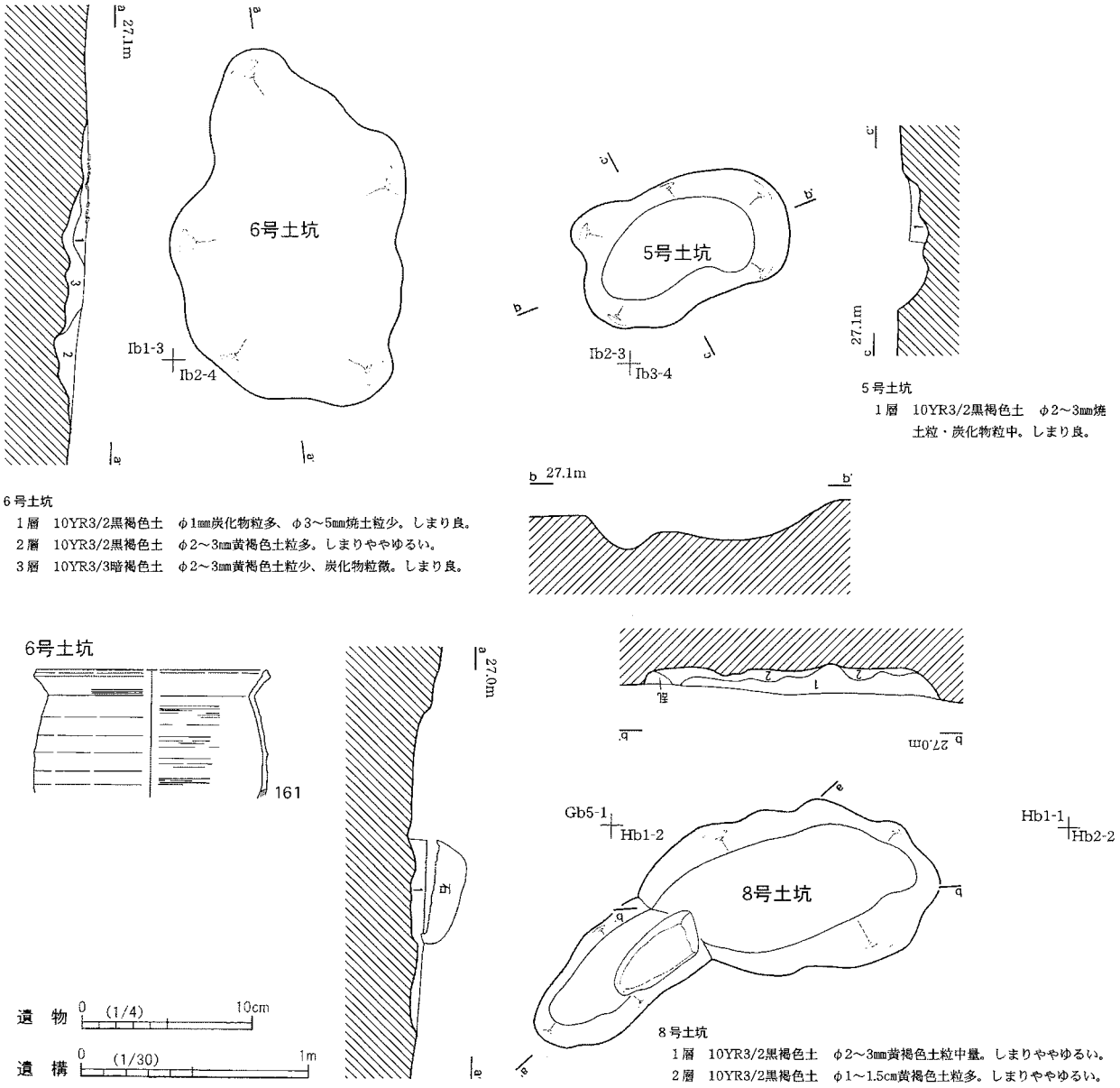
黄褐色土粒・焼土粒を多量に含む層が互層に堆積しており，人為的な埋め戻しと考えられる。

出土遺物は，土師器甕類の小片数点(計330ｇ)のみで，図化に耐えうるものはなく，未掲載である。出土土器片と重複関係からみて，古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊１点(0.8g)が出土した。

５・６号土坑（第35図，図版14・15）

調査区東半，Ib2-3・2-4・3-3グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出した。

５号土坑　Ib2-3・3-3グリッドに位置する。長軸96cm，短軸58cmの楕円形で，掘り込みは７cm。底面は凹凸がある。遺物は総量150gと少なく，土師器甕類小破片が出土した。出土土器片から，古代に位置付けた。



第35図　5・6・8号土坑と出土遺物

6号土坑　Ib2-3・2-4グリッドに位置する。長軸156cm，短軸103cmの不整形で，掘り込みは10cm。底面は凹凸がある。プラン確認面を中心として土師器甕類の小破片が出土したが，総量510ｇと少ない。図化に耐えうる土師器小型甕Ⅱ類1点(第35図161，図版27)のみを掲載した。

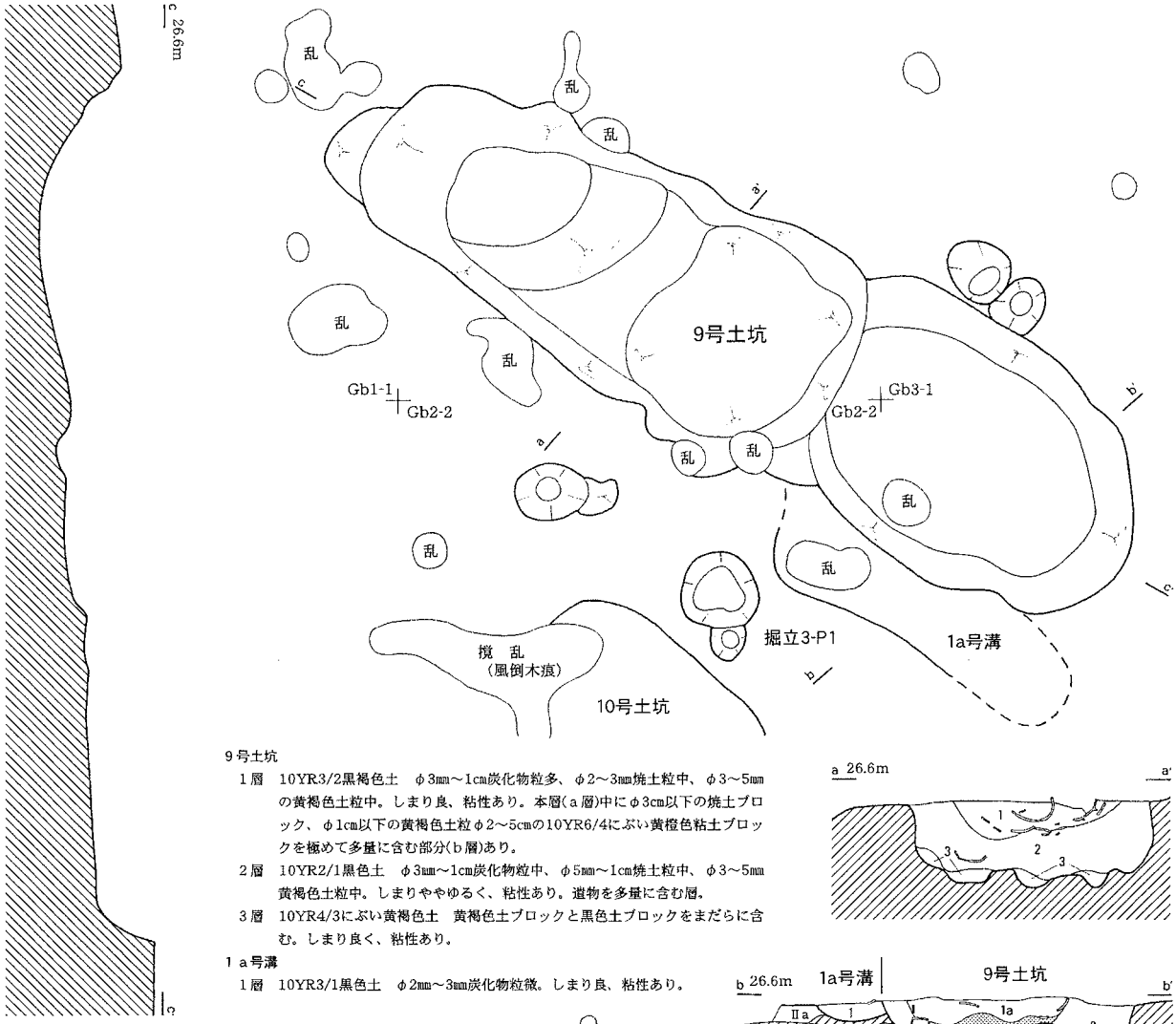
7(a・b)号土坑　6号土師器焼成坑の項に記載。

8号土坑（第35図，図版14）

他の遺構とはやや離れた調査区中央，Gb5-2・Hb1-2グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出した。長軸184cm，短軸77cmの不整形で，掘り込みは10cmと浅く，底面はほぼ平ら。埋土中から大型の礫が出土した。遺物は須恵器杯・甕各1点(20ｇ)と少ない。この出土土器片から，古代に位置付けた。

9号土坑（第36・37図，図版4・10・15）

調査区西半北端，Gb1-1・2-1・2-2・3-1・3-2グリッドに位置する。Ⅱa層の掘削中から多量の遺物が集中して



9号土坑

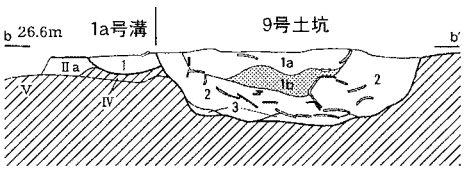
1層　10YR3/2黒褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒多、φ2～3mm焼土粒中、φ3～5mmの黄褐色土粒中。しまり良、粘性あり。本層(a層)中にφ3cm以下の焼土ブロック、φ1cm以下の黄褐色土粒φ2～5cmの10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロックを極めて多量に含む部分(b層)あり。

2層　10YR2/1黒色土　φ3mm～1cm炭化物粒中、φ5mm～1cm焼土粒中、φ3～5mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。遺物を多量に含む層。

3層　10YR4/3にぶい黄褐色土　黄褐色土ブロックと黒色土ブロックをまだらに含む。しまり良く、粘性あり。

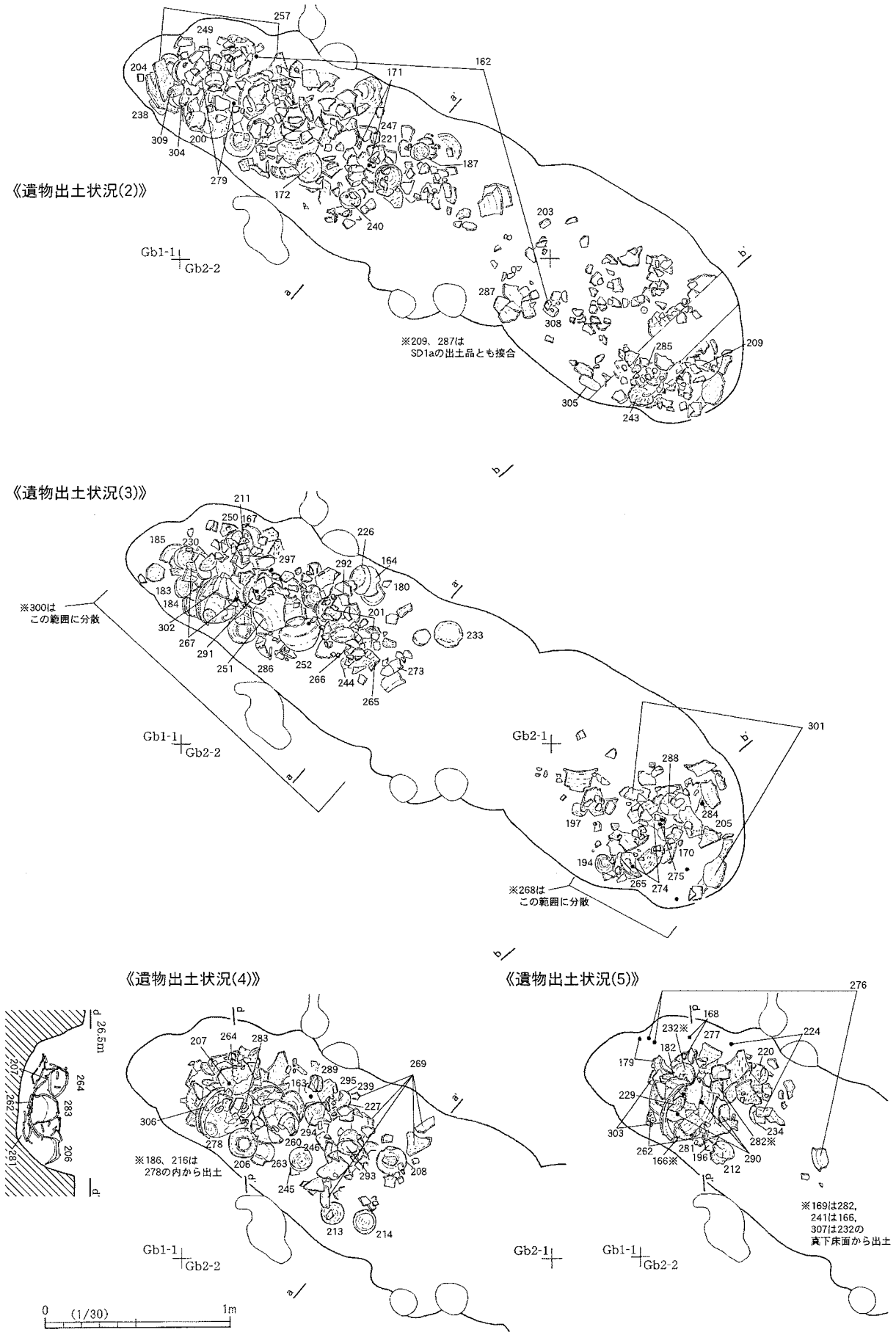
1a号溝

1層　10YR3/1黒色土　φ2mm～3mm炭化物粒微。しまり良、粘性あり。



《遺物出土状況(1)》

第36図　9号土坑(1)


《遺物出土状況(2)》
《遺物出土状況(3)》
《遺物出土状況(4)》
《遺物出土状況(5)》
※209、287は
SD1aの出土品とも接合
※300は
この範囲に分散
※268は
この範囲に分散
※186、216は
278の内から出土
※169は282,
241は165,
307は232の
真下床面から出土
Gb1-1
Gb2-2
Gb2-1
26.5m
0 (1/30) 1m

第37図　9号土坑(2)

おり，遺構の存在を把握していた。しかし，下部からの水の浸み出しが著しく，明確なプランを確認できずにいた。最終的なプラン確認は，Ⅱa層を掘り下げ後，Ⅳ・Ⅴ層の上面で行った。長軸372cm，短軸110cm，楕円形の土坑が連なったような形状で，底に段を持つ。一部に細かい凹凸はあるが，それぞれの底面は基本平らである。掘り込みは30cmあり，壁が明瞭に立ち上がる箱形。1a号溝と重複し，本遺構が後出する。

埋土は3層に分けられる。3層は遺物をほとんど含まず，局所的な堆積と見られるが，1・2層は共に焼土・炭化物・黄褐色粘土などを含んでおり，含有物に多寡はあるものの，自然埋没ではなく，人為的埋め立てと考えられる。また，本遺構からは多量の土器が出土しており，遺物出土状況を(1)～(5)(第36・37図)に示した。上部は破片が多いが，下部は1・2層とも器形を保った状態の遺物が主体である。特に北西半は，完形に近い状態の遺物が多く，土の入る隙間もないほどに密集して詰め込まれており，廃棄に意図性がうかがわれる。

本遺構は，今回調査した遺構の中で最も多く遺物を出土している。土師器甕類を主体とするが，須恵器杯・甕類も多量に出土した。浅型コンテナ33箱分強(65.5kg) もある上に，非常に復元率が高く，150個体(重量比7割)(第38～43図162～311，図版4・27～33) を図化・掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯AⅠ類蓋(162～168・170)・AⅡ類蓋(169・171～173)・B類蓋(175)・C類蓋(174・176・177)・D類蓋(178)，有台杯AⅠ類(179～183)・AⅡ類(184～193)・BⅠ1類(200)・BⅠ2類(201)・BⅠ類(202)・C1類(194～196)・C2類(197)・C類(198・199)・DⅠ1類(205)・DⅠ2類(206)・DⅡ2類(203)・D類(204)，折縁杯A類(207～209)，無台杯AⅠ類(210～212)・AⅡ類(213～222)・BⅠ類(223～235)・BⅡ類(236～244)，杯(245)，無台椀A2類(246)・B類(247)がある。有台杯蓋の摘みには，擬宝珠形とボタン形の双方があり，また，178はわずかだが稜を意識しているため，D類の蓋とした。

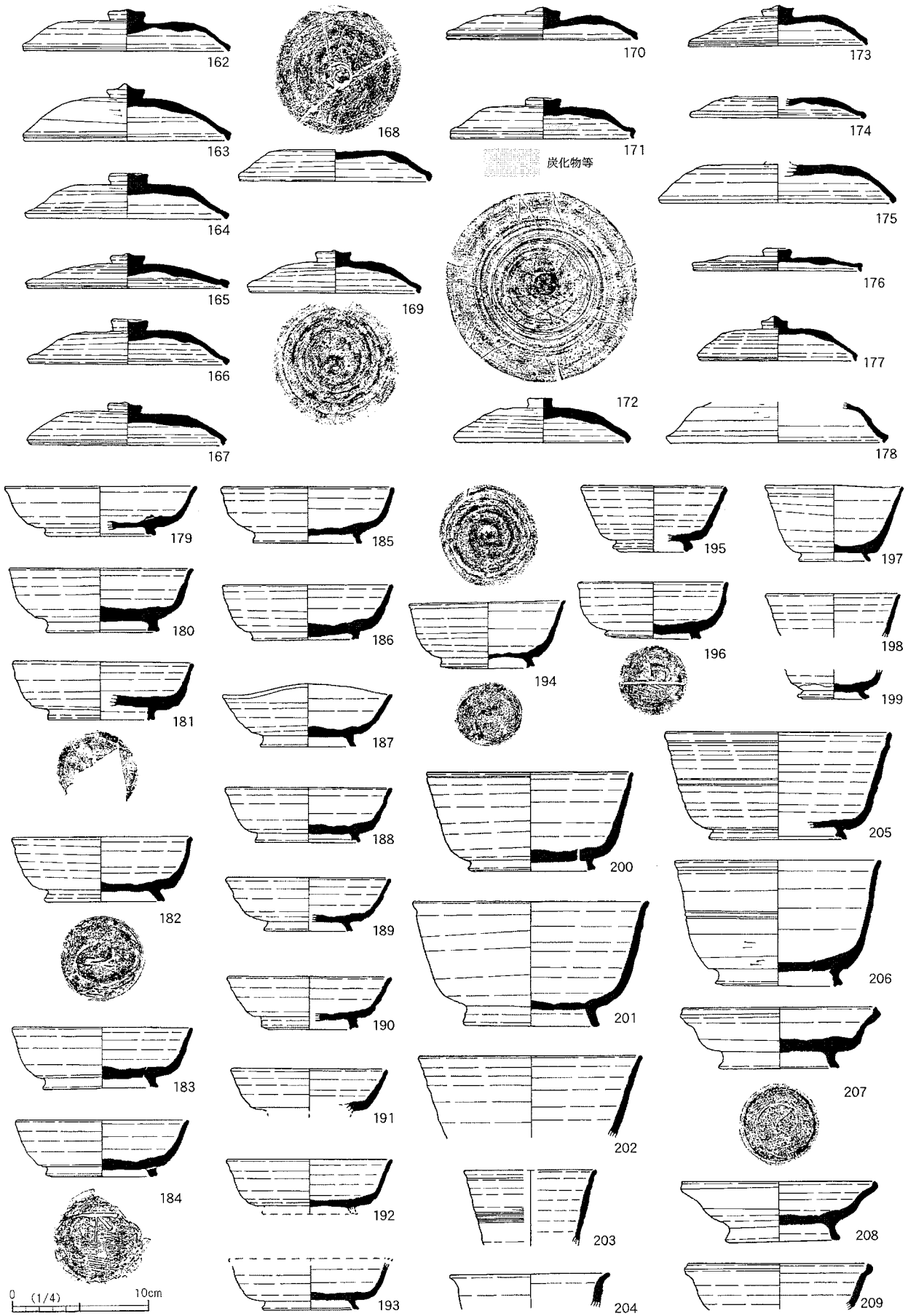
これらの食膳具には不良品が多く，173・181・186・187・197・215は焼き歪み，172・200・207・216・225・232・234・244には焼成時の亀裂が認められる。焼成は，良好・硬質堅緻なものがある一方で，瓦質・軟質な不良品も少なくない。焼成が甘く，器面が剥落する製品(214・217)も含まれる。179も焼成失敗品というべきであろう。内底面に重ね焼き時の別個体の高台片が融着している。焼台に転用されたようで，二次焼成を受けており，割れ口に自然釉が掛り，外面には窯滓が付着している。234も同様の焼台転用痕跡が残る。他にも，重ね焼き時の融着痕跡は，高台畳付に別個体の融着片が残る207や，融着してしまった高台を打ち剥がした痕跡の残る197などに見られる。なお，器面の状態から未使用と考えられる製品(181・182)も出土した。また，使用痕を残すものも出土しており，171・177はススおよびタール状の付着物が，184・186・188・196・245は高台や口縁・内底面などの磨耗が見られる。

この他，ヘラ描きのみられるものがあり，172の天井部と229の外底面には「×」，184は高台内に「下」，169の天井内面と194の内底面，196の高台内，220の外底面に，それぞれ「ー」が描かれている。また，須恵器食膳具は全般に，自然釉の掛り方をもとに重ね焼き方法を判断しているが，167は特に明瞭に，蓋内面に有台杯を重ねた痕が確認できる(図版4)。なお，181は胎土のX線回折分析を実施した(試料番号①)。

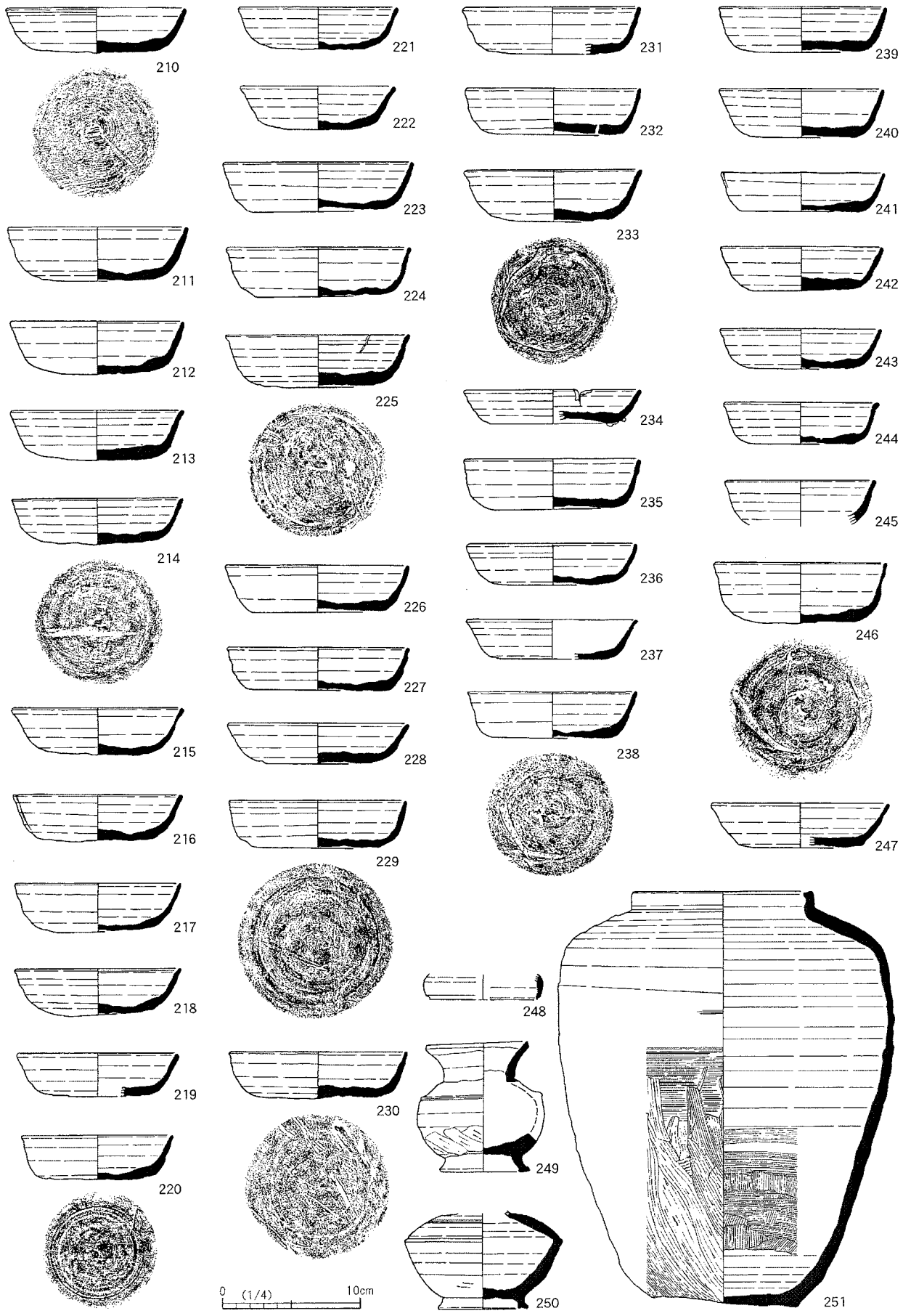
須恵器貯蔵具は，長胴短頸壺(251)，球胴短頸壺(252)，短頸壺蓋(253・254)，横瓶(255)，鉢Ⅰ類(256)，甕(257)がある。小型品には，瓶・壺類の蓋(248)，広口瓶(249)，長頸瓶(250) がある。ただし，248は焼台の可能性もある。248・253は外面，250は高台畳付きに窯滓が付着。252の高台欠損は，意図的取り外しの可能性がある。

この他，258は焼台と考えているが，小形瓶・壺類の蓋の可能性もある。また，259は壺類の底部に窯滓が融着しているが，通常の焼成状態において窯滓の付着する位置ではないことから，窯滓を焼台代わりに使用した可能性が考えられる。この他，須恵器有台杯・無台杯の焼台転用品も存在する(179・234)。

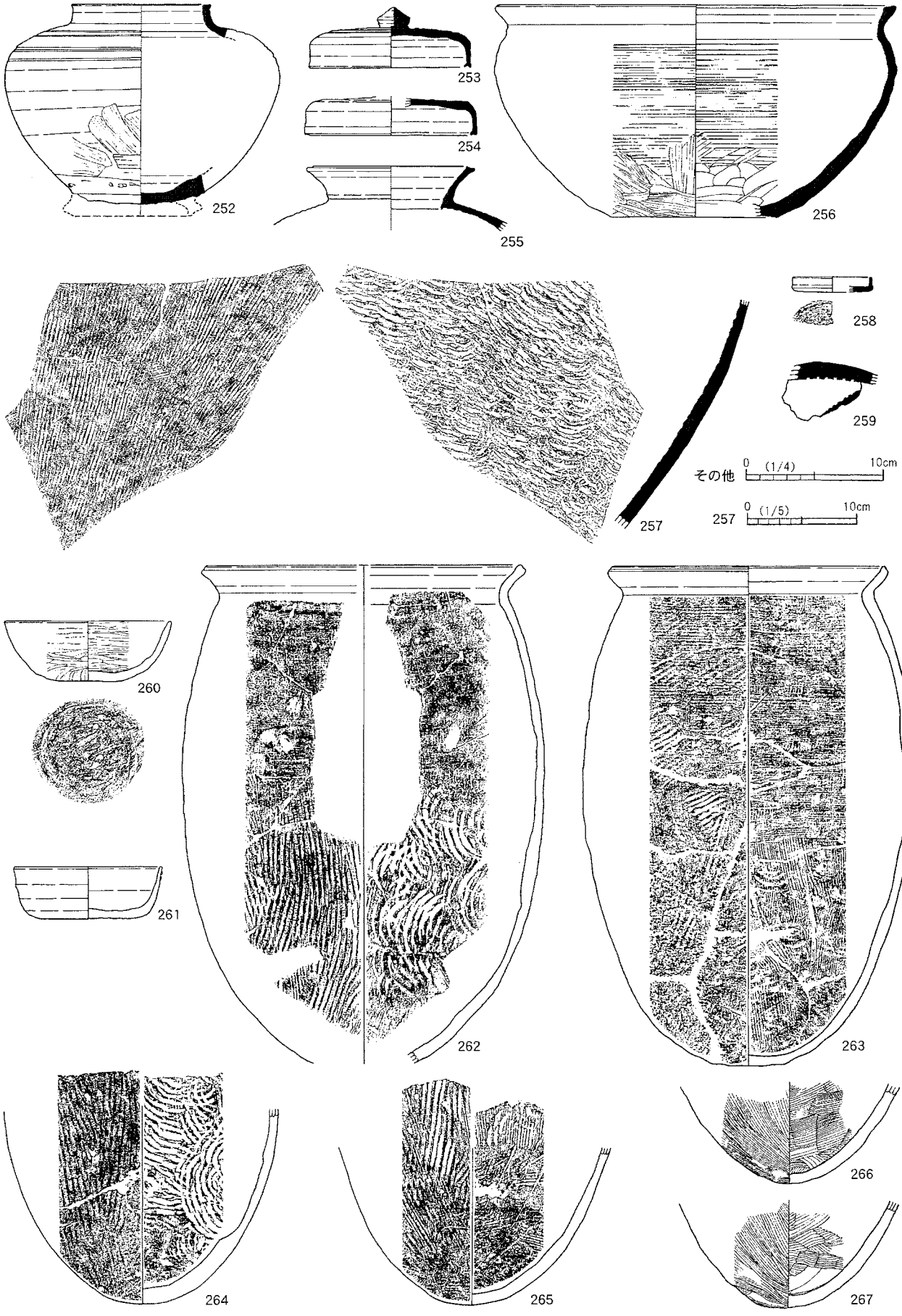
土師器は煮炊具を主体とするが，少数ながら食膳具も出土した。無台椀A1類(260)・A2類(261)があり，260は



第38図　9号土坑　出土遺物(1)



第39図　9号土坑　出土遺物(2)

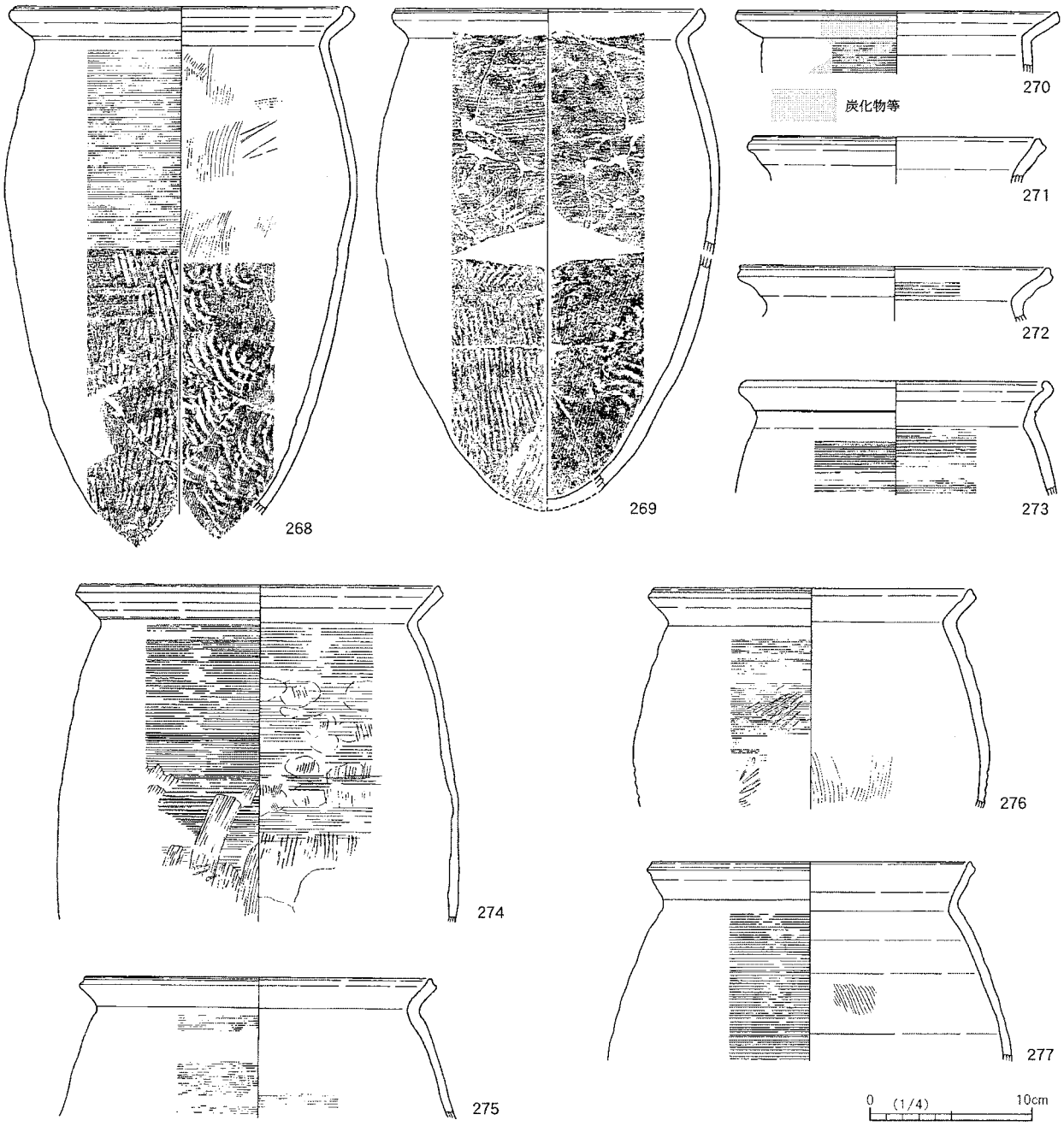


第40図　９号土坑　出土遺物(3)

内外面とも丁寧に磨かれた金属器模倣品である。

土師器煮炊具には長胴甕(262～271・274～276)，小型甕Ⅰ類(272・273・277)・Ⅱ類(A：278～289，B：292・293，不明296・297)・Ⅲ類(A:290・291，B：294・295，不明298)，鍋(小:299・300，大：301～303)，甕・鍋類把手(311)がある。小型甕はⅡ類が主体。底部の切り離し痕は，ナデ調整もしくは器面劣化により観察できないものが多いが，確認できたものはいずれもヘラ切りであった。なお，272・273・277は，口縁部形態・器厚・頸部の屈曲から小型甕と判断したが，いずれもかなり大型であり，長胴甕の可能性も捨てきれない。

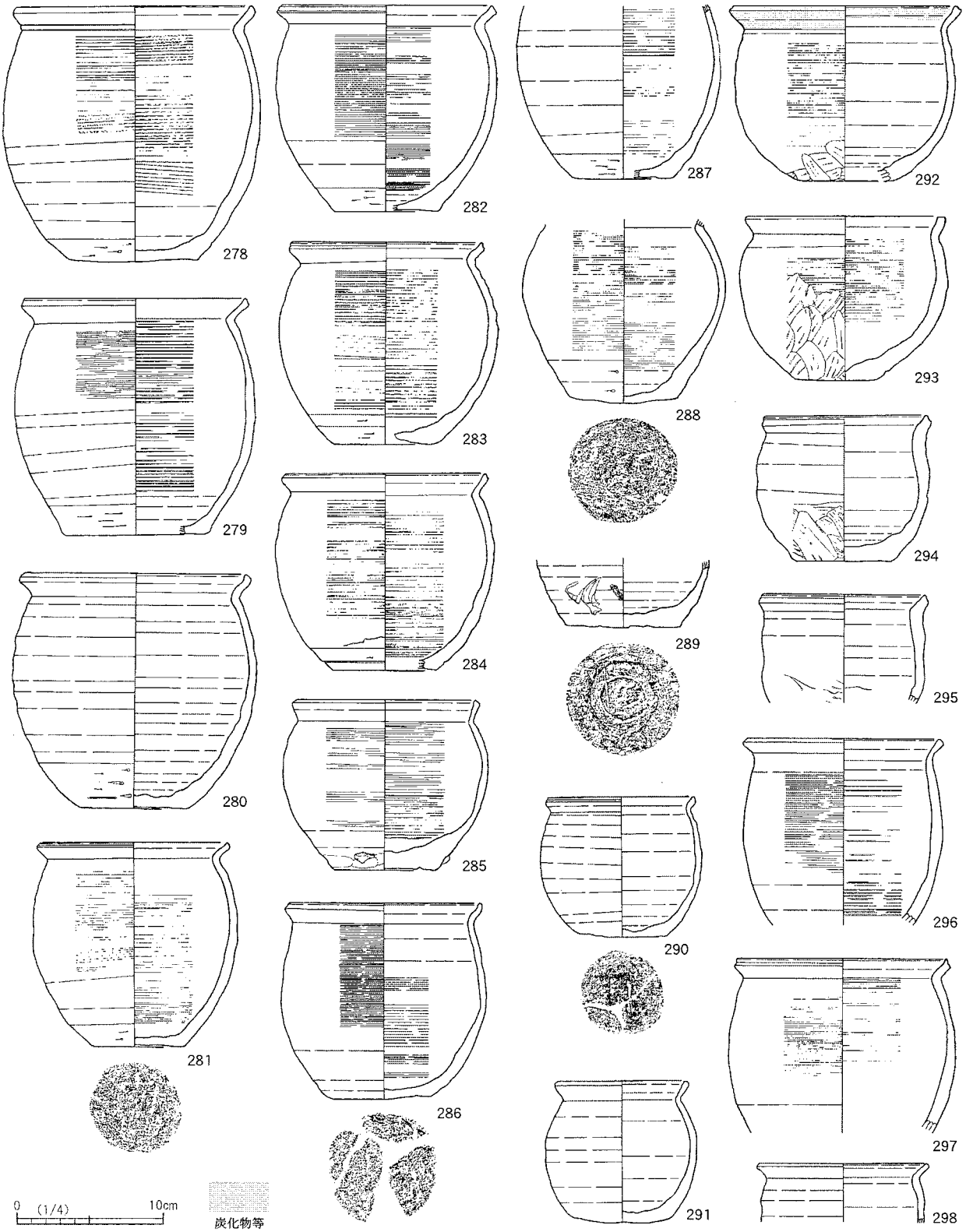
煮炊具には黒斑の残る個体が多く(262・264・265・273・278・280・281・302・303)，特に278は，内面に棒状黒斑が確認できる。一方，280・292は，体部下半に煮炊き時の燃料による黒斑が残り，使用時のススも付着している。また，270はコゲ，288・290・301はススが付着。この他，283は底部に穴が開くが，焼成後の意図的穿孔の可能性がある。285・301・303は体部下半に粘土粒が貼り付けられており，焼成時のカマセ材であろう。



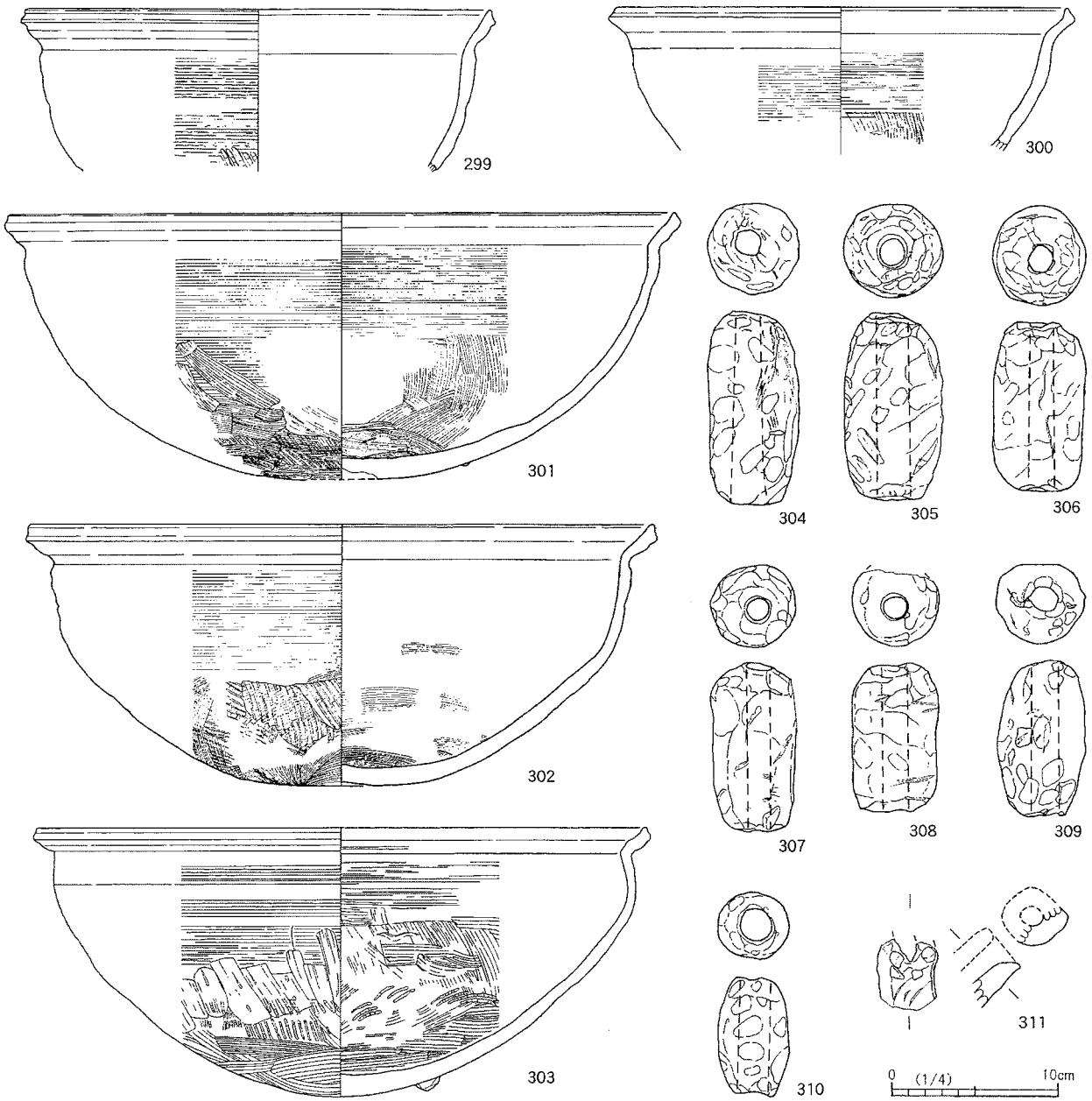
第41図　9号土坑　出土遺物(4)

なお，282は胎土の薄片分析を実施した(試料番号①)。

この他，土錘はＡⅠ類(304～308)，ＢⅠ類(309)・Ⅱ類(310)が出土した。304～309は器面の状態が良好であり，未使用と考えられる。304・306には黒斑・火色が残る。一方，310は孔の縁辺が磨耗しており使用品であろう。



第42図　９号土坑　出土遺物(5)



第43図　9号土坑　出土遺物(6)

また，焼成粘土塊も出土。土器類に比べ４点(計46.4g)と非常に少なく，２点(第77図751・752)を掲載した。

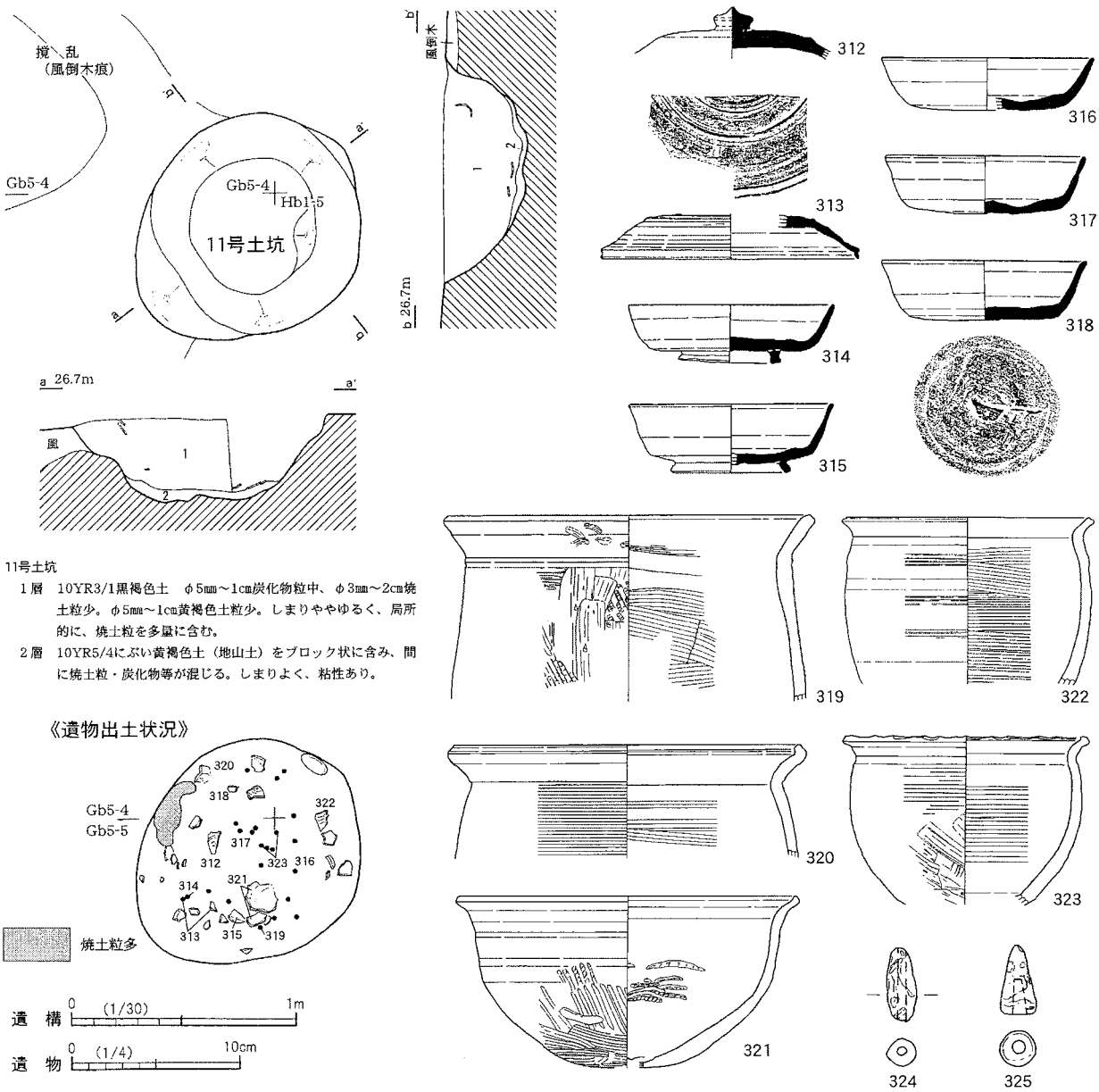
本遺構については，２層から出土した炭化材片で炭素年代測定分析を実施(分析試料No.12・13)。この結果，No.12は7世紀後葉～8世紀後半，No.13は7世紀末～9世紀後半の年代結果が得られた。

10号土坑　７号土師器焼成坑の項に記載。

11号土坑（第44図，図版15）

他の遺構とはやや離れた調査区中央，Gb5-4・5-5，Hb1-4・1-5グリッドに位置する。地山のＶ層上面でプランを検出。長軸112cm，短軸94cmの楕円形で，掘り込みは37cm。壁が緩やかに立ち上がる椀形である。調査中，底面から水が浸み出し続けた。１層中の焼土粒を多く含む部分は，埋没中の土坑へ廃棄した焼土と考えられる。

遺物は埋土中から分散して出土した。浅型コンテナ３箱分弱(3.7kg)ある。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を一定量含む。このうち，14個体(重量比4割弱)(第44図312～325，図版５・33)を図化・掲載した。



11号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒中、φ3mm～2cm焼土粒少。φ5mm～1cm黄褐色土粒少。しまりややゆるく、局所的に、焼土粒を多量に含む。

2層　10YR5/4にぶい黄褐色土（地山土）をブロック状に含み、間に焼土粒・炭化物等が混じる。しまりよく、粘性あり。

第44図　11号土坑と出土遺物

須恵器食膳具には，有台杯A類蓋(312)･DⅠ類蓋(313)，有台杯AⅡ類(314・315)，無台杯AⅠ類(316)・Ⅱ類(317・318)がある。313は天井部にケズリ出しによる凸帯を持つ金属器模倣品で，器面の状態からみて未使用。312は焼き膨れ，314は焼成時に焼き歪み，亀裂が入った不良品。315は倒立して焼成されたのか，外面に自然釉が掛る。

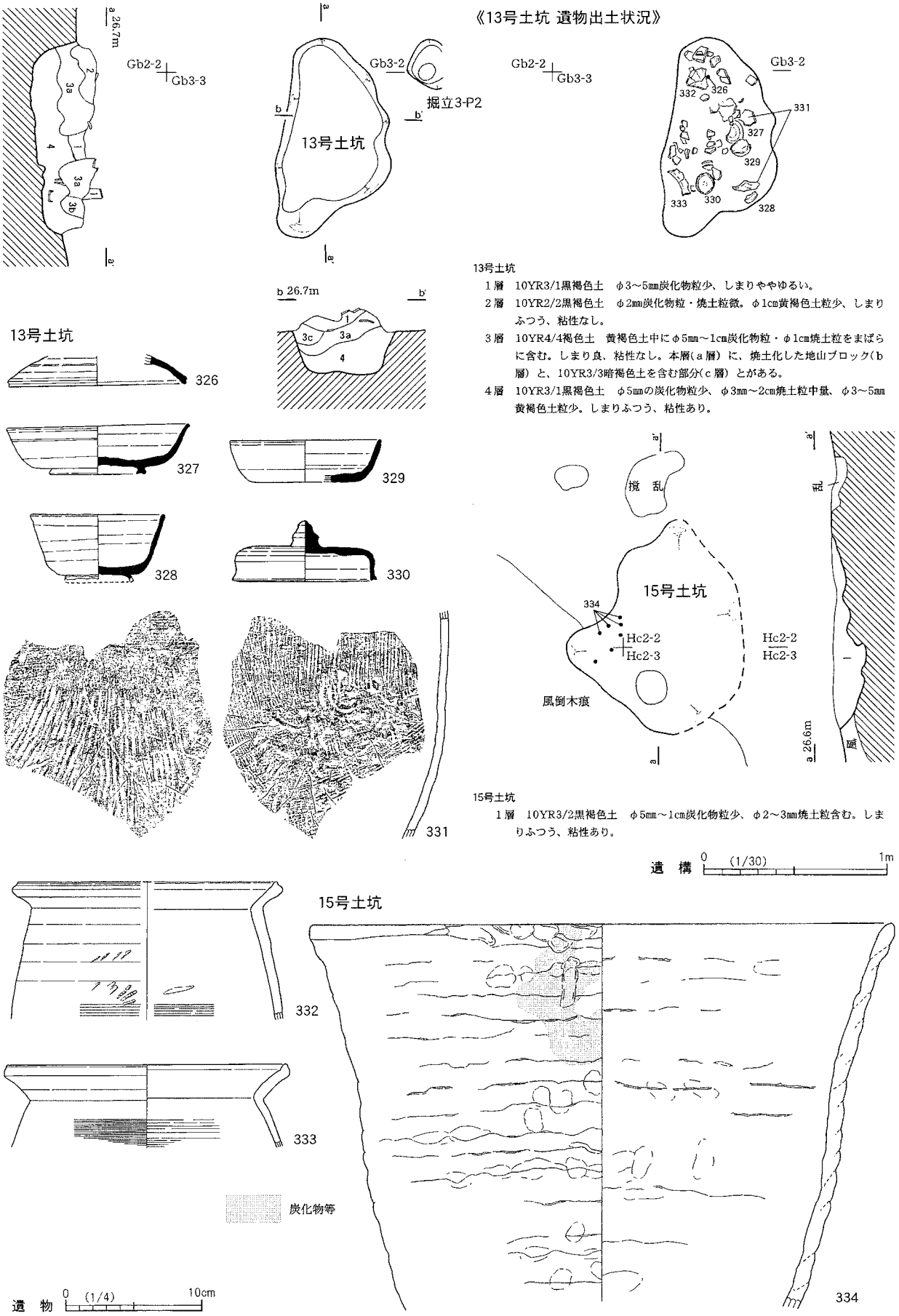
土師器は長胴甕(319・320)，小型甕Ⅱ類(322･323)，鍋(321)がある。これら５点は319を除き，内外両面または片面に黒斑が残る。323は口縁端が何か所か摘み潰されており，細かい波状を呈する。

この他，土錘BⅢ類(324)，三角錐形土製品(325)が出土した。324は指押さえ痕が明瞭で，端部が丸い。325は底面から上方に向け，端部の平らな棒状の工具により刺突されている。また，焼成粘土塊30点(計236.4g)が出土した。このうち，３点(第76・77図732・736・748)を掲載した。

12号土坑　７号土師器焼成坑の項に記載。

13号土坑（第45図，図版16）

調査区西半北部，Gb3-2・3-3グリッドに位置する。黄褐色土・焼土ブロックなどの分布により，Ⅱa層の掘削中



13号土坑
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、しまりややゆるい。
2層　10YR2/2黒褐色土　φ2mm炭化物粒・焼土粒微。φ1cm黄褐色土粒少、しまりふつう、粘性なし。
3層　10YR4/4褐色土　黄褐色土中にφ5mm～1cm炭化物粒・φ1cm焼土粒をまばらに含む。しまり良、粘性なし。本層(a層)に、焼土化した地山ブロック(b層)と、10YR3/3暗褐色土を含む部分(c層)とがある。
4層　10YR3/1黒褐色土　φ5mmの炭化物粒少、φ3mm～2cm焼土粒中量、φ3～5mm黄褐色土粒少。しまりふつう、粘性あり。

15号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒含む。しまりふつう、粘性あり。

第45図　13・15号土坑と出土遺物

から存在は確認出来ていたが，下部からの水の浸み出しが著しく，プランの検出は地山のⅤ層上面であった。長軸110cm，短軸63cmの不整形で，掘り込みは36cm。壁が明瞭に立ち上がる箱形で，底面も比較的平らである。３号掘立柱建物のプラン内に位置するが先後関係は不明である。埋土は４層あり，焼土粒・黄褐色土を目立って含む３・４層は，人為的埋戻しと考えられる。

遺物は埋土中に分散する形で出土した。土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。浅型コンテナ２箱分(2.2kg)あり，このうち８個体(重量比4割強)(第45図326～333，図版33)を掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯AⅡ類蓋(326)，有台杯AⅠ類(327)・C2類(328)，無台杯BⅡ類(329)がある。327は口縁端・内底面・高台が磨耗しており，使用品と推定される。328も口縁端がわずかに磨耗，高台部を意図的に打ち欠いている。須恵器貯蔵具は短頸壺蓋(330)のみで，焼成時の亀裂がある。土師器は長胴甕(331～333)がある。

14号土坑　４号土師器焼成坑の項に記載。

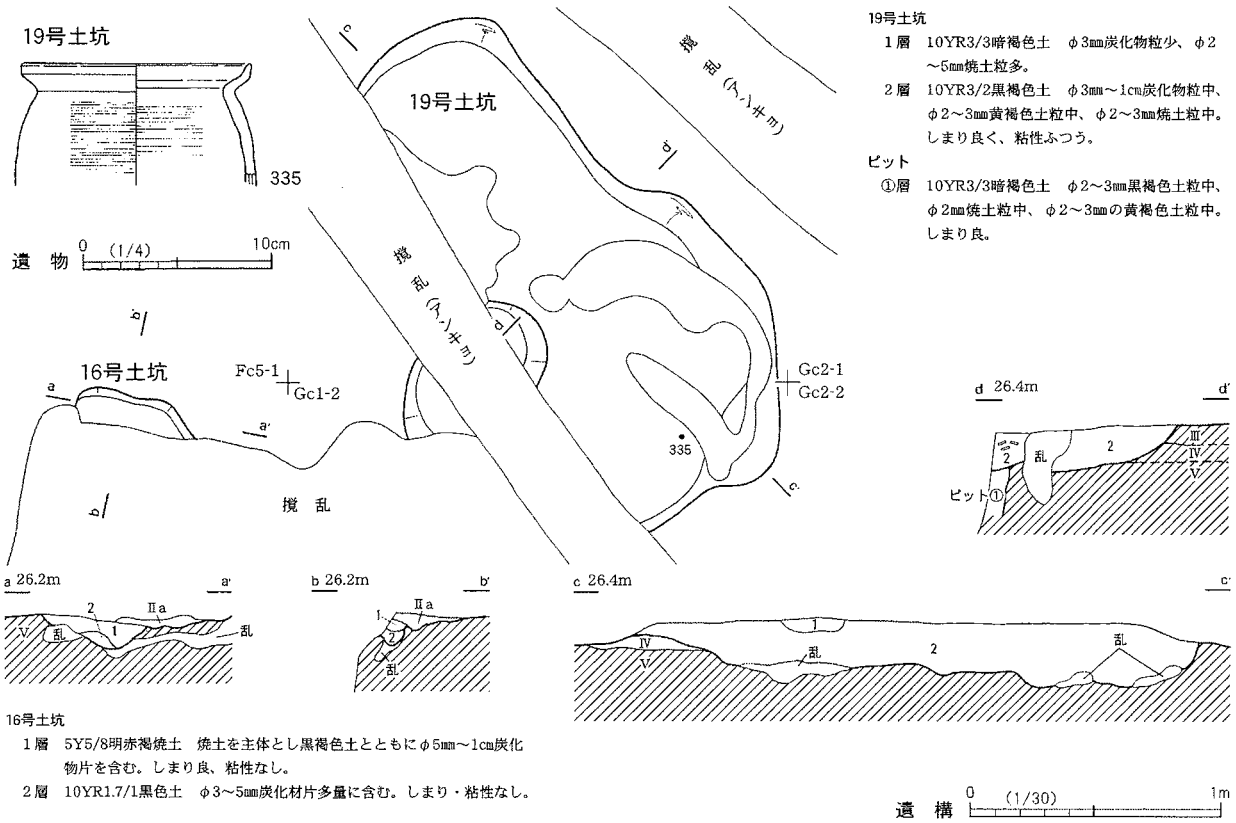
15号土坑（第45図，図版16）

調査区中央，他の遺構とは離れたHc2-2・2-3グリッドに位置する。地山のⅤ層上面でプランを検出したが，下部からの水の浸み出しが著しく，また，風倒木痕と重複していたこともあり，東半部分は不明確であった。長軸110cm，残存部分で短軸56cmの不整形で，掘り込みは19cm。底面の凹凸も著しい。

遺物は破片状態ながら，製塩土器がまとまって出土した。その他の土師器甕類の小片を含め，遺物出土量は1.5kg。うち，図化に耐えうる製塩土器1個体(重量比9割強)(第45図334，図版５)を掲載した。非常に大形で，輪積み痕と整形のための指頭圧痕が明瞭に残る。また，内外面に黒斑，外面に炭化物の付着が，わずかに認められる。製塩土器からの時期判定は難しく，その他の出土土器片から判断し，本遺構は古代に位置付けておきたい。

16・19号土坑（第46図，図版16・17）

調査区西半東端，Fc5-2，Gc1-1・1-2グリッドに位置する。ともに２号掘立柱建物内に位置するが，先後・共存



第46図　16・19号土坑と出土遺物

関係は不明である。

16号土坑　Fc5-2グリッドに位置する。地山のV層上面でプランを検出したが，南側が大きく攪乱を受けており，下部にも木の根による攪乱が及んでいる。一部しか残存しておらず，全体の形状は不明である。幅50cm，残存長14cmで，掘り込みは10cm。わずかに残る底面には凹凸がある。埋土中に多量の炭化物片を含み，製炭土坑を想像させる。出土遺物は須恵器杯破片３点・土師器甕類破片２点の，計50ｇのみだが，これらの土器片から，遺構の時期は古代としておきたい。

19号土坑　Gc1-1・1-2グリッドに位置する。遺物と炭化物・焼土粒の分布により，Ⅱa層・Ⅲ層中でプランを検出した。長軸226cm。長軸方向に沿って，暗渠による攪乱を受けており，短軸幅は不明だが，遺存幅は98cmある。平面形は隅丸方形で，掘り込みは26cm，底面にやや凹凸がある。

プラン検出面で，多量の土師器甕類片(3.3kg)が敷き詰めたように出土した。しかし，いずれも細片であり，図化に耐えうるものは少ない。土師器小型甕Ⅲ類1個体(重量比2％以下)(第46図335，図版５)を掲載，胎土の薄片分析も実施した(試料番号⑤)。これらの出土土器片から，本遺構は古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊39点(計223.5g)が出土。他の遺構に比べ出土遺物量に占める焼成粘土塊の割合が極度に高い。

17号土坑（第47図，図版16・17）

調査区西半東部，Gb2-5・Gc2-1グリッドに位置する。Ⅱa層掘削中から炭化物・焼土粒の分布により存在が確認できていたが，下部からの水の浸み出しが著しく，土質の確認が困難であった。このため，最終的なプラン確認は地山のV層上面となった。長軸229cm，短軸123cm，２基の土坑が繋がったような，不整形を呈する。一部細かい凹凸はあるが，底面は基本平らである。掘り込みは46cmあり，壁の立ち上がりの急な箱形部分と，緩やかな椀形部分，少々オーバーハングする部分とがある。重複遺構は無い。なお，調査中常に，土坑底から水の浸み出しが続いた。

埋土は，黄褐色土・焼土粒などの含有物を目立って含む層と，含まない層とが互層に堆積していた。遺物は，各層に含まれるものの，主に４～６層からまとまって出土した。出土状況を図示したが(第47図)，狭い範囲に破片状態で集中する形で出土した。破損品ながら遺存率が高く，土坑の使用停止後，７・８層が堆積してから，土坑内に遺物を廃棄したと考えられる。

出土遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。浅型コンテナ18箱分弱(20.8kg)と比較的多く，このうち，41個体(重量比6割弱)(第48～50図336～376，図版５・33～35)を図化・掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯ＡⅠ類蓋(336)・ＤⅠ類蓋(337)，有台杯ＡⅠ類(338・339)・ＢⅠ類(340)・C1類(341)・C類(343)・ＤⅡ2類(342)，無台杯ＡⅡ類(344)・A類(345)・ＢⅠ類(346・347)・ＢⅡ類(348)がある。338は体部中位がわずかにくぼんでおり，折縁杯を意識しているようにも見てとれる。340の高台は意図的に打ち欠かれたようであり，343の高台内には「大」がヘラ描きされている。これら食膳具のうち，336の内面には斑状にうっすら，346の口縁外面に，それぞれ炭化物が付着しており，使用品と想定される。一方，不良品も多く，340・343は焼成時に底面に亀裂が入っており，339・341・345は焼成不良で生焼けに近く，器面の劣化が著しい。342・344は内面のちぢれ痕が顕著である。なお，342・344・346は，胎土のＸ線回折分析を実施した(試料番号⑥・⑤・④)。

須恵器貯蔵具には，鉢(349～351)，横瓶(352)がある。鉢３点はともに，端部を内側に向かって引き出す特徴的な口縁部形態で，350・351は体部に把手が付く。352の横瓶は円盤閉塞されている。

また，土師器煮炊具がまとまって出土しており，長胴甕(353・354・356～365)，小型甕Ⅰ類(A:369，Ｂ：373，不明:366～368)・Ⅱ類(A:370～372，不明:374)，鍋(376)がある。小型甕はⅠ・Ⅱ類のみで，小型甕と呼ぶには躊躇するほどの大型品が多い。小型甕の底部の切り離し痕は，確認できる範囲ではいずれも糸切りであるが，静止・

17号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5㎜炭化物粒中、φ2㎜黄褐色土中、しまり良、粘有。

2層　7.5Y4/3褐色土　φ2㎜炭化物粒中、φ2㎜～1㎝焼土粒多、φ3～5㎜黄褐色土粒多。しまり良く、粘性ふつう。

3層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5㎜炭化物中、φ2㎜焼土粒少、φ2～5㎜黄褐色土粒。しまり良く、粘性ふつう。

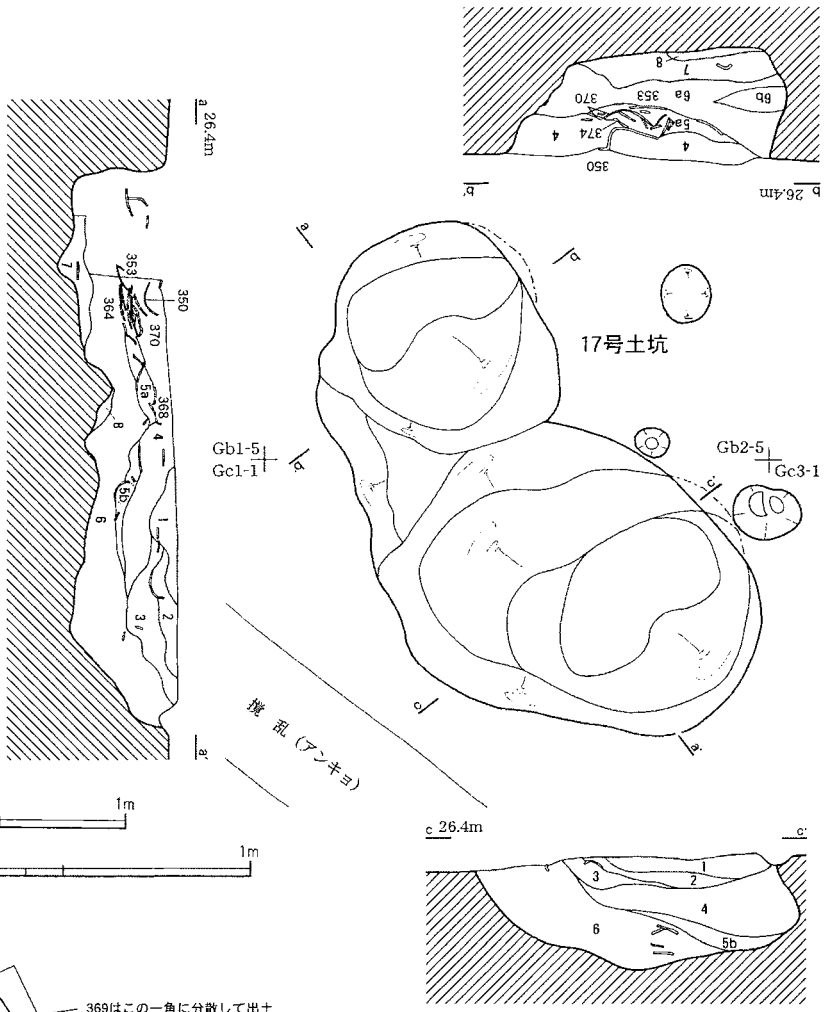
4層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5㎜の炭化物粒中、φ2㎜の黄褐色土粒少。しまり良、粘性やや強い。

5層　10YR3/1黒褐色土中に、10YR6/3にぶい黄褐色土をφ1～5㎝のブロックで含む。しまりややゆるく、粘性あり。本層(a層)中に、φ2㎝の10YR5/6黄褐色土(地山土)をブロックで含む部分あり（b層）。

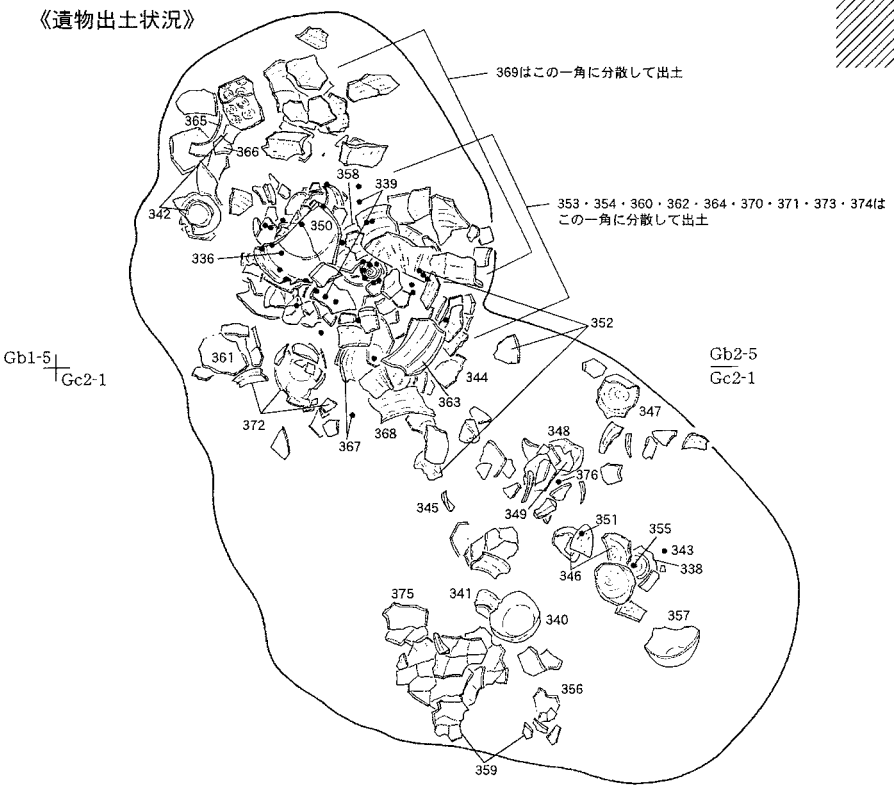
6層　10YR3/2黒褐色土　φ2～5㎜炭化物粒中、φ2～5㎜の黄褐色土粒少。しまり良、粘性やや強い。本層(a層)中に、壁の崩落土と見られる10YR5/4にぶい黄褐色土を含む部分（b層）あり。しまりややゆるい。

7層　10YR4/2灰黄褐色土　黒褐色土中にφ1～3㎝黄褐色土ブロック極多。しまり良、粘性あり。

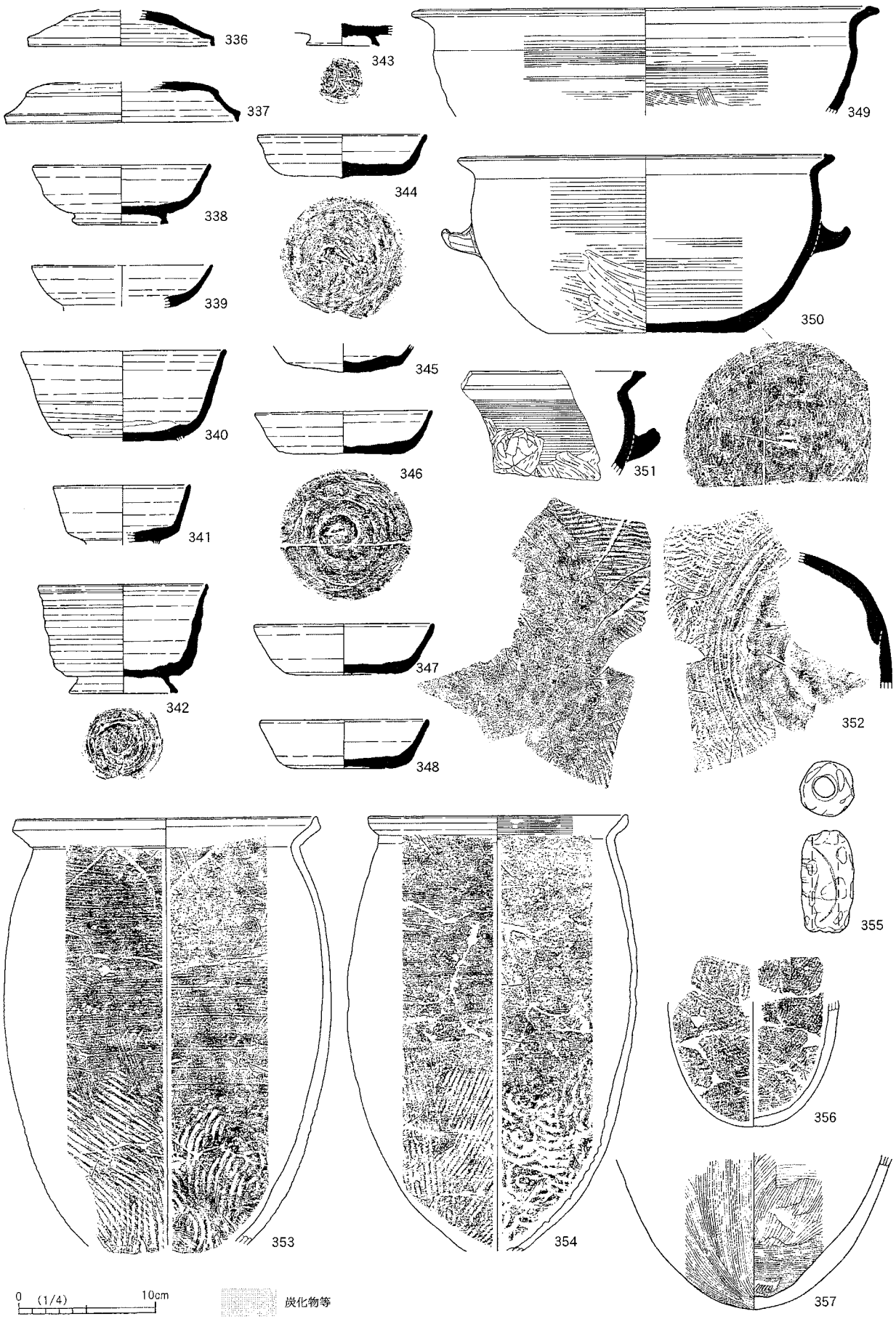
8層　10YR4/4褐色土　黒褐色土中にφ3～5㎜黄褐色土粒を多。しまり無し。



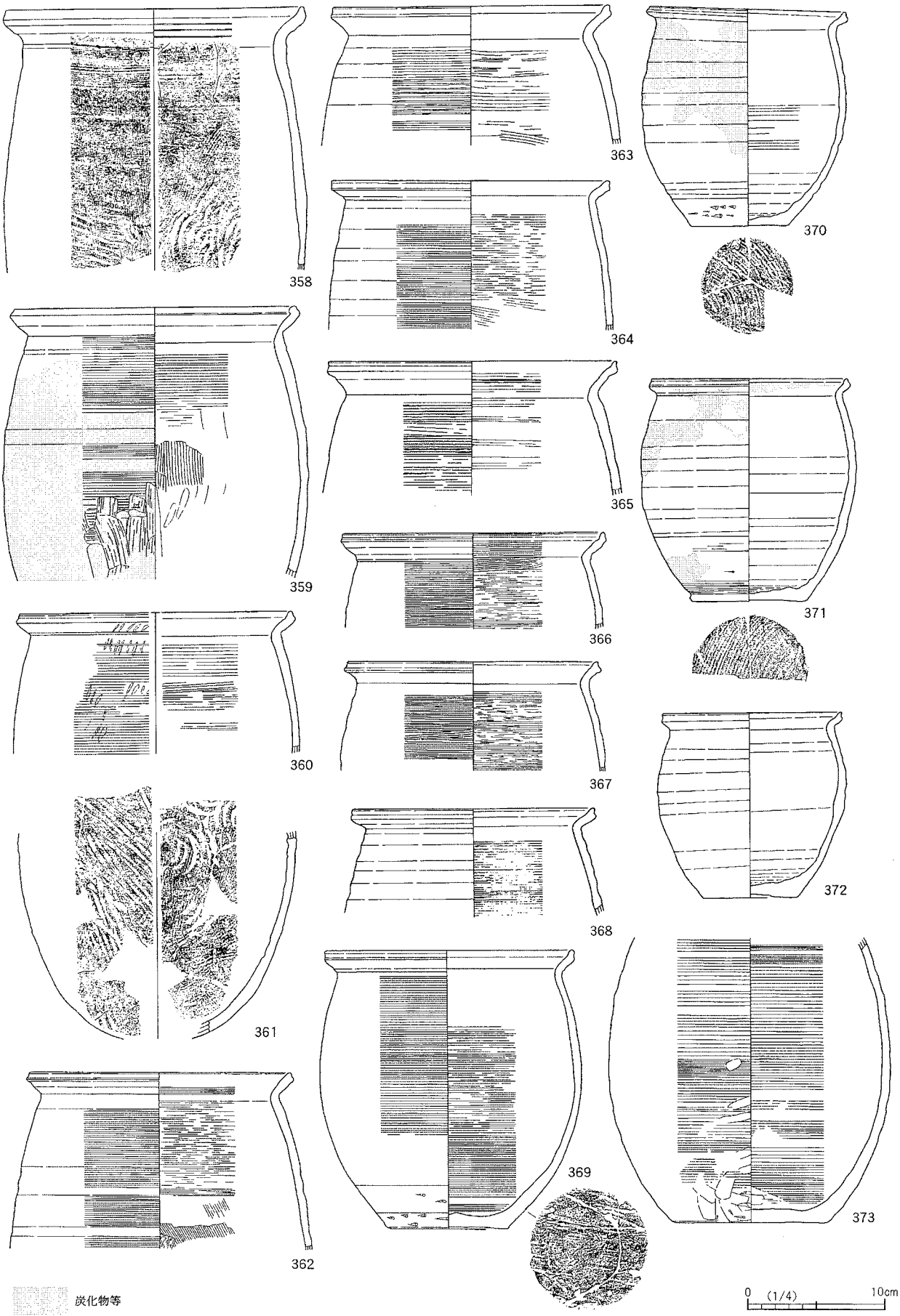
《遺物出土状況》



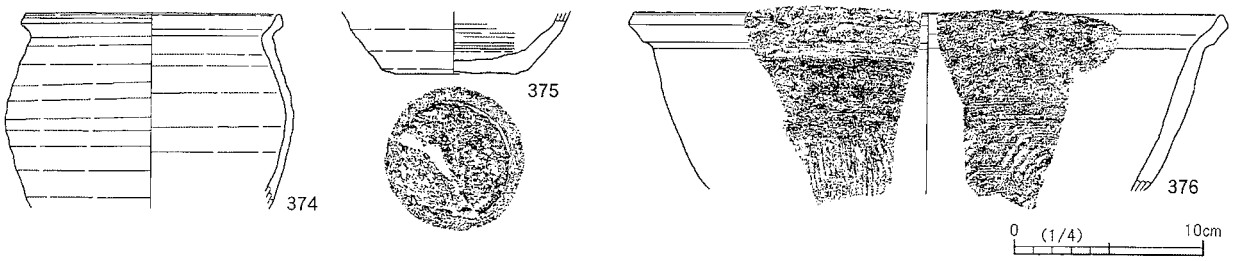
第47図　17号土坑



第48図　17号土坑　出土遺物(1)



第49図　17号土坑　出土遺物(2)



第50図　17号土坑　出土遺物(3)

回転状態の双方がある。これらの煮炊具には，359・370・371の内外面にアク・ス・炭化物の付着があり，使用品と推測される。また，357・363・369・371・373は内外面に黒斑・火色が残る。なお，357・368は薄片分析を実施した(試料番号③・④)

この他，土錘BⅡ類(355)が出土した。表面は劣化し，一部火色が残る。また，鉄滓1点(図版35-①)，焼成粘土塊４点(計22.0g)が出土した。焼成粘土塊のうち，１点(第77図743)を掲載した。

19号土坑　16号土坑の項に記載。

21号土坑（第51図，図版17）

調査区西半，Gc1-3・1-4・2-3・2-4グリッドに位置する。Ⅳ・Ⅴ層の上面でプランを検出した。長軸232cm，攪乱を受けており，遺存部の最長短軸104cm。楕円形で，掘り込みは23cm。壁の立ち上がりの緩やかな椀形である。重複する遺構は無し。検出当初，外周に溝状のプランがめぐっており，溝を伴う土坑と想定したが，掘削の結果，外周の溝が風倒木痕であることが判明した。また，一部壁面が焼土化していると認識していたが，調査の結果，水分中の鉄分沈着による赤化と判明した。調査中，土坑底からは，常に水が浸み出していた。

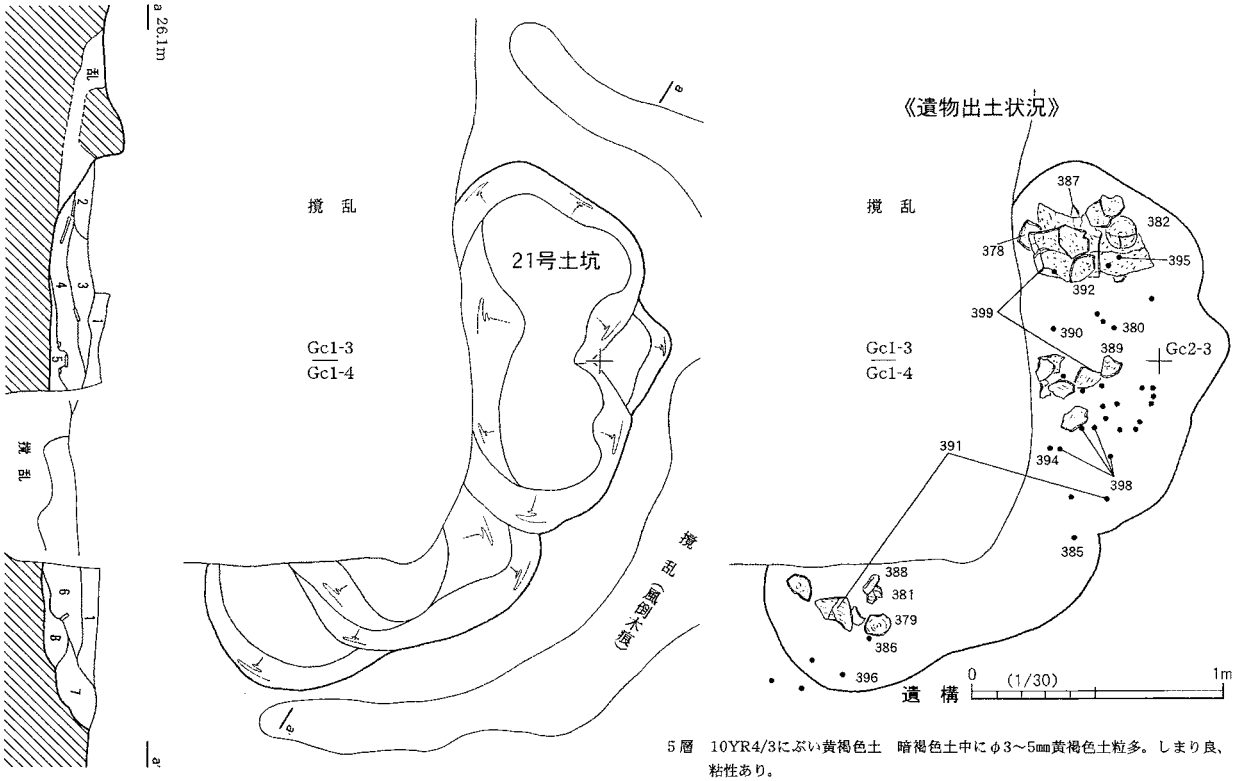
遺物は各層から出土したが，底面直上から，須恵器貯蔵具を中心とする比較的大型の破片がまとまって出土した。出土量は比較的多く，浅型コンテナ6箱弱(10.1kg)ある。土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を含む。このうち23個体(重量比6割強)(第51・52図377～399，図版５・６・35・36)を図化・掲載した。

食膳具は，須恵器・黒色土器・土師器が出土している。須恵器には，有台杯A類蓋(377)・ＡⅠ類(378)・ＡⅡ類(379)・C1類(380・381)・不明(384)，無台杯ＡⅠ類(382)・ＢⅡ類(383・385・386)がある。379は口縁部がわずかにくぼんでおり，折縁杯を意図しているようにも見てとれる。不良品が多く，379・381は焼き歪み・亀裂，383は焼き膨れが見られる。黒色土器は内面黒色処理の杯1点(384)，有台杯であろうか。内面のみ丁寧にヘラミガキされている。土師器は無台杯ＢⅡ類２点(385・386)。酸化炎焼成だが，ともに焼成不良で器面の劣化が著しく，須恵器として作られ，焼成に失敗した可能性もある。380・386はＸ線回折分析を実施した(試料番号⑦・⑪)。

一方，須恵器貯蔵具は小型長頸瓶(387)，短頸壺蓋(388・389)・短頸壺(390)，横瓶(391)，甕(392)がある。食膳具同様，不良品が多く，388には焼き膨れ，389には焼成時の亀裂がある。また，390には内面への釉垂れが見られ，組み合わせて焼成されたであろう蓋に，破損が生じた可能性が考えられる。また，387は二次焼成を受けているようで，釉が剥がれ，口縁が磨耗している。

土師器煮炊具は，小型甕Ⅰ類(393)・Ⅱ類(394)，鍋(395～399)がある。鍋が比較的まとまって出土しており，大(396・397・399)・小(395・398)に分けられる。なお，398は外面に黒斑がある。395は薄片分析を実施した(試料番号⑥)

また，焼成粘土塊16点と数は少ないが，比較的大型の焼成粘土塊を含む合計229.7gが出土した。このうち，１点(第76図725)を掲載した。



21号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ5mm～1cm炭化物粒多、φ2mm～1cm焼土粒中、φ5mm～1cm黄褐色土粒多、φ5mm～4cm黄灰色粘土粒中、φ2～3mm砂礫含む。しまり良、粘性ふつう。

2層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm～5cm炭化物粒・ブロック中、φ2～3mm焼土粒多、φ2～3mm黄褐色土粒中。しまり良、粘性ふつう。

3層　7.5Y3/2黒褐色土　φ5mm～2cm炭化物粒中、φ2～3mm焼土粒極多、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまり良、粘性ふつう。

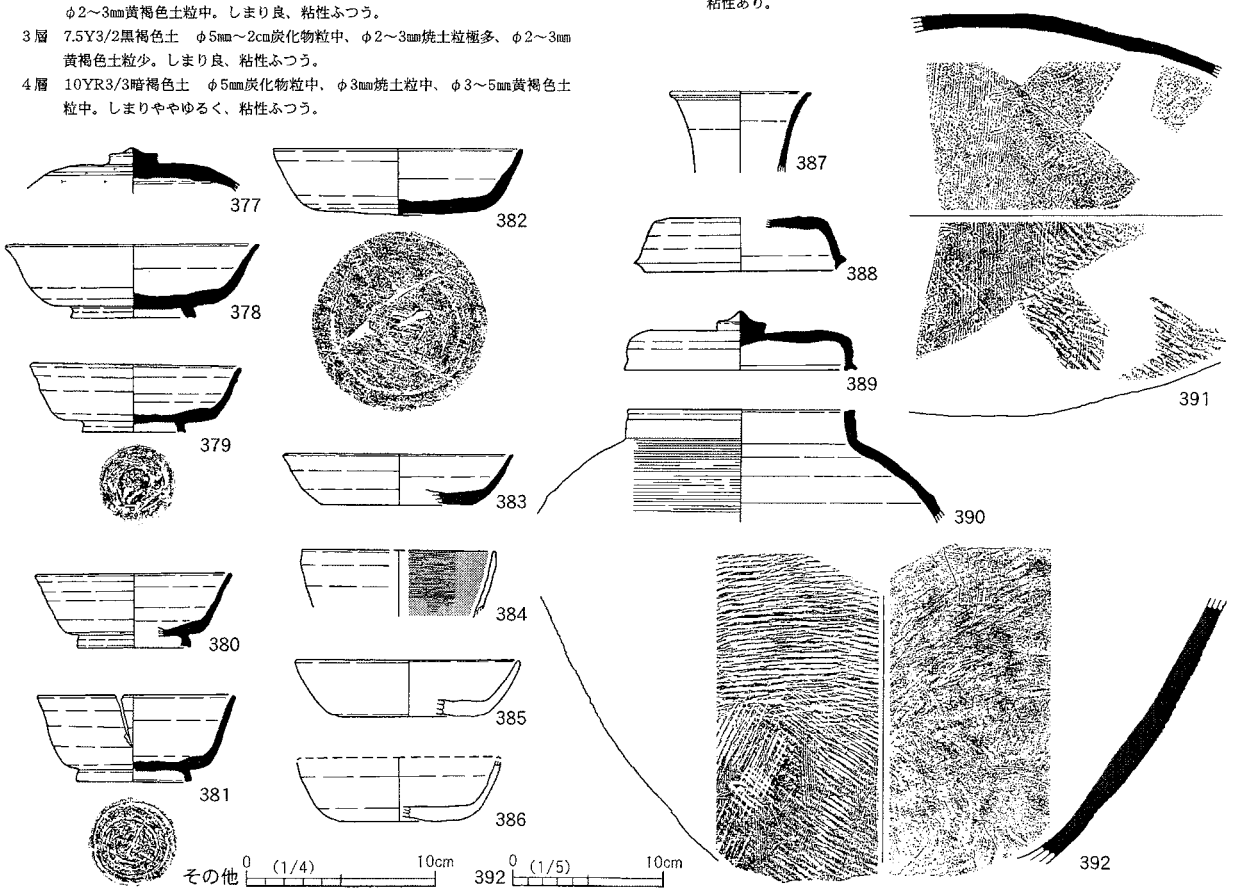
4層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm炭化物粒中、φ3mm焼土粒中、φ3～5mm黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性ふつう。

5層　10YR4/3にぶい黄褐色土　暗褐色土中にφ3～5mm黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。

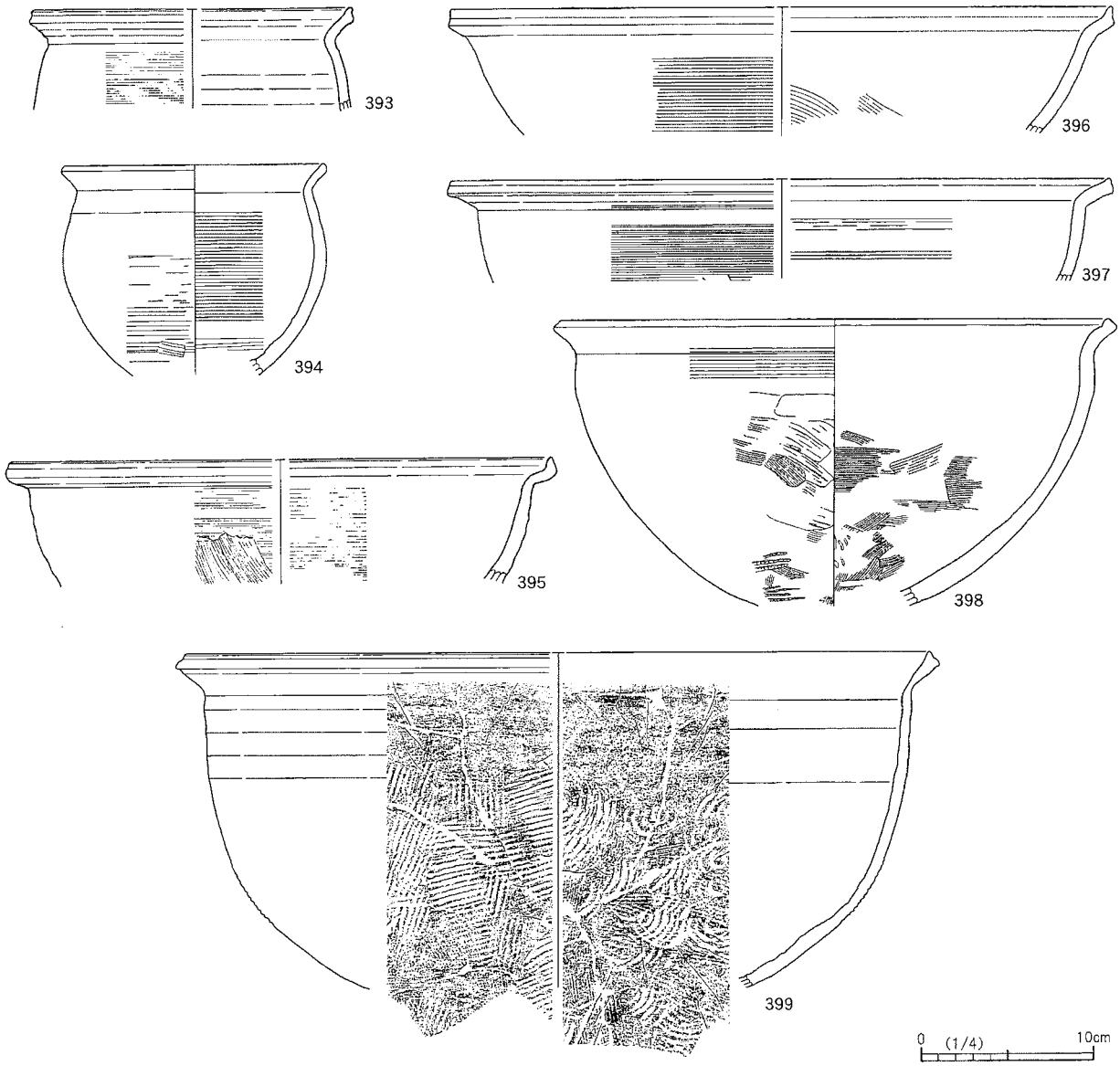
6層　10YR3/2黒褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒中、φ3～5mm黄褐色土粒中、しまり良、粘性強。

7層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm～2cm炭化物粒中、φ3mm焼土粒少、φ3～5mm黄褐色土粒少、φ3mm～2cm黄灰色粘土粒多。しまりふつう、粘性強。

8層　10YR4/2灰黄色粘質土　地山黄褐色土にしみ状に黒褐色土を含む。しまり良、粘性あり。



第51図　21号土坑と出土遺物(1)



第52図　21号土坑　出土遺物(2)

23(a・b)・24号土坑（第53図，図版18）

調査区西半，Fc5-4・5-5，Gc1-4・1-5グリッドに位置する。黄褐色土粒の分布により，Ⅱa層の掘削中から存在は確認出来ていたが，プランを検出出来たのは，地山のⅤ層上面であった。

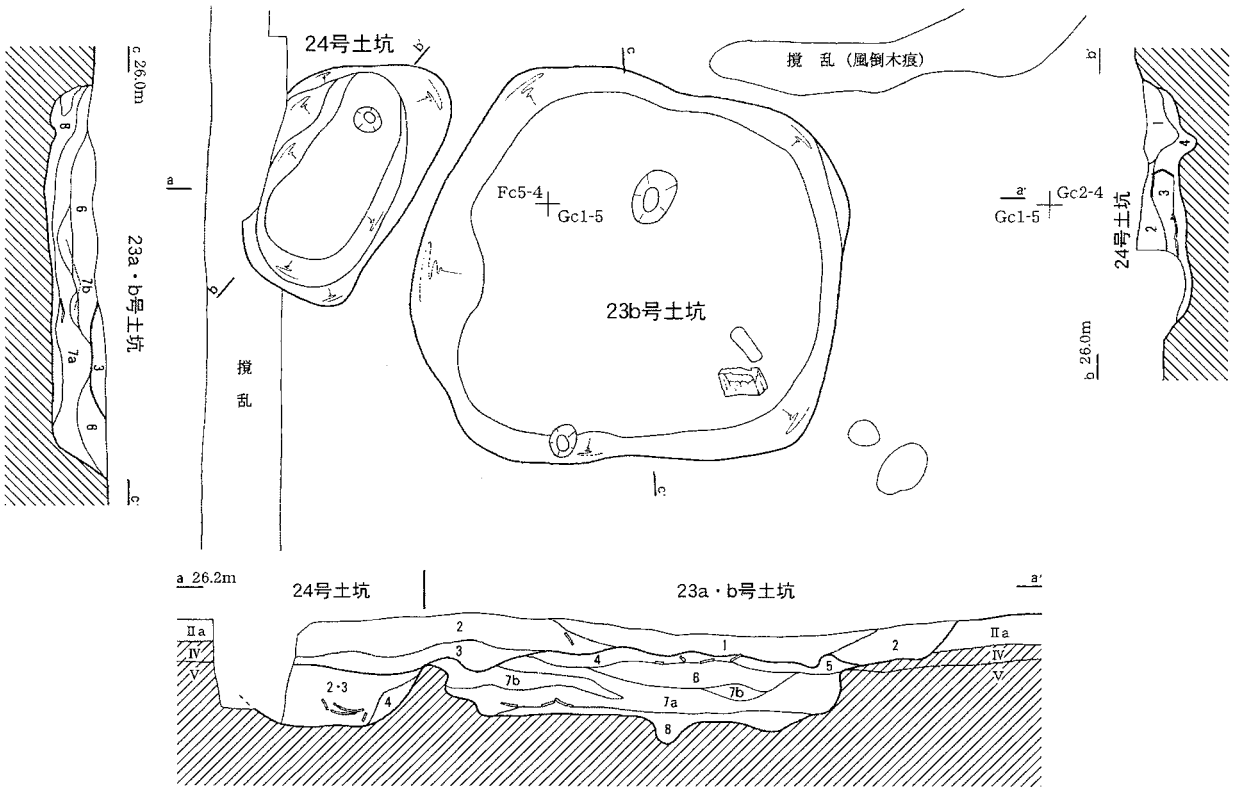
23a号土坑　Fc5-4・5-5，Gc1-4・1-5グリッドに位置する。Ⅱa層中から存在は確認出来ていたが，掘り込みが浅く，土層観察用に残したセクションベルト内にしか残存しておらず，プラン確認を行った地山のⅤ層上面では，形状は確認できなかった。形状は不明であるが，長軸260cm以上，掘り込みは24cm。23b・24号土坑と重複し，これらより後出する。

23b号土坑　Fc5-4・5-5，Gc1-4・1-5グリッドに位置する。長軸170cm，短軸157cmの隅丸方形で，掘り込みは27cm。壁が明瞭に上がる箱形で，底面も比較的平らである。23a号土坑と重複し，これに先行する。

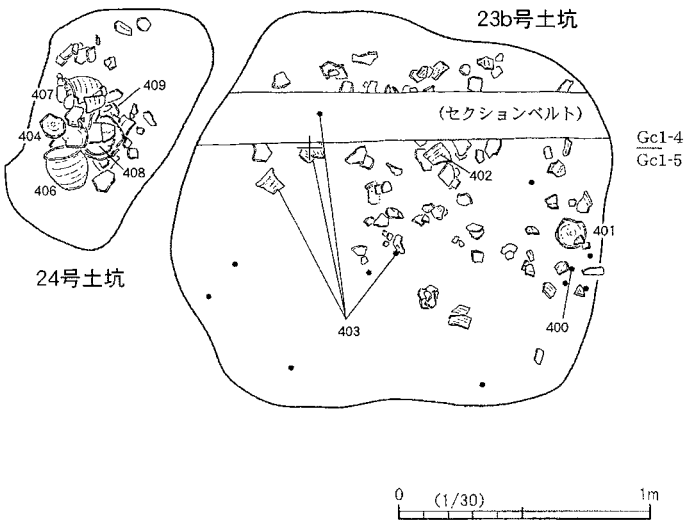
23a・b号土坑とも，出土遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器を少量含む。このうち，明らかに23a号土坑出土と判定できるのは，破片1.2kg分で，23a・b号土坑のいずれに帰属するか判断できなかった遺物は2.7kgある。

また，23b号土坑出土品は，プラン確認面を中心として，破片状態で出土したが，遺物量の合計は1.0kgしかない。23a号土坑から出土した遺物には，図化に耐えうるものがなく，未掲載であるが，出土土器片から古代に位置付けられよう。一方，23b号土坑の出土遺物は１点(第54図400，図版６)を掲載した。23a・b号土坑のいずれに帰属するか不明，または双方にまたがって出土した遺物は3点(第54図401～403，図版36)を掲載した。

400は須恵器無台杯B類。底径指数51で，口径に比して極端に底径が小さく，椀に近い形態をしている。胎土のＸ線回折分析(試料番号⑧)を実施した。401は須恵器短頸壺蓋。402・403は土師器小型甕Ｉ類で，403は劣化によるものか，内外面が剥離している。この他，焼成粘土塊が，23a号土坑から3点(計24.1g)，23b号土坑から



《遺物出土状況》



23ａ号土坑

１層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ2～3㎜黄褐色土粒少。しまりややゆるく、粘性ふつう。

２層　10YR3/1黒褐色土　φ5㎜～1㎝の炭化物粒少、φ2～3㎜焼土粒中、φ2～3㎜黄褐色土粒少、φ2～3㎜砂礫微。しまり非常に良く、粘性無。

３層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ2㎜焼土粒微、φ3㎜～2㎝の黄褐色土粒多。しまり良、粘性やや弱い。

23ｂ号土坑

４層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ2㎜焼土粒少、φ5㎜～1㎝の黄褐色土粒しみ状に含む。しまりふつう、粘性有。

５層　10YR3/1黒褐色土　φ5㎜～1㎝炭化物粒多、φ2～5㎜焼土粒極多、φ2～3㎜黄褐色土粒中。しまりややゆるく、粘性有。

６層　10YR3/2黒褐色土　φ3㎜～2㎝炭化物粒中、φ2～3㎜焼土粒少、φ5㎜～1㎝の黄褐色土粒しみ状に多く含む。しまりややゆるく、粘性有。

７層　10YR3/1黒褐色土　φ5㎜炭化物粒微、しまりふつう、粘性有。本層(a層)中に、φ2～3㎜焼土粒少、φ5㎜～1㎝の黄褐色土粒をしみ状に多く含む部分あり（ｂ層）。

８層　10YR5/4にぶい黄褐色土　しみ状に黒褐色土を含む。しまり良く、粘性有。遺物を多く含む。

24号土坑

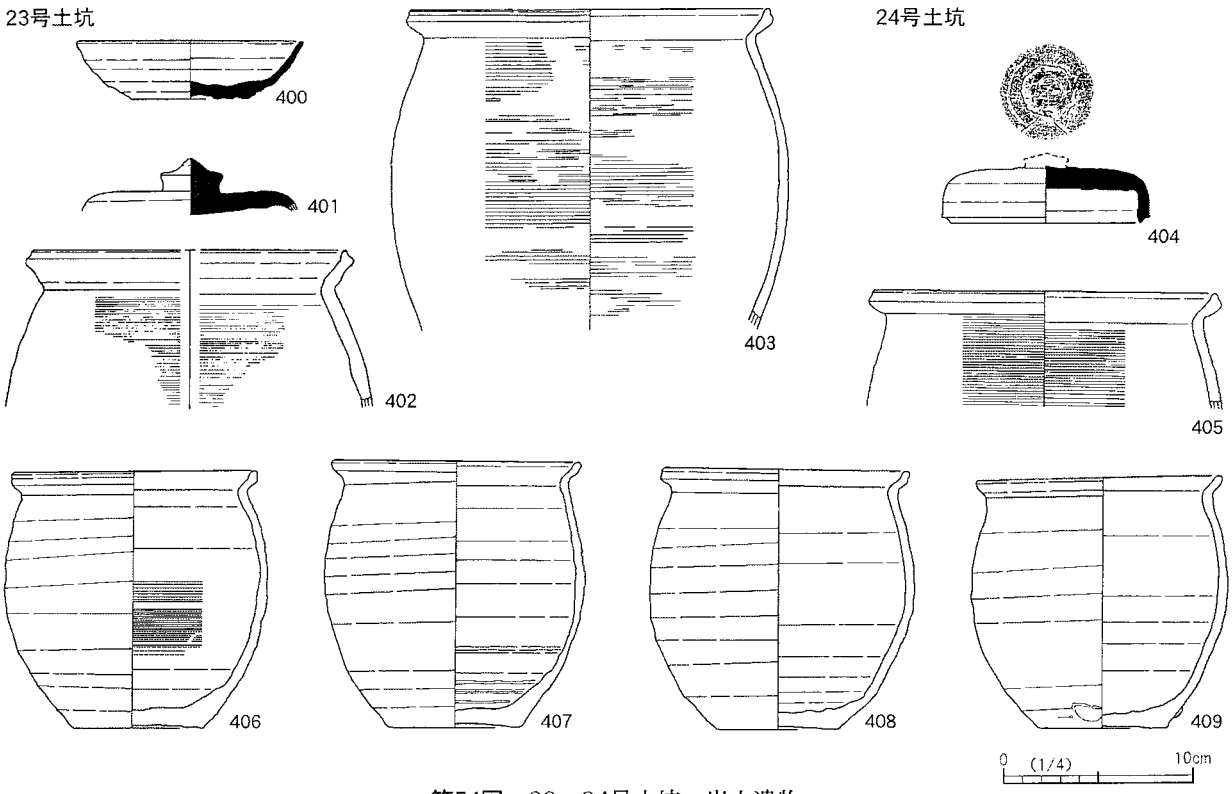
１層　10YR3/2黒褐色土　φ2㎜～1㎝炭化物粒少、φ3～5㎜焼土粒中、φ2㎜～2㎝黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

２層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒微、φ2㎜焼土粒微、φ2～3㎜の黄褐色土粒少。しまりふつう、粘性有。

３層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少、φ2～5㎜黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

４層　10YR5/3にぶい黄褐色土　しまり良、粘性強。

第53図　23・24号土坑



第54図　23・24号土坑　出土遺物

1点(14.2g)，23a・b号土坑のいずれか判断できないもの2点(計26.8g)，出土した。このうち，23a号土坑の1点(第77図756)を掲載した。

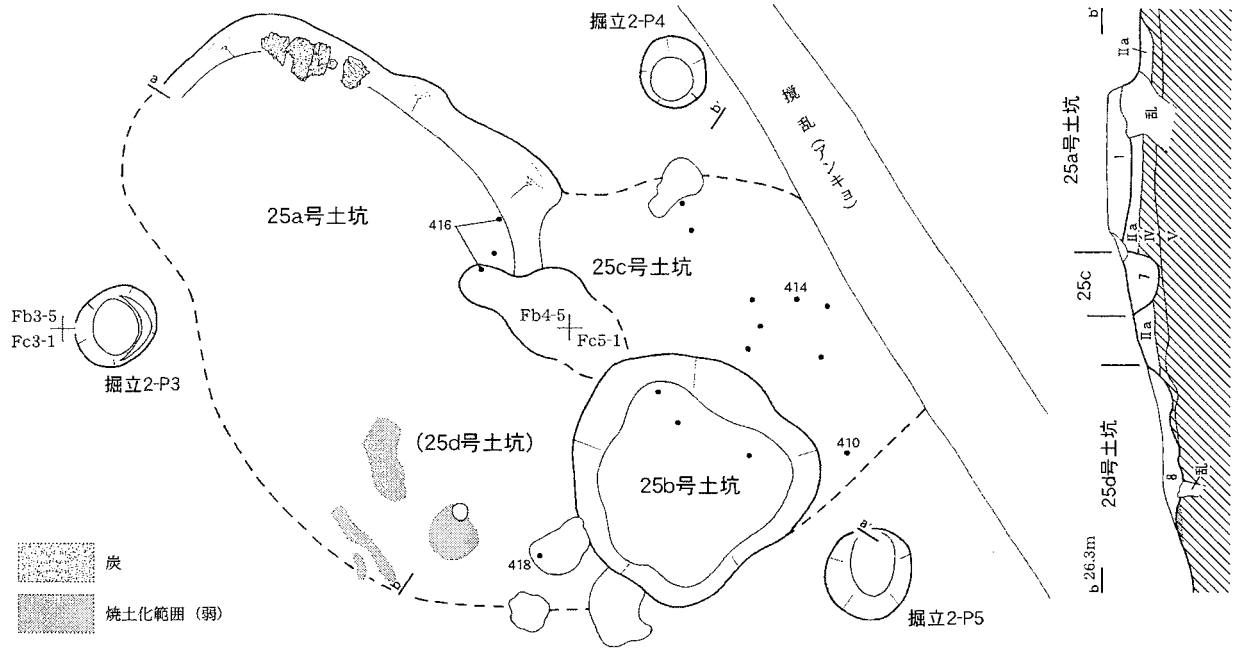
24号土坑　Fc5-4・5-5グリッドに位置する。長軸105cm，短軸64cmの楕円形で，掘り込みは25cm。壁が明瞭に立ち上がる箱形で，底面も比較的平ら。23a号土坑と重複し，これに先行する。当初，この部分の地山Ⅴ層の粘性がやや強く，粘土採掘坑の可能性を考えたが，調査の結果，焼き物の原料にするほどには粘性の強くないことが判明した。出土状況図に示す通り(第53図)，完形の小型甕4個体(406～409)がまとまって出土した。埋納に近い出土状態だが，一緒に別個体の破片も多数出土したことから，いずれも廃棄されたものと考えられる。

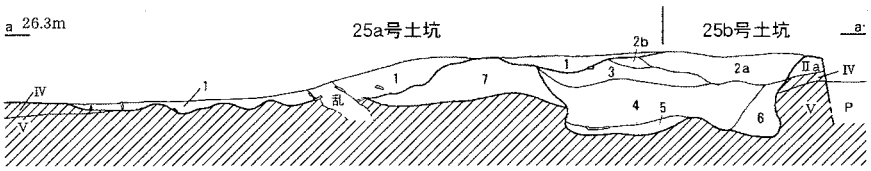
これらを含め，遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類が少量出土した。浅型コンテナ3箱分弱(3.5kg)あるが，うち7点(重量比6割強)(第54図404～409，図版36)を図化・掲載した。須恵器短頸壺蓋(404)は摘みを欠損しており，貼付時の調整痕が残る。また，口縁部に，壺本体から打ち欠きにより剥がした痕跡が残る。土師器は小型甕Ⅰ類(405)・AⅡ類(406～409)がある。このうち，一括出土した4個体は，406～408がロクロ・カキメ整形のみ，409が下部にロクロケズリ調整という違いはあるものの，底部はいずれも回転糸切りで，サイズ・形状も非常に似通っている。なお，409は体部下端に，カマセ材とみられる粘土粒の貼り付けが残る。また，焼成粘土塊3点(計16.4g)が出土した。

25(a～d)号土坑（第55図，図版18）

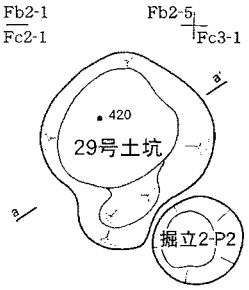
調査区西半，Fb4-5・5-5，Fc4-1・5-1グリッドに位置し，2号掘立柱建物のプラン内にあたる。25(a～d)号土坑の存在は，焼土粒などの分布により，Ⅱa層の掘削中から確認出来ていたが，一つの遺構と認識して調査した。掘削終了後の検討の結果，それぞれ別遺構と判断した。

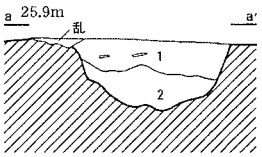
25a号土坑　Fb4-5・5-5，Fc4-1・5-1グリッドに位置する。Ⅱa層中に焼土粒などの分布からプランを検出したが，掘り込みの浅い本遺構の南半分は，上層の攪乱の影響で，プランが検出できなかった。残存部の長軸333cm，





遺構 0 (1/30) 1m





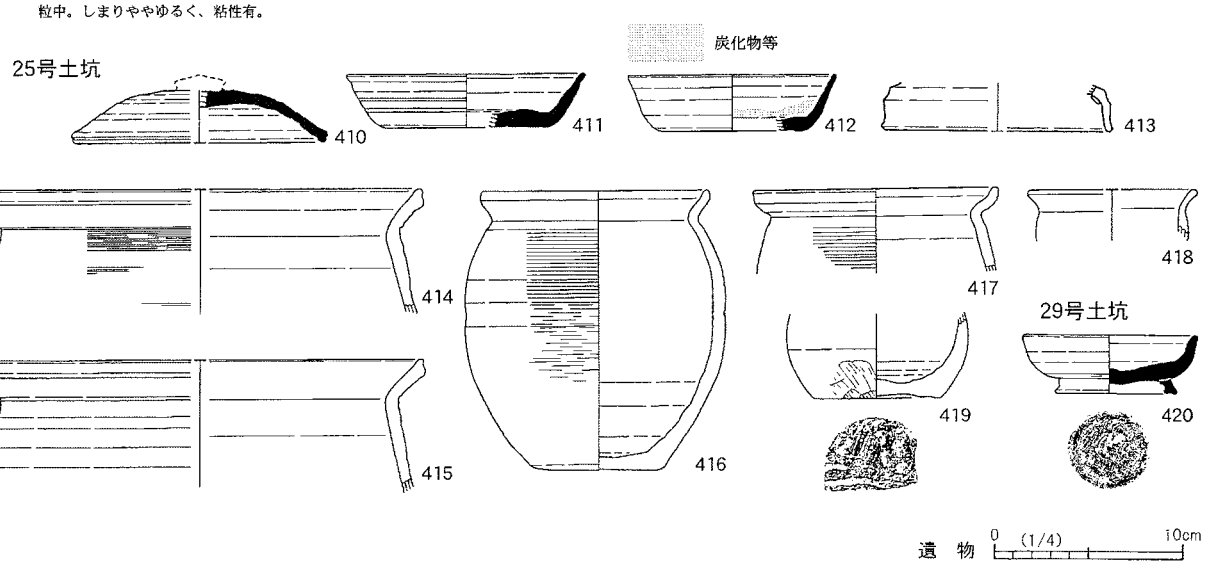
25a号土坑
- 1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5mm炭化物粒多、φ2～5mm焼土粒多。しまり良、粘性ふつう。

25b号土坑
- 2層　10YR3/1黒褐色土　φ2～5mm炭化物粒中、φ3～5mm焼土粒多、φ5mm黄褐色土粒少、φ2～5mm黄灰色土粒少。しまり良、粘性ふつう。本層(a層)中に、焼土ブロック（b層）含む。
- 3層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒少、しまりややゆるく、粘性弱。
- 4層　7.5Y3/2黒褐色土　φ2mm～1cm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒多、φ2～3mm黄褐色土粒部分的に多。しまりややゆるく、粘性やや弱。
- 5層　10YR4/3にぶい黄褐色土　黄褐色土を主体とし、φ2～3mm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒少。しまり良、粘性有。
- 6層　10YR3/3暗褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒中。しまりややゆるく、粘性有。

25c号土坑
- 7層　10YR3/2黒褐色土　黄褐色土をしみ状に含む。しまりややゆるい。

25d号土坑
- 8層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、φ2～3mm黄褐色土粒多。しまりふつう、粘性ふつう。

29号土坑
- 1層　10YR3/1黒褐色土　φ3mm～2cm炭化物粒・タール状の黒色土多、φ3mm焼土粒少、φ3～5mm黄灰色土粒中。しまり良く、粘性やや強。
- 2層　10YR4/3にぶい黄褐色土中にφ3～5mm炭化物粒少、φ3～5mmの黒褐色土中含む。しまり良く、粘性やや弱い。



遺物 0 (1/4) 10cm

第55図　25(a～d)・29号土坑と出土遺物

短軸おおよそ170cmの不整形で，掘り込み10cmと浅く，底面が大きく波打つ。25b・c号土坑と重複し，これらより後出する。25d号土坑とも重複するようだが，先後関係は不明である。

25b号土坑　Fc5-1グリッドに位置する。長軸96cm，短軸94cmの円形で，掘り込みは33cm。底面はやや波打つが，壁の立ち上がりの明瞭な箱形である。25a・c号土坑と重複し，25a号土坑に先行，25c号土坑より後出。

25c号土坑　Fb4-5・5-5，Fc4-1・5-1グリッドの交点に位置する。25b号土坑と重複しており，遺存部で長軸69cm，短軸34cmの不整形で，掘り込みは16cm。底面は平らで，壁の立ち上がりの明瞭な箱形である。25a・b号土坑と重複し，これらに先行する。

25d号土坑　Fc4-1グリッドに広がる。セクションベルト付近でしか確認できていないが，25a号土坑のうち，南半底面の一部が弱く焼土化しており，土質も異なることから，この範囲を別遺構＝25d号土坑としたが，25a号土坑の一部の可能性もある。土師器焼成坑とするには焼土化が弱い。正確な形状は不明だが，確認できた土坑の規模は，長軸66cm，掘り込み７cm。底面は比較的平らで，南に向かって傾く。25a号土坑と重複するようだが，先後関係は不明である。

25a～d号土坑の遺物は，埋土中に破片状態で分布。土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。このうち，明らかに25a号土坑出土と判定できるものは，浅型コンテナ２箱半分(4.6kg)あるのに対し，25b号土坑分は595g，25c号土坑分は10gと少なく，25d号土坑出土と特定できるものは無い。ただし，25a～d号土坑のいずれに帰属するか不明な遺物が浅型コンテナ１箱分(3.7kg)ある。

これら25号土坑の出土品(第55図410～419，図版６・36・37)のうち，410～412は須恵器で，有台杯AⅡ類蓋(410)のみ25a号土坑出土と特定できた。411・412は無台杯BⅡ類で，ロクロ水挽き・器面のちぢれなど，成形時のロクロ痕跡が明瞭である。また，２点とも内底面に油煙痕があり，灯明皿としての使用が想定される。

一方，413～419は土師器で，うち，413は25b号土坑出土，414・416～419は25a号土坑出土である。413は仏具有台椀の脚部と推定しており，内面に粘土屑の付着が残る。他は小型甕で，Ⅱ類(A：416，不明417)・Ⅲ類(B：419，不明418)がある。416は体部下半にカマセ材とみられる粘土片の付着が，417は外面に黒斑が残る。

この他，焼成粘土塊は25a号土坑から５点(計38.4g)，25b号土坑から13点(計73.6g)，25a～d号土坑のいずれに帰属するか不明なもの10点(計27.4g)が出土した。うち，25a号土坑の２点(第77図744・745)を掲載した。

27号土坑　９号土師器焼成坑の項に記載。

29号土坑（第55図，図版19）

調査区西半，Fc2-1・3-1グリッド，２号掘立柱建物のプラン内に位置し，Ｐ２に近接する。撹乱直下のＶ層上面でプランを検出した。長軸79cm，短軸70cmの楕円形で，掘り込みは28m。壁が緩やかに立ち上がる椀形。

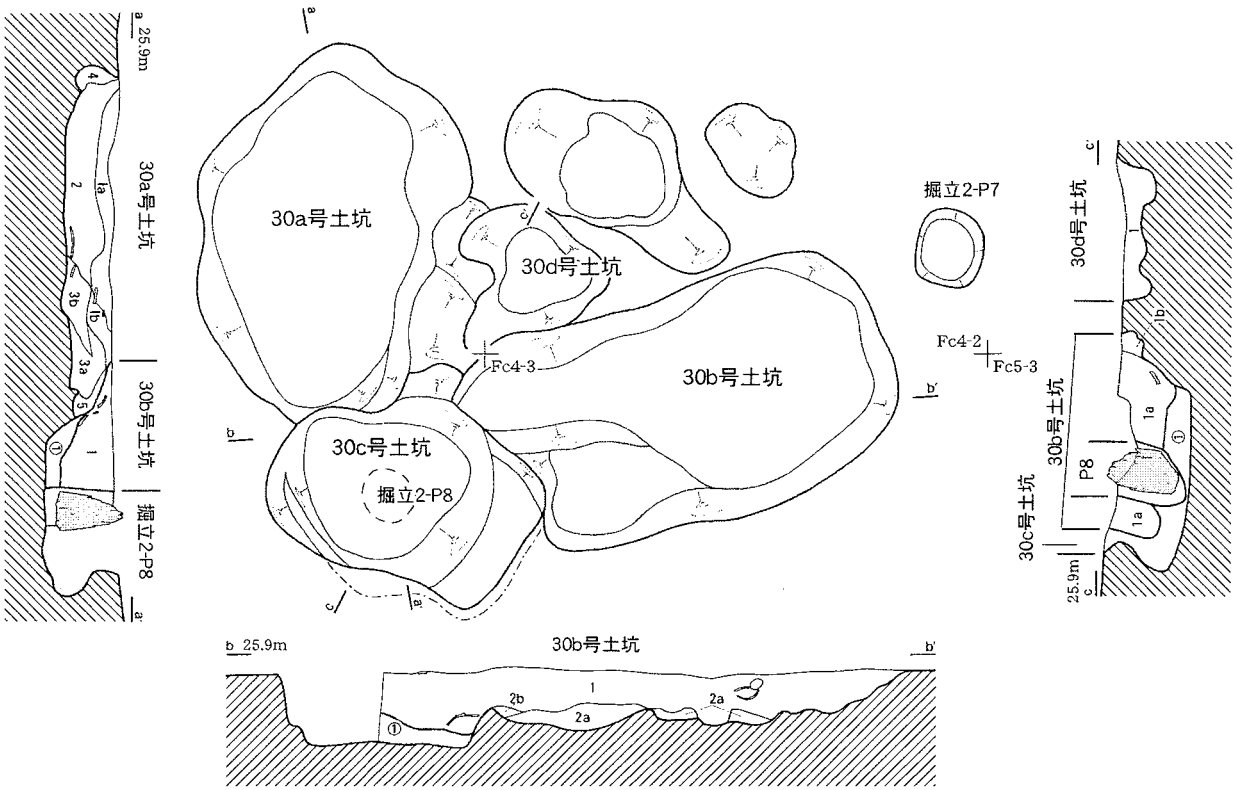
遺物は総量920ｇと少ない。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。うち，1個体(重量比1割強)(第55図420，図版37)を図化・掲載した。420は須恵器有台杯E類。小形浅身で非常に厚手。器面の状態から未使用と考えられる。この他，焼成粘土塊1点(9.9g)が出土した。

30(a～d)号土坑（第56図，図版19）

調査区西半中央，Fc3-2・3-3・4-2・4-3グリッドに位置し，２号掘立柱建物のプラン内に位置する。撹乱直下の地山Ｖ層上面でプランを検出した。複数の遺構が重複するが，確認面では判別できなかったため，一まとまりの遺構として掘削に着手，調査過程で順次，別遺構として分離していった。

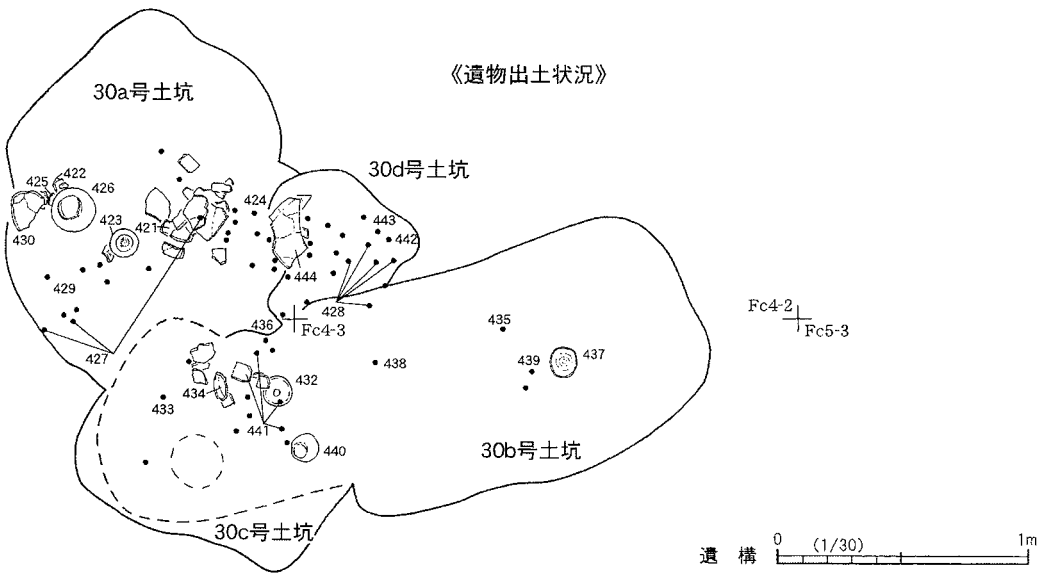
30a号土坑　Fc3-2・3-3グリッドに位置する。30b号土坑との重複により，正確な形状は把握できないが，残存部で長軸124cm，短軸109cmの楕円形。掘り込みは20cmで，底面は平らである。壁はややオーバーハング気味だが，立ち上がりの明瞭な箱形である。30b・c号土坑と重複し，これらに先行する。30d号土坑とは隣接し，先後関

係は不明である。埋土に，にぶい黄褐色土粒を目立って多く含む層(２～５層)があり，出土状況図に示すとおり，大形破片状態の遺物を含むことから，遺物の廃棄に際し，順次土壌も投入したと考えられる。



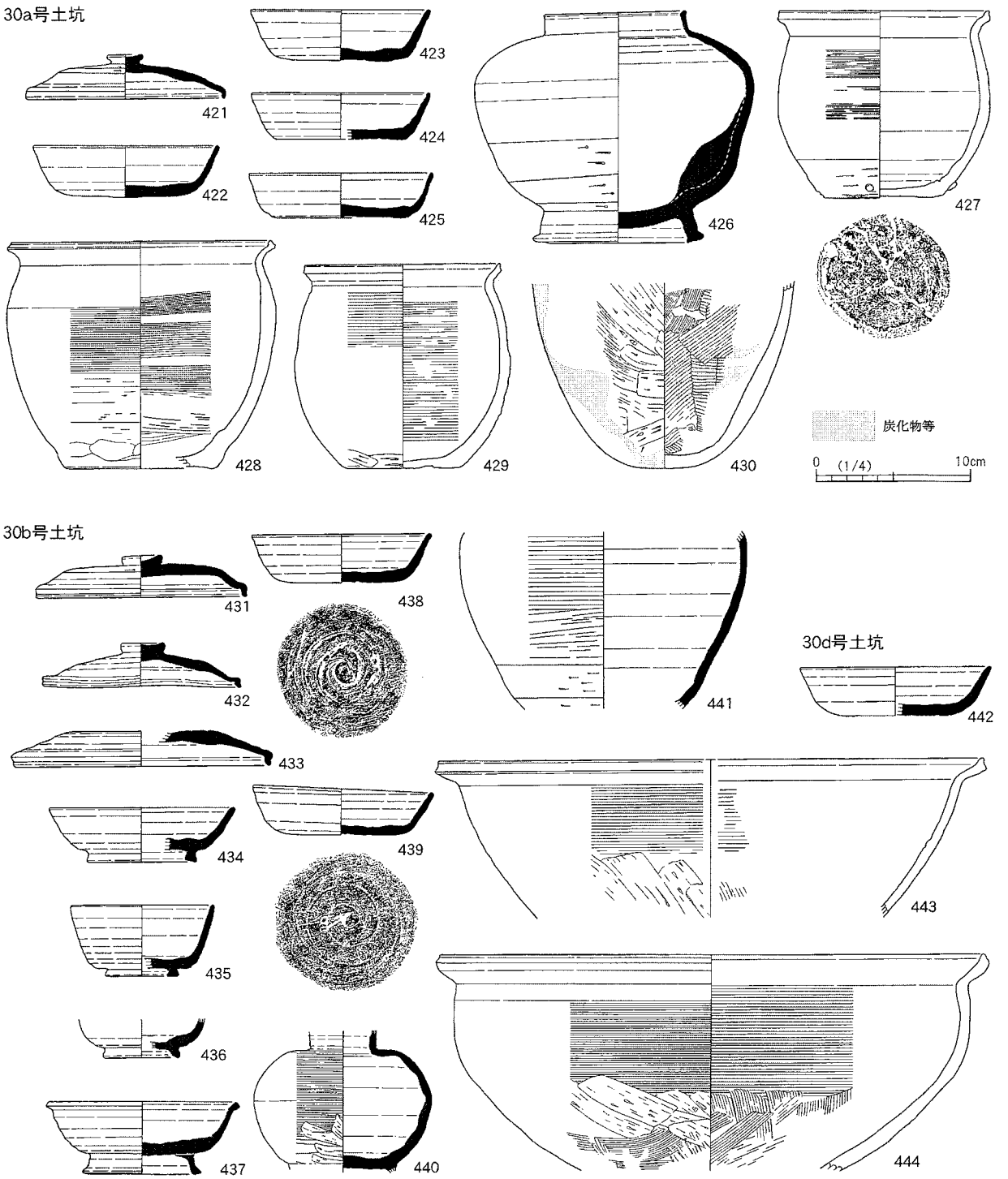
30ａ号土坑
１層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ5mm焼土粒少、黄褐色土粒をしみ状に含む。しまり良、粘性有。炭化物粒・焼土粒が少ない部分(b層)あり。
２層　10YR4/3にぶい黄褐色土中に黒褐色土粒とにぶい黄褐色土粒・灰黄褐色土粒をしみ状に含む。しまり良、粘性ふつう。
３層　10YR2/1黒色土　しまり良、粘性強。混入物のほとんどない部分(a層)と、φ3mm焼土粒少、φ3～5mm黄褐色土粒多を含む部分（b層）とがある。
４層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒微、黄褐色土粒をしみ状に含む。しまり良、粘性有。
５層　10YR4/2灰黄褐色土中にしみ状に暗褐色土を含む。しまり良、粘性有。
２号掘立柱建物-Ｐ８
10YR3/1黒褐色土　しまりややゆるく、粘性あり。

30ｂ号土坑
１層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒多、φ3～5mm焼土粒中量、φ3～5mm黄褐色土粒少、φ3mm～1cmの黄灰色土粒少。しまり良、粘性有。本層(a層)中に、部分的に混入物の少ない部分（b層）あり。
２層　10YR4/2灰黄褐色土にφ3～5mm炭化物粒少、φ3mm～1cm黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。本層(a層)中に、混入物が少なく、10YR4/1褐灰色を呈する部分（b層）あり。
30ｃ号土坑
①層　10YR3/3暗褐色土　φ5mm炭化物粒少、φ5mm～2cmのにぶい黄褐色土粒を多量に含む。しまり良。粘性あり。
30ｄ号土坑
１層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ5mm焼土粒少、φ3～5mm黄褐色土粒多。φ5mm～3cm黄灰色土ブロック多。しまり良、粘性ふつう。



第56図　30(ａ～ｄ)号土坑

遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ3箱弱(4.7kg)あり，このうち10個体(重量比5割弱)(第57図421～430，図版37)を図化・掲載した。なお，428は30a・b・d号土坑にまたがって破片が出土しており，先行する30a・d号土坑のいずれかに伴うと推測される。須恵器は，有台杯AⅡ類蓋(421)，無台杯AⅡ類(422・423)・BⅡ類(424・425)，球胴短頸壺(426)がある。421の内面は不純物の吹き出しが著しく，423は内面に火だすきが確認できる。不良品が多く，423は口縁に焼成時の亀裂があり，426は焼き膨れが著しく，歪みも大きい。内底部に釉溜りがあり，無蓋で焼成されたようである。土師器は小型甕Ⅱ類(A：427・428，B：429)，長胴甕(430)があり，427・428は体部下端に，カマセ材とみられる粘土粒が付着する。430は内外面にスス・アク・



第57図　30(a・b・d)号土坑　出土遺物

コゲなどの炭化物の付着があり，全面が二次的に被熱している。

30b号土坑　Fc3-3・4-2・4-3グリッドに位置する。長軸246cm，短軸93cmの不整形。掘り込みは26cmで，壁が緩やかに立ち上がる椀形である。底面には細かい凹凸がある。２号掘立柱建物-P８と30a・c号土坑と重複し，前者に先行し，後者より後出する。また，d号土坑とは重複もしくは隣接し，先後関係は不明である。

埋土は２層で，遺物の大半は１層からの出土である。２層は灰黄褐色土を主体とする人為的な埋め立て土層。遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。浅型コンテナ1箱分強(2.9kg)あり，このうち11点(重量比5割弱)(第57図431～441，図版37・38)を図化・掲載した。須恵器食膳具には，有台杯ＡⅠ類蓋(431)・ＡⅡ類蓋(432)・B類蓋(433)，有台杯ＡⅡ類(434)・C2類(435)・C類(436)，折縁杯B類(437)，無台杯ＡⅡ類(438)・ＢⅡ類(439)がある。431の摘みはボタン形。432の摘みは擬宝珠形だが，中央の盛り上がりが極めて低い。437は足高高台。無台杯439は，器壁の厚さと体部の立ち上がり具合が小泊製品に類似する。また，434・435・438は胎土含有物の吹き出しが多くみられる。また，不良品も多く，434には焼き膨れ，437・439のは焼成時の亀裂が見られる。この２点には，ロクロ水挽き痕・ちぢれ痕も観察できる。

須恵器貯蔵具は，小型長頸瓶(440)と長頸瓶(441)があり，440の高台は意図的に打ち欠かいたようである。

この他，焼成粘土塊16点(計75.5g)が出土した。

30c号土坑　Fc3-3・4-3グリッドに位置する。長軸104cm，短軸64cmの不整形。掘り込みは30cm，底面は平らで，壁が明瞭な箱形，もしくはオーバーハングして立ちあがる袋形である。２号掘立柱建物-P８と30b号土坑と重複し，これらに先行する。30a号土坑とも重複し，これより後出である。

遺物は土師器甕類の小片110gが出土。図化に耐えないが，これらから，本遺構の時期は古代に位置付けられる。

30d号土坑　Fc3-2・4-2グリッドに位置する。長軸60cm，短軸56cmの不整形。掘り込みは11cmと浅く，底面には細かい凹凸がある。30a・b号土坑とは重複もしくは隣接し，先後関係は不明である。

掘り込みは浅いが，遺物出土量は浅型コンテナ２箱分弱(1.9kg)ある。土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を含む。うち，３個体(重量比6割強)(第57図442～444，図版38)を図化・掲載した。須恵器無台杯ＡⅠ類(442)と土師器鍋(443・444)がある。443はやや焼成不良で，内面の剥落が著しい。また，焼成粘土塊1点(28.2g)が出土。

31号土坑（第58図，図版19）

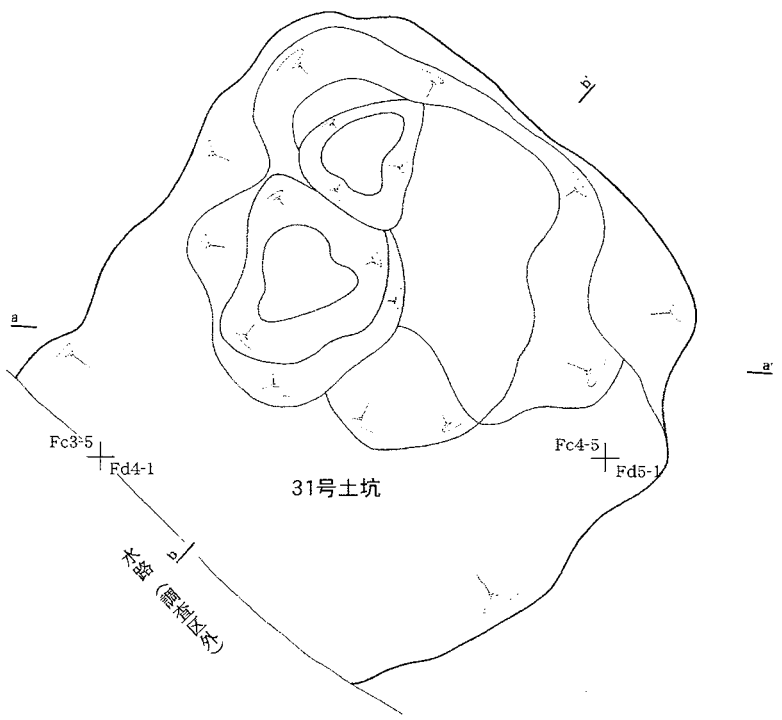
調査区西半南端，Fc4-5・5-5，Fd4-1・5-1に位置する。Ⅱa層の掘削中から土器破片が多量に出土しており，遺構の存在は確認出来ていたが，明確にプランを検出したのはⅣ層上面である。南西隅が調査区外まで延びているが，検出部分で長軸228cm，短軸219cmの隅丸方形。掘り込みは54cmで，底面は凹凸が著しく，壁の立ち上がり方は不整形である。重複遺構は無い。

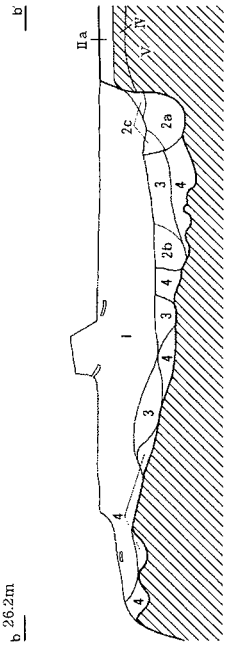
遺物は，遺構確認面から破片の状態で出土したものが多く，埋土中からの出土品は少ない。土坑がある程度埋没し終えた後に，窪地として廃棄場所に利用されたと考えられる。

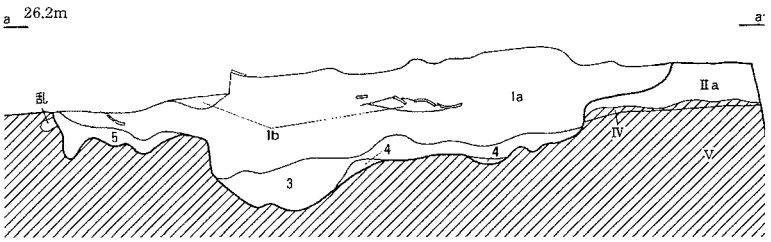
遺物は浅型コンテナ15箱分強(33.7kg)と多い。土師器甕類を主体とし，焼成不良品を含む須恵器杯・甕類を少量出土した。また，他の遺構からはほとんど出土していない土師器の食膳具が，少ないながら比較的まとまって出土している。出土遺物中42点(重量比3割弱)(第59・60図445～486，図版６・38・39)を図化・掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯ＡⅠ類蓋(445・446)・ＡⅡ類蓋(447)・蓋摘み(448)，有台杯ＢⅠ類(454)・C2類(450)・C類(449・451～453)，無台杯ＢⅡ類(455)，無台椀？(456)がある。使用痕跡の確認できるものが比較的多く，447・451・455は，口縁端部・内外底面・高台などが擦れて磨耗している。また，452は高台にススが付着する。この他，448・449は，器面がアバタ状に剥離している。須恵器貯蔵具には横瓶(457)，甕(458～460)がある。

一方，土師器の食膳具には，無台杯ＢⅠ類(461～463)・Ⅱ類(464・465)・C類(466)，蓋の摘み(467)，金属器模







31号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒中、φ2mm～1cm焼土粒中、φ2～3mm黄褐色土粒中。しまり良、粘性ふつう。本層(a層)中に、φ2～3cmの黄褐色土ブロックをまとまって含む部分（b層）あり　。

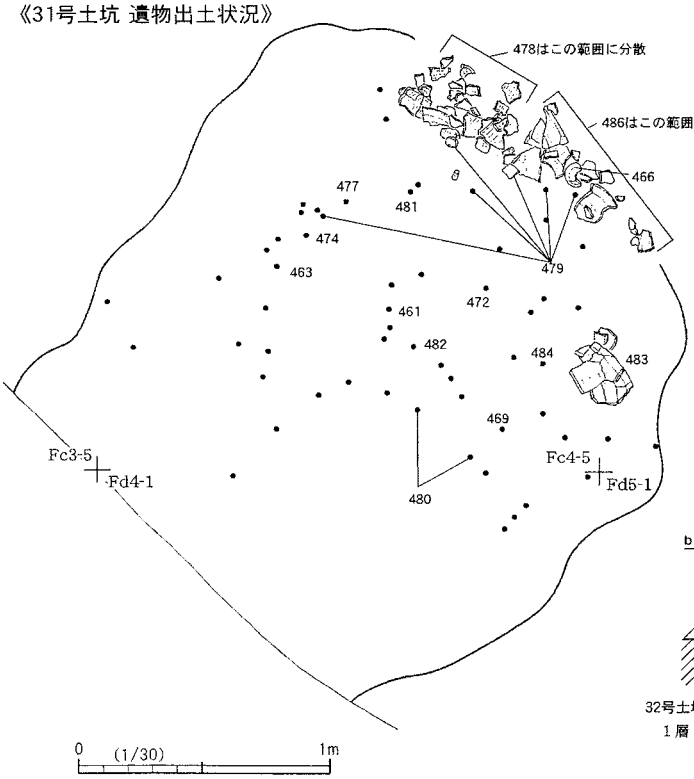
2層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm炭化物粒多、φ5mm～3cm黄褐色土粒・ブロック多。本層(a層)中には、黄褐色土粒をしみ状に含む部分(b層)と、10YR4/2黄灰色土ブロックを含む部分(c層)とがある。

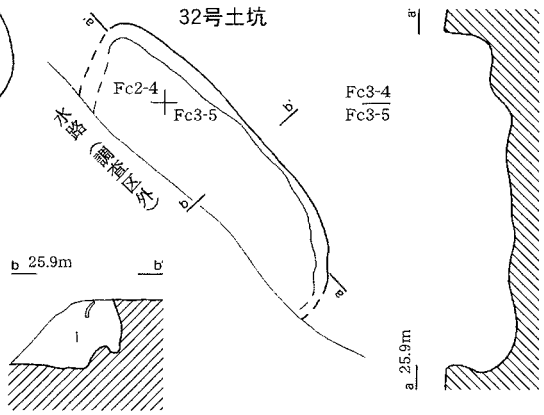
3層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm炭化物粒中、φ3～5mm黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性有。

4層　10YR4/2灰黄褐色土　φ3～5mm炭化物粒中、φ2mm～1cm黄褐色土粒多。しまり良、粘性有。

5層　10YR4/2灰黄褐色土　黄褐色土中にしみ状に灰黄褐色土を含む。しまり良、粘性有。

《31号土坑 遺物出土状況》

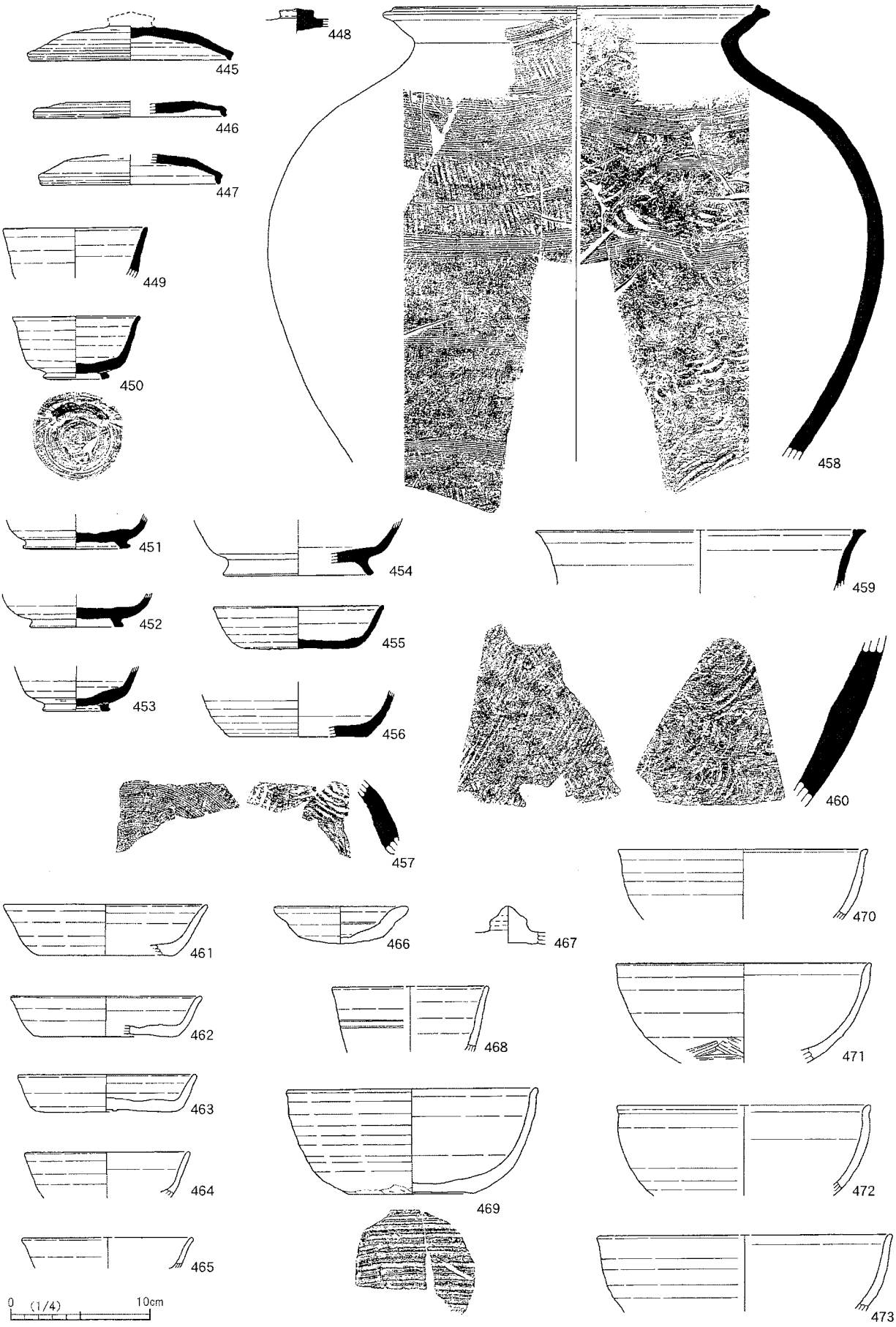




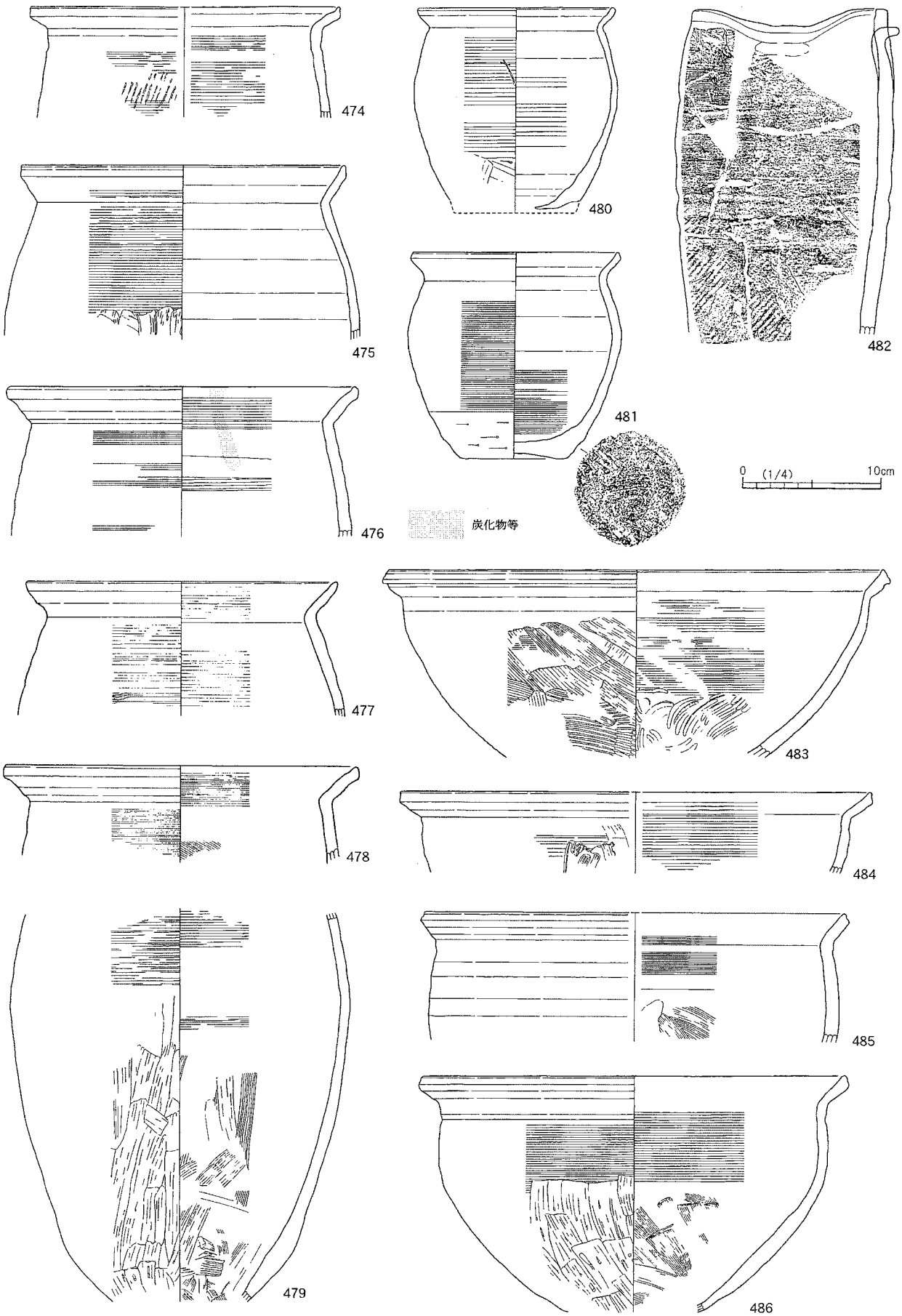
32号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ3mm～1cm炭化物粒少、φ2mm焼土粒中。しまりややゆるく、粘性あり。

第58図　31・32号土坑



第59図　31号土坑　出土遺物(1)



第60図　31号土坑　出土遺物(2)

倣の有台杯(468)，無台椀ＡＩ1類(469～473) がある。なお，土師器食膳具としたもののうち無台杯B類は，酸化炎焼成の須恵器との区別が困難であるが，胎土および黒斑の有無を基準に，須恵器と判別した。なお，461～463の器形をみると，須恵器の同器種に比べ，わずかだが身が浅い。無台椀がまとまって出土しており，いずれもＡＩ1類。口縁端がわずかに外反，内面が特に丁寧にロクロナデされる金属器模倣品である。これら食膳具類は，全般的に胎土が精良だが，466のみ胎土がやや粗く，厚手である。462～464・468・469は，外面に黒斑が残る。

土師器煮炊具も比較的まとまって出土しており，長胴甕(474～479)，小型甕Ⅱ類(A：481，B：480)，円筒形土製品(482)，鍋(483～486)がある。このうち，480は体部中位に「×」のヘラ描きがある。476は内面にアクの垂れたような付着物が，外面には火色が残る。478はススが若干付着する。482は焼成失敗品で，体部上位にハジケ状の大きな亀裂がある。口縁は片口状だが，焼成時の焼き歪みの可能性もある。477は胎土のＸ線回折分析(試料番号⑫)と薄片分析(試料番号⑦)を実施した。

この他，焼成粘土塊が95点(計938.6g)と多量に出土しており，全遺構出土分の２割近くにあたる。このうち，６点(第76・77図722・740・741・746・762・763)を掲載した。

32号土坑（第58図，図版19）

調査区西半南端，Fc2-4・2-5・3-4・3-5グリッドの交点に位置する。地山のＶ層上面でプランを検出した。南西部分が調査区外へ延びているため，正確な形状は把握できないが，長軸133cm，検出部分の短軸は41cmある。掘り込みは26cmで，底面は比較的平らで，壁の立ち上がり方も明瞭な箱形を呈する。重複遺構は無い。

遺物は土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を含む計1.2kgを出土した。これらの出土土器片からみて，本遺構は古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊６点(計159.1g)が出土しており，このうち，１点(第77図759)を掲載した。なお，759は今回，焼成粘土塊に含めて扱ったが，土器片を変形した粘土塊のうち，唯一，方形粘土板としての製作の意図性がうかがわれ，他の焼成粘土塊とは性格の異なる可能性がある。

33(a・b)・34・35号土坑（第61図，図版20）

調査区西半北西端，Eb3-5・4-5，Ec4-1グリッド，４号掘立柱建物のプラン内に位置する。Ⅲ層の黒色土上面でプランを検出した。各土坑とも掘り込みが浅く，Ⅳ・Ⅴ層まで達していない。

33a・b号土坑　Eb4-5・5-5グリッドに位置する。一つの遺構と認識して調査したが，掘削終了後，別遺構との判断に至った。

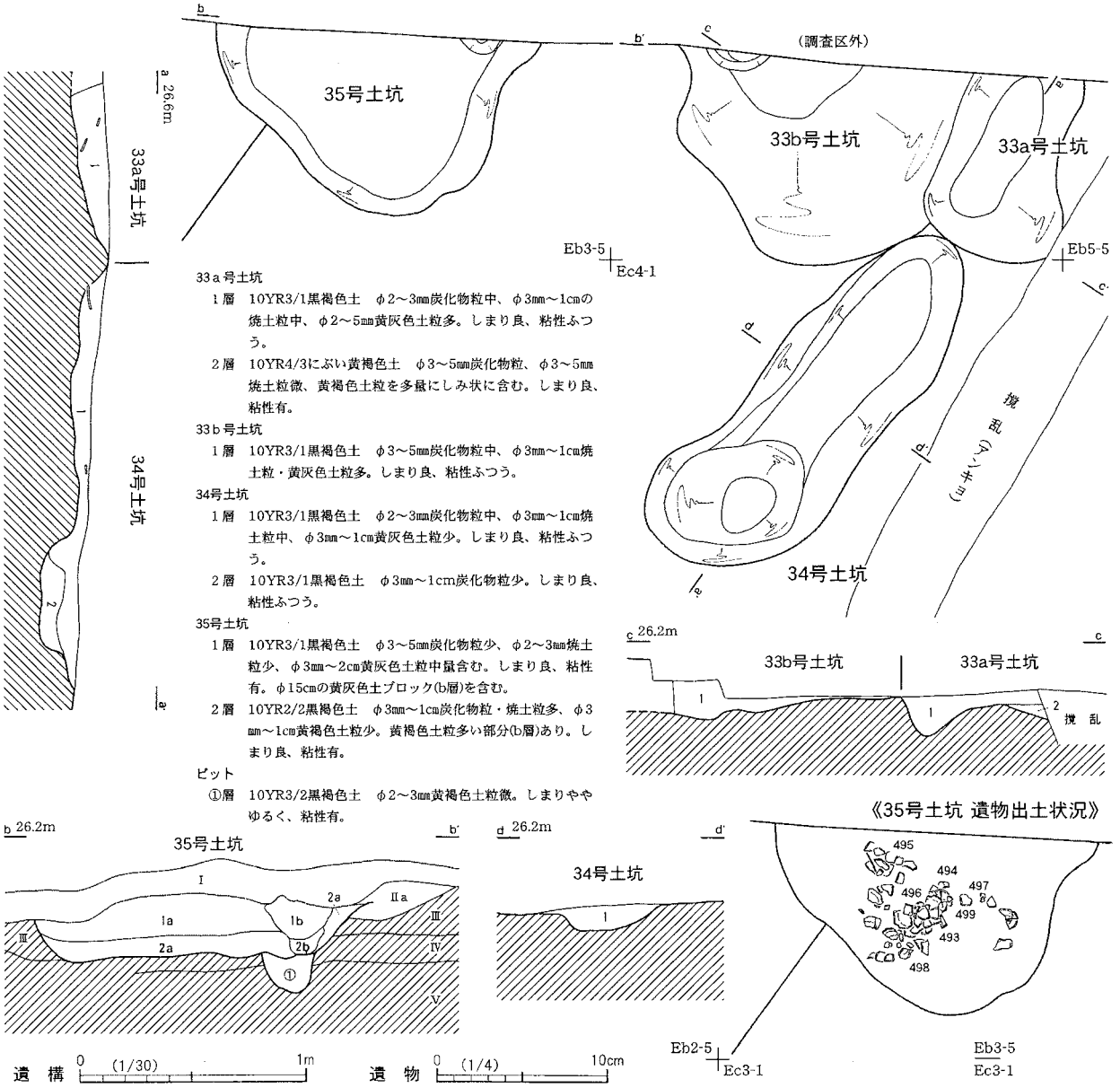
北側が調査区外に延びており，正確な規模は不明だが，検出範囲で33a号土坑が長軸85cm，短軸62cmの楕円形。33b号土坑が長軸130cm，短軸90cmの楕円形である。ともに掘り込みは18cmで，底面には凹凸がある。

出土遺物は総量1.9kgと少なく，土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。このうち，羽口１点と須恵器甕１点(重量比2割弱)を図化した（第61図487・488，図版39）。487の羽口には黒色のガラス質が融着している。この他，焼成粘土塊20点(計175.0g)が出土した。

34号土坑　Ec4-1グリッドに位置する。長軸183cm，短軸64cmの長楕円形である。掘り込み18cmで底面に凹凸がある。遺物は総量1.2kgと少なく，土師器甕類と須恵器類，焼成不良の須恵器もしくは土師器の杯がある。うち，須恵器小型短頸壺１点と土師器甕１点(重量比1割弱)(第61図489・490，図版６・39)を図化した。土師器甕(490)は内外面にアク・ススが付着し，使用痕が認められる。また，焼成粘土塊５点(28.3g)が出土した。

35号土坑　Eb3-5グリッドに位置する。北側が調査区外に延びており，正確な規模は不明だが，長軸143cm，検出範囲での短軸が80cmある。楕円形の南半か。掘り込みは26cmで，底面は平らである。壁の立ち上がりが緩やかで椀形を呈する。

遺物出土状況図(第61図)に示す通り，1層中から，破片状態ながら土師器杯がまとまって出土した。本遺跡では，



第61図　33(a・b)・34・35号土坑と出土遺物

土師器の食膳具が少ないこともあり，注目される。出土遺物は浅型コンテナ1箱分強(3.0kg)あり，土師器甕類と土師器杯類が主体，少量の須恵器杯・甕類を含む。うち９個体(重量比３割強)(第61図491～499，図版６・39)を図化した。492は黒色土器で，稜椀や盤などの大型器種の高台部分であろう。内外面丁寧にヘラミガキされているが，器面が全体的に磨耗している。493～499は土師器無台杯で，493～497がＡⅡ類，498・499がＢⅡ類。なお，これら土師器杯は，酸化炎焼成の須恵器との区別が困難であるが，胎土および黒斑の有無を基準に，須恵器と識別しており，495～497・499は外面に黒斑が残る。また，493～498は，須恵器の同器種に比べ，やや厚手である。

36号土坑（第62・63図，図版20）

調査区西半西端，Ec2-2・2-3・3-2・3-3グリッドに位置する。Ⅲ層の黒色土上面でプランを検出した。Ecグリッドは，旧農道下に当たる今回調査部分のみ，遺構が残存していたが，調査区の東側・西側は，過去の水田耕作及び水路掘削により削平されている。この調査区を東西に横切る形で延びる36号土坑も，東端・西端が失われているが，残存部分で長軸382cm，短軸208cmの長楕円形を呈する。掘り込みは44cmで，底面は比較的平らである。ただし，土坑底の北・東部に複数のくぼみが存在する。くぼみは概ね椀形で，長軸70～80cm，短軸約50cm，深さ20cm弱ある。36号土坑の壁は，明瞭に立ち上がる箱形である。重複遺構はないが，本遺構の軸方向が，隣接する５号掘立柱建物とほぼ並行しており。これに伴う可能性がある。

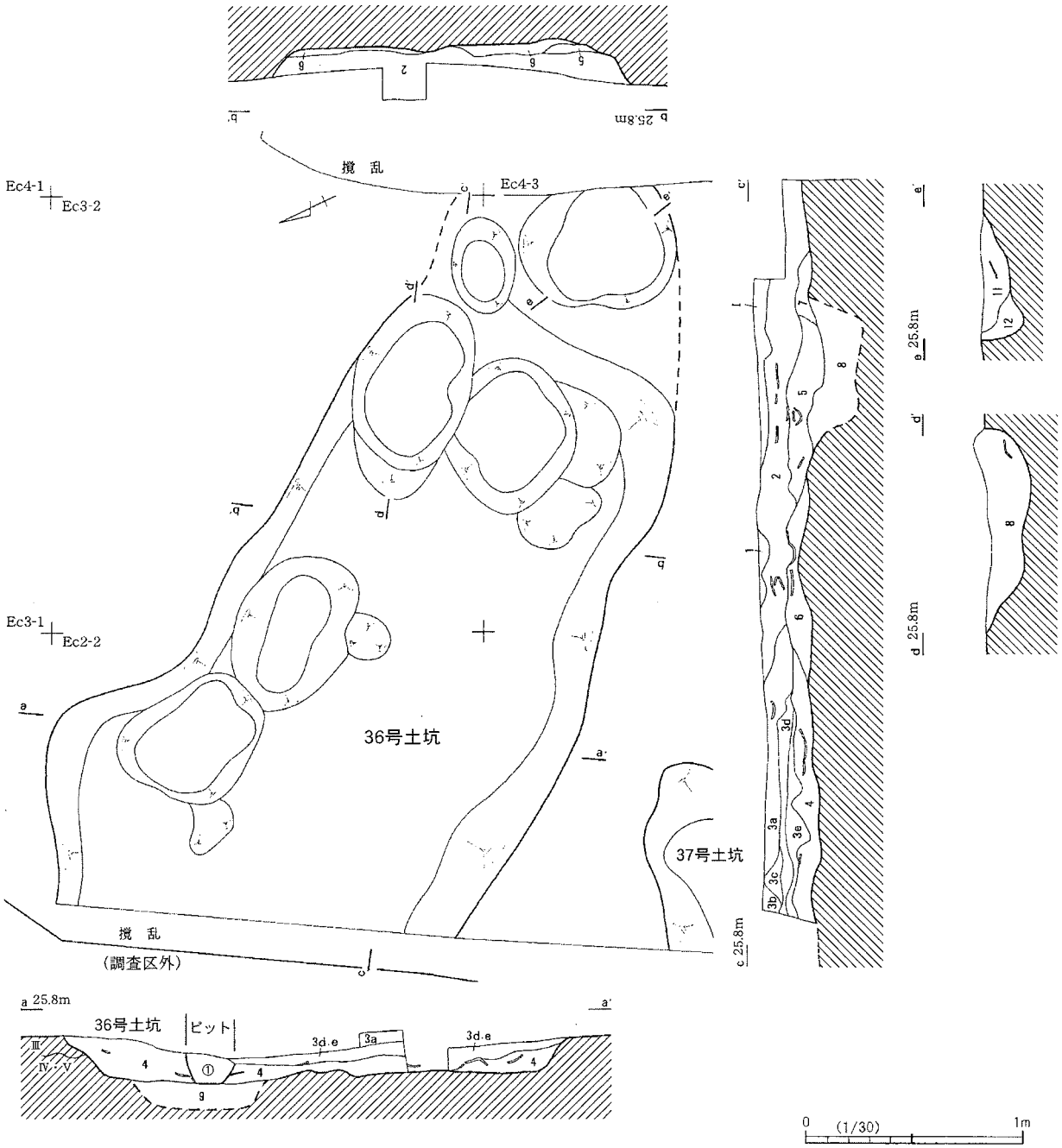
埋土は特徴的で，多量の焼土・黄褐色土・黄灰色土の粒・塊や炭化物粒を目立って含む層が，互層に堆積していた。これらに混じって，各層とも破片状態の遺物を多量に含む。遺物分布図(第63図)に示す通り，同一個体の破片が分散して出土しており，本遺構は不要な土器片を土壌とともに投棄した廃棄土坑と考えられる。

出土遺物は浅型コンテナ29箱分弱(61.4kg)と多量である。土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類や黒色土器・土師器杯類を少量含む。須恵器杯類の中には，焼成不良品か土師器か判断に悩む製品が含まれている。また，まとまった量の黒色土器や，本遺跡では数少ない土師器杯を含むなどの出土傾向が認められる。このうち127点(重量比３割強)(第63～67図500～626，図版６・39～44)を図化・掲載した。

須恵器食膳具には，有台杯ＡⅠ類蓋(500)・ＡⅡ類蓋(501～503)・D類蓋(504)，有台杯ＡⅠ類(505～510)・ＡⅡ類(511～519)・A類(520)・ＢⅡ2類(522)・B類(521)・C1類(523～527)・C2類(528・529)・C類(530・531)・ＤⅡ1類(532)・D類(533)，折縁杯A類(534)・B類(535･537)・C類(538・539)・E類(536)，無台杯ＡⅠ類(540～542･544)・ＡⅡ類(543･545～550)・ＢⅠ類(551～553)・ＢⅡ類(554～560)，杯(561･562)，無台椀A2類(563)がある。うち，有台杯蓋の摘みは残存する個体が少なく，擬宝珠形の501のみである。504は平らな天井部と小さく屈折した口縁を持つ特殊な器形。この他，折縁杯には祖形器種の特徴を強く残すものがあり，534は金属器稜椀，538は同蓋の要素が見られる。533も折縁杯の可能性もある。また，510は高台内，548は外底部に「×」，515は高台内に「大」が，各々ヘラ描きされている。

これらの食膳具には使用痕を残すものが多く，506･507･509･510･514･515･516･522･525･529･536・540・544・548・553・554・558・563の高台や口縁・内底面などに磨耗が見られる。特に525･536は，高台打ち欠きが意図的に行われたようで，高台欠損部も使用により磨耗している。焼成は，良好・硬質堅緻なものがある一方で，瓦質・軟質な個体も多い。また，505・507・510・528の内底面には，別個体の重ね焼き痕が残る。この他，518は内底面，524は口縁部外面に，別個体の口縁部破片が融着している。527は重ね焼き時の融着の打ち剥がしに失敗し，器面が大きく欠損している。焼成時の不良品もいくつか出土しており，518･521は焼き歪み，528・529は焼き膨れ，544は焼成時の亀裂が認められる。なお，555は，胎土のＸ線回折分析を実施した(試料番号⑩)。

須恵器貯蔵具には，短頸壺蓋(564・565)，球胴短頸壺(566)，長胴壺(567)，瓶・壺類耳(568)，鉢Ⅱ類(569)があ



36号土坑

1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒少、黄褐色土粒少、砂礫少。しまり良、粘性ふつう。

2層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ2～3mm焼土粒中、φ2～3mm黄褐色土粒少、砂礫少。しまりふつう、粘性ふつう。

3層　炭化物・焼土・黄灰色土を多量に含む土が、互層に堆積。しまり良、粘性ふつう。

a層　7.5YR4/3褐色土　φ2～3mm炭化物粒微、φ2～8mm焼土粒極多、φ5cm前後の黄灰色土ブロックを含む。

b層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm焼土粒中、φ2～3mm黄褐色土粒少、砂礫少。

c層　7.5YR4/3褐色土　φ3～5mm焼土粒極多。

d層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm炭化物粒微、φ2～5mm焼土粒多、φ2～5mm黄灰色土粒多。

e層　7.5YR4/3褐色土　φ5mm～1.5cm炭化物粒少、φ5mm～1.5cm焼土粒多、φ5mm～2cm黄灰色土粒多。粘性少し強い。

4層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ3～5mm焼土粒微、φ3～5mm黄灰色土粒少。しまりややゆるく、粘性強。

5層　10YR2/1黒色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ2～3mm黄褐色土粒微、しまり良、粘性あり。

6層　10YR4/2灰黄褐色土　φ2～3mm黄褐色土粒と黄灰色粘土粒を含む。しまりややゆるく、粘性あり。

7層　10YR3/1黒褐色土中に黄褐色土ブロック多。しまりやや弱く、粘性強。

8層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm黄褐色土粒少。しまりふつう、粘性有。

9層　10YR3/3暗褐色土中にφ2～3mmの黒褐色土粒・黄褐色土粒多、φ5cmの黒褐色土粒をまだらに含む。しまりややゆるく、粘性あり。

10層　10YR3/2黒褐色土　φ3～5mm炭化物粒少、φ2～5mm黄褐色土粒多。しまりややゆるく、粘性あり。(底面のくぼみに堆積。断面図に現れない)

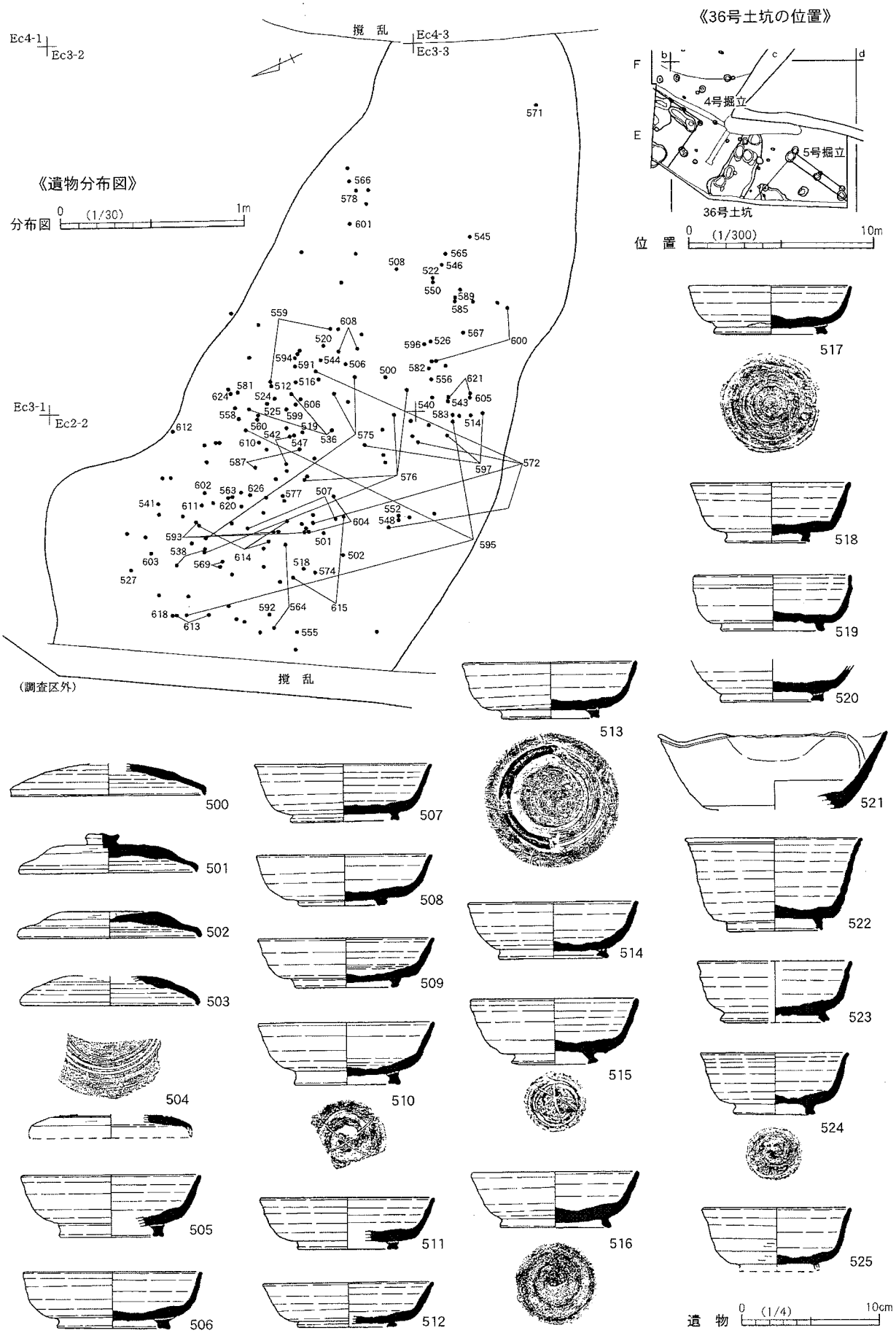
11層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒微、φ2～3mm黄褐色土粒少。しまり良、粘性あり。

12層　10YR3/3暗褐色土　φ3～5mm黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。

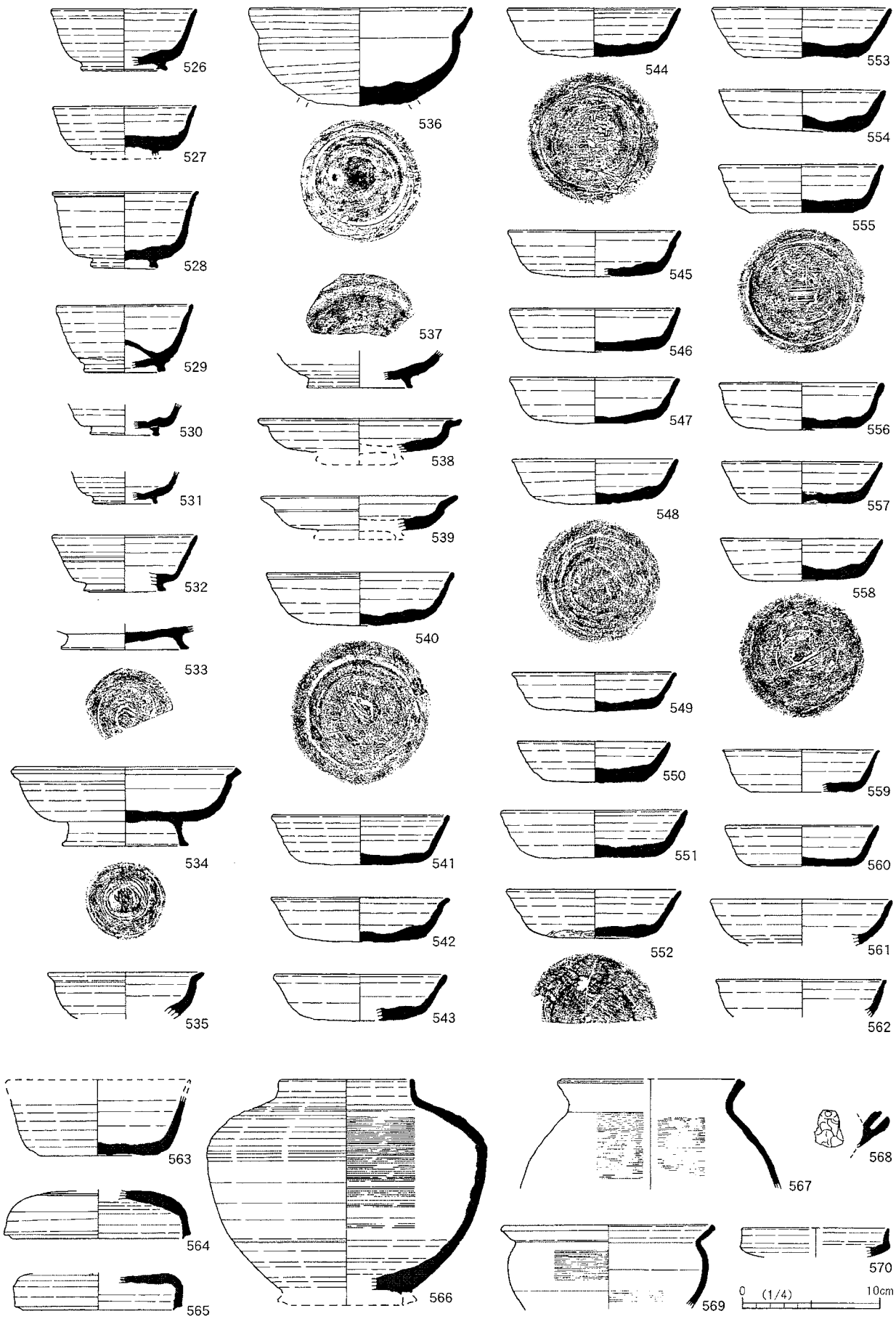
ピット

①層　10YR3/2黒褐色土　φ2～3mm炭化物粒微、黄褐色土粒少、砂礫少。しまりふつう、粘性有。

第62図　36号土坑(1)



第63図　36号土坑(2)と出土遺物(1)



第64図　36号土坑　出土遺物(2)

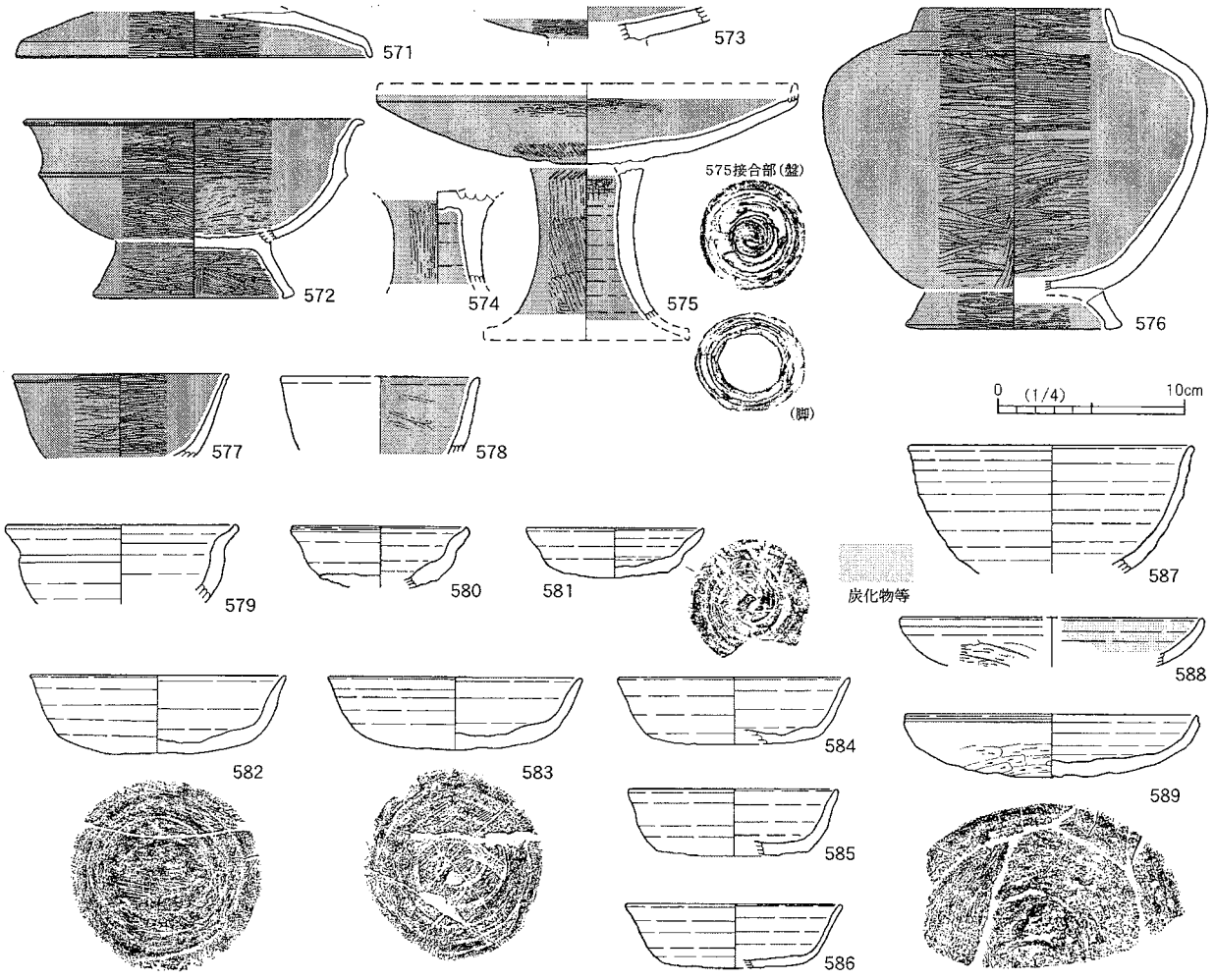
る。564・565はともに，器面の状態から見て未使用である。口縁部に，身との融着を打ち剥がした痕跡が残る。566は高台をきれいに欠損しており，意図的打ち剥がしたものであろう。567・569は器面の状態から見て未使用である。567は胎土がやや粗く，土師器の可能性も考えたが，器形から須恵器とした。

この他，570は焼台としたが，小形瓶壺類の蓋の可能性もある。

黒色土器は稜椀Ⅰ類(572)・蓋(571)，高盤(573～575)，有台杯(577・578)，球胴短頸壺(576)がある。いずれも器面を丁寧に磨いた優品であり，内外面黒色処理を基本とするが，578は内面のみ黒色処理されている。575・578を除き，いずれも磨耗の著しい部分があるのは，使用の痕跡であろう。なお，577は胎土の薄片分析を実施した(試料番号⑪)。

土師器食膳具は折縁杯(579)，無台杯AⅠ類(582・583)・AⅡ類(584～586)・C類(580・581)，無台椀AⅡ1類(587)，Ⅲ(588・589)がある。このうち，582・583は外底部に「×」がヘラ描きされている。587は口縁端がわずかに外反する金属器模倣品で，器面の状態から未使用と見える。588はススが付着する。これらの食膳具は，全般的に胎土が精良だが，582・583・588・589はやや胎土が粗く，581・589は外面に黒斑が残る。また，無台杯A類の582～586は，焼成・胎土の特徴から土師器としたが，須恵器に同器種が存在するため，酸化炎焼成須恵器の可能性もある。583は胎土のX線回折分析(試料番号⑬)と薄片分析(試料番号⑧)を実施した。

土師器煮炊具には長胴甕(590・592・594 ～ 596・598・599)，小型甕Ⅰ類(B:597・613 ～ 616，不明:591・593)・Ⅱ類(A:600 ～ 605，B:612，不明:617・618・620・621)・Ⅲ類(A:606 ～ 609，B:611，不明:619)・AⅣ類(610)，



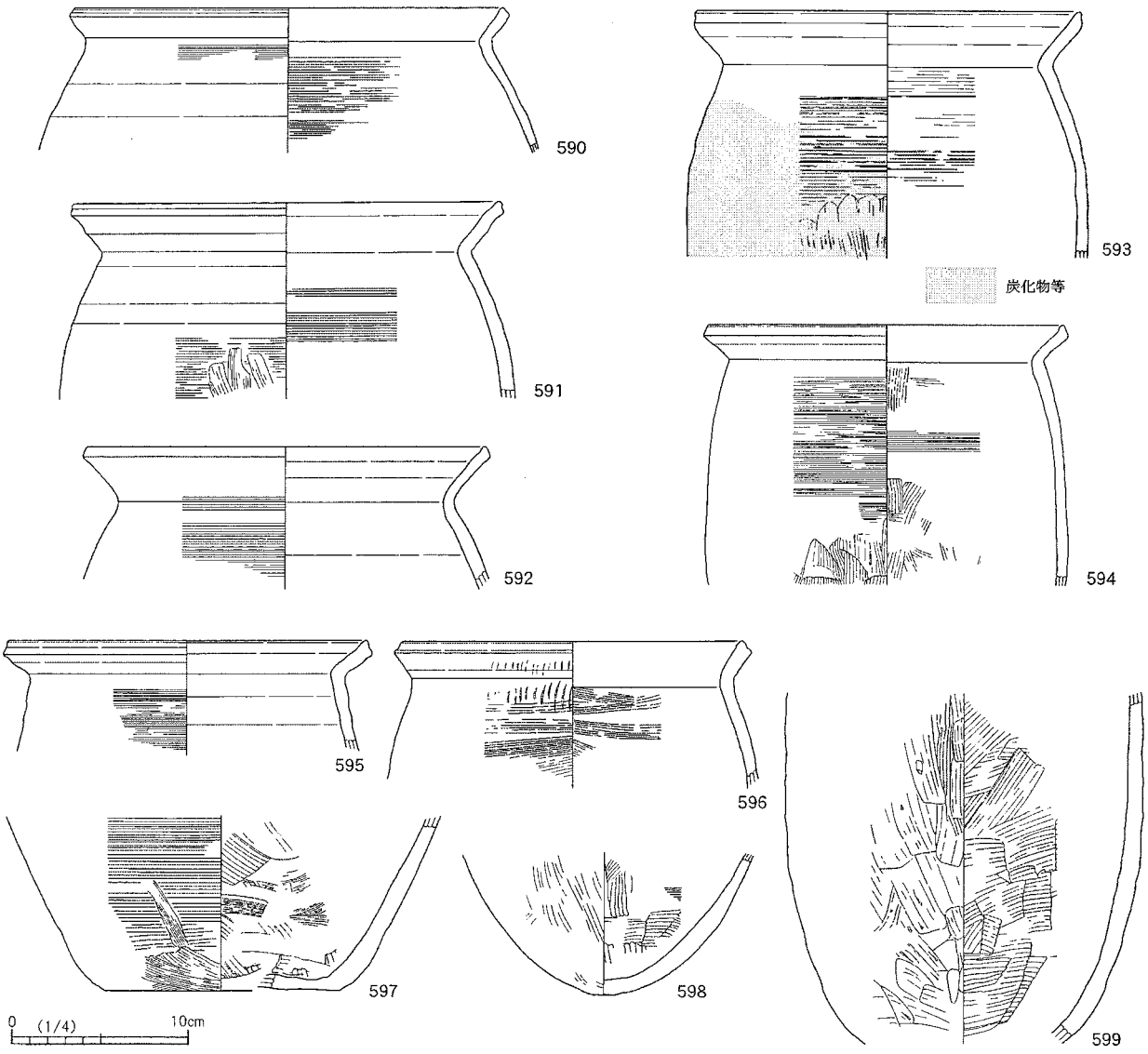
第65図　36号土坑　出土遺物(3)

鍋(622)・把手(624), 製塩土器(626)がある。小型甕はⅡ類が主体だが, Ⅰ類も多く, 特に大型品(591・593・597・614・615)を含むことが目を引く。これら小型甕の底部切り離し痕は, ヘラ切り・糸切りの両方が確認できるが, ナデ調整もしくは器面劣化により観察できないものも少なくない。

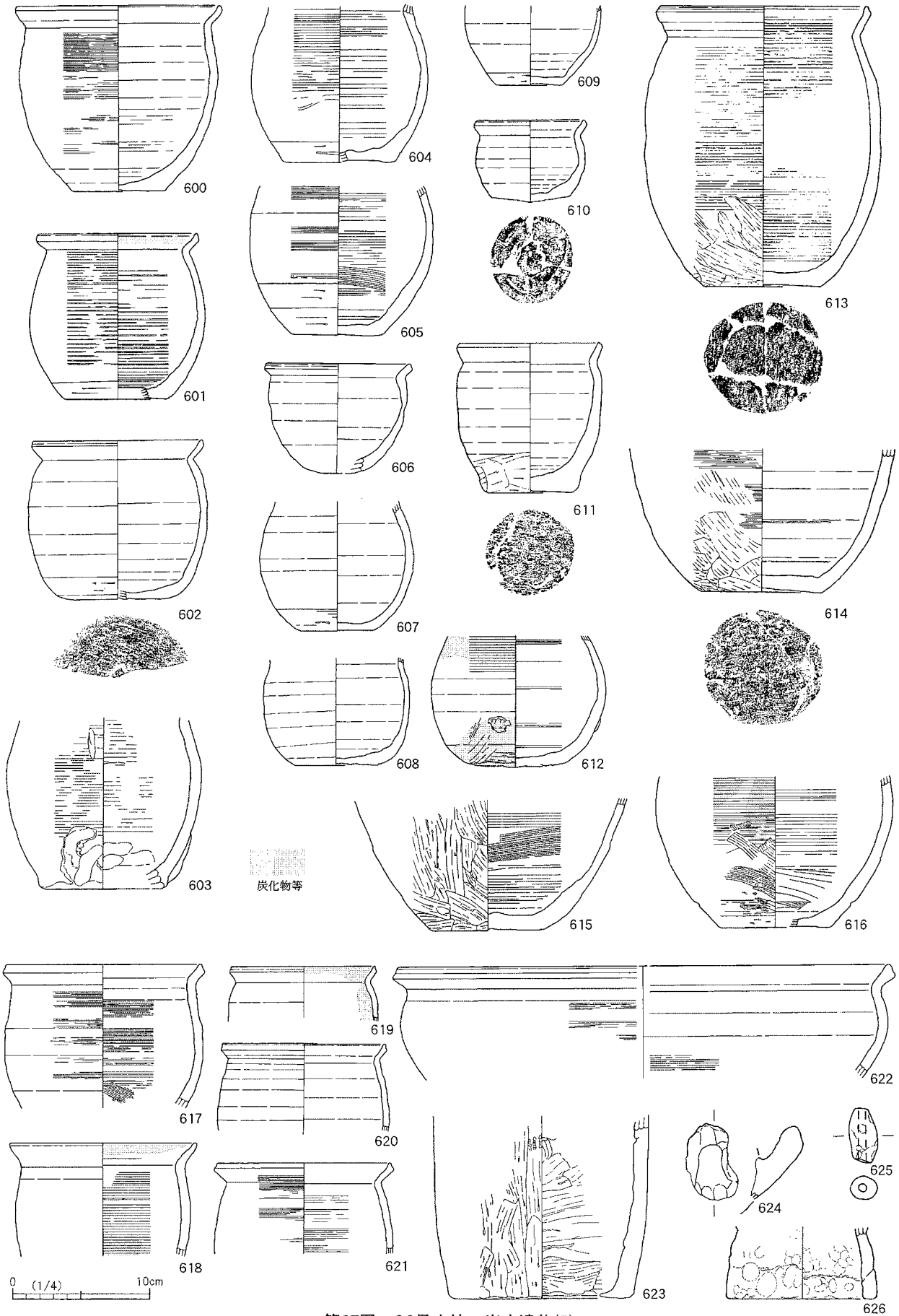
煮炊具には黒斑の残る個体が多く(591・592・597・598・605・607・610・614)特に610は, 外面に薪燃料の当たっていたことを示す棒状黒斑を確認できる。また, 小型甕にはススやアク・コゲなどの炭化物が付着する個体も多い(593・601・612・613・616・618・619)。この他, 焼成時のカマセ材か, 612は体部下半に, 603は上部に粘土粒の貼付があり, また, 603は下部に補修跡と見られる粘土の撫で付け痕が残る。611は胎土のX線回折分析(試料番号⑭)と薄片分析(試料番号⑨)を実施した。

626の製塩土器は非ロクロ成形で輪積痕及び指頭圧痕が顕著。端部が平らにケズリ整形されており, 製塩用の支脚の可能性を想定したが, 上下逆で筒型の製塩土器, または, 上端部の屈曲を重視するならば, 極端に短いが, 横口付円筒形土製品の可能性もある。

この他, 円筒形土製品(623), 土錘BⅢ類(625)が出土した。623は輪積み接合痕の残る, 非ロクロ成形品。また, 焼成粘土塊13点(計116.0g)があり, このうち2点を掲載した(第77図750・753)。



第66図　36号土坑　出土遺物(4)



第67図　36号土坑　出土遺物(5)

37号土坑（第68図，図版21）

調査区西半西端，Ec2-3・2-4グリッド，５号掘立柱建物のプラン内に位置する。Ⅲ層の黒色土上面でプランを検出した。調査区外まで広がる西半部は，過去の水田耕作及び水路掘削により失われている。調査区内での残存部分は，長軸157cm，短軸86cmの半楕円形である。埋土中に炭化物粒・焼土粒を目立って含むが，混入物の有無以外，Ⅲ層黒色土との差異が小さく，掘り込みが14cmと浅く不整形であることから，人為的掘削ではなく，窪地に堆積した，廃棄土壌の可能性も考えられる。

遺物は土師器甕類と須恵器杯・甕類の小片220gを出土しているが，図化に耐えうるものはない。出土土器片からみて，古代に位置付けられる。また，焼成粘土塊２点(計26.3g)が出土した。

6　溝・井戸・その他の遺構

１号溝　３号掘立柱建物に伴うため，同遺構の項に記載した。

２号溝（第68図，図版21）

調査区西半東部，Gb1-4・1-5グリッドに位置する。Ⅲ層の黒色土中でプラン検出。長さ154cm，幅32cm。掘り込み21cmで，壁の立ち上がりの急な箱形である。２号掘立柱建物Ｐ16に近接する。

出土遺物は総量800ｇと少なく，土師器甕類を主体とし，須恵器杯類を少量含む。図化に耐えるものはないが，出土土器片からみて，本遺構は古代に位置付けられる。

１号井戸（第68図，図版21）

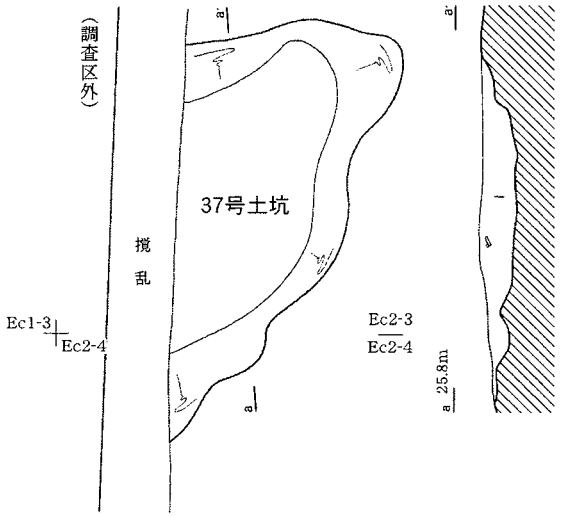
調査区東半のIc2-2･2-3･3-2･3-3グリッド，台地上南縁の崖際に位置し，崖下とは約0.5mの比高差を持つ。Ⅱa層の掘削中から遺物が集中しており，遺構の存在を予測していたが，明確にプランを検出出来たのは地山のⅤ層上面である。

開口部は長軸217cm，短軸208cmの隅丸方形で，南東隅の一部が攪乱を受けている。掘形(井戸側壁)は，素掘りで，壁面に補強施設を持たない。掘形の平面形は長軸138cm，短軸70cm強，中央にくびれを持つ瓢箪形である。不自然な形状であることから，壁面の崩落，または，水溜め施設の据え直しなどに伴う壁の掘り広げなどの可能性が考えられる。

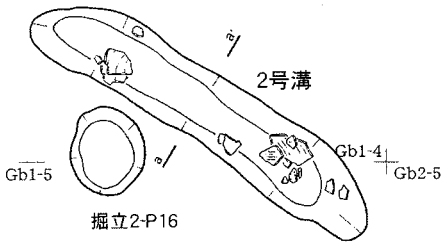
本遺構では，掘削中，常時，水の浸み出しがあったが，深さ80cmまで人力掘削したところで，北側側壁に直径7cmの水脈が口をあけ，湧水量が激増した。安全性に配慮して作業を中断し，渇水期を待って重機により深さ146cmまで掘削したが，井戸底を検出するには至らなかった。前述(Ⅲ-１-(１)【井戸】）の通り，井戸の可能性が高いと考えているが，他種の遺構の可能性も否定できない。

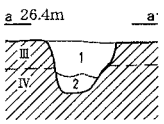
出土遺物の大半は１層から出土しており，井戸廃絶・埋没後に廃棄された考えられる。２層以下からの出土遺物は少ないが，２層深部から炭化物片が出土したため，この試料を用いて炭素年代測定分析を実施した(分析試料No.16・17)。結果，紀元前を示す値が得られた。しかし，２・３層にも古代の遺物が含まれていることから，この炭化物は混入と考えられる。これらの出土土器片から，本遺構は古代に位置付けておきたい。

遺物量は浅型コンテナ４箱分(5.8kg)あり，土師器甕類を主体とし，須恵器杯・甕類を少量含む。このうち９個体(重量比3割)(第69図627～635，図版７・44)を図化・掲載した。須恵器は無台杯B類(Ⅱ：627・628，不明：629)。このうち，627は硬く焼き締っており，全面に降灰，内外底面に須恵器の付着痕が見られる。焼台に転用されていたようである。629は外底面にパッチ状に炭化物の付着があるが，二次的なものと考えられる。土師器は小型甕(630・631)，長胴甕(632～634)，鍋(635）がある。630には火色が残り，631・635は内面の劣化が著しい。635は体部外面に黒斑が残る。

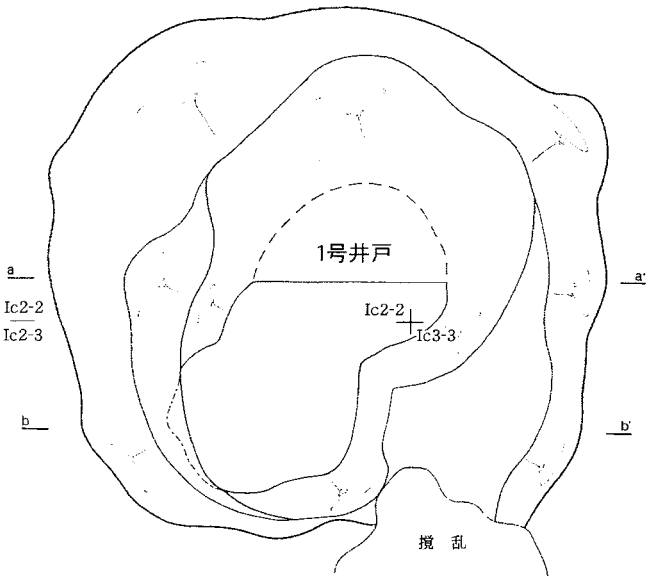


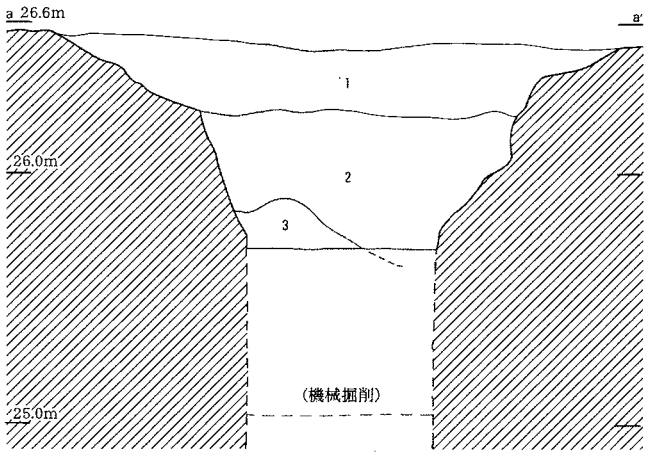
37号土坑
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3㎜～1㎝炭化物粒・焼土粒多、φ3㎜～1㎝黄褐色土粒少。しまり良、粘性ふつう。



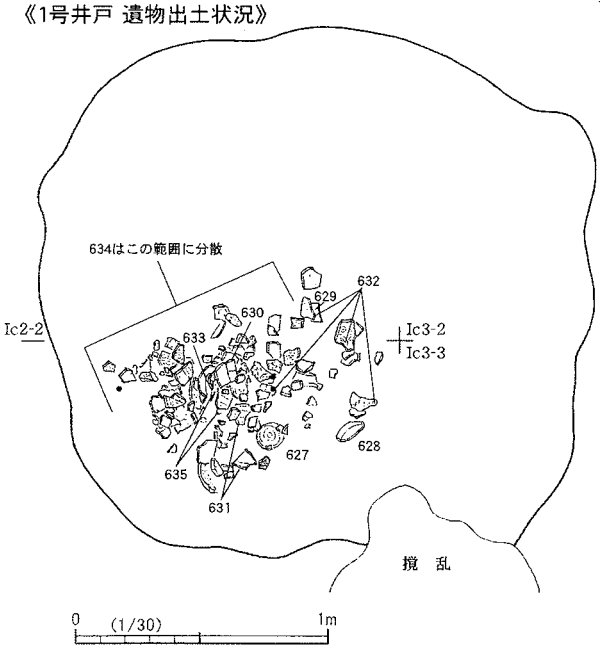


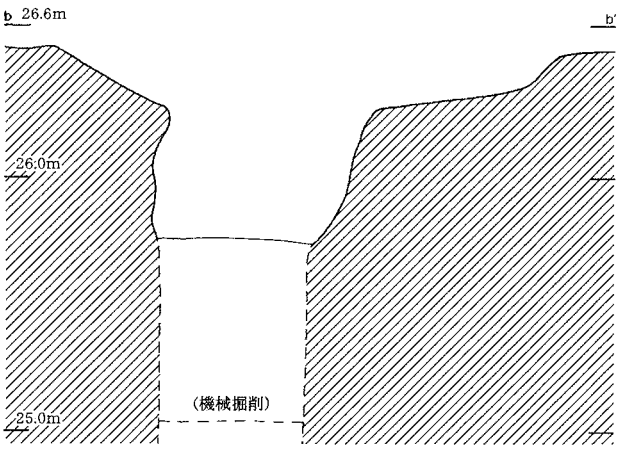
2号溝
1層　10YR3/1黒褐色土　φ3～5㎜炭化物粒少、φ5㎜～1㎝焼土粒微、φ5㎜～2㎝黄白色土粒めだって含む。しまり良、粘性あり。
2層　10YR3/1黒褐色土　φ5㎜黄褐色土粒多。しまり良、粘性あり。





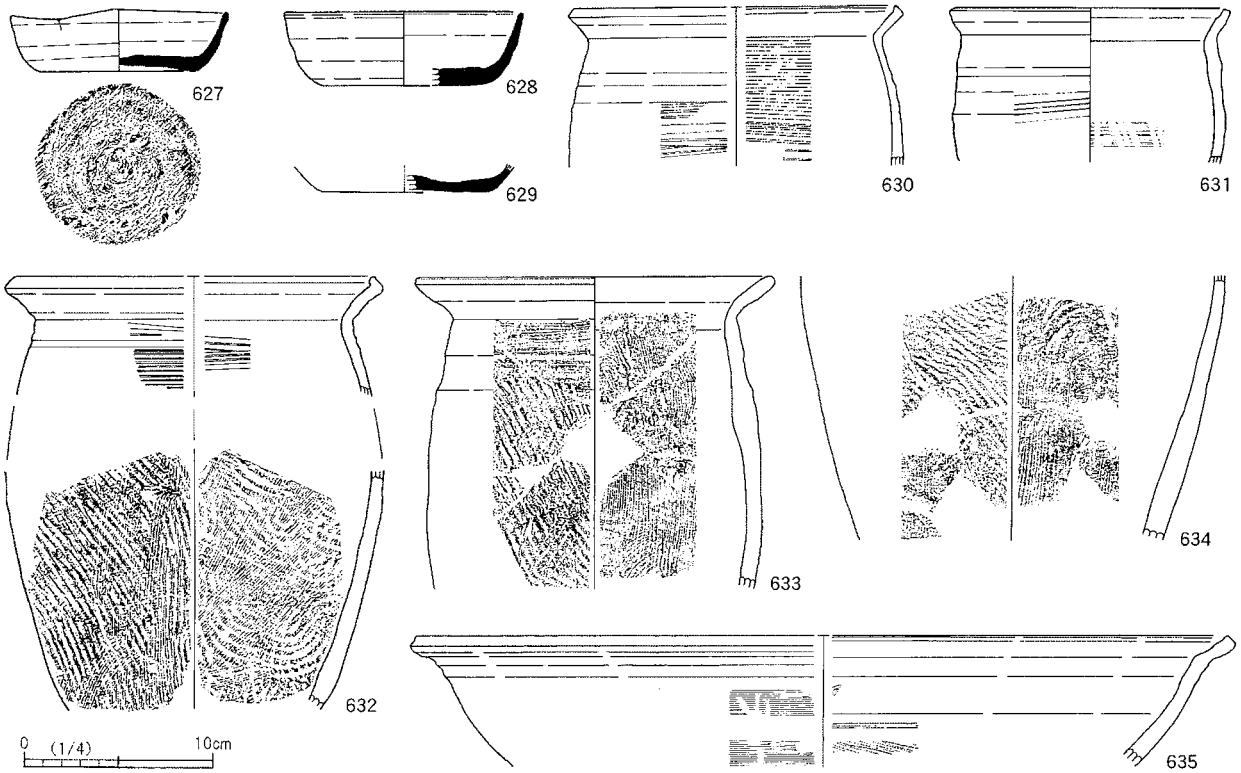
《1号井戸 遺物出土状況》





1号井戸
1層　10YR3/1黒褐色土　φ2～3㎜炭化物粒少、黄褐色土粒微。しまりややゆるい。
2層　10YR2/1黒色粘質土　しまり良。粘性あり。
3層　2.5Y4/1黄灰色粘質土　しまりややゆるく、粘性強。

第68図　37号土坑・2号溝・1号井戸



第69図　1号井戸　出土遺物

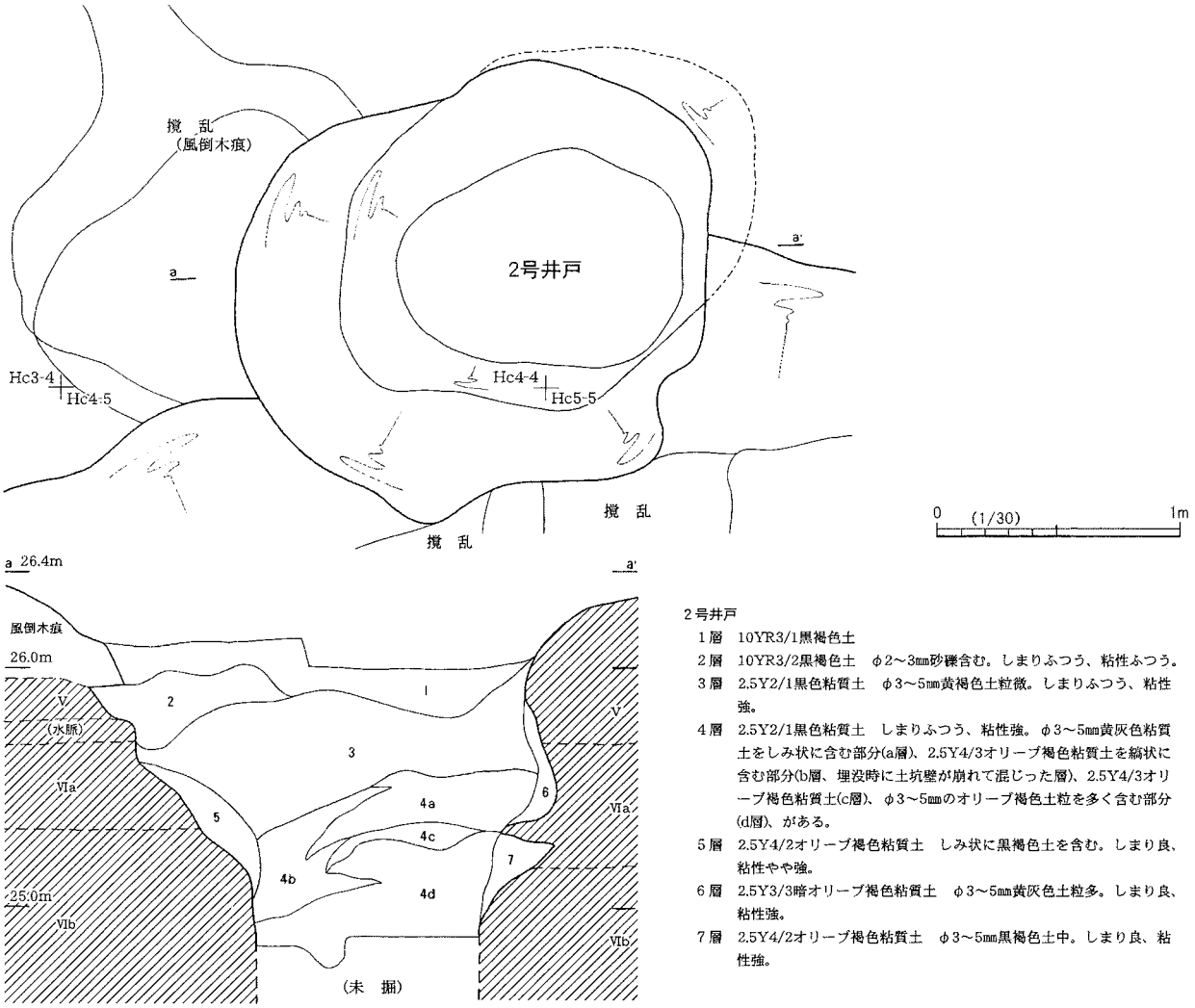
2号井戸（第70図，図版21）

調査区南辺中央，Hc4-4･4-5･5-4･5-5グリッドの交点に位置する。南西方向に伸びる台地の縁で，崖の傾斜部分にあたるため，当初，崖地形の落ち込みと認識して掘削を進めた。また，風倒木痕と重複しており形状を認識し辛い部分もあった。周辺からの水の浸み出しが著しく，渇水期を待って埋土を斜面下端まで掘り下げ，地山のⅤ層上面でプラン確認したところ，落ち込みが局地的であることがわかり，遺構と判明した。

開口部は長軸208cm，短軸170cmの楕円形である。掘形(井戸側壁)は素掘りで，壁面に補強施設を持たない。掘形の平面形は長軸116cm，短軸90cmの楕円形であり，中位で北東方向にオーバーハングする。

なお，掘削中も水の浸み出しがあり，深さ204cmまで掘削したところで遺構の埋土が緩み，亀裂が入り始めたため，安全性に配慮して掘削作業を中止した。このため，井戸底を検出するには至らなかった。前述(Ⅲ-1-(1)【井戸】）の通り，井戸の可能性を考えているが，北東部中位壁が，地山Ⅵb層(特に粘性の強い粘土層）に，少々掘り広がる部分があることから，粘土採掘を目的とした土坑の可能性も否定できない。

遺物は総量560ｇと少なく，土師器甕類と須恵器杯・甕類の小片を出土した。図化に耐えうるものはなく，出土土器片から，本遺構を古代に位置付けておきたい。



第70図　２号井戸

３号井戸（第71図，図版21）

調査区西半東端のGc3-2･4-1･4-2グリッドに位置する。他の井戸と異なり，台地の緩斜面にあたる。

この部分はⅡa層の掘削中から遺物が集中して出土することから，遺構の存在を予測していたが，西側が風倒木痕と重複しており，プランの確認が難しく，最終的にⅣ層上面で検出した。

開口部は長軸268cm，短軸211cmの楕円形，南西隅が暗渠の構築により撹乱を受けている。掘形(井戸側壁)は，素掘りで，壁面に補強施設を持たない。掘形の平面形は径170cm前後の円形である。

掘削中も周囲から常に水の浸み出しがあり，深さ１m過ぎまで掘削したところで，遺構の埋土が緩み，亀裂が入り始めた。このため，安全性に配慮して人力による掘削作業を中止し，機械掘削に変更した。確認面からの深さ２mまで掘削したが，井戸底を検出するには至らなかった。前述(Ⅲ-１-(１)【井戸】）の通り，井戸の可能性が高いと考えている。

古代と位置付けた前掲の井戸２基と，形状・規模とも近似しており，遺物は古代の土器類が５箱強(10.7kg）が出土した。半数が土師器甕類，半数が須恵器の杯・甕類であり，他の遺構に比べて須恵器の占める割合が極端に多い点は気にかかるが，遺構の形状と出土遺物からは，古代の遺構の可能性が想定しうる。

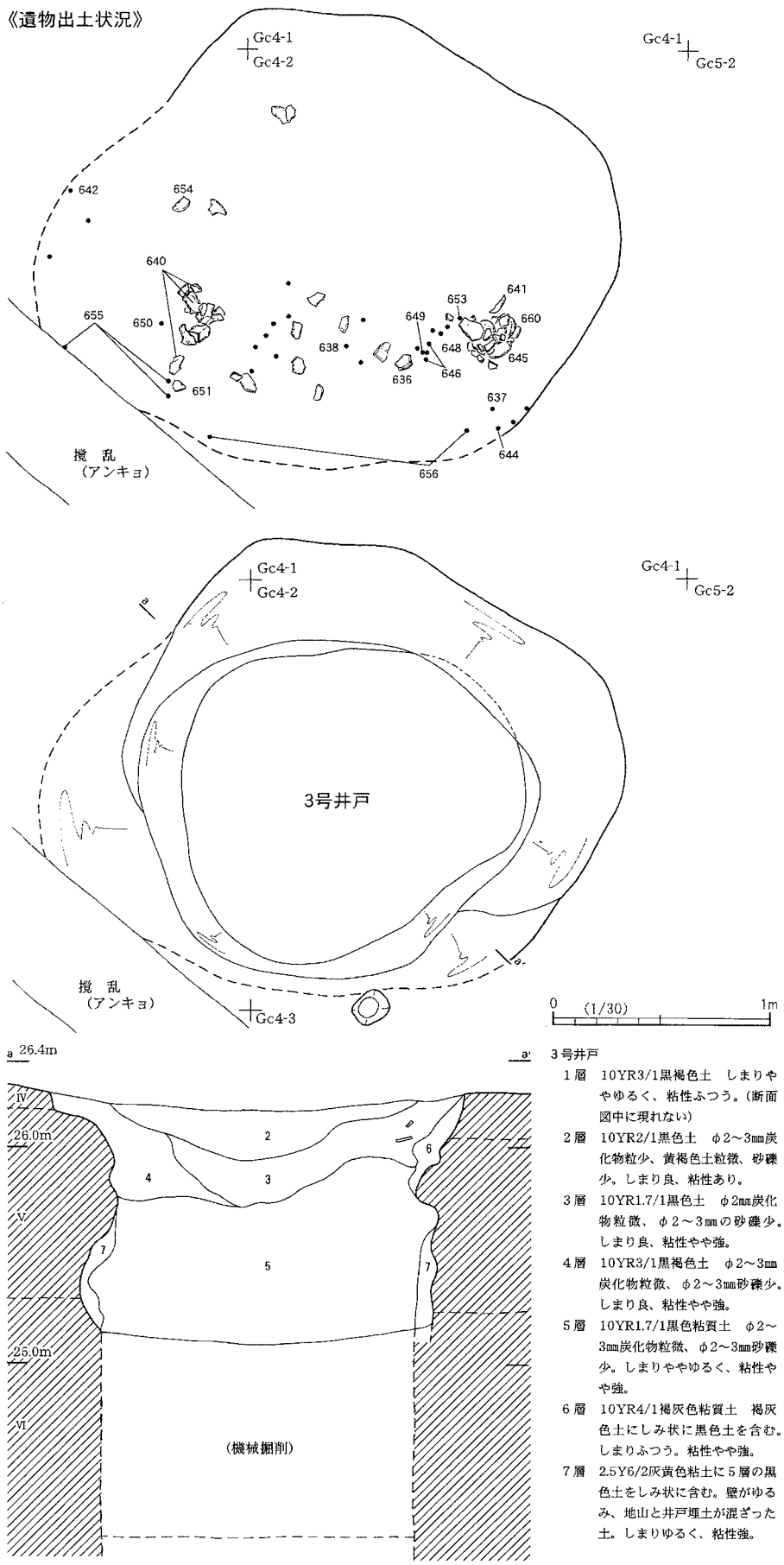
しかし，５層から出土した炭化材片で炭素年代測定分析を実施した(分析試料No.18・19)結果，No.18は紀元前の値が出ており，混入と考えられるが，No.19は1049～1181calADの間で３つの範囲が示されており，出土遺物

の時期とずれが生じる。隣接する２号掘立柱建物の時期が12世紀中葉頃に比定されることも勘案すると，本遺構が，当該期の遺構である可能性も考えられる。11～12世紀は遺跡における遺物の出土量が少なくなる時代であることから，当該期の遺物が出土していない点も説明が付く。

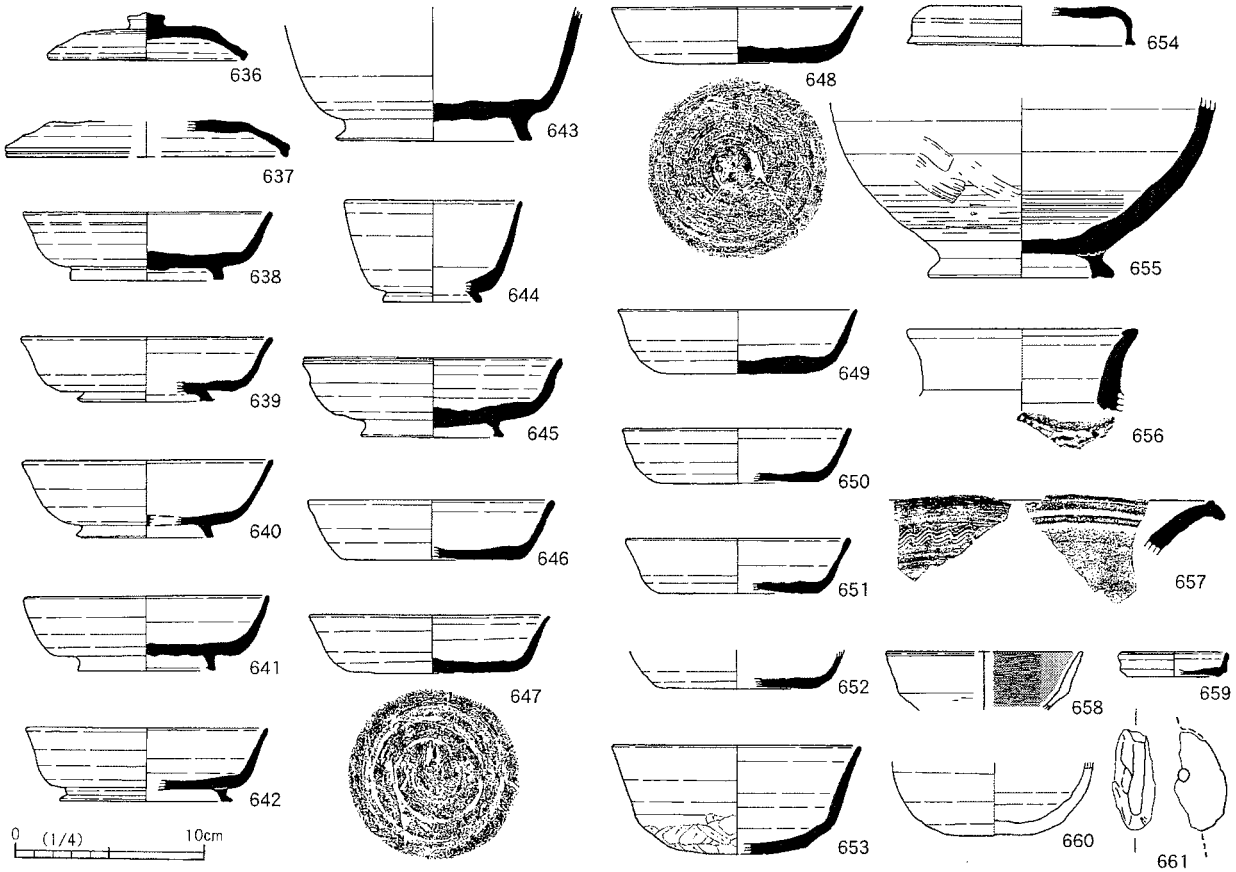
この場合，出土遺物を井戸廃絶・埋没時の廃棄・流入と考えるならば，遺物の大半が２～４層からの出土であるため，中世の土地利用時の掘削において，古代の遺構を壊した結果，出土した遺物がまとまりのまま井戸の埋め土に流入したと推側される。

以上，本遺構は二時期の可能性が想定しうるが，現段階では決定打を欠き，遺構の時期的位置付けは保留としておきたい。

出土遺物は26点(重量比3割弱)(第72図636～661，図版44･45)を図化･掲載した。須恵器食膳具には，有台杯ＡⅠ類 蓋(637)･Ｃ類 蓋(636)，有台杯ＡⅠ類(638～642)･ＢⅠ類(643)･C2類(644)，折縁杯A類(645)，無台 杯ＡⅠ類(647)･ＢⅠ類646･648･649)･ＢⅡ類(650･651)･Ｂ類(652)，無台椀A1(653)がある。これらの食



第71図　３号井戸



第72図　3号井戸　出土遺物

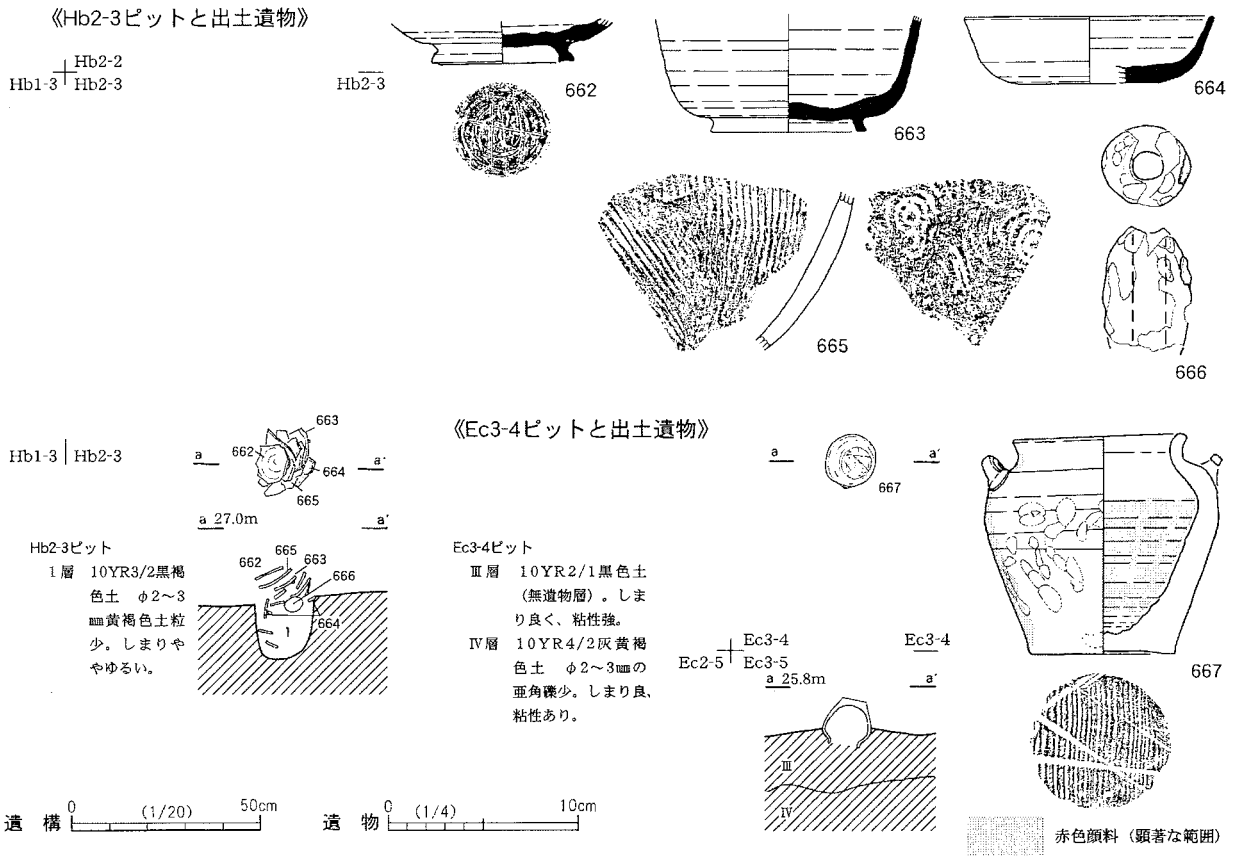
膳具は，いずれも焼成は良好だが，焼成時の歪み(642・644・653)や焼き膨れ(643)がある。使用痕の残る個体もあり，636は内面に炭化物が付着，645は内底面が磨耗している。640は水挽き・ちぢれ痕が残る。645の折縁杯は，口縁部に屈曲(稜)を持つが，折縁杯としては屈曲が弱く，稜椀的である。653は，本遺跡では数少ない須恵器の無台椀の中でも，唯一の完形品である。金属器模倣品で，体部下半をケズリ整形している。須恵器貯蔵具には，短頸壺蓋(654)，球胴短頸壺(655)，横瓶(656)，甕(657)があり，654は天井部に窯滓が付着する。この他，須恵器焼台(659)が出土しているが，小型瓶・壺類の蓋の可能性もある。

一方，土師器類は，黒色土器稜椀Ⅱ類(658)，土師器小型甕AⅢ類(660)，鍋・甕類把手(661)が出土した。658は薄手で，内面のみ丁寧にヘラミガキされ，黒色処理が施されている。外面には黒斑が残る。661は鍋・甕類の把手部分で，横方向に孔が開く。この他，焼成粘土塊５点(計55.7g)が出土した。

Hb2-3ピット（第73図，図版21）

遺構分布の希薄な調査区中央，Hb2-3グリッドに位置する。地山のⅤ層上面で，極度に遺物が集中する箇所を検出した。プランが把握できなかったため，断ち割ったところ，円形のピットが検出された。直径15cm，深さ14cmしかないピットの上半部に，遺存長5～10cmの土器片15点(須恵器片７点，土師器片8点)と土錘1点が詰め込まれた状態で出土した。

出土遺物は総量720ｇ。いずれも破片であり，図化に耐えうる５点(第73図662～666，図版45）を掲載した。須恵器は有台杯ＢⅠ類(663)・有台杯(662)，無台杯ＢⅠ類(664)がある。662は水挽き・ちぢれ痕が残り，高台内に「卅」がヘラ描きされている。底部のみの残存品であり，意図的に体部を打ち欠いたようである。また，使用によるものか，内底面・高台の磨耗が顕著である。この他，土師器長胴甕(665)と土錘ＢⅡ類(666)があり，666は焼成不良で生焼けに近い。焼成粘土塊２点(計10.6g)も出土した。



第73図　Ec3-4ピット・Hb2-3ピットと出土遺物

Ec3-4ピット（第73図，図版21）

調査区西半西端，Ec3-4グリッドに位置する。Ⅲ層黒色土中から土器底部を検出。周囲を精査したがプランは検出できず，断ち割って調査した結果，珠洲の小形双耳壺(第73図667，図版７）が逆位に据えられた形で出土した。土層断面を観察すると，遺物周辺に15cm程の幅で，黒色土中にわずかに黄褐色土粒を含有する部分が認められたことから，ピットへ土器を埋納したものと判断したが，プランを把握するには至らなかった。

667は，珠洲焼の双耳壺としては出土例の少ない小型品である。双耳の形態と底部静止糸切り痕から，珠洲焼Ⅰ期(12世紀中葉～13世紀初頭)と判断した(吉岡1994)。内面中位～底面までの全周，及び外面一側面に赤色顔料の付着があり，特に内面中位への付着が顕著である。顔料容器として使用され，こぼれた分が外面にも付着したと見られる。赤色顔料は，新潟県埋蔵文化財調査事業団　三ツ井氏による分析の結果，酸化鉄を主成分とするベンガラと判明した。（東北芸術工科大学の協力を受け，電子線マイクロアナライザーよる構成元素分析を実施。）

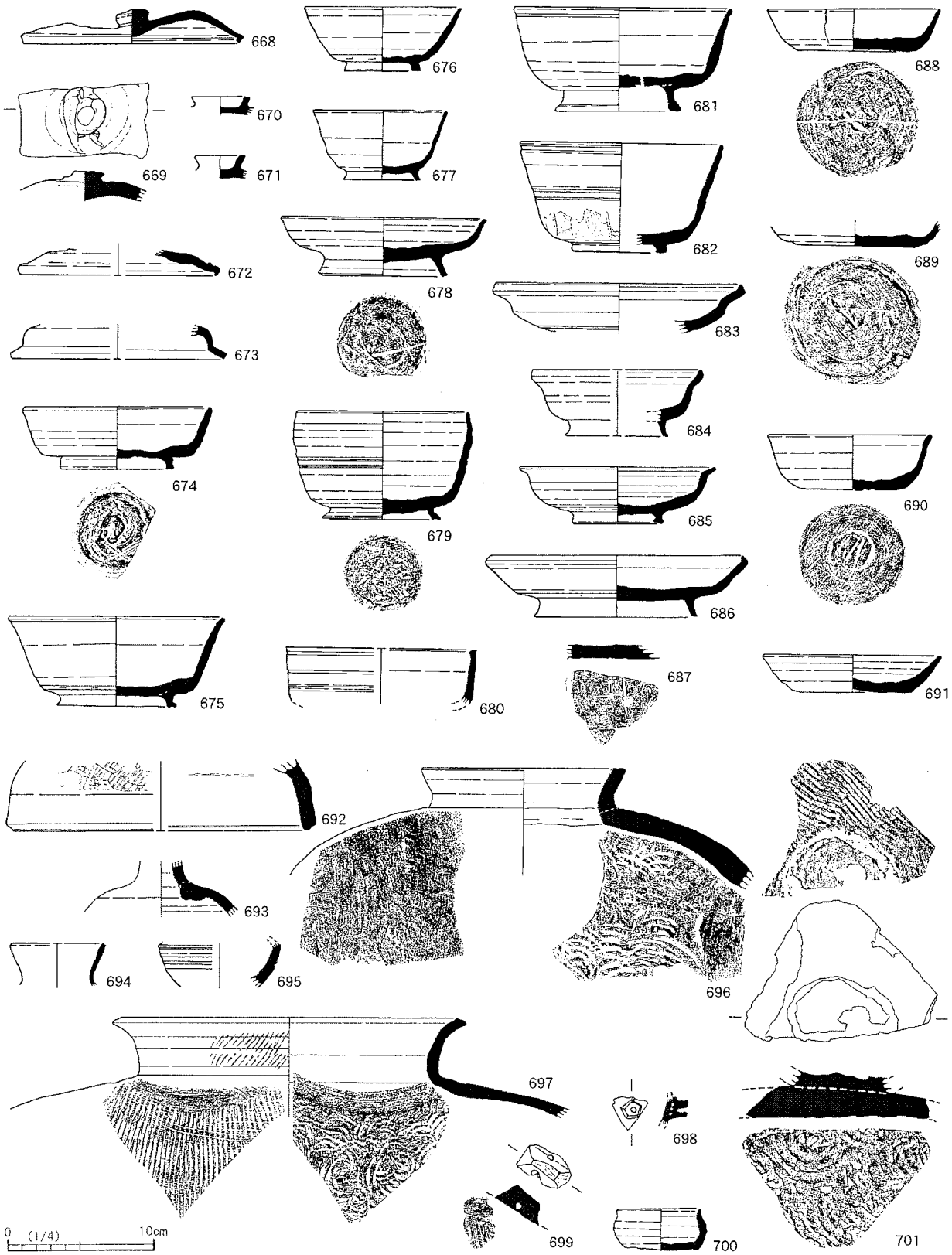
7　その他の出土遺物

本遺跡からは極めて多量の須恵器・土師器が出土しており，掲載にあたっては遺構からの出土品に重点をおいた。このため本項では，遺構出土品に類例の多い器種器形は掲載を割愛し，同一種の少ない，または特徴的な個体を選択的に掲載した。この他，土錘・土製品・木製品・鉄滓なども少量出土しており，前述の基準で掲載したが，焼成粘土塊のみは，便宜上，遺構・遺物包含層の出土を問わず，本項に掲載している。

（1）須恵器（第74図，図版７・45・46）

668～673は有台杯蓋。ＡⅠ類蓋(668・669・672)・D類蓋(670・671・673)がある。668は焼成時に天井部がヘタ

ってしまった失敗品で，焼き膨れもある。669は摘みの貼り付け時に失敗し，摘みをナデ潰してしまったもの。失敗品だが転用されたようで，内面の磨耗が顕著である。670・671は金属器模倣の環状摘み。673は天井部が膨らむ独特な器形で，金属器模倣品蓋と考えているが，折縁杯蓋の可能性もある。672は蓋の天井部外面に，杯の口縁



第74図　遺構外出土遺物(1)

部が一部融着。身に蓋を逆位に重ねた，重ね焼き痕が明瞭に残る。蓋内面は自然釉が掛り，窯滓が付着する。

674～682・687は有台杯。ＡⅠ類(674)・ＢⅠ1類(675)・C1類(676)・C2類(677)・ＤⅠ1類(681)・ＤⅠ2類(682)・ＤⅡ2類(679)・ＤⅡ1類(680)・E類(678)がある。674は厚手で，高台内に「メ」のヘラ描き，側面には焼成時の亀裂が入る。675は亀裂と焼き膨れのある不良品。676はやや浅身で底径が小さく，椀形に近い。677は焼成良好だが，赤焼きに近い色調を呈す。使用によるものか，内底面が磨耗する。678は極端に身が浅い盤形である。678・679は器面の状態から見て，未使用と推測される。679は体部，681は口縁部，682は体部と口縁部に，それぞれ沈線が巡る金属器模倣品。680は口縁上端が平らな面を持ち，比較的浅身で腰の張る特徴的な形態である。金属製仏鉢の模倣品であろう。体部には沈線も２条巡る。681は足高高台，679の高台もシャープで，足高高台様に，外に踏ん張る。687は高台内に「上」をヘラ描きしている。

683～686は折縁杯。A類(683)・B類(684)・C類(685)・D類(686)がある。683は体部下端に沈線が２条巡り，蓋の可能性もある。685は丁寧な作りで，稜を明瞭に意識したもの。685は足高高台気味である。

688・689は無台杯B類。ともに外底面に「－」がヘラ描きされる。690・691は無台椀。A2類(690)・B類(691)がある。691は若干浅身で，厚手。内底面が磨耗しており，使用痕が顕著である。胎土が特徴的に粗い。

692～698は貯蔵具。短頸壺蓋(692)，水瓶(693)，小型広口瓶(694)・瓶類(695)，瓶・壺類把手(698)・耳(699)，横瓶(696)，甕(697)，焼台(700・701)がある。

692は短頸壺の蓋としたが，タタキ成形の，非常に大形で厚手な特殊品である。内面に同時焼成したと推測される短頸壺口縁の融着痕が残る。693は水瓶。694は小型広口瓶で，非常に薄手。695は沈線２条が巡っており，小型瓶の体部としたが，鉢(仏器)の可能性もある。696の横瓶は，頸部内面に円盤接合の痕跡が残る。697の甕はタタキ痕跡が口縁部にも及ぶ。698・699は瓶・壺類の肩～体部上半に付される耳の破片。

700・701は焼台。700は焼台の専用品。焼成不良のため，一部が生焼けで脆弱である。701は甕破片を焼台にした転用品である。このため，破片の割れ口にも降灰による自然釉が掛る。また，壺類の底部が融着してしまっており，焼台としての使用は失敗に終わっている。

（2）土師器・土製品（第75図，図版７・46）

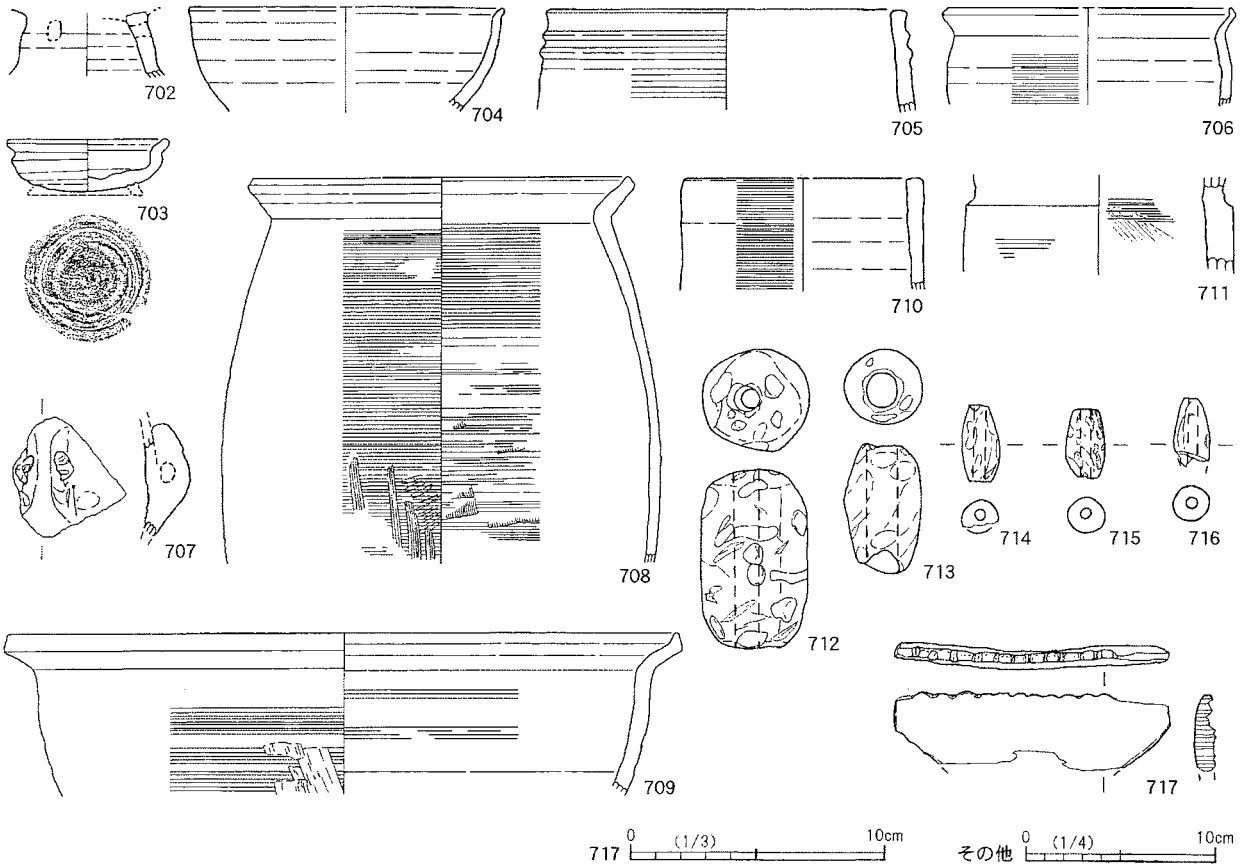
702～705は食膳具。702は台付盤または椀の脚部で，透かし孔が開けられており，身への接合部分から剥がれている。703は折縁杯で，高台が剥がれてしまっている。焼成は不良でやや瓦質気味のため，須恵器の可能性もある。器面の状態から見て未使用である。704は無台椀ＡⅡ1類。31号土坑でまとまって出土した椀類同様，胎土が精良で口縁端が摘み出し状に外反する。705は直立気味の口縁に突帯が巡っており，仏鉢と推測される。

706～709は煮炊具。706は小型甕。還元炎焼成だが，混和材の含有量が他の須恵器に比べて多く，器形も明らかに土師器甕を志向しているため，土師器とした。707は鍋・甕類の把手。ヘラ状工具で横方向に孔を開けている。孔の開く把手は少ないが，３号井戸からも出土している(661)。残存する本体部分の厚みから見て，鍋よりは甕の可能性が高い。708の長胴甕は，調査区境の壁面が崩落した際に調査区外から出土した。709は鍋である。

710・711は円筒形土製品。円筒形土製品に比べ，710は器壁がやや薄く，他器種の口縁の可能性もある。711は有段である。712～716は土錘。土錘ＡⅠ類(712)・ＢⅡ類(713)・ＢⅢ類(714～716)がある。

（3）木製品

調査地での湧水が著しかったが，意外に木製品の遺存は少なく，図化できたは１点のみ（第75図717，図版46）。Ec3-2のⅡa層から出土。台形状の柾目材の幅広側小口部分に12ヶ所，小さく刻みがあるが，器種は不明である。



第75図　遺構外出土遺物(2)

（4）焼成粘土塊・粘土屑（第76・77図，図版７・47）

焼成粘土塊は，特徴を概観するため，遺構内外の出土を問わずに，本項に一括掲載した。本遺跡からは多量の焼成粘土塊が出土しており，焼土塊や磨耗土器片との区別が困難な破片を除いて，合計917点7.2kgにものぼる。

古代の遺跡から出土する焼成粘土塊については，土器製作に係る製作屑も含め，形体分類からその性格までを望月精司氏がまとめており(望月2005b)，本遺跡ではこれを参考に，分類を行った。粘土の質によりA・B類に二分し，主体を占めるA類を，形態および特徴から３細分した。なお，A類は土師器焼成時の支台やカマセ材，B類は焼成坑部材＝貼り壁塊と想定されている。

A類：土師器と同質の胎土の粘土塊。基本的に，単体の粘土塊として形成されたと考えられるもの。（破れ面を持たないことを前提とする。）

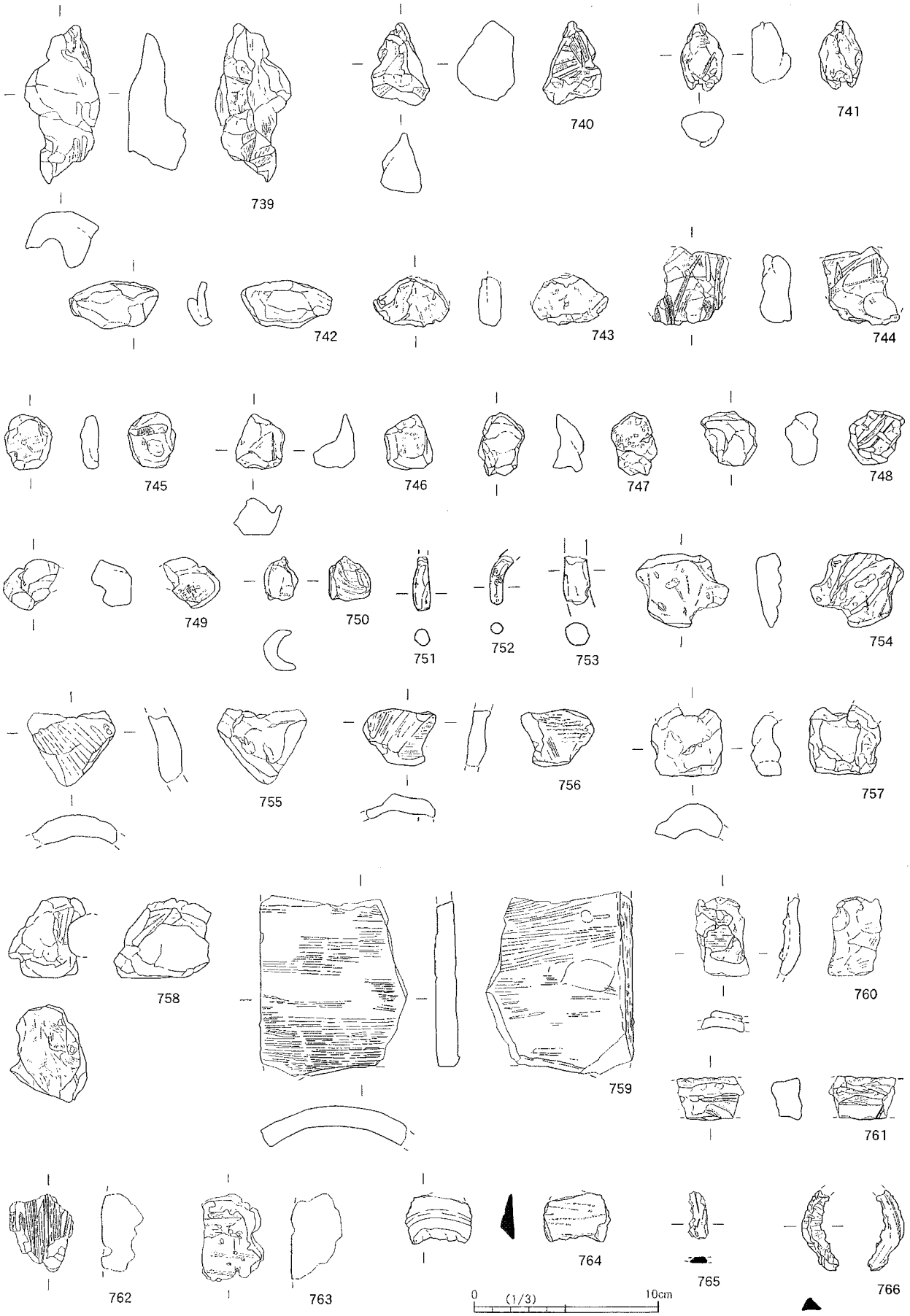
１類:塊状粘土。形態により４種に細分可能。a:意図的な成形が行われていないもの(三次元的に不整形。ちぎり取ったまま軽く丸めた状態)(718 ～ 722･725), b:平らに伸ばしたもの(723･724･726 ～ 732･735), c:紐状粘土片を丸めて塊状にしたもの(733･736), d:板状粘土を折り重ねて塊状にしたもの(734･737 ～ 743･749･750)。なお, 小形品は, 丸めた時にきれいにナデつぶされているものが多く, c･dの判別がつかない(744 ～ 748)。

２類：紐状粘土(751～753)

３類：土器など製作の痕跡を持つ粘土。特徴により２種に細分した。a：土器などの一部を素材とする粘土片(754～759)。b：土器成形・調整時に生じた粘土屑(760・761)。このうち，a類は，タタキやカキメなどの土器の成形痕や，土製品の成形痕が認められるもので，破片化してから変形・焼成されたと判断できるもの。757は中央に半筒状のくぼみがあり，土錘を半割・変形して焼成したものである。758も側面に半筒状のくぼみがあり，羽口未成品の変形品の可能性が考えられる。なお，759は側縁をカットした，方形粘土板とも言えるような意図的な変

718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
0 (1/3) 10cm

第76図　焼成粘土塊(1)


739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
0 (1/3) 10cm

第77図　焼成粘土塊(2)

形品である。一方，b類とした760は，ヘラケズリなどによる粘土の削り屑。761は表裏にタタキ痕が残るが，縁のケズリ痕からみて，須恵器貯蔵具の口縁部接着の際，体部側の縁を削り落した破片であろう。

B類：土師器とは異なる特徴の土を使用し，粘土中に意識的な異物混入が多少認められるもの。基本的に，粘土塊の端面が欠損する。炉壁の破片的なものを想定。粘土塊よりは，粘土片の名がふさわしいもの(762・763)。

これら粘土塊のうち，9割以上を占めるＡＩ類は，押圧を受けた痕跡のあるものが多く，押圧を加えた側を表，何かに押し付けられた側を裏として図化した。表側には，筋状植物圧痕・ランダムな繊維圧痕や布目・砂粒の圧痕が多く，ハケ状工具でナデつけたような痕跡も認められた。特に，意図的に丸く平たく整形されたb類には，稲藁由来と見られる筋状の圧痕が顕著に認められた。ＡＩ類には，丸める以前の形状を推し量れる個体が多く，やや乾いた状態になってから粘土が丸められたと考えられる。

この他，須恵質に焼き上がった粘土片もわずかに出土，Ａ３b類に相当する土器製作屑であった(764～766)。

（５）鉄　滓（図版47）

調査区内では，Gb1-2・Gd2-1のⅡa層(遺物包含層)中と，17号土坑４層から，各1点出土したのみである。なお，鍛冶関連遺物として，33号土坑から羽口破片(487)が1点，出土している。

また，平成15年確認調査時の試掘坑14のⅢ層黒色土中から，19点(重量計438ｇ)の鉄滓が出土した(図版47-②～⑤)。中には，窯体破片とみられるスサ圧痕の残るものがあり(図版47-⑤)，近隣で鉄生産がおこなわれていたことを示唆する。なお，この地点は，盛土施工による遺跡の保存範囲となっている。

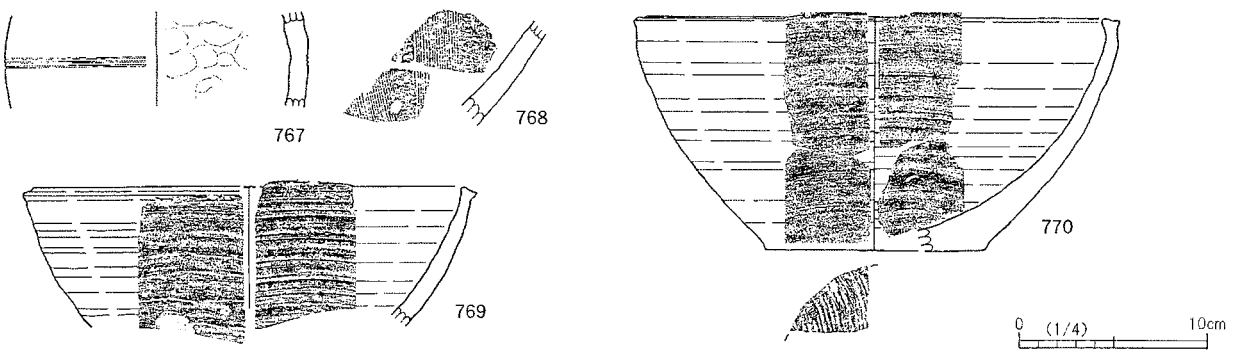
（６）中世の遺物（第78図，図版７・47）

当該期の遺構は少なく，確実なのはEc3-4ピットと２号掘立柱建物のみである。遺構外出土品は調査区内から分散して出土した。

瀬戸美濃　767は瓶子の体部上半で，三筋が巡る。釉は明るい緑色で，比較的均一にかかっており，浸け掛けと見られる。これらの特徴から，古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期(15世紀前半)(藤澤2008)の製品であろう。

珠洲焼　769・770は中形の鉢。770は口縁部がやや内湾する。ともに使用による内面ロクロ目の磨耗が顕著だが，卸し目は無く，珠洲焼Ⅰ期(12世紀中葉～13世紀初頭)(吉岡1994)に位置付けられる。

その他　768は須恵器系中世焼物の擂鉢。卸し目が細かく，隙間のあることから，珠洲焼Ⅰ～Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀前半)(吉岡1994)に平行する時期の遺物であろう。



第78図　中世の出土遺物

Ⅳ　自然科学分析

分析にあたって

本遺跡から出土した遺物の一部について，専門機関に委託し，自然科学の技術を用いて各種分析を行った。出土品全点を分析委託することは不可能であるため，発掘調査報告者による下記の意図･目的に基づき，分析試料を選択した。

＜放射性炭素年代測定＞

出土土器から得た遺跡の推定年代をクロスチェックするため，主だった遺構について，埋土中の炭化材を用い，これらの放射性年代を測定，暦年代幅を算出した。また，２号掘立柱建物は，出土遺物がほとんどない一方，複数の柱材が良好に遺存していたためこれを試料とし，ウィグルマッチングを行うことで，最外年輪の年代範囲を絞込み，遺構年代の解明を目指した。

＜蛍光Ｘ線回折による胎土分析＞

今回調査範囲内からは，須恵器の生産跡は検出されていないが，周囲400mの近圏内に須恵器窯跡が存在している。また，遺跡から須恵器生産に関連したことを示す遺物が出土しており，本遺跡も須恵器生産にかかわる遺跡であることが想定される。また，本地域では土師器と須恵器の生産が，ともにロクロ成形を基本とすることから，両者の生産に深い関連性のあることが指摘されている。このことから，土師器生産遺跡である本遺跡からの出土須恵器・土師器について，蛍光Ｘ線による須恵器の胎土分析を実施し，産地を同定するとともに，土師器と胎土比較も実施した。あわせて，肉眼観察での近似性が高い新潟市草水二丁目遺跡の須恵器についても胎土分析を実施し，比較を行った。

＜薄片観察によるの胎土分析＞

土師器生産遺跡である本遺跡の性格を踏まえ，その基礎資料を提示し，今後の研究に資することを目的として，出土土師器の胎土について，薄片観察による分析を実施した。本遺跡の製品と生産材料(土器胎土･遺跡内採取粘土)の特徴を，土器胎土･粘土中の含有物(鉱物･岩石･微化石等)及び粘土基質・孔隙を計測し，含有物の種別･構成を比較することで表現した。分析にあたっては，後出試料との分析結果と定量比較が可能なよう，ポイントカウント法を用いた。

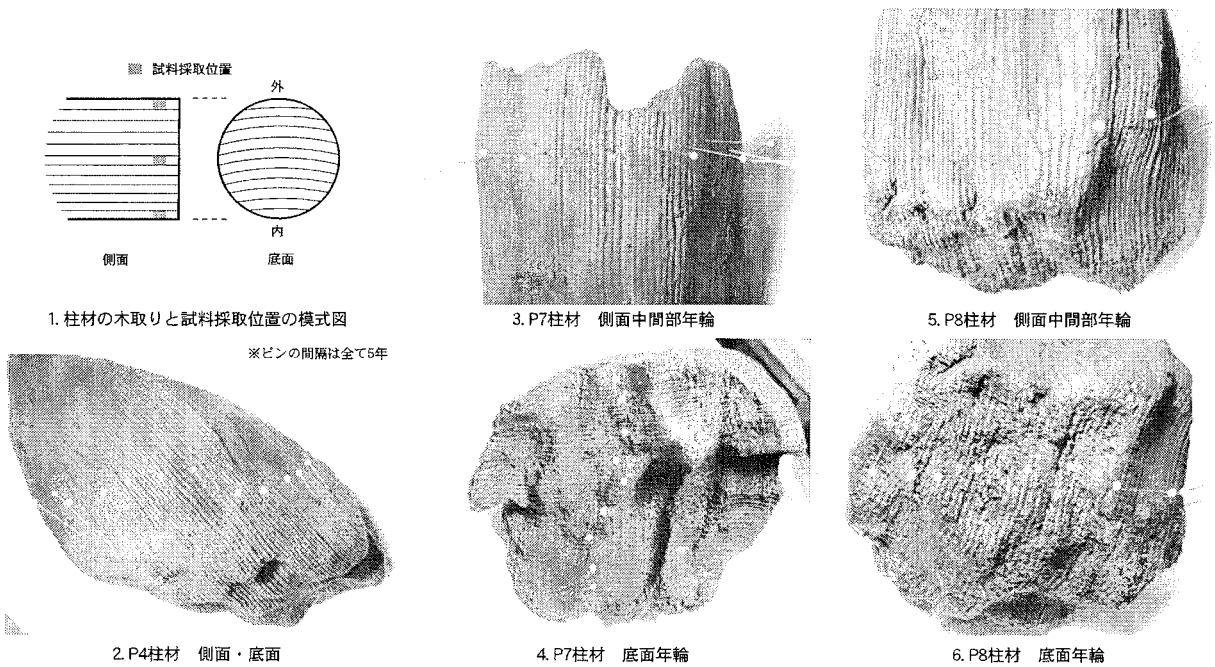
1　丸山Ａ遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)と ウィグルマッチングによる建物柱材の暦年代推定

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

丸山Ａ遺跡は，新潟県新発田市蔵光字丸山4193番地（北緯37° 57′ 19″，東経139° 24′ 31″）に所在し，坂井川支流の三光川右岸，更新世後半に形成された坂井川台地の上位段丘面に位置する。測定対象試料は，２号掘立柱建物のＰ４柱材から採取された木片（No.1：IAAA-111368～No.3：IAAA-111370），同Ｐ７柱材から採取された木片（No.4：IAAA-111371～No.6：IAAA-111373），同Ｐ８柱材から採取された木片（No.7：IAAA-111374～No.9：IAAA-111376），１a号土坑１b層出土炭化材（No.10：IAAA-111377，No.11：IAAA-111378），９号土坑２層出土炭化材（No.12：IAAA-111379，No.13：IAAA-111380），10号土坑１～３層出土炭化材（No.14：IAAA-111381），同1層出土炭化材（No.15：IAAA-111382），１号井戸２層出土炭化材（No.16：IAAA-111383，No.17：IAAA-111384），３号井戸５層出土炭化材（No.18：IAAA-111385，No.19：IAAA-111386）の合計19点である（表１・２）。

２号掘立柱建物のNo.1～9は，３本の柱材の年輪を観察して各３点の試料を採取したものである。各々の年代測定を行い，さらにウィグルマッチング(５算出方法(5)参照)の手法で最外年輪の暦年代を推定することを目的としている。柱材は，柱穴の底面や底面から数cm上位に据えられた状態で検出された。いずれの柱材も丸太の分割材を素材にして丸く整形されている。樹木の外皮と芯は認められない。年輪の多くは２～３mm幅で，柱材の底面と側面で観察される。底面は加工痕に覆われているため，測定用試料は側面から採取された。柱材に見られる総年輪数は60～74で，これらの柱材ごとに３点の試料を測定してウィグルマッチングを行うことを要請されたため，暦年較正曲線におけるデータの細かさやウィグルの大きさ等を考慮し，ここでは各柱材に残存する最外年輪と最内年輪，



1. 柱材の木取りと試料採取位置の模式図
2. P4柱材　側面・底面
3. P7柱材　側面中間部年輪
4. P7柱材　底面年輪
5. P8柱材　側面中間部年輪
6. P8柱材　底面年輪

第１図　柱材の年輪と試料採取位置

およびそれらの中間に当たる部位から原則5年輪分の木片を採取することとした。ただし，P4柱材とP7柱材の最外年輪側試料（No.1，4）は，年輪の残存状況等に鑑み，最外年輪を避けて2～5年輪の部分を試料とした。柱材の特徴を表１に，試料の採取位置を最外年輪から数えた年輪数によって表３に示した。また，採取状況の模式図と写真を第１図に掲げた。

表１　測定柱材の基礎情報

	遺存長 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	直径 (mm)	総年輪数
P4 柱材	416	149	125	約 140	74
P7 柱材	302	140	133	約 140	66
P8 柱材	301	147	129	約 140	60

2　測定の意義

２号掘立柱建物は年代判定の根拠となる出土遺物が少ないため，母屋柱材試料の年代測定とウィグルマッチングにより，建物の年代を判定する手がかりを得る。

１a号土坑，９号土坑，10号土坑，１号井戸，３号井戸では８～10世紀の土器類が多数出土したため，これらの土器とともに廃棄されていた炭化材の年代を測定し，考古学的見地から算出された土器の年代を暦年代に対比するための資料とする。

3　化学処理工程

(1)メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

(2)酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表２に記載する。

(3)試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO2）を発生させる。

(4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

(6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，14Cの計数，13C濃度（13C/12C），14C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1)δ13C は，試料炭素の13C 濃度（13C/12C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表２）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2)14C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C年代はδ13Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表２に，補正していない値を参考値として表３に示した。14C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，14C

年代の誤差（±1σ）は，試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい（14Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（14Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ13Cによって補正する必要があるため，補正した値を表2に，補正していない値を参考値として表3に示した。

(4)暦年較正年代とは，年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の14C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が14C年代，横軸が暦年較正年代を表す（第2～4図）。暦年較正プログラムに入力される値は，δ13C補正を行い，下一桁を丸めない14C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表3に示した。暦年較正年代は，14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal　BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

(5)暦年較正を高精度に行うための方法として，ウィグルマッチングが行われる。暦年較正曲線には過去の大気や海洋中における14C濃度の変動を反映した起伏が表れる。この起伏はウィグル（wiggle）と呼ばれ，14C年代に対応する暦年代の絞り込みを困難にする原因の一つとなっている。このウィグルを利用して暦年代を求めるのがウィグルマッチングである。まず年輪を持つ測定対象から年輪によって相互の年代差を確認できるように複数の試料を採取し，各々の14C年代を求める。次に試料間の年代差と14C年代値の変動パターンを較正曲線に重ね合わせ，最外年輪の暦年代を算出する。こうすることで，単独の試料の14C年代に対して算出される暦年代よりも範囲を絞り込むことが可能となる場合がある。ウィグルマッチングの計算に用いる14C年代値は，暦年較正の場合と同様δ13C補正を行い，下一桁を丸めない14C年代値で，算出される最外年輪の暦年代は1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）の範囲で表示される。ウィグルマッチングの結果を表すグラフは，縦軸が14C年代，横軸が最外年輪の暦年代を表す（図4）。なお，ウィグルマッチングの結果は，測定対象における年輪の読み取り，1測定試料に含まれる年輪数，試料の間隔の取り方など，試料採取の状況によって異なる可能性がある。また測定結果の重ね合わせに用いる較正曲線や較正プログラムの種類によっても結果が異なってくる可能性がある。このため，年代値の利用に当たっては試料採取の状況，使用した較正曲線とプログラムの種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，試料採取の状況について「1測定対象試料」と表3に記載した。ウィグルマッチングの計算にはIntCal09データベース（Reimer et al. 2009），OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用し，結果を表3に示した。ウィグルマッチングによる最外年輪の暦年代は較正された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される（表3）。

6　測定結果

(1)2号掘立柱建物柱材の14C年代とウィグルマッチングによる暦年代の推定

2号掘立柱建物構成するP4，P7，P8の柱材からは各3点の試料が採取され，各試料の14C年代測定と暦年較

正が行われた。さらに，柱材の残存最外年輪の暦年代を推定するために，柱材ごとにウィグルマッチングが試みられた。14C年代測定の結果を表２に，暦年較正とウィグルマッチングの結果を表３と第２～４図に示した。

P4柱材採取試料の14C年代は，No.1が920±20yrBP，No.2が920±20yrBP，No.3が910±20yrBPである。P4柱材には74年輪認められ，最外年輪側のNo.1と中間のNo.2の間に25年輪分，最内年輪側のNo.3と中間のNo.2の間に35年輪分の間隔がある。３点の値は誤差（±1σ）の範囲でよく一致し，年輪数に近い年代幅となっている。暦年較正年代（1σ）は，No.1が1046～1159cal AD，No.2が1046～1158cal AD，No.3が1046～1160cal ADの間に各々３つの範囲で示される。これら３点の年代値を利用してウィグルマッチングを行うと，P４柱材の残存最外年輪の暦年代は1σで1121～1163cal ADの間に２つの範囲，2σで1105～1172cal ADの範囲として示される。

P７柱材採取試料の14C年代は，No.4が970±20yrBP，No.5が990±20yrBP，No.6が920±20yrBPである。P７柱材には66年輪が観察され，最外年輪側のNo.4と中間のNo.5の間に25年輪分，最内年輪側のNo.6と中間のNo.5の間に25年輪分の間隔がある。No.4とNo.5の値は誤差（±1σ）の範囲で重なるが，これらとNo.6の値の間には若干年代差が認められる。暦年較正年代（1σ）は，No.4が1023～1148cal AD，No.5が1017～1116cal AD，No.6が1046～1158cal ADの間に各々複数の範囲で示される。これら３点の年代値を利用してウィグルマッチングを行うと，P７柱材の残存最外年輪の暦年代は，1σで1119～1152cal ADの間に２つの範囲，2σで1114～1155cal ADの範囲として示される。

P８柱材採取試料の14C年代は，No.7が950±20yrBP，No.8が940±20yrBP，No.9が930±20yrBPである。P８柱材には60年輪が観察され，最外年輪側のNo.7と中間のNo.8の間に20年輪分，最内年輪側のNo.9と中間のNo.8の間に25年輪分の間隔がある。３点の値は誤差（±1σ）の範囲で重なり，おおむね年輪数に近い年代幅となっている。暦年較正年代（1σ）は，No.7が1029～1150cal AD，No.8が1035～1152cal AD，No.9が1044～1155cal ADの間に各々3つの範囲で示される。これら3点の年代値を利用してウィグルマッチングを行うと，P８柱材の残存最外年輪の暦年代は，1σで1104～1152cal ADの間に２つの範囲，2σで1094～1156cal ADの範囲として示される。

No.1～9の14C年代は，910±20yrBP（No.3）から990±20yrBP（No.5）という比較的狭い範囲に収まっており，３本の柱材から採取された各３点の試料の間には，14C年代値の大きな差は認められない。また，内側の試料の値が小さく，外側の値が大きいという共通の傾向を指摘できる。これは，これらの14C年代に対応する範囲の暦年較正曲線が，14C年代で900～950yrBP頃を中心に小さく波打ちながら，1030～1150cal AD頃の範囲でほぼ平坦に推移していることに由来すると考えられる。

ウィグルマッチングの結果，３本の柱材の残存最外年輪年代を示す確率分布はいずれも２つのピークを成し，その高さには差があるものの，おおむね似た範囲に広がる（第３図）。較正年代で12世紀前葉から中葉頃の範囲と見積もられ，個々の最外年輪側試料（No.1，No.4，No.7）の年代値から算出される暦年代範囲が11世紀前半から12世紀中葉頃であるのに対して，その後半の範囲に絞られたことを示す。

さらに各柱材のウィグルマッチング結果について検討すると，P４柱材では1155～1160cal AD頃に最外年輪を置く場合に最もマッチングが良く，次いで1125～1135cal AD頃も良い。P７柱材では，1145～1150cal AD頃を最外年輪とする場合のマッチングが良いが，中間の試料No.5（IAAA-111372）はやや外れる。P8柱材では，1145～1150cal AD頃を最外年輪とすると最もよく合致するが，1110～1120cal AD頃でも同等に良くマッチングする。

また，ウィグルマッチングの結果を表す確率分布のピークに柱材の最外年輪の位置を合わせ，各試料の年代値の較正曲線上での位置関係を表示すると第４図のようになる。P４柱材，P８柱材は２つのピークに合わせて２通り，P７柱材は右側の顕著に高いピークに合わせて１通りの図を掲げた。これらは，確率分布を参照して最外年輪

年代の例を示したものである。

以上の検討から，算出された最外年輪の暦年代範囲の中でもいくつかの確率の高い範囲を指摘することができる。３本の柱材の共通点としては，最外年輪が1145～1160cal AD頃に当たる確率が高いと見ることもできる。

ただし，いずれの柱材も樹皮を確認できず，あくまでも残存する範囲での最外年輪に関する議論であり，柱に用いられた樹木の伐採年や，建物が構築された年代とは必ずしも一致しないことに注意する必要がある。また，測定点数が各柱材３点と少ないことから，個々の試料の測定値がウィグルマッチングの結果に与える影響が大きいことを踏まえた慎重な解釈が望まれる。

試料の炭素含有率は40～60％程度と木片としてはおおむね適正か若干低い値で，化学処理，測定上の問題は特に認められない。

(2)土坑，井戸出土試料の14C年代測定

土坑出土炭化材の14C年代は，１a号土坑１b層出土のNo.10が1330±20yrBP，No.11が1290±20yrBP，９号土坑２層出土のNo.12が1280±20yrBP，No.13が1230±20yrBP，10号土坑１～３層出土のNo.14が1230±20yrBP，同1層出土のNo.15が1290±20yrBPである。３つの土坑から出土した各２点の値は，誤差（±1σ）の範囲で近接するか，わずかに差がある程度である。暦年較正年代（1σ）は，No.10が657～687cal ADの範囲，No.11が675～767cal ADの間に２つの範囲，No.12が681～768cal ADの間に２つの範囲，No.13が722～865cal ADの間に３つの範囲，No.14が721～863cal ADの間に３つの範囲，No.15が680～768cal ADの間に２つの範囲で示される。各遺構から出土した２点の間で1σ暦年代範囲がかなり異なっている場合があるが，2σで見るとその差は小さくなる。これは，これらの試料の値が含まれる700～900cal AD頃の範囲で較正曲線が平坦に推移する部分があることによる。出土土器から８～10世紀頃と推定されているのに対して，1σの暦年代範囲ではNo.10が古い値となるが，2σの暦年代範囲ではすべて矛盾しない結果である。

井戸出土炭化材の14C年代は，１号井戸２層出土のNo.16が2400±20yrBP，No.17が2400±20yrBP，３号井戸５層出土のNo.18が26900±110yrBP，No.19が900±20yrBPである。１号井戸の２点の値は誤差（±1σ）の範囲でよく一致し，ほぼ同年代を示す。暦年較正年代（1σ）は，No.16が509～406cal BCの間に２つの範囲，No.17が509～404cal BCの間に２つの範囲，No.18が29389～29225cal BCの範囲，No.19が1049～1181cal ADの間に３つの範囲で示される。１号井戸のNo.16，No.17の値は，縄文時代晩期から弥生時代への移行期頃に相当し，出土土器から推定される８～10世紀よりもかなり古い年代値となっている。３号井戸の試料は，No.19が古代の年代値で，出土土器による８～10世紀という推定よりもやや新しい結果である。また，No.18は著しく古い値を示し，何らかの混入の可能性や，炭素の由来に関する検討が必要と見られる。肉眼による観察でNo.18に注意すべき点は特に認められず，後述する炭素含有率も他の炭化材と変わらなかった。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文　献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表２　測定結果1

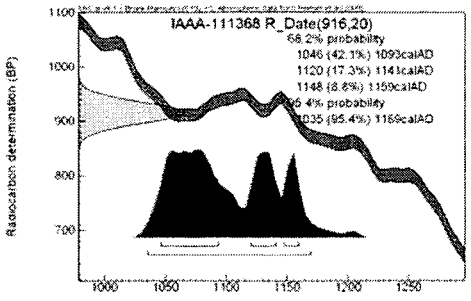
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-111368	No. 1 (P4 柱材①)	2 号掘立柱建物 P4-柱穴内	木片	AAA	-28.68 ± 0.37	920±20	89.22 ± 0.22
IAAA-111369	No. 2 (P4 柱材②)	2 号掘立柱建物 P4-柱穴内	木片	AAA	-33.57 ± 0.45	920±20	89.20 ± 0.23
IAAA-111370	No. 3 (P4 柱材③)	2 号掘立柱建物 P4-柱穴内	木片	AAA	-28.19 ± 0.44	910±20	89.23 ± 0.22
IAAA-111371	No. 4 (P7 柱材①)	2 号掘立柱建物 P7-柱穴内	木片	AAA	-26.54 ± 0.49	970±20	88.65 ± 0.22
IAAA-111372	No. 5 (P7 柱材②)	2 号掘立柱建物 P7-柱穴内	木片	AAA	-26.45 ± 0.43	990±20	88.44 ± 0.22
IAAA-111373	No. 6 (P7 柱材③)	2 号掘立柱建物 P7-柱穴内	木片	AAA	-28.85 ± 0.41	920±20	89.19 ± 0.22
IAAA-111374	No. 7 (P8 柱材①)	2 号掘立柱建物 P8-柱穴内	木片	AAA	-26.43 ± 0.53	950±20	88.81 ± 0.24
IAAA-111375	No. 8 (P8 柱材②)	2 号掘立柱建物 P8-柱穴内	木片	AaA	-31.25 ± 0.38	940±20	88.94 ± 0.23
IAAA-111376	No. 9 (P8 柱材③)	2 号掘立柱建物 P8-柱穴内	木片	AAA	-30.94 ± 0.40	930±20	89.11 ± 0.22
IAAA-111377	No. 10 (1a 号土坑①)	1a 号土坑　1b 層	炭化材	AaA	-24.21 ± 0.36	1,330±20	84.75 ± 0.24
IAAA-111378	No. 11 (1a 号土坑②)	1a 号土坑　1b 層	炭化材	AAA	-22.06 ± 0.48	1,290±20	85.16 ± 0.23
IAAA-111379	No. 12 (9 号土坑①)	9 号土坑　2 層	炭化材	AaA	-24.25 ± 0.43	1,280±20	85.22 ± 0.24
IAAA-111380	No. 13 (9 号土坑②)	9 号土坑　2 層	炭化材	AAA	-22.98 ± 0.48	1,230±20	85.85 ± 0.25
IAAA-111381	No. 14 (10 号土坑①)	10 号土坑　1~3 層	炭化材	AaA	-25.85 ± 0.38	1,230±20	85.84 ± 0.24
IAAA-111382	No. 15 (10 号土坑②)	10 号土坑　1 層	炭化材	AAA	-22.88 ± 0.38	1,290±20	85.22 ± 0.23
IAAA-111383	No. 16 (1 号井戸①)	1 号井戸　2 層	炭化材	AAA	-24.98 ± 0.39	2,400±20	74.14 ± 0.21
IAAA-111384	No. 17 (1 号井戸②)	1 号井戸　2 層	炭化材	AaA	-27.78 ± 0.33	2,400±20	74.18 ± 0.22
IAAA-111385	No. 18 (3 号井戸①)	3 号井戸　5 層	炭化材	AaA	-24.31 ± 0.62	26,900±110	3.51 ± 0.05
IAAA-111386	No. 19 (3 号井戸②)	3 号井戸　5 層	炭化材	AAA	-23.94 ± 0.45	900±20	89.43 ± 0.24

[#4629]

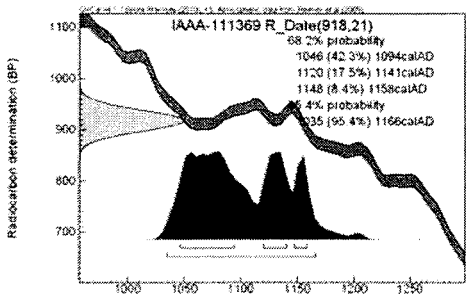
表３　測定結果2

試料番号	測定番号	δ ^{13}C 補正なし		採取位置（最外年輪から）	暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
		Age (yrBP)	pMC (%)				
No.1	IAAA-111368	980 ± 20	88.54 ± 0.21	2～5 年輪	916 ± 20	1046calAD - 1093calAD (42.1%) 1120calAD - 1141calAD (17.3%) 1148calAD - 1159calAD (8.8%)	1035calAD - 1169calAD (95.4%)
No.2	IAAA-111369	1,060 ± 20	87.64 ± 0.22	31～35 年輪	918 ± 21	1046calAD - 1094calAD (42.3%) 1120calAD - 1141calAD (17.5%) 1148calAD - 1158calAD (8.4%)	1035calAD - 1166calAD (95.4%)
No.3	IAAA-111370	970 ± 20	88.65 ± 0.21	71～74 年輪	914 ± 20	1046calAD - 1093calAD (42.0%) 1121calAD - 1140calAD (16.6%) 1148calAD - 1160calAD (9.6%)	1035calAD - 1173calAD (95.4%)
P4 柱材最外年輪年代 （IAAA-111368 ～ 111370をウィグルマッチング）						1121calAD - 1141calAD (41.2%) 1150calAD - 1163calAD (27.0%)	1105calAD - 1172calAD (95.4%)
No.4	IAAA-111371	990 ± 20	88.38 ± 0.20	2～5 年輪	967 ± 19	1023calAD - 1045calAD (33.2%) 1095calAD - 1120calAD (28.3%) 1141calAD - 1148calAD (6.7%)	1019calAD - 1053calAD (39.6%) 1080calAD - 1154calAD (55.8%)
No.5	IAAA-111372	1,010 ± 20	88.17 ± 0.20	31～35 年輪	986 ± 19	1017calAD - 1041calAD (60.6%) 1109calAD - 1116calAD (7.6%)	996calAD - 1050calAD (66.6%) 1086calAD - 1124calAD (22.5%) 1137calAD - 1152calAD (6.3%)
No.6	IAAA-111373	980 ± 20	88.94± 0.21	61～65 年輪	919 ± 20	1046calAD - 1094calAD (42.3%) 1120calAD - 1141calAD (17.8%) 1148calAD - 1158calAD (8.1%)	1035calAD - 1165calAD (95.4%)
P7 柱材最外年輪年代 （IAAA-111371 ～ 111373をウィグルマッチング）						1119calAD - 1124calAD (6.9%) 1138calAD - 1152calAD (61.3%)	1114calAD - 1155calAD (95.4%)
No.7	IAAA-111374	980 ± 20	88.55 ± 0.22	1～5 年輪	952 ± 21	1029calAD - 1048calAD (19.7%) 1087calAD - 1122calAD (37.3%) 1139calAD - 1150calAD (11.2%)	1023calAD - 1155calAD (95.4%)
No.8	IAAA-111375	1,040 ± 20	87.80 ± 0.21	26～30 年輪	941 ± 20	1035calAD - 1051calAD (13.8%) 1082calAD - 1125calAD (40.2%) 1136calAD - 1152calAD (14.2%)	1030calAD - 1155calAD (95.4%)
No.9	IAAA-111376	1,020 ± 20	88.02 ± 0.21	56～60 年輪	926 ± 20	1044calAD - 1100calAD (43.0%) 1119calAD - 1142calAD (19.2%) 1147calAD - 1155calAD (6.0%)	1035calAD - 1160calAD (95.4%)
P8 柱材最外年輪年代 （IAAA-111374 ～ 111376をウィグルマッチング）						1104calAD - 1127calAD (40.7%) 1137calAD - 1152calAD (27.5%)	1094calAD - 1156calAD (95.4%)
No.10	IAAA-111377	1,320 ± 20	84.89 ± 0.23	—	1,329 ± 22	657calAD - 687calAD (68.2%)	651calAD - 711calAD (83.2%) 746calAD - 767calAD (12.2%)
No.11	IAAA-111378	1,240 ± 20	85.67 ± 0.22	—	1,290 ± 21	675calAD - 712calAD (42.1%) 746calAD - 767calAD (26.1%)	667calAD - 773calAD (95.4%)
No.12	IAAA-111379	1,270 ± 20	85.35 ± 0.23	—	1,284 ± 22	681calAD - 716calAD (39.8%) 744calAD - 768calAD (28.4%)	671calAD - 773calAD (95.4%)
No.13	IAAA-111380	1,190 ± 20	86.21 ± 0.23	—	1,225 ± 23	722calAD - 741calAD (11.8%) 770calAD - 827calAD (40.6%) 839calAD - 865calAD (15.9%)	694calAD - 748calAD (22.2%) 765calAD - 883calAD (73.2%)
No.14	IAAA-111381	1,240 ± 20	85.69 ± 0.23	—	1,226 ± 22	721calAD - 741calAD (13.3%) 770calAD - 826calAD (40.8%) 841calAD - 863calAD (14.0%)	694calAD - 748calAD (23.0%) 765calAD - 881calAD (72.4%)
No.15	IAAA-111382	1,250 ± 20	85.59 ± 0.22	—	1,285 ± 21	680calAD - 715calAD (39.7%) 745calAD - 768calAD (28.5%)	671calAD - 773calAD (95.4%)
No.16	IAAA-111383	2,400 ± 20	74.14 ± 0.20	—	2,403 ± 22	509calBC - 438calBC (55.7%) 421calBC - 406calBC (12.5%)	716calBC - 694calBC (3.4%) 540calBC - 400calBC (92.0%)
No.17	IAAA-111384	2,450 ± 20	73.76 ± 0.22	—	2,399 ± 24	509calBC - 438calBC (54.2%) 421calBC - 404calBC (14.0%)	716calBC - 695calBC (3.3%) 540calBC - 398calBC (92.1%)
No.18	IAAA-111385	26,890 ± 110	3.52 ± 0.05	—	26,901 ± 107	29389calBC - 29225calBC (68.2%)	29480calBC - 29140calBC (95.4%)
No.19	IAAA-111386	880 ± 20	89.63 ± 0.22	—	897 ± 21	1049calAD - 1085calAD (32.9%) 1124calAD - 1138calAD (10.0%) 1151calAD - 1181calAD (25.2%)	1044calAD - 1102calAD (41.2%) 1118calAD - 1211calAD (54.2%)

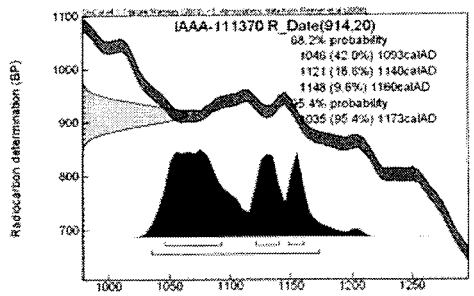
[参考値]



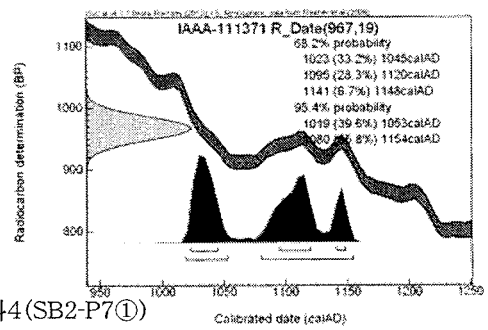
試料1(SB2-P4①)



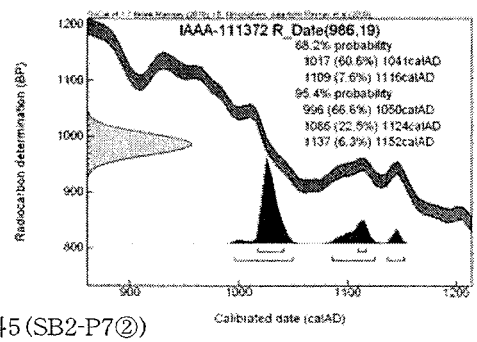
試料2(SB2-P4②)



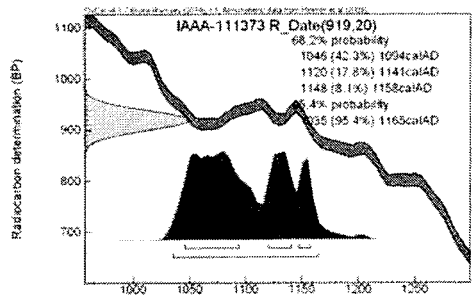
試料3(SB2-P4③)



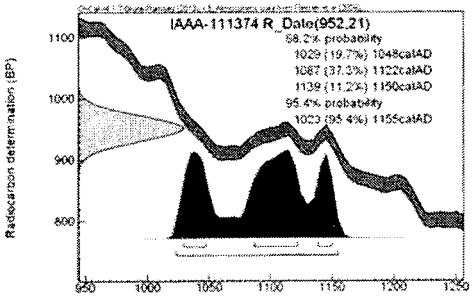
試料4(SB2-P7①)



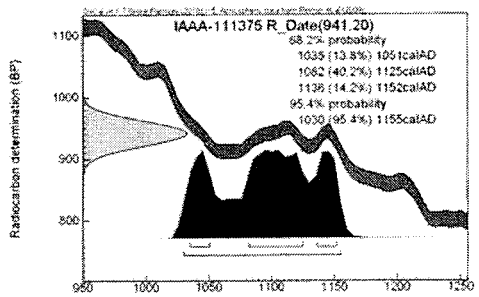
試料5(SB2-P7②)



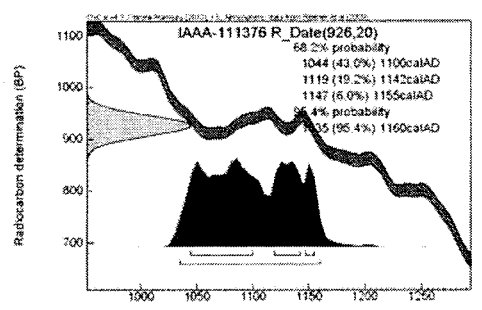
試料6(SB2-P7③)



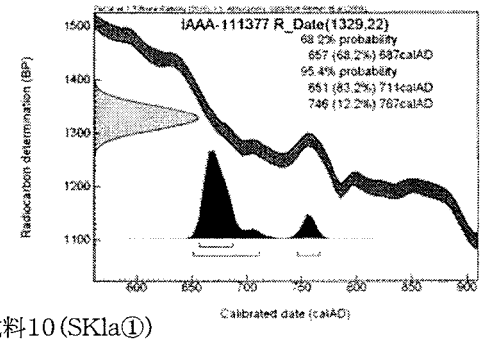
試料7(SB2-P8①)



試料8(SB2-P8②)

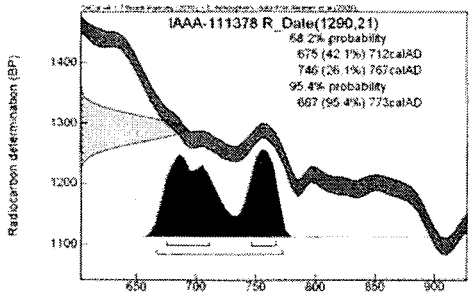


試料9(SB2-P8③)

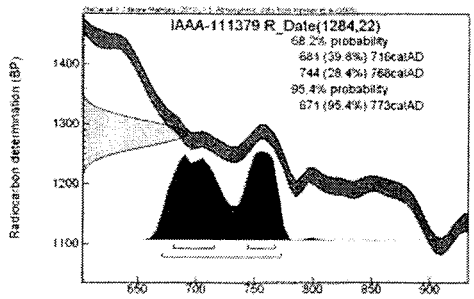


試料10(SKla①)

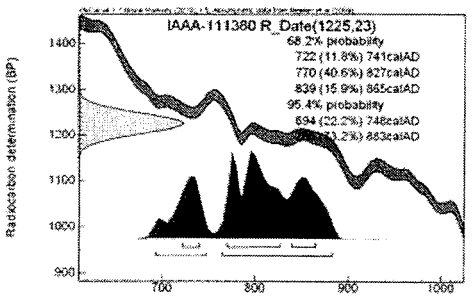
第2(1)図　暦年較正年代グラフ(1)



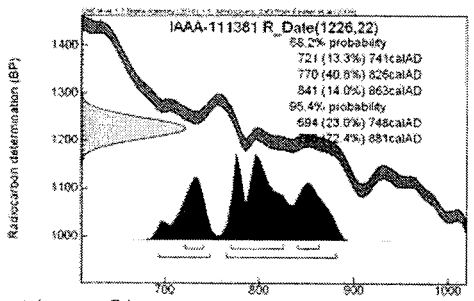
試料11(SKla②)



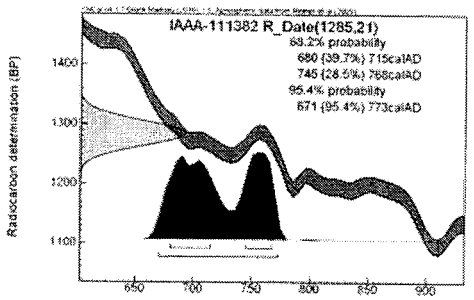
試料12(SK9①)



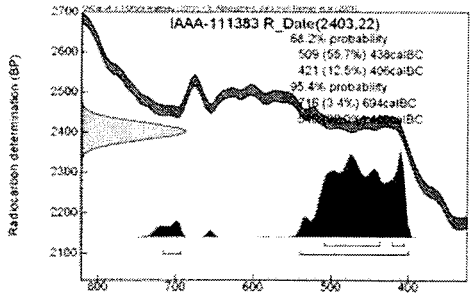
試料13(SK9②)



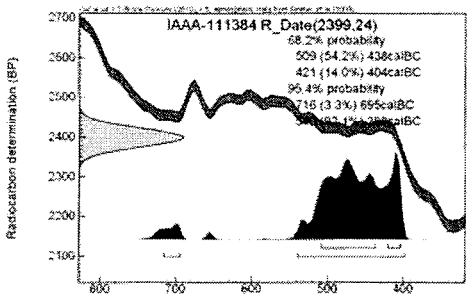
試料14(SK10①)



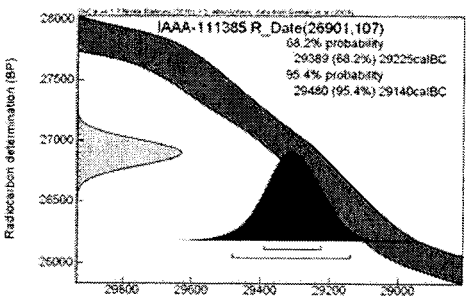
試料15(SK10②)



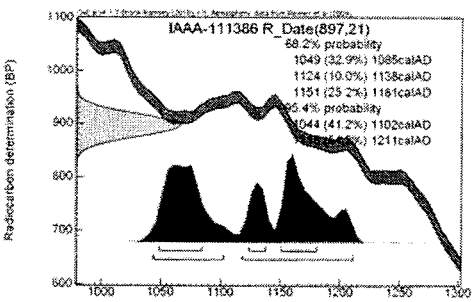
試料16(SE1①)



試料17(SE1②)

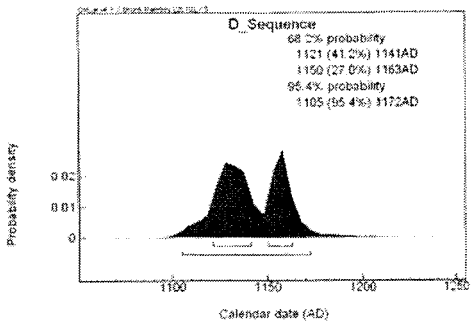


試料18(SE3①)

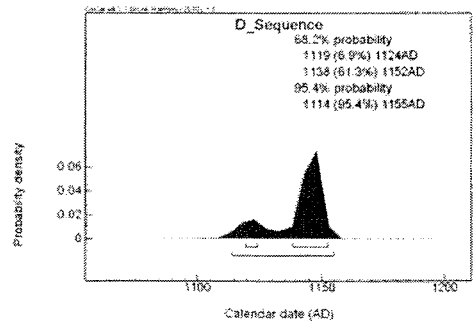


試料19(SE3②)

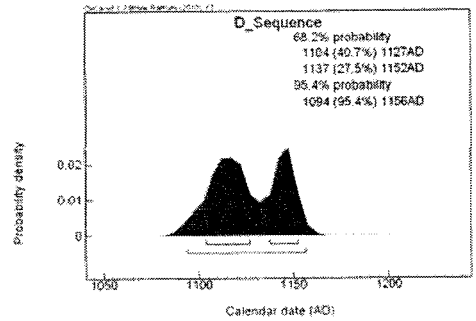
第2(2)図　暦年較正年代グラフ(2)



SB2- P4 柱材

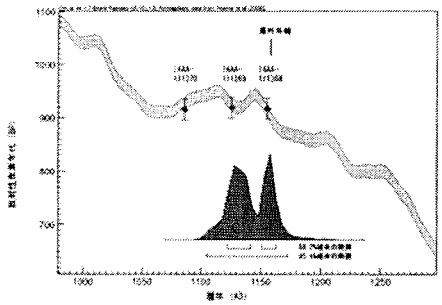


SB2- P7 柱材

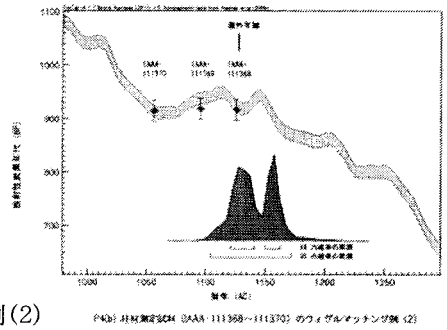


SB2- P8 柱材

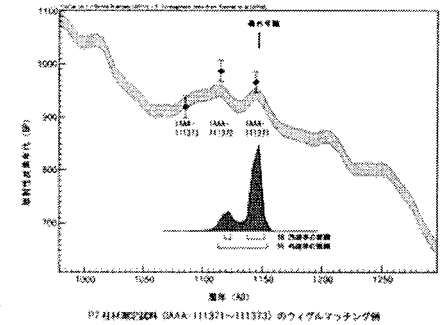
第3図　ウィグルマッチングによる
最外年輪の暦年代グラフ



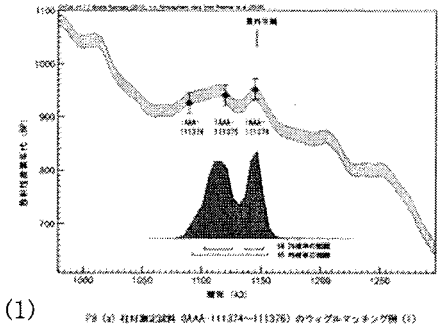
SB2-P4例(1)



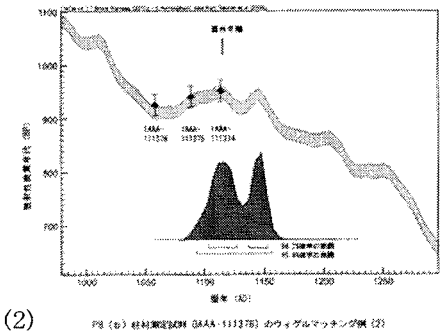
SB2-P4例(2)



SB2-P7例



SB2-P8例(1)



SB2-P8例(2)

第4図　柱材測定試料のウィグルマッチング例

2　土器胎土のＸ線回折試験及び化学分析試験

㈱第四紀 地質研究所　井上　巖

1　実験条件

1－1　試　　料

分析に供した試料は表１胎土性状表に示す通りである。

Ｘ線回折試験に供する遺物試料は洗浄し，乾燥したのち，メノウ乳鉢にて粉砕し，粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し，表面を洗浄し，乾燥後，試料表面をコーテングしないで，直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し，分析した。

1－2　Ｘ線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020Ｘ線回折装置を用い，次の実験条件で実験した。

Target：Cu，Filter：Ni, Voltage：40ｋV, Current：30mA, ステップ角度：0.02°，計数時間：0.5秒。

1－3　化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし，実験条件は加速電圧：15kV，分析法：スプリント法，分析倍率：200倍，分析有効時間：100秒，分析指定元素10元素で行った。

2　Ｘ線回折試験結果の取扱い

実験結果は表１胎土性状表に示す通りである。

表１右側にはＸ線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり，左側には各胎土に対する分類を行った結果を示している。Ｘ線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2－1　組成分類

1）　Ｍｏｎｔ－Ｍｉｃａ－Ｈｂ三角ダイヤグラム

第１図に示すように三角ダイヤグラムを１～13に分割し，位置分類を各胎土について行い，各胎土の位置を数字で表した。Ｍｏｎｔ，Ｍｉｃａ，Ｈｂの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ，別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Ｍｏｎｔ)，雲母類(Ｍｉｃａ)，角閃石(Ｈｂ)のＸ線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（％）で表示する。モンモリロナイトはＭｏｎｔ/Ｍｏｎｔ＋Ｍｉｃａ＋Ｈｂ＊100でパーセントとして求め，同様にＭｉｃａ,Ｈｂも計算し，三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の１～４はＭｏｎｔ,Ｍｉｃａ,Ｈｂの３成分を含み，各辺は２成分，各頂点は１成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第２図に示す通りである。

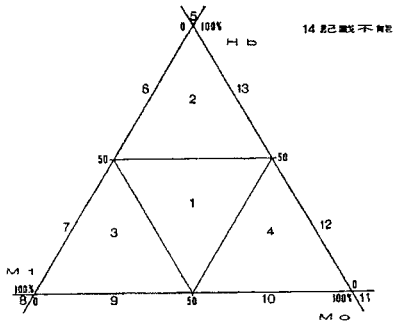
2）　Ｍｏｎｔ-Ｃｈ,Ｍｉｃａ-Ｈｂ菱形ダイヤグラム

第３図に示すように菱形ダイヤグラムを１～19に区分し，位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト(Ｍｏｎｔ)，雲母類(Ｍｉｃａ)，角閃石(Ｈｂ)，緑泥石(Ｃｈ）の内，ａ)３成分以上含まれない，ｂ）Ｍｏｎｔ,Ｃｈの２成分が含まれない，ｃ）Ｍｉｃａ,Ｈｂの２成分が含まれない，の３例がある。菱形ダイヤグラムはＭｏｎｔ－Ｃｈ,Ｍｉｃａ－Ｈｂの組合せを表示するものである。Ｍｏｎｔ－Ｃｈ,Ｍｉｃａ－Ｈｂ

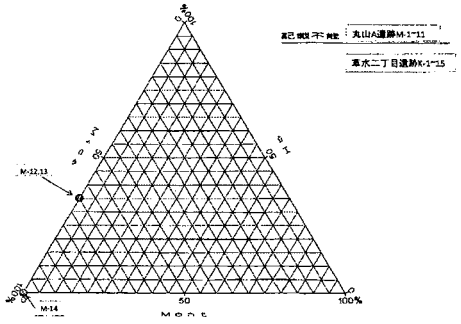
表1　胎土性状表

試料	タイプ	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物													備考			
No	分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch (Fe)	Ch (Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull	K-fels	Hal	Kaol	Au	種類	器種名	時期	遺跡名－試料番号（報告書番号）
M-1	C	14	20						1023	89	171	182	111				須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―①(181)
M-2	C	14	20						2023	79		133	105				須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―②(49)
M-3	C	14	20						2529	84		90					須恵器	杯蓋	奈良・平安	丸山A遺跡―③(39)
M-4	C	14	20						4358	60	94	55					須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―④(346)
M-5	C	14	20						3538	55		77	135				須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑤(344)
M-6	C	14	20						1643	73	144	165	94				須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑥(342)
M-7	C	14	20						1036	84	194	280					須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑦(380)
M-8	C	14	20						3557	56	80	78	145				須恵器	無台椀	奈良・平安	丸山A遺跡―⑧(400)
M-9	C	14	20						2491	73		111	139				須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑨(90)
M-10	C	14	20						2634	70	105	117	117				須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑩(555)
M-11	C	14	20						4100	64		61	157				土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑪(386)
M-12	B	8	8		198		157		3842	188							土師器	長胴甕	奈良・平安	丸山A遺跡―⑫(477)
M-13	B	8	8		198		171		4378	121	139	46					土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡―⑬(583)
M-14	A	7	20		158	83			4155	248	104	61					土師器	小型甕	奈良・平安	丸山A遺跡―⑭(611)
K-1	C	14	20						1094	82	503	112					須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-1
K-2	C	14	20						1781	81	515	187					須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-2
K-3	C	14	20						1958	72	321	100					須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-3
K-4	C	14	20						1488	89	278	143					須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-4
K-5	C	14	20						1237	132	307	166					須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-5
K-6	C	14	20						1304	92	324	98					須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-6
K-7	C	14	20						2280	99	179	181					須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-7
K-8	C	14	20						1496	83	409	190					須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-8
K-9	C	14	20						2221	82	253	78					須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-9
K-10	C	14	20						1197	88	399	182					須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-10
K-11	C	14	20						1743	72	489	180					須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-11
K-12	C	14	20						2236	95	439	83					須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-12
K-13	C	14	20						2331	82	391	71					須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-13
K-14	C	14	20						2652	77	553	71					須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-14
K-15	C	14	20						2559	61	268	89					須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-15

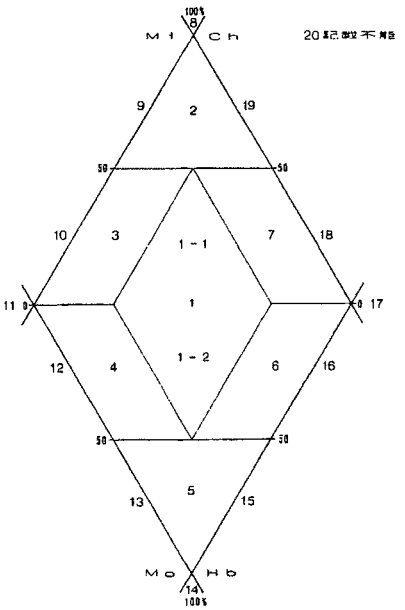
Mont:モンモリロナイト Mica:雲母類 Hb :角閃石 Ch:緑泥石(Ch:Fe 一次反射、Ch:Mg 二次反射) Qt :石英 Pl:斜長石 Crist:クリストバライト
Mullite:ムライト K-fels:カリ長石 Halloy :ハロイサイト Kaol:カオリナイト Pyrite:黄鉄鉱 Au:普通輝石 Py:紫蘇輝石



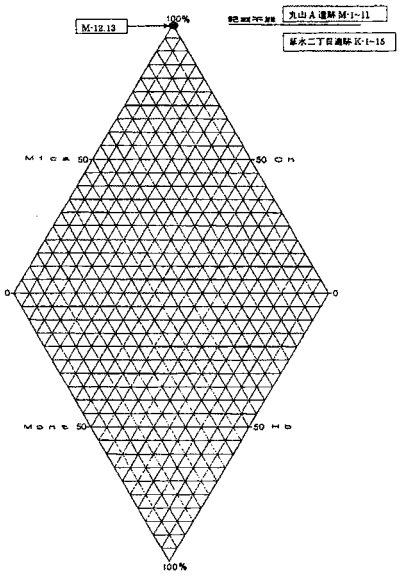
第1図　三角ダイヤグラム位置分類図



第2図　Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム



第3図　菱形ダイヤグラム位置分類図



第4図　Mo-Ch,Mi-Hb菱形ダイヤグラム

のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので，例えば，Ｍｏｎｔ/Ｍｏｎｔ＋Ｃｈ＊100と計算し，Ｍｉｃａ,Ｈｂ,Ｃｈも各々同様に計算し，記載する。

菱形ダイヤグラム内にある１～７はＭｏｎｔ,Ｍｉｃａ,Ｈｂ,Ｃｈの４成分を含み，各辺はＭｏｎｔ,Ｍｉｃａ,Ｈｂ,Ｃｈのうち３成分，各頂点は２成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第４図に示すとおりである。

３）化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として，ノーマル法（10元素全体で100％になる）で計算し，化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３図，Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図，Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図の各図を作成した。これらの図をもとに，土器類を元素の面から分類した。

３　X線回折試験結果

３－１　タイプ分類

表１胎土性状表には丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器が記載してある。

表３タイプ分類表に示すように土器と原土はＡ～Ｃの３タイプが検出された。

Ａタイプ：Ｍｉｃａ,Ｈｂの２成分を含み，Ｍｏｎｔ,Ｃｈの２成分に欠ける。

Ｂタイプ：Ｍｉｃａ,Ｃｈの２成分を含み，Ｍｏｎｔ,Ｈｂの２成分に欠ける。

Ｃタイプ：Ｍｏｎｔ,Ｍｉｃａ,Ｈｂ,Ｃｈの４成分にかける。高～中温領域で焼成されているため鉱物が分解してガラスに変質している。

丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器は高温で焼成されているためにＣタイプである。

３－２　石英（Ｑｔ）－斜長石（Ｐ１）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質，土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で，ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり，言い換えれば，各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。第５図Ｑｔ－Ｐ１図に示すように新潟市周辺の古窯跡の分類で，Ｑｔの強度が小の領域から大の領域にかけて５グループに分類された。丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器はＱｔ－１，Ｑｔ－２に集中し，２タイプに分類される。土師器はＱｔの強度が高い領域にあり，Ｑｔ－６とした。

Ｑｔ－１：Ｑｔが700～1700，Ｐ１が40～85の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器が集中し，丸山Ａ遺跡より出土した須恵器が共存する。

Ｑｔ－２：Ｑｔが1700～2900，Ｐ１が40～150の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器が集中し，丸山Ａ遺跡より出土した須恵器が共存する。

Ｑｔ－６：Ｑｔが3500～4500，Ｐ１が0～300の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した土師器が集中し，須恵器が共存する。

4　化学分析結果

表２化学分析表には丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器が記載してある。分析結果に基づいて新潟市周辺の古窯跡の分類の第５図ＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３図，第５図Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図，第５図Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図と対比させるために記載し，図を作成した。

４－１　ＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３の相関について

第５図ＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３図に示すように丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器はⅠ～Ⅲ，Ⅴ及びⅥの５タイプに分類した。

Ⅰタイプ：ＳｉＯ２が57～66%，Ａｌ２Ｏ３が22～30%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した須恵器が集中する。

Ⅱタイプ：ＳｉＯ２が62～68%，Ａｌ２Ｏ３が17～23%の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器が集中する。

Ⅲタイプ：ＳｉＯ２が66～74%，Ａｌ２Ｏ３が17～24%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した須恵器１個が該当する。

Ⅴタイプ：ＳｉＯ２が56～63%，Ａｌ２Ｏ３が17～24%の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器。

Ⅵタイプ：ＳｉＯ２が55～63%，Ａｌ２Ｏ３が24～32%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した土師器が集中し，須恵器が混在する。

４－２　Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２の相関について

第５図Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図には丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器が記載してある。Ｆｅ２Ｏ３の領域によって３グループに分類された。

Ｆｅ２Ｏ３－1：Ｆｅ２Ｏ３が2.5～8.5%，ＴｉＯ２が0.6～1.8%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器が集中する。

Ｆｅ２Ｏ３－2：Ｆｅ２Ｏ３が4.8～10%，ＴｉＯ２が0.4～1.3%の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器が集中する。

Ｆｅ２Ｏ３－3：Ｆｅ２Ｏ３が7～12%，ＴｉＯ２が0.8～1.8%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した土師器系とした須恵器が集中する。

“その他”　：土師器がＴｉＯ２の高い領域にある。

４－３　Ｋ２Ｏ－ＣａＯの相関について

第５図Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図に示すようにＫ２Ｏの値によって２グループに分類した。

Ｋ２Ｏ－1：Ｋ２Ｏが1.2～3.7%，ＣａＯが0.1～0.8%の領域に分布する。
草水二丁目遺跡より出土した須恵器が集中する。

Ｋ２Ｏ－2：Ｋ２Ｏが2.0～5.3%，ＣａＯが0～0.7%の領域に分布する。
丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器が集中する。

新潟市周辺の古窯跡の分類の第５図Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図を細分するとＫ２Ｏの値が小さい領域に貝屋窯跡，中間領域には元山窯跡，大きい領域にはホウロク沢窯跡・堤上窯跡と大まかに領域が分かれる。中間領域の中には真木山丘陵と笹神丘陵の土器の共存し，類似性が高いように見受けられる。

5　まとめ

Ｘ線回折試験と蛍光Ｘ線分析の分析結果に基づいて分類した結果が表４組成分類表である。左側のＱｔ,Ｓｉ,Ｆｅは第５図の領域の番号で所属領域を示す。所属領域の番号が同じものを同じ組成をするものとして分類した。Ｘ線回折試験と蛍光Ｘ線分析の結果に基づいて，丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器は表３タイプ分類表と表４組成分類表に示すように分類した。

1）　丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器の土器胎土はＡ～Ｃの３タイプに分類されそのほとんどはCタイプである。Ｃタイプは高温で焼成されているために鉱物が分解してガラスに変質したものである。

2）　第５図Ｑｔ－Ｐｌ図に示すように，丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器はＱｔの強度が小さい領域～大きい領域にかけてQt－１～Qt－２とQt－６の３グループに分類される。

3）　Qt－1とQt－２の関係は第５図にある焼成温度と関連する。Qt－１とQt－２は高温で焼成され，Qt－６の土師器系は中温で焼成されており，焼成環境が異なる。

4）　表４組成分類表に示すように，土器胎土のＸ線回折試験と化学分析の結果に基づいて第５図Ｑｔ－Ｐｌ図，ＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３図，Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図，Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図を作成し,各相関により分類したもので組成分類をおこなった。分類の結果，丸山Ａ遺跡より出土した須恵器と土師器と比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器は７タイプに分類された。

5）　組成分類の丸山Ａ遺跡より出土した須恵器は五頭山麓－１（笹神丘陵系），五頭山麓－２（元山窯跡系），五頭山麓・不明がある。五頭山麓・不明は組成的に対比されるものがなく，不明とした。土師器は土師器系としたもので，組成的に類似する須恵器があり，窯跡は不明である。比較対象試料の草水二丁目遺跡より出土した須恵器は大きくは頸城系－１と２に分けられる。頸城系－４？は組成的に異質である。

参考文献：井上巌（2010）中部・北陸地方の古窯跡データ集

表２　化学分析表

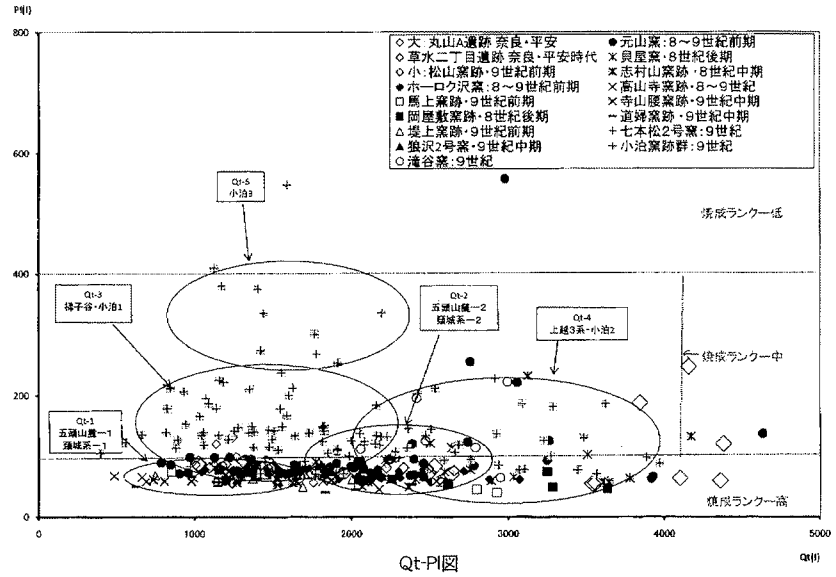
試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	種類	器種名	時期	遺跡名
M-1	0.28	0.00	26.36	62.88	3.75	0.11	1.45	0.85	4.32	0.00	100.00	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-2	0.45	0.00	24.61	62.87	4.17	0.27	1.06	0.20	5.90	0.47	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-3	0.32	0.00	27.72	60.18	3.04	0.28	1.35	0.23	6.34	0.55	100.01	須恵器	杯蓋	奈良・平安	丸山A—1
M-4	0.20	0.00	30.89	58.11	2.25	0.06	1.57	0.00	6.34	0.59	100.01	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-5	0.47	0.00	27.05	59.11	3.16	0.21	1.33	0.00	8.67	0.00	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-6	0.32	0.00	26.94	62.02	3.51	0.07	1.62	0.47	5.04	0.00	99.99	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-7	0.45	0.00	28.10	61.91	3.41	0.20	1.14	0.00	4.54	0.25	100.00	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-8	0.02	0.00	28.65	57.12	3.52	0.12	1.59	0.31	8.59	0.09	100.01	須恵器	無台椀	奈良・平安	丸山A—1
M-9	0.05	0.00	20.79	70.05	2.85	0.11	1.35	0.00	4.80	0.00	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-10	0.13	0.00	24.10	64.71	4.17	0.11	1.55	0.48	4.76	0.00	100.01	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-11	0.31	0.00	30.15	57.41	2.38	0.04	1.91	0.06	7.73	0.00	99.99	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-12	0.35	0.00	25.01	59.40	4.14	0.30	2.35	0.35	7.53	0.56	99.99	土師器	長胴甕	奈良・平安	丸山A—1
M-13	0.61	0.00	28.39	60.58	3.48	0.20	1.46	0.59	4.57	0.11	99.99	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A—1
M-14	0.48	0.00	31.70	56.39	2.92	0.26	1.75	0.17	6.33	0.00	100.00	土師器	小型甕	奈良・平安	丸山A—1
K-1	1.13	0.00	20.87	66.74	2.96	0.24	1.04	0.00	7.02	0.00	100.00	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-2	0.71	0.00	22.60	66.68	2.85	0.25	1.16	0.20	5.56	0.00	100.01	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-3	0.79	0.00	22.85	64.17	3.23	0.16	1.00	0.47	7.32	0.00	99.99	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-4	0.96	0.00	21.88	66.07	3.19	0.33	1.26	0.41	5.90	0.00	100.00	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-5	0.97	0.00	20.62	67.87	3.52	0.40	0.85	0.39	5.38	0.00	100.00	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-6	1.11	0.00	19.82	65.91	3.12	0.40	0.88	0.55	7.91	0.28	99.98	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-7	0.51	0.00	24.53	66.42	2.73	0.12	1.03	0.22	4.44	0.00	100.00	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-8	0.91	0.00	22.37	66.76	2.76	0.34	0.73	0.00	6.01	0.11	99.99	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-9	1.26	0.00	22.23	66.69	3.32	0.26	0.77	0.23	4.96	0.28	100.00	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-10	1.01	0.00	20.89	65.84	3.43	0.56	0.54	0.00	7.16	0.57	100.00	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-11	0.54	0.00	20.34	65.34	2.90	0.17	1.23	0.23	8.59	0.66	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-12	0.50	0.00	18.90	58.21	3.01	0.36	1.14	0.90	16.98	0.00	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-13	0.57	0.00	22.25	66.36	3.05	0.14	0.69	0.29	6.65	0.00	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-14	0.59	0.00	21.92	62.42	2.61	0.12	0.68	0.83	10.59	0.24	100.00	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡
K-15	0.47	0.00	20.99	64.75	2.81	0.22	0.55	0.47	9.30	0.43	99.99	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡

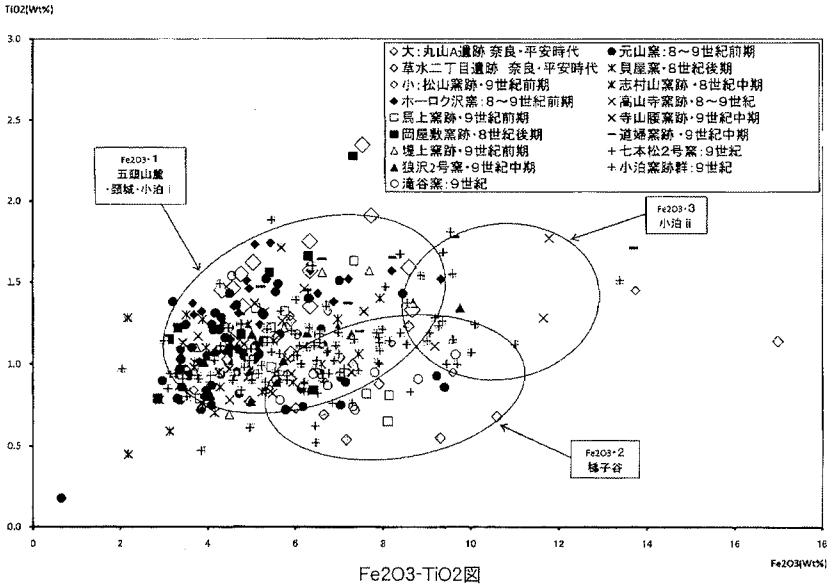
表３　タイプ分類表

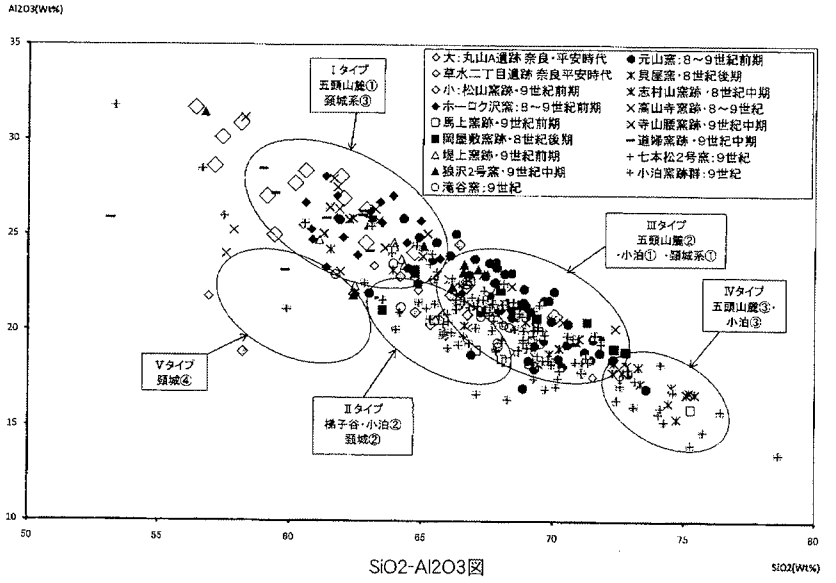
試料	タイプ	備考			
No	分類	種類	器種名	時期	遺跡名(報告番号)
M-14	A	土師器	小型甕	奈良・平安	丸山A遺跡—⑭(611)
M-12	B	土師器	長胴甕	奈良・平安	丸山A遺跡—⑫(477)
M-13	B	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑬(583)
M-1	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—①(181)
M-2	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—②(49)
M-3	C	須恵器	杯蓋	奈良・平安	丸山A遺跡—③(39)
M-4	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—④(346)
M-5	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑤(344)
M-6	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑥(342)
M-7	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑦(380)
M-8	C	須恵器	無台椀	奈良・平安	丸山A遺跡—⑧(400)
M-9	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑨(90)
M-10	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑩(555)
M-11	C	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑪(386)
K-1	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-1
K-2	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-2
K-3	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-3
K-4	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-4
K-5	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-5
K-6	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-6
K-7	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-7
K-8	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-8
K-9	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-9
K-10	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-10
K-11	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-11
K-12	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-12
K-13	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-13
K-14	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-14
K-15	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-15

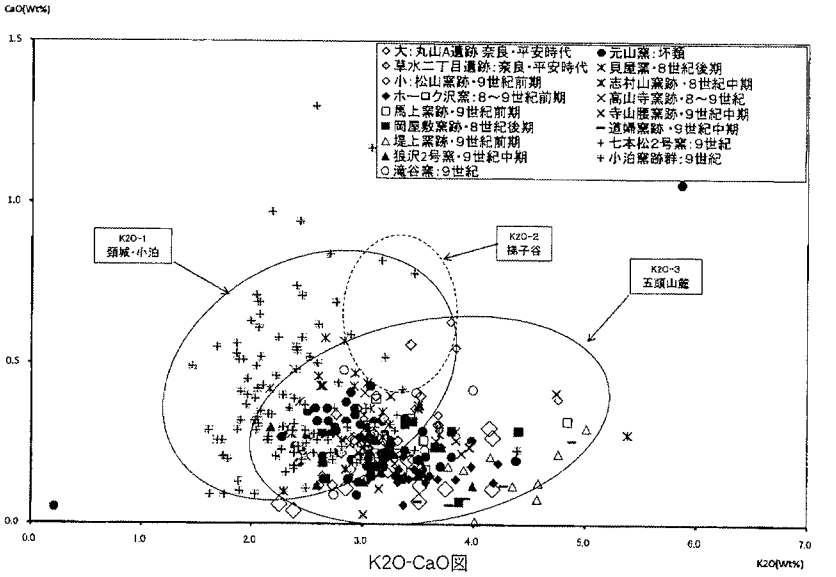
表４　組成分類表

Fe	Si	Qt	試料 No	タイプ 分類	備考 種類	器種名	時期	遺跡名(報告番号)	
			Qt1・Si・Ⅰ						
1	1	1	M-1	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—①(181)	五頭山麓-1
1	1	1	M-6	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑥(342)	五頭山麓-1
1	1	1	M-7	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑦(380)	五頭山麓-1
			Qt1・Si・Ⅱ						
2	2	1	K-1	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-1	頸城系-1
2	2	1	K-4	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-4	頸城系-1
2	2	1	K-5	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-5	頸城系-1
2	2	1	K-6	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-6	頸城系-1
2	2	1	K-8	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-8	頸城系-1
2	2	1	K-10	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-10	頸城系-1
			Qt2・Si・Ⅰ						
1	1	2	M-2	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—②(49)	五頭山麓・不明
1	1	2	M-3	C	須恵器	杯蓋	奈良・平安	丸山A遺跡—③(39)	五頭山麓・不明
1	1	2	M-10	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑩(555)	五頭山麓・不明
			Qt2・Si・Ⅱ						
2	2	2	K-2	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-2	頸城系-2
2	2	2	K-3	C	須恵器	甕	奈良・平安	草水二丁目遺跡-3	頸城系-2
2	2	2	K-7	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-7	頸城系-2
2	2	2	K-9	C	須恵器	有台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-9	頸城系-2
2	2	2	K-11	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-11	頸城系-2
2	2	2	K-13	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-13	頸城系-2
5	2	2	K-15	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-15	頸城系-2
			Qt2・Si・Ⅲ						
1	3	2	M-9	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑨(90)	五頭山系-2
			Qt2・Si・Ⅴ						
2	5	2	K-12	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-12	頸城系-4？
5	5	2	K-14	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	草水二丁目遺跡-14	頸城系-4？
			Qt6・Si・Ⅵ						
1	6	6	M-4	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—④(346)	土師器系
3	6	6	M-5	C	須恵器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑤(344)	土師器系
3	6	6	M-8	C	須恵器	無台椀	奈良・平安	丸山A遺跡—⑧(400)	土師器系
4	6	6	M-11	C	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑪(386)	土師器系
4	6	6	M-12	B	土師器	長胴甕	奈良・平安	丸山A遺跡—⑫(477)	土師器系
1	6	6	M-13	B	土師器	無台杯	奈良・平安	丸山A遺跡—⑬(583)	土師器系
1	6	6	M-14	A	土師器	小型甕	奈良・平安	丸山A遺跡—⑭(611)	土師器系









第５図　丸山Ａ遺跡・草水二丁目遺跡と周辺地域の古窯跡

3　丸山A遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

丸山A遺跡（新潟県新発田市蔵光字丸山）は，越後平野北部を流れる坂井川左岸に分布する段丘群の縁辺部に位置する。遺跡背後の丘陵である丸山は，中期更新世末の砂礫層からなる高位段丘とされており（高橋ほか，2010），その段丘から沖積低地に下る緩斜面上に遺跡は立地している。

本遺跡の発掘調査の結果，土師器焼成坑をはじめとして，多量の土器片が出土した土坑が多数確認されている。それらの土坑からは，土器破片とともに焼土塊や炭化物なども出土したことから，土師器焼成坑の片付けで排出されたものも廃棄されたと考えられている。出土した土師器は，奈良・平安時代（８世紀～９世紀）に比定されており，器種は鍋や甕などの煮炊具に偏り，食膳具は少数であることが特徴とされている。

本報告では，土器生産遺跡における土器胎土の状況の把握と，今後の周辺地域の同時期の消費遺跡との比較などにおいて基準となる資料の作成を目的として，土坑および土師器焼成坑から出土した土師器および黒色土器の材質（胎土）の特性について検討した。

1　試　料

試料は，丸山A遺跡の土坑から出土した土師器９点と黒色土器２点，焼成坑とされる遺構より出土した土師器片２点，さらに調査区内の自然堆積層から採取された粘土２点の計15点（分析番号①～⑮）である。各試料の詳細は，一覧として表１に示す。

分析に供された試料の内訳は，土師器では長胴甕が４点，小型甕が４点，さらに鍋と土錘および無台杯が1点ずつある。なお無台杯については須恵器の可能性もあるとされている。肉眼観察で認められる土師器試料の外観は，いずれもほぼ同様の状況を呈する。表面の色調は，内・外面ともに概ねにぶい橙色を呈し，径0.5～数mm程度の灰白色の岩片と径１～２mmほどの黒雲母片（風化して金色を呈する）が微～少量程度，表面全体にほぼ均一に散在する。径の大きい灰白色の岩片は，外形は亜角礫～亜円礫程度であり，その外観と黒雲母と共伴することから花崗岩類に由来する岩石片と思われる。このことは，後述するように薄片観察により確認された。

表１　分析試料一覧

分析番号	遺物No.	遺構名	層位	種 別	器 種	備 考
①	282	9号土坑	2	土師器	小型甕	
②	59	10号土坑	3	土製品	土錘	
③	357	17号土坑	4～6	土師器	長胴甕	
④	368	17号土坑	5a	土師器	小型甕	
⑤	335	19号土坑	2	土師器	小型甕	
⑥	395	21号土坑	1	土師器	鍋	
⑦	477	31号土坑	3	土師器	長胴甕	
⑧	583	36号土坑	2	土師器	無台杯	須恵器坏の可能性あり
⑨	611	36号土坑	4	土師器	小型甕	
⑩	571	36号土坑	11	黒色土器	稜椀蓋	
⑪	577	36号土坑	3	黒色土器	有台杯	
⑫	28	3号土師器焼成坑	1	土師器	長胴甕	
⑬	79	8号土師器焼成坑	1	土師器	長胴甕	
⑭		深掘トレンチ	VIa	土壌	－	粘土サンプル
⑮		3号井戸脇壁	VIb	土壌	－	粘土サンプル

黒色土器には蓋と有台杯がある。表面の色調は，土師器とは異なり黒色を呈するが，表面に認められる砂粒は土師器と同様の灰白色岩片と黒雲母片である。ただし，灰白色岩片も黒雲母片も土師器のそれらに比べると径が小さく（岩片は最大で1.5mm程度，黒雲母片は0.5mm以下），表面に認められる量も極めて微量である。

対照試料とされた粘土は，分析番号⑭が砂を微量含む灰色のシルト質粘土であり，肉眼観察では土器と同様の黒雲母片と灰白色岩片が含まれる。分析番号⑮は灰オリーブ色を呈するシルト質粘土であり，外観の肉眼観察からは砂粒を認めることはできない。

2　分析方法

胎土分析には，現在様々な分析方法が用いられているが，大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は土器片の切断による薄片作製などが主に用いられており，後者では土器片の粉砕による蛍光X線分析が最もよく用いられている。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み，低温焼成と考えられる土師器の分析では，前者の方が，胎土の特徴が捉えやすいこと，地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに薄片観察は，胎土中における砂粒の量はもちろんのこと，その粒径組成や砂を構成する鉱物，岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり，得られる情報が多い。したがって，ここでは薄片観察法を用いることにする。以下に手順を述べる。

薄片は，試料の一部をダイアモンドカッターで切断し，正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し，胎土中に含まれる鉱物片，岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は，松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は，メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ，細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また，同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から，各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ，砂粒の粒径組成ヒストグラム，孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3　結　果

結果を表2，図1・2に示す。土器（土師器，黒色土器など）試料では，計数された砂粒の粒数自体が少ない試料が多いために，試料によって出現したりしなかったりする鉱物や岩石の種類が比較的多いように見えるが，全体的な傾向をみると，胎土中に認められる鉱物片および岩石片の組成はほぼ同様である。鉱物片では石英が多く，少量の斜長石とそれと同程度あるいは若干少ないカリ長石を伴い，微量の黒雲母を含み，試料によっては微量の角閃石や白雲母あるいは不透明鉱物などを含む。岩石片では，花崗岩類が，黒色土器である分析番号⑩以外の土器試料に微量含まれる。この花崗岩類の岩石片は，粒径が粗粒砂や極粗粒砂を中心とし，試料によっては細礫径のものも認められることから，肉眼観察で土器表面に認められた灰白色岩片に相当する。他に，試料によっては極めて微量～微量のチャート，頁岩，砂岩などの堆積岩類や凝灰岩および流紋岩・デイサイトなどの火砕岩，さらには変質岩や珪化岩などが含まれる。鉱物片・岩石片以外の砕屑物としては，黒色土器である分析番号⑩と⑪に火山ガラスと炭質物が認められたほかは，植物珪酸体が，分析番号②・③・⑦・⑩・⑪の各試料に極めて微量含まれる。植物珪酸体のほとんどは形状が不良なために種類は不明であるが，中にはタケ亜科の短細胞なども認められている。なお，植物珪酸体以外の微化石類（珪藻化石など）は，いずれの試料にも認められなかった。

粘土試料については，上述した土器試料とやや異なる鉱物片・岩石片組成が認められ，分析番号⑭と分析番号⑮との間でも若干の違いが認められる。分析番号⑭の鉱物片組成は，石英が多く，次いで斜長石が多く，少量のカリ

表２．薄片観察結果(1)

分析番号	砂粒区分		砂粒の種類構成																							合計
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	植物珪酸体	
①	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		極粗粒砂	1	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	5
		粗粒砂	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	3
		中粒砂	1	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	5
		細粒砂	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
		極細粒砂	4	2	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8
		粗粒シルト	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		中粒シルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
	基質																									266
	孔隙																									4
	備考		基質は雲母鉱物質で、淡褐色を示す。																							
②	砂	細礫	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2
		極粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	2
		粗粒砂	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	6
		中粒砂	4	2	3	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	1	－	－	－	14
		細粒砂	2	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
		極細粒砂	1	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5
		粗粒シルト	3	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	8
		中粒シルト	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
	基質																									278
	孔隙																									37
	備考		基質はシルト質で、褐色を呈し、セリサイトが散在する。																							
③	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
		極粗粒砂	1	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	4	3	1	1	－	－	－	－	14
		粗粒砂	13	－	4	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	1	4	－	1	2	－	－	－	27
		中粒砂	12	6	4	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	2	－	－	－	27
		細粒砂	13	4	6	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	25
		極細粒砂	23	－	6	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	30
		粗粒シルト	14	1	13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	29
		中粒シルト	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3
	基質																									1185
	孔隙																									19
	備考		基質は雲母鉱物質で、淡褐色を示す。変質岩は、セリサイトを伴う熱水変質岩、風化岩など。電気石あり。																							
④	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		極粗粒砂	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		粗粒砂	3	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	3	2	－	1	－	－	－	－	11
		中粒砂	4	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	－	7
		細粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		極細粒砂	5	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7
		粗粒シルト	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
		中粒シルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
	基質																									363
	孔隙																									9
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。変質岩は凝灰岩・火山岩の風化岩。																							
⑤	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2
		極粗粒砂	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	4
		粗粒砂	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	2	－	－	－	7
		中粒砂	4	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6
		細粒砂	6	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8
		極細粒砂	7	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9
		粗粒シルト	5	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7
		中粒シルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
	基質																									513
	孔隙																									6
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。変質岩は白雲母を伴う熱水変質岩。																							

表２．薄片観察結果(2)

分析番号	砂粒区分		砂粒の種類構成																							合計
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	植物珪酸体	
⑥	砂	細礫	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
		極粗粒砂	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	3
		粗粒砂	4	−	6	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	9	−	4	−	−	−	−	26
		中粒砂	5	3	2	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	−	15
		細粒砂	6	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	10
		極細粒砂	11	2	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	15
		粗粒シルト	3	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
		中粒シルト	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
	基質																									496
	孔隙																									12
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。変質岩は白雲母を伴う熱水変質岩、風化岩など。																							
⑦	砂	細礫	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
		極粗粒砂	2	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	5
		粗粒砂	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	3	1	1	−	−	−	−	8
		中粒砂	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	4
		細粒砂	3	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5
		極細粒砂	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
		粗粒シルト	6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	7
		中粒シルト	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
	基質																									298
	孔隙																									10
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。																							
⑧	砂	細礫	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1
		極粗粒砂	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
		粗粒砂	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	5
		中粒砂	2	2	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	7
		細粒砂	7	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8
		極細粒砂	4	−	2	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8
		粗粒シルト	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
		中粒シルト	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
	基質																									338
	孔隙																									2
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示す。																							
⑨	砂	細礫	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
		極粗粒砂	2	1	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	−	−	−	11
		粗粒砂	7	2	1	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	1	2	6	−	−	−	−	−	−	21
		中粒砂	4	3	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	10
		細粒砂	7	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9
		極細粒砂	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
		粗粒シルト	4	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6
		中粒シルト	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
	基質																									344
	孔隙																									8
	備考		基質は雲母質であり、淡褐色を示す。角閃石は弱酸化している。																							
⑩	砂	細礫	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
		極粗粒砂	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0
		粗粒砂	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	3
		中粒砂	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
		細粒砂	3	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	6
		極細粒砂	6	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	9
		粗粒シルト	4	1	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	10
		中粒シルト	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
	基質																									522
	孔隙																									6
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示し、微細な炭質物が散在する。火山ガラスはバブルウォール型。																							

表２．薄片観察結果(3)

分析番号	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片									岩石片												その他			
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	植物珪酸体	
⑪	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		極粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2
		中粒砂	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
		細粒砂	1	1	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
		極細粒砂	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2	－	4
		粗粒シルト	5	1	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	9
		中粒シルト	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3
	基質																									287
	孔隙																									1
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示し、微細な炭質物が散在する。電気石あり。																							
⑫	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	2
		極粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
		粗粒砂	4	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	－	1	1	－	－	－	13
		中粒砂	6	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	10
		細粒砂	5	1	3	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	11
		極細粒砂	6	－	2	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9
		粗粒シルト	5	1	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13
		中粒シルト	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
	基質																									391
	孔隙																									1
	備考		基質はややシルト質で、淡褐色を示し、セリサイトが散在する。変質岩は、熱水性の白雲母-石英岩や、風化岩。																							
⑬	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	2
		極粗粒砂	－	2	2	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	2	3	－	－	－	－	－	－	10
		粗粒砂	3	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	1	1	－	1	－	－	－	－	14
		中粒砂	2	－	1	－	－	－	1	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	7
		細粒砂	4	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	7
		極細粒砂	10	－	2	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13
		粗粒シルト	1	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5
		中粒シルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
	基質																									469
	孔隙																									14
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。変質岩は熱水性の白雲母-石英岩と、凝灰岩？の風化岩。																							
⑭	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
		極粗粒砂	4	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	1	1	－	－	－	9
		粗粒砂	10	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	6	－	2	－	－	－	－	－	－	－	20
		中粒砂	20	7	3	－	－	－	1	1	－	－	－	－	2	－	2	1	1	3	2	－	－	－	43
		細粒砂	24	4	10	1	1	－	3	3	1	－	1	－	－	1	－	2	－	－	1	－	－	－	－	52
		極細粒砂	31	1	17	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	51
		粗粒シルト	12	2	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	23
		中粒シルト	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
	基質																									1643
	孔隙																									61
	備考		基質は雲母質で、水酸化鉄が不均質に分布している。変質岩は、熱水性の白雲母-石英岩。																							
⑮	砂	細礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		極粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		粗粒砂	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0
		中粒砂	3	－	3	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	9
		細粒砂	6	1	5	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	17
		極細粒砂	11	－	10	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2	－	－	25
		粗粒シルト	12	－	9	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	23
		中粒シルト	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
	基質																									1840
	孔隙																									111
	備考		基質は雲母粘土鉱物ほかの粘土鉱物で埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。																							

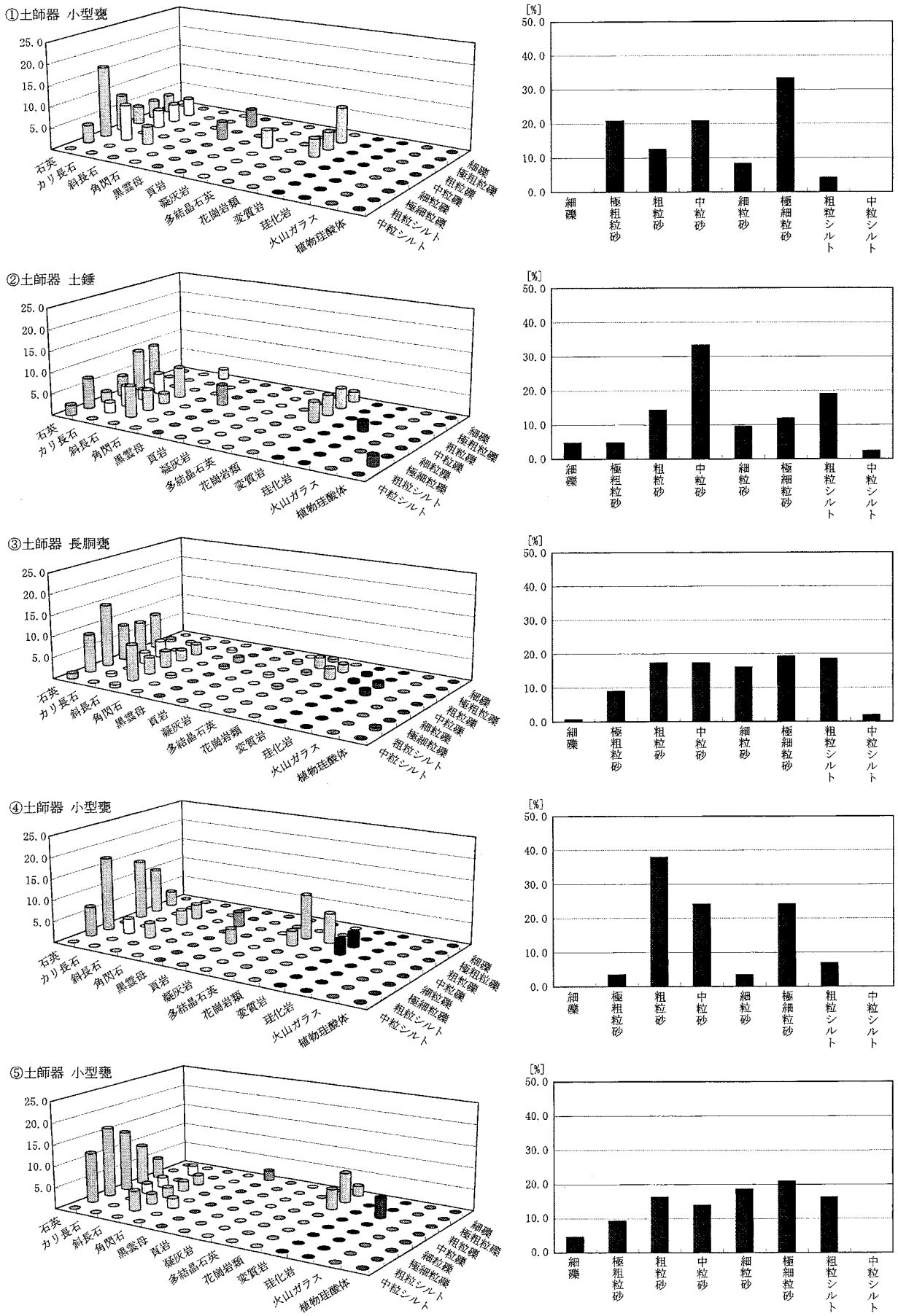


図1. 各粒度階における鉱物･岩石出現頻度(%)および粒径組成(1)

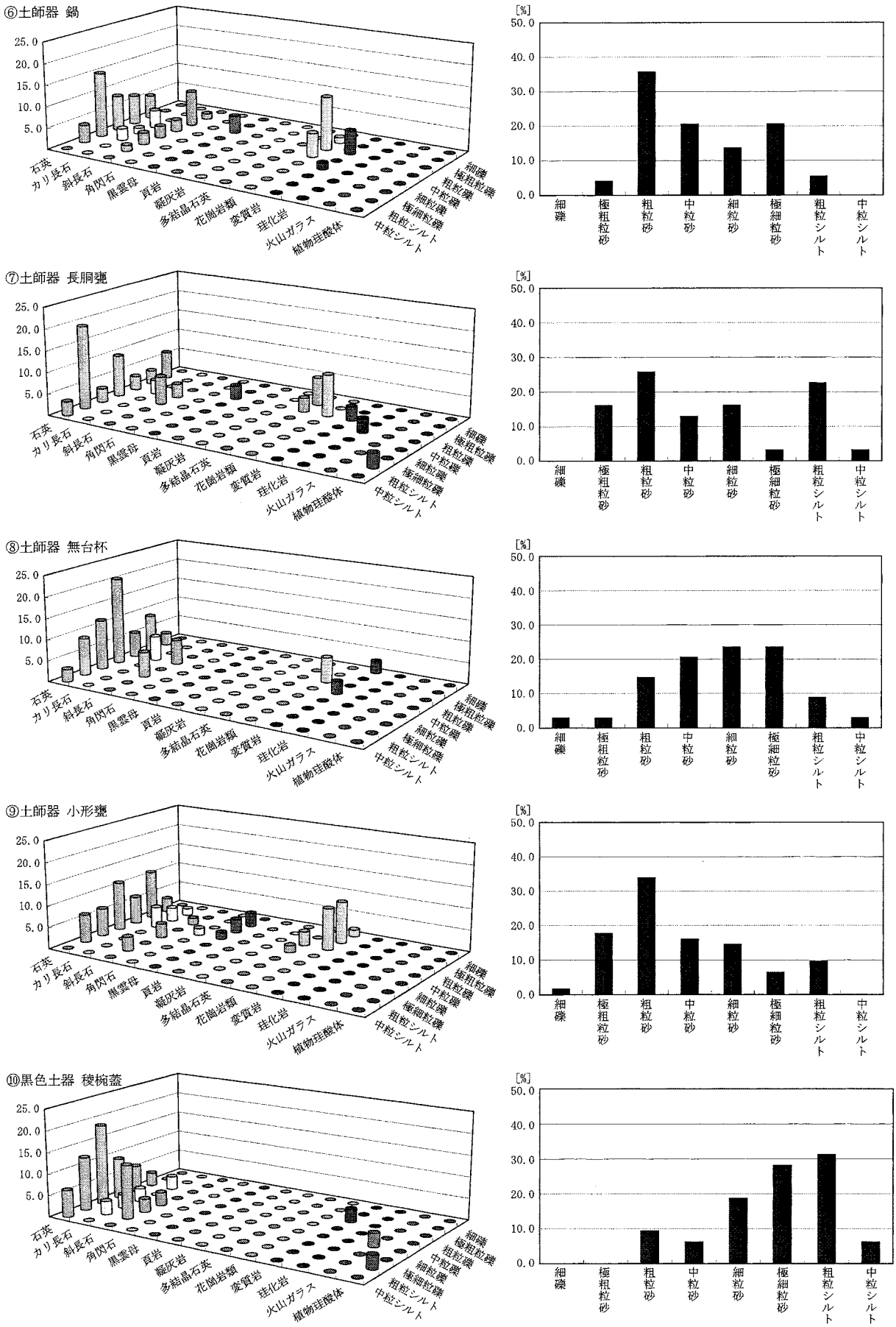


図1. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および粒径組成(2)

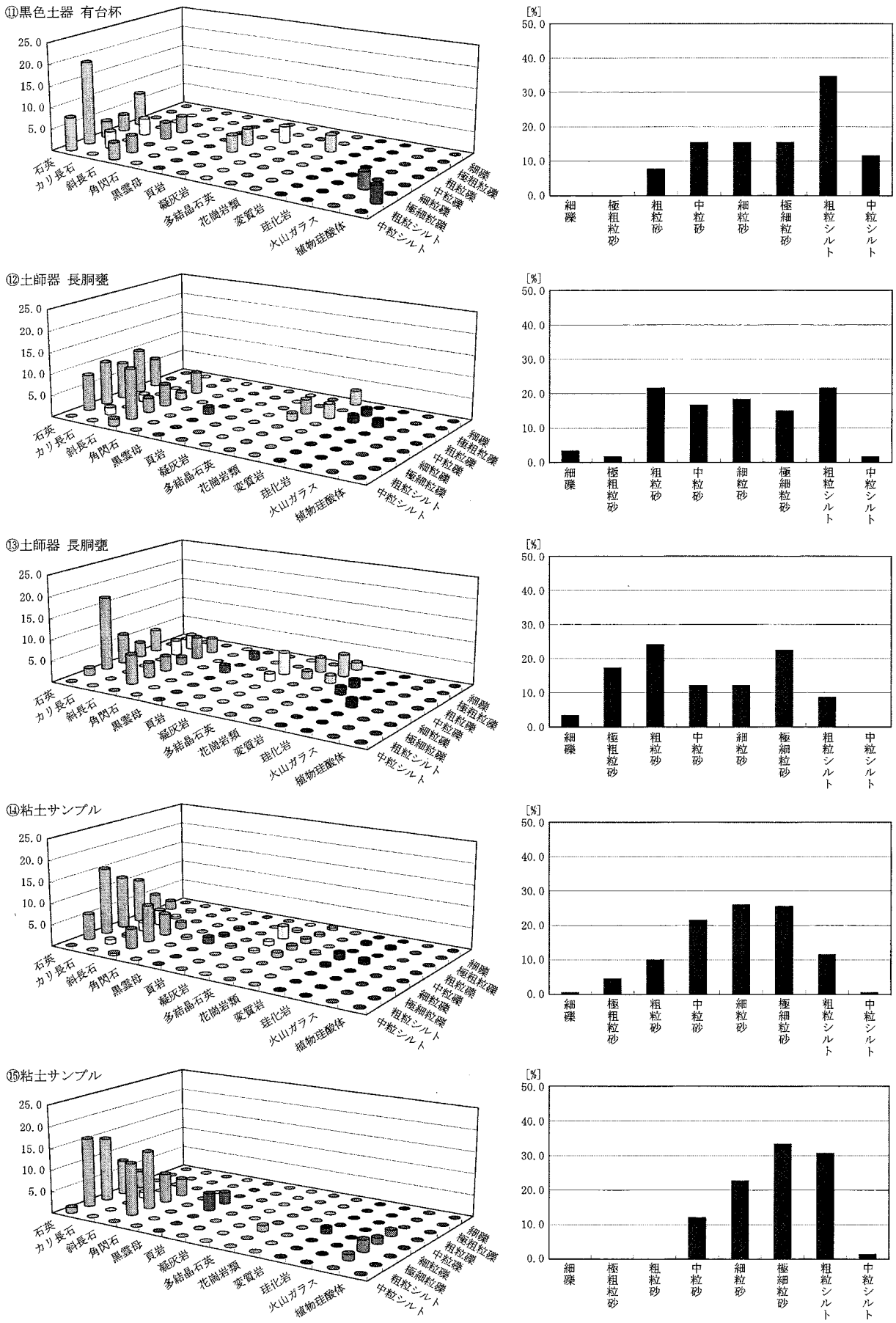


図1. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および粒径組成(3)

長石を伴い，微量の白雲母と黒雲母を含み，極めて微量の斜方輝石，角閃石，および不透明鉱物を含む。分析番号⑭の岩石片組成は，凝灰岩と多結晶石英および変質岩が比較的多く，他に頁岩や花崗岩類および珪化岩などを含む。分析番号⑮の鉱物片組成は，石英と斜長石が同程度に多く，微量の黒雲母と極めて微量のカリ長石，白雲母などを含む。分析番号⑮の岩石片組成は，極めて微量の多結晶石英と変質岩を含むのみであるが，他に火山ガラスを少量含むことを特徴とする。

土器試料の砂粒の粒径組成も上述したように砂粒全体の粒数が少ない試料が多いために，厳密な組成で比較をすることはできないが，おおよその傾向をみると，5種類の傾向を見出すことができる。最も多い傾向としては，粒径組成のピークが，極粗粒砂または粗粒砂の粗粒側の粒径と極細砂または粗粒シルトの細粒側の粒径とに２つ示されるパターン（分析番号①・③～⑦・⑫・⑬）である。この組成は，細粒側にピークのある石英の鉱物片と粗粒側に偏る花崗岩類の岩石片を含む鉱物・岩石組成が反映されている。ここではこの組成をA類とする。分析番号②は，粗粒側のピークの粒径が今回の試料の中では唯一，中粒砂となっているので，上述の組成とは異なるパターン（B類）とする。分析番号⑧については，細粒砂と極細粒砂にピークがあり，分析番号⑨については，粗粒砂のピークは明瞭であるが，細粒側のピークが不明瞭であることで，それぞれ異なるパターンを示している。それぞれをC類およびD類とする。分析番号⑩と⑪は，ともに粗粒シルトに明瞭なピークを示すパターンである。これをE類とする。

粘土試料の砂粒の粒径組成では，ともに細粒側に1つのピークを示すパターンであり，上述した土器試料の粒径組成の中ではE類に相当する。ただし詳細に見れば，分析番号⑭のピークの粒径は細粒砂と極細粒砂にあり，分析番号⑮のピークの粒径は極細粒砂と粗粒シルトにある。

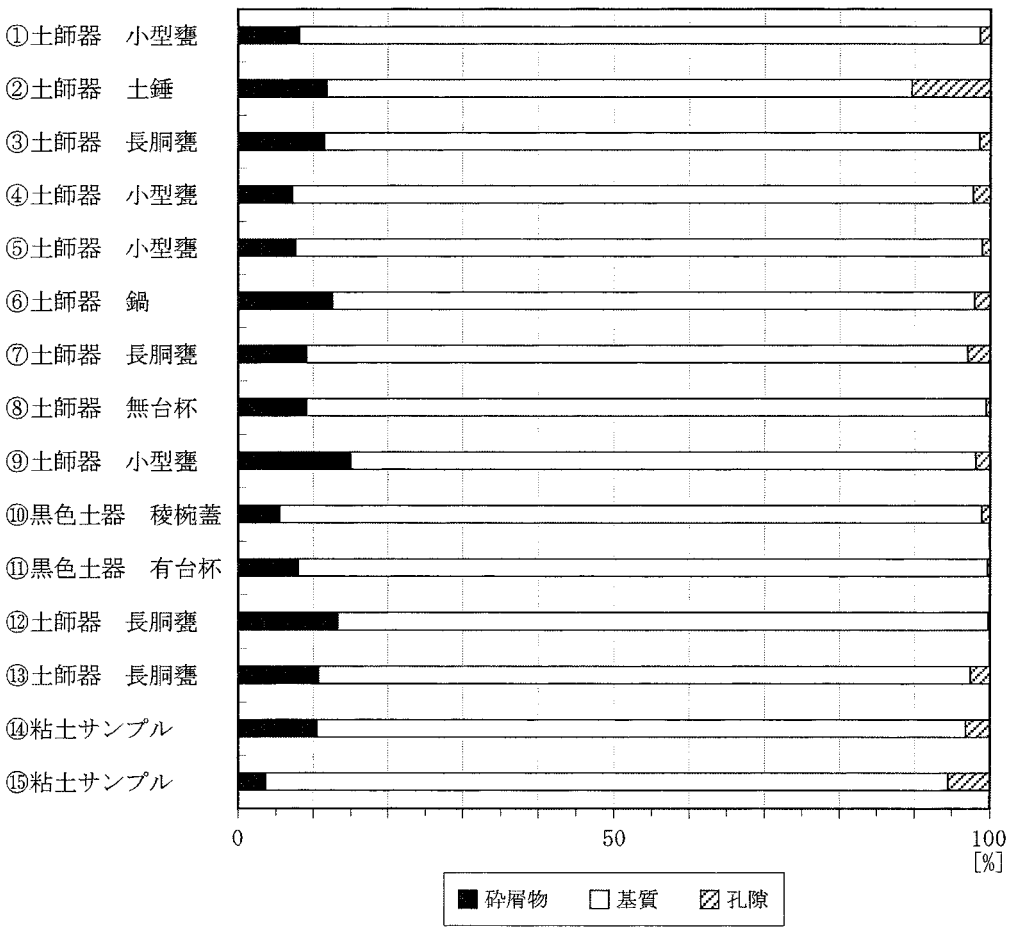


図2. 砕屑物・基質・孔隙の割合

4 考　察

土器胎土の鉱物片・岩石片組成は，胎土を構成している粘土や砂の採取地の地質学的背景を示唆していると考えることができる。今回の分析では，調査区内の自然堆積層から採取された粘土が対照試料として供されたが，そこに認められる鉱物片・岩石片組成は，まさに調査区の位置する場所の地質学的背景を反映していることになる。

丸山A遺跡の位置からみた地質学的背景は，東側の飯豊山地を構成する地質と北西側の櫛形山脈を構成する地質の両者となる。高橋ほか(2010) の記載を参照すれば，飯豊山地西部には中生代ジュラ紀の堆積岩類（チャート・頁岩・砂岩）からなる足尾帯と中生代白亜紀～新生代古第三紀の花崗岩類が広く分布し，飯豊山地西部縁辺部には新第三紀中新世の泥岩やデイサイト-流紋岩火山砕屑岩も帯状に分布している。一方，櫛形山脈の南部にも飯豊山地から続く足尾帯と中生代白亜紀～新生代古第三紀の花崗岩類が分布している。

粘土試料の分析番号⑭の岩石片組成をみると，凝灰岩と多結晶石英および熱水性の変質岩が比較的多い。なお多結晶石英とした岩石片は，本試料の場合は，熱水性の変質岩に伴う鉱化脈に由来するものが多く含まれると考えられる。したがって，分析番号⑭の岩石片組成は，丸山と呼ばれる高位段丘のすぐ背後の飯豊山地縁辺部に分布する新第三紀中新世の火山砕屑岩と火山砕屑岩中に分布する熱水変質した変質岩という背景を示している。そして微量含まれる頁岩と花崗岩類は，それぞれ飯豊山地に分布する足尾帯と花崗岩類に由来するものであろう。また，鉱物片の組成のうち，石英は，上述した様々な岩石に由来するものであり，斜長石は主に火砕岩や花崗岩類に，カリ長石や角閃石，黒雲母は主に花崗岩類に由来し，白雲母は変質岩に，斜方輝石などは火砕岩にそれぞれ由来すると考えられる。分析番号⑮の粘土試料については，砂粒自体が非常に少なく，検出された岩石片の種類も少ないため，そこから推定される地質学的背景は不明瞭であるが，傾向としては分析番号⑭の組成の傾向が出ていると言える。ただし，分析番号⑭に比べて，斜長石の量比が若干高いことと分析番号⑭には認められないバブル型火山ガラスが含まれることは，背後の地質というよりも，分析番号⑮が採取された粘土層が堆積した第四紀更新世以降のテフラ層の堆積に由来する可能性がある。

一方，土師器試料の岩石片組成では，各試料で検出された種類は上述した分析番号⑭とほぼ同様であったが，各種類の量比の傾向までみると，分析番号⑭に比べて花崗岩類の割合が有意に高い。このことから，分析番号⑭の粘土は，丸山A遺跡から出土した土師器の材料となった可能性はあるが，分析番号⑭の粘土をそのまま素地土として利用した可能性は低いと考える。ここで，土師器試料の多くが，砂の粒径組成において粗粒側と細粒側とで2つのピークを示すことを考慮すれば，分析番号⑭の粘土と花崗岩類の岩石片を多く含む砂（混和材）との混合により製作されたという想定が可能である。花崗岩類の岩石片を多く含む砂の由来については，例えば高橋ほか（2010）の記載から丸山A遺跡周辺で見るならば，遺跡の北方約1.5kmの坂井川右岸の櫛形山脈東側斜面に花崗岩類の小岩体の分布が認められる。したがって，この岩体より下流の坂井川の河川砂中には比較的多量の花崗岩類の岩石片が含まれていることが推定される。

次に，土師器における器種間の胎土の比較では，鉱物片・岩石片組成に明瞭な差異を見出すことはできなかった。ただし，砂の粒径組成による分類と器種の違いは，ほぼ整合している状況にある。すなわち，長胴甕と鍋は全てA類であるが，土錘はB類，無台杯はC類，小型甕ではA類とD類に分かれている。同一の粘土をベースとして砂の混和によって素地土を調整したと仮定するならば，今回の結果は器種によって砂の量や粒径を意図的に変えたことを示唆している可能性がある。

黒色土器については，分析番号⑩では花崗岩類は認められず，分析番号⑪では，花崗岩類は含まれるものの，頁岩や凝灰岩に比べて量比的に多いとは言えない。また，共通する特徴としてバブル型の火山ガラスが含まれることが挙げられる。火山ガラスは今回の土師器試料の中には認められておらず，さらに砂の粒径組成も土師器試料とは

明瞭に異なるE類に分類された。これらの土師器試料との相違点により，黒色土器に使用された粘土あるいは砂は，土師器とは異なっていた可能性が高い。今回の結果からみれば，火山ガラスは，分析番号⑮の粘土試料で確認されており，分析番号⑮の粒径組成も，その極細粒砂と粗粒シルトの多い傾向は，分析番号⑩および⑪と共通する。ただし，分析番号⑪の岩石片組成では分析番号⑮よりも多種類の岩石片が認められることから，黒色土器においても砂の混和という調整があったと想定される。

今回の分析により，土器製作遺跡における土師器の胎土の特徴をほぼ捉えることができた。ただし，土師器の器種間における違いや黒色土器との違いなど，さらなる分析事例の確認が必要な課題も示された。今後は，土器製作遺跡における胎土データの充実を図るとともに，周辺地域各地の同時期の土師器の胎土を捉えることができれば，当該期の土師器の生産（製作）と消費に係わる資料の作成が可能になると考えられる。

引用文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

高橋　浩・柳沢幸夫・山元孝広・卜部厚志・内野隆之・工藤　崇・高木哲一・駒澤正夫,2010,20万分の1地質図幅　新潟（第2版）.産業技術総合研究所地質調査総合センター.

Ⅴ　ま　と　め

1　丸山Ａ遺跡出土土器の特徴と時期的な位置付け

丸山Ａ遺跡から出土した土器は，古代の土器生産遺跡資料として質・量ともに優れた内容を持つもので，今後，新潟県内の古代土器様式を研究する上で基準となる資料である。
ここでは，主な遺構出土資料を比較検討して器形の特徴や組成を明らかにし，時期的な位置付けを提示したい。

（1）遺構出土資料の検討

遺構出土資料の大半は，近在するホーロク沢窯跡群の製品も含め，選別した不用品を一括廃棄したものと捉えられ，遺存度が高く器種組成が把握できる資料である。ここでは，こうした一括資料を検討材料とした。器種組成比は，図化資料のうち細別器種分類が可能なものを対象に算出した。

９号土坑出土資料(第79・82図)　土器の出土量が多く，当該期の器種組成がほぼ把握できる。また，明瞭に使用痕が認められるもの(第38図184・186・196，第39図245)や焼台転用品(第38図179)の中には，偏平器形の有台杯(179・196)など，古手の要素を持つ土器が含まれている。

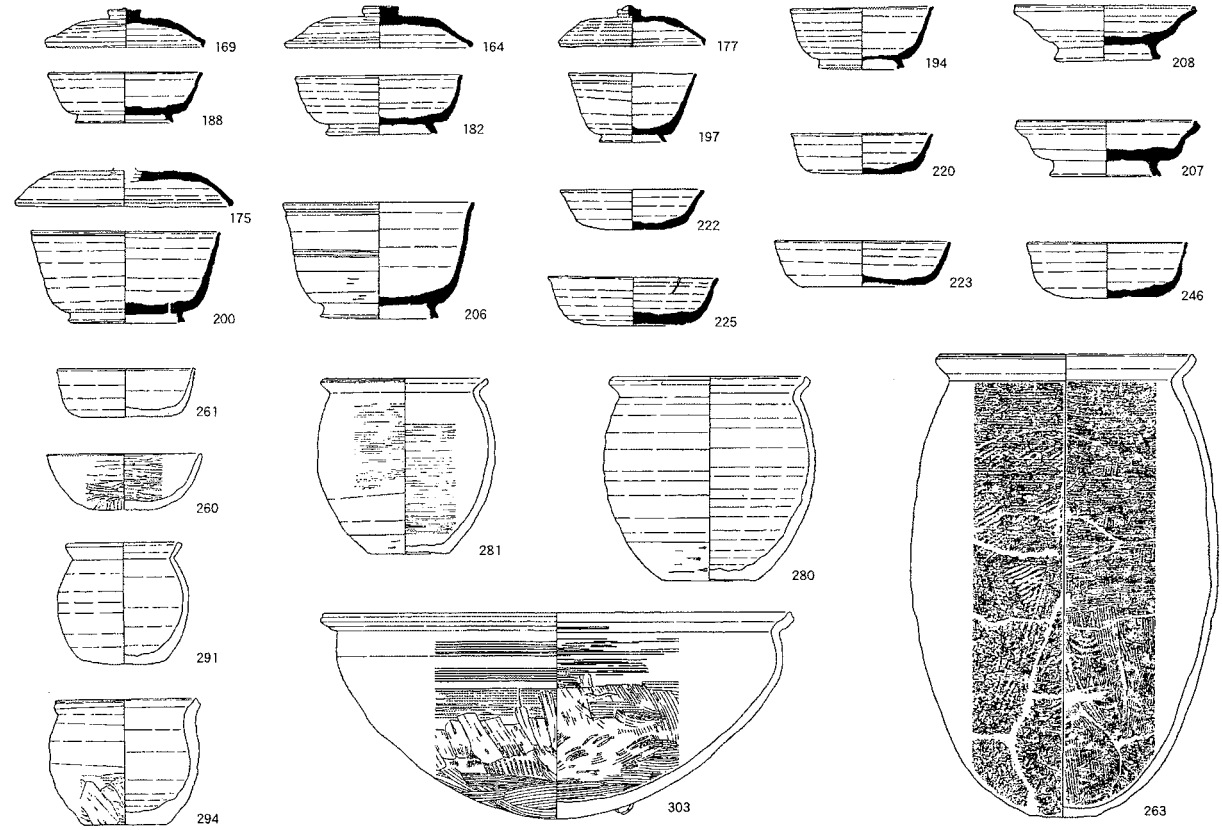
器種は，須恵器有台杯６法量(ＡⅠ・Ⅱ，ＢⅠ，Ｃ，ＤⅠ・Ⅱ)10器種(ＡⅠ・Ⅱ類蓋・身，ＢⅠ１・2類蓋・身，Ｃ1・2類蓋・身，ＤⅠ１・Ⅰ2・Ⅱ2類蓋・身，折縁杯Ａ類)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)４器種(ＡⅠ・Ⅱ類，ＢⅠ・Ⅱ類)，無台椀A2・B類，長胴短頸壺・球胴短頸壺・蓋，横瓶，鉢，甕，小型広口瓶・長頸瓶，焼台。土師器は無台椀A1・2類，長胴甕，小型甕Ⅰ～Ⅲ類，鍋(大・小)がある。

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種31個体(45％)に対し無台器種38個体(55％)で，両者の比率が拮抗している。法量は，有台杯，無台杯ともにⅡ類が口径12cm前後，Ⅰ類が口径13cm前後で，有台杯ＡⅡ類10個体(67％)に対しＡⅠ類５個体(33％)，無台杯Ⅱ類19個体(54％)に対し無台杯Ⅰ類16個体(46％)となり，有台杯Ａ類は小形品主体であるが無台杯は小形品・大形品が拮抗している。器形は，有台杯Ａ類が器高指数33前後，底径指数63前後であり，高台が腰部近くに付されてやや深身となる(第82図)。無台杯は，器高指数30以下で底径指数がＡ類に60前後のものがあるが，65前後が多く扁平・箱形器形が主体である。

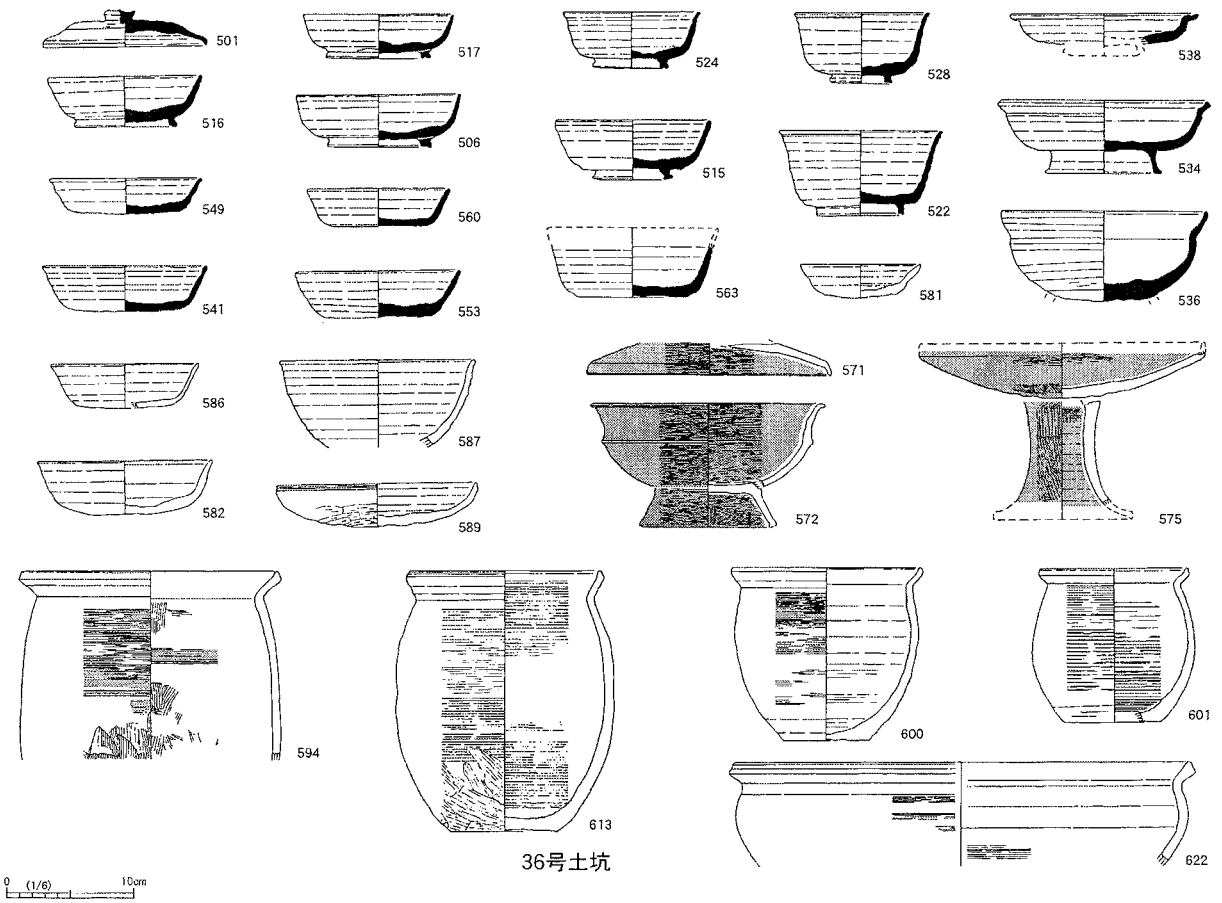
土師器は，長胴甕が１器種に対し，小型甕が３器種，鍋が２器種に法量分化しており，煮る器種が多器種であるという特徴が認められる。器形は，いずれも口縁部が短く端部が内折し，ハケメ・カキメやケズリ等二次調整されるものが多い(第40～43図)

36号土坑出土資料(第79・82図)　黒色土器をはじめ，多くの須恵器杯類に使用痕跡と思われる磨耗があり，廃棄までの間に，ある程度の使用期間が想定される。

器種は，須恵器が，有台杯５法量(ＡⅠ・Ⅱ，ＢⅡ，Ｃ，ＤⅡ)10器種(有台杯ＡⅠ・Ⅱ類蓋・身，ＢⅡ2類，Ｃ1・2類，ＤⅡ1類，折縁杯Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ類)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)４器種(ＡⅠ・Ⅱ類，ＢⅠ・Ⅱ類)，無台椀A2類，球胴短頸壺・蓋，長胴壺，鉢，焼台。土師器は，無台杯３法量(ＡⅠ・Ⅱ,Ｃ)３器種(ＡⅠ・Ⅱ類,Ｃ類)，無台椀ＡⅡ1類，皿，折縁杯，長胴甕，小型甕Ⅰ～Ⅳ類，鍋，製塩土器・支脚，円筒形土製品がある。黒色土器は稜椀・蓋，高盤，有台杯，球胴短頸壺がある。須恵器・土師器・黒色土器とも金属器模倣器種が多く，器種組成上の大きな特徴となっている。



9号土坑



36号土坑

第79図　丸山A遺跡出土　一括資料（1）

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種35個体(59％)に対し無台器種24個体(41％)で，やや有台器種の比率が若干高い。法量は，有台杯ＡⅡ類口径12cm前後，ＡⅠ類口径12.7cm前後，無台杯Ⅱ類口径12cm前後，Ⅰ類口径13cm前後で，有台杯ＡⅡ類９個体(60％)に対しＡⅠ類６個体(40％)，無台杯Ⅱ類14個体(67％)に対し無台杯Ⅰ類７個体(33％)と有台杯A類・無台杯ともに小形品が６割以上を占める。器形は，９号土坑に比べて有台杯が，器高指数の増大により深身器形がやや増加し(第82図)，無台杯は底径指数の縮小により口縁部が外傾する器形が定量みられる。

土師器・黒色土器は，金属器模倣器種が多様で出土量も多く，他の遺構出土資料と際立った違いを見せる。特に優品とできる黒色土器は注目される(第65図)。煮炊具は，長胴甕外面のケズリ調整の多用が目立つ点に特徴がある(第66図)。

３号井戸出土資料(第80・82図)　本遺構は，炭素年代分析では中世に埋没した可能性が指摘されている。ただし，遺物に該期のものは含まれず，645を除き使用に伴う磨耗痕を認められないので，一括性や型式的なまとまりも特に問題は見られない。遺跡成立時に関わる資料であるため，ここではあえて検討資料として用いた。

器種は，ほとんどが須恵器食膳具で構成される。須恵器が，有台杯３法量(ＡⅠ，ＢⅠ，C)４器種(ＡⅠ類の蓋・身，ＢⅠ類，C2類蓋・身，折縁杯A類)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)３器種(ＡⅠ類，ＢⅠ・Ⅱ類)，無台椀A1類，球胴短頸壺・蓋，横瓶，甕，焼台がある。土師器は小型甕Ⅲ類，黒色土器は稜椀がある。９・36号土坑に比して須恵器有台器種の組成が単純である。

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種８個体(50％)に対し無台器種８個体(50％)と拮抗している。法量は，有台杯ＡⅠ類が口径12.9cm前後，無台杯はⅠ・Ⅱ類とも９・36号土坑に類似する。須恵器有台杯A類が大形品のＡⅠ類のみで，ＡⅡ類が伴わない遺構は今回の調査では３号井戸のみである。無台杯も，Ⅱ類２個体(33％)に対しⅠ類4個体(67％)と大形品主体である。器形は，有台杯A類が器高指数30前後の扁平器形で，高台は腰部よりかなり内側に付される。無台杯は，器高指数24前後，底径指数70前後の扁平箱形で占められる(第82図)。３号井戸は，須恵器食膳具がほぼ大形品で占められ，器種組成が単純な点に特徴がある。

27(a～c)号土坑出土資料(第80図)　第27図84・85に磨耗痕が認められる。須恵器食膳具の器種組成や法量・器形の特徴は36号土坑に近似し，土師器金属器模倣器種がまとまって出土している点も共通する。

21号土坑出土資料(第80図)　須恵器食膳具の器種組成や法量・器形の特徴は36号土坑に類似し，土師器無台杯が伴うことも共通する。

土師器煮炊具は，口縁部の摘み上げが強調される点を除き小型甕Ⅰ・Ⅱ類や鍋(大小)の大きさ，器形，調整手法が９号・36号土坑に類似する。

13号土坑出土資料(第80図)　資料数は少ない。須恵器食膳具の特徴は，36号・21号土坑に類似する。

17号土坑出土資料(第80図)　９号土坑や36号土坑と同様に土器の出土量が多い。異なる点は，須恵器食膳具の組成が単純であり，金属器模倣器種が存在せず，須恵器に対する土師器煮炊具の割合が高い点である。

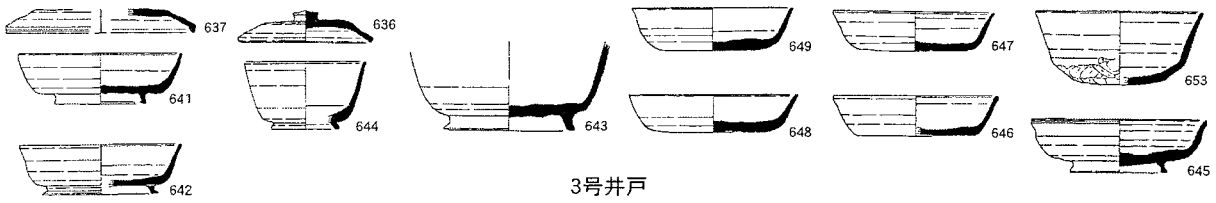
器種は，須恵器が，有台杯４法量(ＡⅠ，ＢⅠ，C，DⅡ)４器種(ＡⅠ類蓋・身，ＢⅠ類，C1類，DⅡ2類)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)３器種(ＡⅡ類，ＢⅠ・Ⅱ類)，鉢，横瓶。土師器は長胴甕,小型甕Ⅰ・Ⅱ類，鍋がある。

須恵器食膳具の法量・器形は，36号土坑に近似する。

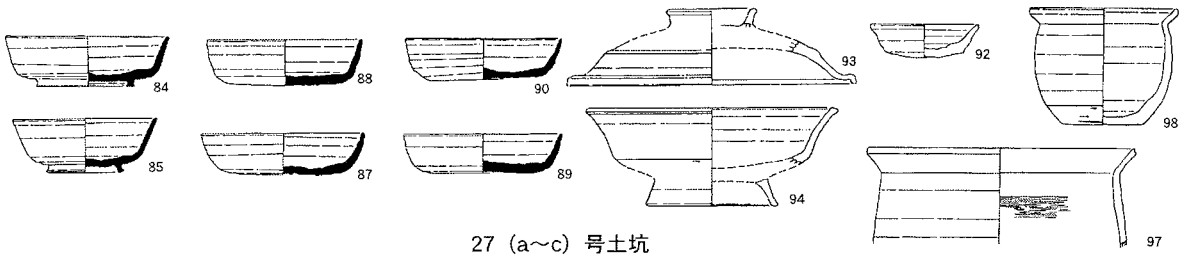
土師器長胴甕や小型甕の器形や口縁部の形状も36号土坑に近いが，ハケメやケズリなどの二次調整がなされないものが多い点が異なる(第48～50図)。

31号土坑出土資料(第80図)　土器の出土量は多い。17号土坑同様，土師器煮炊具の割合が高い。

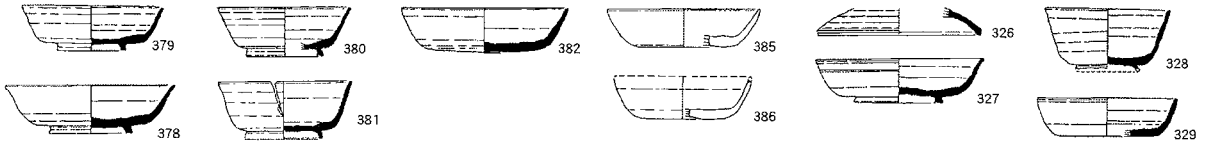
器種は，須恵器が，有台杯２法量(ＢⅠ，C)２器種(ＢⅠ類，C2類)，無台杯1法量1器種(ＢⅡ類)，無台椀，横瓶，



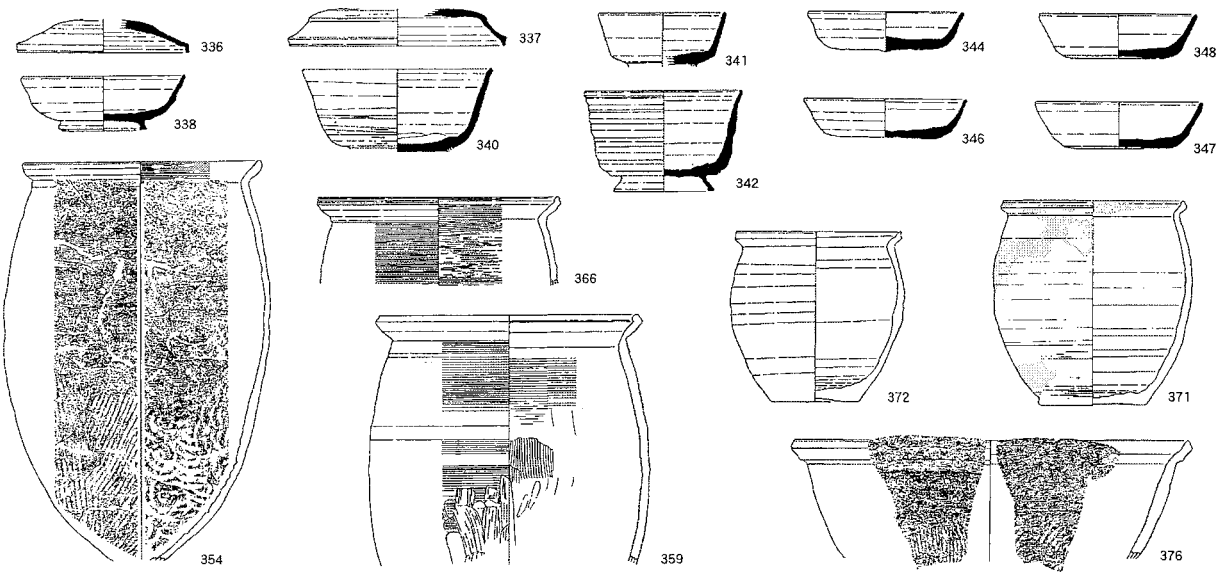
3号井戸



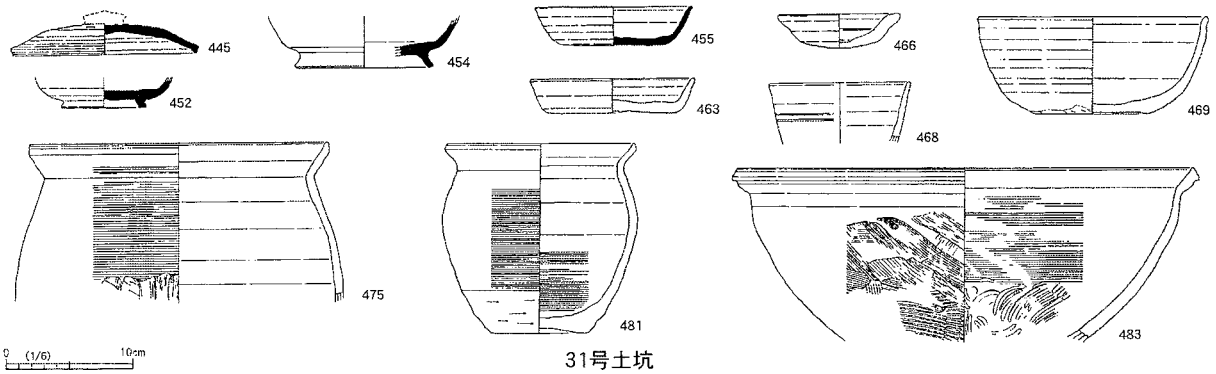
27（a～c）号土坑



21号土坑　　13号土坑



17号土坑



31号土坑

第80図　丸山A遺跡出土　一括資料（2）

甕。土師器は，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)３器種(BⅠ・Ⅱ類，C類)，有台杯，無台椀AⅠ1類，長胴甕，小型甕Ⅱ類，鍋，円筒形土製品がある。

須恵器無台杯がⅡ類のみの点が上記の遺構資料と異なる。また，有台杯C類が５個体まとまって出土している。

土師器は，食膳具が多い点が注目されるが，無台器種主体で黒色土器が欠落するなど，36号土坑の組成とは違いが見られる（第59図）。煮炊具は，長胴甕へのケズリ調整の多用が36号土坑と共通するが，甕類・鍋ともに一回り小形で，小型甕が1法量のみである（第60図）。

11号土坑出土資料(第81・82図)　須恵器食膳具は，有台杯A類，無台杯ともにⅡ類主体で構成される。有台杯A類は，36号土坑に比べて底径指数が小さい。須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台杯２個体(40％)に対し無台杯３個体(60％)と無台器種の比率がやや高い。

土師器は，甕類と鍋の大きさ，器形，調整が31号土坑に類似するが，より小形で甕類の口縁端部が内折しないもの（第44図319）もある。

３号掘立柱建物・１(a・b)号溝出土資料(第81図)　須恵器有台杯A類が欠落するものの，無台杯がⅡ類主体である点や，有台器種と無台器種との構成比は11号土坑と共通する。また，土師器長胴甕と鍋の大きさ・器形は，31号土坑に類似する。

30(a～d)号土坑出土資料(第81図)　土器の出土量は多く，須恵器食膳具の割合が高い。

器種は，須恵器が，有台杯２法量(AⅡ，C)３器種(AⅡ類蓋・身，C2類，折縁杯B類)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)３器種(AⅠ・Ⅱ類，BⅡ類)，球胴短頸壺，長頸瓶，小型長頸瓶。土師器は小型甕Ⅱ類，長胴甕，鍋がある。土師器食膳具は欠落し，小型甕が１法量のみである(第57図)

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種３個体(30％)に対し無台器種7個体(70％)で，無台器種が主体である。法量は，１点を除き有台杯A類・無台杯ともにⅡ類で，小形品で占められる。器形は，11号土坑に類似する。

土師器は，長胴甕と鍋の大きさ，器形，調整が31号土坑に類似する。ただし，小型甕は，器高に対する胴部径の比率が大きく，ややずんぐりとした器形(第57図427～429)となる。

10号土坑出土資料(第81図)　須恵器食膳具がまとまって出土している。第24図41には磨耗痕がある。

器種は　須恵器が，有台杯２法量(AⅡ，BⅠ)３器種(AⅡ類，BⅠ類，折縁杯A類)，無台杯１法量(Ⅱ)２器種(AⅡ類，BⅡ類)。土師器は長胴甕，小型甕Ⅲ類，鍋がある。

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種4個体(36％)に対し無台器種7個体(64％)で，無台器種が主体である。法量は，有台杯A類・無台杯ともにⅡ類のみで占められる。器形・法量は，30(a～d)号土坑に類似するが，器壁がやや薄手(第24図41・45～51)である。

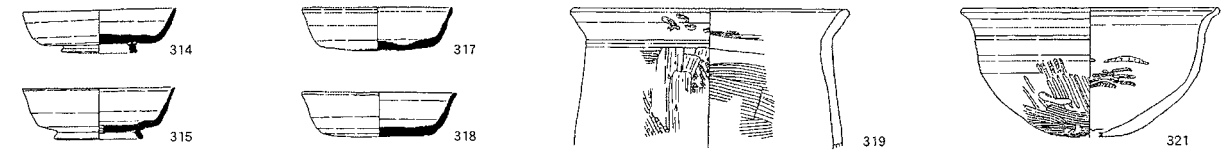
土師器は，長胴甕・小型甕の口縁部外傾度が弱く，口縁端部があまり内折しない(第24図)。

１(a～c号)土坑出土資料 (第81・82図)　土器の出土量は多く土師器煮炊具がまとまって出土している。

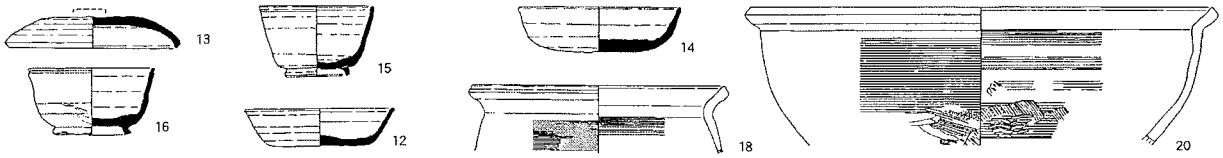
器種は，須恵器が，有台杯４法量(AⅡ，BⅠ，C，D)５器種(AⅡ類，BⅠ2類蓋・身，C1類，D類，折縁杯)，無台杯２法量(Ⅰ・Ⅱ)３器種(AⅡ類，BⅠ・Ⅱ類)，短頸壺蓋，長頸瓶，横瓶，甕。土師器は，鉢，長胴甕，小型甕Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類，鍋がある。

須恵器食膳具の有台器種と無台器種の構成比は，有台器種５個体(42％)に対し無台器種7個体(58％)で，10・11号土坑に類似する。法量は，１点を除き有台杯A類・無台杯ともにⅡ類で，大半が口径11cm台であり10号土坑より小形品で占められる。なお，第30図105に磨耗痕がある。

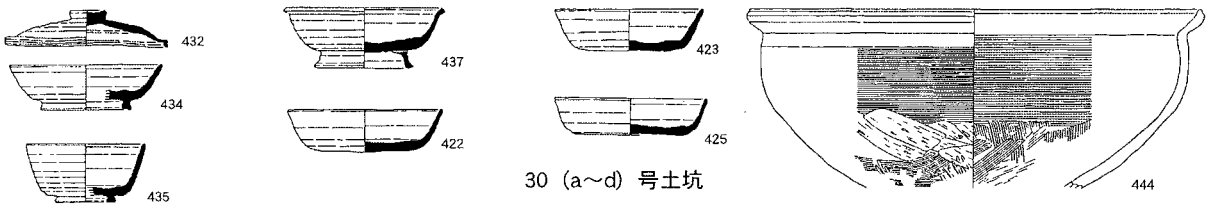
土師器は，煮炊具の大きさ・器形が10・11号土坑に類似するが，小型甕に器形・調整が異なるものが定量みら



11号土坑

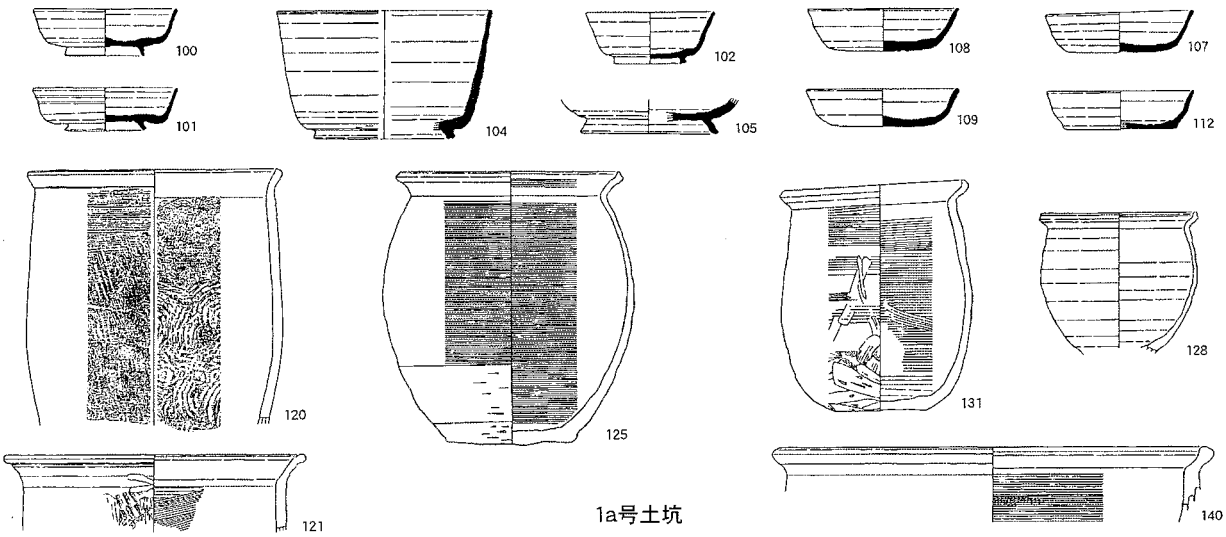


3号掘立柱建物・1（a・b）号溝

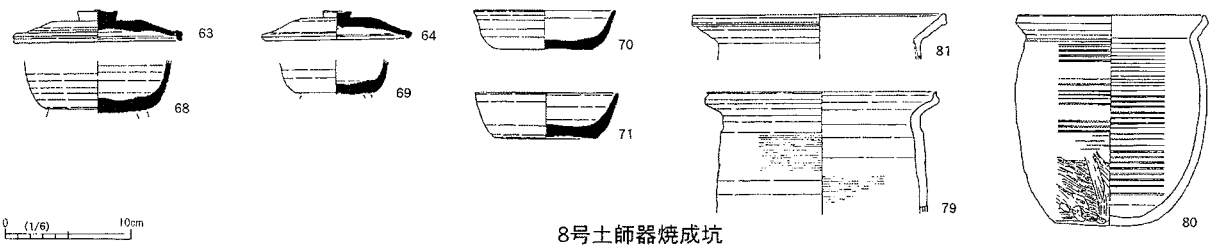


30（a～d）号土坑

10号土坑

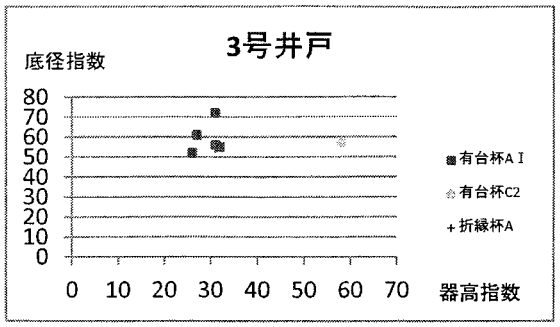


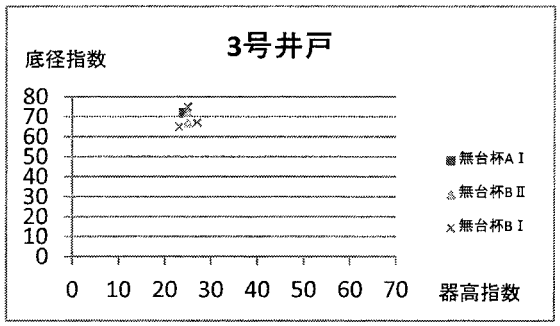
1a号土坑

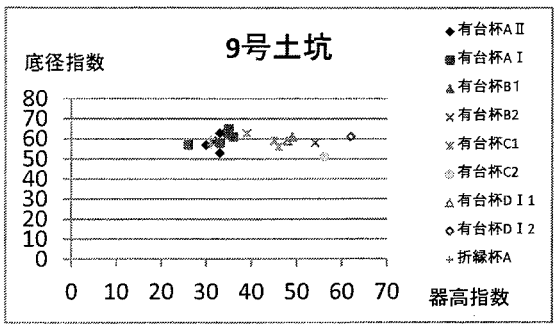


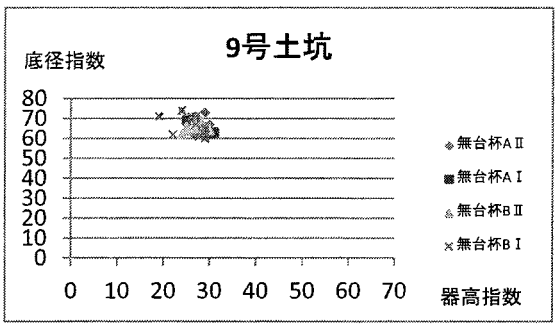
8号土師器焼成坑

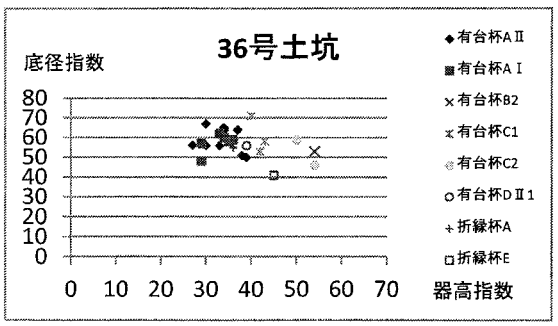
第81図　丸山A遺跡出土　一括資料（3）

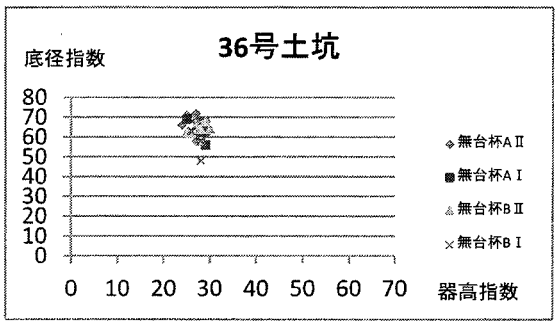


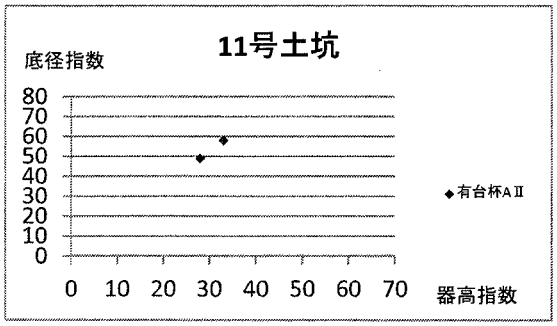


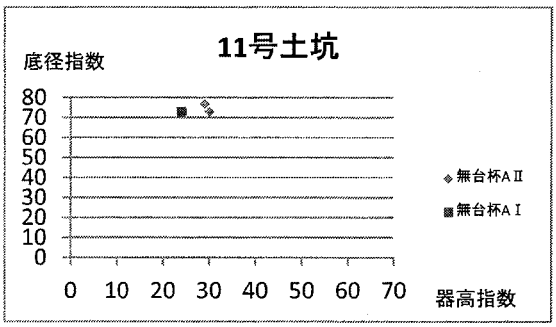


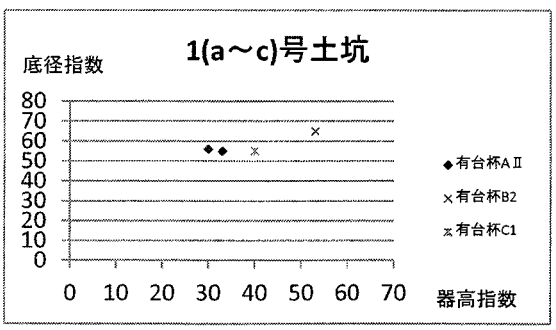


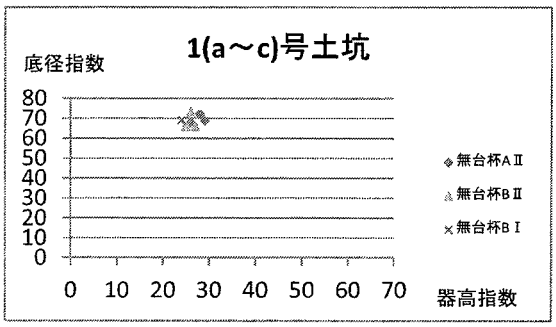












第82図　丸山A遺跡須恵器食膳具の器高指数・窯底径指数傾向

れる。これらは，厚手・丸底気味でケズリ調整を多用する(第31図130～134・136)といった共通点があり，作り手の個性を反映している可能性がある。また，９号・36号土坑などに比べ小形であり，法量での区分の境界が不明瞭なものもある。

８号土師器焼成坑出土資料(第81図)　ほかの遺構出土土器に比べ須恵器食膳具の器種組成，法量，土師器長胴甕の大きさが明瞭に異なる。

須恵器は，有台杯A類が欠落し，有台杯B・C類も小形である。無台杯は，口径11cm台前半のみで１(a～c)号土坑よりもさらに小形である。

土師器は，煮炊具のみである。長胴甕の口径は，20cm以下と小さい。小型甕は1法量のみである。また，黒色土器有台杯と無台杯(椀)の破片もあるが，底径値からすると須恵器食膳具同様に小形品と考えられる。

（２）遺構出土資料の組成と特徴

（１）での検討により，丸山Ａ遺跡遺構出土資料は，器種組成，法量，器形，調整手法等により以下のグルーピングが可能である。

Ａ群　須恵器食膳具に有台杯Ｉ類と無台杯Ｉ類が定量組成し，有台器種の比率が４割以上を占める一群。須恵器有台器種は，法量，器形に多くのバリエーションがある。土師器食膳具は，金属器模倣器種が多く器種も豊富である。土師器煮炊具は，長胴甕が比較的大形で，甕類の口縁部が短く外傾して口縁端部が内折するものが伴う。小型甕は，３法量ある。小型甕Ⅲ類を除き原則二次調整される。９号土坑，13号土坑，17号土坑，21号土坑，27(a～c)号土坑，36号土坑，３号井戸が該当する。また，Ａ群は，土師器・黒色土器食膳具が豊富な27(a～c)号土坑，36号土坑と土師器・黒色土器食膳具が少量伴う９号土坑，21号土坑，３号井戸，土師器・黒色土器食膳具を伴わない13号土坑，17号土坑というように遺構による食膳具組成の違いも認められる。

Ｂ群　須恵器食膳具がⅡ類主体で，有台器種の比率が４割以下の一群。土師器煮炊具は，Ａ群に比べて長胴甕・鍋が小形で，甕類の口縁部が直立気味に伸びて口縁端部の内折が弱い。小型甕は，２法量にとどまる場合が多い。また，二次調整が省略されるものが定量ある。３号掘立柱建物，８号土師器焼成坑，１(a～c)号土坑，10号土坑，11号土坑，30(a～ｄ)号土坑，31号土坑が該当する。

Ｂ群は，有台器種が有台杯１～２器種に折縁杯の単純な組成であり，有台杯Ａ類が欠落する遺構(３号掘立柱建物，８号土師器焼成坑)もある。また，金属器模倣器種や土師器食膳具もほとんど組成しない。

（３）丸山Ａ遺跡遺構出土資料の先後関係について

前節までの検討で，丸山遺跡遺構出土資料は，大きく２群に分けられることが確認できた。これらは，食膳具の器種組成と須恵器食膳具の法量などから，Ａ群がＢ群に先行することが確実である。次に，食膳具をもとにＡ・Ｂ両群の遺構出土資料の先後関係を検討したい。

ａ．Ａ群資料の先後関係

須恵器有台杯Ａ類がＡⅠ類のみで構成され，無台杯もⅠ類主体である３号井戸出土資料が最も古く位置付けられる。器形もそれぞれ扁平・箱形を基本とし古相を示す。折縁杯は，口縁端部の摘み上げが顕著でなく，初源的な器形と考えられる。土師器食膳具が伴わない点も古い要素とできよう。

３号井戸に後続する資料は，９号土坑・13号土坑・27(a～c)号土坑出土資料が該当する。須恵器食膳具における無台器種の比率が高まり，有台杯Ａ類，無台杯ともにⅡ類が主体となる。有台器種は，法量分化と器高の浅・深による作り分けに伴う器種分化が顕現し，多様な器種組成となる。器形は，扁平・箱形を基本とするが，有台杯Ａ

類は器高指数が大きくなり深身器形が増加する。折縁杯は，口縁端部を内折するものが主体となるが，器形のバリエーションは少ない。また，土師器食膳具が確実に組成し，27(a～c)号土坑には金属器模倣器種も伴う。

9号土坑・27(a～c)号土坑に後続する資料は，36号土坑・17号土坑・21号土坑出土資料が該当する。

須恵器食膳具における有台器種と無台器種の比率はほぼ五分五分であるが，ともにⅡ類主体で，9号土坑等より若干口径値が小さいものが多い。36号土坑は，9号土坑同様土器の出土量が非常に多いものの，9号土坑に比べて須恵器有台器種のバリエーションが少なく有台器種の淘汰が進んだ状況を示す。反面，折縁杯は，器種のバリエーションに富み，器形も変化に富む。土師器・黒色土器食膳具は，遺構出土資料中最も器種が豊富であり，この段階の大きな特徴となっている。須恵器折縁杯のバリエーションの多さもこのことと関連しようか。

b．B群資料の先後関係

B群は，有台杯A類が欠落する8号土師器焼成坑を除き，須恵器食膳具の器種組成に大きな違いは認められない。無台器種が6割を超える点も共通する。ただし，口径値や器壁の厚さ，土師器・黒色土器食膳具の組成に違いがあり，時期差を示すと捉えられる。

B群で古く位置付けられる遺構出土資料は，3号掘立柱建物・11号土坑・31号土坑出土資料が該当する。3号建物掘立柱出土資料は，須恵器有台杯A類が欠落するが，ほかの食膳具の口径値や器形，器壁の厚みなどからここに位置付けた。土師器杯が口径12.6cmでやや大振りであることも古相とした理由である。11号土坑出土資料は，須恵器食膳具の口径値が12cm前後でB群の中では法量的に大きく，器形も36号土坑出土資料に近似する点を古い要素と見た。31号土坑出土資料については，須恵器食膳具の大半が破片資料で特徴をつかみづらいが，有台杯C2類と無台杯の法量・器形及び土師器食膳具が無台器種主体であることを，36号土坑より後出する特徴と考えた。ただし，土師器無台杯はすべて口径13cmを超えており，3号掘立柱建物・11号土坑出土資料より若干先行しようか。

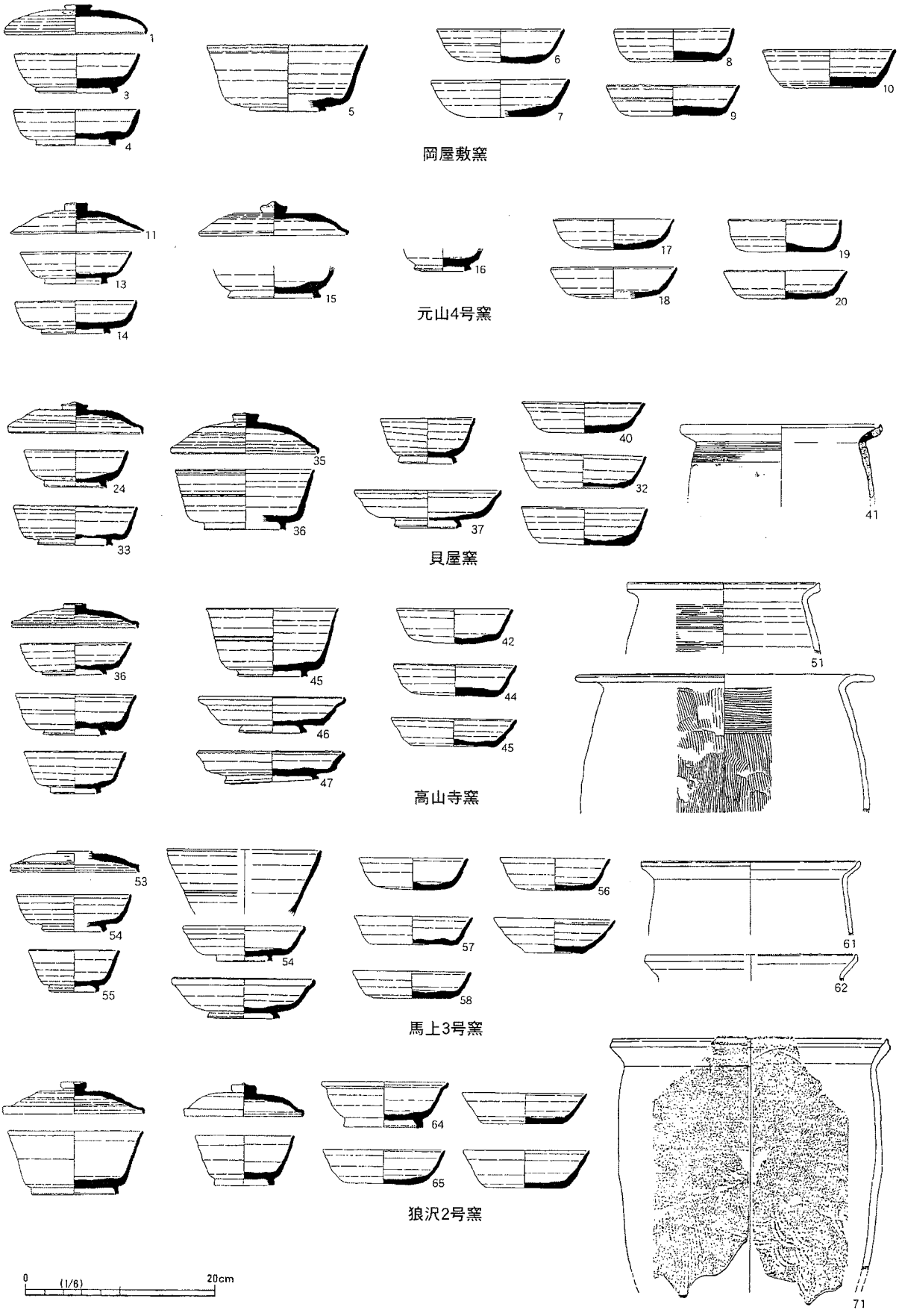
3号掘立柱建物・11号土坑・31号土坑に後続する資料は，1(a～c)号土坑，10号土坑，30(a～d)号土坑，35号土坑，1号井戸出土資料が該当する。1(a～c)号土坑，10号土坑，30(a～d)号土坑出土資料は，須恵器有台杯AⅡ類，無台杯ともに口径11.5cm前後の小形品で構成され，薄作りであるなど，あきらかに新しい特徴が認められる。折縁杯も口径13cm以下と小形で，口縁端部の摘み上げが強調される定形化した器形(第24図44)や椀形(第57図437)であり，新しく位置付けられる。土師器食膳具は組成しない。35号土坑は，上記の土坑資料と異なり，土師器無台杯が主体を占める。土師器無台杯の法量は，1(a～c)号土坑，10号土坑，30(a～d)号土坑の須恵器無台杯の法量に一致し，共伴する須恵器有台杯Ⅱ類の法量も口径11.2cmと小形であり，この時期に位置付けるのが妥当であろう。

1(a～c)号土坑，30(a～d)号土坑，35号土坑出土資料に後続する資料は，8号土師器焼成坑，23号土坑出土資料が該当する。8号土師器焼成坑出土資料は，有台杯A類が欠落し，有台杯B・C類，無台杯も小形品である。
また，いずれも器壁が厚く，粗雑な作りである。土師器・黒色土器食膳具は破片資料であり，詳細は不明であるが，底径値から小形品と推測される。23号土坑の須恵器無台椀は，小形・扁平であり新しい特徴を示す。

(4) 丸山A遺跡出土資料の編年的位置付け

上述の通り，丸山A遺跡遺構出土資料の先後関係については，おおよそ確定できた。次に時期区分を含め遺構出土資料の編年的な位置付けを示し，須恵器窯資料や既存の編年との対応関係を示したい。

1期　A群とした資料のうち，有台杯AⅠ類と無台杯Ⅰ類の比率が比較的高い資料をこの段階に当てた。須恵器有台杯A類がⅠ類で占められ，土師器・黒色土器食膳具がわずかな段階を1a期，須恵器食膳具Ⅰ類の比率が下が



第83図　8世紀後半以降の下越の窯跡出土須恵器

り小型化の傾向が見える一方，有台器種の法量・器種分化が多様化する段階を１b期とした。

１a期は，３号井戸出土資料を標識とする。有台杯A類が２法量あり，有台杯C類が存在することから，岡屋敷窯(中川ほか1962)より後出し，元山4号窯灰原(吉井ほか1999)に並行すると考えられる(第83図)。第84図の器高指数・底径指数分布も近似した値を示す。また，山三賀編年(坂井1989)では，Ⅲ1期のSI339に対比できよう。なお，阿賀北地方に特有の折縁杯は，口縁端部が強調されない初源的な形態(第85図645)を示し。この段階で出現すると考えられる。

１b期は，９号土坑出土資料を標識とする。須恵器は，無台器と有台杯Ⅱ類の増加により，１a期に比べて全体にやや小型化する。一方，須恵器有台器種は，器高の浅･深により有台杯B・C・D類がそれぞれB1・B2，C1，C2，ＤＩ１・ＤＩ２・ＤⅡに器種分化して多器種化する。折縁杯はA類のみであるが，口縁端部が内折して屈曲が強調される(第85図207・208)。器高指数・底径指数分布は，貝屋窯(川上1982)と高山寺窯(戸根1986)の中間的な分布を示す（第82～84図）が，須恵器食膳具の口径が13cm前後のものが定量有り，有台器種が多種多様である点は貝屋窯の器種組成に近く，貝屋窯並行とするのが妥当であろう。山三賀編年では，Ⅲ1期のSI15に対比できよう。

土師器は，食膳具に稜椀と無台椀が組成する。長胴甕は，ロクロ・タタキ成形され，胴部上半をカキメ調整するのを基本とする。口縁端部は，肥厚して内折する形態が多い。小型甕は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の３法量に法量分化している。小型甕の３法量分化は，県内では阿賀北地方特有の現象であり，使用方法や用途を示すものであろう。鍋は，２法量存在する。口縁端部の形状は，長胴甕に類似する。

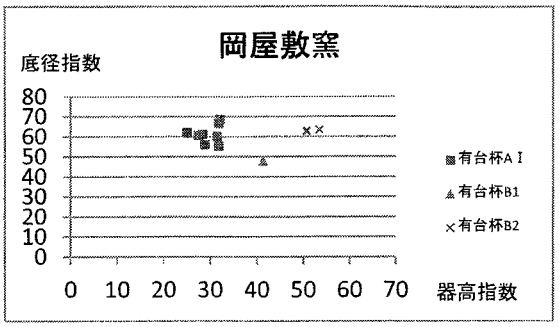
２期　36号土坑出土資料を標識とする。須恵器食膳具の器高指数・底径指数分布は，９号土坑に近いが，有台杯A類と無台杯は器高指数がやや大きく，底径指数が小さいものが増加する。須恵器食膳具の組成は，９号土坑ほど有台器種が多様ではなく，有台杯B・D類が少なくC類が多いといった特徴が認められ，有台器種が全体に小型化した状況を示す（第85図）。一方，折縁杯が２器種(A・C類)あり，折縁椀が存在するなど，折縁器種が多器種化している。須恵器食膳具の組成と法量・器形の特徴や器高指数・底径指数分布(第82・84図)から，高山寺窯に並行すると考えるが，法量の点では，やや先行するか。山三賀編年ではⅣ１期のSI6に対比できよう。

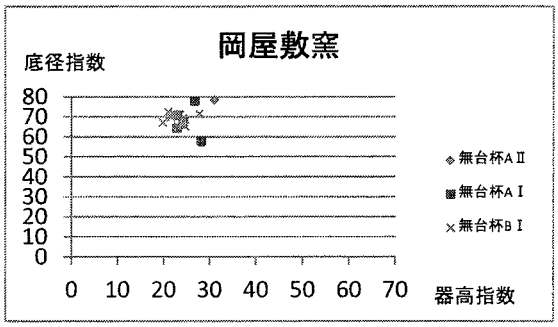
土師器・黒色土器食膳具は，金属器模倣器種の多さが際立つが，須恵器有台器種の減少や折縁杯の多器種化とあいまって注目される。丸山Ａ遺跡での金属器模倣器種の多さは，遺跡の性格を反映すると考えるが，折縁杯の出現，量産過程とも関連するものであろう。土師器煮炊具は，９号土坑より長胴甕がやや小型化するが，器形にさほど違いが認められない。ただし，ケズリ調整の多用と口縁がやや伸びて端部があまり内折しない点は異なり，この時期の特徴であろう。なお，例外的な小型甕Ⅳ類1点を除外してみると，１期に続き，小型甕３法量・鍋２法量の区分が維持されていることが見てとれる。

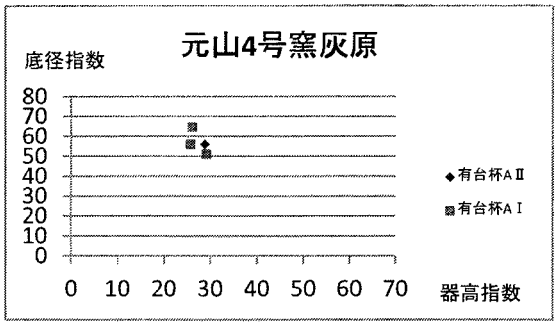
３期　11号土坑，31号土坑出土資料を標識とする。須恵器食膳具から有台杯ＡⅠ類が欠落し，基本的に有台杯A類が１法量となる。また，ほかの有台器種もB・C類以外はほとんど組成せず，食膳具の小型化の進行と器種の淘汰が急速に進行している。須恵器食膳具の法量，器形は，元山６号窯，松山２号窯(伊東1998)に類似し，おおむね並行すると考えられる。山三賀編年では，Ⅲ２期のSI60に対比できようか。

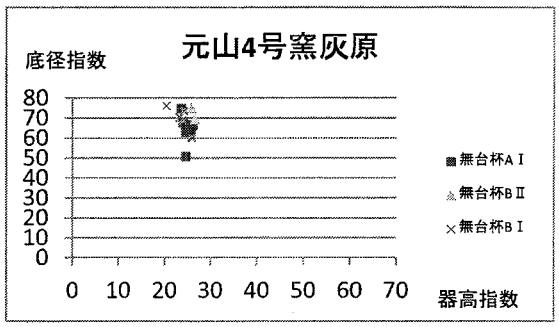
土師器食膳具は，31号土坑に金属器模倣器種があるが，有台器種は1点のみで無台器種が主体となる。鋺もしくは仏鉢模倣と思われる無台椀Ａ１類がまとまって出土しているのが注目される（第59図）。無台杯は，２期より若干小型化している。金属器模倣器種の生産がこの段階で衰退していた状況が伺われる。煮炊具は，２期以前に比べて長胴甕と鍋の小型化が著しい。このため，２期まで明瞭であった小型甕の３法量分化が不明瞭になり，２法量に統一されていく様相が見られる。須恵器食膳具ともども器種の淘汰が進んだ状況が看取される。

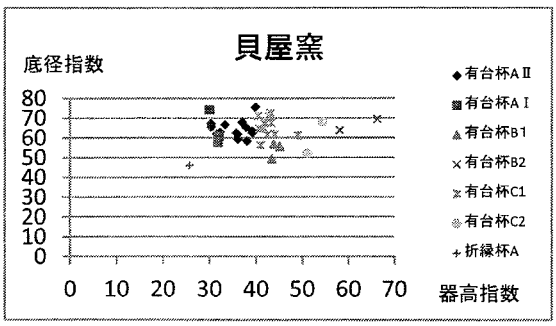
４期　1(ａ～ｃ)号土坑・10号土坑資料を標識とする。須恵器食膳具の器種淘汰と小型化が一層進み，無台器

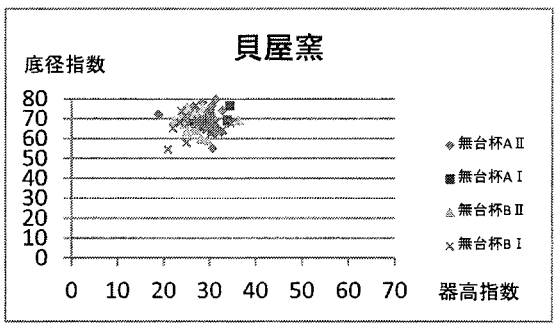


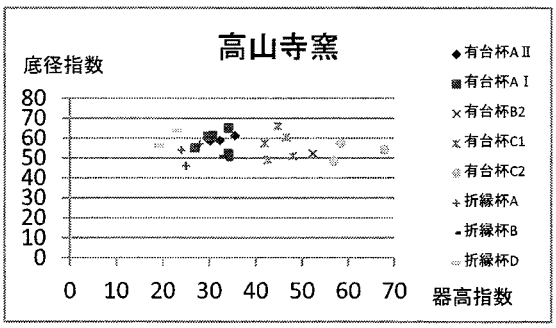


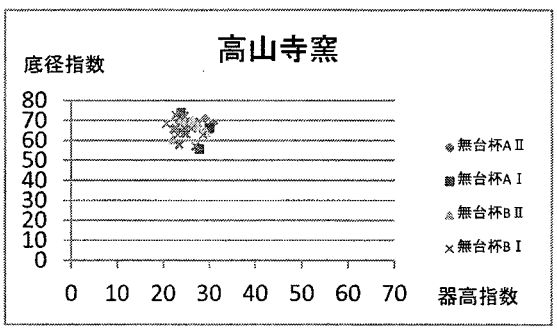


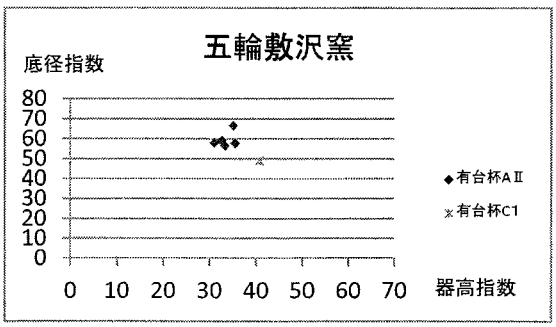


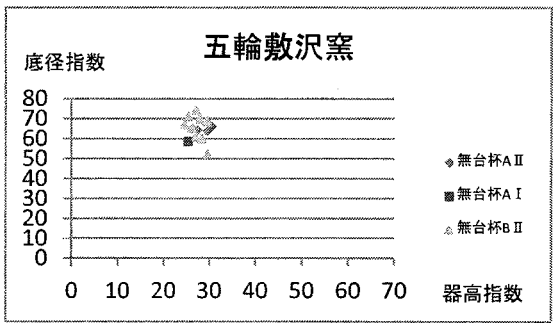




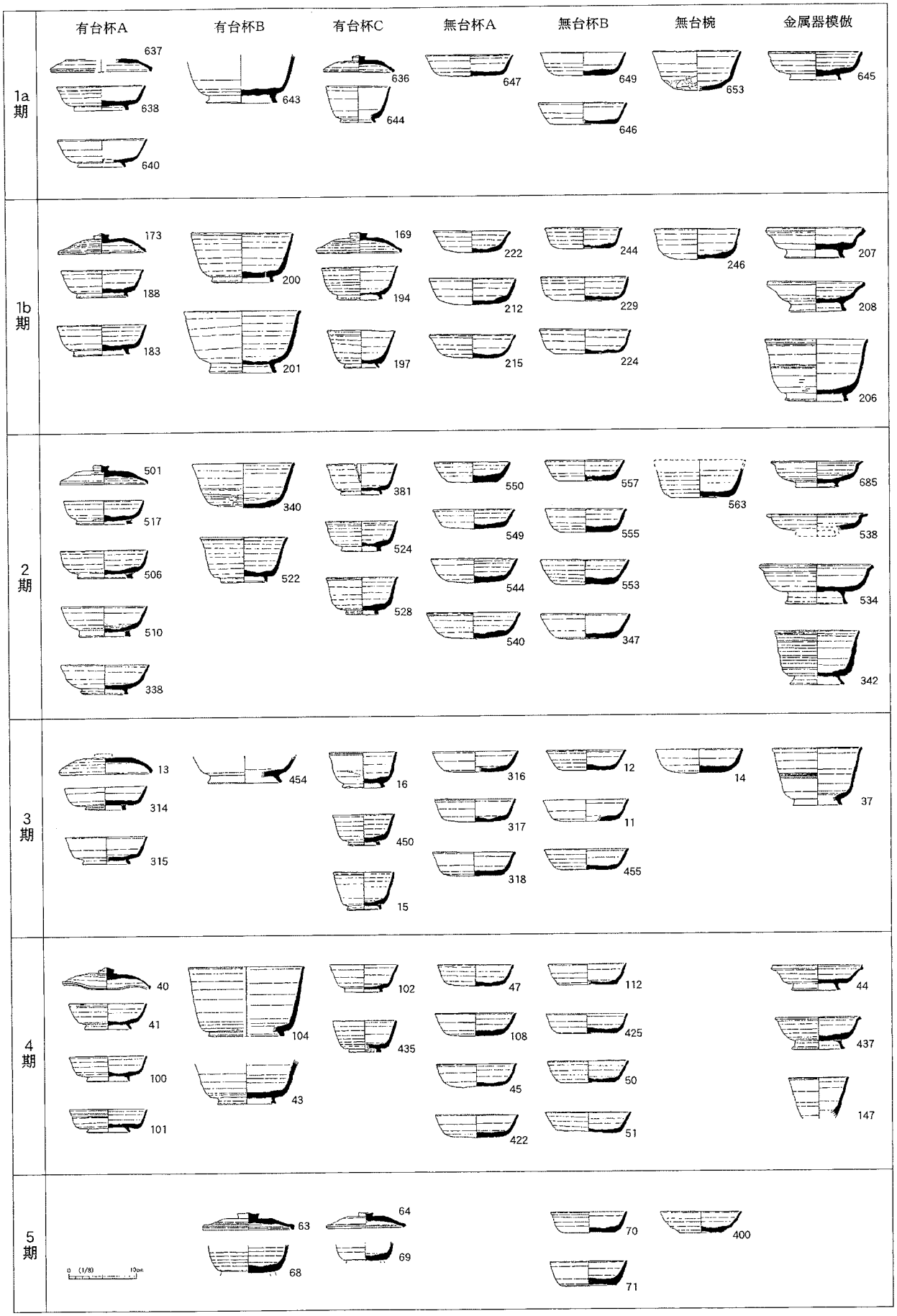




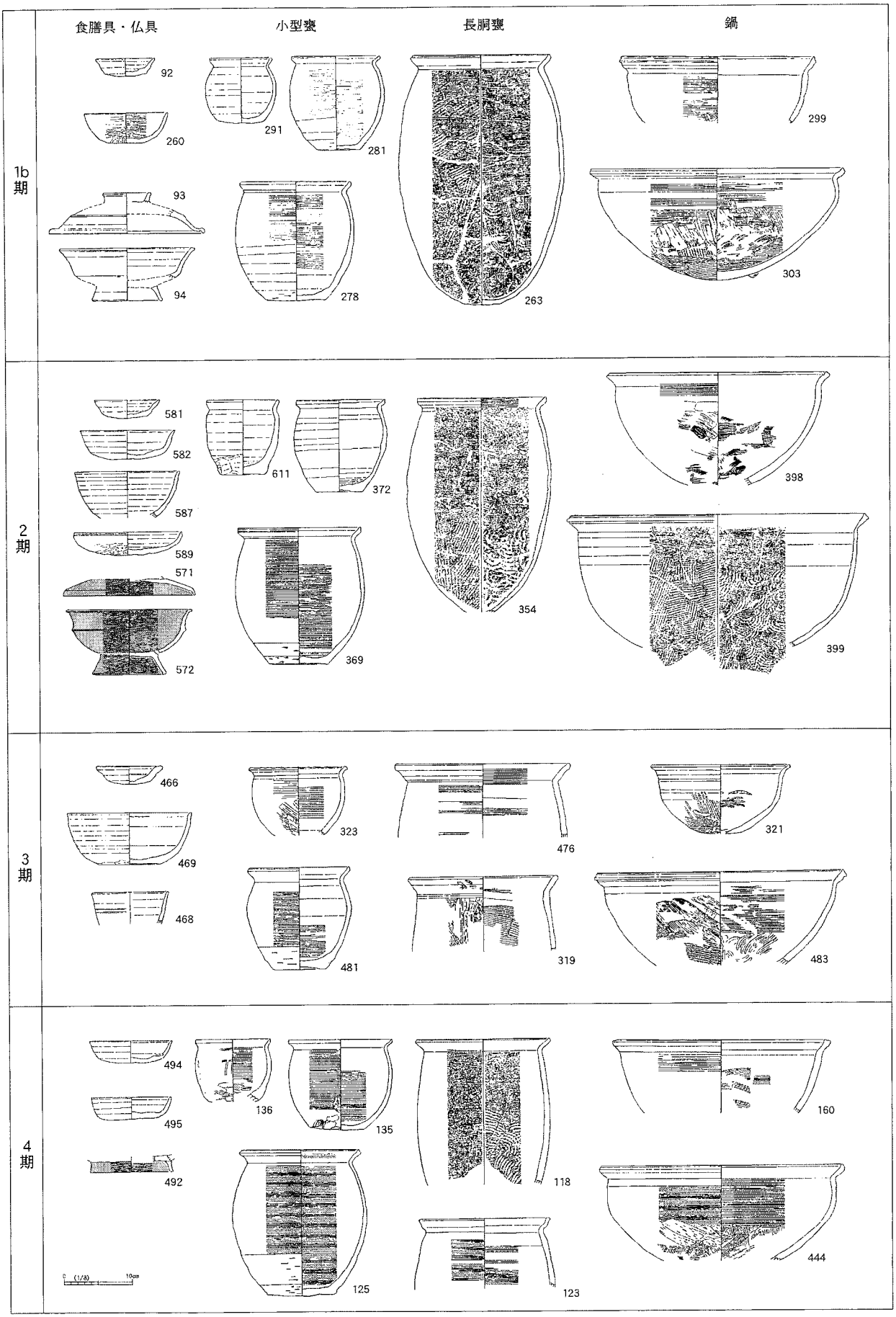




第84図　下越窯跡須恵器食膳具の器高指数・底径指数傾向



第85図　丸山A遺跡出土須恵器編年表



第86図　丸山A遺跡出土土師器編年表

種が7割近くを占めるようになる。有台器種は有台杯A類が口径11.5cm前後まで縮小し，B・C類が減少する。折縁杯は，定形化したものが伴うが，有台杯同様小型化している。須恵器食膳具の法量，器形，器高指数・底径指数分布(第82図)から，馬上3号窯(戸根1986)や五輪敷沢窯(春日2004)に並行しよう（第83・84図）。山三賀編年ではⅣ1期のSI1100・SI1320に対比できよう。

土師器食膳具は，無台杯が35号土坑でまとまって出土しているが，小型化しており，金属器模倣器種も存在しない（第61図）。須恵器同様器種の淘汰が進んだ状況が伺われる。土師器煮炊具は，３期から大きな変化は見られないが，法量の縮小により大型品と中型品が１法量に統合され，１(a～c)号土坑におけるⅠ類のような例外もあるが，この段階で小型甕がほぼ２法量，鍋が１法量となる。

５期　８号土師器焼成坑出土資料を標識とする。須恵器食膳具は，有台杯A類が消滅し，小型化したB･C類の２器種に整理される。無台杯は，遺構出土資料中最も小さい口径11cm前後まで縮小している。ともに，遺跡の最終段階を示す資料と位置付けられる。有台杯がB・C類２器種に整理される状況から，狼沢２号窯(中川ほか1973)や松山1号窯に並行しよう（第83図）。山三賀編年では，Ⅳ2期のSI1201・1202に比定できよう。

土師器・黒色土器は，資料数が少なく不明な点が多いが，４期までの大量生産は行われなかったと推測され，この段階で土師器生産も終焉を迎えたものと考えられる。

以上，丸山Ａ遺跡の遺構出土資料を５期６小期に区分して編年案を提示したが，大別すれば，須恵器・土師器ともに法量(容量)・器高の浅・深による器種分化が徹底される１・２期，須恵器食膳具の法量の縮小・有台器種の淘汰，土師器煮炊具の小型化とそれに伴う小型甕の３法量分化が不明瞭となる３・４期，須恵器有台器種が有台杯B・C類に統合され土師器小型甕が２法量となる５期の３期に区分でき，北陸の田嶋編年(田嶋1988)に対比すれば１・２期が田嶋Ⅳ２古・新期，３・４期が田嶋Ⅴ1・2期，５期が田嶋Ⅵ1期に対応すると考えている。既存の編年案や窯資料との対応については検討の余地を残す部分もある(表２）が，土師器生産遺跡としての丸山Ａ遺跡の操業期間が，８世紀後半～９世紀中頃の長期におよび，時期ごとに器種組成に特色が認められることは提示できたであろうか。遺跡成立から間もない1・２期に見られる多様な金属器模倣器種と土器の大量廃棄遺構の存在は，この段階に須恵器も含めた生産のピークが認められるとともに，組織だった生産体制の存在が伺われる。特に，金属器

表2　丸山A遺跡編年対応表

丸山A	遺　構	下越須恵器窯 (笹澤2012)	山三賀編年	春日編年	田嶋編年
1a期	3号井戸	2古期 元山4号窯	Ⅲ$_1$期 SI339	Ⅳ1期	Ⅳ2古期 戸津60号窯床面
1b期	9号土坑，13号土坑，27(a～c)号土坑	2新期 貝屋窯 元山1号窯	Ⅲ$_1$期 SI15	Ⅳ2期	Ⅳ2古期 戸津59号Ⅱ次窯
2期	1号掘立柱建物，3号土師器焼成坑，2(a～d)号土坑，17号土坑，21号土坑，29号土坑？，36号土坑	3古期 高山寺窯 ホーロク沢A号窯 元山2号窯	Ⅲ$_2$期 SI6	Ⅳ3期	Ⅳ2新期 和気小しょうぶ谷2号
3期	3号掘立柱建物･1(a･b)号溝，6号土師器焼成坑，3a号土坑？，7a号土坑，11号土坑，24号土坑，25(a～d)号土坑，31号土坑	(＋) 松山2号窯 元山6号窯	Ⅲ$_2$期 SI60	Ⅳ3～ Ⅴ1期	Ⅴ1期 和気後山1号窯 戸津5号窯テラス
4期	1号土師器焼成坑，2号土師器焼成坑，1(a～c)号土坑，4(a～c)号土坑，10号土坑，19号土坑，30(a～d)号土坑，35号土坑，1号井戸	3新期 馬上3号窯 五輪敷沢窯	Ⅳ$_1$期 SI1320 SI1100	Ⅴ1期	Ⅴ2期 ニツ梨一貫山3号灰原
5期	8号土師器焼成坑，23号土坑，6号土坑？	4古期 狼沢2号窯 松山1号窯	Ⅳ2期 SI1201 SI1202	Ⅴ2期	Ⅵ1期 戸津30号窯･1号土器溜まり

模倣器種の定量生産は，官衙のなんらかの関与が推測でき，胎内市蔵ノ坪遺跡(飯坂ほか2002)との関わりが推定される。また，阿賀北地方特有の器種である折縁杯の成立過程も，様々な金属器模倣器種が生産される中で出現したことが理解できるようになった。遺跡内での折縁器種のバリエーションの多さは，折縁杯の定形化に至る状況を示すと考えられ，おそらく稜椀に代わる金属器模倣器種として成立し，高山寺窯段階での整理･定形化を経て松山１・２号窯(伊東1998)段階で地域固有器種として量産されるに至ったのであろう。

2　遺構の変遷と特徴

（1）遺構の変遷

本遺跡では，古代・中世の遺構をⅡ～Ⅴ層上面で混在して確認しており，確認層序からの時期判定は出来なかった。このため，遺構同士の重複による先後関係と出土遺物の編年学的位置付けをもとに，遺構変遷を想定した。

しかし，９号土坑と３号井戸がそれぞれ，遺構の重複関係と遺物の編年学的位置付け，炭素年代測定分析の結果とが齟齬をきたす結果となった。このことについては，重複関係の把握については土層の誤認の可能性が，遺構出土遺物については遺構の上限時期を示すものでしかない点が，炭素年代測定分析については試料的ノイズの可能性が，それぞれ考えうる。これらについての検討を，９号土坑については遺構の性格の検討も含めて後述しており（「Ⅴ－２－(３)」），３号井戸については「Ⅲ－６　３号井戸」に記したが，結論としては，共にいずれかの時期と特定することが出来なかった。ここでは，以上の点に留意しつつ，遺構の変遷について概観する(第87図）。なお，暦年代は，前掲編年対応表のうち，下越須恵器窯編年(笹澤2012)をもとに記載した。

丸山Ａ1期(８世紀後半）出土遺物からは１a期と１b期に分かれる。しかし，出土遺物を１a期と位置付けた３号井戸の遺構自体の年代は，前述の通り特定できていない。このため，この時期の明確な遺構はないが，まとまった遺物が出土していることから，当期に遺跡での活動が開始していたことは疑いなく，活動の場として，調査区外を考えておきたい。１b期には13・27(a～c)号土坑が位置付けられており，調査区内での活動が本格化する。また，９号土師器焼成坑は27号土坑と重複し，これに先行するため，９号土師器焼成坑は，１a～b 期に位置付けておきたい。なお,９号土坑の出土遺物はこの時期に位置付けられるが，重複関係からは重複する３号掘立柱建物・１(a・b)号溝より後(３期以降）の可能性が想定されるため，遺構そのものの時期的位置付けは保留しておきたい。

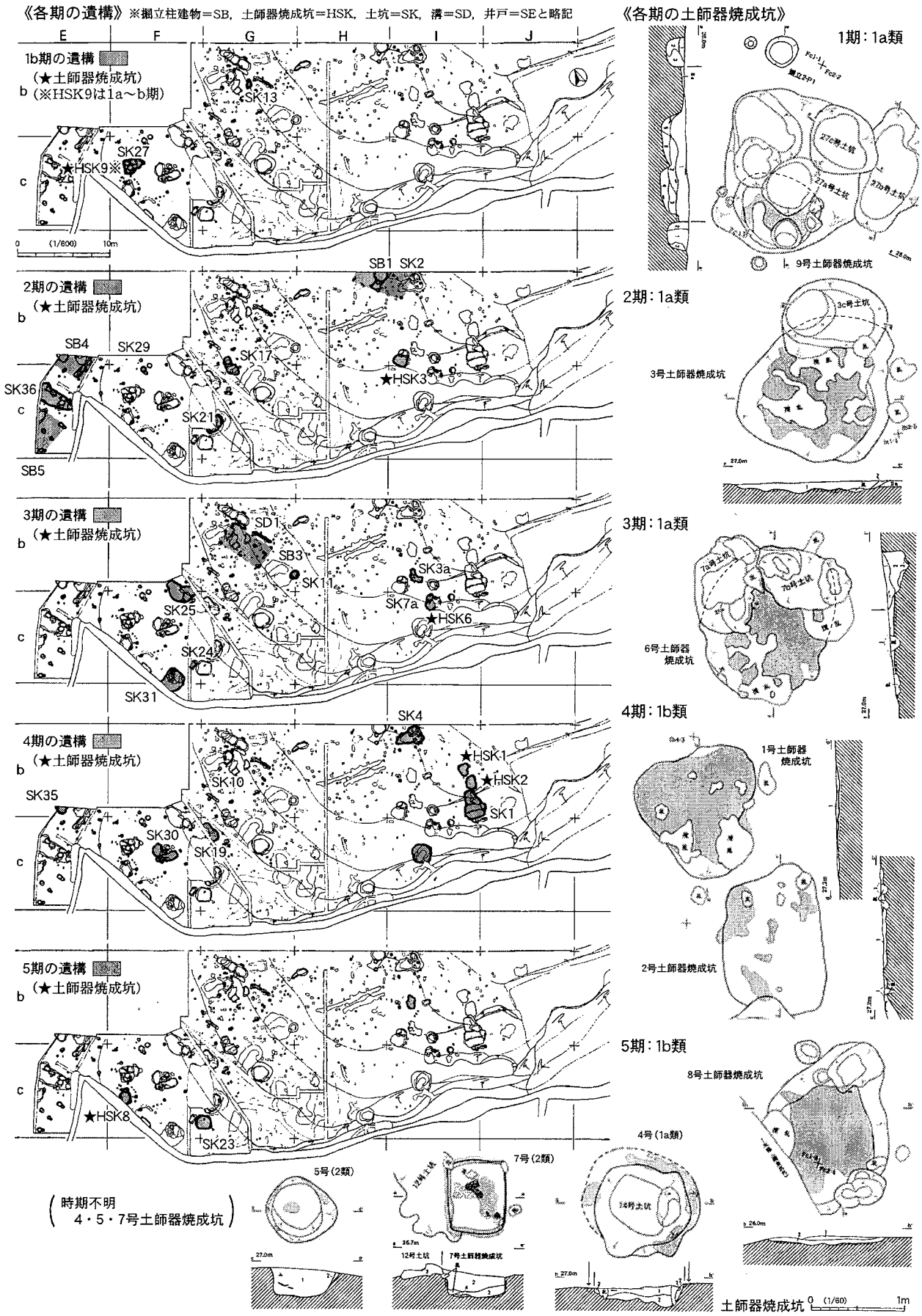
丸山Ａ２期(８世紀末）１号掘立柱建物,３号土師器焼成坑，２(a～d)・17・21・29・36号土坑が位置付けられる。このほか，遺構の位置関係と建物の主軸方向から,５号掘立柱建物は36号土坑を伴い,４号掘立柱建物も共存すると想定されるので，これらも２期に位置付けておきたい。36号土坑からは，使用痕跡の残る遺物が比較的多く出土しており，これらの建物で使用されていたものの廃棄が想定できる。

丸山Ａ３期(９世紀初頭～前葉）３号掘立柱建物とこれに伴う１(a・b)号溝,６号土師器焼成坑，３a・７a・11・24・25(a～d)・31号土坑が位置付けられている。また,９号土坑の出土遺物は１b期だが，１a号溝と重複，これに後出することから，後述の通り，３期以降に位置付けられる可能性もある。

丸山Ａ４期(９世紀前葉）１・２号土師器焼成坑，１(a～c)・４(a～c)・10・19・30(a～d)・35号土坑，１号井戸が位置付けられる。

丸山Ａ５期(９世紀中頃）８号土師器焼成坑，６・23号土坑が位置付けられる。

以上，丸山Ａ遺跡は，８世紀後半から９世紀中頃までの約100年間，営まれ続けた遺跡である。各時期とも土師器焼成遺構を伴うことから，継続的に土師器焼成を行っていたと考えられる。一方，掘立柱建物は２・３期に位置



第87図　丸山A遺跡の遺構変遷

付けられる４棟しか検出していない。しかし，遺物の出土内容や使用痕跡から見て，集落の規模に拡大縮小の変化があったにせよ，１～５期の間，継続的に営まれていたことが想定できる。今回調査では，遺跡南東端の一部分しか発掘していない点を踏まえ，調査区外に居住域が展開した時期もあると推測する。

（２）土師器焼成

土師器焼成坑　本遺跡からは，底面の明瞭に被熱した土坑９基を検出。土師器焼成坑と判断した（「Ⅲ－１－(1)【土師器焼成坑】」）。これらは形状・および焼土化の特徴から，２類３細分することができる。

１類：掘り込みが浅く底面の広範囲が被熱したもの（面積約1.4～1.9㎡，底面中央の５～９割が焼土化。）

ａ：円形のもの(３・４・６・９号)，ｂ：一部に直線的な辺を持つもの(１・２・８号)

２類：掘り込みが深く，底面中央の比較的狭い範囲と壁面が被熱したもの（５・７号）

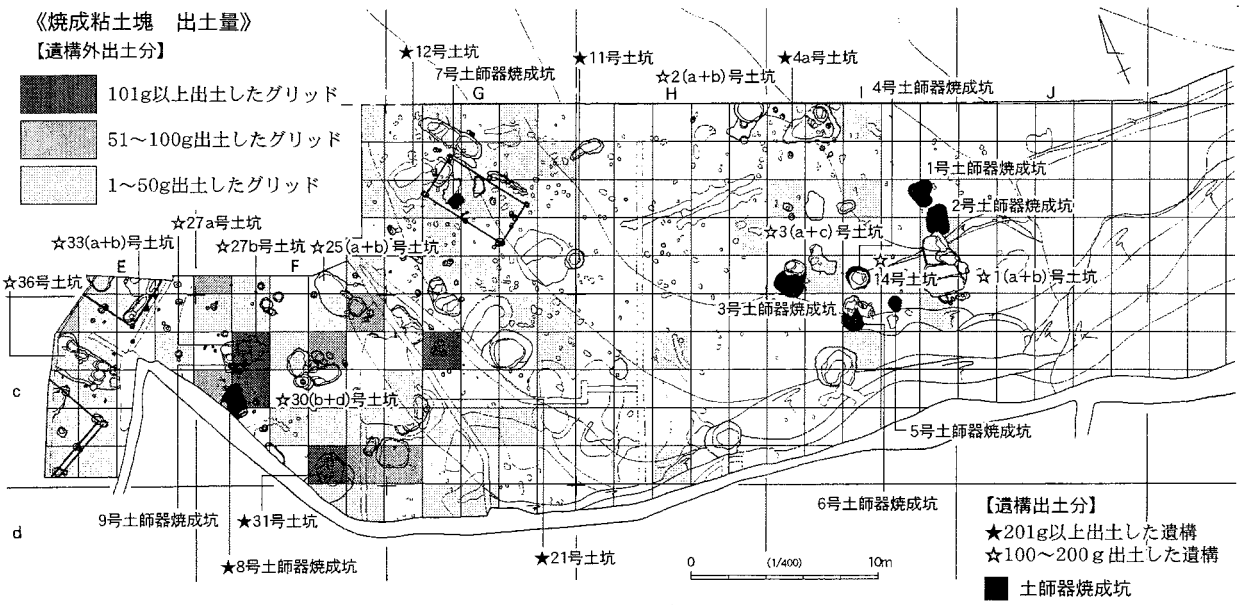
前述の遺構変遷で見ると(第87図)，各時期とも１類が１～２基存在し，丸山Ａ１～３期に１a類，丸山Ａ４・５期に１b類があることから，本遺跡では定型的な土師器焼成坑として1類が使用され，　１a類から１b類へ形状変化したと考えられる。

なお，２類は２基のみであり，各々出土遺物も少ない。詳細時期や性格についての検討材料が不足しているため，これらは今後の課題とし，類例の増加を待ちたい。

焼成粘土塊　今回の調査区内からは，多量の焼成粘土塊が出土した。総点数917点，重量にして7.2kgにものぼる。このうち，671点5.2 kgが遺構内からの出土品である。古代の遺跡から出土する焼成粘土塊，特に土師器焼成に関連する遺跡からの出土品については望月精司氏がまとめており，A類〔土師器焼成時の支台やカマセ材〕とB類〔焼成坑部材＝貼り壁塊〕に分類している(望月2005b)。本遺跡出土品もこれに従い分類した結果，確認出来たものの99％以上がA類に該当した。これらA類を形態によりさらに３細分したが(前掲「Ⅲ－７－(４)」)，形態毎の出土状況に傾向性は認められず(注１)，一括して廃棄されていたことが明らかとなった。一方，遺構毎・地点毎の出土状況には，明らかな偏りが見られた(表３，第88図)。遺構外からの出土は，調査区西端E・F列に集中している。遺構内からは，31号土坑・４a号土坑・８号土師器焼成坑で突出して多く出土しており，遺構出土総量の４割を占める。これらの遺構はそれぞれ，３・４・５期に位置付けられるため，丸山Ａ３期以降に焼成粘土塊が多出し，この状況が継続していた点が指摘できる。また，　12・19号土坑のように，焼成粘土塊だけが多量に出土しており，遺物の出土量は極めて少ないケースも確認できた。このことは，焼成粘土塊と土器類の廃棄が，異なる行為として行われていたことの表れであり，焼成粘土塊が望月氏の想定の通り，土師器焼成用具の一種であるとすると，土師器焼成用具と通常使用の土器類とは，廃棄時にも別種のものとして扱われていたことが読み取れる。

丸山Ａ遺跡における土師器焼成　古代北陸地域における土器生産の大きな特徴として，土師器煮炊具への須恵器製作技法の導入と，須恵器・土師器の一体生産，須恵器窖窯における土師器・須恵器の一元焼成が指摘されている。また，そのような土器生産体制の中で出現した土師器焼成坑は，当初は食膳具特殊品焼成のための補助的な存在として構築されるが，８世紀後半に生じた土師器大型煮炊具増産要求に対応するために，須恵器窯での焼成を補完する形で，煮炊具を焼成することになり，このために大型・深型化することが指摘されている(望月1997b)。また，焼成粘土塊の多出も，大型煮炊具焼成に伴うものと想定されている(望月2005b)

一方，越後については，８～10世紀を通して，土師器煮炊具の焼成は，須恵器窯を主体としており，土師器焼成坑は補助的に使用されるものの，大型化は起こらず，土師器食膳具が一般化する９世紀後半まで，土師器焼成坑での土師器焼成は本格化しなかった可能性が指摘されている(望月1997b)。この分析がなされた当時から15年以上



第88図　焼成粘土塊出土分布

表3　遺構別　焼成粘土塊出土量

遺構名：掘立柱建物=SB,土師器焼成坑=HSK,土坑=SK,溝＝SD,井戸SE,ピット＝Pと略記　　出土量の特筆遺構(点数が少ないため、見かけ上の割合の多くなる遺構を除く)

遺構名		焼成粘土塊出土量 (A)		遺物出土量(除:粘土塊) (B)	各遺構出土品の,遺構全体総量に占める割合		遺物総量に占める粘土塊の割合(遺構毎) (B/(A+B))
					遺物全般 ((A+B)/C)	焼成粘土塊 (B/C2)	
		重量(g)	点数	重量(g)	(%)	(%)	(%)
合　計(c)		(C1) 5,228.6	671.0	(C2) 352,595	100%	100%	1.5%
遺構出土遺物総量(C)				357,823			
SB1(P)		—	—	635	0.2%	—	—
SB2(P)		18.5	2	755	0.2%	0.4%	2.4%
SB3(P)		—	—	175	0.0%	—	—
SB4(P)		—	—	165	0.05%	—	—
SB5(P)		—	—	315	0.1%	—	—
HSK1		5.5	1	1,165	0.3%	0.1%	0.5%
HSK2		—	—	1,530	0.4%	—	—
HSK3		28.5	6	1,215	0.3%	0.6%	2.3%
HSK4		—	—	0	—	—	—
HSK5		17.6	4	480	0.1%	0.3%	3.5%
HSK6		10.0	3	1,055	0.3%	0.2%	0.9%
HSK7		17.4	6	420	0.1%	0.3%	4.0%
HSK8		**638.4**	**60**	9,605	2.7%	**12.5%**	**6.2%**
HSK9		—	—	10	—	—	—
SK1	a	98.7	18	28,055	8.0%	1.9%	0.4%
	b	35.3	7	3,420	1.0%	0.7%	1.0%
	c	—	—	555	0.2%	—	—
	a～d	—	—	3,290	0.9%	—	—
SK2	a	74.6	5	280	0.1%	1.5%	21.0%
	b	34.6	3	590	0.2%	0.7%	5.5%
	c	—	—	18	0.01%	—	—
	d	—	—	0	—	—	—
SK3	a	81.5	4	3,140	0.9%	1.6%	2.5%
	c	18.8	2	590	0.2%	0.4%	3.1%
	a～c	—	—	720	0.2%	—	—
SK4	a	**555.4**	**96**	7,625	2.2%	**10.8%**	6.8%
	b	75.4	21	4,055	1.2%	1.5%	1.8%
	c	0.8	1	330	0.1%	0.02%	0.2%
SK5		—	—	150	0.04%	—	—
SK6		—	—	510	0.1%	—	—
SK7	a	—	—	210	0.1%	—	—
	b	—	—	100	0.03%	—	—
SK8		—	—	20	0.01%	—	—
SK9		46.4	4	65,478	18.6%	0.9%	0.1%

SK10		1.2	1	5,075	1.4%	0.02%	0.0%
SK11		**236.4**	**30**	3,705	1.1%	4.6%	**6.0%**
SK12		**372.4**	**62**	1,761	0.5%	7.3%	**17.5%**
SK13		—	—	2,170	0.6%	—	—
SK14		129.5	20	1,870	0.5%	2.5%	6.5%
SK15		—	—	1,515	0.4%	—	—
SK16		—	—	50	0.0%	—	—
SK17		22.0	4	20,800	5.9%	0.4%	0.1%
SK19		**223.5**	**39**	3,300	0.9%	4.4%	6.3%
SK21		229.7	16	10,070	2.9%	4.5%	2.2%
SK23	ab	26.8	2	2,740	0.8%	0.5%	1.0%
	a	24.1	3	1,210	0.3%	0.5%	2.0%
	b	14.2	1	985	0.3%	0.3%	1.4%
SK24		16.4	3	3,545	1.0%	0.3%	0.5%
SK25	a～d	27.4	10	3,665	1.0%	0.5%	0.7%
	a	38.4	5	4,590	1.3%	0.7%	0.8%
	b	73.6	13	595	0.2%	1.4%	11.0%
	c	—	—	10	0.003%	—	—
	d	—	—	0	—	—	—
SK27	a～c	83.6	12	1,125	0.3%	1.6%	6.9%
	a	189.1	24	5,170	1.5%	3.7%	3.5%
	b	127.5	14	1,830	0.5%	2.5%	6.5%
	c	11.0	2	2,705	0.8%	0.2%	0.4%
SK29		9.9	1	920	0.3%	0.2%	1.1%
SK30	a～d	—	—	1,320	0.4%	—	—
	a	—	—	4,715	1.3%	—	—
	b	75.7	16	2,935	0.8%	1.5%	2.5%
	c	—	—	110	0.0%	—	—
	d	28.2	1	1,860	0.5%	0.6%	1.5%
SK31		**938.6**	**95**	33,725	9.6%	**18.3%**	2.7%
SK32		159.1	6	1,160	0.3%	3.1%	12.1%
SK33	ab	175.0	20	1,915	0.5%	3.4%	8.4%
SK34		28.3	5	1,225	0.3%	0.6%	2.3%
SK35		—	—	3,025	0.9%	—	—
SK36		116.0	13	61,365	17.4%	2.3%	0.2%
SK37		26.3	2	220	0.1%	0.5%	10.7%
SD1	ab	1.2	1	5,030	1.4%	0.02%	0.0%
SD2		—	—	800	0.2%	—	—
SE1		—	—	5,795	1.6%	—	—
SE2		—	—	560	0.2%	—	—
SE3		55.7	5	10,683	3.0%	1.1%	0.5%
Hb2-3P		10.6	2	720	0.2%	0.2%	1.5%

が経過し，新潟県内における土師器焼成坑の確認例も，８遺跡から13遺跡に増加したが，傾向的に大きな変化は見られない。

本遺跡でも，土師器煮炊具は須恵器窯で焼成されていたことを示す，還元炎焼成・須恵器質の土師器小型甕(第75図706)が出土しており，土師器焼成坑の構築は各時期１～２基程度と小規模である。一方で，３・４期を境に土師器焼成坑の形態が１a類から１b類へと微細だが変化し，土師器焼成坑の大型化は見られないが，焼成粘土塊は多出するような生産が行われるようになるなど，北陸とは異なる様相が認められる。

また，前述「Ⅴ－１」で指摘された通り，土師器では，３期を過渡期として，黒色土器・土師器食膳具の出土量，特に金属器模倣器種が減少し，煮炊具の小型化とこれに伴う小型甕の法量分化不明瞭化などの変化が生じており，土師器焼成坑の形態及び焼成粘土塊出土量の変化は，これら生産品の変化を反映していると推測される。

なお，今回の丸山Ａ遺跡での整理を通して，以前報告した坂ノ沢Ｄ遺跡２号土坑が(渡邊ほか1999)，土師器焼成坑であったのではないかと考えるに至った。また，製炭土坑とした同１号土坑も，本遺跡７号土師器焼成坑と非常に共通性が高く，同様の可能性を持つ。一方で，７号土師器焼成坑が製炭土坑である可能性も想定しうる。他にも，上越市海道遺跡SX1701のように，土師器焼成坑とする見解(望月1997b)がある一方で，調査報告者はこの可能性に否定的であり，土師器焼成坑と確定するには至っていない例がある(高橋2005)。このように，土師器焼成坑の認定については，難しさが伴う部分があり，検討資料蓄積のためにも，今後の調査では，焼土化範囲・被熱厚などの詳細な情報の明示と土師器焼成坑の可能性の明記が必要とされよう。

注1) 二ツ梨一貫山窯跡では，焼成粘土塊ＡⅢ類の中に，特に横瓶や壺などの須恵器製品の粘土層が酸化炎焼成されたものが一定量出土しているが，本遺跡の出土品には，ほぼ認められない。これは，ホーロク沢Ａ・Ｂ須恵器窯跡から200～400m離れる丸山Ａ遺跡と，須恵器窯灰原から土師器焼成坑まで10～20mしか離れない二ツ梨一貫山窯跡との，距離の差とも関連しようか。今回，詳細について言及する用意は無いため，須恵器製作に対する係わり方の違いと大きく捉えておきたい。

（３）土器埋納土坑－９号土坑－

本遺跡からは，一般的な集落遺跡に比べ，明らかに多量の遺物が出土した。これらの中には，使用破損品（＝使用痕を残すもの）と未出荷品(焼成時の欠陥の確認できるもの，または使用痕のないもの)とがある。通常の遺跡では出土することの少ない後者が含まれるため，本遺跡からは多量の遺物が出土した訳であるが，両者ともあくまで「不用品」であり，廃棄時の扱いに，基本，差異は無い。

しかし，最も多く遺物を出土した９号土坑だけは，他の遺構とは明らかに出土状況が異なっており，日常的な不用品の廃棄とは異なる意図が認められる。このため，その特殊性について，９号土坑に次いで遺物を多く出土した36号土坑との比較をとおして，指摘しておきたい。

９号土坑は平面積3.18㎡。掘り込み30㎝ある。出土遺物の総量は65.5kg。本遺跡の遺構からの出土遺物総量の18.6％を占めている(表３)。非常に復元率が高く，９号土坑出土量の７割(重量比)にあたる150個体を図化することができた。遺物は，上層部に細かい破片が入るものの，下部は原形を保った状態であるものが多い。特に北西半は，ほぼ完形の状態の遺物が，土の入る隙間もないほどに密集して詰め込まれていた。

一方，36号土坑は平面積5.97㎡，深さ30～40cmある。遺物出土総量は61.4kgあり，うち重量比で３割強にあたる127点を図化することが出来た。遺物は土層中から分散して出土しており，遺物の廃棄土坑と考えられる。

両遺構は，ぼぼ同じ深さだが，面積は９号土坑が36号土坑の半分であるのに対しい，遺物出土量は９号土坑の

ほうが多い。また，復元率(重量比による)を比較しても，９号土坑が36号土坑の倍と高いことから，９号土坑に遺存状態の良好な遺物が多数集中していたことが明白である。

また，両遺構の(掲載)遺物のうち，使用痕を残すものを「使用破損品」とし，焼成時の瑕疵(亀裂・歪み・融着痕)が認められるものや，未使用と想定されるものを「未出荷品」として，出土率を比較すると，９号土坑では使用破損品が10%，未出荷品が17%を占めるのに対し，36号土坑では使用破損品が26%を占め，未出荷品は８%にとどまる。出土状況から，36号土坑が本遺跡における標準的な不用品の廃棄状況であるとするなら，これに比べ，９号土坑は使用破損品の出土率が半減，未出荷品の出土率が倍増していることが見て取れる。

さらに，両遺構の器種組成を掲載資料分で比較すると，９号土坑は，須恵器食膳具が57%，同貯蔵具が7%，同焼台が１%，土師器・黒色土器食膳具が１%，土師器煮炊具が29%，土錘が５%を占める。36号土坑は，須恵器食膳具が50%，同貯蔵具が５%，同焼台が１%，土師器・黒色土器食膳具が15%，土師器煮炊具が28%，土錘が１%を占める。

以上，９号土坑への遺物集中は，本遺跡において日常的に行われていた不用品の廃棄とは異なるものであるが，内容物を見る限り，やはり不用品であり，特に未出荷品の廃棄率が高いことから，これらの片づけを意図した埋納遺構であると考えられる。

なお，両遺構とも土師器煮炊具の割合は３割弱とほぼ一致しており，その中に占める使用破損品・未出荷品の割合も15%前後で共通する。このため，両遺構における使用破損品と未出荷品の占める割合の違いは，概ね，須恵器・黒色土器・土師器食膳具・土錘における使用破損品と未出荷品の割合の違いとして捉えられる。特に，黒色土器・土師器食膳具をほとんど含まない９号土坑の遺物については，須恵器と土錘の傾向と換言することが出来よう。

さて，一般的に須恵器の焼成失敗品は，須恵器窯の傍らで分別・廃棄されて，灰原を形成する。これに対し，本遺跡に近接する須恵器窯は，少なくとも200～400mは離れたホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡であり，本遺跡出土の須恵器焼成失敗品は，この距離をおして，わざわざ製品を運び込んだ挙句に，廃棄されたことになる。９号土坑出土の未出荷須恵器には，小さな亀裂や軽微な焼き歪み品が多いことから，窯跡から本遺跡まで出荷を意図して運ばれた製品が，搬出にあたり再度チェックを受けた結果，不適格品としてはじかれた可能性を考えたい。これを集積し，土坑に詰め込んで埋納したのが，９号土坑にあたるのではないだろうか。

以上，９号土坑の性格を推定したところで，その時間的位置付けについて検討しておく。出土遺物は前掲「Ⅴ－1」において，丸山１b期に位置付けられており，また，９号土坑出土品のうち使用痕・転用痕を残すものは，１b期とした中でもやや古めの要素を残す遺物である。この点からすると，埋納遺物が選別されたのは１b期である可能性が高い。しかし，９号土坑は３期の１a号溝と重複し，これより後出するため，３期以降に構築され，遺物が埋納されたと考えられ，時間的に齟齬をきたす。一方で，選別した未出荷品を通常の不用品と同じように順次廃棄していくのではなく，集積して埋納したことを考えるならば，この時間差は，選別・集積と，埋納の間の時間差によるものと想定しうる。以上，いくつかの可能性が考えうるが，決定打に欠くため，遺構そのものの形成時期については，判断を保留しておきたい。

なお，これらの遺物を埋納していた土(９号土坑２層)から出土した炭化材片の炭素年代測定分析を実施しており(分析試料No12・13)，暦年較正年代（1σ）は，681～768cal ADの間に２つの範囲(No.12)と，722～865cal ADの間に３つの範囲(No.13)を得た。暦年構成年代(2σ)も勘案すると，No.13はさらに770～827 cal ADの確率が最も高くなる。丸山１期は，おおよそ８世紀後半，３期は９世紀初頭以降と考えられる点からも，双方の時期の可能性を否定し難い。

このほか，遺物を多量に出土した遺構として，１a・17・31号土坑がある。ともに，36号土坑と同様の，一般

的な不用品廃棄遺構と考えている。このうち，1a 号土坑からは，破損品ながら焼成良好で，器面の状態から見て未使用とみられる土師器小型甕が多数出土し，31号土坑からは黒斑の残る，土師器食膳具の焼成失敗品が出土した。これらの存在から見て，土師器についても，本遺跡で出荷適否の仕分けが行われたと考えられる。

3 要　約

本遺跡の特徴として，以下の７点が指摘できる。

① 奈良・平安時代の遺構・遺物を主体とする遺跡である。８世紀後半～９世紀中頃の長期間，継続的に営まれており，出土遺物から５期６細分できる。

② 掘立柱建物４棟，井戸２基，遺物廃棄土坑多数を検出した，集落遺跡である。このうち掘立柱建物は，２・３期のものしか検出されていないが，遺物の出土内容・使用痕跡などから見て，そのほかの時期も一定の生活が営まれていたことが想定しうる。今回の調査区は，遺跡の南東端の一部のみであるため，２・３期以外の居住域は調査区外に展開すると推測される。

③ 土師器焼成坑９基を検出しており，各期とも1～２基程度が存在するため，土師器を継続的に焼成した，土師器生産遺跡と考えられる。一方で，還元炎焼成の土師器も出土していることから，土師器の一部と須恵器は，ホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡等の，近接する須恵器窯で焼成されたと考えられる。

④ 土師器では，３期を過渡期として，黒色土器・土師器食膳具の出土量，特に金属器模倣器種が減少し，煮炊具の小型化とこれに伴う小型甕の法量分化不明瞭化などの変化が生じている。また，時期を同じくして，微細ながら土師器焼成坑の形態変化や，焼成粘土塊の増加が認められており，これらは，生産品の変化を反映していると推測される。

⑤ 未出荷品の選別・片づけを想定させる埋納遺構(９号土坑)が存在することから，本遺跡は，近接する須恵器窯跡から持ち出された遺物の一時的集荷・保管の場であり，ここで最終的な分別を行った上で，製品が出荷されたと考えられ，土師器も同様の可能性を想定しうる。

⑥ １・２期の出土遺物には，多様な金属器模倣器種が認められ，官衙の関与が推測される。また，その豊富な資料内容から，稜椀に代わる金属器模倣器種としての須恵器折縁杯の成立と，その定形化に至る状況をうかがい知ることが出来る。

⑦ このほか，調査区西側で12世紀中葉～13世紀前半の四面廂掘立柱建物1棟と，珠洲焼小型双耳壺の埋納遺構を検出した。近隣に中世加地氏の居館跡(蔵光館跡)や菩提寺伝承地(香伝寺本山跡)の所在することから，これらとの関連性が推測される。

引用・参考文献

阿部洋輔　1980　「第１編　第二章　第2節　律令時代の阿賀北地方」『新発田市史』上巻 新発田市

飯坂盛泰ほか　2002　『一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書　蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志　1998　「新発田市十二林遺跡の縄文後期瘤付土器群の位置付け」『北越考古学』第９号 北越考古学研究会

伊藤正一　1980　「第１編　第五章　城と館」『新発田市史』上巻 新発田市

伊東　崇　1998　『松山窯跡』 新潟県北蒲原郡黒川村教育委員会

加藤　学　2004　「報告編　第Ⅳ章４　新潟県域における北方系の土師器甕－事例紹介と問題提起－」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

春日真実　1989　「第５章　考察　３　窯詰めの方法」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室

春日真実　1999　「第４章　古代　第２節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』古志書院

春日真実　2004　「報告編　第Ⅲ章　沼垂郡の土器様相　４海岸部（南部）」,「資料編　第Ⅱ章（34）五輪敷沢窯跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について―「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会

春日真実ほか　2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

川上貞雄　1982　『貝屋須恵窯址』加治川村教育委員会

木立雅朗　1997　「第１章　第１節　土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

北野博司　1999　「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第8号　北陸土器古代研究会

桑原正史　1980　「第２編　第一章　第1節　律令制から荘園制へ」『新発田市史』上巻　新発田市

小山正忠・竹原秀雄　1967　『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社

国土地理院　1993　『1：25,000　土地条件図　新発田』　国土地理院

坂井秀弥　　1989　「第Ⅴ章　出土遺物　3奈良・平安時代」「第Ⅶ章まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1989　『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

笹澤正史　2012　「第Ⅴ章まとめ　２遺物の時期的な位置付けと特徴」『地蔵潟Ａ遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

柴田陽一郎　2010　「東北地方の製塩土器」『石川県埋蔵文化財情報　第23号』財団法人　石川県埋蔵文化財センター

鈴木暁・田中耕作　1996　『前山遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

関　雅之　2001　『新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器」『北越考古学』第12号　北越考古学会研究会

関雅之ほか1988　「付編　畠山佑二コレクション」『豊栄市史　資料編１　考古編』豊栄市

関雅之・本間信昭　1981　『真木山製鉄遺跡－新潟県北蒲原郡豊浦町真木山製鉄遺跡の発掘調査報告－』新潟県豊浦町教育委員会

高橋　保　2005　『海道遺跡・大塚遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋春栄　1996　「新発田市小丸山Ａ遺跡の縄文土器と玦状耳飾」『北越考古学』第7号　北越考古学研究会

高濱信行・卜部厚志　2004　「第Ⅰ章　１　青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡　関連書科学・写真図版編』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田嶋明人　2013　「第４章　総合的検討と課題　第１節平安時代土器の歴年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀横江荘遺跡―範囲内容確認調査報告書』白山市教育委員会

田中耕作　1996　「縄文時代における鉄鉱石の利用-阿賀野川以北の遺跡を中心にして-」『北越考古学』第7号　北越考古学研究会

鶴巻康志　2001　「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会

独立行政法人　文化財研究所　2003　『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編　奈良文化財研究所

戸根与八郎　1986　「付編二　生産遺跡　真木山窯址群」『新潟県史』通史編1　原始・古代　新潟県

中川成夫ほか　1962　「新潟県北蒲原郡における二窯址の調査」新潟県笹神村教育委員会

中川成夫ほか（立教大学調査団）　1963　「新発田市内における考古学的調査」『新発田郷土誌』第2号　新発田市史編纂委員会

中川成夫・土井義雄・川上貞雄　1973　『狼沢窯址群の調査』新潟県笹神村教育委員会

平川　南　2005　「古代越後の磐船郡と沼垂郡－新潟県中条町屋敷遺跡出土木簡から発して－」『古代の越後と佐渡』高志書院

藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』高志書院

水澤幸一　2004　「越後国加地荘の城館(上)」『新潟考古』第15号　新潟県考古学会

望月精司　1991　『戸津古窯跡群Ⅰ』小松市教育委員会

望月精司　1994　「南加賀古窯跡群における8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第４号　北陸土器古代研究会

望月精司　1997a　「北陸における」古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第６号　北陸土器古代研究会

望月精司　1997b　「第２章　第４節　北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

望月精司　2002　『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会

望月精司　2005a　「第８章　考察－能美窯跡群の8世紀後半～9世紀中頃の須恵器編年と窯場動向－」『和気後山窯跡群』石川県辰口町教育委員会

望月精司　2005b　「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術－二ツ梨一貫山窯跡の事例検討を中心として－」窯跡研究　創刊号　窯跡研究会

吉井雅勇ほか　1999　『元山窯跡群』新潟県荒川町教育委員会

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

渡邊美穂子ほか　1999　『山ノ下遺跡・坂ノ沢Ｄ遺跡・岩ノ沢遺跡』新発田市教育委員会

渡邊美穂子ほか　2008　『王子山遺跡』新発田市教育委員会

表4　掘立柱建物一覧

＜凡　例＞　：重複から判断した新旧関係「新＞旧」「≠新旧不明」，配置から判断した共存関係「＝共存」。
：掘立柱建物=SB，土師器焼成坑=HSK，土坑=SK，溝＝SD，井戸SE，ピット＝Pと略記。
：全長不明の数値は，残存長を（　）内に表記。

1号掘立柱建物	主なグリッド :Hb4-1・5-1・5-2, Ib1-1・1-2・2-1	重複関係,備考	挿図	写真図版
構　造	（側柱建物）	柵列の可能性もあり，SB1≠SK2(a～d)・SK4a	12	9
規　模	2間×1間以上(5.51m×(2.94)m)			
面　積	(16.2㎡以上)			
主軸方位	(主軸不明，軸N-44°-E)			

ピット番号	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	柱間	m	重複関係,主な出土遺物(掲載No.)	挿図	写真図版
P1	Hb4-1	30	24	17	円形	P1-P2	2.90		12	—
P2	Hb5-1・5-2	39	36	20	円形	P2-P3	2.61	P2≠SK2a,須恵器食膳具・貯蔵具(1・2)	12・32	9
P3	Ib1-2	31	26	23	円形				12	9

2号掘立柱建物	主なグリッド :Ec5-1・5-2・5-3, Fb2-5・3-5・4-5・5-4・5-5, Fc1-1～1-3・2-1～2-4・3-1～3-4・4-1～4-4・5-1～5-3, Gb1-4・1-5, Gc1-1・2-1・2-2	重複関係,備考	挿図	写真図版
構　造	側柱建物	SB2≠HSK8・HSK9・SK16・SK19・SK25a～d・SK27b・c・SK29・SK30d, SB2＞SK30a～c・SK27a	14	10
規　模	2間×3間(3.94m×7.5m)			
	四面廂(廂含:12.8m×6.91m)			
面　積	29.6㎡(廂含:88.5㎡)			
主軸方位	N-1°-E			

ピット番号	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	柱間	m	重複関係,主な出土遺物(掲載No.)	挿図	写真図版
P1	Fc1-1・2	35	35	20	円形	P1-P2	2.73		14・15・26	10
						P1-P13	1.51			
P2	Fc2・3-1	37	34	24	円形	P2-P3	2.35		14	—
						P2-P14	1.50			
P3	Fb4-5, Fc4-1	33	29	24	円形	P3-P4	2.42	柱根(3)有	14・15・55	—
P4	Fb5-5	28	27	44	円形	P4-P5	2.07	柱根(4)有,炭素年代分析No.1～3(12c前葉～中葉)	14・15・55	—
						P4-P16	2.68			
P5	Fc5-1	37	36	43	円形	P5-P17	2.66	柱根(5)有	14・15・55	10
P6	欠番									
P7	Fc4-2	30	27	23	隅丸方形	P7-P8	2.38	柱根(6)有,炭素年代分析No.4～6(12c前葉～中葉)	14・15	10
						P7-P20	1.47			
P8	Fc3-3	21	21	26	円形	P8-P9	2.73	柱根(7)有,炭素年代分析No.7～9(12c前葉～中葉), P8＞SK30b・c	14・15	19
						P8-P21	1.44			
P9	Fc2-3	35	32	27	円形	P9-P10	1.94		14・15	10
						P9-P22	1.39			
P10	Fc2-2	33	30	22	円形	P10-P1	2.00	P10＞SK27a	14・15・26	10
P11	Ec5-2	37	36	16	円形	P11-P12	1.51	柱根有	14・15	10
						P1-P11	2.62			
P12	Ec5-1	37	30	26	楕円形	P12-P13	2.74	柱根有	14・15	—
P13	Fc1-1	32	32	26	円形	P13-P14	2.70		14・15	—
P14	Fb2-5	36	36	25	円形	P2-P14	1.50		14・15	—
P15	Gb1-4	38	35	55	円形	P15-P16	1.46		14・15	10
P16	Gb1-4・5	35	30	64	円形	P16-P17	2.06		14・15・68	10
P17	Gb1-5	32	31	48	円形	P17-P18	1.94	柱根(8)有	14・15	—
P18	Gc2-1	29	(18)	62	(円形)	P18-P19	1.52	柱根(9)有	14・15	11
P19	Gc2-2	34	26	60	楕円形				14・15	—
P20	Fc5-3	32	29	22	楕円形	P20-P21	2.40		14・15	11
P21	Fc4-3・4	30	28	21	円形	P21-P22	2.73	柱根有	14・15	11
P22	Fc2-4	34	32	39	円形			柱根(10)有	14・15	11

3号掘立柱建物	主なグリッド :Gb2-2・2-3・3-2・3-3・3-4・4-3・4-4	重複関係,備考	挿図	写真図版
構 造	側柱建物	SK10＞SB3≠HSK7・SK12・13, SB3＝SD1a・b	17	10
規 模	2間×2間(4.92m×2.45m)			
面 積	12.1㎡			
主軸方位	N-58° -E			

ピット番号	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	柱間	m	重複関係,主な出土遺物(掲載No.)	挿図	写真図版
P1	Gb2-2	32	30	16	円形	P1-P2	2.54		17・23	—
P2	Gb3-2・3	28	24	36	円形	P2-P3	2.32		17	11
P3	Gb4-3	24	22	32	方形	P3-P5	1.38	須恵器食膳具(11・12)	17	11
P4	Gb4-3・4	30	24	33	円形				17	—
P5	Gb4-4	22	19	33	円形	P5-P6	1.10		17	—
P6	Gb4-4	28	26	40	円形	P6-P7	2.28		17	11
P7	Gb3-4	25	24	16	円形	P7-P8	2.60		17	—
P8	Gb1・2-3	36	28	34	楕円形	P8-P9a	1.36		17	11
P9a	Gb2-2	32	29	36	円形	P9a-P1	1.06	SK10＞P9a・b	17・23	—
P9b	Gb2-2	24	22	29	円形				17・23	—

4号掘立柱建物	主なグリッド :Eb3-5・4-5・5-5, Ec3-1・4-1	重複関係,備考	挿図	写真図版
構 造	(側柱建物)	SB4≠SK33a・b・34・35	18	11
規 模	(2間以上×1間以上) (3.1)×(3.0)以上			
面 積	(9.3㎡以上)			
主軸方位	(主軸不明, 軸 N-62° -E)			

ピット番号	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	柱間	m	重複関係,主な出土遺物(掲載No.)	挿図	写真図版
P1	Ec3-1	57	34	26	不整形	P1-P2	1.80		18	11
P2	Ec4-1	28	24	17	円形	P2-P3	1.25		18	11
P3	Ec4-1	29	18	21	楕円形	P3-P4	0.75	P3≠SK34	18	—
P4	Ec4-1	22	(19)	19	(円形)			P4≠SK33b	18	—

5号掘立柱建物	主なグリッド :Ec2-3・2-4・2-5・3-3・3-4	重複関係,備考	挿図	写真図版
構 造	(側柱建物)	SB5≠SK37	18	11
規 模	(2間以上×1間以上) (3.55)×(2.55)m以上			
面 積	(9.1㎡以上)			
主軸方位	(主軸不明, 軸 N-64° -E)			

ピット番号	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	柱間	m	重複関係,主な出土遺物(掲載No.)	挿図	写真図版
P1	Ec2-3	36	32	17	円形	P1-P2a	2.15	P1≠SK37	18	—
						P1-P2b	2.55			
P2a	Ec3-4	57	50	43	隅丸方形	P2a-P3a	1.80		18	11
P2b	Ec3-4	35	34	20	円形	P2b-P3b	1.90		18	—
P3a	Ec2-4・5	42	33	24	楕円形	P3a-P4a	1.70		18	11
P3b	Ec2-5	21	20	10	円形	P3b-P4b	1.40		18	—
P4a	Ec2-5	60	52	32	円形				18	11
P4b	Ec2-5	31	28	14	円形				18	—

表5　土師器焼成坑・土坑・溝・井戸・その他の遺構一覧

＜凡　例＞　：重複から判断した新旧関係「新＞旧」「≠新旧不明」，配置から判断した共存関係「＝共存」。

：掘立柱建物=SB，土師器焼成坑=HSK，土坑=SK，溝＝SD，井戸SE，ピット＝Pと略記。

：全長不明の数値は，残存長を（　）内に表記。

遺構名	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形(壁の立ち上がりと底面形状)	遺構検出面(プラン確認面)	主な出土遺物(遺物No.)	層	新旧・共存関係	備　考	挿図	写真図版
1号土師器焼成坑	Ib4-3・5-3	130	122	3	隅丸台形	-(浅)	Ⅴ層	土師器煮炊具(22)	1		底面ほぼ全面焼土化(1.2㎡/1.4㎡)	19	2
2号土師器焼成坑	Ib5-3・5-4	162	108	4	隅丸方形	-(浅)	Ⅴ層	須恵器食膳具,土師器煮炊具(23～27)	1	HSK2≠SK1b＞SK1a＞SK1c	底面一部焼土化(0.7㎡/1.5㎡)	19	2
3号土師器焼成坑	Ib1-5, Ic1-1	(163)	158	11	不整形(楕円形)	-(浅)	Ⅱa層(Ⅴ層)	土師器煮炊具(28～31)	2	SK3c＞HSK3	底面中央焼土化(1.1㎡/1.9㎡)	21	2・12
4号土師器焼成坑	Ib3-5	127	110	不明	円形	不明	Ⅴ層		焼土のみ	SK14＞HSK4	掘り込み不明,底面焼土化範囲のみ(1.0㎡)	22	2
5号土師器焼成坑	Ic4-1	77	72	30	円形	箱形	Ⅴ層		2		壁面一部・底面中央一部焼土化(0.02㎡/0.4㎡)	22	2
6号土師器焼成坑	Ic2-1・3-1	168	138	6	楕円形？	-(浅)	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具,土錘(35・36)	1	SK7a・b＞HSK6	底面中央焼土化(1.3㎡/1.8㎡)	22	3・12
7号土師器焼成坑	Gb2-3・3-3	80	64	46	方形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)	土師器煮炊具(38)	4	HSK7＞SK12	壁面全周強度に焼土化,底面中央一部焼土化(0.1㎡/0.5㎡)	17・23	3・12
8号土師器焼成坑	Fc1-3・1-4・2-3・2-4	170	124	9	隅丸台形	椀形	Ⅴ層	須恵器食膳具・貯蔵具,黒色土器食前具,土師器煮炊具,土錘(63～83),焼成粘土塊多量	3	P＞HSK8	底面中央焼土化(0.8㎡/1.7㎡)	14・25	3
9号土師器焼成坑	Fc1-2・2-2	92	(76)	-	円形	-(浅)	SK27a底		焼土のみ	SB2-P10≠SK27a＞HSK9	底面中央焼土化(0.2㎡/0.6㎡)	14・26	3・12
1 a号土坑	Ib5-5, Ic5-1, Jb1-5	234	162	44	不整形	袋形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具,土錘(99～140)	9	HSK2≠SK1b＞SK1a＞SK1c	底部オーバーハング(短軸最大長198cm),炭素年代分析No.10・11(7c後半～8c中葉)	28・29	13
b号土坑	Ib5-4・5-5	193	140	26	楕円形	椀形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具,土師器煮炊具(141～143)	3	HSK2≠SK1b＞SK1a＞SK1c			
c号土坑	Ib5-4・5-5, Jb1-5	126	86	(16)	不整形	椀形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器貯蔵具(144)	1	HSK2≠SK1b＞SK1a＞SK1c			

遺構名		グリッド	規模(cm)			平面形	断面形(壁の立ち上がりと底面形状)	遺構検出面(プラン確認面)	主な出土遺物(遺物No.)	層	新旧・共存関係	備考	挿図	写真図版
			長軸	短軸	深さ									
2	a号土坑	Hb4-1・5-1・5-2, Ib1-1	(242)	95	14	不整形	-(浅)	Ⅱa層		1	SB1-P2≠SK2a≠SK2d,SK2a>SK2b	(最大幅124cm)	12・32	14
	b号土坑	Hb5-1	146	(110)	35	円形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具(145・146)	5	SK2a>SK2b,SK2d>SK2b	底面硬化		
	c号土坑	Hb5-1	(44)	(24)	3	不明	-(浅)	Ⅱa層		1	SK2c≠SK2a	範囲不明,底面一部弱く焼土化		
	d号土坑	Hb5-1	62	46	18	楕円形	凸凹	Ⅱa層(Ⅴ層)		2	SK2a≠SK2d>SK2b			
3	a号土坑	Ib2-4・2-5	154	132	8	不整形	凸凹	Ⅱa層	須恵器貯蔵具,土師器煮炊具(32～34)	1			21	2・12
	b号土坑	欠番												
	c号土坑	Ib1-5・2-5	108	84	33	楕円形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)		2	SK3c>HSK3			
4	a号土坑	Ib1-1・1-2・2-1・2-2	296	202	30	不整形	凸凹	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具,土師器煮炊具(147～151),焼成粘土塊多量	3	SK4b≠SK4a>SK4c		12・33	14
	b号土坑	Ib2-1	87	67	23	楕円形	箱形	SK4a底(Ⅳ・Ⅴ層)	須恵器食膳具,土師器煮炊具(152～160)	4	SK4b≠SK4a>SK4c			
	c号土坑	Ib2-1	58	44	(20)	楕円形	椀形	SK4a底(Ⅳ・Ⅴ層)		5	SK4b≠SK4a>SK4c			
5号土坑		Ib2-3・3-3	96	58	7	楕円形	凸凹	Ⅴ層		1			35	14
6号土坑		Ib2-3・2-4	156	103	10	不整形	凸凹	Ⅴ層	土師器煮炊具(161)	3			35	15
7	a号土坑	Ic3-1	104	64	26	不整形	凸凹	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具(37)	3	SK7a>HSK6		22	3・12
	b号土坑	Ic3-1	105	64	28	楕円形	凸凹	Ⅱa層(Ⅴ層)		3	SK7b>HSK6			
8号土坑		Gb5-2, Hb1-1・1-2	184	77	12	不整形	-(浅)	Ⅴ層		2		礫有	35	14
9号土坑		Gb1-1・2-1・2-2・3-1・3-2	372	110	30	長楕円形	箱形	Ⅱa層(Ⅳ・Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具・窯道具,土師器食膳具・煮炊具,土錘(162～311)	3	SK9>SD1a	遺物多量,廃棄・埋納遺構,炭素年代分析No.12(7c後葉～8c後半)・No.13(7c末～9c後半)	36・37	4・10・15
10号土坑		Gb2-2・2-3	136	110	35	隅丸方形	椀形	Ⅴ層	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具,土錘(39～62)	3	SK10>SB3-P9a・b	炭素年代分析No.14(7c末～9c後半)・No.15(7c後葉～8c後半)	17・23	12
11号土坑		Gb5-4・5-5, Hb1-4・1-5	112	94	37	楕円形	椀形	Ⅴ層	須恵器食膳具,土師器煮炊具,土錘,土製品(312～325)	2			44	15
12号土坑		Gb2-2・2-3	136	66	21	不整形	不明	Ⅴ層	焼成粘土塊多量	5	HSK7>SK12	底面一部弱く焼土化	17・23	3・12

遺構名	グリッド	規模(cm)			平面形	断面形(壁の立ち上がりと底面形状)	遺構検出面(プラン確認面)	主な出土遺物(遺物No.)	層	新旧・共存関係	備考	挿図	写真図版
		長軸	短軸	深さ									
13号土坑	Gb3-2・3-3	110	63	36	不整形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具(326～333)	4			17・45	16
14号土坑	Ib3-5	114	102	23	楕円形	凸凹	Ⅴ層		2	SK14＞HSK4		22	2
15号土坑	Hc2-2・2-3	110	(56)	(19)	不整形	凸凹	Ⅴ層	製塩土器(334)	1			45	16
16号土坑	Fc5-2	50	(14)	10	不明	凸凹	Ⅴ層		2			14・46	16
17号土坑	Gb2-5, Gc2-1	229	123	46	不整形	椀形+箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具,土錘(336～376)	8		遺物集中出土,北壁一部オーバーハング	14・47	16・17
19号土坑	Gc1-1・1-2	226	(98)	26	隅丸方形	凸凹	Ⅱa層	土師器煮炊具(335),焼成粘土塊多量	2	SK19≠SB2		14・46	17
21号土坑	Gc1-3・1-4・2-3・2-4	232	(104)	23	楕円形	椀形	Ⅳ・Ⅴ層	須恵器食膳具・貯蔵具,黒色土器食膳具,土師器食膳具・煮炊具,土錘(377～399)	8			51	17
23 a号土坑	Fc5-4・5-5, Gc1-4・1-5	(260)	-	24	不明	椀形？	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具(400～403)	3		平面形・範囲不明	53	18
23 b号土坑	Fc5-4・5-5, Gc1-4・1-5	170	157	27	隅丸方形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)		5	SK23a＞SK23b			
24号土坑	Fc5-4・5-5	105	(64)	25	楕円形	箱形	Ⅱa層(Ⅴ層)	須恵器貯蔵具,土師器煮炊具(404～409)	4	SK23a＞SK24	遺物の集中出土	53	18
25 a号土坑	Fb4-5・5-5, Fc4-1・5-1	(333)	(170)	10	不整形	凸凹	Ⅱa層	須恵器食膳具,土師器仏具・煮炊具(410～419)	1	SK25d≠SK25a＞SK25b＞SK25c	炭化材出土	14・55	18
25 b号土坑	Fc5-1	96	94	33	円形	箱形	Ⅱa層		5	SK25a＞SK25b＞SK25c			
25 c号土坑	Fb4-5・5-5, Fc4-1・5-1	(69)	34	16	不整形	箱形	-		1	SK25a＞SK25b＞SK25c			
25 d号土坑	Fc4-1	(66)	-	7	不明	-(浅)	-		1	SK25a≠SK25d	範囲不明,底面一部弱く焼土化		
27 a号土坑	Fc1-2・1-3・2-2・2-3	175	(144)	31	円形？	凸凹	Ⅴ層	須恵器食膳具(84～91)	6	SK27c＞SK27a, SB2-P10＞SK27a＞HSK9		14・26	12・13
27 b号土坑	Fc2-2	135	98	24	不整形	椀形	Ⅴ層	土師器食膳具(92)	2	SK27c＞SK27b			
27 c号土坑	Fc2-2	73	70	30	円形	箱形	Ⅴ層	土師器食膳具・煮炊具(93～98)	3	SK27c＞SK27a・b			
29号土坑	Fc2-1・3-1	79	70	28	楕円形	椀形	Ⅴ層	須恵器食膳具(420)	2			14・55	19

遺構名		グリッド	規模(cm)			平面形	断面形(壁の立ち上がりと底面形状)	遺構検出面(プラン確認面)	主な出土遺物(遺物No.)	層	新旧・共存関係	備考	挿図	写真図版
			長軸	短軸	深さ									
30	a号土坑	Fc3-2・3-3	(124)	109	20	楕円形	箱形	V層	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具(421～430)	5	SK30b・c＞SK30a≠SK30d		14・56	19
	b号土坑	Fc3-3・4-2・4-3	246	93	26	不整形	椀形	V層	須恵器食膳具・貯蔵具(431～441)	2	SB2-P8＞SK30b＞SK30a＞SK30c,SK30b≠SK30d			
	c号土坑	Fc3-3・4-3	104	64	30	不整形	箱形・袋形	V層		1	SB2-P8＞SK30b＞30c＞SK30a	南・東壁一部オーバーハング		
	d号土坑	Fc3-2・4-2	60	56	11	不整形	不整形	V層	須恵器食膳具,土師器煮炊具(442～444)	1	SK30d≠SK30a・b			
31号土坑		Fc3-5・4-5・5-5,Fd4-1・5-1	228	(219)	54	隅丸方形	不整形	Ⅱa層(Ⅳ層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器食膳具・煮炊具,円筒形土製品(445～486),焼成粘土塊多量	5			58	19
32号土坑		Fc2-4・2-5・3-4・3-5	133	(41)	26	不明	箱形	V層		1			58	19
33	a号土坑	Eb4-5・5-5	(85)	62	18	(楕円形)	凸凹	Ⅲ層	須恵器貯蔵具,羽口(487・488)	2			18・61	20
	b号土坑	Eb4-5	130	(90)	18	(楕円形)	凸凹	Ⅲ層		1	SK33b≠SB4-P4			
34号土坑		Eb4-5,Ec4-1	183	64	18	長楕円形	凸凹	Ⅲ層	須恵器貯蔵具,土師器煮炊具(489・490)	2	SK34≠SB4-P3		18・61	20
35号土坑		Eb3-5	143	(80)	26	(楕円形)	椀形	Ⅲ層	須恵器・黒色土器・土師器食膳具(491～499)	2	SK35＞P		18・61	20
36号土坑		Ec2-2・2-3・3-2・3-3	(382)	208	44	(長楕円形)	箱形	Ⅲ層	須恵器食膳具・貯蔵具・窯道具,黒色土器食膳具・貯蔵具,土師器食膳具・煮炊具,円筒形土製品,製塩土器,土錘(500～626)	12			18・62・63	20
37号土坑		Ec2-3・2-4	157	(86)	14	(楕円形)	-(浅)	Ⅲ層		1			18・62・68	21
1	a号溝	Gb2-2・3-2	(138)	30	8	-	椀形	Ⅱa層(V層)	須恵器食膳具・貯蔵具,土師器煮炊具(13～21)	1	SD1a・SD1b＝SB3,SK9＞SD1a		17・36	10・15
	b号溝	Gb3-2・4-2・4-3	226	32	14	-	椀形	Ⅱa層(V層)		1	SD1a・SD1b＝SB3			
2号溝		Gb1-4・1-5	154	32	21	-	箱形	Ⅲ層			SD2≠SB2		14・68	21
1号井戸		Ic2-2・2-3・3-2・3-3	217	208	(146)	隅丸方形	-	Ⅱa層(V層)	須恵器食膳具,土師器煮炊具(627～635)	3		底未確認,素掘り,掘り形(瓢箪形)138×70cm,炭素年代分析No.16・17(BC5c～6c前半)	68	21

遺構名	グリッド	規模(cm)			平面形	断面形(壁の立ち上がりと底面形状)	遺構検出面(プラン確認面)	主な出土遺物(遺物No.)	層	新旧・共存関係	備　考	挿図	写真図版
		長軸	短軸	深さ									
2号井戸	Hc4-4・4-5・5-4・5-5	208	170	(204)	楕円形	−	V層		7		底未確認，素掘り，掘り形(楕円形)116×90cm	70	21
3号井戸	Gc3-2・4-1・4-2	268	211	(200)	(楕円形)	−	IIa層(IV層)	須恵器食膳具・貯蔵具・窯道具,土師器食膳具・煮炊具(636～661)	7		底未確認，素掘り，掘り形(円形)170cm前後，炭素年代分析No.18(11c中葉～12c初)・No.19(12c前葉～13c初)	71	21
Hb2-3ピット	Hb2-3	15	15	14	円形	−	V層	須恵器食膳具,土師器煮炊具,土錘(662～666)	1		土器片埋納	73	21
Ec3-4 ピット	Ec3-4	−	−	−	−	−	III層	珠洲焼小壺(667)	−		掘り込み未確認，小壺を逆位に埋置	73	21

表６ 遺物観察表

＜凡 例＞

・遺構名の略称：掘立柱建物はSB,土師器焼成坑はHSK,土坑はSK,溝をSD,井戸をSE,ピットをPと略記。
・計測値　：口径や高台径は,基本的には接地面を計測,( )内の数値は,推定地または残存値を示す。
・遺存度　：特に部位を特定していないものは,全体の中の依存度を示す。
・成形・調整　：ロクロ=ロクロナデ, ロクロに続く( )はロクロの回転方向を示す。→は調整の順序,(先)→(後)。
・重焼き　：分類は(春日1989)に準ずる。
・色 調　：外面の標準的色調を表記(表記方法は『新版標準土色帖』(小山・竹原1967)に基づく)
・混入物量　：「大=大量,多=多量,含=含む,少=少量,微=微量」の五段階
・混入物の略称：長=長石,石=石英,安=安山岩,花=花崗岩,褐=褐色粒子,赤=赤色粒子,角=角閃石,粘=粘土粒,チャ=チャート, 流=流紋岩,雲=雲母,金=金雲母,黒=黒雲母,白=白雲母,カ=カバー雲母,炭=炭化粒子,海=海綿骨針,

遺構出土遺物一覧

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
1	Hb5-1	SB1-P2	−	須恵器	甕	−	(7.3)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕 外:平行タタキ(木目有)	硬質(高火度)	−	N4/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多		12	22
2	Hb5-1	SB1-P2	−	須恵器	有台杯C1	11.6	4.5	5.7	39	49	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切→高台貼付→ロクロ(やや雑)	やや不良(瓦質)	C	5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質,精良, 微小な白色粒,雲なし	やや厚手,磨耗顕著(使用痕)	12	22
3	Fb4-5	SB2-P3	1	木材	柱根	残存長(25.5)	長軸11.7	短軸9.3	−		先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	−	13	22
4	Fb5-5	SB2-P4	1	木材	柱根	残存長(41.6)	長軸14.9	短軸12.5	−		先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	炭素年代測定分析試料①～③	13	22
5	Fc5-1	SB2-P5	1	木材	柱根	残存長(27.8)	長軸13.5	短軸12.4	−	−	先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	−	13	22
6	Fc4-2	SB2-P7	1	木材	柱根	残存長(30.2)	長軸14.0	短軸13.3	−	−	先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	炭素年代測定分析試料④～⑥	13	22
7	Fc3-3	SB2-P8	1	木材	柱根	残存長(30.1)	長軸14.7	短軸12.9	−	−	先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	炭素年代測定分析試料⑦～⑨	13	22
8	Gb1-5	SB2-P17	1	木材	柱根	残存長(34.4)	幅9.8	厚さ9.2	−	−	先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形角状, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	−	13	22
9	Gc2-1	SB2-P18	1	木材	柱根	残存長(25.2)	長軸11.0	短軸(6.9)	−	−	先端のみ残存	柾目材,側面ケズリ,断面形楕円, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	−	13	22
10	Fc2-4	SB2-P22	1	木材	柱根	残存長(22.6)	幅11.8	厚さ3.7	−	−	先端のみ残存	柾目材,断面形板状, 下端:斜めケズリ,杭状に加工				−	−	13	22
11	Gb4-3	SB3-P3	−	須恵器	無台杯BⅡ	12.4	3.2	7.0	25	56	1/6	ロクロ, 底:ヘラ切	不良(瓦質)	−	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石・褐多		16	−
12	Gb4-3	SB3-P3	−	須恵器	無台杯BⅡ	11.5	3.0	7.4	26	64	1/5	ロクロ, 底:ヘラ切(右)	良好(酸化炎に近い)	−	7.5YR5/3 にぶい褐	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多		16	22
13	Gb4-2	SD1b	1	須恵器	有台杯AⅡ蓋	13.3	2.5	8.2	19	62	完存(摘み欠)	口:弱い摘み出し 天:ロクロ(右),ヘラ切(右)→板目→ロクロ→板目	良好	A	5Y8/1 灰白	シルト質,φ3.5mm程の長・石多,φ1mm程の褐少	少々焼き歪み (最大口径13.8,最小口径13.3cm),摘みハガレ	16	22
14	Gb4-2 Gb4-3	SD1b	1	須恵器	無台杯AⅠ	12.6	3.6	8.8	29	70	3/4	ロクロ, 底:ヘラ切(右)→板目(ヘラ抜痕?→ナデ	やや不良(瓦質)	C	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良, φ1mm以下の長・石微		16	22
15	Gb4-3	SD1b	1	須恵器	有台杯C2	8.8	5.6	4.7	64	53	3/4	ロクロ, 口:沈線状 底:ヘラ切(右)→ナデ	硬質(高火度焼成)	C	10BG5/1 青灰	粘土質,φ2mm以下の長・石多	薄手	16	22

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
16	Gb2-2	SD1a	1	須恵器	有台杯C2	9.8	5.3	5.6	54	57	完存	口:沈線 外:ロクロ(右)→軽いロクロケズリ 底:ロクロケズリ(右)→高台貼付→ナデ	硬質(高火度焼成)	C	N6/0 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	自然釉,穫あり工具痕あり,やや焼き歪み,高台指押痕(爪形)	16	22
17	Gb4-3	SD1b	1	須恵器	長胴短頸壺	10.0	(15.6)	−	−	−	1/12	外:ロクロ→ヘラケズリ	硬質	−	10YR6/1 褐灰	粘土質,精良,微小な長・石吹出多	釉はがれ(蓋痕)	16	22
18	Gb3-2	SD1a	1	土師器	長胴甕	19.7	(5.2)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 体内・外:カキメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多		16	22
19	Gb4-3	SD1b	1	土師器	小型甕BⅢ	11.8	(9.5)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:カキメ→ロクロ 外:カキメ→ナデケズリ	良好	−	7.5YR8/4浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ	表面剥離,黒斑	16	22
20	Gb3-2	SD1a	1	土師器	鍋	36.4	(10.8)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ→ナナメハケメ→タタキ(当具痕) 外:カキメ→平行タタキメ(木目有)→ナデ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ大		16	22
21	Gb4-3 Gb3-2	SD1b SD1a	1	土師器	長胴甕	20.6	(32.0)	−	−	−	1/2	口:ロクロ 内:同心円当具痕 外:カキメ,平行タタキ(木目有)→タテハケメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ・白多	内面上半劣化顕著	16	22
22	Ib4-3	HSK1	1	土師器	長胴甕	22.6	(13.8)	−	−	−	1/12	口:ロクロ,面取り 内:カキメ→同心円当具痕 外:カキメ→平行タタキメ(木目有)→タテハケメ	良好(硬質)	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多		19	22
23	Ib5-4	HSK2	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	2.9	8.1	23	66	1/3	ロクロ(右) 内:ちぢれ痕明瞭 外:水挽痕明瞭 底:ヘラ切(右)	やや不良	C	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,φ6mm以下の長・石多		19	22
24	Ib5-4	HSK2	1	須恵器	無台杯AⅡ	11.4	3.7	7.6	32	66	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	2.5YR6/2 灰黄	シルト質,精良,微小な長・石・雲		19	23
25	Ib5-4	HSK2	1	土師器	長胴甕	23.1	(4.1)	−	−	−	1/9	ロクロ 口:摘み上げ 内:カキメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・雲多		19	−
26	Ib5-4	HSK2	1	土師器	小型甕BⅡ	(15.2)	(6.0)	7.2	−	−	1/2強	内:カキメ,ユビナデ 外:ハケメ→ロクロヘラナデかケズリ,部分的にヘラケズリミガキ状 底:糸切り(右?)	良好(やや硬質)	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ・褐多		19	23
27	Ib5-4	HSK2	1	土師器	鍋	(25.4)	(10.3)	−	−	−	1/12	口:ロクロ 内:カキメ,ヨコハケメ 外:タテ・ヨコハケメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・金多	口縁内外面に黒斑	19	23
28	Ib1-5	HSK3	1	土師器	長胴甕	19.0	(7.6)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→タテヘラナデ	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲)	薄片分析試料⑫	20	5
29	Ib1-5	HSK3	1	土師器	長胴甕	21.0	(4.9)	−	−	−	1/9	口:ロクロ,面取り 内・外:カキメ	良好(やや硬質)	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ2mm以下長・石・雲		20	−
30	Ib1-5	HSK3	1	土師器	鍋	32.9	(13.3)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ→ハケメ 外:カキメ→ハケメケズリ	良好(やや硬質)	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ多		20	23

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
31	Ib1-5	HSK3	1	土師器	鍋	(38.7)	(7.7)	−	−	−	1/9	口:ロクロ 内:カキメ,一部ハケメ 外:カキメ,(下半調整不明)	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ少		20	23
32	Ib2-4 Ib2-5	SK3a	1	須恵器	横瓶	−	(21.7)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕,ハケメ,ユビナデ 外:平行タタキ→カキメ	硬質 (高火度)	−	N4/1 灰	シルト質,φ6mm以下の長・石多	円盤閉塞	20	23
33	Ib2-5	SK3a	1	土師器	小型甕Ⅱ	15.4	6.1	−	−	−	1/6	ロクロ 口:摘み上げ 外:カキメ	良好	−	5YR6/8 橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ・大	外面剥離顕著	20	23
34	Ib2-4 Ib2-5	SK3a	1	土師器	長胴甕	(15.8)	(5.6)	丸底	−	−	2/3	内:同心円当具痕→ハケメ 外:平行タタキ→ハケメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・白多		20	23
35	Ic2-1	HSK6	1	須恵器	無台杯AⅡ	11.8	3.0	7.6	25	64	2/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(やや瓦質)	C	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少	口縁・内外底面の磨耗顕著(使用痕	22	23
36	Ic3-1	HSK6	1	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	4.0	7.2	(孔径)1.6	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		10YR7/3 にぶい黄橙	φ3mm以下の長・石・カ多	重量:101.7g,孔縁摩耗	22	23
37	Ic3-1	SK7a	−	須恵器	有台杯DⅡ2	12.8	8.5	7.0	66	54	1/6	内:ロクロ 外:ロクロ→ヘラ沈線2条 底:高台貼付→ロクロ	硬質	−	10RY5/2 灰黄褐	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石	金属器模倣	22	23
38	Gb2-3	HSK7	3	土師器	長胴甕	−14.0	(5.4)	丸底	−	−	1/4	内:同心円タタキ→ナナメハケ,ハケ 外:タテハケ→ユビオサエ	普通	−	10YR7/3 にぶい黄橙	φ2mm以下の長・カ		24	23
39	Gb2-2	SK10	3	須恵器	有台杯A蓋?	13.6	3.4	(2.8)	25	−	1/3	外:ロクロ(右) 天:ロクロケズリ(右),擬宝珠形摘貼付→ロクロ	良好	A	N7/0 灰白	シルト質(強粘質),精良,微小な砂粒(白炭),雲なし	外側1/3釉(外天井に,別個体による覆痕),X線回折等分析試料③	24	5
40	Gb2-2	SK10	1 3	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.6	3.2	(2.3)	25	−	完存	外:ロクロ,端部折り返し 天:ヘラ切,擬宝珠形摘貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	A?	5PB5/1 暗青灰	シルト質(砕石状),精良 φ3mm以下の長・石	焼き歪み顕著,外全面降灰,所々降下物付着	24	23
41	Gb2-2	SK10	2	須恵器	有台杯AⅡ	11.4	3.8	6.8	33	60	1/2	口:玉縁状 外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質(砕石状), φ3mm以下の長・石・褐多	焼成時に亀裂,内面・高台磨耗(使用痕)	24	23
42	Gb2-2	SK10	1	須恵器	有台杯AⅡ	12.0	(4.3)	−	−	−	1/8	外:ロクロ	良好	B2?	10YR6/1 褐灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石,吹出有り	厚手,外面降灰,焼台に転用?	24	23
43	Gb2-2	SK10	1	須恵器	有台杯BⅠ	(17.7)	(6.0)	8.4	−	−	1/3	内:底面ユビナデ 外:ロクロ(右),ヘラ切(右) 高台:貼付→ロクロ	良好	−	N7/0 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石多,吹出有り	厚手,重量有	24	23
44	Gb2-2	SK10	2・3	須恵器	折縁杯A	13.0	3.7	6.8	28	52	ほぼ完存	口:摘み上げ強調 外:ロクロ(左?),ヘラ切(右) 高台:貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	C	5B5/1 青灰	シルト質,精良,φ4mm以下の長・石多	薄手,シャープ,歪み顕著,内面降灰,外面部分的に釉薬付?	24	23
45	Gb2-2	SK10	3	須恵器	無台杯AⅡ	11.6	3.4	7.2	29	62	2/3	内:水挽き・ちぢれ痕明瞭 外:ロクロ,ヘラ切(右,抜痕有り)	良好	C	5B7/1 明青灰	シルト質,精良,φ5mm以下の長・石,雲なし	薄手,軽量,内面にロクロ成形時の爪痕	24	23
46	Gb2-2	SK10	3	須恵器	無台杯AⅡ	11.6	3.0	7.6	26	66	1/6	外:ロクロ	良好(灰白色焼成)	C	7.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石,φ5mm大の長,雲なし	薄手,軽量	24	−

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
47	Gb2-2	SK10	3	須恵器	無台杯AII	11.0	3.1	7.2	28	65	3/4	内:水挽き痕明瞭 外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	酸化炎(やや軟質)	C	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,非常に精良,φ2mm以下の長・石若干,雲なし	薄手,軽量	24	23
48	Gb2-2	SK10	3	須恵器	無台杯BII	(11.0)	(2.3)	8.0	−	−	1/2弱	内:平滑,ユビナデ 外:ロクロ,ヘラ切(右)	硬質	−	5B7/1 明青灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多		24	23
49	Gb2-2	SK10	1	須恵器	無台杯BII	11.2	3.1	5.9	28	53	口縁一部欠損	内:ちぢれ痕明瞭 外:ロクロ(右),ヘラ切(右),水挽き痕明瞭	良好	−	5YR5/4 にぶい赤褐	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石),吹出有り	X線回折等分析試料②,内底面別器種?片付着(重焼き痕)	24	5
50	Gb2-2	SK10	3	須恵器	無台杯BII	11.8	3.2	7.5	27	64	5/6	外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	瓦質(軟質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質(強粘性),精良,φ3mm以下の長・石,雲なし		24	23
51	Gb2-3	SK10	3	須恵器	無台杯BII	12.4	3.0	8.4	24	68	完存	外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	10Y7/1 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石多,雲なし		24	23
52	Gb2-2	SK10	−	須恵器	無台杯BII	11.6	2.2	7.4	19	64	1/6	外:ロクロ,ヘラ切	硬質(高火度)	−	10BG5/1 青灰	シルト質(砕石状),精良,微小な長,φ4mm大の流紋岩?	やや厚手,焼き歪み顕著	24	23
53	Gb2-2	SK10	1	須恵器	杯	−	−	−	−	−	破片	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ抜き痕?,ヘラ描き	やや不良(瓦質)	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少	ヘラ記号「メ」	24	23
54	Gb2-2	SK10	3	須恵器	短頸壺蓋	14.0	(4.7)	−	−	−	1/3	外:ロクロケズリ(右)	良好(硬質)	−	N7/0 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	口縁端はがれ痕,厚手,重量有	24	23
55	Gb2-2	SK10	1	須恵器	横瓶	−	−	−	−	−	破片	内:同心円当具痕,ロクロ,水挽き痕明瞭,ユビオサエ 外:平行タタキ(有),カキメ 底:円盤閉塞	硬質	−	7.5YR6/3 にぶい褐	砕石状(ガリガリ),精良,φ2mm以下の長・石少	焼き膨れ,内面気泡,外面降灰	24	23
56	Gb2-2	SK10	1・3	土師器	長胴甕	20.6	(11.4)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,摘み上げ強調,沈線状 内:上カキメ→一部タテハケメ,下カキメ→タテユビナデ 外:カキメ→平行タタキ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		24	23
57	Gb2-2	SK10	3	土師器	小型甕III	9.4	(5.5)	−	−	−	1/5	外:ロクロ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石多,カ,φ2mm程のメノウ・チャ	器面剥離顕著	24	23
58	Gb2-3	SK10	3	土師器	鍋	(33.6)	(6.0)	−	−	−	1/12以下	口:ロクロ, 内・外:カキメ	やや軟質	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質(粉っぽい),2mm以下の長・石・円粒多	器面剥離顕著	24	23
59	Gb2-2	SK10	3	土製品	土錘BII(紡錘形)	4.1	8.2	(孔径)1.8	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		7.5YR8/4浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・雲(亜角粒)多	重量:105.4g 薄片分析試料②,孔縁摩耗	24	5
60	Gb2-3	SK10	3	土師器	土錘BII(紡錘形)	4.2	8.8	(孔径)1.7	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		7.5YR8/4浅黄橙	φ3mm以下の長・石多,雲少	重量:111.8g 表面やや劣化,孔縁摩耗	24	23
61	Gb2-2	SK10	3	土師器	土錘BII(紡錘形)	4.4	8.2	(孔径)1.8	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好	−	7.5YR8/4浅黄橙	φ4mm以下の長・石多,雲少	重量:108.8g 表面やや劣化,粘土片付着,孔縁摩耗	24	23

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
62	Gb2-2	SK10	3	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	4.0	7.2	(孔径)1.8	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕 端:面なし	やや不良		7.5YR7/6橙	φ4mm以下の長・石・チャ・カ多	重量:80.7g 表面劣化,孔縁摩耗	24	23
63	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	有台杯B蓋	13.3	2.6	3.2	−	−	1/5	ロクロ 口:折り返し 天:ヘラ切,擬宝珠形摘貼付→ロクロ	やや不良(瓦質)	−	10YR7/2にぶい黄橙	シルト質,精良,微小な長・石少,φ3mm大の流?	天井部の一部にスス付着	25	24
64	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	有台杯C蓋	11.2	2.3	2.2	−	−	1/6	口:折込み 天:ロクロ→ロクロケズリ擬宝珠形摘貼付→ロクロ	良好	−	7.5Y5/1灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		25	24
65	Fc1-3 Fc2-3	HSK8	1	須恵器	有台杯B蓋	(13.1)	(1.8)	2.8	−	−	3/4	天:ロクロ→ヘラ調整,擬宝珠形摘貼付→ロクロ	良好	−	5Y7/1灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石多		25	24
66	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	有台杯B蓋	13.0	(1.5)	−	−	−	1/5	ロクロ 口:折り返し 外:ロクロ→ケズリ状のヘラ調整?	良好	C	5Y6/1灰	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少		25	−
67	Fc1-3 Fc2-3	HSK8	1	須恵器	有台杯D蓋	11.7	(1.9)	−	−	−	1/6	ロクロ 天:ロクロ→ロクロケズリ(右),ヘラ沈線2条,ヘラ描	良好	C	N6/0灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多	金属器模倣,ヘラ記号「−」?	25	24
68	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	有台杯BⅡ	(12.8)	(4.1)	−	−	−	2/3	ロクロ 底:ヘラ切,高台接合部溝3条	硬質(高火度)	−	N5/0灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多		25	24
69	Fc2-3	HSK8	−	須恵器	有台杯C	(8.7)	(2.4)	−	−	−	3/4	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ描	やや不良(瓦質)	−	2.5Y7/1灰白	シルト質,φ1mm以下の長・石・雲多	ヘラ記号「×」	25	24
70	Fc1-4 Fc2-3	HSK8	1・2	須恵器	無台杯BⅡ	11.1	3.1	7.7	27	69	1/2	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ描	やや不良(瓦質)	−	7.5Y6/1灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	ヘラ記号「×」	25	24
71	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.2	3.6	8.2	32	73	5/6	ロクロ 底:ヘラ切(右),ヘラ描	不良(瓦質)	−	2.5Y8/1灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石,φ5mm程の流?	ヘラ記号「一」	25	24
72	Fc2-3	HSK8	1	須恵器	無台杯BⅡ	(10.7)	(1.9)	8.0	−	−	1/4	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ描	良好	−	2.5YR6/1黄灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	ヘラ記号(判別不能)	25	−
73	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	小型短頸壺	−	(5.4)	−	−	−	1/5	内:ロクロ,カキメ,頸部絞り痕 外:ロクロ→ロクロケズリ(右),肩部ヘラ沈線2条	硬質(高火度)	−	5Y5/1灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		25	24
74	Fc2-3	HSK8	3	須恵器	甕	−	(5.6)	−	−	−	破片	内:ロクロ,同心円当具痕→ハケメ 外:ロクロ→カキメ→平行タタキ(格子状)	硬質(高火度)	−	10YR7/1灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多		25	24
75	Fc1-3	HSK8	1	須恵器	甕	−	(11.1)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕→ハケメ 外:平行タタキ→カキメ,ハケメ	硬質(高火度)	−	N5/0灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		25	24
76	−	HSK8	2	黒色土器	有台杯	(7.8)	(0.9)	6.4	−	−	1/6	ロクロ 内:ミガキ? 高台:ヨコヘラミガキ,畳付シャープ	良好(還元)	−	黒色	シルト質,精良,微小な砂粒少	内外面黒色処理,断面灰色,未使用	25	−
77	Fc2-3	HSK8	1	黒色土器	無台杯	(9.4)	(0.8)	8.0	−	−	1/4〜1/6	ロクロ 外:ヘラ切	良好(還元?)	−	黒色	シルト質,(須恵器の胎土に共通),φ2mm以下の長・石少,雲	内外面黒色処理(内面ほぼ剥離),未使用か	25	24

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
78	Fc2-3	HSK8	1	土師器	小型甕Ⅱ	13.6	(9.7)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内・外:カキメ	良好	−	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	全体に被熱痕(器面ハジケ),内面アク・炭化物付着,外面黒班	25	5
79	Fc2-4	HSK8	1	土師器	長胴甕	18.0	(9.5)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:カキメ,ロクロ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲)	表面劣化,黒斑,薄片分析試料⑬	25	5
80	Fc2-3	HSK8	1	土師器	小型甕BⅡ	14.7	16.8	8.1	114	55	5/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:カキメ→ハケメケズリ 底:ナデ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・金多	外面黒班	25	24
81	Fc1-3	HSK8	1・2	土師器	長胴甕	19.8	(3.6)	−	−	−	1/3	ロクロ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・黒多,海	内外面黒班	25	−
82	Fc2-3	HSK8	1	土師器	鍋	−	(5.9)	−	−	−	破片	口:ロクロ 外:カキメ→ハケメ	良好	−	10YR6/1 灰黄褐	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多	内外面黒班	25	24
83	Fc1-3	HSK8	1	土師器	鍋	−	(7.9)	−	−	−	破片	口:ロクロ 内:カキメ 外:平行タタキ→カキメ	良好	−	10YR2/1 黒	シルト質,φ4mm以下の長・石・金多		25	24
84	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	有台杯AⅠ	12.8	4.1	7.6	32	59	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	A?	7.5GY5/1 オリーブ灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	重量有,口縁・内底面・外面下部・高台摩耗(使用痕顕著)	27	24
85	Fc1-2	SK27a	2	須恵器	有台杯C1	11.3	4.2	5.8	37	51	1/2強	ロクロ 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	C	5B5/1 青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多 炭?含	口縁・内底面・高台摩耗(使用痕)	27	24
86	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	無台杯AⅠ	12.6	3.1	8.0	24	63	4/5	ロクロ 底:ヘラ切	軟質(瓦質)	C	5Y6/2 灰オリーブ	シルト質,精良,微小な長・石少	重量有	27	24
87	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	無台杯AⅠ	12.6	3.3	9.1	26	72	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕有り	やや軟質(瓦質)	C	7.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石若干		27	24
88	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	無台杯AⅡ	12.0	3.6	9.0	30	75	2/3	ロクロ 底:ヘラ切(右)→ 一部ユビナデ	良好	C	5GY6/1 オリーブ灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	黒色粒吹出	27	24
89	Fc2-2	SK27a	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.4	3.1	9.6	25	77	2/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良(瓦質)	−	2.5Y7/3 浅黄	シルト質,φ3mm以下の長・石多		27	24
90	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	3.3	8.4	27	69	1/2	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕有り	良好	−	2.5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質(強粘性),精良,微小な長・石多,雲なし	X線回折等分析試料⑨,内外面に重ね痕	27	−
91	Fc1-2	SK27a	1	須恵器	無台杯BⅠ	(6.4)	(3.0)	8.8	−	−	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良(瓦質)	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,精良,微小な長・石多		27	24
92	Fc2-2	SK27b	1	土師器	無台杯C	8.4	2.6	6.0	31	71	1/3	外:ロクロ,ヘラ切	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少,雲なし	底の一部に炭付着	27	24
93	Fc2-2	SK27c	1・2	土師器	稜椀蓋	22.6	3.5	7.0	15	31	1/6	外:ロクロナデ(非常に丁寧) 口:折り返し 天:ロクロケズリ	良好	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,非常に精良,砂粒をほとんど含まず	No.94とセット,おそらく未使用	27	24
94	Fc2-2 Fc2-2 Fd5-1	SK27a SK27c SK31	1 2 1	土師器	稜椀	19.0	(7.3)	10.0	−	−	1/6	杯部:非常に丁寧なロクロナデ,ロクロケズリ(右)	良好	−	10YR8/1 灰白	シルト質,非常に精良,砂粒をほとんど含まず	No.93とセット,未使用,もう少し径大きいか?	27	24

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
95	Fc2-2	SK27c	2	土師器(須恵器?)	無台杯A	(9.9)	(1.2)	(8.3)	−	−	2/3	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ描き	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・金多	ヘラ記号「×」,底部黒斑	27	25
96	Fc2-2	SK27c	2	土師器	蓋	−	(2.8)	(2.6)	−	−	摘完存	内:ロクロ 外:ヘラ切,宝珠形摘貼付→ロクロ	良好	−	2.5Y7/3 浅黄	シルト質,精良,微小な長少,雲なし,海,※須恵器と別胎土	内面・摘部に黒斑	27	25
97	Fc2-2	SK27c	2・3	土師器	長胴甕	20.8	(7.5)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:ロクロ	やや不良	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・流?・雲多	内面剥離顕著	27	25
98	Fc2-2	SK27c	2	土師器	小型甕AⅢ	11.2	9.3	6.4	83	57	1/3強	ロクロ 口:摘み上げ 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:静止糸切り	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・金・黒・白大	内外面黒斑	27	5
99	Ib5-5	SK1a	1	須恵器	有台杯AⅠ蓋?	13.9	(1.3)	−	−	−	1/6	ロクロ 口:摘み出し 天:ヘラ切	良好(瓦質)	B?	10Y5/1 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	天井内面別個体片付着(重焼き時の高台付着か)	30	25
100	Jb1-5	SK1a	1	須恵器	有台杯AⅡ	11.2	3.7	6.2	33	55	1/2弱	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),細高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	B?	5PB4/1 暗青灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石,雲なし	薄手,軽量,未使用,焼き歪み,外面降灰,高台下部に降物付着	30	25
101	Ib5-5	SK1a	1	須恵器	有台杯AⅡ	11.4	3.4	6.4	30	56	3/4	外:ロクロ(右),ヘラ切(右,抜痕有),細高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	C?	5P4/1 暗紫灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし	非常に薄手,軽量,未使用	30	25
102	Ib5-5	SK1a	5	須恵器	有台杯C1	9.9	4.0	5.5	40	55	5/6	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	C	7.5YR3/3 明褐	粘土質,精良,φ4mm以下の長・石若干	内面降灰,外面重ね痕	30	25
103	Ib5-5	SK1a	1	須恵器	有台杯B蓋	15.7	(2.1)	−	−	−	1/6	ロクロ 天:ヘラ切	やや不良(瓦質)	−	2.5Y7/2 灰黄	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石少		30	25
104	Ib5-5	SK1a・b	4・8・9	須恵器	有台杯BI2	16.9	9.1	11.0	53	65	1/9	外:ロクロ→ロクロケズリ(右) 底:高台貼付→ロクロ	良好	C?	5Y6/1 灰	シルト質,φ1mm以下の長・石少		30	25
105	Ib5-5 Jb1-5 Ib5-5	SK1 SK1a SK1a・b	1	須恵器	折縁杯	(12.0)	(2.7)	10.5	−	−	1/6	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	−	5Y7/1 灰白	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石	足高高台,金属器模倣か?内面・高台摩耗	30	−
106	Ib5-5	SK1a・b	1	須恵器	有台杯D?(台)	—	(2.3)	10.2	−	−	1/4	ロクロ	やや不良(瓦質)	−	2.5Y6/1 黄灰	シルト質,精良,砂微	足高高台,金属器模倣か?	30	25
107	Ib5-5	SK1a	5	須恵器	無台杯AⅡ	11.4	3.4	7.9	29	69	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(酸化炎?)	C	5YR5/2 灰褐	シルト質,微小な長・石多		30	25
108	Ib5-5	SK1a	5	須恵器	無台杯AⅡ	11.8	3.4	8.6	28	72	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多		30	25
109	Ib5-5	SK1a	1	須恵器	無台杯AⅡ	11.9	3.1	8.1	26	68	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良(瓦質)	不明	2.5YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多		30	25
110	Jb1-5	SK1a	4	須恵器	無台杯BⅠ	13.4	3.3	9.3	24	69	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好	C	2.5YR8/2 灰白	シルト質,精良,長・石多少		30	25
111	Ib5-5	SK1a	5	須恵器	無台杯BⅡ	11.7	3.2	7.8	27	66	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(灰白色)	C	2.5YR8/1 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石・多	底面焼成時の亀裂	30	25

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(擬径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
112	Ib5-5	SK1a	4	須恵器	無台杯BⅡ	11.5	3.0	8.5	26	73	1/2弱	ロクロ 底:ヘラ切	良好(酸化炎?)	C	2.5YR5/4 にぶい赤褐	シルト質,φ3mm以下の長・石多		30	25
113	Ib5-5	SK1a	1・4	須恵器	短頸壺蓋	13.0	(4.7)	−	−	−	摘み以外完存	内:ロクロ→ユビナデ,水挽痕明瞭 外:ロクロ→ロクロケズリ(右)	軟質	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石大	天井内面に焼成時の亀裂	30	5
114	Jb1-5 Ib5-5	SK1a	4・5	須恵器	横瓶	12.7	(6.8)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:同心円当具痕→ロクロ(一部カキメ) 外:平行タタキ→カキメ	硬質	−	N5/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	口縁部内面降灰	30	25
115	Ib5-5 Jb1-5	SK1a	1	須恵器	横瓶	−	(14.6)	−	−	−	破片	内:当具痕,ロクロ,円盤閉塞 外:カキメ→平行タタキ→同心円カキメ	硬質	−	2.5Y6/1 黄灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	外面窯滓・無台杯融着	30	25
116	Ib5-5	SK1a	1	須恵器	甕	−	(12.4)	−	−	−	破片	内:当具痕→ナナメハケメ 外:平行タタキ→タテハケメ	硬質	−	2.5Y6/2 灰黄	シルト質,φ5mm以下の長・石多	外面窯滓付着	30	25
117	Jb1-5 Ib5-5 Ib5-5	SK1a SK1a SK1a・b・c	4 4 1	土師器	鉢	29.7	(14.6)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ→ヘラナデ 外:カキメ→タテヘラケズリ	良好	−	7.5RY6/6 橙	シルト質,精良,φ4mm以下の長・石・カ少	酸化炎焼成の須恵器鉢の可能性もあり	30	25
118	Ib5-5	SK1a	1	土師器	長胴甕	19.4	(21.3)	−	−	−	1/5	口:ロクロ 内:カキメ後,同心円具当痕 外:カキメ,タテハケメ	良好	−	7.5RY7/3 にぶい橙	シルト質,φ6mm大の石,φ3mm以下の長・石・カ多		30	25
119	Ib5-5	SK1a	1	土師器	長胴甕	(15.7)	(6.6)	丸底	−	−	1/4	内:ヨコハケメ 外:平行タタキ→ハケメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		30	25
120	Ib5-5	SK1a	1	土師器	長胴甕	19.4	(20.0)	−	−	−	1/3	口:ロクロ 内:ロクロ→タテハケメ,同心円当具痕 外:カキメ→平行タタキ→一部ヘラナデ,タテハケメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多		30	25
121	Ib5-5	SK1a	4	土師器	長胴甕	23.6	(5.9)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:ヨコハケメ 外:平行タタキ(木目有)→ヘラケズリ	良好 (やや硬質)	−	5YR6/6 橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ・炭多		30	25
122	Ib5-5	SK1a	5	土師器	長胴甕	22.7	(5.1)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	やや軟質	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・雲多		30	25
123	Jb1-5	SK1a	4	土師器	長胴甕	18.6	(10.3)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,受け口状 内・外:カキメ	良好	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,精良,φ1mm以下長・石・カ多		30	26
124	Ib5-5	SK1a	6	土師器	長胴甕	19.2	(12.5)	−	−	−	1/3	口:面取り,ロクロ 内:カキメ→タテハケナデ 外:ロクロ,カキメ→タテヘラナデ(ハケメ)	良好	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		30	26
125	Ib5-5	SK1a	5	土師器	小型甕AⅠ	17.2	21.6	9.3	126	54	5/6	口:ロクロ→カキメ,摘み上げ 内:カキメ,ユビナデ 外:カキメ→軽いロクロケズリ 底:ユビナデ,ヘラナデ	良好	−	10YR6/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	外面黒斑	31	26
126	Ib5-5 Jb1-5	SK1a	1	土師器	小型甕AⅡ	(14.8)	(5.4)	7.3	−	−	2/3	内:カキメ→ハケメ 外:ロクロ 底:糸切り(右)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ少		31	26
127	Jb1-5	SK1a	5	土師器	小型甕AⅡ	(13.3)	(4.9)	6.6	−	−	2/3	内:カキメ(螺旋状) 外:ロクロ 底:糸切り(右)→板目(乾燥時)	やや不良	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・炭・カ多		31	26

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
128	Ib5-5	SK1a	4・5	土師器	小型甕A?Ⅱ	12.1	(11.2)	−	−	−	2/3	ロクロ 口:摘み上げ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質精良,φ2mm以下長・石・カ多	下半一部剥離	31	26
129	Ib5-5	SK1a	1	土師器	小型甕BⅠ	17.8	(12.1)	−	−	−	1/3	口:ロクロ 内:カキメ 外:頸ヨコハケメ,下ナナメ・タテハケメ	良好	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ多		31	26
130	Ib5-5	SK1a	1・4・5	土師器	小型甕BⅠ	17.4	19.7	8.6	113	49	1/3強	口:ロクロ,受け口状? 内:カキメ,ユビナデ 外:カキメ→ヘラケズリ 底:未調整(ナデか?)	良好	−	5YR7/6 橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ少		31	26
131	Ib5-5 Jb1-5	SK1a	1・4	土師器	小型甕BⅡ	14.0	18.1	7.2	129	51	4/5	口:ロクロ,内折 内:カキメ→部分的にハケメ 外:ハケメナデ→ヘラケズリ 底:ナデ	良好	−	5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		31	5
132	Jb1-5 Ib5-5	SK1a	4・8・9	土師器	小型甕BⅡ	(15.4)	(13.4)	6.7	−	−	1/3強	内:カキメ,ハケメ 外:ロクロ→タテヘラケズリ 底:ナデ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ多		31	26
133	Ib5-5	SK1a	1	土師器	小型甕BⅡ	(16.8)	(8.2)	8.8	−	−	底部完存	内:カキメ→タテユビナデ 外:タテハケメ→一部タテヨコヘラナデ,ナナメハケメ,底ハケメ	良好	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・褐・カ大	内面成形時の爪痕	31	26
134	Ib5-5	SK1a	1	土師器	小型甕BⅠ	(17.2)	(15.5)	−	−	−	1/4	内:ロクロ→ヨコハケメ→ヨコヘラナデ 外:タテハケメケズリ 底:剥離	良好	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・炭・カ大		31	26
135	Jb1-5 Ib5-5	SK1a	4・8・9	土師器	小型甕BⅡ	15.2	13.2	8.2	87	54	1/3強	口:ロクロ,摘み上げ 内:ロクロ,カキメ 外:カキメ→ハケメケズリ 底:ナデ,ヘラナデ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,金多		31	26
136	Ib5-5	SK1a	5	土師器	小型甕BⅢ	10.8	(9.2)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→タテハケメ,ハケメケズリ	やや不良	−	7.5YR5/2 灰褐	シルト質,φ2mm以下の長・石・褐・雲多	外面全体にスス,一部炭化物付着(吹きこぼれ?)	31	26
137	Jb1-5	SK1a	5	土師器	小型甕Ⅱ	14.2	(8.9)	—	—	−	1/3	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		31	26
138	Ib5-5	SK1a	4	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	3.9	6.7	(孔径)1.9	−	−	一部欠損	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		7.5YR8/4浅黄橙	φ2mm以下の長・石・カ多	重量:83.3g, 一部火色,孔縁摩耗	31	26
139	Jb1-5	SK1a	−	土師器	鍋	—	(5.3)	−	−	−	破片	口:ロクロ 内・外:カキメ	やや軟質	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・チ?・流・雲少		31	26
140	Ib5-5	SK1a	1・4	土師器	鍋	33.4	(3.5)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:カキメ後,一部タテハケメ 外:摩耗の為不明	やや不良	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,やや砂質,φ3mm以下の長・石・黒・大		31	26
141	Ib5-4	SK1b	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.4	3.1	8.3	25	66	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕有	不良	不明	2.5YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石		31	26
142	Ib5-4	SK1b	1	土師器	小型甕BⅢ	10.3	(10.1)	−	−	−	1/2	口:面取り,ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→ヘラケズリ	良好	−	5YR7/6 橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・カ多	下半器面剥離顕著	31	26

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
143	Ib5-4	SK1b	1	土師器	小型甕AⅢ?	(12.8)	(4.8)	8.0	-	-	1/6	内:ハケメかカキメ 外:ロクロ, 底面未調整	良好	-	7.5YR8/4浅黄橙	シルト質精良, φ2mm以下長・石・多,雲少		31	-
144	Ib5-5	SK1c	1	須恵器	長頸瓶?	(16.2)	(7.9)	-	-	-	2/3	内:ロクロ 外:カキメ→ナナメハケケズリ 底:ロクロケズリ→高台貼付	硬質	-	N2/0 黒	シルト質, φ1mm程の長,微少な長多,石少	内面降灰	31	26
145	Hb5-1	SK2b	2	須恵器	無台杯AⅡ	11.8	3.3	7.3	28	62	ほぼ完存	外:ロクロ(右),ヘラ切(右),ヘラ抜痕有り	良好	C	10BG6/1 青灰	シルト質,雲なし	薄手,やや重量有,底部に焼成時の亀裂,未使用	32	26
146	Hb5-1	SK2b	1	須恵器	甕	-	(9.4)	-	-	-	破片	内:同心円当具痕→ハケメ 外:平行タタキ(木目有)	やや不良(瓦質)	-	5Y8/1 灰白	シルト質,精良, φ2mm以下の長・石少		32	26
147	Ib2-1	SK4a	1	須恵器	有台杯D	8.7	(6.0)	-	-	-	1/4	ロクロ	硬質(堅微)	単独	7.5YR5/3 にぶい褐	シルト質, φ2mm以下の長・石多	金属器模倣か?	34	27
148	Ib2-1	SK4a	1・2	須恵器	無台杯AⅡ	12.1	3.0	8.7	24	71	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良	C	5Y6/1 灰	シルト質, φ1mm以下の長多	内面黒色吹出物,外面水挽痕明瞭	34	26
149	Ib1-1	SK4a	2	須恵器	無台杯B?	(11.9)	(3.6)	7.8	-	-	1/6	ロクロ	良好	C	5Y7/1 灰白	シルト質, φ5mm以下の長・石・流多	外面ロクロ目凹凸顕著	34	27
150	Ib2-1	SK4a	1・3	土師器	小型甕Ⅱ	14.0	(8.9)	-	-	-	1/6強	口:ロクロ,受け口状 内:ナナメハケメ→カキメ 外:カキメ	良好	-	7.5YR5/3 にぶい褐	シルト質, φ2mm以下の長・石・カ多, φ5mm大の長少	内面口縁部アク,外面被熱(ススP)	34	27
151	Ib2-1	SK4a	-	土師器	長胴甕	17.6	(3.8)	-	-	-	1/4	ロクロ	良好	-	10YR8/4 浅黄橙	シルト質, φ4mm以下の長・石・流・カ多		34	-
152	Ib2-1	SK4b	2	須恵器	無台杯AⅡ	12.0	3.6	7.8	30	65	完存	ロクロ(右) 口:外反 外:下部に稜 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質, φ3mm以下の長・石多,雲なし	薄手,軽量,未使用	34	27
153	Ib2-1	SK4b	2	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	3.2	8.0	28	69	ほぼ完存	ロクロ(右), 強めのナデ 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良, φ2mm以下の雲なし	薄手,軽量,箱杯状,焼成時の亀裂,未使用	34	27
154	Ib2-1	SK4b	2	土師器	小型甕AⅢ	(10.7)	(3.8)	4.8	-	-	2/3	ロクロ 外:ロクロケズリ 底:糸切り(右)	良好	-	7.5YR6/6 橙	シルト質, φ3mm以下の長・石・カ多		34	27
155	Ib2-1	SK4b	2	土師器	小型甕AⅡ	13.5	15.9	6.8	117	50	1/6	口:ロクロ(右),摘み上げ 内:カキメ 外:カキメ→ロクロケズリ 底:ヘラ切?	良好	-	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,精良, φ2mm以下の長・石・カ多		34	27
156	Ib2-1	SK4b	1	土師器	小型甕AⅡ	14.0	15.7	8.8	112	63	口縁一部欠損	口:ロクロ,摘み上げ状(折返) 内:カキメ,底押し出し? 外:上カキメ,下ロクロケズリ(左),底不明(剥離)	良好	-	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質(強粘性),精良, φ3mm以下の長・石多	丸底気味,粘土粒付着,焼成時の亀裂,重量有	34	27
157	Ib2-1	SK4b	2	土師器	小型甕Ⅱ	14.4	(11.4)	-	-	-	1/5	口:ロクロ,摘み上げ 外:部分的にカキメ	良好	-	5YR6/4 にぶい橙	シルト質,精良, φ2mm以下の長・石・褐多,カ・黒・海	外面黒斑	34	5
158	Ib2-1	SK4b	2	土師器	小型甕BⅢ	9.0	8.7	4.6	97	51	完存	口:ロクロ,やや内折 外:手持ちヘラケズリ(上→下) 底:ナデ	良好	-	7.5YR7/2 明褐灰	シルト質(強粘性), φ3mm以下の長・石多,カ	底面一部剥離,厚手,重量有,製作技法土師器的	34	27

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
159	Ib2-1	SK4a・b	1・2	土師器	小型甕BⅡ	(12.1)	(4.3)	7.7	−	−	1/3	内:ユビナデ 外:タテヘラケズリ 底:一部外周ケズリ	やや硬質	−	7.5YR5/4 にぶい褐	シルト質,φ3mm以下の長・石(角粒)・カ多		34	27
160	Ib2-1	SK4b	2	土師器	鍋	31.4	(10.8)		−	−	1/6	口:ロクロ 内:ヨコハケメ 外:カキメ,下半風化のため調整不明	不良	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・カ多	外面黒斑	34	27
161	Ib2-3	SK6	1・2	土師器	小型甕Ⅱ	13.4	(7.3)	−	−	−	1/8	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:ロクロ,一部カキメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多		35	27
162	Gb3-2 Gb2-1	SK9	1 2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.8	3.0	(2.1)	20	−	1/2弱	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ヘラ切,擬宝珠形摘貼付→ロクロ	硬質焼締	A	5PB7/1 明青灰	シルト質,精良, 微小の長・石	薄作り,外天:1/2～2/3降灰	38	27
163	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.7	4.2	(2.7)	29	−	5/6	ロクロ(右) 口:摘み出し 内:天中央ユビナデ, 天:ロクロケズリ(右),擬宝珠状摘貼付→ロクロ	硬質焼締	A	N6/0 灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長・石多,1～2mmの吹出有	重量有,外面降灰	38	27
164	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.4	3.3	(2.8)	23	−	5/6	ロクロ 口:折り込み 内:水挽き痕明瞭, 天:ケズリ状のロクロ,ボタン状摘貼付→ロクロ	やや瓦質	B2	2.5GY8/1 灰白	シルト質(強粘性),φ2mm以下の長・石多	重量有	38	27
165	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.4	2.5	(3.1)	17	−	1/8	ロクロ(右) 口:折り込み 天:ヘラ切,擬宝珠状摘貼付→ロクロ	瓦質	A	5Y6/2 灰オリーブ	シルト質(強粘性),精良,φ2mm以下の長・石		38	−
166	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.2	3.3	(2.7)	23	−	1/2	ロクロ(右) 口:折り込み 天:ロクロケズリ(右),ボタン状摘貼付→ロクロ	良好焼締	B2?	忘れ	砕石状(ガリガリ),φ4～6mmの長・石多	重量有	38	27
167	Gb2-1 Gb3-2	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.0	3.1	(2.5)	22	−	3/4	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ヘラ切,擬宝珠状摘貼付→ロクロ	瓦質	B	5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	重量有,内天に別個体付着(重焼き痕?)	38	4
168	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.8	(2.3)	−	−	−	ほぼ完存(摘みハガレ)	ロクロ(右), 口:弱い摘み出し, 天:ヘラ切→板目痕,摘接合部ミゾ刻み	瓦質	A?	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ2～3mm長・石・安or砂岩多		38	27
169	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.2	3.1	(2.6)	25	−	5/6	ロクロ(右) 口:折り返し 天:ケズリ状ロクロ→摘貼付擬宝珠状摘貼付→ロクロ 内:ヘラ描	良好焼締	A	N7/0 灰白	砕石状(ガリガリ),精良,φ1～6mmの長・石	薄作り,内面にヘラ記号?「-」	38	27
170	Gb3-2	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.8	2.3	(2.5)	17	−	1/4	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ヘラ切,擬宝珠状摘貼付→ロクロ	硬質焼締	A	N6/0 灰	やや砂質,精良,微小な長多	重量有,外天に降灰	38	27
171	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯AⅡ蓋	13.2	3.0	(2.6)	23	−	2/3	ロクロ(右), 口:摘み出し, 天:ヘラ切→ロクロ,ボタン状摘貼付→ロクロ	軟質(瓦質)	A	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm長・石を多少	内外一部にスス(タール)付着	38	27

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
172	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.4	3.2	(1.8)	26	–	完存	ロクロ(右) 口:引き出し 天:ロクロケズリ(右),ボタン状摘貼付→ロクロ,ヘラ描	良好(焼締)	B	2.5GY8/1 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石多,雲なし,吹出有り	口縁に所々亀裂,欠け,天にヘラ記号「×」	38	27
173	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.8	2.9	(2.3)	23	–	1/2	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ヘラ切,擬宝殊状摘貼付→ロクロ 内:ロクロ→ユビナデ	硬質焼締	A	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石,吹出多	外面降灰,薄作り,焼き歪み	38	–
174	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯CⅡ蓋	12.4	(1.5)	–	–	–	1/4	ロクロ 口:折り込み 天:ロクロケズリ(右), 条線有	瓦質	A	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,微小な砂多,φ3mm以下の長・石		38	–
175	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯B蓋	16.8	(2.8)	–	–	–	1/3	ロクロ 口:折り込み 天:ロクロケズリ(右)	硬質焼締(高火度)	A	N5/0 灰	砕石状(ガリガリ),φ2mm以下の長・石多	外天に降灰	38	–
176	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯C蓋	12.0	1.6	(2.1)	13	–	1/3	ロクロ(右) 天:ロクロケズリ,ボタン状摘み	良好焼締	B	2.5GY7/1 明オリーブ灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長・石多,吹出有り		38	28
177	Gb2-1	SK9	2 1	須恵器	有台杯C蓋	11.2	3.2	(1.4)	29	–	2/3	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ヘラ切(右),擬宝殊状摘み貼付→ロクロ	良好焼締	B1	2.5GY6/1 オリーブ灰	砕石状(ガリガリ),精良,φ3mm以下の長・石	スス付着,薄手	38	28
178	Gb3-2	SK9 SD1a	1・2 1	須恵器	有台杯D蓋	14.6	(2.9)	–	–	–	1/3	ロクロ 外:稜を意識 口:端折り込み 天:ケズリ	硬質(焼締)	不明	5B6/1 青灰	シルト質,非常に精良,φ2mm以下の長・石若干	断面サンド状,薄作り	38	28
179	Gb2-1 Gb1-1 Gb1-2	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ	13.8	3.6	7.8	26	57	1/6	外:ロクロ 底:ヘラ切	硬質(二次焼成)	–	N6/0 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多	薄作り,内底別個体付着,外面窯滓付着,焼台転用(断面釉付着)	38	28
180	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	4.7	8.0	36	61	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(板痕),高台貼付→ロクロ	瓦質(軟質)	不明	7.5Y8/1 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石多	重量有	38	28
181	Gb3-2	SK9	1	須恵器	有台杯AⅠ	13.0	4.3	7.6	33	58	3/4	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	A?	5B5/1 青灰	シルト質,精良(強粘性),φ2mm以下の長	X線回折等分析試料①,焼き歪み時に内面に釉の吹き込み,未使用?	38	4
182	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ	13.0	4.6	8.5	35	65	2/3	ロクロ(左) 底:ヘラ切(左),高台貼付→ロクロ	良好	A?	5B5/1 青灰	かさつく(コンクリート状),φ5mm以下の長・石大,雲なし(岡屋敷の胎土に近い)	未使用?	38	28
183	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅠ	13.0	4.5	8.2	35	63	ほぼ完存	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	A	2.5GY7/1 明オリーブ灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長・石多	重量有	38	28
184	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AⅡ	12.4	4.2	7.8	34	63	1/3	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),板目痕,ヘラ描	やや不良(瓦質)	C?	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,精良,φ4mm以下の長・石少,雲微	外側上部に重焼き痕,外底部に「下」ヘラ記号,高台磨耗,使用か?,薄手,軽量	38	28

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推定径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
185	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AII	12.4	4.1	7.8	33	63	1/2弱	ロクロ(右), 内:底中央指ナデ 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	瓦質	不明	2.5Y8/2 灰白	シルト質,非常に精良, φ1mm長・石・褐		38	28
186	Gb2-2	SK9	2	須恵器	有台杯AII	12.2	4.1	7.7	34	63	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質 (焼締)	A?	5B6/1 青灰	シルト質,φ6mm以下の長・石多	焼き歪み顕著(図面補正済),細高台,使用による磨耗,重量有,厚手	38	28
187	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯AII	12.2	3.7	6.9	30	57	完存	内:水挽き痕明瞭,底中央ユビナデ 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質焼締	A?	10YR5/1 褐灰	砕石状(ガリガリ),φ4mm以下の長・石多	焼き歪み顕著,薄作り,重量有	38	28
188	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯AII	12.0	4.0	7.6	33	63	1/2	ロクロ(右) 内:水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右)	やや瓦質	B?	2.5GY8/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石多少	高台畳付磨耗?,重量有,やや薄作り	38	28
189	Gb2-1 Gb2-2	SK9	1	須恵器	有台杯AII	11.8	3.9	6.2	33	53	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好 (焼締)	不明	5BG6/1 青灰	シルト質,精良, 砂粒ほとんど含まずφ1mmの長・石	椀形に近い器形,細高台,薄作り	38	28
190	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯AII	11.8	3.8	7.0	32	59	1/6	ロクロ 内:水挽き痕明瞭 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	不明	2.5Y7/2 灰黄	砕石状(ガリガリ),精良, φ4mm以下の長・石	薄作り	38	28
191	Gb2-1 Gb3-2 Gb3-2	SK9 SK9 SD1a	1・2 － －	須恵器	有台杯AII	11.2	(3.1)	－	－	－	1/4弱	ロクロ 内:水挽き痕明瞭	良好	不明	7.5YR6/2 灰褐	砕石状(ガリガリ),φ1mm以下の長・石多,φ5mm大の長?	薄作り	38	－
192	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯AII	12.0	(3.6)	－	－	－	2/3	ロクロ(右), 底:ヘラ切	良好焼締	A?	10G6/1 緑灰	砕石状(ガリガリ),φ2mm以下の長・石大	断面サンド,薄作り	38	28
193	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯AII	(11.5)	(3.2)	6.8	－	－	1/2	底:ヘラ切(右)	硬質 (焼締)	A	5Y6/2 灰オリーブ	シルト質,精良,φ1mm以下の長多	外面降灰,薄作り	38	28
194	Gb3-2	SK9	2	須恵器	有台杯C1	11.1	5.0	6.6	45	59	3/4	ロクロ(右) 口:沈線状 底:ヘラ切(右),高台内に爪痕(押痕?),ヘラ描	硬質 (高火度)	単独	10BG5/1 青灰	シルト質(やや砂質),φ3mm以下の長・石多	内底にヘラ記号「－」,内外に降灰	38	28
195	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯C1	10.4	4.8	5.8	46	56	1/4	ロクロ 底:ヘラ切	硬質 (焼締)	C (無蓋)	N6/0 灰	砕石状(ガリガリ),微小な長・石多,吹出有り	薄作り	38	28
196	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯C1	10.8	4.2	6.8	39	63	1/2	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ描	硬質 (高火度)	C	10BG5/1 青灰	シルト質,非常に精良,砂粒微	磨耗顕著(使用痕),内外に降灰,外底ヘラ記号「一」,断面サンド上,薄手,重量有	38	28
197	Gb3-2	SK9	2	須恵器	有台杯C2	9.9	5.5	5.0	56	51	5/6	ロクロ(右) 底;ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質 (焼締)	C or 単独	5B5/1 青灰	シルト質,精良,微小な長・石,吹出し	内外降灰,高台内に剥し時の打欠痕有り,歪み顕著,薄作り	38	28
198	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯C	9.6	(3.0)	－	－	－	1/6	ロクロ	硬質 (焼締)	－	2.5YR5/3 にぶい赤褐	砕石状(ガリガリ),精良, φ1mm以下の長・石多		38	－

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
199	Gb3-2	SK9	1	須恵器	有台杯C	(7.2)	(2.1)	5.0	-	-	底部存	ロクロ(右), 底:ナデツケ,ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質(焼締)	C	2.5Y4/3 にぶい赤褐	砕石状(ガリガリ),精良, φ2mm以下の長	内面降灰,外面に鉄分の多い釉,細高台,薄作り,重量有	38	28
200	Gb2-1 Gb1-1	SK9	2	須恵器	有台杯 BI1	14.8	7.2	9.0	49	61	ほぼ完存	ロクロ(右), 口:沈線, 内:ちぢれしわ痕(硬い生地使用か), 底:ロクロケズリ,高台貼付→ロクロ	良好(焼締)	不明	10Y7/1 灰白	シルト質(強粘性),精良, 砂粒をほとんど含まず	外下部黒斑状,底面に焼成時の亀裂,重量有	38	28
201	Gb2-1	SK9	1	須恵器	有台杯 BI2	16.8	9.1	9.7	54	58	5/6	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	瓦質(軟質)	不明	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	やや足高,薄作り,重量有	38	28
202	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	有台杯 BI	16.0	(5.9)	-	-	-	1/6	ロクロ	瓦質(軟質)	-	2.5Y8/2 灰白	シルト質(強粘性),精良, φ3mm以下の長・石	器面劣化顕著(風化)	38	29
203	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯 DII2	9.4	5.5	-	59	-	1/8	ロクロ 外:竹管沈線2条2段	硬質(焼締)	-	7.5YR6/3 にぶい褐	砕石状(ガリガリ),精良, 微小な長・石若干	断面灰褐	38	29
204	Gb1-1	SK9	2	須恵器	有台杯D	11.4	(2.5)	-	-	-	1/6	ロクロ	瓦質(やや不良)	-	10YR8/1 灰白	シルト質(粘性強),φ 1mm以下の長・石多	稜椀?	38	29
205	Gb3-2	SK9	2	須恵器	有台杯 DI1	16.2	7.8	9.6	48	59	1/6弱	ロクロ 内:若干ちぢれ・細かい凹凸 外:ヘラ沈線2条, 底:内ユビナデ,ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質(焼締)	不明	5B5/1 青灰	砕石状(ガリガリ),φ 1mm以下の長・石多	断面灰褐,薄作り	38	29
206	Gb2-1	SK9	2	須恵器	有台杯 DI2	14.8	9.2	9.0	62	61	完存	内:底ユビナデ 外:ロクロ(右?),一部ロクロヘラ調整・ヘラ痕,ヘラ沈線2条,下半ロクロケズリ(右), 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好(焼締)	AorB	N8/0 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	細高台,焼成時の亀裂,重量有	38	29
207	Gb2-1	SK9	2	須恵器	折縁杯A	14.0	4.4	8.4	31	60	完存	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(焼締)	C	5B6/1 青灰	砕石状?φ6mm以下の長・石多,吹出し多	内底面亀裂(ドーナツ状),細高台,高台畳付に別個体融着(重焼き痕?),2/3降灰,重量有	38	4
208	Gb2-1	SK9	2	須恵器	折縁杯A	14.0	4.4	8.0	31	57	ほぼ完存	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	瓦質(軟質)	不明	2.5Y8/2 灰白	シルト質(強粘性),精良, φ2mm以下の長・石,粘若干	細高台,重量有	38	29
209	Gb3-2	SK9 SD1a	2 1	須恵器	折縁杯A	13.0	(3.3)	-	-	-	1/3	ロクロ 内:ちぢれ	硬質(焼締)	逆位?	5B6/1 青灰	シルト質,精良,φ1mm 以下の長・石若干	外面降灰,薄作り	38	29
210	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AI	13.0	3.3	9.0	25	69	完存	ロクロ(右) 口:玉縁状 内:水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕	瓦質(軟質)	C	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,φ2～6mmの長・石多		39	29
211	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AI	13.0	3.9	8.0	30	62	1/3	ロクロ 底:ヘラ切(右)	瓦質(不良)	-	10YR8/3 浅黄橙	シルト質(強粘性),φ 2mm～1cm長・石多		39	29
212	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AI	12.6	3.9	8.0	31	63	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	瓦質(軟質)	不明	2.5Y8/2 灰白	粘性の強いシルト質,φ 4mm以下の長・石多	重量有	39	29

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推定径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
213	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AII	12.4	3.6	9.0	29	73	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)明瞭	瓦質	C	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多	重量有	39	29
214	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AII	12.4	3.4	7.6	27	61	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),底へこむ,ヘラ抜痕	不良 (瓦質)	C	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,微小な長・石・赤多	重量有,表面剥離顕著	39	29
215	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯AII	12.2	3.5	7.4	29	61	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	C	5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質,精良,微小な長・石多	若干ゆがみ,薄手	39	29
216	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AII	12.2	3.5	8.0	29	66	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(ヘラ抜痕有)	瓦質(やや不良)	C	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,非常に精良,微小長・石・褐多	焼成時亀裂,薄作り	39	29
217	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯AII	12.0	3.6	7.6	30	63	ほぼ完存	外:ロクロ,凹凸明瞭, 底:ヘラ切(右?)	不良 (瓦質)	C	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ2mm長・石,φ1mm赤多	表面剥離顕著	39	29
218	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯AII	12.0	3.4	7.8	28	65	5/6	ロクロ(右) 内:沈線状 底:ヘラ切(右)	不良 (瓦質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多	重量有	39	29
219	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	無台杯AII	11.6	3.1	8.2	27	71	1/6	ロクロ 底:ヘラ切	良好	C	5BG6/1 青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		39	--
220	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯AII	11.0	3.3	7.4	30	67	ほぼ完存	内:水挽き痕明瞭 内底:ヘラ描	瓦質	C	5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	内底面ヘラ記号「-」,やや重量有	39	29
221	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯AII	11.4	3.0	7.2	26	63	1/2弱	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(やや軟質)	C	5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多	薄作り	39	29
222	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	無台杯AII	11.0	3.1	7.0	28	64	1/3	内:水挽き痕明瞭 外:ロクロ(右)	硬質 (焼締)	C	10BG6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),φ2mm以下の長・石多	やや重量有	39	29
223	Gb2-2	SK9	2	須恵器	無台杯BI	13.6	3.6	9.6	26	71	ほぼ完存	ロクロ(右) 内:ちぢれ痕(硬い粘土使用か?) 底:ヘラ切(右)	やや瓦質	C	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ3mm以下の長・石多	薄作り	39	29
224	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BI	13.2	3.5	9.2	27	70	2/3	ロクロ(右) 内:水挽き,ちぢれ痕明瞭 底:ヘラ切(右),凹み有り	良好(やや硬質)	C	2.5GY7/1 明オリーブ灰	砕石状(ガリガリ),精良,φ3mm以下の長	薄手,硬い粘土使用か?	39	29
225	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BI	13.2	3.8	8.0	29	61	ほぼ完存	ロクロ(右), 内:水挽き,ちぢれ痕 底:ヘラ切(右),底ユビナデ,ヘラ痕あり	硬質焼結	C	5B6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),精良,微小長多	硬い粘土使用か?,重量有,焼成時の亀裂	39	29
226	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BI	13.2	3.5	9.4	27	71	完存	ロクロ(右) 内:水挽き痕 底:ヘラ切(右)	瓦質 (軟質)	C	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,φ3mm以下の長・石多	薄手	39	29
227	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BI	13.0	3.1	9.6	24	74	1/2	ロクロ(右), 内:ちぢれ,水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右)	硬質焼結	C	5B6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),精良,φ1mm以下の長・石	薄手,重量有,硬い粘土質用か?	39	29
228	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯BI	13.0	2.9	8.0	22	62	1/3	ロクロ(右) 内:水挽き明瞭 底:ヘラ切(右)	硬質焼締	C	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ1mm以下の長・石多	やや重量有	39	29
229	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BI	12.8	3.4	9.1	27	71	ほぼ完存	ロクロ(右) 内:水挽き,ちぢれ痕明瞭, 底:ヘラ切(右),凹み有り	硬質還元	C	5B6/1 青灰	砕石状粘土質(ガリガリ),φ4～6mmの長・微小の長多	薄手,硬い粘土使用か?,ヘラ記号「×」?	39	29

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
230	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅠ	12.8	3.4	8.6	27	67	ほぼ完存	ロクロ(右) 内:若干ちぢれ 底:ヘラ切(右)→ユビナデ,ヘラ痕有り	瓦質	−	5Y8/1 灰白	シルト質,微小な長・石・多		39	29
231	Gb1-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅠ	12.8	3.4	9.0	27	70	1/3	ロクロ 内:若干ちぢれ 底:ヘラ切	やや軟質	C	10Y7/1 灰白	シルト質(やや粘性強い),精良,微小白色粒,黒色粒の吹出多	薄手	39	29
232	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	3.3	9.0	26	71	口縁一部欠	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)→ユビナデ	良好	C	2.5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質,精良,φ6mm大の長・石・粘	薄作り,重量有,底部に焼成時亀裂	39	30
233	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	3.7	7.6	29	60	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)→ユビナデ	瓦質(軟質)	C	5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石	重量有	39	30
234	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	2.4	9.0	19	71	1/4	底:ヘラ切	硬質(環元),二次焼成受ける	−	5B6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長多	焼台転用,底外周に窯滓付着,外底降灰,焼成時亀裂,重量有	39	30
235	Gb3-2	SK9	1	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	3.7	8.2	29	65	1/2	ロクロ(右) 内:水挽き明瞭 底:ヘラ切(右)	良好,焼締	C	2.5GY7/1 明オリーブ灰	砕石状(ガリガリ),精良,微小な長多	薄作り	39	30
236	Gb3-2	SK9	2	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	3.0	7.8	25	64	1/3	ロクロ(右), 内:口側ちぢれ痕 底:ヘラ切(右)	瓦質	C	2.5Y7/2 灰黄	粘性の強いシルト質,φ2mm以下の長・石多,角?	薄手	39	30
237	Gb3-2	SK9	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	2.9	7.6	24	62	1/6	内:ロクロ目みえず(平ら) 底:ヘラ切	瓦質	−	5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多	薄作り	39	30
238	Gb1-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	3.4	8.4	28	69	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ痕有り	良好	C	2.5GY8/1 灰白	シルト質,微小長大,φ4～7mmの長・石	重量有	39	30
239	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅡ	12.0	3.3	8.0	28	67	3/4	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右)明瞭	瓦質	C	7.5Y7/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・粘多	重量有	39	30
240	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.8	3.5	7.6	30	64	ほぼ完存	ロクロ(右) 内:水挽き,ちぢれ痕 底:ヘラ切(右)	良好(やや瓦質)	C	10Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石,吹出あり	重量有	39	30
241	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台杯BⅡ	11.7	2.8	8.6	24	74	完存	ロクロ(右), 内:ちぢれ痕,水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右)	硬質焼結	−	5B7/1 明青灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長・石多,吹出有	焼き歪み,重量有	39	30
242	Gb3-2	SK9	1・2	須恵器(土師器?)	無台杯BⅡ	11.7	3.2	7.6	27	65	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切	瓦質(酸化焼成気味)	−	2.5Y8/3 淡黄	粘土質,φ3mm以下の長・石・安,磨耗一ト?多	重量有	39	4
243	Gb3-2	SK9	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	2.9	7.6	25	66	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質焼結	C	5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質(ガリガリ),微小の長・石多,吹出多	やや重量有	39	30
244	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.0	3.0	7.4	27	67	1/3	ロクロ(右) 口:外反 内:ちぢれ痕明瞭 底:ヘラ切(右)	硬質焼締	C	5Y8/1 灰白	砕石状(ガリガリ),精良,微小の長・石	硬めの粘土,焼成時の亀裂,薄手	39	30
245	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	杯	10.8	(3.2)	−	−	−	1/3	ロクロ	硬質(焼締)	−	5B6/1 青灰	シルト質,非常に精良,φ2mm以下の長	全面磨耗,特に口縁端顕著(使用痕)	39	30

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
246	Gb2-1	SK9	2	須恵器	無台椀A2	12.4	4.4	8.0	35	65	ほぼ完存	ロクロ(右) 口:端面取り 体:稜を意識? 底:ヘラ切(右),ヘラ痕有	硬質焼締	C	2.5GY8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石	薄作り,金属器模倣か?	39	30
247	Gb2-1	SK9	1	須恵器	無台椀B	12.8	3.2	7.0	25	55	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	瓦質	不明	5Y8/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石・角?	薄作り	39	−
248	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	小型瓶・壺類蓋	(7.8)	−	−	−	−	1/6以下	ロクロ	良好	−	N7/0 灰	シルト質,φ1mm以下の長・石	焼き台の可能性もあり	39	30
249	Gb2-1	SK9	2	須恵器	小型広口瓶	7.2	9.4	6.2	131	86	ほぼ完存	ロクロ 肩:凸帯状 底:ヘラ切→ナデ,高台内側ヘラ痕	硬質(高火度),やや発泡気味	−	N7/0 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多	部分的に窯滓付着,全体的につくりやや雑,口部2/3降物,胴部3/4降灰(褐釉)	39	4
250	Gb2-1	SK9	2	須恵器	小型長頸瓶	−	(7.2)	6.4	−	−	胴部存(口縁欠)	ロクロ(右) 肩:ヘラ沈線2条 下部:ロクロケズリ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質(焼締・高火度)	−	5B5/1 青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	内面釉だまり,外面降灰,高台畳付窯滓付着	39	30
251	Gb2-1	SK9	2	須恵器	長胴短頸壺	13.0	30.2	10.6	232	82	ほぼ完存	ロクロ 内:下カキメ→タテハケメ 外:中カキメ,下ハケメケズリ(上→下) 底:ケズリ	硬質(高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多,φ3mm以下の吹出多	蓋付で焼成,無釉,肩部に降灰(オリーブ灰釉),一部釉吹付け(片側から被熱)	39	4
252	Gb2-1	SK9	2	須恵器	球胴短頸壺	10.0	(14.0)	−	−	−	台部以外完存	ロクロ 口:シャープ 肩:ヘラ沈線,2条2段 外:下ロクロケズリ(右)→ヘラケズリ(ハケメ)タテ→ヘラケズリ(ハケメ)ヨコ	硬質	−	N6/0 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石大,φ1cm大の長	全体の2/3〜3/4降灰,台部取り外し,重量有	40	30
253	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	須恵器	短頸壺蓋	11.7	4.4	(2.4)	−	−	ほぼ完存	ロクロ 口:シャープ 天:2本1組沈線 摘:(擬宝珠),ヘラ痕	硬質焼締	−	5B7/1 明青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多,吹出	一部窯滓付着,薄作り	40	30
254	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	短頸壺蓋	12.4	(2.8)	−	−	81	1/6	ロクロ 内:ちぢれ痕 天:ヘラ切り,ナデ	硬質焼締(高火度)	−	N7/0 灰白	砕石状(ガリガリ),精良,1mm以下の長・石	外天に降灰	40	−
255	Gb2-1	SK9	1	須恵器	横瓶	12.0	(4.2)	−	−	−	1/6〜1/4	ロ:ロクロ 内:同心円当具痕 外:平行タタキ(木目有り)	硬質(高火度)	−	10YR3/1 黒褐	シルト質(砕石状),精良,微小な長・石少	頸部内側に円盤切取時の残りあり,降灰	40	30
256	Gb2-1	SK9	1・2	須恵器	鉢I	28.6	15.5	12.0	54	42	1/6〜1/8	ロ:ロクロ 内:カキメ→タテハケ,底ユビナデ 外:カキメ→ハケメケズリ,底ケズリ	瓦質(軟質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質(強粘性),精良,φ5mm以下の長・石		40	30
257	Gb2-1	SK9	2	須恵器	甕	−	(20.5)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕(右→左,上→下) 外:平行タタキ(木目有)	良好	−	2.5YR6/1 黄灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多	焼成時に亀裂	40	30
258	Gb3-2	SK9	2	須恵器	焼台?	5.6	1.1	5.2	20	93	1/6	ロクロ 底:ロクロ削り?	良好	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ2mm以下の長・石	小型瓶・壺類の蓋,または仏具皿の可能性もあり	40	−

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推定径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
259	Gb2-1	SK9	2	須恵器	壷?瓶?(底)	–	–	–	–	–	破片	–	硬質(二次焼成)	–	5Y3/1 オリーブ褐	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石	窯滓・別個体須恵器付着(窯滓焼き台転用?)	40	30
260	Gb2-1	SK9	2	土師器	無台椀AⅢ1	12.0	4.4	4.8	37	40	2/3	ロクロ 内:ヨコヘラミガキ 外:ヘラミガキ(上 ヨコ,下～底 タテ)	良好	–	7.5Y7/6 橙	シルト質(強粘性),非常に精良,砂粒をほとんど含まず	ミガキ単位不明(平城杯Aか鋺を模倣?)	40	4
261	Gb2-1	SK9	1・2	土師器(須恵器?)	無台椀A2	10.8	3.8	7.2	35	67	1/3	ロクロ 底:ヘラ切(右)	やや不良	不明	7.5YR8/6 浅黄橙	シルト質,精良,砂粒ほとんど含まず	重量有	40	30
262	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	22.8	(36.3)	丸底	–	–	1/6～1/8	口:ロクロ,摘み上げ状 内:カキメ→タテハケメナデ(同心円状当具痕) 外:カキメ,平行タタキ(木目有り)後部分的にハケメナデ	良好	–	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ・金多	外面黒斑	40	30
263	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	19.6	36.3	5.2	185	27	3/4	口:ロクロ,内折摘み上げ状 内:ロクロ板ナデ,半同心円状当て具痕→タテハケメ 外:平行タタキ(部分的にタテヘラナデ)→カキメ 底:タタキダシ丸底化	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・褐,雲少		40	30
264	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	(20.1)	(14.0)	丸底	–	–	底部存	内:タテハケメ,同心円当具痕→ナデ 外:平行タタキ(木目有り)	普通	–	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ	内面黒斑,外底劣化	40	30
265	Gb3-2	SK9	2	土師器	長胴甕	(19.7)	(11.5)	丸底	–	–	底部のみ	内:同心円当具痕→ヨコハケメ→タテハケメナデ 外:平行タタキ(木目あり)→タテハケメ (上→下)	良好	–	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カ	外面黒斑	40	31
266	Gb2-1	SK9	1	土師器	長胴甕	(15.9)	(7.0)	丸底	–	–	1/3	内:ヨコハケメ(木目内側→外側) 外:タテナナメハケメ	良好	–	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・褐・カ多		40	30
267	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	(16.0)	(7.6)	丸底	–	–	2/3	内:ヨコハケメ, 外:ナナメハケメ 底:ヘラナデ・ハケメによる丸底化	良好	–	7.5YR7/3 にぶい橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ多		40	31
268	Gb3-2 Gb3-1	SK9	2	土師器	長胴甕	20.4	(31.5)	丸底	–	–	2/3	口:ロクロ,内折 内:上ロクロ(一部タテハケメ),中ユビオサエ痕有り,下 同心円当具痕→タテハケメ 外:上カキメ(条幅1.5～2mm),下平行タタキ(木目)	良好	–	7YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石多,雲少		41	31
269	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	18.8	(31.2)	丸底	–	–	1/6～1/8	口:ロクロ,端摘み上げ状 内:上ロクロ(部分的にカキメ),下同心円当具痕→タテハケメ 外:上カキメ→中タテヘラナデ,下タタキ→一部タテナナメヘラナデ	–	–	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多		41	31
270	Gb2-1	SK9	1	土師器	長胴甕	19.6	(3.8)	–	–	–	1/6	口:ロクロ 外:カキメ	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・カ多	外面炭化物付着	41	31
271	Gb3-2	SK9	1	土師器	長胴甕	17.4	(2.8)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,摘み上げ状	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ・金大		41	–

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
272	Gb2-1	SK9	1	土師器	小型甕Ⅰ	19.0	(3.2)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,内カキメ	良好	–	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,精良,ねっとり,φ2mm以下の長・石・カ多		41	31
273	Gb2-1	SK9	1	土師器	小型甕Ⅰ	18.6	(7.0)	–	–	–	1/4	口:ロクロ,端折り込み 内・外:カキメ(条幅1.5mm)	良好	–	10YR8/2 灰白	シルト質精良,φ3mm以下の長・石・褐,カ	口縁部内外に黒斑,体部に部分的に火(焼)色	41	31
274	Gb3-2	SK9	2	土師器	長胴甕	22.2	(20.8)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,摘み上げ状 内:ユビオサエ→タテハケメ→カキメ(当具痕) 外:上カキメ,中タタキ→カキメ→タテハケメケズリ	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石大,カ多	薄手	41	31
275	Gb3-2	SK9	2	土師器	長胴甕	21.4	(8.7)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:ロクロ,カキメ 外:カキメ→一部ナデ消し?	良好	–	5YR7/6 橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・カ大		41	31
276	Gb2-1	SK9	2	土師器	長胴甕	19.4	(13.5)	–	–	–	1/3	口:ロクロ,端内折,摘み上げ状 内:ロクロ,ハケメ 外:カキメ→平行タタキ	良好	–	7.5YR7/3 にぶい橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・カ多		41	31
277	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕Ⅰ	19.6	(12.3)	–	–	–	1/3	口:ロクロ　　内:部分的にハケ 外:カキメ(条幅2～3mm)	良好	–	7.5YR8/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・褐多	薄手	41	31
278	Gb2-2	SK9	2	土師器	小型甕AⅡ	15.8	17.4	8.6	110	54	ほぼ完存	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ,ロクロケズリ(左),底ナデ?	良好	–	10YR7/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・円粒多,カ	棒状黒斑,外面風化	42	31
279	Gb2-1	SK9	1・2	土師器	小型甕AⅡ	15.0	16.2	9.2	108	61	4/5	口:ロクロ,摘み上げ状 内:カキメ 外:カキメ→ロクロケズリ(左)　底:調整?	良好	–	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・円粒大,カ多		42	31
280	Gb2-1	SK9	1・2	土師器	小型甕AⅡ	15.0	16.0	7.4	107	49	2/3	口:端内折 外:ロクロ(右),下ロクロケズリ(正右逆左) 底:切り離し方法不明	良好	–	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・円粒多,カ多	二次焼成＋黒斑,被熱の痕跡とスス(燃料の上に置いたためか)	42	4
281	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AⅡ	12.6	13.9	6.1	110	48	ほぼ完存	口:ロクロ,端摘み上げ状 内:カキメ(条線幅やや広) 外:上カキメ(1～2mm条線),中ロクロ(右),下ロクロケズリ(正右逆左) 底:ヘラ切?	良好	–	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・円粒多,カ	外面黒斑	42	31
282	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AⅡ	14.2	14.0	7.0	99	49	1/2	口:ロクロ,面取りシャープ 内:カキメ 外:カキメ,ロクロケズリ(左) 底:切り離し不明	良好(硬質)	–	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ3mm以下の円・亜角粒(長・石・褐),φ1mm大の雲多	胎土薄片分析試料①	42	4
283	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AⅡ	12.8	13.8	6.4	108	50	底部一部欠	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ(2～3mm間隔条痕) 外:カキメ→ロクロケズリ(左)	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質精良,φ1mm以下の長・石・カ	外面火色,底面剥離(故意に打ち欠きか?)	42	31
284	Gb3-2	SK9	2	土師器	小型甕AⅡ	13.6	13.5	6.8	99	50	1/3～1/4	口:ロクロ,内折 内:カキメ(条幅2～3mm) 外:カキメ(条幅2mm程)→ロクロケズリ(正右逆左) 底:切離し不明	良好	–	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多,褐	外面下部に接合痕	42	31

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
285	Gb3-2	SK9	1	土師器	小型甕AII	12.0	11.6	6.8	97	57	3/4	口:ロクロ,端内折 内:カキメ 外:カキメ→ロクロ→オサエ状のユビナデ 底:ユビナデ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石大,カ多	つくりやや粗雑,下半いびつ,外面下半火色,粘土粒貼付け(カマセ材?),底部厚手	42	31
286	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AII	13.0	13.3	6.4	102	49	1/2	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ 底:ロクロ	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の円・亜角粒多(長・石・褐・雲)		42	31
287	Gb2-2 Gb3-2 Gb3-2	SK9 SK9 SD1a	2	土師器	小型甕AII	(13.6)	(11.8)	7.0	−	−	3/4	内:カキメ 外:ロクロ→ロクロケズリ(正右逆左) 底:切離・調整不明	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	外面劣化	42	32
288	Gb3-2	SK9	2	土師器	小型甕AII	(13.8)	(12.1)	7.4	−	−	3/4 (口縁欠)	内・外:カキメ,ロクロ(右), 底:ヘラ切か?	良好	−	7.5YR8/6 浅黄橙	シルト質,φ7mm以下の長・石多,カ大,砂粒の動き明瞭	外面下から2/3スス状の付着物(黒斑?),下半断面肥厚	42	32
289	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AII	(11.7)	(4.6)	7.8	−	−	2/3	外:ロクロ(右)→ヘラ痕有り 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕有り	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ		42	31
290	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕AIII	9.8	9.5	6.0	97	61	ほぼ完存	口:端摘み上げ状 外:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下に長・石多	部分的にスス付着	42	32
291	Gb2-1	SK9	−	土師器	小型甕AIII	8.6	9.7	6.7	113	78	2/3	外:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石		42	32
292	Gb2-1	SK9	1	土師器	小型甕BII	15.0	11.9	7.0	79	47	1/3	口:内折 内:ロクロ 外:カキメ→手持ちケズリ	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・褐多,カ多	口縁内外にスス,外側の体部下に黒斑	42	32
293	Gb2-1	SK9	1	土師器	小型甕BII	13.4	11.3	5.4	84	40	ほぼ完存	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→タテヘラケズリ(上→下) 底:不明(丸底,ヘラ切?)	やや不良	−	7.5Y8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	体部外面が所々風化	42	32
294	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕BIII	10.8	10.0	6.3	93	58	2/3	外:ロクロ→ハケメナデ→ヘラケズリ(ナナメ) 底:ヘラナデ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質(強粘性),φ4mm以下の長・石・円粒大,カ	厚手,稚拙,鈍重な作り	42	32
295	Gb2-1	SK9	2	土師器	小型甕BIII	11.0	(7.4)	−	−	−	1/3	内:下接合痕 外:ロクロ→ヘラケズリ?	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石大	内面に黒斑,外面体部中位の器面剥離	42	32
296	Gb2-2 Gb3-2	SK9	1	土師器	小型甕II	13.0	(12.7)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,端面取り 内:カキメ(幅広の条線)→ロクロ 外:カキメ(細条線)→ロクロ	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質(粘性強),粉っぽい,φ4mm以下の長・石多,カ大		42	32
297	Gb2-1	SK9	2・5	土師器	小型甕II	14.2	(11.8)	−	−	−	1/4〜1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:上板状の痕跡 外:カキメ(1条1〜1.5mm)	良好	−	7.5YR8/6 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・円粒・カ多	外面劣化	42	32
298	Gb3-2	SK9	1	土師器	小型甕III	11.4	(4.0)	−	−	−	1/4弱	口:面取り 外:ロクロ	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ1mm以下の長・石多,カ	内外火色	42	32
299	Gb2-1	SK9	2	土師器	鍋	27.8	(9.6)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,付加状 外:カキメ(条幅2mm)→タタキ(木目有り)	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・カ・チャ多	内面風化のため調整不明	43	32

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
300	Gb2-1	SK9	1・2	土師器	鍋	27.0	(8.6)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,内折摘み上げ 内:カキメ,タテハケメ→カキメ 外:カキメ→ヘラナデ?	良好	−	7.5YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・褐・雲多		43	32
301	Gb3-2	SK9	2	土師器	鍋	40.0	16.0	丸底	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ状 内:カキメ,同心円当具痕→タテハケメ 外:カキメ,タテハケメ,平行タタキ(木目有り)→ハケメ	良好	−	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ多,赤若干	内側に一部ススト付着(置火によるものか),外底に粘土粒貼付痕2ヶ所(安定させる為のカマセ材か?)	43	32
302	Gb2-1	SK9	2	土師器	鍋	37.4	15.9	4.0	43	11	1/6	口:ロクロ 内:下ヨコハケメ 外:カキメ→平行タタキ(木目有り)→ハケメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石多,雲少	内面上部,器面荒れのため調整不明,外底に黒斑	43	32
303	Gb2-1	SK9	2	土師器	鍋	36.7	16.3	丸底	−	−	ほぼ完存	口:ロクロ,面取り 内:カキメ→ヨコハケメ→同心円当具痕→タテハケメ 外:カキメ→平行タタキ(木目痕有)→ヨコ・ナナメハケメ→タテヘラケズリ	やや不良	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多	外面黒斑,一部表面風化著しい,外底に粘土瘤付着(焼成時のカマセ材か?)	43	32
304	Gb2-1	SK9	2	土師器	土錘AⅠ(円筒形)	5.5	11.6	(孔径)1.5〜2.3	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,筋状圧痕 端:指頭圧痕,粘土絞りジワ	良好	−	2.5Y7/3浅黄	粘土質,精良,微小な長・石・カ	重量:378.5g 側:黒斑,未使用	43	32
305	Gb3-2	SK9	2	土師器	土錘AⅠ(円筒形)	5.9	11.2	(孔径)1.8	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕 端:指頭圧痕,粘土絞りジワ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	粘土質,精良,微小な長・石・カ	重量:388.0g 未使用	43	32
306	Gb2-1	SK9	2	土師器	土錘AⅠ(円筒形)	5.5	10.2	(孔径)1.7	−	−		側:指・掌握り圧痕 端:指頭圧痕	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲微	側:火色,反対面黒斑, 重量:324.9g 未使用か?	43	33
307	Gb2-1	SK9	2	土師器	土錘AⅠ(円筒形)	5.2	10.3	(孔径)1.4	−	−	一部欠	側:指・掌握り圧痕,筋状圧痕 端:指頭圧痕	良好	−	10YR7/4にぶい黄橙	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石・金	重量:292.0g 未使用	43	33
308	Gb2-1 Gb3-1	SK9	1	土師器	土錘AⅠ(円筒形)	5.2	9.0	(孔径)1.3	−	−	一部欠	側:指・掌握り圧痕 端:指頭圧痕	良好	−	10YR8/2 灰白	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石・金	重量:231.3g 未使用	43	33
309	Gb1-1 Gb2-1	SK9	2	土師器	土錘BⅠ(紡錘形)	5.4	9.4	(孔径)1.6	−	−	一部剥離	側:指・掌握り圧痕 端:指頭圧痕,粘土絞りジワ	良好	−	2.5Y7/3浅黄	粘土質,精良,微小な長・金・海	重量:239.0g 黒斑,未使用	43	33
310	Gb2-2	SK9	2	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	4.3	7.1	(孔径)1.8	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		7.5YR8/4浅黄橙	φ5mm以下の長・石大,雲少	重量:93.0g 表面やや劣化,孔縁摩耗	43	33
311	Gb3-2	SK9	1	土師器	甕・鍋類(把手)	−	−	−	−	−	破片	−	良好	−	7.5YR8/2灰白	粘土質,精良,砂粒ほとんど無,黒少	中空状	43	33
312	Gb5-5	SK11	1	須恵器	有台杯A蓋	(11.3)	(2.6)	2.3	−	−	1/2	ロクロ 天:ヘラ切(右?),宝珠形摘貼付→ロクロ	硬質	−	5Y5/1 灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少	吹出有,外面焼き膨れ	44	33
313	Gb5-5	SK11	1	須恵器	有台杯DⅠ蓋	15.2	(2.6)	−	−	−	1/6	ロクロ 口:折り返し 天:ロクロケズリ(右),ケズリ出し凸帯	硬質(高火度)	A?	2.5GY6/1 オリーブ灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石多	重ね痕?表裏対応,端部に細い凹凸明瞭,未使用	44	5
314	Gb5-5	SK11	1	須恵器	有台杯AⅡ	12.1	3.5	6.0	28	49	完存	ロクロ 外: 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	C?	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ2mm以下の長多	外面重ね痕,高台歪み,底面焼成時の亀裂	44	33
315	Gb5-5	SK11	1	須恵器	有台杯AⅡ	12.0	4.0	7.0	33	58	1/3	ロクロ 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質	−	5Y3/1 オリーブ黒	シルト質,φ2mm以下の長・石多	外面のみ釉,倒立で焼成か?	44	33

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
316	Hb1-5	SK11	2	須恵器	無台杯AⅠ	12.5	3.1	9.2	24	73	1/4	ロクロ 底:ヘラ切	不良	−	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石		44	33
317	Gb5-5	SK11	1	須恵器	無台杯AⅡ	11.6	3.4	9.0	29	77	1/2強	ロクロ 底:ヘラ切(右)	やや不良	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多		44	33
318	Gb5-4	SK11	1	須恵器	無台杯AⅡ	12.0	3.6	8.8	30	73	4/5	ロクロ 底:ヘラ切(右), ヘラ抜痕有	瓦質	C	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,微小な長少		44	33
319	Gb5-5	SK11	1	土師器	長胴甕	21.4	(10.9)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,面取り 内:ハケメナデ,ヨコハケメ 外:平行タタキ→タテヘラケズリ(上→下)	良好	−	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		44	33
320	Gb5-4	SK11	1	土師器	長胴甕	20.4	(6.8)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,受け口状 内・外:カキメ	良好	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・褐・カ少	内面黒斑	44	33
321	Gb5-5	SK11	1	土師器	鍋	19.8	10.2	3.7	−	−	1/3弱	口:ロクロ 内:当具痕(同心円?) 外:平行タタキ→ヨコハケメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・褐・カ多	底部外面黒斑	44	33
322	Gb5-5 Hb1-5	SK11	1	土師器	小型甕Ⅱ	14.2	(9.9)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,面取り 内:カキメ 外:ロクロ→部分的にカキメ	良好	−	7.5YR5/3 にぶい褐	シルト質,φ3mm以下の長・石多,雲少	内外面黒斑	44	5
323	Hb1-5 Gb5-5	SK11	2	土師器	小型甕BⅡ	14.2	(10.1)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,ナデ,付加状,端部摘み潰し 内:カキメ 外:カキメ→ハケメケズリ	良好	−	10YR5/2 灰黄褐	シルト質,精良,微少な長・石・雲少	内面黒斑,外面黒斑・火色	44	33
324	Gb5-4	SK11	1	土師器	土錘BⅢ(紡錘形)	1.6	4.3	(孔径)0.5	−	−	完存	側:指握り圧痕 端:面なし	良好		10YR3/2黒褐	φ1mm以下の長・石・金多	重量:10.1g	44	33
325	Hb1-5	SK11	1	土師器	土製品	2.1	4.1	(孔径)0.7	−	−	完存	三角錐形 側:指ナデ 端:指ナデ	良好		10YR6/2 灰黄褐	φ3mm以下の長・石・カ多	重量:12.2g	44	33
326	Gb3-3	SK13	−	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.7	(2.2)	−	−	−	1/4	内:ロクロ 外:ヘラ切,ロクロ	硬質	A?	2.5Y5/1 黄灰	シルト質,精良,微少な長・石多	内面吹出有,外面降灰	45	33
327	Gb3-3	SK13	4	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	3.6	6.8	27	51	3/4	外:ロクロ,沈線? 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質	C	N6/0 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	口縁端・内底面・高台摩耗(使用痕顕著)	45	33
328	Gb3-3	SK13	4	須恵器	有台杯C2	9.6	(4.9)	−	−	−	2/3	内・外:ロクロ(右) 底:ヘラ切,ヘラ抜痕	硬質	C	7.5Y5/1 灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多	口縁端摩耗?,高台打ち欠き調整	45	33
329	Gb3-3	SK13	4	須恵器	無台杯BⅡ	10.8	3.1	8.0	28	74	1/6	内:ロクロ 外:ロクロ 底:ヘラ切	良好	C	7.5Y6/1 灰	シルト質,微小な長多,φ3mm大の長少		45	33
330	Gb3-3	SK13	4	須恵器	短頸壺蓋	10.4	4.4	(1.9)	−	−	完存	外:ロクロ,ヘラ切,擬宝珠摘貼付→ロクロ	硬質(高火度)	−	10YR6/1 褐灰	シルト質,φ3mm以下の長・石大	外側釉,焼成時亀裂,未使用	45	33
331	Gb3-3	SK13	3	土師器	長胴甕	−	(16.4)	−	−	−	1/4～1/6	内:タテハケメ,同心円当具痕→ヨコハケメ 外:カキメ→平行タタキ(木目有)	良好	−	5YR6/6 橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ・金多		45	33
332	Gb3-3	SK13	2	土師器	長胴甕	18.8	(9.9)	−	−	−	1/8	ロクロ 内:ロクロ→当具痕,カキメ 外:カキメ→タタキ(木目有)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ多		45	33

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
333	Gb3-3	SK13	4	土師器	長胴甕	20.2	(6.0)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ1mm程の長・石・雲多,φ5mm大の石・粘		45	33
334	Hc1-2 Hc2-2	SK15	1 I	土師器	製塩土器	42.1	(27.9)	−	−	−	1/4	内外:輪積痕,ユビオサエ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・カ大	内外面わずかに黒斑	45	5
335	Gc1-2	SK19	2	土師器	小型甕Ⅲ	12.0	(6.5)	−	−	−	1/6	ちぢれ痕有 口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ(条線不明瞭) 外:カキメ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質(粘性強),φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲),φ3mm大の金・白	薄片分析試料⑤	46	5
336	Gb2-5	SK17	4	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.4	(2.6)	−	−	−	1/6	ロクロ 天:ロクロケズリ	良好	B?	5Y6/1 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	重焼き痕,内面に炭化物?斑状にうっすら付着	48	33
337	Gc2-1	SK17	4 1・4・6	須恵器	有台杯DⅠ蓋	16.8	(2.9)	−	−	−	−	ロクロ 天:ロクロケズリ	良好(やや軟質)	A	7.5Y6/6橙	シルト質,φ6mm以下の長・英多	金属器模倣	48	33
338	Gc2-1	SK17	6	須恵器	有台杯AⅠ	12.9	4.3	7.0	33	54	5/6	ロクロ(右) 外:くぼみ(折縁を意識?) 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	瓦質	不明	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石大		48	34
339	Gb2-5	SK17	5a 5	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	(3.1)	−	−	−	1/8	ロクロ 外:高台はがれ痕	不良(瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少		48	34
340	Gc2-1	SK17	3	須恵器	有台杯BⅠ	15.0	(6.7)	−	−	−	ほぼ完存	内:ロクロ,ヘラナデ 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:高台貼付→指押え(爪痕あり)→ロクロ・指ナデ	硬質(高火度)	C	外:10YR5/1 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石大	内面降灰,高台欠損(意図的に打ち抜きか?),底面に焼成時の亀裂	48	34
341	Gc2-1	SK17	5a	須恵器	有台杯C1	9.8	(4.2)	−	−	−	1/3	ロクロ 外:高台貼付→ロクロ	不良(生焼け)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,微小な長微	器面劣化顕著,底部切り離し痕不明	48	34
342	Gb2-5	SK17	6 4・5	須恵器	有台杯DⅡ2	12.2	8.0	7.6	66	62	1/3	内:ちぢれ痕 外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	硬質堅微	−	N5/0 灰	シルト質(強粘性),φ4mm以下の円・亜角粒多(長・石),微小な吹出有り	外面2/3釉,無蓋,X線回折等分析試料⑥	48	5
343	Gc2-1	SK17	4〜6	須恵器	有台杯C	(7.2)	(1.6)	5.4	−	−	底部	内:ロクロ(右) 外:高台貼付→ロクロ,ヘラ描	良好	−	5Y6/4 にぶい橙	粘土質,φ5mm以下の長・石・花少	重量有,高台内ヘラ記号「大」,底面に焼成時の亀裂	48	34
344	Gc2-1	SK17	6	須恵器	無台杯AⅡ	12.2	3.2	8.4	26	69	2/3	内:ちぢれ痕, 外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	やや軟質	−	5GY7/1 明オリーブ灰	シルト質(粘性強),φ2mm以下の長・石多,φ4mm大の石・海?	X線回折等分析試料⑤	48	5
345	Gc2-1 Gc2-1	SK17	5a 1・4・6	須恵器	無台杯A	(10.3)	(2.0)	6.8	−	−	全周(口縁欠)	ロクロ 底:ヘラ切	不良(瓦質)	−	2.5Y4/1 黄灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		48	−
346	Gc2-1	SK17	6	須恵器	無台杯BⅠ	13.0	3.1	8.7	24	67	3/4	外:ロクロ,ヘラ切(右)	軟質(瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質(粘性強),φ3mm以下の長・石・水晶多,微小な雲多	外面上部炭化,X線回折等分析試料④	48	5
347	Gc2-1	SK17	6	須恵器	無台杯BⅠ	13.0	3.7	9.2	28	71	2/3	外:ロクロ(右),ヘラ切(右)	不良(生焼け)	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ6mm以下の長・石	焼成不良のため内面劣化顕著	48	34

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
348	Gc2-1	SK17	6	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	3.5	9.0	29	74	1/3	外:ロクロ,ヘラ切(右)	不良(生焼け)	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,精良,微小な長・石少	重量有,焼成不良のため内面劣化顕著	48	34
349	Gc2-1	SK17	1〜4・6	須恵器	鉢Ⅰ	33.6	(7.8)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,面取り 内:カキメ 外:カキメ→ナナメハケメ	不良(瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石少,微小な雲		48	34
350	Gb2-5	SK17	4	須恵器	鉢Ⅰ	26.9	12.8	14.2	−	−	1/4	口:ロクロ 内:ロクロ→カキメ 外:カキメ→ナナメヘラケズリ(ハケメケズリ)→把手貼付→ユビナデ 底:ナデ→外周ヘラケズリ	良好(やや瓦質)	−	2.5Y6/2 灰黄	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	把手付	48	34
351	Gc2-1	SK17	6	須恵器	鉢	—	(7.6)	−	−	−	破片	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ,把手貼付→ナデ	良好(やや瓦質)	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,精良,φ3mm以下の長等微	把手付	48	34
352	Gb2-5 Gc2-1	SK17	1〜4・5・5a	須恵器	横瓶	—	(9.9)	−	−	−	破片	内:カキメ→当具痕,円盤閉塞 外:同心円状カキメ→平行タタキ	良好(硬質)	−	2.5Y5/1 黄灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		48	34
353	Gc2-1 Gb2-5	SK17	5・5a・6	土師器	長胴甕	22.0	(31.1)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ,同心円当具痕(上→下か) 外:カキメ,平行タタキ(木目有)→タテハケメナデ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多,海?		48	34
354	Gb2-5	SK17	5a	土師器	長胴甕	18.6	(31.7)	丸底	−	−	4/5	口:ロクロ→カキメ 内:カキメ,同心円当具痕 外:カキメ,平行タタキ	やや不良	−	10YR7/6 明黄褐	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・黒・カ大		48	34
355	Gc2-1	SK17	6	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	3.8	7.4	(孔径)1.9	−	−	完存	側:指・掌握り圧痕,筋状圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好		10YR7/4にぶい黄橙	φ3mm以下の長・石大,雲少	重量:84.4g 一部火色,表面ややや劣化,孔縁摩耗	48	34
356	Gc2-1	SK17	6	土師器	長胴甕	(12.3)	(9.1)	丸底	−	−	1/4	内・外:ハケメ	良好(やや硬質)	−	7.5YR5/2 灰褐	シルト質精良,φ4mm以下長・石・雲少		48	34
357	Gc2-1	SK17	4・5・6	土師器	長胴甕	(20.0)	(11.0)	尖底	−	−	3/4	内:ヨコハケメ(左→右)→タテハケメ,ヨコハケメ 外:タテハケメ(上→下)	良好	−	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石・花・雲),φ1mm程の赤,φ6mm大の石	外面に黒斑,外底ハケメによる丸底化か,薄片分析試料③	48	5
358	Gb2-5	SK17	5a	土師器	長胴甕	21.6	(19.0)	−	−	−	1/3	口:ロクロ 内:ロクロ→カキメ→当具痕(同心円)→タテハケメ 外:カキメ→平行タタキ→タテハケメ	良好	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・カを含む	重量有	49	34
359	Gc2-1	SK17	1・4・6	土師器	長胴甕	20.4	(19.8)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ,タテハケメ(カキメと同一原体),ユビナデ 外:ロクロ→カキメ→タテハケメケズリ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ多	外面スス付着	49	34
360	Gb2-5	SK17	5a	土師器	長胴甕	19.7	(10.4)	−	−	−	1/9	口:平行タタキ→ロクロ 内:カキメ 外:平行タタキ→カキメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石多		49	34
361	Gb2-5	SK17	4・5	土師器	長胴甕	(20.4)	(15.1)	丸底	−	−	1/4	内:同心円当具痕→タテハケメ 外:平行タタキ(木目有)	良好(やや硬質)	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下長・石・黒・金・チ大		49	34

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
362	Gc2-5	SK17	5a	土師器	長胴甕	18.9	(12.9)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,付加状 内:カキメ,ロクロ→ナナメタテハケメ 外:カキメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・カ多		49	34
363	Gb2-5	SK17	5a	土師器	長胴甕	20.0	(10.0)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	7.5YR7/2 明褐灰	シルト質精良,φ2mm以下長・石・カ多	内外面被熱,火色有	49	5
364	Gb2-5	SK17	5a・6	土師器	長胴甕	19.9	(10.9)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,付加状 内:カキメ,ハケメ 外:カキメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多,φ2mm大の鉄石英		49	34
365	Gb2-5	SK17	−	土師器	長胴甕	20.8	(9.6)	−	−	−	1/4	口:ロクロ,摘み上げ 内:板ナデ 外:カキメ(条幅2mm)	良好	−	5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ4mm以下の長・石多,褐・カ		49	34
366	Gb2-5	SK17	4・6	土師器	小型甕Ⅰ	18.8	(6.9)	−	−	−	1/2	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多		49	34
367	Gc2-1	SK17	4・5・5a	土師器	小型甕Ⅰ	18.0	(8.0)	−	−	−	1/5	口:ロクロ,付加状 内・外:カキメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・褐多		49	35
368	Gc2-1	SK17	5a	土師器	小型甕Ⅰ	17.4	(7.5)	−	−	−	1/4	口:面取りに近い摘み上げ 内:カキメ 外:ロクロ	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ2mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲),φ5mm大の砂岩?長・石	器面やや劣化,薄片分析試料④	49	5
369	Gb2-5	SK17	4・5・5a	土師器	小型甕AⅠ	17.9	20.3	8.8	113	49	1/2強	口:ロクロ,摘み上げ 内:ロクロ→カキメ(右) 外:カキメ,ロクロ→ロクロケズリ 底:切り離し不明,板痕有	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	内外面黒斑	49	35
370	Gb2-5 Fc1-2	SK17 SK27a	5・5a・61	土師器	小型甕AⅡ	14.1	16.0	6.9	113	49	5/6	口:ロクロ(右) 内:ロクロ→ヘラ調整(カキメ?) 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:静止糸切り(右)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・カ多	外面スス・吹きこぼれ,胎土にφ2mm大の炭化粒有?	49	35
371	Gb2-5 Gc2-1	SK17	1・4・5・5a・6	土師器	小型甕AⅡ	14.1	16.2	8.4	115	60	5/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:ロクロ→ヘラによるロクロ調整 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:静止糸切り	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石,微小な雲多,海	口縁内面アク,外面スス・吹きこぼれ,黒斑	49	35
372	Gb2-5 Gc2-1	SK17	1・4・5	土師器	小型甕AⅡ	13.0	13.5	6.8	104	52	5/6	ロクロ 口:摘み上げ 底:板痕,糸切り(右)	良好	−	10YR6/4 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ大		49	35
373	Gb2-5	SK17	5a	土師器	小型甕BⅠ	(20.3)	(20.8)	11.2	−	−	1/4	内:カキメ→ユビナデ 外:カキメ→ヘラナデ 底:切り離し不明	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・カ多	外面下端～底部黒斑	49	35
374	Gc2-1 Gb2-5	SK17	5a	土師器	小型甕Ⅱ	13.4	(10.4)	−	−	−	1/3	ロクロ 口:摘み上げ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多,φ5mm～1cmの花少		50	35
375	Gc2-1	SK17	5a	土師器	小型甕A	(12.0)	(3.3)	6.3	−	−	3/4	内:カキメ 外:ロクロ 底:一部剥離,板痕?有	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・黒大		50	35
376	Gc2-1	SK17	6	土師器	鍋	(31.1)	(9.2)	−	−	−	1/9	口:ロクロ 内:ロクロ→カキメ→同心円当具痕 外:カキメ→平行タタキ	やや不良	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・黒大		50	35

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
377	Gc1-3	SK21	2	須恵器	有台杯A蓋	(10.5)	(2.4)	2.6	－	－	1/4	天:ロクロケズリ(左)→ロクロ 内:ロクロ(右)	良好	－	2.5Y6/1黄灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		51	35
378	Gc1-3	SK21	4	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	3.9	6.6	30	50	1/3	ロクロ 口:外反 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	不良(瓦質)	－	2.5Y8/3淡黄	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少		51	35
379	Gc1-4	SK21	1 7	須恵器	有台杯AⅡ	11.1	3.5	5.5	32	50	3/4	ロクロ(右) 口:摘み上げ,くぼみ(折縁を意識?) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	C?	2.5Y6/1黄灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石微	口縁焼き歪み,重量有	51	35
380	Gc1-3	SK21	1	須恵器	有台杯C1	11.4	3.9	5.8	34	51	1/6	外:ロクロ,下端ロクロケズリ(右) 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質堅微	－	N7/0灰白	シルト質(強粘性),φ2mm以下の亜角粒多(長・石)	外面接融痕,内面降灰・白色釉・窯滓付着,無蓋?,X線回折試料⑦	51	5
381	Gc1-4 Gc1-4	SK21	5 7	須恵器	有台杯C1	10.4	4.6	6.1	44	59	7/8	外:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ抜き痕,高台貼付(爪痕有)→ロクロ	良好	単独?	N6/1灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石微	焼き歪み,焼成時亀裂,薄作り	51	5
382	Gc1-3	SK21	4	須恵器	無台杯AⅠ	13.2	3.5	9.5	27	72	2/3	内・外:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)→ナデ	良好(酸化炎気味)	C	2.5Y7/2灰黄	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	重量有	51	35
383	Gc1-3	SK21	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.2	2.7	8.3	22	68	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	硬質	C	5Y6/1灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	内面降灰,焼き膨れ	51	－
384	Gc1-4	SK21	1	黒色土器	有台杯?	10.2	(3.0)	－	－	－	1/8～1/10	外:ロクロ 内:丁寧なヨコヘラミガキ	良好(硬質)	－	10YR7/4にぶい黄橙	シルト質,非常に精良,微小な砂粒を微	内面のみ黒色処理	51	35
385	Gc1-4	SK21	1	土師器(須恵器?)	無台杯BⅡ	11.9	3.0	6.2	25	52	1/3	内:ロクロ 底:ヘラ切	不良	Cか	10YR8/3浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石	焼成不良により器面劣化顕著	51	35
386	Gc1-4	SK21	7	土師器(須恵器?)	無台杯BⅡ	(10.8)	(3.2)	6.4	－	－	1/6	外:ヘラ切	不良	－	10YR8/4浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の円・亜角粒多(長・石・褐・流?)	焼成不良で器面剥落顕著,X線回折等分析試料⑪	51	5
387	Gc1-3	SK21	4	須恵器	小型長頸瓶	7.4	(4.3)	－	－	－	2/3	ロクロ 外:沈線	硬質		N6/1灰	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石	内・外面自然釉(外面の釉二次的)＝二次焼成を受けている?,口縁磨耗(釉ハガレ)	51	35
388	Gc1-4	SK21	7	須恵器	短頸壺蓋	10.2	(2.8)	－	－	－	1/3	ロクロ 天:ヘラ切?→ロクロ	硬質(高火度)	－	2.5Y6/1黄灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	焼き膨れ,外面窯滓片付着	51	35
389	Gc1-4	SK21	4	須恵器	短頸壺蓋	12.2	3.1	2.5	25	20	1/4	天:ヘラ切(右)→宝珠形摘貼付→ナデ 口縁端:内尖る・外丸い	硬質(高火度)	－	N6/1灰	粘土質,φ3mm以下の長・石	内面焼成時の亀裂,自然釉	51	35
390	Gc1-3	SK21	1	須恵器	短頸壺	11.7	(5.5)	－	－	－	1/4強	ロクロ 外:カキメ	硬質(高火度)	－	N6/0灰	シルト質,φ2mm以下の長・石大	口縁内面釉垂れ(焼成時に蓋破損か),口縁外面オリーブ灰釉	51	35
391	Gc1-4	SK21	1・7	須恵器	横瓶	－	(2.8)	－	－	－	破片	内:カキメ,同心円当具痕 外:カキメ→平行タタキ	硬質(高火度)	－	5Y7/1灰白	シルト質(やや粘質),φ3mm以下長・石多		51	35

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
392	Gc1-3	SK21	4	須恵器	甕	−	(17.5)	−	−	−	底部1/6	内:平行タタキ状の当具・同心円宛具痕→ハケメ 外:平行タタキ(ヨコ)左→右,下平行タタキ(ヨコ)→(ナナメ)→一部タテハケメ	硬質	−	N5/0 灰	粘土質,φ2mm以下の長・石多		51	36
393	Gc1-4	SK21	7	土師器	小型甕Ⅰ?	18.4	(5.8)	−	−	−	1/8	口:ロクロ,摘み上げ 外:カキメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質(強粘性),φ3mm以下の円・亜角粒(長・石・雲)多		52	36
394	Gc1-4	SK21	1	土師器	小型甕Ⅱ	15.0	(12.1)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,面取り 内:カキメ 外:ロクロ,カキメ	やや不良	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・大,カ多	外表面劣化顕著	52	36
395	Gc1-3	SK21	1	土師器	鍋	(31.2)	(7.2)	−	−	−	1/12	口:ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→ナナメハケメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲)	薄片分析試料⑥	52	6
396	Gc1-4	SK21	1	土師器	鍋	(37.9)	(7.3)	−	−	−	1/9	口:ロクロ 内:ロクロ→ハケメナナメ 外:カキメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ・黒大		52	36
397	Gc1-3	SK21	4	土師器	鍋	(38.0)	(5.8)	−	−	−	1/12	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,微小な長・石・カ多	内面剥離顕著	52	36
398	Gc1-4	SK21	1	土師器	鍋	31.6	(15.5)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,面取り 内:上ロクロ→カキメ→ハケメ,下同心円当具痕→ハケメ 外:上カキメ→ハケメケズリ,下平行タタキ→ハケメ	良好	−	7.5YR8/6 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石大,雲	外面黒斑	52	36
399	Gc1-3 Gc1-4	SK21	4	土師器	鍋	(43.0)	(19.6)	−	−	−	1/10	口:ロクロ,付加状 内:ロクロ→同心円当具痕→ハケメ 外:ロクロ,平行タタキ→一部ハケメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・金・白多		52	36
400	Gc1-5	SK23b	7	須恵器	無台椀B	11.8	3.0	6.0	25	51	1/3	外:ヘラ切(右)	瓦質	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質(やや粘性強い),精良,φ2mm以下の長・石多,雲なし	X線回折等分析試料⑧	54	6
401	Gc1-5	SK23	2・5	須恵器	短頸壺蓋	(11.5)	(2.7)	3.3	−	−	摘み・頂部存	天:ロクロ,ヘラ切,宝珠形摘貼り付け 内:ロクロ(右)→一部ユビナデ	硬質(高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多	外面降灰付着,不純物吹出有	54	36
402	Gc1-5	SK23	2・5	土師器	小型甕Ⅰ?	16.4	(8.2)	−	−	−	1/8	口:ロクロ 内:カキメ	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(石・長・雲)		54	36
403	Fc5-5 Gc1-4	SK23 SK23b	7・8	土師器	小型甕Ⅰ	18.8	(16.8)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,摘み上げ(受け口状) 内外:カキメ	良好	−	2.5YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・白大	内外面部分的に剥離	54	36
404	Fc5-4	SK24	2・3	須恵器	短頸壺蓋	10.0	(3.0)	−	−	−	2/3(摘欠)	天:ロクロ,ヘラ切,摘み接合痕 内:ロクロ(右)	硬質(高火度)	−	N7/0 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	重量有,不純物吹出,口縁一部打ち欠き剥し痕	54	36
405	Fc5-5	SK24	2・3	土師器	小型甕Ⅰ	17.9	(6.1)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	良好	−	2.5Y8/4 淡黄	シルト質,φ2mm以下の長・石・金多		54	36
406	Fc5-5	SK24	2・3	土師器	小型甕AⅡ	12.8	13.6	6.9	106	54	完存	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 底:糸切り(右)	良好	−	10YR5/3 にぶい黄褐	シルト質,φ3mm以下の長・石・チ・黒・金大		54	36
407	Fc5-4	SK24	2・3	土師器	小型甕AⅡ	13.2	14.1	6.8	107	52	完存	ロクロ(右) 底:糸切り(右)	良好	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・チ・金大	内面に工具痕?	54	36

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
408	Fc5-4 Fc5-5	SK24	2・3	土師器	小型甕AII	12.8	14.0	6.2	109	48	口縁一部欠	ロクロ(右) 口:摘み上げ 底:糸切り(右)	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		54	36
409	Fc5-4 Fc5-5	SK24	1・2・3	土師器	小型甕AII	12.7	13.5	6.6	106	52	ほぼ完存	ロクロ(右) 外:ロクロ(右)→ロクロケズリ 底:糸切り(右)	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ大	体部下半に粘土粒痕付着(焼成時のカマセ材か?)	54	36
410	Fc5-1 Fc4-5	SK25a	1	須恵器	有台杯AII 蓋	13.1	(2.8)	−	−	−	1/10〜1/12	ロクロ 外天:ヘラ使用のロクロ? 内天:ユビナデ	良好 (やや瓦質)	−	2.5Y6/2 灰黄	シルト質,緻密,φ3mm以下の長・石少		55	−
411	Fb5-5	SK25	−	須恵器	無台杯BII	12.4	2.9	9.3	23	75	1/6	ロクロ,水挽痕明瞭 底:ヘラ切	硬質 (高火度)	C	5Y5/1 灰	シルト質,精良,φ2mm以下長・石・カ多	重量有,内面油煙痕	55	36
412	Fb4-5	SK25	−	須恵器	無台杯BII	10.8	3.0	8.2	27	75	1/6	ロクロ 内:ちぢれ痕 底:ヘラ切	良好	−	5Y6/1 灰	シルト質,緻密,φ2mm以下の長・石少	体部内面下に油煙痕	55	36
413	Fc5-1	SK25b	2	土師器	有台椀(脚)	12.0	(2.4)	−	−	−	破片	ロクロ	良好	−	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,精良,微小な長・石	仏具?内面粘土くず?付着	55	6
414	Fb5-5	SK25a	1	土師器	長胴甕	23.2	(6.6)	−	−	−	1/9	ロクロ 口:付加状 外:カキメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		55	37
415	Fb5-5	SK25	−	土師器	長胴甕	23.4	(6.7)	−	−	−	1/12弱	ロクロ 口:摘み上げ	良好 (硬質)	−	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下長・石・カ少		55	37
416	Fb4-5	SK25a	1	土師器	小型甕AII	11.9	14.7	7.2	124	61	1/2	ロクロ 外:カキメ 底:切り離し不明,一部剥離	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石大	体部下端粘土片付着(カマセ材か?)	55	37
417	Fc4-1	SK25a	1	土師器	小型甕II	12.6	(4.4)	−	−	−	1/6	ロクロ 外:カキメ	良好 (やや硬質)	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ1mm以下長・石・カ少	外面黒斑	55	37
418	−	SK25a	1	土師器	小型甕III	8.6	(2.7)	−	−	−	1/7	ロクロ 口:面取り	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・雲少		55	37
419	Fc4-1	SK25a	1	土師器	小型甕BIII	(9.5)	(4.5)	6.6	−	−	1/3	ロクロ 外:ロクロ→ ハケメケズリ 底:ヘラナデ	良好	−	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石多,金少	外面下半調整不明	55	37
420	Fc2-1	SK29	1	須恵器	有台杯E	9.1	3.0	6.3	33	69	ほぼ完存(口縁一部欠)	ロクロ 底:ヘラ切→ロクロケズリ,高台貼付→ロクロ	良好 (瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし	厚手,重量有,未使用,仏具?	55	37
421	Fc3-2	SK30a	2	須恵器	有台杯AII 蓋	12.9	2.9	2.4	−	−	2/3	ロクロ 外:ロクロケズリ(右)→擬宝珠形?摘貼付	軟質 (瓦質)	A?	2.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	内面不純物吹出多量	57	37
422	Fc3-2	SK30a	2	須恵器	無台杯AII	12.0	3.4	8.2	28	68	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石多		57	37
423	Fc3-2	SK30a	2	須恵器	無台杯AII	11.4	3.4	6.4	29	56	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	C	5Y6/1 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石大	内面火だすき,口縁に焼成時の縦亀裂	57	37
424	Fc3-2	SK30a	1	須恵器	無台杯BII	11.5	3.0	8.2	26	71	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	不良 (瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,φ5mm大の粘?φ2mm以下の長・石若干		57	37

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
425	Fc3-2	SK30a	2	須恵器	無台杯BⅡ	11.8	2.9	9.0	24	76	1/6	ロクロ 底:ヘラ切(右)	不良 (瓦質)	−	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石・角含む		57	−
426	Fc3-2	SK30a	2	須恵器	球胴短頸壺	9.0	15.0	10.7	−	−	口縁 1/3欠損	ロクロ 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:高台貼付→ロクロ,ロクロケズリ	硬質 (高火度)	−	5Y5/1 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	焼き膨れ・全体にやや焼き歪み,外面肩釉厚くかかる,高台内釉吹き込み,内底釉溜り(蓋なし焼成)	57	37
427	Fc3-2	SK30a	1	土師器	小型甕AⅡ	13.4	12.2	6.8	91	51	1/4	ロクロ 口:摘み上げ 外:カキメ→ロクロケズリ,下端ハケメ・ナデ 底:ヘラ切→ヘラ調整	良好	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・黒・白多	体部下端粘土粒付着(焼成時のカマセ材?)	57	37
428	Fc3-2 Fc4-2	SK30a・b・d	1・2	土師器	小型甕AⅡ	16.9	15.0	9.6	88	57	1/4弱	口:ロクロ,摘み上げ 内:ロクロ→カキメ 外:ロクロ→カキメ→ロクロケズリ→ユビナデ 底:ナデ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・白多	体部下端粘土片付着(カマセ材か?)	57	37
429	Fc3-2	SK30a	1・2	土師器	小型甕BⅡ	12.7	13.5	7.4	106	58	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:上半カキメ,下端手持ちケズリ 底:切り離し方法不明	やや不良	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多,φ3mm大の粘	外・底面火ハジケにより剥離	57	37
430	Fc3-2	SK30a	2	土師器	長胴甕	(17.0)	(12.1)	(3.6)	−	−	1/3	内:ヨコ・ナナメハケメ 外:ハケメケズリ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・白・カ多	全体が二次的に被熱,外面にコゲ,内面にスス・アク・コゲ?	57	37
431	Fc4-2	SK30b	1	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.6	2.8	2.7	−	−	1/3	口:摘み出し 内:ロクロ→ユビナデ 外:ロクロ→ロクロケズリ(右),ボタン形摘み貼付→ロクロ	軟質 (瓦質)	B	2.5Y7/3 浅黄	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少		57	37
432	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.7	2.9	2.9	−	−	完存	ロクロ 口:折り返し 外:ヘラ切→擬宝珠形摘貼付→ロクロ	軟質 (瓦質)	−	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多,φ9mm大の長		57	37
433	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	有台杯B蓋	16.6	(2.3)	−	−	−	1/2強	ロクロ 口:摘み出し 外:ヘラ切	硬質 (高火度)	−	5Y6/1 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		57	37
434	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	有台杯AⅡ	12.0	3.5	7.0	29	58	1/6	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	−	N5/0 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	外面不純物吹出多量,焼き膨れ	57	37
435	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	有台杯C2	9.2	4.6	4.5	50	48	1/4	ロクロ, 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質	−	5Y5/1 灰	粘土質,φ2mm以下の長・石多	黒色粒吹出有	57	37
436	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	有台杯C	(8.3)	(2.5)	4.8	−	−	1/3	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	−	2.5YR6/2 灰黄	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石		57	37
437	Fc4-3	SK30b	1	須恵器	折縁杯B	12.3	4.8	7.6	39	62	高台 2/3欠	口:折縁(折込状) 内:水挽き痕明瞭 外:ロクロ(右),ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ(やや雑)	硬質 (焼締)	C	5B5/1 青灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多,雲なし	足高高台,重量有,未使用,断面青紫灰色,内面一部降灰,外底面に焼成時の亀裂	57	37
438	Fc4-3	SK30b	1	須恵器	無台杯AⅡ	11.5	3.2	8.4	27	73	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質 (高火度)	C	5Y6/1 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	外面不純物吹出多量	57	37

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
439	Fc4-3	SK30b	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	3.3	8.5	28	73	口縁一部欠損	ロクロ(右) 内:ちぢれ痕, 底:ヘラ切(右)	良好	C	5B6/1 青灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多	口縁に焼成時の縦亀裂,器形・つくり小泊窯の製品に類似	57	37
440	Fc4-3	SK30b	2	須恵器	小型長頸瓶	−	(9.2)	−	−	−	口縁・台部以外残存	ロクロ 外:カキメ→ヨコ・ナナメヘラケズリ	硬質(高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石大	円盤閉塞?,高台打ち欠き	57	37
441	Fc3-3	SK30b	1	須恵器	長頸瓶	−	(11.7)	−	−	−	1/3弱	内:ロクロ 外:カキメ→ロクロケズリ	硬質	−	N6/0 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多		57	38
442	Fc4-2	SK30d	1	須恵器	無台杯AⅠ	12.7	3.2	8.0	25	62	1/5	ロクロ 底:ヘラ切	軟質(瓦質)	C	10YR6/2 灰黄褐	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少		57	38
443	Fc4-2	SK30d	1	土師器	鍋	(35.4)	(10.2)	−	−	−	1/8	口:ロクロ,付加状 内:カキメ 外:カキメ→ハケメケズリ	やや不良	−	7.5YR6/4 にぶい橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・黒・赤大	内面剥離顕著	57	38
444	Fc3-2	SK30d	1	土師器	鍋	35.3	(14.1)	−	−	−	1/5	口:ロクロ 内:カキメ→タテハケメ→ナナメハケメ 外:上半カキメ,→ナナメヘラケズリ,下半平行タタキ→ナナメハケメ→ヘラケズリ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲少		57	38
445	Fc4-5	SK31	1	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.4	(2.5)	−	−	−	1/3	口:摘み出し 内:ロクロ(右) 天:ロクロケズリ(右)	硬質(高火度)	A	10Y5/1 灰	シルト質,φ1mm以下の長・石多	外面降灰	59	6
446	Ed5-1	SK31	1	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.8	(1.1)	−	−	−	1/6	ロクロ 口:摘み出し 天:ロクロケズリ(左)	硬質(高火度)	A?	5Y6/1 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	外面降灰	59	38
447	Ed4-1	SK31	1	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.8	(2.2)	−	−	−	1/3弱	ロクロ 口:摘み出し 天:ロクロケズリ	良好(灰白色)	B	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,微少な長・石	口縁端・側部磨耗	59	38
448	Ed5-1	SK31	1	須恵器	有台杯蓋(摘)	−	(1.6)	2.5	−	−	3/4	内:ロクロ(右) 摘:貼付→ロクロ	硬質(高火度)	A?	5Y6/1 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石	外面降灰・アバタ状に剥離	59	−
449	Fc4-5	SK31	1	須恵器	有台杯C	10.3	(3.6)	−	−	−	1/6	ロクロ	硬質(高火度)	単独?	10YR1.7/1 黒	シルト質,φ4mm以下の長・石多	内面降灰,外面アバタ状に剥離	59	38
450	Fd4-1	SK31	1	須恵器	有台杯C2	9.1	4.7	4.8	51	52	5/6	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	C	5B5/1 青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多		59	38
451	Ed4-1	SK31	1	須恵器	有台杯C	(10.2)	(2.1)	7.6	−	−	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)→高台貼付→ロクロ	良好	−	5Y6/1 灰	シルト質,精良,φ4mm以下の長・石少	内面・高台磨耗(使用痕明瞭)	59	38
452	Ed4-1	SK31	1	須恵器	有台杯C	(10.8)	(2.4)	6.6	−	−	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	やや軟質	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ3mm以下の長・石・流?多	高台下端ス ス付着	59	38
453	Ed4-1	SK31	1	須恵器	有台杯C	(10.0)	(3.3)	4.4	−	−	3/4	外:ロクロ(右)→ロクロケズリ(右) 底:ヘラ切(右)→高台貼付	硬質(高火度)	−	7.5Y5/1 灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多		59	38
454	Fd5-1	SK31	1	須恵器	有台杯BⅠ	(15.1)	(4.1)	10.4	−	−	1/4	ロクロ 底:ヘラ切→高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	単独?	5Y4/1 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石	外面微小な不純物の吹出多量	59	38

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
455	Ed4-1	SK31	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.3	3.1	8.4	25	68	1/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良	C?	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	口縁端・内外底面磨耗?	59	−
456	Ed4-1	SK31	1	須恵器	無台杯?椀?	(14.0)	(3.1)	10.0	−	−	1/6	ロクロ 底:ヘラナデ	硬質 (高火度)	−	N5/0 灰	シルト質,微小な長・石大		59	38
457	Fc4-5	SK31	1	須恵器	横瓶	−	(4.4)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕 外:同心円カキメ	やや軟質	−	7.5YR8/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少		59	38
458	Fc4-5	SK31	1	須恵器	甕	26.4	(32.8)	−	−	−	口縁1/2 全体1/4〜1/5	口:ロクロ 内:同心円当具痕→部分的にハケメ 外:平行タタキ(木目有)→カキメ	硬質 (高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,φ6mm以下の長・石大	外面一部降灰	59	38
459	Ed4-1	SK31	1	須恵器	甕	24.0	(3.9)	−	−	−	1/10	ロクロ	硬質 (高火度)	−	2.5Y4/1 黄灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石		59	−
460	Fc4-5	SK31	1	須恵器	甕	−	(12.6)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕(木目有) 外:平行タタキ(木目有)	硬質 (高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石大		59	38
461	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	無台杯BⅠ	14.6	3.7	9.6	25	66	1/6	ロクロ 底:ヘラ切	不良 (瓦質気味)	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ3mm以下の長・石		59	38
462	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	無台杯BⅠ	13.6	2.9	10.4	21	76	1/6強	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・流?・赤多	外面黒斑	59	6
463	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	無台杯BⅠ	12.9	2.8	10.2	21	79	1/2弱	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,微少な長・石・雲・多	外面黒斑	59	38
464	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	無台杯Ⅱ	11.8	(3.3)	−	−	−	1/2弱	ロクロ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多	外面黒斑	59	6
465	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	無台杯Ⅱ	12.3	(2.2)	−	−	−	1/9	ロクロ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,微少な長・石・カ		59	38
466	Fc4-5・5-5	SK31	1	土師器	無台杯C	9.3	2.8	6.3	30	67	完存	ロクロ 底:ヘラ切(左?)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・雲多	仏具?灯明皿?,重量有	59	38
467	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	杯蓋(摘)	—	(2.8)	2.7	−	−	摘部完存	内:ロクロ(右) 外:宝珠形摘貼付→ロクロ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石多		59	38
468	Fc4-5	SK31	1	土師器 (須恵器?)	有台杯	11.1	(4.7)	−	−	−	1/12	ロクロ 外:沈線2条(竹管使用?)	良好	−	10YR7/1 灰白	シルト質,精良,微少な砂粒微	外面黒斑,金属器模倣か?	59	38
469	Fc4-5 Fc4-5 Fd5-1 Ed4-1	SK31	1	土師器	無台椀 AⅠ1	18.0	7.6	8.8	42	49	1/3〜1/4	内:非常に丁寧なナデ 外:ロクロ,ミガキ状のヘラケズリ 底:静止糸切	良好 (硬質)	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・赤・カ	内側黒斑,鋺模倣	59	38
470	Fc4-5	SK31	3	土師器	無台椀 AⅠ1	18.3	(7.3)	−	−	−	1/6	内:ロクロ(ナデ丁寧) 外:ロクロ→ハケメ	良好	−	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質精良,φ2mm以下長・石少,赤多	鋺模倣	59	38
471	Fc4・5-5,Fd5-1	SK31	1	土師器	無台椀 AⅠ1	18.0	(5.0)	−	−	−	1/6	ロクロ(ナデ丁寧)	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質精良,φ1mm以下長・石・カ少	鋺模倣	59	38

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
472	Fc4-5	SK31	1	土師器	無台椀 AⅡ1	18.0	(6.5)	–	–	–	1/9	ロクロ	良好	–	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,微少な長・石少	鈍模倣	59	38
473	Fc4-5 Fd4-1	SK31	1	土師器	無台椀 AⅡ1	(21.1)	(5.6)	–	–	–	1/9	ロクロ(ナデ丁寧)	良好	–	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石多	鈍模倣	59	38
474	Fc4-5	SK31	1	土師器	長胴甕	22.4	(8.0)	–	–	–	1/8	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:平行タタキ→カキメ	良好	–	10YR6/2 灰黄褐	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		60	38
475	Fc4-5 Fc5-5	SK31	1	土師器	長胴甕	23.4	(12.4)	–	–	–	1/6	ロクロ 外:カキメ→タテヘラケズリ	良好	–	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質精良,φ3mm以下長・石・褐・カ多		60	38
476	Fd5-1	SK31	1	土師器	長胴甕	25.0	(10.9)	–	–	–	1/6	口:ロクロ→カキメ,付加状 内:ヘラナデ 内外:ロクロ・カキメ	良好	–	7.5YR8/4浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐・金多	内面アク状の付着物の垂れ?,外面火色	60	39
477	Fc4-5	SK31	3	土師器	長胴甕	22.4	(9.8)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,面取り 内・外:カキメ	良好	–	10YR8/2 灰白	シルト質,φ2mm以下の亜角粒多(長・石・雲)	内面剥離,外劣化,X線回折等分析試料⑫,薄片分析試料⑦	60	6
478	Fc4-5	SK31	1	土師器	長胴甕	25.6	(6.5)	–	–	–	1/6	ロクロ 口:面取り 内:カキメ,ヨコハケメ 外:カキメ	良好	–	5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石・雲)	若干スス付着	60	39
479	Fc4-5 Fc5-5	SK31	1	土師器	長胴甕	(24.9)	(28.5)	–	–	–	1/3	内:カキメ,タテ・ヨコハケメ 外:カキメ,タテハケケズリ	良好	–	2.5Y8/4 淡黄	シルト質,φ5mm以下の長・石大,海面骨針含む,雲少	山三賀C類の器形に類似	60	39
480	Fc4-5	SK31	1	土師器	小型甕BⅡ	14.0	(14.1)	–	–	–	1/3強	口:ロクロ,面取り・内屈 内:ロクロ→カキメ 外:カキメ→ヘラナデ,ヘラ描	良好	–	7.5YR8/6 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・黒・金大	底面剥離,体部にヘラ記号?「×」	60	39
481	Fc4-5	SK31	1	土師器	小型甕AⅡ	14.8	14.9	7.8	101	53	1/4強	口:ロクロ,面取り・内屈 内:ロクロ→カキメ 外:カキメ→ロクロケズリ 底:ハケメナデ	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・褐多 雲少		60	39
482	Fc4-5	SK31	1	土師器	円筒形土製品	13.6	(23.5)	–	–	–	2/3	口:ロクロ,ユビオサエ 内:カキメ?,ロクロ 外:カキメ,平行タタキ	良好	–	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多	口縁片口状(焼き歪み?),焼成時の亀裂	60	6
483	Fc4-5 Fc5-5	SK31	1	土師器	鍋	36.0	(13.7)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,付加状 内:カキメ→同心円当具痕 外:ロクロ→平行タタキ→ナナメハケケズリ	良好	–	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・雲・石(角礫)・カ多		60	39
484	Fc4-5	SK31	1	土師器	鍋	(34.0)	(5.9)	–	–	–	1/12以下	口:カキメ→ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:カキメ→タテハケメナデ	良好	–	5YR7/6 橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ		60	–
485	Fc4-5	SK31	1	土師器	鍋	(30.4)	(9.2)	–	–	–	1/9	口:ロクロ→カキメ 内:カキメ→ユビナデ →ナナメヨコハケメ 外:劣化のため不明	良好	–	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ・多		60	39
486	Fc4-5 Fc5-5	SK31	1	土師器	鍋	30.5	(17.1)	–	–	–	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ,タテ・ヨコハケメ 外:カキメ→ タテハケメケズリ	良好	–	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,φ4mm以下の長・石大,φ2mm以下のカ多		60	39

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
487	Eb4-5	SK33	1		羽口	−	−	−	−	−	破片	−	良好(二次焼成)	−	10YR6/2 灰黄褐	シルト質,φ1mm以下の長・石多	外面割れ口に黒色融着物	61	39
488	Eb4-5	SK33	1	須恵器	甕	−	(15.6)	−	−	−	破片	内:同心円当具痕 外:平行タタキ→カキメ	硬質(高火度)	−	N4/0 灰	粘土質,φ3mm以下の長・石多	外面降灰(黄褐釉)	61	39
489	Ec4-1	SK34	1	須恵器	小型短頸壺	6.1	(5.2)	−	−	−	1/3	ロクロ 外:カキメ	硬質	−	N5/0 灰	粘土質,精良(緻密),微小な長・石少		61	39
490	Ec4-1	SK34	1	土師器	小型甕Ⅱ	14.6	(7.7)	−	−	−	1/6	ロクロ 口:受け口状	良好	−	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト質精良,φ2mm以下長・石少.φ2mm以下の金・黒多	口縁内面にアク,外面全体に所々薄くスス付着	61	6
491	Eb3-5	SK35	2	須恵器	有台杯AⅡ	11.2	3.8	6.1	33	54	1/6	内:ロクロ 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:ヘラ切,高台貼付後→ロクロ	良好	−	2.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石微		61	39
492	Eb3-5	SK35	2	黒色土器	稜椀? 有台盤? (台部)	12.0	(1.6)	−	−	−	1/6	内・外:ヨコヘラミガキ(緻密)	良好(還元?)	−	5Y5/1 灰	シルト質,非常に緻密,φ1～3mmの長微,ガラス質粒子	内外面黒色処理,全体に磨耗	61	39
493	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	12.0	3.3	9.0	27	75	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR6/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多		61	6
494	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	11.9	3.3	9.4	27	78	1/4	ロクロ 底:ヘラ切(右)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多		61	−
495	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	11.6	3.3	7.2	28	62	1/3強	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石多,金・カ少	外底面黒斑	61	6
496	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	11.6	3.0	8.4	25	72	1/5	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ多	外面体部下端黒斑	61	39
497	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	10.6	2.9	7.6	27	71	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR6/4 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・雲少	外面体部下端黒斑	61	6
498	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯B?Ⅱ	10.7	3.0	8.2	28	76	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ1mm以下の長・石少,φ1mm以下の金多,海		61	6
499	Eb3-5	SK35	1	土師器(須恵器?)	無台杯BⅡ	11.6	3.2	8.4	27	72	1/8	ロクロ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,砂粒をほとんど含まず	内外面黒斑	61	−
500	Ec3-2	SK36	2	須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.0	(2.3)	−	−	−	1/3	ロクロ 口:摘み出し 天:ロクロケズリ,摘み欠	不良(瓦質)	A	5Y7/1 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石多,雲なし		63	39
501	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯AⅡ蓋	12.8	2.9	(2.4)	−	−	ほぼ完存(口縁一部欠)	ロクロ(右) 口:摘み出し 天:ロクロケズリ(右),やや雑,ハケメに近い,擬宝珠形摘貼付→ロクロ	良好(焼締)	A	7.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石		63	39
502	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯AⅡ蓋	13.0	(1.9)	−	−	−	1/3	ロクロ 天:ロクロケズリ(右)	不良(瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,砂粒微	表面剥離顕著,厚手	63	39

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
503	Ec4-3 Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII 蓋	12.8	(2.2)	−	−	−	1/2弱	ロクロ 口折り曲げ 内:しぼり状 天:ロクロケズリ(右)	やや不良 (瓦質)	A	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし		63	39
504	Ec3-2	SK36	2・4	須恵器	有台杯DII 蓋	(10.9)	−	−	−	−	1/4弱	天:ロクロケズリ(右),沈線2条	やや不良 (瓦質)	−	10YR6/2 灰黄褐	シルト質,精良,微小な長・石多		63	39
505	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AI	12.8	4.5	7.4	35	58	1/2弱	外:ロクロ 底:高台貼付→ロクロ	やや不良 (瓦質)	C?	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多,雲なし	内側に別個体片付着,薄作り	63	6
506	Ec3-2	SK36	2	須恵器	有台杯AI	12.8	4.2	7.9	33	62	ほぼ完存	ロクロ 内:ちぢれ痕 底:ヘラ切(右),高台貼付(雑)→ロクロ	硬質 (焼締)	C	N7/0 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	使用痕明瞭,磨耗,重量有	63	39
507	Ec2-2	SK36	3 3d・e	須恵器	有台杯AI	12.6	4.3	7.6	34	60	5/6	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質 (焼締)	C	N7/0 灰白	砕石状(ガリガリ),φ5mm以下の長・石多,雲なし	内側に別個体,降灰有り,磨耗顕著(使用痕),重量有	63	39
508	Ec3-2 Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AI	12.6	3.7	6.1	29	48	2/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	不良 (瓦質)	不明	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少,雲なし	薄手,軽量	63	40
509	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AI	12.6	3.6	7.2	29	57	1/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付(雑)→ロクロ	硬質 (高火度)	A?	5B5/1 青灰	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少,雲なし	使用痕有り,磨耗,薄手,軽量	63	39
510	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AI	12.6	4.5	7.4	36	59	1/3	ロクロ(右) 内:ちぢれ痕,底 絞り状 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ(やや雑),ヘラ描	やや不良 (瓦質)	C	2.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・炭少,雲なし	使用痕有り,磨耗,軽量,内側に別個体付着,外底にヘラ記号「×」	63	40
511	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII	12.4	3.7	7.0	30	56	1/3	ロクロ 底:ヘラ切,沈線→高台貼付→ロクロ	不良 (瓦質)	−	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少,雲なし		63	40
512	Ec2-2 Ec2-2 Ec3-2	SK36	3 底 底P	須恵器	有台杯AII	12.3	3.3	6.9	27	56	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質 (焼締)	C	N6/0 灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし	薄手	63	40
513	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII	12.4	4.1	7.0	33	56	3/4	底:ヘラ切(右),沈線→高台貼付(雑)→ロクロ	やや不良 (瓦質)	A?	N7/0 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし	重量有	63	40
514	Ec2-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII	12.2	4.1	7.8	34	64	1/3	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),高台貼付(雑)→ロクロ	良好	A?	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ4mm以下の長・石多,雲なし	磨耗痕(使用か?)	63	40
515	Ec2-2 Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII	12.0	4.7	6.0	39	50	1/3	ロクロ 底:,高台貼付→ロクロ,ヘラ描	良好 (焼締)	C	N7/0 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石多	外底にヘラ記号「大」,磨耗明瞭(使用痕),厚手,重量有,古手?	63	40
516	Ec3-2	SK36	2・6	須恵器	有台杯AII	12.0	4.1	7.8	34	65	口縁一部欠(打欠?)	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好(白色焼成)	A	N8/0 灰白	シルト質(強粘性),φ4mm以下の長・石多	外面に別個体の接触釉有り,高台に磨耗,断面厚い,重量有	63	6
517	Ec2-3	SK36	2	須恵器	有台杯AII	11.6	3.5	7.8	30	67	3/4	ロクロ(右) 内:ユビ痕 外:ロクロケズリ(右),高台貼付(爪跡有り)→ロクロ	やや不良 (瓦質)	A?	5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし	重量有	63	40

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
518	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯AII	11.4	4.3	5.8	38	51	5/6	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	単独or C上	5PB5/1 青灰	シルト質(砕石状),φ2mm以下の長・石多,雲母なし	やや歪み,重量有,内全面降灰,内底面に折れた口縁片付着,外面降灰	63	40
519	Ec2-2	SK36	2・4・6	須恵器	有台杯AII	11.2	4.1	7.2	37	64	3/4	口:内折 外:ロクロ(右),稜意識 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	不良(瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,砂粒をほとんど含まず		63	40
520	Ec3-2	SK36	2	須恵器	有台杯A	(11.8)	(3.1)	7.2	−	−	1/3	ロクロ(右), 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	やや不良(瓦質)	−	5Y6/1 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石・流?多,雲なし		63	40
521	Ec3-3	SK36	2 Ia	須恵器	有台杯BI	16.4	(5.6)	−	−	−	1/3	外:ロクロ,ロクロケズリ	硬質(高火度)	B	5PB5/1 青灰	シルト質(砕石状),精良,φ5mm以下の長・石微	焼き歪み顕著,内面降灰(歪み時の吹き込み?),実際の口径はもう少し小さい可能性あり	63	40
522	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯BII2	12.6	6.8	6.7	54	53	3/4	ロクロ 口:沈線 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	不良(瓦質)	−	5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2〜6mm大の長・石・花少	磨耗痕(使用?),薄手,軽量	63	40
523	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯C1	11.0	4.4	7.8	40	71	1/8	ロクロ 内:水挽き痕明瞭,底ユビナデ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質(焼締)	C	5B5/1 青灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし		63	−
524	Ec3-2	SK36	2・5	須恵器	有台杯C1	10.6	4.5	5.6	42	53	5/6	ロクロ(右) 内:凹凸明瞭 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	C	5B4/1 暗青灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし	口縁微細剥離,内面降灰.外面に別個体付着(焼成時接触か?),一部降灰,高台はNo528と同形,重量有	63	40
525	Ec3-2	SK36	2	須恵器	有台杯C1	10.6	(4.3)	−	41以上	−	3/4	内:水挽き痕明瞭,ちぢれ痕 外:ロクロ→ロクロケズリ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(焼締)	C	N6/0 灰	シルト質精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし	高台打ち欠き後,磨耗(使用痕?),薄手,軽量	63	40
526	Ec2-3 Ec3-2	SK36	5 2	須恵器	有台杯C1	10.4	4.5	6.0	43	58	1/3	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	−	5Y8/1 灰白	シルト質,精良(強粘性),φ1mm以下の長・石少,雲なし	厚手	64	40
527	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯C1	10.2	(3.6)	−	−	−	1/3	外:ロクロ(右)→ロクロケズリ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	単独or C上	N6/0 灰	砕石状(ガリガリ),精良,φ3mm以下の長・石少,雲なし	内面に降灰降物多,内外面に融着剥し痕	64	40
528	Ec3-2	SK36	2	須恵器?	有台杯C2	10.4	5.6	4.8	54	46	3/4	ロクロ(右) 口:沈線 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質	C	5B5/1 青灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少,雲なし,吹出あり	重量有,内面降灰,焼き膨れ,内底面別個体片付着(重焼き痕),外面一部降灰	64	40

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
529	Ec3-2	SK36	-	須恵器	有台杯C2	9.8	4.9	5.8	50	59	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	硬質 (高火度)	単独?	5B6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),精良,φ3mm以下の長・石少,雲母なし	高台磨耗(使用痕),薄手,内・外面降灰,焼き膨れ	64	40
530	Ec2-2	SK36	4	須恵器	有台杯C	(8.3)	(2.2)	4.8	-	-	1/6	ロクロ 内:カキメ,コテ使用か? 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	C	N6/0 灰	砕石状,精良,φ3mm以下の長・石少	内面降灰,外面に黒釉	64	-
531	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯C	(7.8)	(2.3)	4.6	-	-	1/3	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好 (焼締)	C or 単独	N7/0 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石,雲なし		64	-
532	Ec3-3	SK36	2	須恵器	有台杯DⅡ1	10.4	4.1	5.8	39	56	1/4～1/6	ロクロ 外:沈線 底:高台貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	C or 単独	N7/0 灰白	シルト質,精良,微小な長・石少	薄手,軽量,内面降灰,外面に釉	64	40
533	Ec3-2	SK36	2	須恵器	有台杯D? 折縁杯?	(10.0)	(1.4)	9.0	-	-	1/6	内:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質 (焼締)	-	5BG6/1 青灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	やや足高,底部形状糸切に近い	64	40
534	Ec3-2	SK36	-	須恵器	折縁杯A	16.0	5.8	8.8	36	55	1/4～1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	-	-	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	足高高台,金属器をかなり忠実に模倣(折縁杯のプロトタイプ?)	64	6
535	Ec2-2	SK36	4	須恵器	折縁杯B	11.2	(3.4)	-	-	-	1/4弱	ロクロ	良好(やや瓦質)	-	7.5YR7/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少		64	40
536	Ec3-2 Ec3-2 Ec2-2	SK36	2・6 2 2	須恵器	折縁杯E	16.0	7.2	7.0	45	44	5/6	内:整形丁寧 外:ロクロケズリ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	硬質 (高火度)	単独?	5PB4/1 暗青灰	シルト質(砕石状),精良,φ2mm以下の長・石,雲なし	優品,内・外・底面とも器面の摩耗(使用痕顕著),高台を外して使用,外面一部・内面降灰	64	40
537	Ec3-2	SK36	2	須恵器	折縁杯B?	(12.2)	(2.5)	7.6	-	-	1/4	内:ロクロ,ハケメ? 外:ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好 (酸化炎)	-	5YR7/6 橙	シルト質(砕石状),精良,φ3mm以下の長・石少		64	40
538	Ec2-2	SK36	3・4	須恵器	折縁杯C	14.6	(2.4)	-	-	-	-	ロクロ	良好 (焼締)	-	N7/0 灰白	シルト質,精良(砕石状),φ3mm以下の長・石少,雲なし	金属器蓋がモデルか?(折縁杯のプロトタイプ?)	64	41
539	Ec3-2	SK36	2・4	須恵器	折縁杯C	14.2	(2.7)	-	-	-	1/6	ロクロ	不良 (瓦質)	-	2.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石微		64	41
540	Ec3-3	SK36	2	須恵器	無台杯AⅠ	13.6	3.9	7.6	29	56	ほぼ完存(口縁一部欠)	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質	C	10BG7/1 明青灰	シルト質,φ4mm以下の長・石・流紋岩?多,雲なし	折縁を意識?,全体に磨耗(使用痕顕著),重量有	64	6
541	Ec2-2	SK36	4	須恵器	無台杯AⅠ	12.8	3.7	8.0	29	63	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	瓦質 (軟質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多,雲なし	薄手・軽重	64	41
542	Ec2-2	SK36	2 2・4・6	須恵器	無台杯AⅠ	12.8	3.2	8.8	25	69	1/2弱	口:外反強 底:ヘラ切(右),板目痕有り	不良 (瓦質)	-	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし		64	41
543	Ec3-3	SK36	2	須恵器	無台杯AⅡ	12.4	3.3	7.2	27	58	1/4	ロクロ	不良 (瓦質)	-	N8/0 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石・花多,雲無	やや厚手	64	41

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
544	Ec3-2	SK36	2	須恵器	無台杯AⅠ	12.5	3.5	7.6	28	61	3/4	ロクロ(右) 内:水挽き,ちぢれ痕明瞭 底:ヘラ切(右),板痕有り	良好(灰白色焼成)	C	N7/0 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石若干,雲なし	口縁部焼成時に亀裂	64	41
545	Ec3-3	SK36	2	須恵器	無台杯AⅡ	12.4	3.3	8.4	27	68	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	不良(瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石多,雲なし	薄手・軽重	64	41
546	Ec3-3	SK36	2	須恵器	無台杯AⅡ	12.2	3.1	8.7	25	71	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	−	N7/0 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の粘多,微小の長・石少	器面劣化	64	41
547	Ec2-2	SK36	2・4・6	須恵器	無台杯AⅡ	12.2	3.3	8.8	27	72	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石大,雲なし		64	41
548	Ec2-2	SK36	4	須恵器	無台杯AⅡ	12.0	3.3	8.2	28	68	ほぼ完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ描	良好(焼締)	C	N7/0 灰白	シルト質(砕石状),φ3mm以下の長・石多,雲なし	底部にヘラ記号「×」,やや厚手,重量有,口縁内摩耗(使用か?)	64	41
549	Ec2-2	SK36	3de 4	須恵器	無台杯AⅡ	11.8	2.8	7.8	24	66	1/3	ロクロ(右) 内:水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右)	硬質(高火度)	C	5B6/1 青灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多,雲なし	やや厚手,重量有	64	41
550	Ec3-3	SK36	5	須恵器	無台杯AⅡ	11.0	3.0	6.6	27	60	1/2弱	ロクロ 内:ちぢれ痕明瞭	硬質(高火度)	C	5B6/1 青灰	シルト質(砕石状),φ2mm以下の長・石多,雲なし,吹出有り	磨耗(使用痕),重量有,厚手	64	41
551	Ec3-2	SK36	−	須恵器	無台杯BⅠ	13.4	3.5	8.4	26	63	1/4	ロクロ(右) 内:若干ちぢれ痕 底:ヘラ切(右・ヘラ抜痕有り)	良好(やや瓦質)	C	2.5Y8/2 灰白	シルト質(やや砕石状),精良,φ3mm以下の長・石若干,雲なし	厚手,重量有	64	41
552	Ec2-2	SK36	4	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	3.5	6.0	28	48	1/3	外:ロクロ(右),手持ちハケメケズリ(左→右)	良好(やや瓦質)	C	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・褐若干	薄手,軽量,箱杯状,内面剥離	64	41
553	Ec2-2	SK36	3・4	須恵器	無台杯BⅠ	12.8	3.6	7.4	28	58	1/2	内:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(やや瓦質)	C	5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ5mm以下の長・石少,雲なし	使用痕有り(磨耗),厚手,重量有	64	41
554	Ec2-2	SK36	2	須恵器	無台杯BⅡ	12.0	3.0	7.4	25	62	ほぼ完存	ロクロ(右)	硬質(高火度)	C	5B5/1 青灰	シルト質精良,φ2mm以下の長・石多,雲なし	内側降灰,使用痕(磨耗),重量有,厚手,540と同時期?	64	41
555	Ec2-2	SK36	4	須恵器	無台杯BⅡ	11.8	3.5	7.6	30	64	1/2	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),板痕	良好(白色焼成)	C	N7/0 灰白	シルト質(強粘性)精良,砂粒ほとんど含まず	厚手,重量有,X線回折等分析試料⑩	64	6
556	Ec3-3	SK36	2	須恵器	無台杯BⅡ	11.7	3.4	8.0	29	68	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	不良(瓦質)	C	5Y8/1 灰白	シルト質,精良,微小な長・石少,雲なし		64	41
557	Ec3-2	SK36	−	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	3.0	7.2	26	62	1/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),板目,ヘラ抜痕有り	不良(瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石多,褐,雲なし	内外面,剥離,やや厚手	64	−
558	Ec2-2	SK36	2・4・6	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	3.1	7.6	27	66	完存(わずかに口縁欠)	ロクロ(右) 内:ちぢれ痕 底:ヘラ切(右),ヘラ抜痕有	硬質(高火度)	C	5B6/1 青灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多雲母なし吹出あり	全体的に磨耗(使用痕),重量有,厚手内面に降灰,外に黒釉	64	41

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推定径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
559	Ec3-2	SK36	2 6	須恵器	無台杯BⅡ	11.2	3.1	7.2	28	64	1/2弱	ロクロ 底:ヘラ切	不良 (瓦質)	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし	表面剥離顕著	64	41
560	Ec2-2	SK36	2	須恵器	無台杯BⅡ	11.0	3.1	6.4	28	58	1/3	ロクロ(右) 内:ロクロ成形時の布痕・水挽き痕明瞭 底:ヘラ切(右),板目痕あり	硬質	C	10BG5/1 青灰	シルト質,精良,φ4mm以下の長・石若干,雲なし	薄手,軽量	64	41
561	Ec2-2	SK36	4	須恵器	杯	13.0	(3.3)	−	−	−	1/4	ロクロ	不良 (瓦質)	−	5Y8/1 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石大,炭化した雲,土師器の胎土		64	41
562	Ec2-2	SK36	3	須恵器	杯	12.2	(2.7)	−	−	−	1/4	ロクロ	良好(やや瓦質)	C?	2.5Y7/1 灰白	シルト質,精良,砂粒はほとんど含まず,雲なし		64	41
563	Ec2-2	SK36	4	須恵器	無台椀A2	(12.8)	(4.2)	8.8	−	−	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質 (高火度)	C	5B6/1 青灰	砕石状(ガリガリ),φ3mm以下の長・石多,雲なし,吹出有り	厚手,重量有,断面青紫色,内側火だすき?,内底面磨耗(使用か?)	64	41
564	Ec2-2	SK36	2 4	須恵器	短頸壺蓋	12.3	(3.5)	−	−	−	4/5	外:ロクロケズリ(方向不明) 天:ヘラ切→ロクロ,ヘラ沈線2条	硬質 (高火度)	−	5B6/1 青灰	砕石状,φ2mm以下の長・石多,内側に吹出し多	内側釉吹込,口縁融着剥し痕,外天降灰,未使用	64	41
565	Ec3-3	SK36	5	須恵器	短頸壺蓋	11.0	(2.7)	−	−	−	1/3	ロクロ 天:ロクロケズリ(右)	硬質 (高火度)	−	N7/0 灰白	シルト質(砕石状),φ3mm以下の長・石多	断面サンド,口端に身から剥した際の連続叩き痕有り,外面降灰(オリーブ灰釉),未使用	64	41
566	Ec3-2 Ec3-1	SK36 −	2 Ⅱa	須恵器	球胴短頸壺	9.8	(15.5)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:カキメ,ロクロ→ユビナデ 外:ロクロ(平滑,板使用?)	硬質 (高火度)	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少,雲なし,微小な吹出し多	口に蓋痕,肩部に降灰(黒褐釉),外面下部に釉,高台打ち欠き外しの可能性有,未使用	64	41
567	Ec3-3	SK36	2	須恵器(土師器?)	長胴壺	12.8	(8.0)	−	−	−	1/8	ロクロ 口:面取り状 内・外:カキメ	硬質 (焼締)	−	5B7/1 明青灰	シルト質(土師器の胎土),φ3mm以下の長・石大,雲なし	未使用	64	6
568	Ec2-2	SK36	4	須恵器	瓶・壺類(耳)	−	−	−	−	−	破片	棒状工具で刺突,ユビナデ貼り付け	硬質	−	10YR5/1 褐灰	シルト質,精良,砂粒をほとんど含まない		64	41
569	Ec2-2	SK36	3・4	須恵器	鉢Ⅱ	15.2	(6.2)	−	−	−	1/6	口:付加状口縁,　ロクロ 内:カキメ 外:カキメ,ロクロ	不良 (瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の石・長多,雲なし	薄手,軽量,未使用か	64	41
570	Ec3-2	SK36	2・4	須恵器	焼台?	10.6	(2.1)	−	−	−	1/12	ロクロ	硬質 (焼締)	−	N6/0 灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多	外部降灰(黒釉),小型壺・瓶類の蓋の可能性もあり	64	41
571	Ec3-3	SK36	11	黒色土器	稜椀蓋	19.0	(2.5)	−	−	−	1/2	内・外:ヨコヘラミガキ	良好	−	N7/0 灰白	シルト質,非常に精良,微小な長・石・海?	内外面黒色処理,外天剥離,全体に磨耗顕著,蓋でなく盤の可能性もあり,薄片分析試料⑩	65	6

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
572	Ec2-2 Ec2-2 Ec2-3 Ec3-2	SK36	3d・e 3 2 2	黒色土器	稜椀Ⅰ	18.0	9.7	10.6	54	59	1/2～2/3	口:強く外反 内:ヨコヘラミガキ 外:ロクロ→ヘラ先端による丁寧なヨコヘラミガキ,稜鋭い	良好(還元?)瓦器に近い	−	黒色	シルト質(非常に緻密),砂粒ほとんど含まず,雲なし,海状の白色粒	内外面黒色処理,断面灰色,高台と稜を非常に強調磨耗顕著(使用痕)	65	6
573	Ec2-2	SK36	4	黒色土器	高盤(杯部)	(12.1)	(1.0)	−	−	−	1/3	内:ロクロ→ヘラミガキ(方向不明) 外:ヨコヘラミガキ(緻密)	良好(還元?)	−	黒色	シルト質,極めて精良,微小な砂粒を微	内外面黒色処理,断面灰色,磨耗顕著,底部に剥離・接合痕	65	42
574	Ec2-2	SK36	3d・e	黒色土器	高盤(脚部)	−	(4.5)	−	−	−	1/2	ロクロ 外:上ヘラミガキ,側面:タテヘラミガキ	良好(還元?)	−	黒色	シルト質,非常に精良,微小な砂粒少	内外面黒色処理,断面灰,外側磨耗	65	42
575	Ec3-2	SK36	2・3	黒色土器	高杯	(22.6)	(12.4)	−	−	−	1/4～1/3(口縁欠)	杯内外:タテ・ヨコヘラミガキ 脚内:絞り痕,ロクロ 脚外:ヨコハケメ→タテヘラミガキ	良好(還元?)	−	黒色	シルト質,極めて精良,微小な長・石・ガラス質粒子少	内外面黒色処理,断面灰色,杯部全体的に劣化	65	42
576	Ec2-1 Ec2-2 Ec3-2 Ec4-1	SK36	2・ 3de・ 4 Ⅱa	黒色土器	球胴短頸壺	10.0	(15.2)	−	−	−	1/4～1/3	内・外:ロクロ→ヨコヘラミガキ 肩:条線2条 高台:ヨコヘラガキ	良好(還元?)瓦器に近い	−	黒色	シルト質,極めて緻密,砂粒を微,雲なし	内外面黒色処理,断面灰色,ない外面磨耗(使用痕顕著),須恵器の素地と共通	65	42
577	Ec2-2	SK36	3	黒色土器	有台杯	11.6	(4.5)	−	−	−	1/6	口:沈線 内・外:ヨコヘラミガキ(外面特に丁寧)	良好	−	N6/0 灰	シルト質,非常に精良,微小な長・雲	内外面黒色処理,足高台か?金属器模倣,全体磨耗,薄片分析試料⑪	65	6
578	Ec3-2	SK36	2	黒色土器	有台杯	10.6	(7.6)	−	−	−	1/8以下	内:ロクロ→部分的にヨコヘラミガキ 外:ヘラミガキ(方向不明)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,非常に精良,φ2mm以下の長・石・雲少	内面のみ黒色処理	65	42
579	Ec2-2	SK36	4	土師器(須恵器?)	折縁杯	12.4	(4.2)	−	−	−	1/4	口:摘み上げ状(折縁状) 外:ロクロ	やや不良(軟質)	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質(粉っぽい),土師器らしい胎土φ4mm以下長・石・カ多		65	−
580	Ec3-3	SK36	2	土師器(須恵器?)	無台杯C	9.4	(3.2)	−	−	−	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好(瓦質)	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,砂粒はほとんど含まず,雲なし	外面下部にヘラ切時の粘土の盛り上がり,畿内の杯の模倣?	65	42
581	Ec3-2	SK36	2・6	土師器(須恵器?)	無台杯C	9.4	2.7	5.8	29	62	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,砂粒はほとんど含まず	底部に黒斑	65	42
582	Ec3-3	SK36	2	土師器(須恵器?)	無台杯AⅠ	13.6	4.2	10.0	31	74	完存	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ描	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(石・長・雲・褐)	外底ヘラ記号「×」	65	42
583	Ec2-3	SK36	2	土師器(須恵器?)	無台杯AⅠ	13.6	3.9	9.2	29	68	1/2	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),ヘラ描	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(石・長・雲・褐)	外底,ヘラ記号「×」,X線回折等分析試料⑬,薄片分析試料⑧	65	6・42
584	Ec3-3	SK36	2	土師器(須恵器?)	無台杯AⅡ	12.4	3.6	8.4	29	68	1/2弱	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,精良,φ5mm以下の長・石少,雲なし	薄手,軽量	65	42

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
585	Ec3-3	SK36	2	土師器(須恵器?)	無台杯AII	11.2	3.6	8.2	32	73	1/4	ロクロ 底:ヘラ切	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,(強粘性)精良,砂粒を微,雲なし		65	42
586	Ec2-3	SK36	4	土師器(須恵器?)	無台杯AII	11.8	3.5	7.4	30	63	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好(軟質)	−	10YR8/2 灰白	シルト質,非常に精良,微小な長・石微,雲なし	薄手,軽量	65	42
587	Ec2-2	SK36	2・4・6	土師器	無台椀AII1	15.2	(7.9)	−	−	−	1/6〜1/4	外:ロクロ(凹凸明瞭)	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,非常に精良,φ2mm以下の長・石・雲少	鋳模倣,未使用	65	−
588	Ec2-2	SK36	3	土師器	皿	16.2	(2.6)	−	−	−	1/8	外:ロクロ,ヘラケズリ	良好	−	10YR7/2 にぶい黄橙	φ2mm以下の長・石多	スス付着(使用か?)	65	42
589	Ec3-3	SK36	2・4	土師器	皿	15.6	3.4	6.6	22	42	1/3	口:摘み上げ状 外:ロクロ,ヘラケズリ(左→右)	良好	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ2mm以下の長・石・黒多	底に黒斑	65	42
590	Ec3-3	SK36	2	土師器	長胴甕	24.4	(8.0)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:カキメ 外:部分的にカキメ	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ・赤		66	42
591	Ec3-2	SK36	2・6	土師器	小型甕I?	24.1	(11.3)	−	−	−	1/4	口:ロクロ 内:カキメ 外:ロクロ→カキメ→ ハケメケズリ	良好	−	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多	外面黒斑	66	42
592	Ec2-2	SK36	3	土師器	長胴甕	22.6	(8.1)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:ロクロ 外:カキメ	良好(やや硬質)	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	外面黒斑	66	42
593	Ec2-2	SK36	3・3d・e4	土師器	小型甕I?	21.8	(14.1)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ 外:カキメ(条幅2mm)タテハケメケズリ(上→下)	良好	−	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・金多,赤少	内側にススかコゲ(使用によるか?)	66	42
594	Ec3-2	SK36	2・6	土師器	長胴甕	20.1	(14.5)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:ヨコハケメ→タテハケメ 外:カキメ→タテハケメ	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・褐・カ多		66	42
595	Ec2-2 Ec2-3	SK36	2・3・4・5	土師器	長胴甕	19.6	(6.3)	−	−	−	1/5	口:ロクロ,付加状 内:ロクロ 外:カキメ	良好	−	7.5YR8/4浅黄橙	シルト質,精良,微小な長・赤・金少,石少		66	42
596	Ec3-3	SK36	2	土師器	長胴甕	19.2	(7.8)	−	−	−	1/6強	口:ロクロ 内:ヨコハケメ 外:平行タタキ→体カキメ	良好(やや硬質)	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・カ多		66	42
597	Ec2-3 Ec2-2	SK36	2・4・6	土師器	小型甕BI?	(24.8)	(9.9)	13.4	−	−	1/4	内:ハケメ(細→粗) 外:ハケメ(粗→タテ・ナナメ) 底:ヘラ調整,切り離し方法不明	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・花・白・金多	外面黒斑と火色	66	6
598	Ec3-3	SK36	2	土師器	長胴甕	(16.4)	(7.9)	(丸底)	−	−	4/5	内:タテハケメ,下ヨコハケ→タテハケメ 外:タテハケメ, 底:ナデ・ヨコハケメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石・雲	尖底,底部黒斑	66	42
599	Ec3-2 Ec2-2	SK36	2・3de・4〜6	土師器	長胴甕	(20.3)	(20.0)	−	−	−	1/6	内:ヨコ・ナナメハケメ 外:タテ・ナナメハケメケズリ	やや軟質	−	2.5Y7/2 灰黄	シルト質,φ5mm以下の長・石・カ多	内外面工具同一か	66	43

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
600	Ec3-3	SK36	5 2 底P	土師器	小型甕AII	14.8	13.6	6.6	92	45	1/3	口:ロクロ 内:カキメの残痕 外:カキメ,下ロクロ 底:ヘラ切→ナデ?	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質(粉っぽい),φ3mm以下の長・石・カ多	外側,原体異なるか?	67	43
601	Ec3-2	SK36	2	土師器	小型甕AII	11.6	12.1	7.4	104	64	5/6	外:カキメ→ロクロケズリ(右) 底:ハケメ?	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質(粉っぽい),φ5mm以下の長・石・流?多(角粒多い)雲少	原体異なるか,口にアク,内側一部ヨコレ?外面やや強めの二次焼成	67	43
602	Ec2-2	SK36	4	土師器	小型甕AII	12.4	11.7	6.5	94	52	1/3弱	ロクロ 口:摘み上げ 外:ロクロ→ロクロケズリ 底:ヘラ切	やや不良	−	7.5YR8/2 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石・金多		67	43
603	Ec2-2	SK36	4	土師器	小型甕AII	(14.3)	(12.3)	8.4	−	−	1/6	内:カキメ,下ユビオサエ痕 外:カキメ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ大,φ3mm大の花	外面上部に粘土貼付痕,下部粘土瘤貼付(補修か)	67	43
604	Ec2-2	SK36	3d・e	土師器	小型甕AII	(12.9)	(11.4)	8.2	−	−	1/4	内:カキメ 外:カキメ→軽いロクロケズリ 底:静止糸切り	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・黒多	外面火色	67	43
605	Ec3-3	SK36	2	土師器	小型甕AII	(13.3)	(10.8)	6.6	−	−	2/3	内:カキメ 外:カキメ→ロクロケズリ 底:切り離し不明,ヘラ調整	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ大	外面黒斑	67	43
606	Ec3-2	SK36	2	土師器	小型甕AIII	10.2	8.0	−	−	−	1/3	ロクロ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・雲多	丸底	67	43
607	Ec2-2	SK36	2・4・6	土師器	小型甕AIII	(11.3)	(9.5)	5.4	−	−	1/2	口:ロクロ 内:ロクロ→ロクロケズリ 外:静止糸切り	やや不良	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ5mm以下の長・石・白大	外面黒斑	67	43
608	Ec3-2	SK36	2	土師器	小型甕AIII	(10.7)	(7.8)	6.2	−	−	1/2	ロクロ(右) 底:ヘラ切?	良好	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・黒大		67	43
609	Ec2-3	SK36	3・4	土師器	小型甕AIII	(9.7)	(5.8)	4.7	−	−	1/2弱	外:ロクロ(右)→ロクロケズリ 底:糸切り(右?)	良好	−	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・黒多		67	43
610	Ec2-2	SK36	2	土師器	小型甕AIV	7.8	6.0	5.8	77	74	3/4	ロクロ 口:内折 底:ヘラ切(右?)	良好	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・安?・カ多	外面に棒状黒斑	67	43
611	Ec2-2	SK36	4	土師器	小型甕BIII	10.2	11.0	6.6	108	65	3/4	外:ロクロ,ヘラナデ→ヘラケズリ 底:ヘラケズリ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の円・亜角粒多(長・石)雲なし	ススの付着なし,X線回折等分析試料⑭,薄片分析試料⑨	67	6
612	Ec2-2	SK36	2	土師器	小型甕BII	(12.8)	(9.6)	7.5	−	−	3/4	内:カキメ,ロクロ 外:カキメ,ハケメケズリ 底:ヘラ切(右)	良好	−	7.5YR6/3 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ・黒多	内外面スス付着,下端粘土瘤貼付(カマセ材?)	67	43
613	Ec2-2	SK36	4 3de 3	土師器	小型甕BI	15.0	20.5	8.4	137	56	2/3	口:摘み上げ,ロクロ 内:カキメ 外:カキメ→ハケメケズリ 底:ナデ?	良好	−	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	内側条痕不明瞭,所々スス付着,須恵器長胴壺(瓶)の容量に近い,フォルム調整も共通	67	43

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
614	Ec2-2 Ec2-2 Ec3-3	SK36	4 3d・e 底P	土師器	小型甕BⅠ	(19.3)	10.5	8.8	−	−	1/3	内:ロクロ(カキメ?),細い条線残る,ハケメ原体幅? 外:カキメ,ハケメケズリ(上→下)	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ7mm以下の長・石・花・金多	外側黒斑状	67	43
615	Ec2-2	SK36	3・4	土師器	小型甕BⅠ?	(20.1)	(9.6)	8.1	−	−	1/2強	内:カキメ 外:ハケメケズリ 底:ナデ,ハケメ	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・カ・黒大		67	43
616	Ec2-2	SK36	4	土師器	小型甕BⅠ	(17.3)	(11.5)	8.1	−	−	1/3	内:カキメ→ヨコハケメ 外:カキメ→ナナメハケメ→ハケメケズリ 底:静止糸切り	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・黒多	外面ススと吹きこぼれ?	67	43
617	Ec2-2 Ec3-2 Ec3-3	SK36	2・4	土師器	小型甕Ⅱ	14.3	(10.5)	−	−	−	1/2強	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ→ハケメ 外:カキメ	良好	−	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		67	43
618	Ec2-2	SK36	3	土師器	小型甕Ⅱ	13.5	(8.4)	−	−	−	1/3	口:ロクロ,受け口状 内:カキメ 外:不明	やや不良	−	7.5YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石多,カ	外面全体被熱顕著,口縁部内面にアク,内面スス付着	67	44
619	Ec3-2	SK36	−	土師器	小型甕Ⅲ	10.3	(3.8)	−	−	−	1/6	ロクロ 口:摘み上げ	良好	−	10YR5/2 灰黄褐	シルト質,精良,微小な長・石・雲少	内面アク・外面吹きこぼれ・外面全体スス付着	67	44
620	Ec2-2	SK36	4	土師器	小型甕Ⅱ	11.8	(6.3)	−	−	−	1/4	ロクロ 口:摘み上げ	良好	−	7.5YR7/4 にぶい橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・褐・金多		67	44
621	Ec3-3	SK36	2	土師器	小型甕Ⅱ	12.7	(6.6)	−	−	−	1/4弱	口:ロクロ,摘み上げ 内・外:カキメ	やや不良	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ1mm以下の長・石・カ多		67	44
622	Ec2-2	SK36	3de・4	土師器	鍋	(35.8)	(8.3)	−	−	−	1/12	口:ロクロ 内:ロクロ,カキメ 外:カキメ	やや不良	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ・雲多		67	44
623	Ec2-2	SK36	3de・4・Ⅱ	土師器	円筒形土製品	(15.9)	(13.5)	13.0	−	−	2/3	非ロクロ成形 内:ハケメナデ 外:タタキ→タテハケメケズリ 底:ナデ,ハケメ	良好	−	7.5YR6/6 橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・金・黒大,φ2mm～2Cmの粘	内面接合痕,外面黒斑	67	44
624	Ec3-2	SK36	2	土師器	鍋(把手)	−	−	−	−	−	破片	ナデ	やや不良	−	10YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多		67	44
625	Ec3-2	SK36		土師器	土錘BⅢ(紡錘形)	2.0	4.0	(孔径)0.5	−	−	一部欠損	側:指頭圧痕 端:面あり	やや不良		10YR8/2 灰白	φ1mm以上の長・石少,雲母なし	重量:11.2g	67	44
626	Ec2-2	SK36	4	土師器	製塩土器(支脚)	−	(5.3)	10.6	−	−	1/4	内・外:輪積み・ユビオサエ 外:上端クビレ部横方向ユビナデ 端:接地面ケズリ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土質,φ7mm以下の長・石・金・黒多		67	44
627	Ic2-3	SE1	1	須恵器	無台杯BⅡ	11.3	3.4	8.0	30	71	完存	ロクロ 底:ヘラ切(右)	硬質(高火度,二次焼成)	−	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ6mm以下の長・石多	全面降灰・自然釉,内・外底面須恵器片付着,焼台に転用,底面筋状痕	69	7
628	Ic2-3	SE1	1	須恵器	無台杯BⅡ	12.4	3.9	8.4	31	68	1/3	ロクロ 口:わずかに沈線状　底:ヘラ切	やや不良(瓦質)	C	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石		69	44
629	Ic2-2	SE1	1	須恵器	無台杯B	(11.6)	(1.5)	9.0	−	−	1/6	ロクロ 底:ヘラ切,ヘラ抜き痕	良好	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石	外底面パッチ状に炭化物付着(二次的?)	69	44

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
630	Ic2-3	SE1	1	土師器	小型甕	17.0	(8.5)	−	−	−	1/6以下	口:端部摘み上げ 内・外:カキメ	良好(やや硬質)	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金・カ	火色	69	44
631	Ic2-3	SE1	1	土師器	小型甕Ⅱ	14.1	(8.2)	−	−	−	1/4	口:沈線状 内・外:カキメ	やや不良	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石多,雲微	内面劣化顕著	69	44
632	Ic2-2 Ic2-2 Ic2-3 Ic3-3	SE1	1 − − −	土師器	長胴甕	19.0	−	−	−	−	1/6以下	口:折込 内:カキメ 外:沈線上の段,カキメ,タタキ→ハケ	硬質	−	7.5YR7/6橙	粘土質,φ6mm以下の長・石大,雲微		69	−
633	Ic2-3	SE1	1	土師器	長胴甕	18.5	(16.5)	−	−	−	1/3	ロクロ 内:タテ・ナナメハケメ 外:カキメ→平行タタキ(木目有)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		69	44
634	Ic2-3	SE1	1	土師器	長胴甕	(22.7)	(14.0)	−	−	−	1/4	内:同心円当具痕→タテハケメ 外:平行タタキ(木目有)	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石・カ多		69	44
635	Ic2-3 Ic2-3	SE1	1	土師器	鍋	(42.8)	(6.9)	−	−	−	1/6以下	内:カキメ→ロクロ→ハケメ 外:カキメ→ロクロ	良好	−	7.5Y7/4 にぶい橙	シルト質,φ6mm以下の長・石多,金少	器面劣化,黒斑	69	44
636	Gc4-2	SE3	5	須恵器	有台杯C蓋	10.4	2.5	2.0	24	19	1/3	外:ヘラ切→ロクロ 口:沈線状 摘:貼付→ロクロ	良好	−	10YR6/3	シルト質,φ5mm以下の長・石多	内面炭化物?付着(墨ではない)	72	44
637	Gc4-2	SE3	1〜4	須恵器	有台杯AⅠ蓋	15.0	(1.9)	−	−	−	1/8	口:沈線状 天:ヘラ切	硬質(高火度)	Aか?	10Y5/1 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多	自然釉	72	44
638	Gc4-2	SE3	5	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	3.6	8.0	27	61	1/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	2.5Y7/1 灰白	粘土質,精良,φ4mm以下の長・石微		72	44
639	Gc4-2	SE3	1〜4	須恵器	有台杯AⅠ	13.2	3.4	6.9	26	52	1/6	底:ヘラ切→高台貼付→ロクロ	硬質	−	5Y6/1 灰	粘土質,φ3mm以下の長・石多		72	44
640	Gc3-2	SE3	4 1〜4	須恵器	有台杯AⅠ	13.0	4.1	7.2	32	55	2/3	ロクロ(右),水挽き・ちぢれ痕 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好	Aか?	N5/1 灰	粘土質,φ5mm以下の長・石	薄作り,自然釉	72	44
641	Gc4-2	SE3	2〜3 1〜4	須恵器	有台杯AⅠ	12.8	4.0	7.2	31	56	1/3	外:ロクロ(右)→ヘラ切(右)	良好	−	N6/0 灰	粘土質,精良,φ1mm以下の長・石微		72	44
642	Gc3-2	SE3	1〜4	須恵器	有台杯AⅠ	12.7	3.9	9.1	31	72	1/2	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	−	10Y6/1 灰	粘土質,精良,砂粒ほとんど含まない	重量有,焼き歪み	72	44
643	Gc4-2	SE3	1〜4	須恵器	有台杯BⅠ	(15.9)	(7.1)	10.5	−	−	1/2	ロクロ(左) 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好(やや硬質)	−	5Y6/1 灰	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少	黒色吹出物多,細かい焼き膨れ多	72	44
644	Gc4-2 Gc4-2	SE3	1〜4	須恵器	有台杯C2	9.3	5.4	5.3	58	57	1/3	ロクロ 底:高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	Cか単独	5Y5/1 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石微	高台焼き歪み,降灰,自然釉,黒色吹出物少	72	44
645	Gc4-2	SE3	2・3	須恵器	折縁杯A	13.6	4.2	7.4	31	54	2/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付→ロクロ	良好(焼締)	Aか	N7/0 灰白	シルト質,精良(砕石状),φ2mm以下の長・石少,吹出有り	稜椀形,厚手,重量有,内底面摩耗(使用痕?),有蓋?	72	44
646	Gc4-2	SE3	3	須恵器	無台杯BⅠ	12.8	3.2	9.6	25	75	3/4	ロクロ 底:ヘラ切(右)	良好(やや軟質)	C	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石	焼色	72	44
647	Gc4-2	SE3	2・3	須恵器	無台杯AⅠ	12.7	3.1	9.2	24	72	3/4	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	硬質	C	10Y7/1 灰白	粘土質,φ3mm以下の長・石多		72	44
648	Gc4-2	SE3	3	須恵器	無台杯BⅠ	13.2	3.0	8.6	23	65	2/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好(やや軟質)	C	5Y7/1 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石多	重量有	72	44

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
649	Gc4-2	SE3	3	須恵器	無台杯BⅠ	12.6	3.4	8.4	27	67	1/2	ロクロ 底:ヘラ切(右)	良好(やや軟質)	C	5Y7/1 灰	シルト質,精良,微小な長・石微	重量有	72	44
650	Gc3-2	SE3	4	須恵器	無台杯BⅡ	11.8	2.9	8.4	25	71	1/3	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	C	2.5Y7/1 灰白	粘土質,精良,φ4mm以下の長・石少	薄作り	72	45
651	Gc3-2	SE3	4 1～4	須恵器	無台杯BⅡ	11.7	2.9	8.4	25	72	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好(やや硬質)	C	N6/0 灰	粘土質,φ5mm以下の長・石多	薄作り	72	45
652	Gc3-2 Gc4-2	SE3	1～4 2	須恵器	無台杯B	(11.4)	(2.0)	8.4	－	－	3/4	ロクロ 底:ヘラ切	良好	－	5Y6/1 灰	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少		72	－
653	Gc4-2	SE3	3	須恵器	無台椀A1	13.0	5.8	7.2	45	55	1/4	外:ロクロ(右)→縦ケズリ→斜めケズリ→指押え 底:ヘラ切→ヘラケズリ風ナデ	硬質	不明	10Y5/1灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	焼き歪み,金属器模倣,重ね焼きCか?	72	45
654	Gc3-2	SE3	4 1～4	須恵器	短頸壷蓋	12.0	(2.0)	－	－	－	1/4	ロクロ 天:ロクロケズリ	硬質(高火度)	－	N5/1　灰	粘土質,φ2mm以下の長・石多	天井部窯滓付着,自然釉	72	45
655	Gc3-2	SE3	1～4	須恵器	球胴短頸壷	－	(9.6)	9.4	－	－	1/4	内:ロクロ,カキメ 外:ロクロ→ハケメケズリ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	硬質(高火度)	－	2.5Y4/1 黄灰	粘土質,φ2mm以下の長・石多		72	45
656	Gc3-2 Gc4-2	SE3	1～4	須恵器	横瓶	12.0	(3.5)	－	－	－	1/2	ロクロ 内:同心円当具痕	不良	－	10YR8/2 灰白	シルト質精良,φ2mm以下長・石・雲多		72	45
657	Gc4-2	SE3	1～4	須恵器	甕	－	(2.9)	－	－	－	破片	ロクロ 外:波状文(3条)	良好	－	N6/0 灰	シルト質精良,φ2mm以下長・石・褐		72	45
658	Gc3-2	SE3	2・3・4	黒色土器	稜椀Ⅱ	10.2	(3.1)	－	－	－	1/8	内:丁寧なヨコヘラミガキ 外:ロクロ,ロクロケズリ(右)	良好	－	2.5Y8/3 淡黄	シルト質,精良,微小な砂粒,雲若干,海?	内面のみ黒色処理,外面黒斑,薄手	72	45
659	Gc3-2	SE3	1～4	須恵器	焼台	5.6	1.3	4.8	23	86	1/6	外:ロクロ(やや雑) 底:ヘラ切,縁辺ケズリ	硬質(焼締)	－	5B6/1 青灰	シルト質,砕石状,φ2mm以下の長・石多		72	45
660	Gc4-2	SE3	2～3	土師器	小型甕AⅢ	(10.6)	(3.9)	7.4	－	－	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	やや不良	－	7.5YR7/6 橙	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石少	外面劣化	72	45
661	Gc4-2	SE3		土師器	鍋・甕類(把手)	－	－	－	－	－	破片	板状粘土貼付→棒状工具で斜めに穿孔	良好	－	10YR8/2 灰白	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多		72	45
662	Hb2-3	P1		須恵器	有台杯? 折縁杯?	(11.6)	(2.3)	7.5	－	－	底部	ロクロ 底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ,ヘラ描	良好	－	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト質,φ4mm以下の長・石多	重量有,ヘラ記号[卅],内底面・高台摩耗,打ち欠き後転用か	73	45
663	Hb2-3	P1	1	須恵器	有台杯BⅠ	(14.0)	(6.3)	8.2	－	－	1/3	ロクロ 内底:ユビナデ 外底:ヘラ切,高台貼付→ロクロ	良好	－	10Y5/1 灰	シルト質,φ3mm以下の石,φ1mm以下の長・石多,Φ2mmの黒色粒子微,		73	45
664	Hb2-3	P1	1	須恵器	無台杯BⅠ	13.1	3.6	8.3	27	63	1/3	ロクロ 底:ヘラ切	良好	C	10Y5/1 灰	シルト質,φ1mm以下の長・石,		73	45
665	Hb2-3	P1	1	土師器	長胴甕	－	(8.8)	－	－	－	底部破片	内:当て具痕 外:平行タタキ	良好	－	7.5YR7/6 橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多,		73	45
666	Hb2-3	P1	1	土師器	土錘BⅡ(紡錘形)	4.7	(7.2)	(孔径)(1.8)	－	－	1/2	側:指・掌握り圧痕 端:指頭圧痕	不良		10YR5/2灰黄褐	φ3mm以下の長・石多カ・骨針少	重量:85.4g	73	45

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
667	Ec3-4	P	−	珠洲	双耳壺	8.9	11.5	7.6	129	85	完存	外:ロクロ,指押さえ	良好	−	7.5Y4/1灰	−	内面全体・外面一側面赤色顔料(ベンガラ)付着,顔料容器?	73	7
遺構外出土遺物一覧																			
668	排土	−		須恵器	有台杯AⅠ蓋	14.7	(2.4)	2.3	−	−	3/4	天:ヘラ切,摘貼付→ロクロ 外:ロクロ(右)	良好	A	5Y6/1 灰	シルト質,φ4mm以下の長・石多	天井部焼き歪み(ヘタレ)・降灰,焼き膨れ,黒色吹出	74	45
669	Ec2-2	−	Ⅱa	須恵器	有台杯AⅠ蓋	(8.7)	(2.0)	−	−	−	3/4	ロクロ 外:ロクロケズリ	良好	−	5Y5/1 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多	重量有,蓋摘みの貼付時に失敗して摘みをナデつぶした物,転用か,内面摩耗	74	45
670	Gb5-1	−	Ⅱa	須恵器	有台杯D蓋(環状摘)	−	(1.2)	(4.0)	−	−	全周	−	やや不良(瓦質)	単独orA	2.5Y5/1黄灰	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石少	外面自然釉,金属器模倣品	74	45
671	Ec2-1	−	乱	須恵器	有台杯D蓋(環状摘)	−	(1.5)	(3.4)	−	−	摘みのみ	ロクロ	良好	−	10Y6/1 灰	粘土質,精良,φ5mm以下の長・石	金属器模倣品	74	45
672	Fb	−	Ⅰ	須恵器	有台杯AⅠ蓋	13.4	(1.7)	−	−	−	1/8	ロクロ	硬質(高火度)	B1	5Y6/1灰	粘土質,φ1mm以下の長・英	外面別個体片付着(重ね焼き痕),内面窯滓付着顕著(自然釉)	74	45
673	Ec1-3	−	Ⅱa	須恵器	有台杯D蓋? 折縁杯A?	14.5	(2.4)	−	−	−	1/10	内・外:ロクロ 口端:摘み上げ	良好	−	2.5Y7/1 灰白	粘土質,精良,砂粒をほとんど含まず		74	45
674	Hc2-5	−	Ⅰ	須恵器	有台杯AⅠ	12.8	4.3	7.6	34	59	1/4	ロクロ 底:ヘラ切→ロクロ,高台貼付→ロクロ→ヘラ描	良好	C	10YR6/2 灰黄褐	粘土質,精良,φ3mm以下の長・石微	重量有,とても厚作り,高台内ヘラ記号「メ」,側面焼成時の亀裂	74	45
675	Ec5-1 Ec5-2	−	Ⅱa	須恵器	有台杯BⅠ1	14.6	6.2	8.1	42	55	2/3	ロクロ 口:玉縁状,沈線 外:ロクロケズリ 底:高台貼付→ロクロ	硬質焼締	C	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	足高高台,内・外面降灰(外面火ダスキ?),焼き膨れ,底面に焼成時の亀裂,重量有	74	7
676	Ec5-2	−	Ⅱa	須恵器	有台杯C1	10.6	4.3	5.2	41	49	1/3	外:ロクロ(右),ロクロケズリ 底:ヘラ切(右)	良好,焼締	C	N6/0 灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	重焼き痕,内面降灰	74	45
677	Fb5-3	−	Ⅱa	須恵器	有台杯C2	9.2	5.2	4.7	57	51	1/4	外:ロクロケズリ→ロクロ 底部:ヘラ切	良好(赤焼状態)	−	7.5Y5/3 にぶい褐	シルト質,φ2mm以下の長・石多	薄作り,外面自然釉,内底面磨耗	74	45
678	Fb3-5	−	Ⅱa	須恵器	有台杯E	13.8	4.0	8.8	29	64	1/2弱	外:ロクロ(右) 底:ヘラ切→ナデ,高台貼付(シャープ)→ロクロ　内底:ユビナデ	硬質(焼締)	C	5B5/1 青灰	シルト質,φ4mm以下の長・石・褐?多	足高高台,薄手,やや重量有,未使用	74	45

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
679	Ec2-1	−	排	須恵器	有台杯DⅡ2	11.6	7.4	7.8	64	67	1/3	ロクロ(右?) 口:シャープ,内折 内:ユビナデ　外:沈線2条 底:ヘラ切→ナデ?,高台貼付け(シャープ)→ロクロ	硬質(高火度)	C?	7.5YR4/1	シルト質,やや砕石状,φ1mm以下の長・石・ガラス質粒子多,海?	口縁薄手,重量有,未使用	74	45
680	Ec3-3	−	Ⅱa	須恵器	有台杯DⅡ	(12.5)	(3.8)	−	−	−	1/8	ロクロ 内:水挽きちぢれ痕 外:沈線2条	良好硬質	−	N5/0 灰	粘土質,精良,φ5mm以下の長・石少	焼き膨れ,内面・口縁上面降灰,仏鉢?	74	45
681	Ec3-5	調査区外水路内(遺構?)		須恵器	有台杯DⅠ1	14.8	7.0	8.6	47	58	3/4	ロクロ 口:沈線 底:高台貼付→ロクロ	良好	単独?	5Y7/1灰白	粘土質,精良,砂粒をほとんど含まず	底面に焼成時の亀裂	74	7
682	Fb1-5	−	Ⅱa	須恵器	有台杯DⅠ2	13.8	7.5	6.7	54	49	1/5	ロクロ 口:沈線 外:片沈線2条,縦ナデ(ケズリ?) 底:高台貼付→ロクロ	良好	C?	7.5Y7/1 灰白	粘土質,精良,φ5mm以下の長・石少		74	45
683	Ic5-3	−	ⅡC	須恵器	折縁杯A	16.8	(3.3)	−	−	−	1/6	口:内折,ロクロ 外:ロクロケズリ,沈線2条	やや軟質(瓦質)	−	2.5Y8/1 灰白	シルト質,非常に精良,砂粒を微	稜椀形,軽量,未使用,蓋の可能性有	74	45
684	Ec2-3	−	Ⅱa	須恵器	折縁杯B	(11.5)	(4.6)	(7.0)	40	61	破片	ロクロ	良好	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ3mm以下の長・石少		74	−
685	Gc5-2	−	Ⅱa	須恵器	折縁杯C	13.2	3.9	6.0	30	45	1/3	外:ロクロ(右) 底:ヘラ切(右),高台貼付(シャープ)→ロクロ	良好	C?	2.5Y7/1 灰白	シルト質,φ3mm以下の石・長多	内側焼色,外面稜を意識,作り丁寧,薄手,軽量,未使用	74	45
686	Ic5-3	−	乱	須恵器	折縁杯D	17.2	4.2	11.2	24	65	1/4	ロクロ 底:ロクロケズリ,高台貼付→ロクロケズリ	良好	−	2.5Y7/1 灰白	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石少	重量有	74	−
687	Hb1-4	−	Ⅱa	須恵器	有台杯?	−	−	−	−	−	破片	内:ロクロ 外:ヘラ切,ヘラ描	不良(瓦質)	−	10YR7/2 灰黄褐	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石微	外底ヘラ記号「上」	74	46
688	Fc3-2	−	乱	須恵器	無台杯BⅡ	11.6	2.9	8.0	25	69	口1/6 底 完	ロクロ 底:ヘラ切→ナデ,ヘラ描	硬質	C	10Y6/1 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石大	重焼き痕,重量有,外底面ヘラ記号「—」	74	46
689	Ec2-1	−	Ⅱa	須恵器	無台杯B	(11.6)	(1.8)	7.9	−	−	底部	ロクロ 底:ヘラ切(右)(ヘラ抜き痕),ヘラ描	軟質(瓦質)	−	2.5Y8/2 灰白	シルト質,精良,微小な長・石微	重量有,外底面ヘラ記号「—」	74	46
690	Fb5-5	−	Ⅱa	須恵器	無台椀A2	11.0	3.8	7.2	35	65	全周	ロクロ 底:ヘラ切(右)	硬質	C	N7/0 灰白	シルト質,φ5mm以下の長・石	黒色吹出物多	74	46
691	Ec3-3	−	Ⅱa	須恵器	無台椀B	12.0	2.6	8.4	22	70	1/4	底:ヘラ切,板痕有	硬質(焼締)	C	N6/0 灰	シルト質(モルタル状),φ2mm以下の長・石大	厚手,内底面摩耗顕著(使用痕)	74	7
692	Ec	−	Ⅰ	須恵器	短頸壺蓋	20.1	(4.8)	−	−	−	1/12	外:ロクロ,タタキ→ヘラケズリ	硬質(高火度)	−	N4/1灰	シルト質,φ2mm以下の長・石多	外面自然釉,内面短頸壺口縁融着痕	74	46
693	Fb	—	Ⅰ	須恵器	水瓶	−	(3.8)	−	−	−	1/6強	ロクロ	硬質	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石		74	46
694	Fb1-5	−	Ⅰa	須恵器	小型広口瓶	(6.4)	(2.9)	−	−	−	1/6以下	ロクロ	良好	−	N7/0	粘土質,精良,φ1mm以下の長・石少	非常に薄手,内面自然釉	74	46
695	Gb	−	Ⅱa	須恵器	小型瓶?	−	(3.1)	−	−	−	1/6以下	ロクロ 外:沈線2条	良好	−	N5/0 灰	シルト質,φ5mm以下の長・石多	仏鉢の可能性もあり	74	46

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
696	−	−	排土	須恵器	横瓶	13.6	(8.2)	−	−	−	1/6	口:ロクロ 内:同心円当具痕 外:平行タタキ	硬質(高火度)	−	N4/0 灰	粘土質,φ3mm以下の長・石	外面全体に降灰,頸部内面に円盤切り取り痕	74	46
697	Fc5-1	−	IIa	須恵器	甕	23.0	(6.7)	−	−	−	1/4	口:平行タタキ→ロクロ 内:ロクロ,同心円当具痕 外:平行タタキ(木目有)	硬質堅緻	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石		74	46
698	Gb1-3	−	IIa	須恵器	瓶・壺類(把手か双耳)	−	−	−	−	−	破片	−	硬質(高火度)	−	10YR5/1 褐灰	粘土質,精良,φ2mm以下の長・石	窯滓付着	74	46
699	Fb5-5	−	IIa	須恵器	瓶・壺類(耳)	−	−	−	−	−	破片	ケズリ	硬質(高火度)	−	2.5Y6/1黄灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石		74	46
700	Jc5-1	−	IIC	須恵器	焼台	5.7	2.9	5.2	51	91	4/5	ロクロ(右) 底:ヘラ切(右)	良好	−	N6/0 灰	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石少	一部生焼け	74	7
701	−	−	排土	須恵器	焼台(転用品)	−	−	−	−	−	破片	内:同心円当具痕 外:平行タタキ(木目有)	硬質(二次焼成)	−	N3/0暗灰	シルト質,φ3mm以下の長・石多	須恵器甕破片を焼台に転用,甕割れ口にも降灰,壺類底部と融着	74	46
702	Ec2-2	−	IIa	土師器	台付盤?(脚部)	(8.3)	(3.4)	−	−	−	1/12	ロクロ,スカシ有,台接合部でハガレ 内:水挽き・ちぢれ痕	やや不良(断面黒色)	−	7.5YR7/4にぶい橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長・石・黒		75	46
703	Ed4-3	調査区外水路内(遺構?)		土師器?	折縁杯	8.2	(2.8)	−	−	−	高台のみ欠	ロクロ 口:折縁状 外:稜 底:高台剥がれ	やや不良(瓦質)	−	10YR8/2 灰白	シルト質,精良,砂粒をほとんど含まず	厚手,未使用	75	46
704	Ec2-2	−	IIa	土師器	無台椀AII1	(16.8)	(5.5)	−	−	−	1/12	ロクロ 口:摘み出し	やや軟質	−	10YR7/3 にぶい黄橙	シルト質精良,φ2mm以下長・石・雲		75	46
705	Ec4-1	−	IIa	土師器	鉢	19.0	(5.4)	−	−	−	破片	外:隆帯2条,カキメ	やや軟質	−	10YR8/4 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・カ多	内面劣化顕著,仏具か	75	46
706	Ic2-2	−	IIa	土師器	小型甕	(15.0)	(5.1)	−	−	−	破片	ロクロ 外:カキメ	還元硬質	−	10YR6/2 灰黄褐	シルト質,φ4mm以下の長・石多,	土師器と同じ胎土	75	7
707		−	排土	土師器	鍋・甕類(把手)	−	−	−	−	−	破片	指ナデ,ヘラ状工具で横方向に穿孔	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・白・カ多		75	46
708	Fa5-5	調査区外	IIa(遺構?)	土師器	長胴甕	19.6	(20.3)	−	−	−	1/4弱	口:ロクロ,摘み上げ 内:カキメ→部分的にタテハケメ 外:平行タタキ→カキメ→ハケメ	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	シルト質,φ2mm以下の長・石・カ多		75	46
709	Gc1-4	−	−	土師器	鍋	35.2	(8.7)	−	−	−	1/6	口:ロクロ,摘み上げ 内:部分的にカキメ 外:カキメ→タテハケメケズリ	良好	−	10YR7/4 にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多		75	46
710	Fc5-5	−	IIa	土師器	円筒形土製品	11.7	(5.4)	−	−	−	1/8	内:ロクロ 外:カキメ	良好	−	10YR7/2にぶい黄橙	粘土質,精良,φ1mm以下の長・石・金多	薄手	75	46
711	Ec3-3	−	IIa	土師器	円筒形土製品	(12.4)	(5.2)	−	−	−	1/8以下	内:ナデ→カキメ→斜めハケ 外:有段,ロクロ→カキメ	良好	−	10YR7/4にぶい黄橙	シルト質,φ3mm以下の長・石・金多		75	46
712	Fc4-2	−	I	土製品	土錘AI(円筒形)	5.6	9.5	(孔径)1.3	−	−	一部欠損	側:指・掌握り圧痕,筋状圧痕 端:指頭圧痕	良好	−	10YR8/3 浅黄橙	粘土質精良,φ3mm以下長・石・褐・カ微	重量:251.5g 一部火色	75	46

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(推径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土・混入物	備考(劣化)	挿図	写真図版
713	Gc3-2	−	IIa	土製品	土錘BII(紡錘形)	4.1	6.7	(孔径)1.8	−	−	一部欠損	側:指・掌握り圧痕,両端指頭圧痕 端:面なし	良好	−	10YR8/4 浅黄橙	φ5mm以下の長・石多,雲少	重量:70.9g 表面やや劣化,孔縁摩耗	75	46
714	Fc2-3	−	IIa	土師器	土錘BIII(紡錘形)	2.0	4.0	(孔径)0.5	−	−	一部欠損	側:指ナデ 端:平滑	良好	−	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒をほとんど含まず	重量:9.5g 一部火色	75	46
715	Fc2-3	−	乱	土師器	土錘BIII(紡錘形)	2.0	3.7	(孔径)0.5	−	−	一部欠損	側:指ナデ,指頭圧痕 端:平滑	良好	−	10YR6/2 灰黄褐	砂粒をほとんど含まず	重量:11.6g	75	46
716	Ec4-2	−	IIa	土師器	土錘BIII(紡錘形)	1.9	(3.6)	(孔径)0.5	−	−	2/3	側:指ナデ 端:面あり	良好	−	10YR8/2 灰白	砂粒をほとんど含まず	重量:10.6g 一部火色,黒斑	75	46
717	Ec3-2	−	IIa	木製品	不明	(長さ)(3.0)	(幅)10.9	(厚さ)0.7	−	−	一部欠損	柾目の板側辺に刻み		−				75	46

焼成粘土塊等　一覧

[部位の略称]　表:直接押圧面,裏:間接押圧面,側:側面

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	遺存度	成形・調整	焼成	分類	色調	胎土・混入物	備考	挿図	写真図版
718	Hb5-1	SK2a	1	土師器	焼成粘土塊	6.6	3.7	3.4	38.2	完形	表:ユビツマミ,砂粒圧痕 裏:擦痕,砂粒圧痕	良好	A1a	10YR7/4にぶい黄橙	φ3mm以下の長・石多,φ2mm程の金	表:黒斑	76	7
719	Fc1-4	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	6.7	4.4	3.6	50.5	完形	表:不規則繊維圧痕 裏:刻圧痕,不規則繊維圧痕	良好	A1a	7.5YR7/8黄橙	砂粒ほとんど含まず	表・裏:火色 裏:黒斑	76	7
720	Gc1-5	−	IIa	土師器	焼成粘土塊	5.7	3.3	3.4	35.1	略完形	表:ナデか?	良好	A1a	7.5YR7/4にぶい黄橙	φ1mm以下の長・石少	−	76	47
721	Fc2-3	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	6.1	5.0	2.9	47.4	略完形	表:ハケメ 裏:ユビナデ,筋状繊維圧痕	良好	A1a	7.5YR7/4 にぶい黄橙,7.5YR2/1黒	φ1mm以下の長・石少,φ4mm大の石	表・裏:黒斑	76	7
722	Fc4-5	SK31	1	土師器	焼成粘土塊	(6.1)	4.7	2.3	33.6	略完形	表:ユビナデ,筋状植物圧痕 裏:筋状植物圧痕,ハケメ,不規則繊維圧痕	良好	A1a	10YR8/1灰白 10YR2/1黒	φ3mm以下の長・石多,φ2mm大の金	表・裏:黒斑 裏:火色	76	7
723	Gb2-3	SK12	3	土師器	焼成粘土塊	4	(3.9)	0.8	8.6	縁辺一部欠損	表:不規則繊維圧痕 裏:筋状植物圧痕,	良好	A1b	7.5YR8/6浅黄橙	砂粒はほとんど含まず,φ5mm大の頁岩	裏:火色	76	7
724	Fc1-3	HSK8	2	土師器	焼成粘土塊	4.3	(4.4)	0.9	12.8	縁辺一部欠損	表:筋状植物圧痕 裏:不規則繊維圧痕,砂粒圧痕圧痕	良好	A1b	10YR7/4にぶい黄橙	φ1mm以下の長・石・褐・カ・金多	表・裏:黒斑	76	47
725	Ge1-3	SK21	1	土師器	焼成粘土塊	(7.0)	(5.5)	2.5	51.3	略完形	表:ユビナデ,不規則繊維圧痕　裏:ユビナデ,筋状植物圧痕,不規則繊維圧痕	良好	A1a	10YR7/2にぶい黄橙	φ2mm以下の長・石少	表:黒斑 裏:火色	76	47
726	Ib2-5	SK3c	−	土師器	焼成粘土塊	4.4	(4.3)	0.8	16.2	縁辺一部欠損	表・裏:筋状植物圧痕,不規則繊維圧痕 側:筋状植物圧痕,	良好	A1b	10YR8/4浅黄橙	φ3mm以下の長・石・褐・カ・金多	裏:火色	76	7
727	Fc1-4	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	(5.1)	3.9	0.9	13.4	縁辺一部欠損	表:砂粒・筋状植物圧痕,不規則繊維圧痕 裏:筋状植物圧痕,不規則繊維圧痕	良好	A1b	10YR7/4にぶい黄橙	φ4mm以下の長・石少	−	76	47
728	Gb2-3	SK12	1	土師器	焼成粘土塊	3.7	2.9	0.8	7.3	略完形	表:ユビナデ,筋状繊維圧痕, 裏:不規則繊維圧痕	良好	A1b	7.5YR4/1褐灰	φ1mm以下の長・石・褐・カ・金少	表・裏:黒斑	76	7
729	Ib5-5	SK1a	1	土師器	焼成粘土塊	5.2	3.2	0.6	8.1	略完形	表:筋状植物圧痕,不規則繊維圧痕 裏:ユビナデ,不規則繊維圧痕	良好	A1b	7.5YR7/8黄橙	φ3mm以下の長・石少	表・裏:火色	76	7
730	Gb2-3	SK12	4	土師器	焼成粘土塊	(3.9)	(4.1)	0.7	7.8	縁辺一部欠損	表:布目圧痕,ユビナデ,筋状植物圧痕 裏:筋状植物圧痕,砂粒圧痕	良好	A1b	10YR4/1褐灰	φ1mm以下の長・石・カ少,焼土混じり	表:黒斑	76	7
731	Fc1-4	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	(4.0)	3.6	0.6	5.8	縁辺一部欠損	表:ユビナデ・ユビ押さえ 裏:砂粒圧痕	良好	A1b	7.5YR8/6浅黄橙	φ3mm以下の長・石多,φ2mm大のカ	表:火色	76	7

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	遺存度	成形・調整	焼成	分類	色調	胎土・混入物	備考	挿図	写真図版
732	Gb5-4	SK11	1	土師器	焼成粘土塊	4.5	4	0.6	8.8	完形	表:板状圧痕?,不規則繊維圧痕 裏:不規則繊維圧痕	良好	A1b	10YR6/3にぶい黄橙	φ1mm以下の長・石・金少	表・裏:弱い黒斑	76	7
733	Fc1-3	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	5.0	4.0	1.4	23.2	完形	表:ユビオサエ,筋状植物圧痕,籾圧痕,不規則繊維圧痕 裏:不規則繊維圧痕,ユビオサエ	良好	A1c	10YR7/4にぶい黄橙	φ3mm以下の長・石少,微小な雲微	表・裏:黒斑 側:火色	76	7
734	Fc4-2	−	I	土師器	焼成粘土塊	5.2	4.6	2.3	41.4	略完形	表:ユビオサエ 裏:ユビナデ,ユビオサエ	良好	A1d	7.5YR3/6にぶい橙	φ2mm以下の長・石少,雲なし	表:火色	76	7
735	Fc1-3	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	4.5	3.7	0.4	6.0	略完形	表:掌オサエ,ユビオサエ 裏:不規則繊維圧痕,砂粒圧痕	良好	A1b	10YR8/3浅黄橙,10YR2/1黒	φ1mm以下の長・石少	表:黒斑 裏:黒斑	76	7
736	Gb5-4	SK11	1	土師器	焼成粘土塊	3.3	3	1.5	13.6	完形	表:ユビナデ?	良好	A1c	7.5YR6/6橙	φ1mm以下の長・石・カ少	表・裏:火色	76	7
737	Fc2-3	−	IIa	土師器	焼成粘土塊	7.3	3.2	2.1	34.4	略完形	表:ユビオサエ　側:筋状植物圧痕 裏:擦痕,砂粒圧痕,ユビナデ	良好	A1d	10YR7/3にぶい黄橙	φ2mm以下の長・石少	裏:黒斑	76	47
738	Fc2-4	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	7.4	5.1	2.2	49.9	略完形	表:ハケメ 裏:不規則繊維圧痕	良好	A1d	10YR8/4浅黄橙	φ1mm以下の長・石少,雲なし	裏:弱い黒斑	76	47
739	Fc1-3	HSK8	1	土師器	焼成粘土塊	8.7	4.1	3.1	52.4	略完形	裏:筋状植物圧痕,ユビナデ,不規則繊維圧痕	良好	A1d	10YR3/2灰黄褐	φ1mm以下の長・石少	−	77	47
740	Fc5-5 Fc4-5	SK31	1	土師器	焼成粘土塊	4.5	3.1	3	27.7	完形	表:ユビナデ 裏:筋状植物圧痕	良好	A1d	7.5YR7/6橙	φ1mm以下の長・石少	表・裏:火色	77	7
741	Fc4-5	SK31	1	土師器	焼成粘土塊	3.7	2.3	2.1	12.5	略完形	表:筋状植物圧痕,籾圧痕 裏:筋状植物圧痕,籾圧痕,不規則繊維圧痕,ユビオサエ	良好	A1d	5YR7/6橙	砂粒ほとんど含まず	火色	77	7
742	Gb2-1	−	IIa	土師器	焼成粘土塊	4.8	2.6	1	11.4	略完形		良好	A1d	10YR8/3浅黄橙	砂粒ほとんど含まず	表・裏:表面劣化	77	47
743	Gc2-1	SK17	1	土師器	焼成粘土塊	(4.2)	(2.7)	1.2	13.6	略完形	表:砂粒圧痕,不規則繊維圧痕 裏:砂粒圧痕	良好	A1d	10YR6/3にぶい黄橙	φ3mm以下の長・石多	表:黒斑	77	47
744	Fc4-5	SK25a	1	土師器	焼成粘土塊	(4.2)	4.1	1.6	20.1	一部欠損	表:筋状植物圧痕 裏:掌・ユビオサエ, 不規則繊維圧痕	良好	A1c・d	10YR8/3浅黄橙	φ3mm以下の長・石多	−	77	−
745	Fc4-1	SK25a	1	土師器	焼成粘土塊	3	2.5	1	8.5	完形	表:ユビナデ,ユビオサエ 裏:布目	良好	A1c・d	10YR6/2灰黄橙	φ1mm以下の長・石少,雲なし	−	77	47
746	Fc5-5	SK31	1	土師器	焼成粘土塊	3	2.7	2	9.8	完形	表:ユビツマミ 裏:砂粒圧痕	良好	A1c・d	7.5YR7/6橙	φ2mm以下の長・石多,φ1mm大の金	裏:火色	77	47
747	Ib2-1	SK4a	−	土師器	焼成粘土塊	3.5	2.5	1.7	10.4	略完形	表:ユビナデ 裏:砂粒圧痕	良好	A1c・d	7.5YR6/6橙	砂粒はほとんど含まず	表・裏:火色	77	47
748	Gb5-4	SK11	1	土師器	焼成粘土塊	3	2.9	1.7	13.6	略完形	表:ユビオサエ 裏:筋状植物圧痕	良好	A1c・d	7.5YR3/2黒褐	φ1mm以下の長・石多,炭・雲		77	47
749	Gb2-5	−	IIa	土師器	焼成粘土塊	(3)	2.7	2.1	10.6	一部欠損	表:ユビオサエ　裏:布目	良好	A1d	7.5YR7/6橙	φ2mm以下長・石少	−	77	47
750	Ec2-2	SK36	3d・e	土師器	焼成粘土塊	2.3	1.8	0.8	6.6	略完形	裏:砂粒圧痕　側:ユビナデ	良好	A1d	10YR7/4にぶい黄橙	φ1mm以下長・石多	−	77	47
751	Gb3-2	SK9・SD1a		土師器	焼成粘土塊	(2.9)	0.8	0.8	2.3	一部欠損	紐状	良好	A2	10YR7/3にぶい黄橙	粘土質,精良,微小な長・雲		77	47
752	Gb1-1 Gb2-1	SK9	1・2	土師器	焼成粘土塊	(2.6)	0.7	0.6	1.3	一部欠損	紐状,指頭圧痕?	良好	A2	5YR6/6橙	シルト質,精良,φ2mm以下の長	表:火色	77	47

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	遺存度	成形・調整	焼成	分類	色調	胎土・混入物	備考	挿図	写真図版
753	Ec2-2	SK36	3	土師器	焼成粘土塊	(2.6)	1.4	1.2	4.5	一部欠損	紐状	良好	A2	10YR7/2にぶい黄橙	シルト質,精良,微小な長・石・角		77	47
754	Fc2-2	SK27	1	土師器	焼成粘土塊	4.9	4	1.4	19.7	縁辺一部欠損	表:不規則繊維圧痕 裏:タタキ,不規則繊維圧痕	良好	A3a	10YR8/3浅黄橙	砂粒はほとんど含まず	-	77	47
755	Fc4-5	-	IIa	土師器	焼成粘土塊	(4.8)	4.3	1.1	23.3	縁辺欠損	表:タタキ	良好	A3a	10YR8/3浅黄橙	φ2mm以下の長・石多,微小な雲	変形後,焼成	77	47
756	Gc1-4	SK23a	1	土師器	焼成粘土塊	(3.9)	(3.2)	(1.0)	12.2	縁辺欠損	表:ユビナデ 裏:粘土の折皺?	良好	A3a	10YR6/3にぶい黄橙	φ4mm以下の長・石少,φ1mm大の金・カ	-	77	47
757	Ib1-1	SK4a	-	土師器	焼成粘土塊	(3.8)	(3.6)	1.4	26.8	縁辺一部欠損	表:ユビオサエ	良好	A3a	10YR7/3にぶい黄橙	φ2mm以下の長・石・褐・カ少	半筒状クボミ有,土錘未成品転用?	77	47
758	Gc2-2	-	IIa	土師器	焼成粘土塊	5.2	4.2	4.4	58.6	一部欠損	裏:ランダムな繊維圧痕 側:筋状植物圧痕	良好	A3a	7.5YR8/3浅黄橙	φ2mm以下の長・石少,微小な雲	半筒状クボミ有,羽口未成品の転用?表面黒色化	77	7
759	Ec22	-	IIa	土師器	焼成粘土塊(方形粘土板)	(9.0)	(7.9)	1.1	122.2	縁辺一部欠損	表:カキメ 裏:カキメ	良好	A3a	5YR6/8橙	φ3mm以下の長・石・褐・カ多	縁辺を切断後,焼成	77	47
760	Fc1-3	HSK8	2	土師器	焼成粘土塊	(4.3)	(2.9)	1.1	9.5	縁辺欠損	表:ヘラケズリによる粘土層付着 裏:ユビオサエ・ナデ	良好	A3b	5YR7/6橙	φ2mm以下の長・石・褐・カ多	表・裏:火色	77	47
761	Hb5-1	SK2a	1	土師器	焼成粘土塊	(3.6)	(2.4)	1.6	14.6	一部欠損	表:カキメ,ユビオサエ,側:工具によるナデ 裏:タタキメ,ユビナデ,筋状植物圧痕	良好	A3a	10YR8/2灰白	φ1mm以下の石微	表・裏:弱い黒斑	77	47
762	Fc4-5	SK31	1	土師器	焼成粘土塊	(4.2)	(3.5)	(2.3)	18.4	全周欠損	表:筋状植物圧痕	良好	B	7.5YR6/2灰褐	φ2mm以下の長・石	粘土異質	77	7
763	Fc4-5	SK32	2	土師器	焼成粘土塊	(4.8)	(3.3)	(2.7)	36.3	全周欠損	表:筋状植物圧痕,擦痕	良好	B	7.5YR8/4浅黄橙,7.5YR5/1褐灰	φ2mm以下の長・石多	破面被熱強	77	7
764	Gb2-1	-	IIa	須恵器	土器製作層	3.6	2.7	0.7	7.1	縁辺一部欠損	表:粘土シワ,ケズリ痕 裏:ケズリ痕	良好	A3b	10YR5/1褐灰	φ1mm以下の長・石微	-	77	47
765	Hb4-2		IIa	須恵器	土器製作層	(2.5)	(1.0)	(0.3)	1.2	全周欠損	ケズリ	硬質	A3b	7.5Y5/1灰	シルト質,精良,φ1mm以下の長・石	須恵器の切り取り層	77	47
766	Ib2-1	SK4a	3	須恵器	土器製作層	(4.4)	1.0	0.7	3.9	縁辺一部欠損	表:しぼりジワ 裏:ケズリ痕	良好	A3b	10YR4/2灰黄褐	φ1mm以下の長・石少	切り取り層	77	47

その他の時代の遺物　一覧

掲載No.	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径(最大径)	器高(残存高)	底径(摘径)	器高指数	底径指数	遺存度	成形・調整	焼成	重焼き	色調	胎土	備考(劣化)	挿図	写真図版
767	Fb5-5	-	IIa	瀬戸美濃	瓶子	(16.0)	(5.0)	-	-	-	1/8	釉つけがけ,三筋	良好	-	5Y6/3オリーブ黄	シルト質,精良,砂粒をほとんど含まず	内面及び割れ口に炭化物付着(二次的)	78	7
768	Gb5-1	-	IIa	須恵器系中世焼物	擂鉢	-	(5.6)	-	-	-	破片	ロクロ 内:卸し目	不良	-	2.5Y8/2	φ1mm以下の長他		78	47
769	Ic5-2	-	IIa	珠洲	鉢	24.8	(7.4)	-	-	-	破片	口:摘み出し 外:ロクロ 輪積み	良好	-	5Y5/1灰	シルト質,精良,微小な長・ガラス質粒子	内面磨耗顕著,ススか?付着	78	47
770	Ic5-3	-	乱排	珠洲	鉢	25.2	12.3	11.6	49	46	1/6以下	外:ロクロ 底:静止糸切り	良好	-	10YR5/1褐灰	シルト質,φ2mm以下の長・石・ガラス質粒子多	内面磨耗顕著	78	47

遺跡全景（西から，中央が調査区）

調査区全景（天が北北東）

図版2　基本土層，1～5号土師器焼成坑

1・2号土師器焼成坑　プラン検出状況

基本土層　Fb5-1(東から)(左：Ⅰ～Ⅴ層，右：Ⅴ～Ⅵ層)

1号土師器焼成坑　焼土化面遺物出土状況(東から)

2号土師器焼成坑　焼土化面遺物出土状況(東から)

3号土師器焼成坑　焼土化面遺物出土状況(南西から)

4号土師器焼成坑　プラン検出(南から)

5号土師器焼成坑　壁面焼土化状況(北下から)

4号土師器焼成坑　完掘(南から)

6号土師器焼成坑・7号土坑　完掘(南から)

7号土師器焼成坑　上層焼土(南から)

7号土師器焼成坑　土層断面(南西から)

7号土師器焼成坑　完掘(南西から)

7号土師器焼成坑　壁面焼土化状況(東から)

8号土師器焼成坑　プラン検出(東から)

9号土師器焼成坑　完掘(西から)

8号土師器焼成坑　完掘(西から)

図版４　９号土抗と出土遺物(1)

９号土坑　遺物出土状況(北東から)

●印 X 線回折等分析試料，○印 薄片分析試料

167

207

167

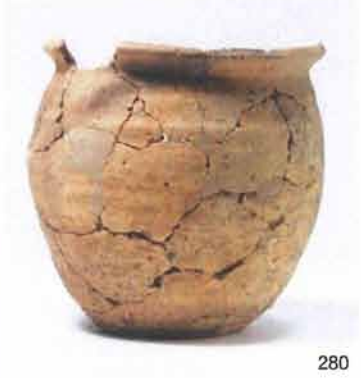
207

181●

242

260

260


280

249

251

280

282○

28○

39●

49●

59○

78

78

79○

113

98

131

131

157

313

313

322

322

334

335○

342●

344●

346●

357○

363

368○

380●

381

386●

図版 6　出土遺物 (3) 395～611

●印 X 線回折等分析試料，○印 薄片分析試料

395○

400●

413

445

462

464

482

493

477●○

490

495

497

498

505

516

497

534

505

516

540

555●

567

571○

572

572

577○

583●○

597

611●○

627

627

700

700

667

667

675

675

706

681

691

718
718

719

719

721

721

722

722

734

734

726
723

728
729

730
731

732
735

726
723

728
729

730
731

732
735

733
736

740
741

762
763

758
758

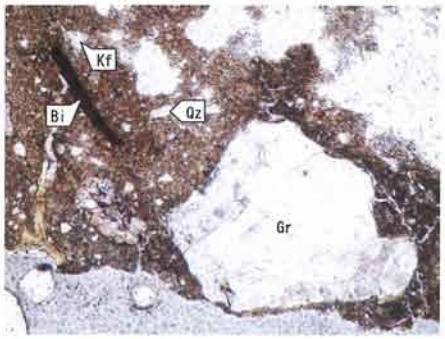
733
736

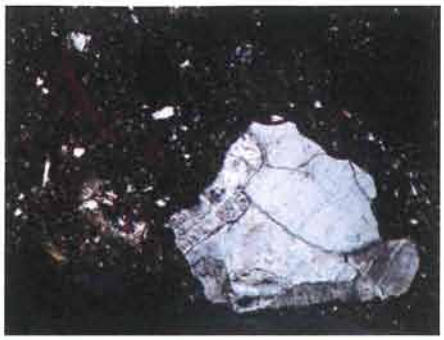
740
741

762
763

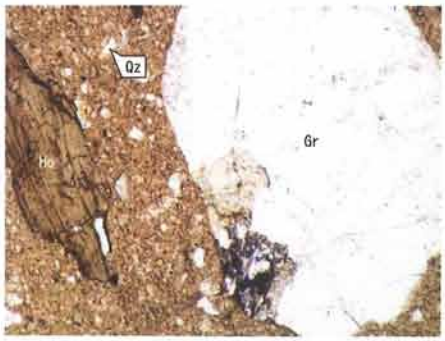
767

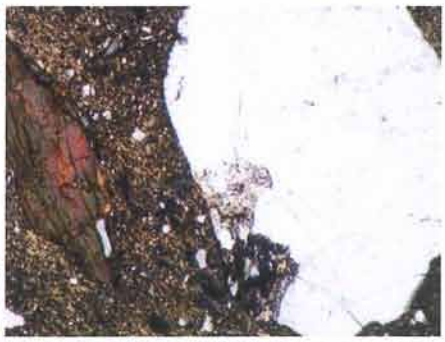
図版8　土師器胎土分析試料　胎土薄片



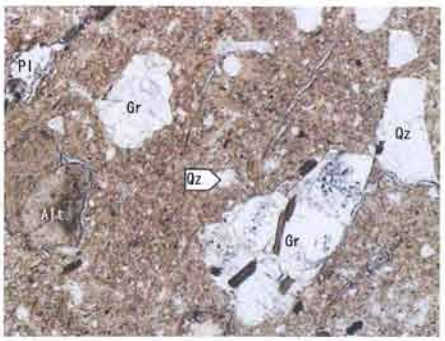


1.分析番号②
10号土坑−3層　土師器　土錘

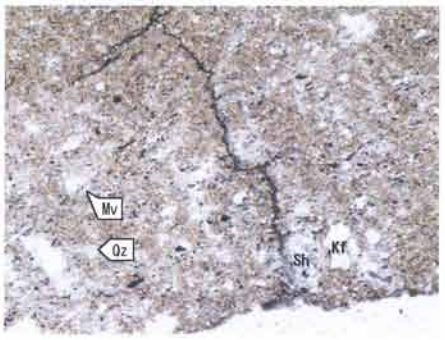


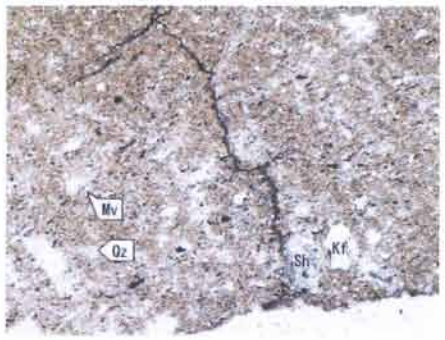


2.分析番号③
17号土坑−4層　土師器　長胴甕

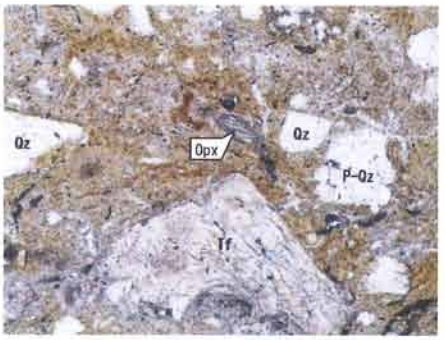


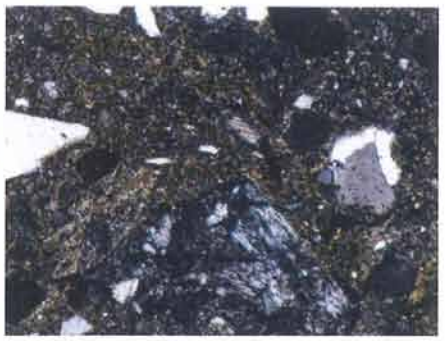
3.分析番号⑥
21号土坑−1層　土師器　鍋



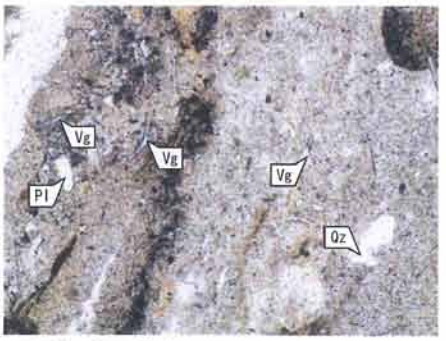


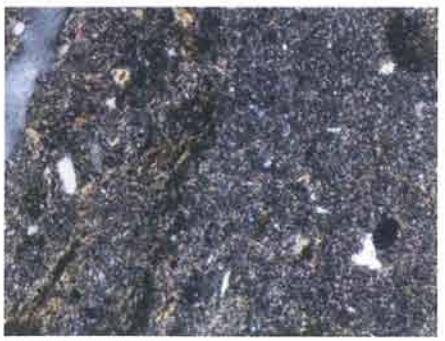
4.分析番号⑪
36号土坑−3層　黒色土器　有台杯





5.分析番号⑭
Fd5−1深堀トレンチ　VIa層　粘土サンプル



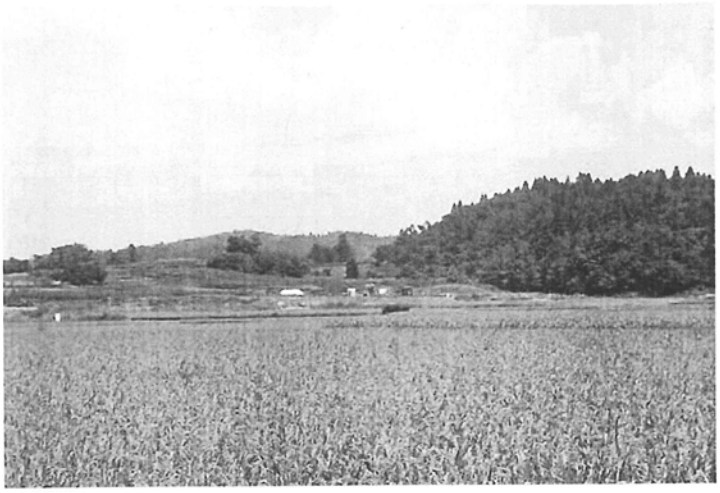


5. 分析番号⑮
Gc3−2　3号井戸脇壁　VIa 層　粘土サンプル

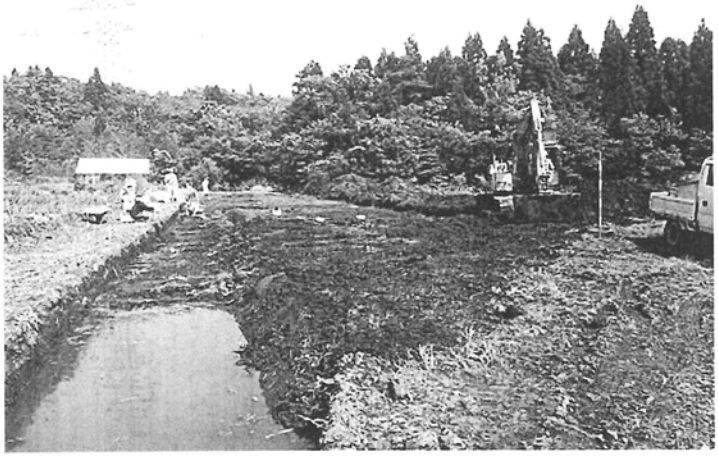
※写真左列は下方ポーラー，右列は直交ポーラー下。

Qz：石英，Kf：カリ長石，Pl：斜長石，
Opx：斜方輝石，Mv：白雲母，Sh：頁岩，
Tf：凝灰岩，P−Qz：多結晶石英，Vg：火山ガラス

0.5mm



遺跡遠景（南西から）



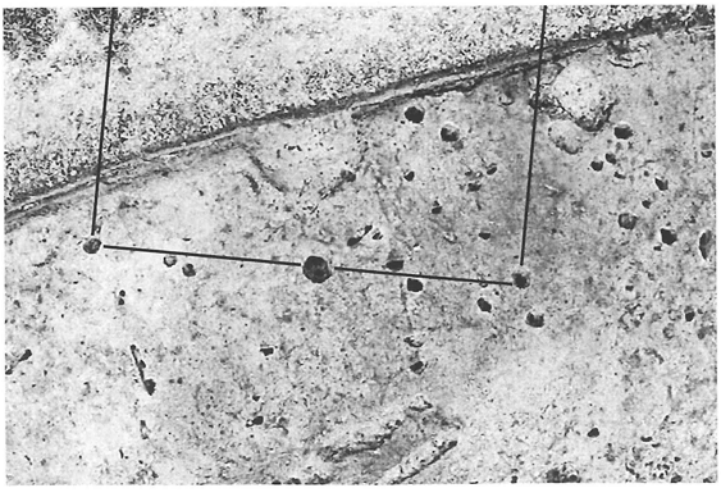
表土掘削（西から）

Kbグリッド谷部調査風景（北から）

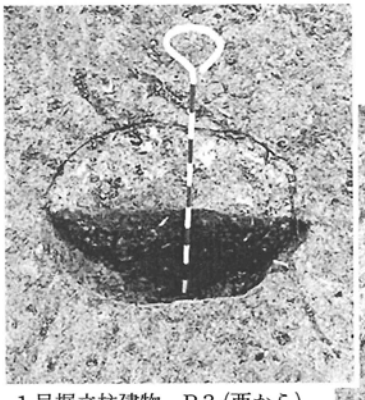
Ibグリッド　遺構検出作業（北東から）

Gbグリッド　包含層掘削（北東から）

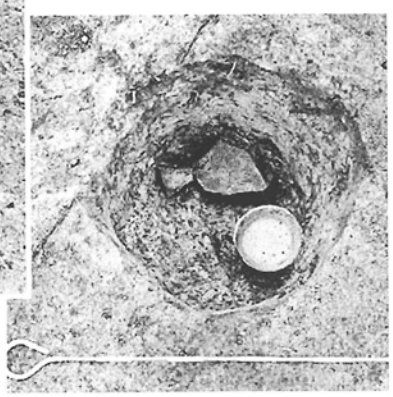
8/21現地説明会（北から）



1号掘立柱建物　完掘（天は北東）

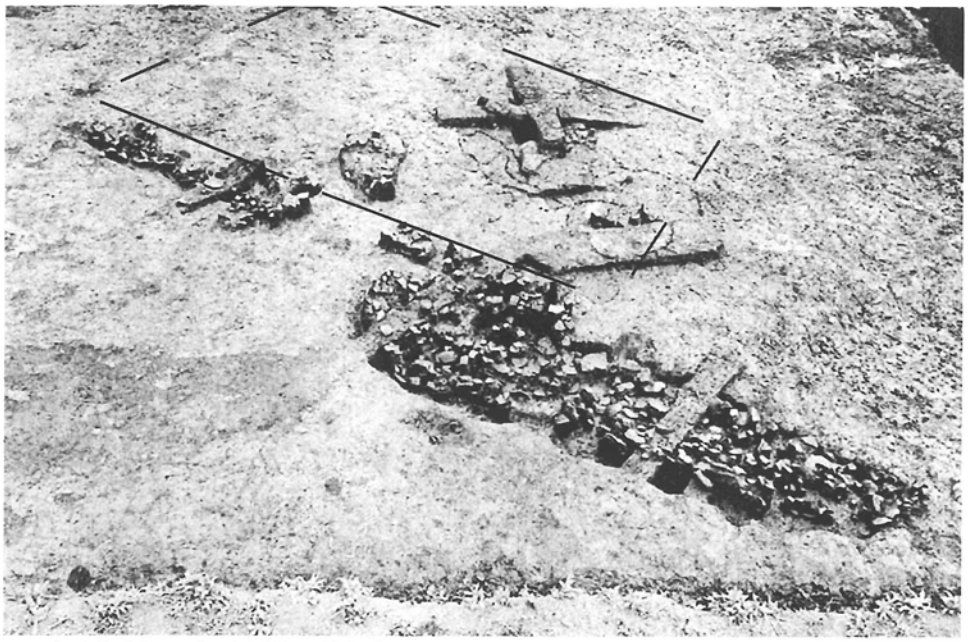


1号掘立柱建物　P3（西から）

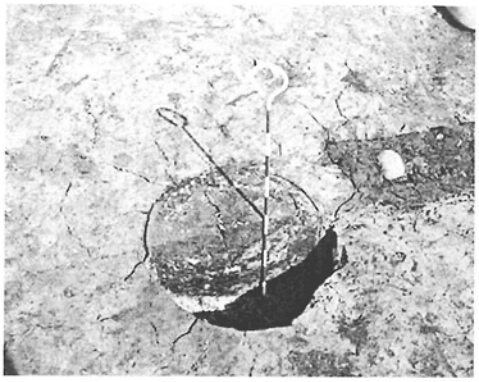


1号掘立柱建物　P2（南から）

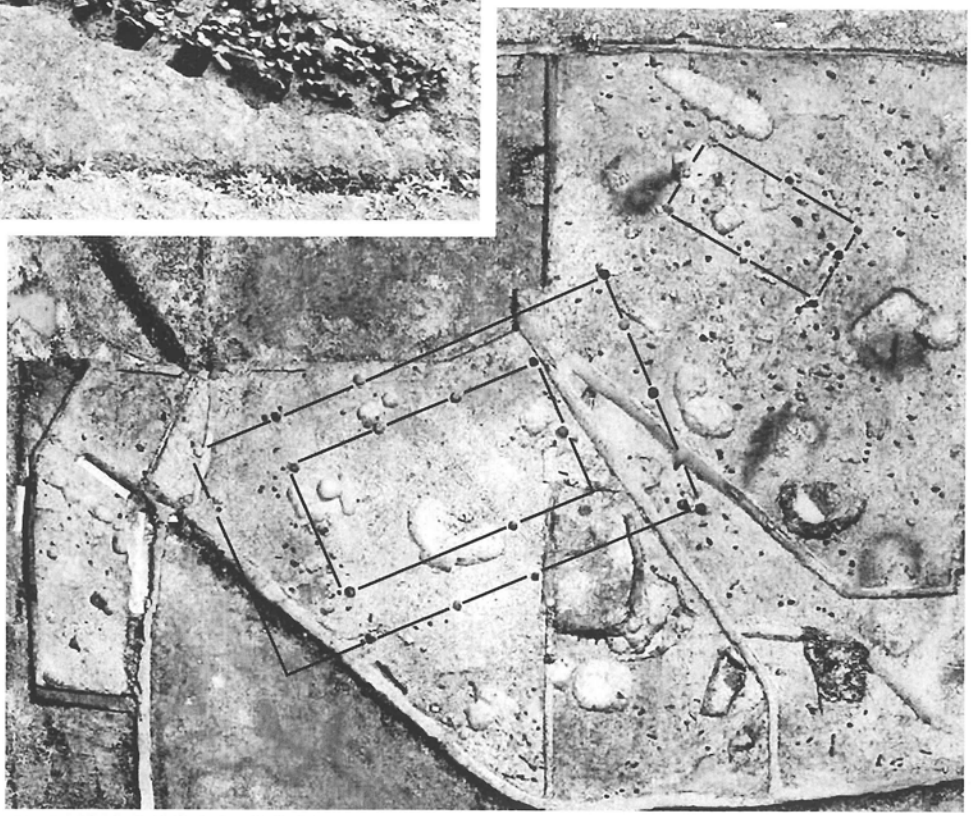
図版10　2・3号掘立柱建物



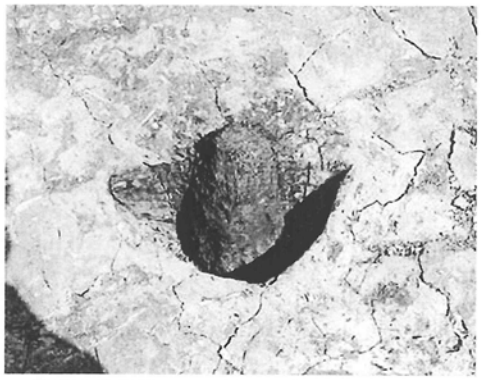
3号掘立柱建物・1(a・b)号溝・9号土坑
遺物出土状況(北から)



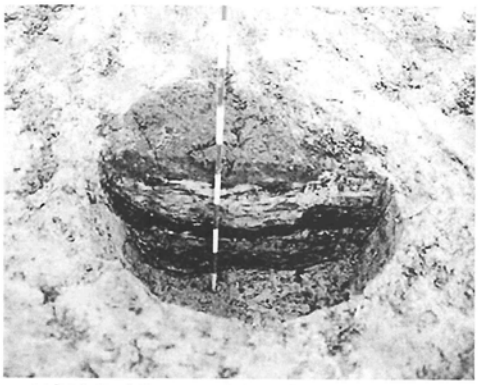
2号掘立柱建物　P1(西から)



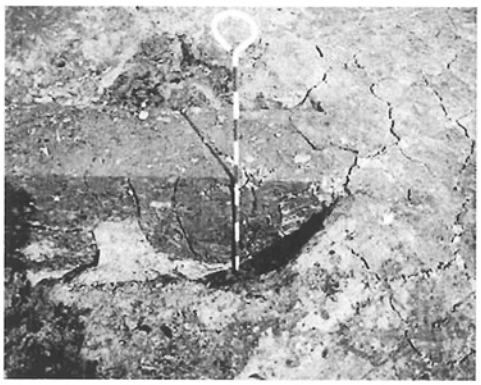
2・3号掘立柱建物(天は北北東)



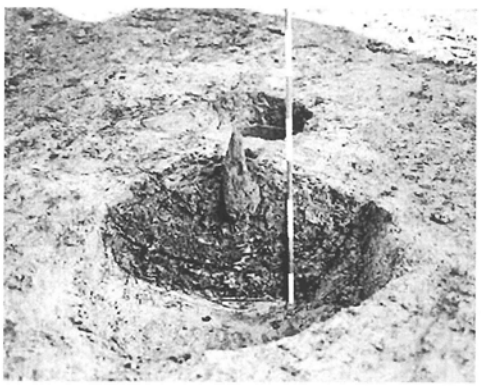
2号掘立柱建物　P7(南から)



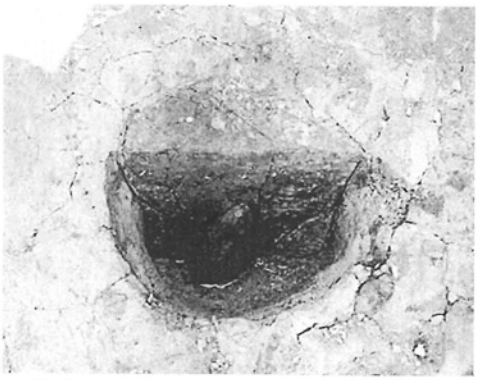
2号掘立柱建物　P9(西から)



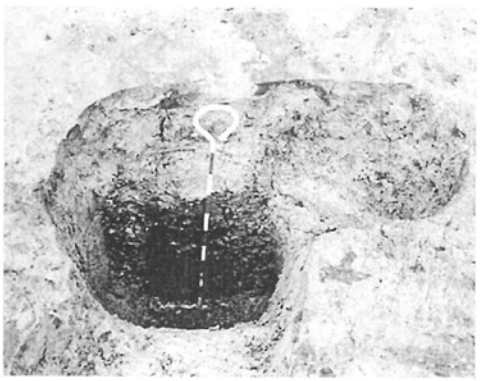
2号掘立柱建物　P10(西から)



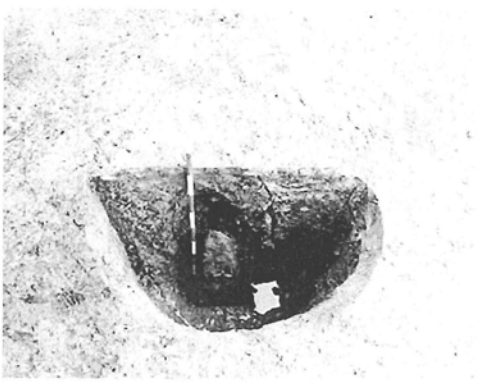
2号掘立柱建物　P11(北から)



2号掘立柱建物　P5(西から)



2号掘立柱建物　P15(北東から)

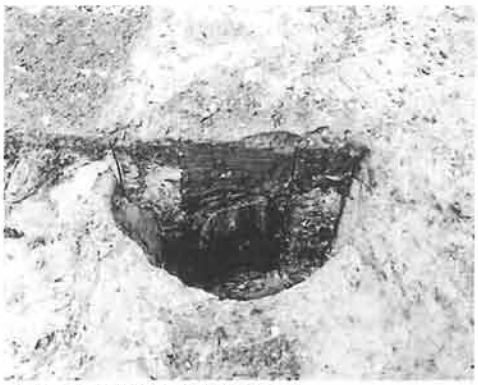


2号掘立柱建物　P16(北から)

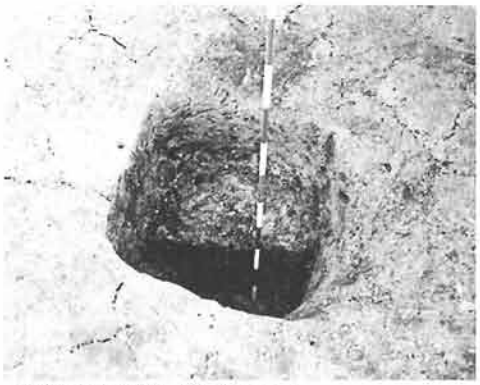
2号掘立柱建物　P18(北から)

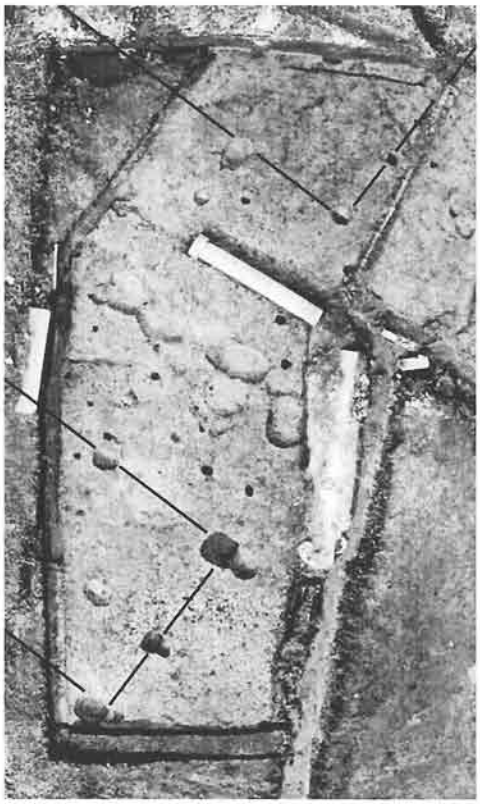
2号掘立柱建物　P20(西から)

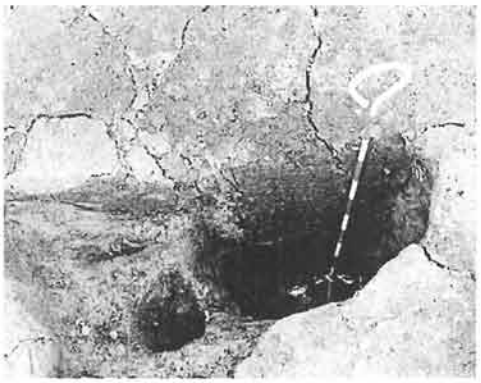
2号掘立柱建物　P21(西から)

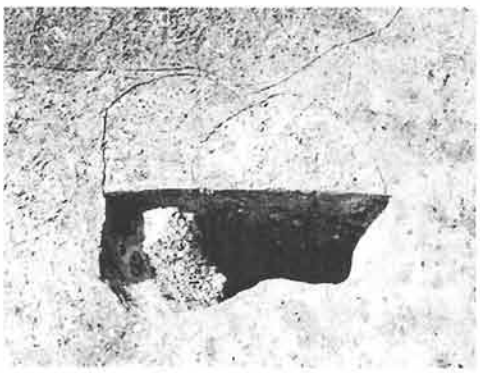

2号掘立柱建物　P22(西から)

3号掘立柱建物　P2(東から)

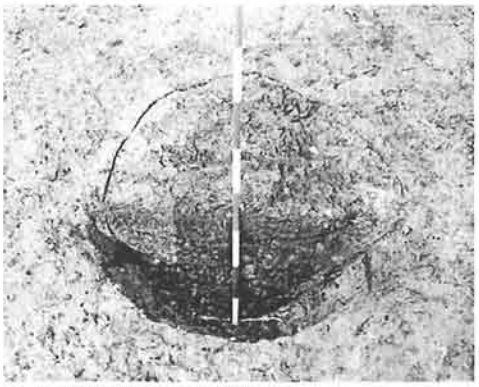

3号掘立柱建物　P3(東から)


4・5号掘立柱建物　(天は北北東)

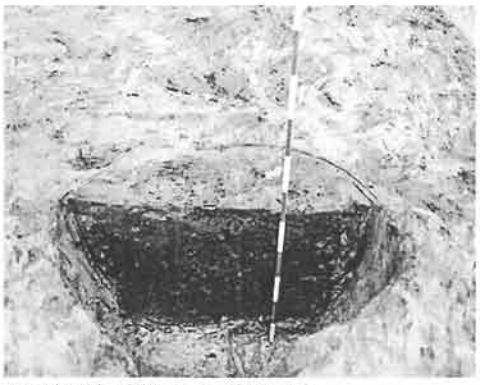

3号掘立柱建物　P6(南西から)

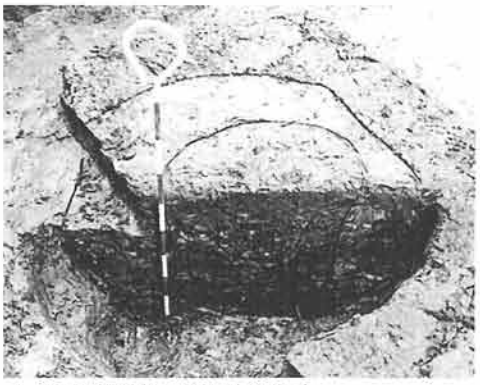

3号掘立柱建物　P8(東から)

4号掘立柱建物　P1(南から)

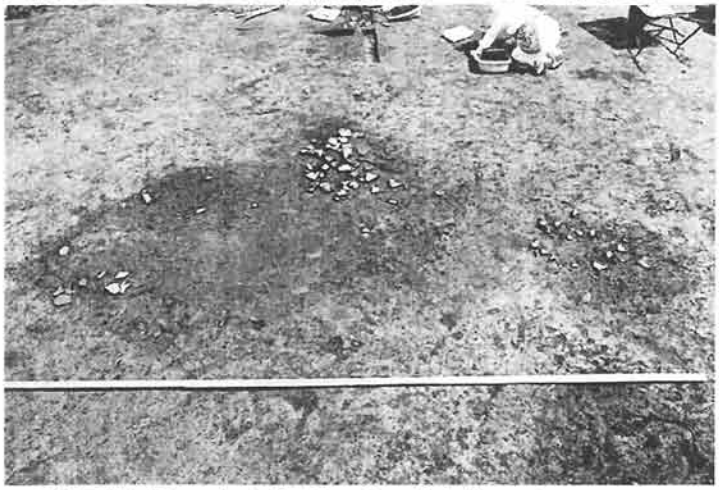

4号掘立柱建物　P2(東から)

5号掘立柱建物　P2a(東から)


5号掘立柱建物　P3a(東から)

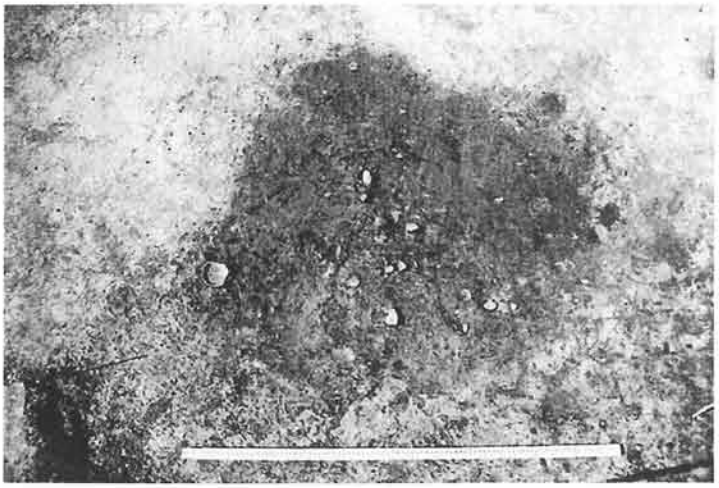

5号掘立柱建物　P4a(東から)

図版12　3・6・7・9号土師器焼成坑,3・7・10・12・27号土坑

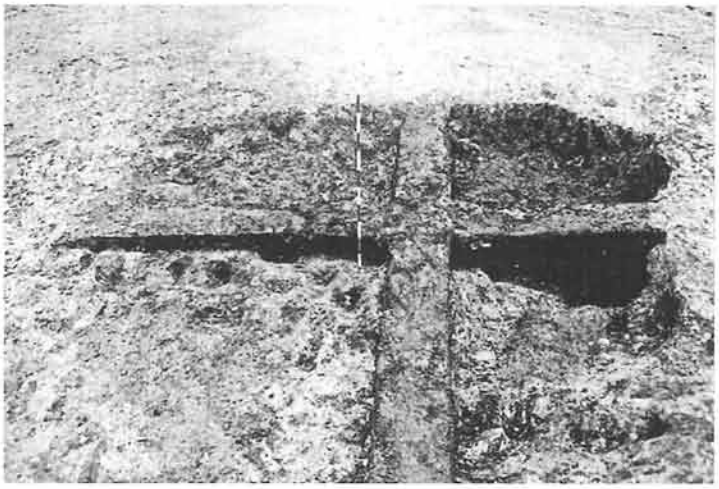


3号土師器焼成坑・3(a・c)号土坑　プラン検出(南から)

3(a・c)号土坑　完掘(南西から)

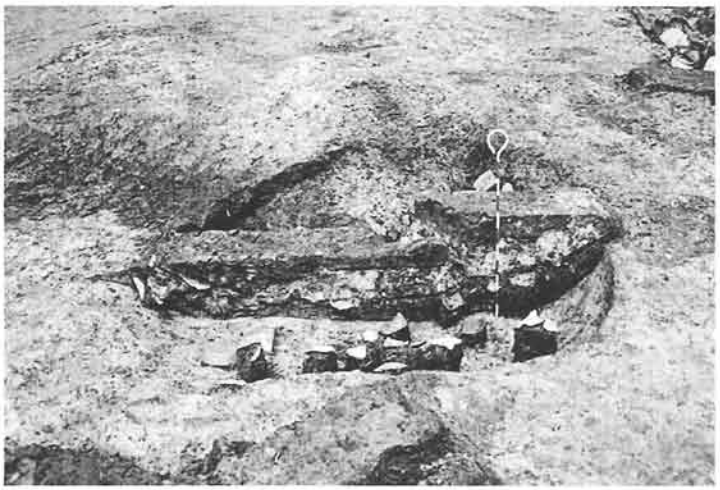


6号土師器焼成坑・7(a・b)号土坑　プラン検出(南から)



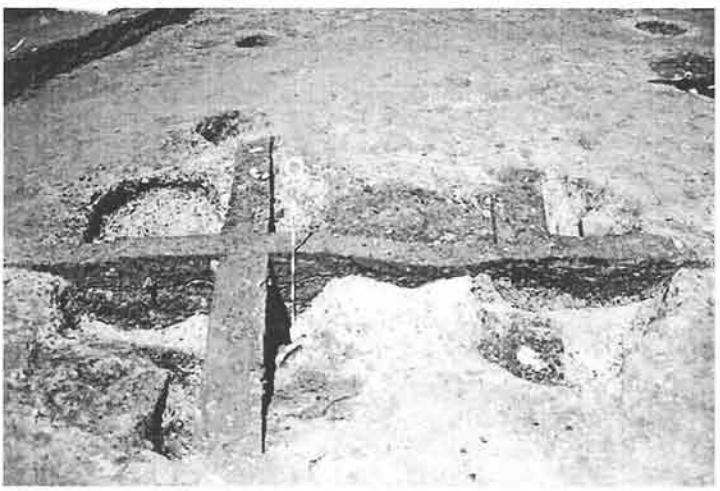
6号土師器焼成坑・7b号土坑　土層断面(東から)

10号土坑　遺物出土状況(南から)

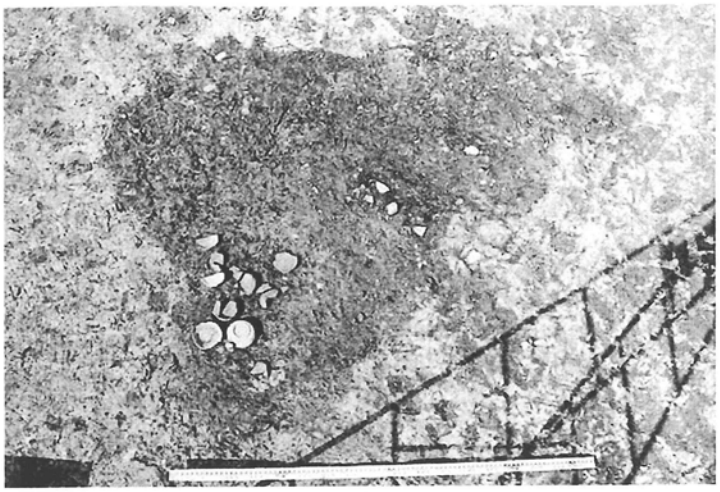


10号土坑　土層断面(南東から)

7号土師器焼成坑・10・12号土坑　完掘(南から)



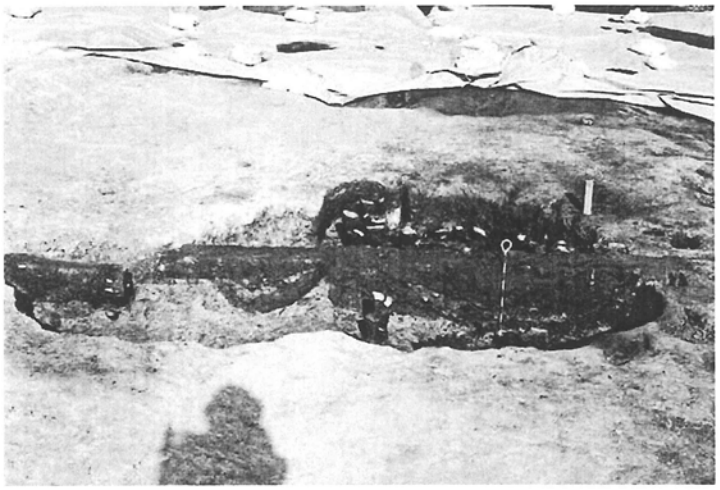
27(a～c)号土坑　土層断面,9号土師器焼成坑　検出状況(右手前)(西から)



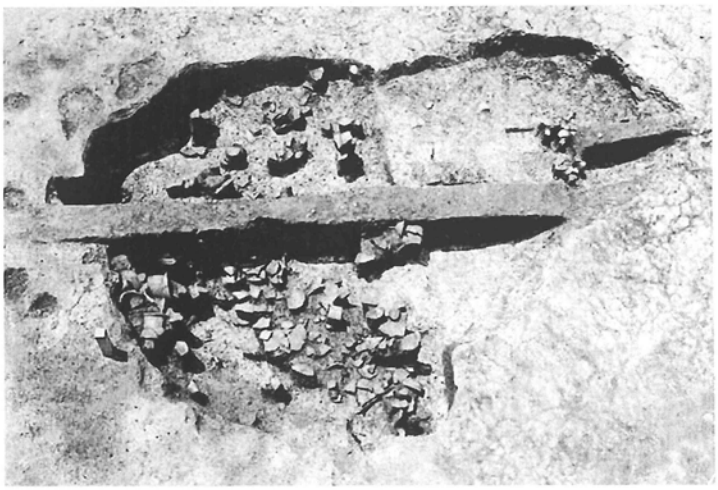
27(a～c)号土坑　プラン検出(南から)

27(a～c)号土坑　完掘(南から)

1号土坑　掘削(北から)

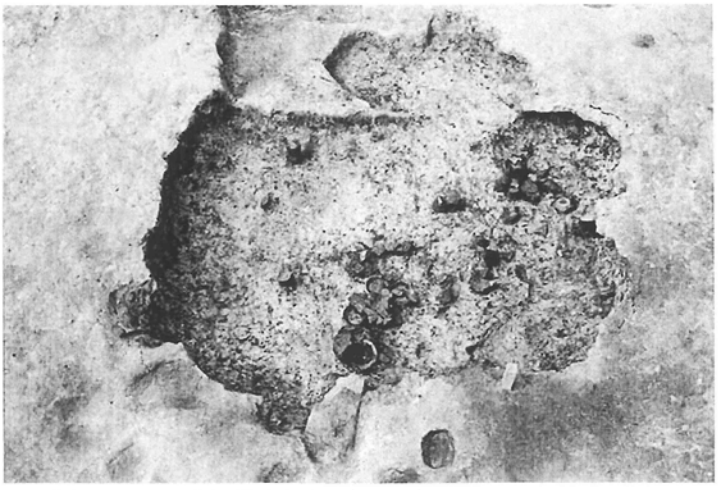


1(a～c)号土坑　土層断層(西から)

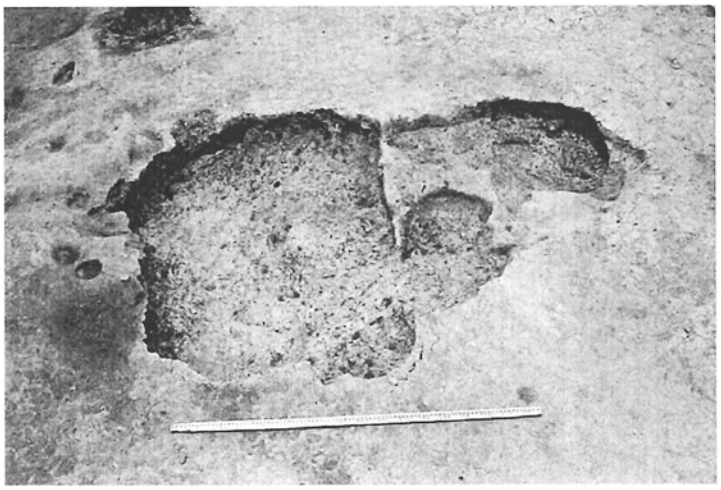


1a号土坑　4層遺物出土状況(東から)

1(a･c)号土坑　遺物出土状況(北東から)

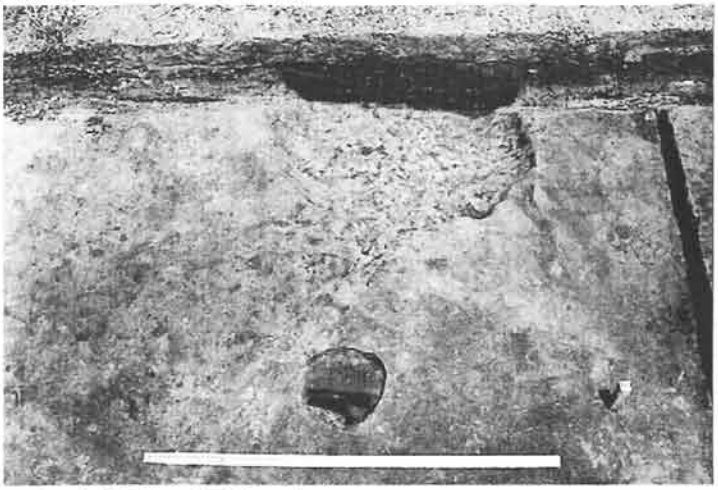


1a号土坑　5～9層遺物出土状況(南から)

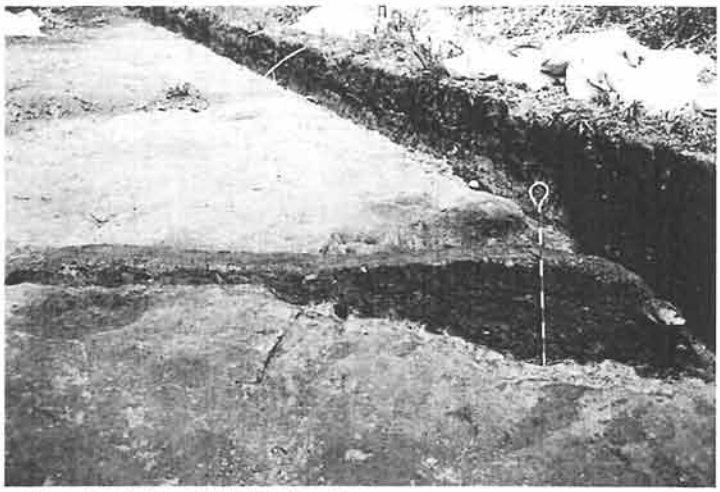


1(a～c)号土坑　完掘(東から)

図版14　2・4・5・8号土坑



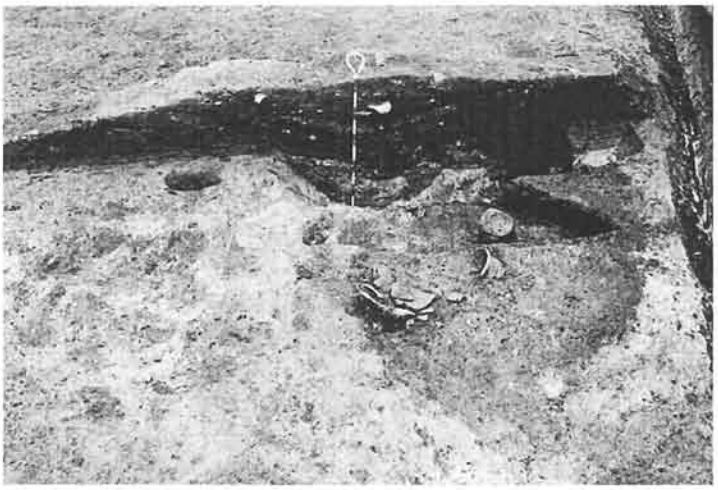
2 (a～d)号土坑　完掘(南から)



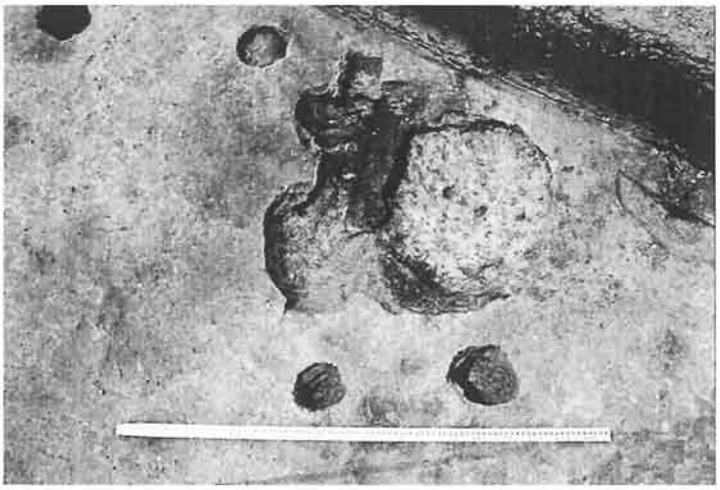
2 (b～d)号土坑　土層断面(東から)

4a号土坑　土層断面(南から)

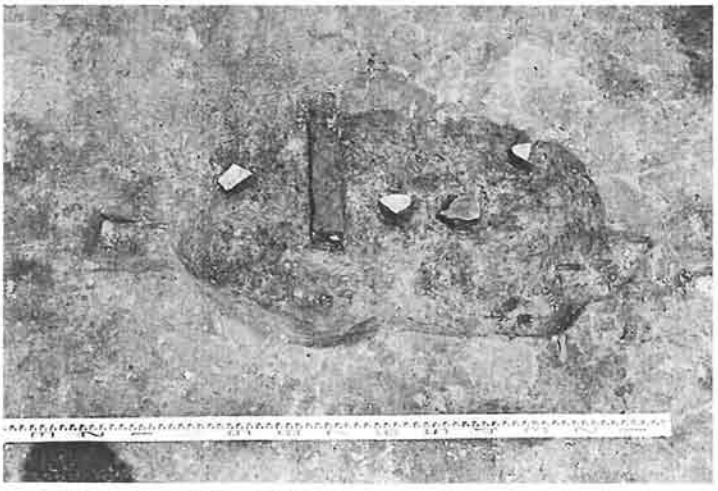
4b号土坑　遺物出土状況(南東から)



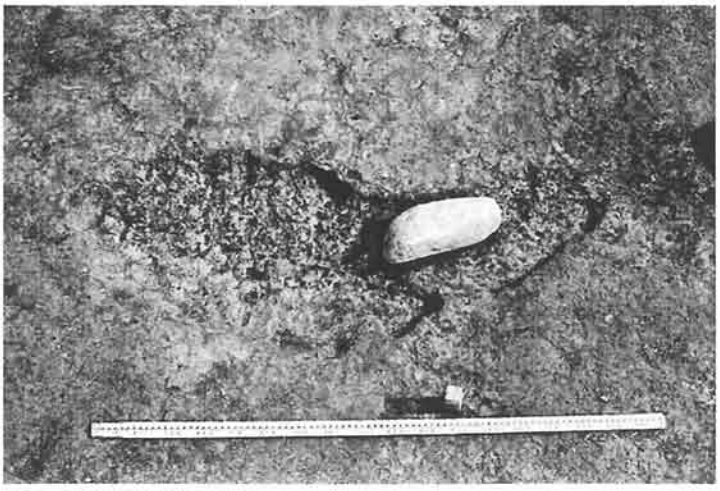
4 (a･c)号土坑　土層断面,4b号土坑　プラン検出(東から)



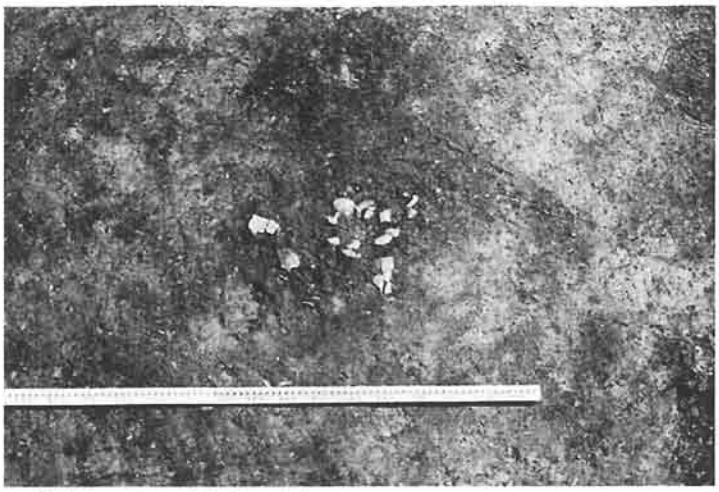
4 (b･c)号土坑　完掘(南から)



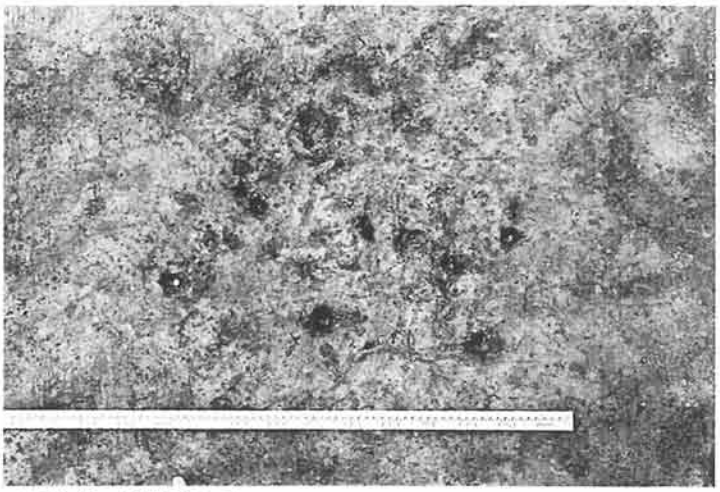
5号土坑　遺物出土状況(南から)



8号土坑　完掘(北西から)

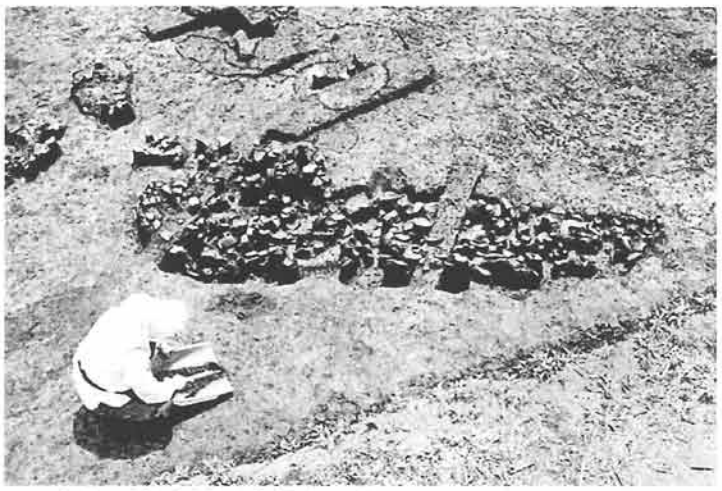


6号土坑　プラン検出(東から)

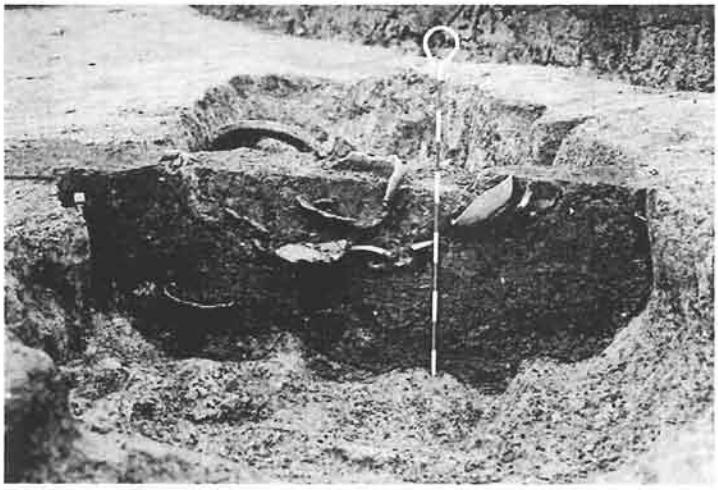


6号土坑　完掘(東から)

Gbグリッド　遺構検出作業(北から)



9号土坑　遺物出土状況①(北東から)



9号土坑　土層断面(南東から)

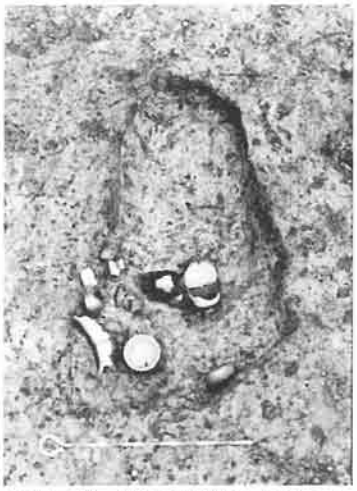
9号土坑·1a号溝　土層断面(北西から)

11号土坑　底面　遺物出土状況(南から)

9号土坑　完掘(北から)

図版 16　13・15～17 号土坑

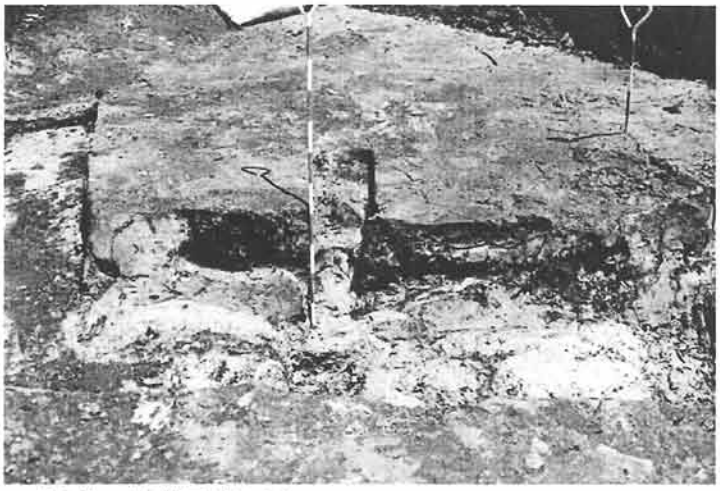
13号土坑　土層断面(南から)



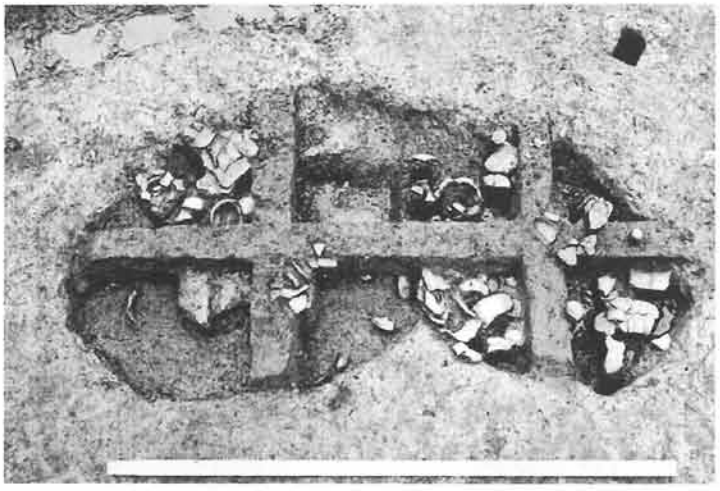
13号土坑　底面 遺物出土(南から)

完掘(南から)

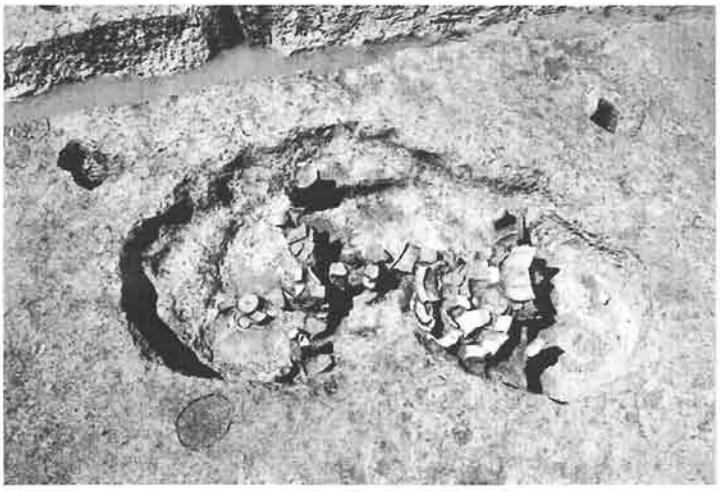
15号土坑　完掘(南から)



16号土坑　土層断面(南から)

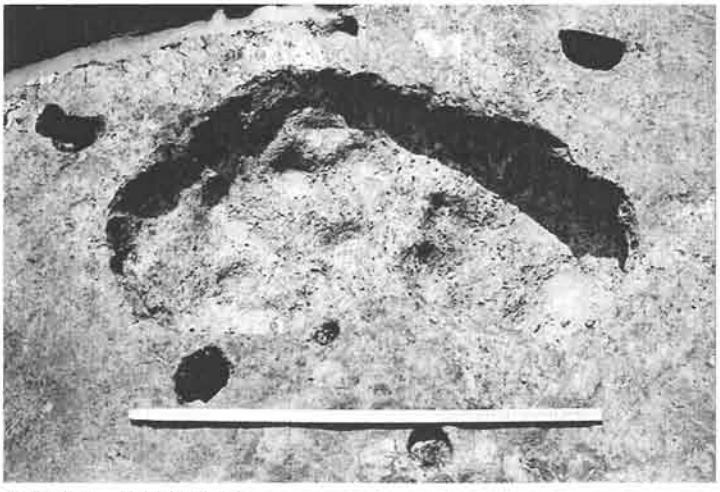


17号土坑　遺物出土状況①(北から)

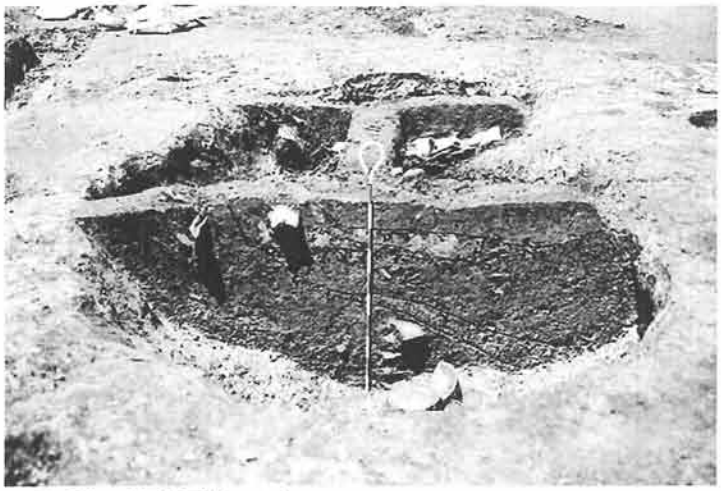


17号土坑　遺物出土状況②(北から)

17号土坑　土層断面(南から)



17号土坑　完掘(西から)

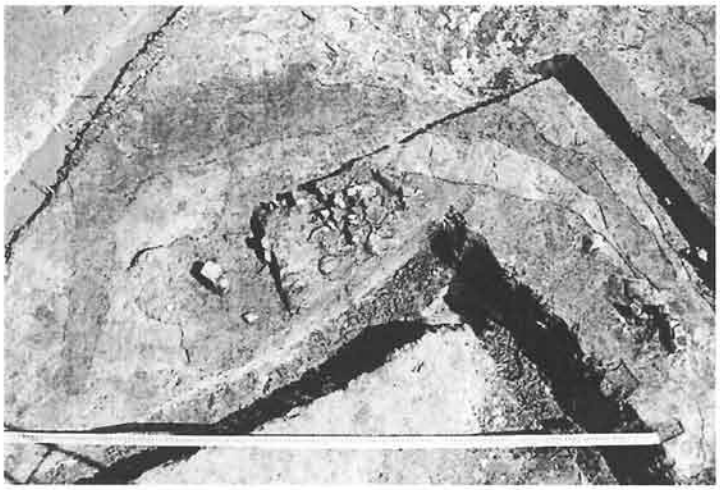


17号土坑　土層断面(東から)

17号土坑　土層断面(西から)

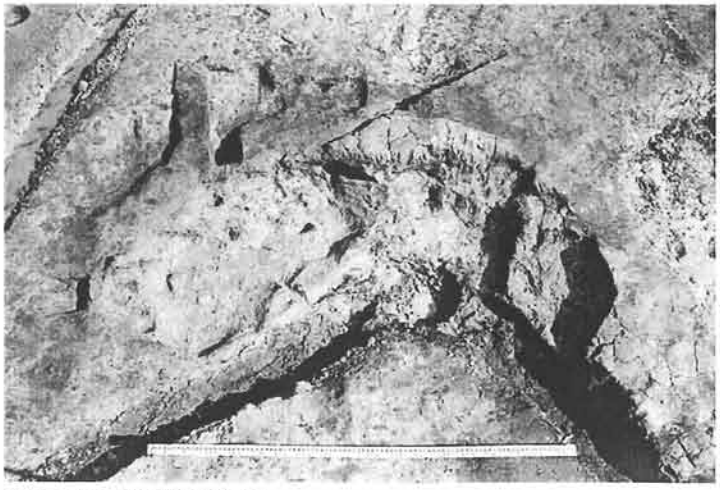
19号土坑　遺物出土状況(西から)

19号土坑　完掘(南西から)



21号土坑　プラン検出(北西から)

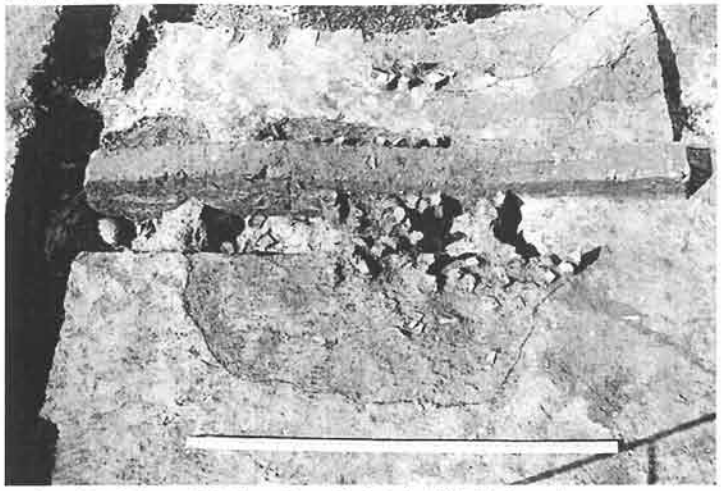
21号土坑　遺物出土状況(北西から)



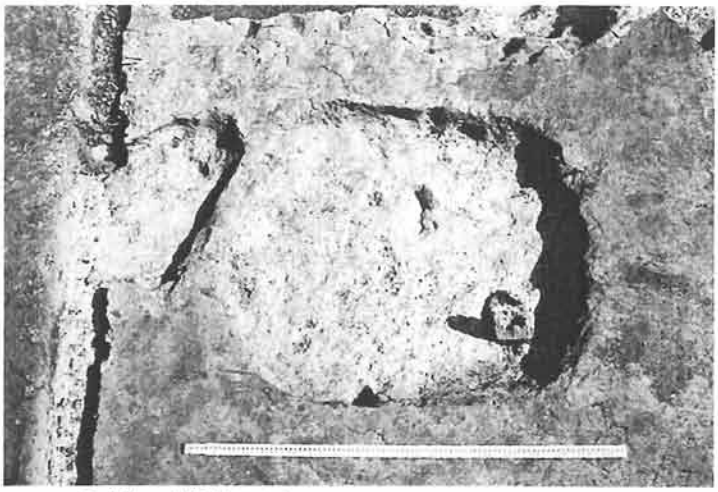
21号土坑　完掘(北西から)

Gc表土掘削(風倒木痕検出　北東から)

図版 18　23～25 号土坑

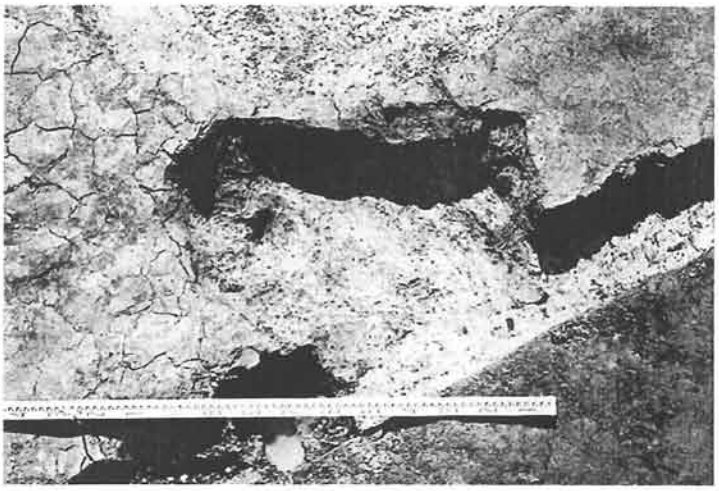


23(a·b)号土坑·24号土坑　プラン検出と土層断面(南から)

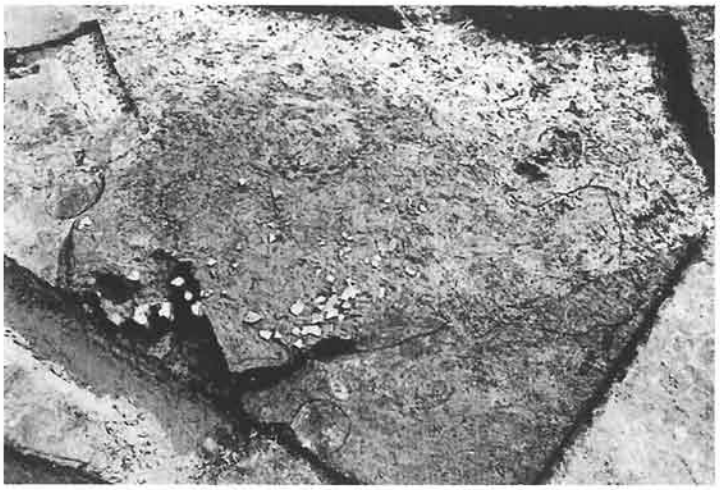


23b·24号土坑　完掘(南から)

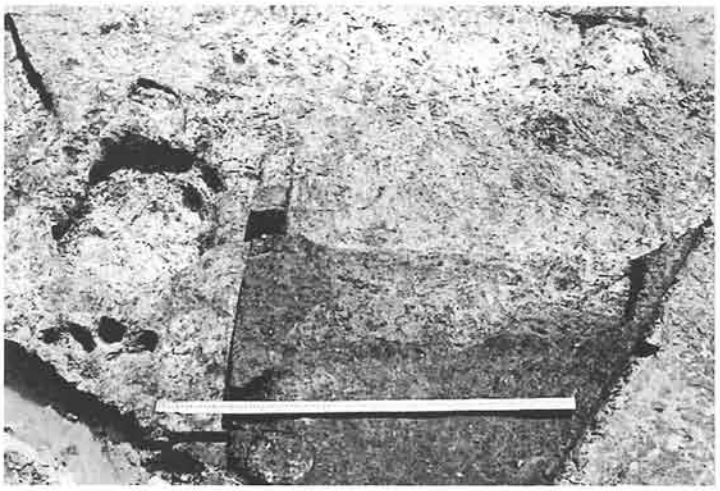
24号土坑　遺物出土状況(南東から)



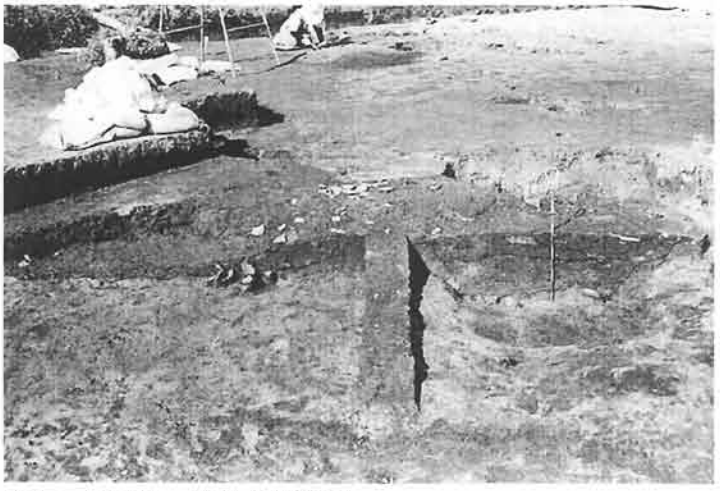
24号土坑　完掘(北西から)



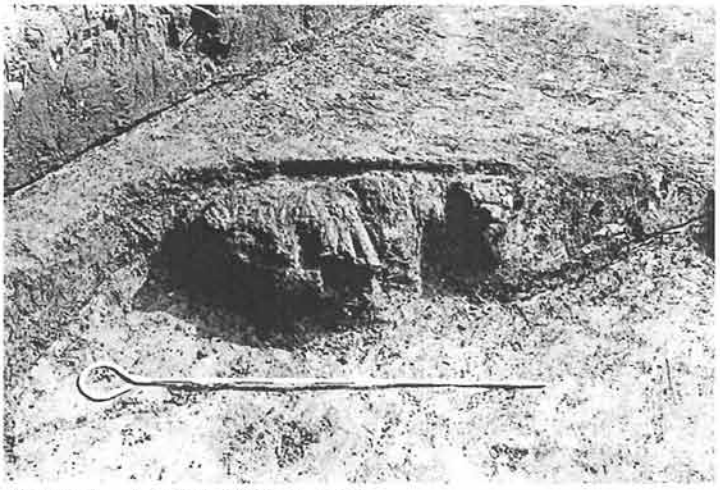
25(a～d)号土坑　プラン検出(北から)



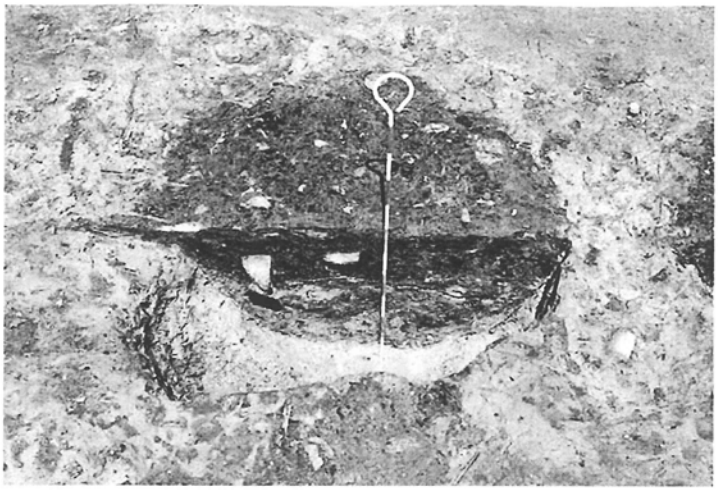
25(a～d)号土坑　完掘(北から)



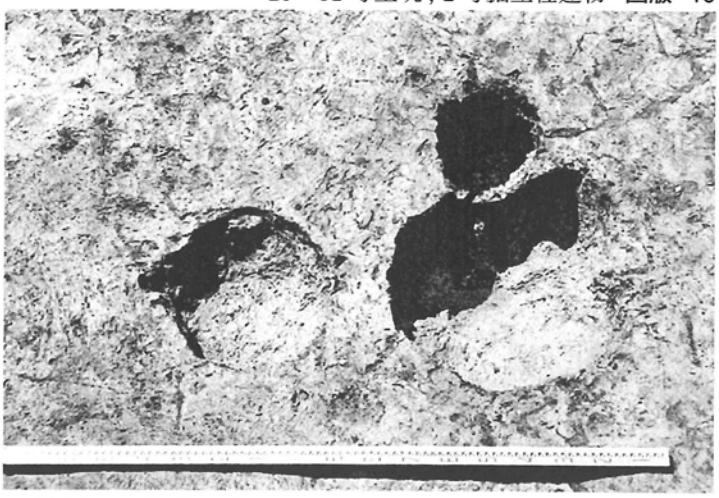
25(a～c)号土坑　土層断面(南から)



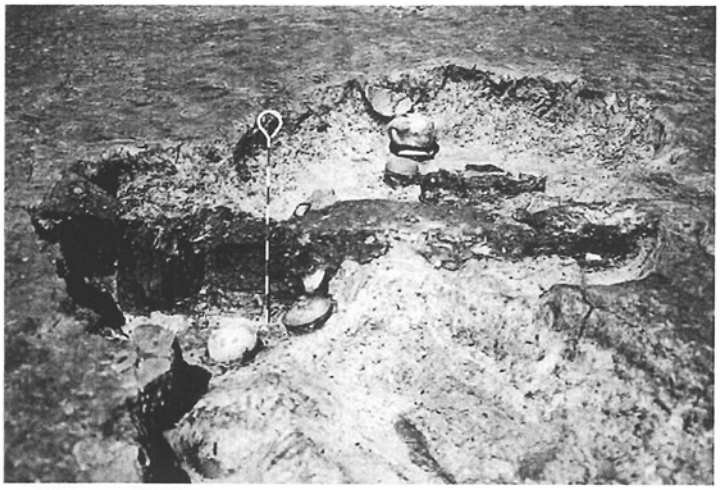
25a号土坑　炭化材出土状況(南から)



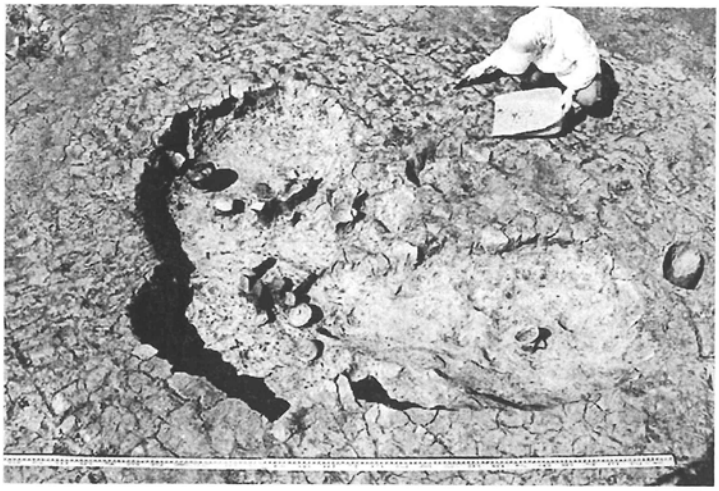
29号土坑(南東から)



29号土坑　完掘(北から)

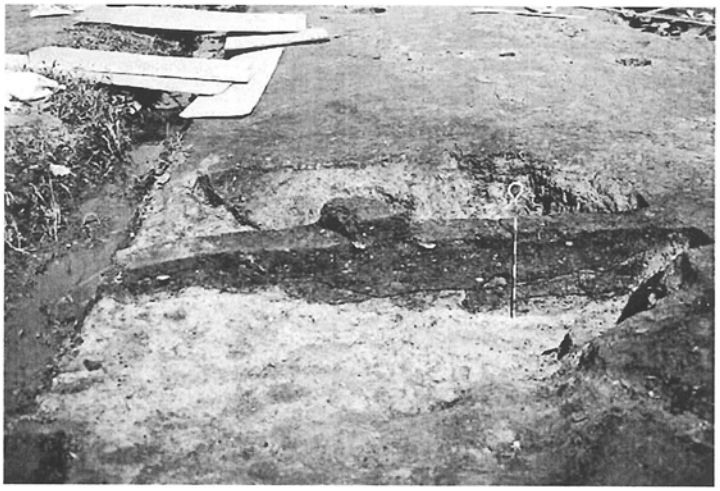


2号掘立柱建物P8･30(b･d)号土坑　土層断面(東から)

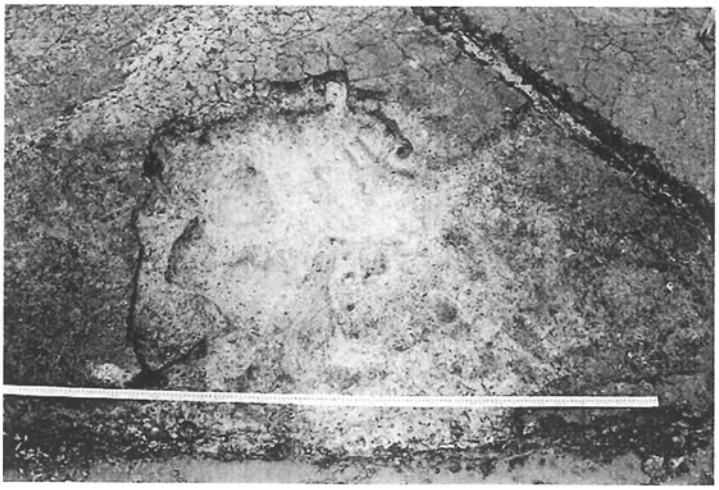


30号(a～d)号土坑　底面　遺物出土状況(南から)

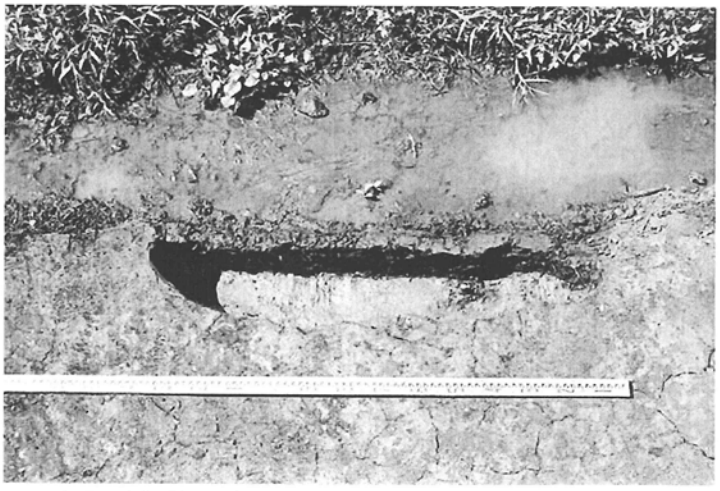
31号土坑　プラン検出・遺物出土状況(南から)



31号土坑　土層断面(東から)

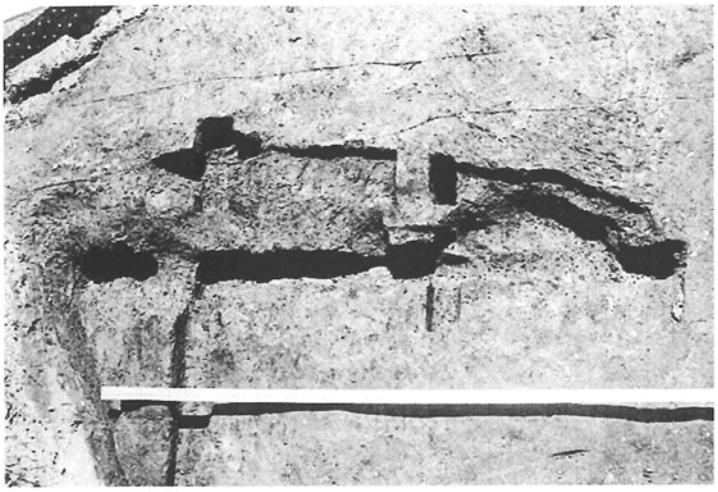


31号土坑　完掘(南西から)

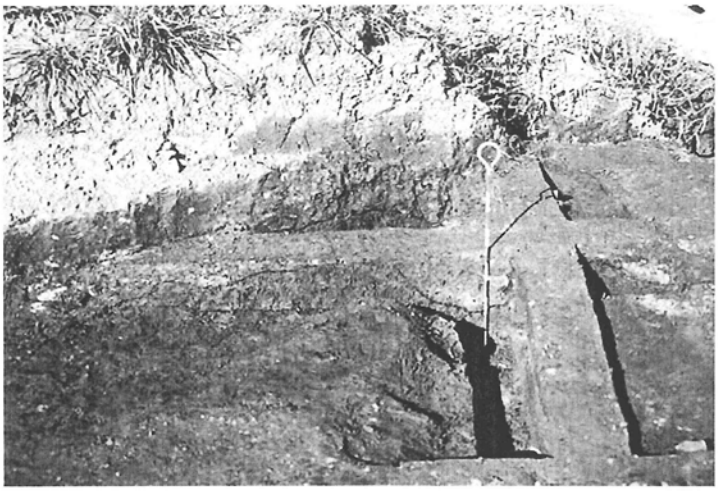


32号土坑　完掘(東から)

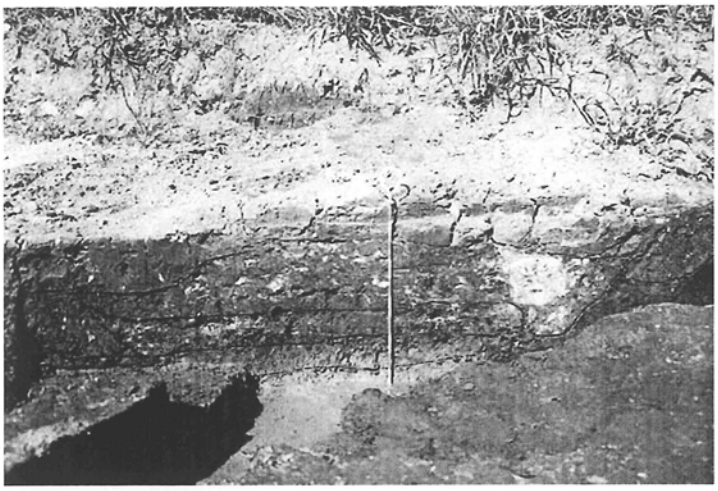
図版 20　33～36 号土坑



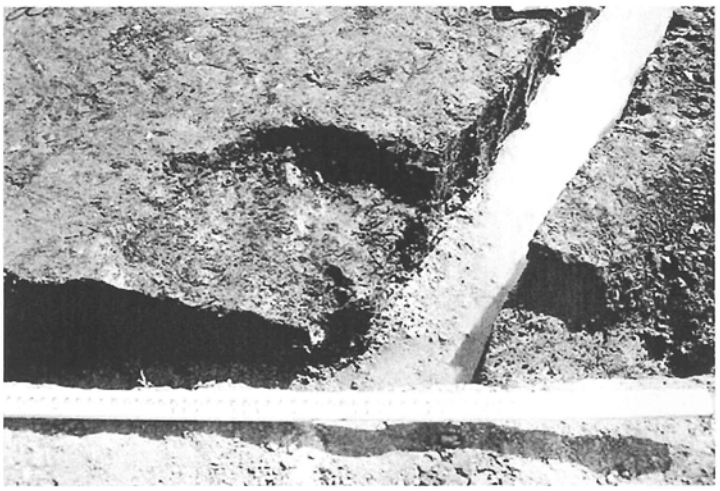
33(a･b)･34号土坑　完掘(西から)



33(a･b)号土坑　土層断面(南から)

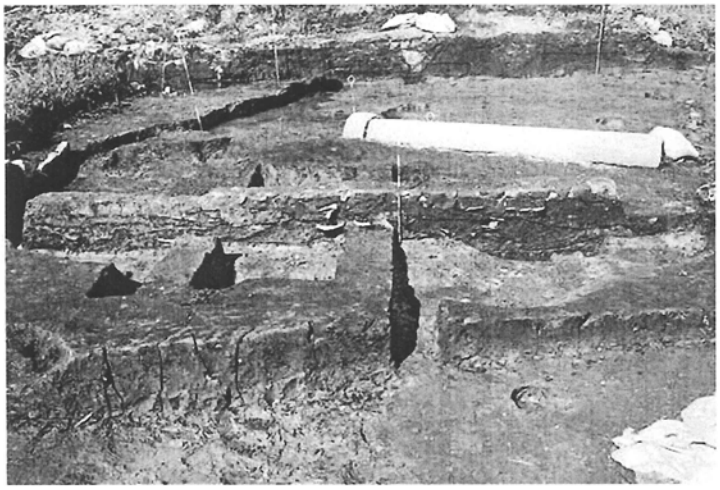


35号土坑　土層断面(南西から)

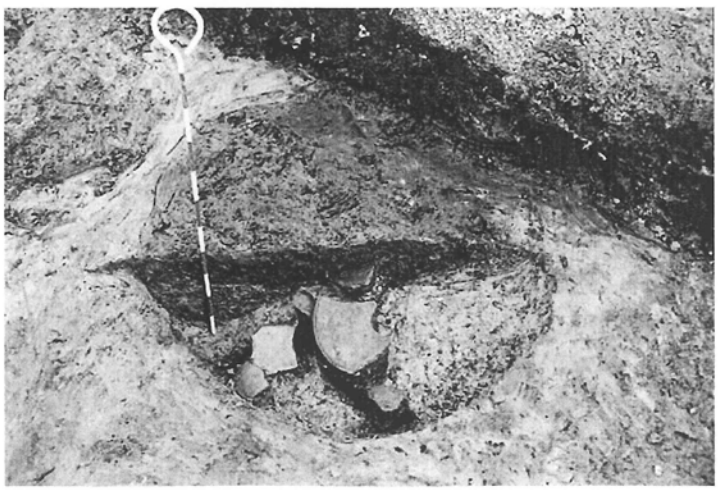


35号土坑　完掘(北から)

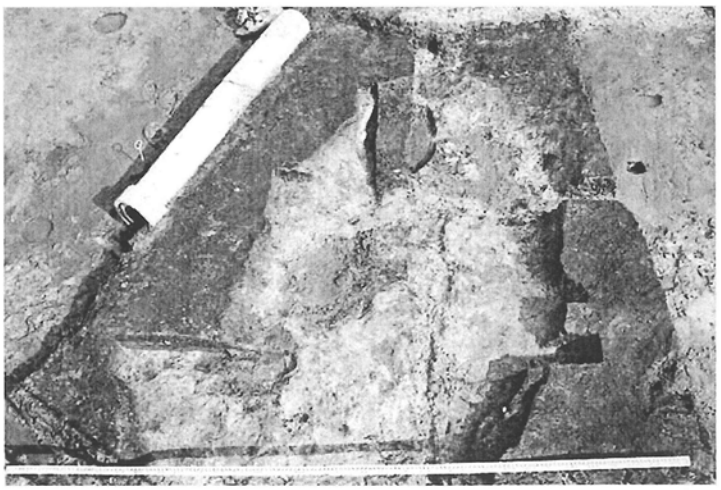
36号土坑中層　遺物出土状況(北西から)



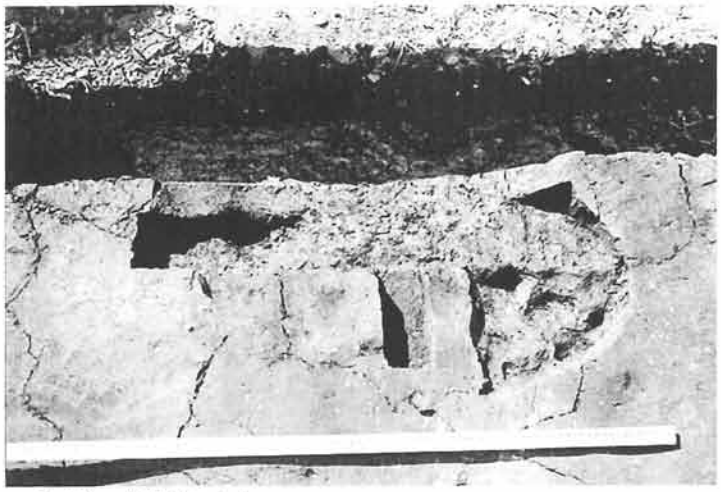
36号土坑　土層断面(南から)



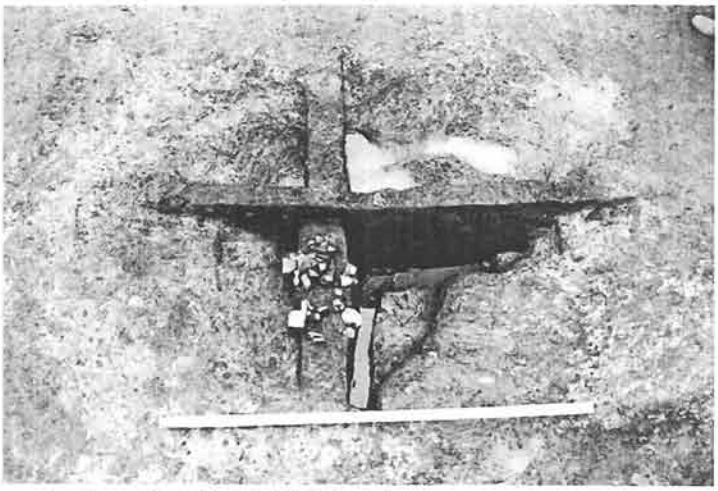
36号土坑底面　黒色土器出土状況(南西から)



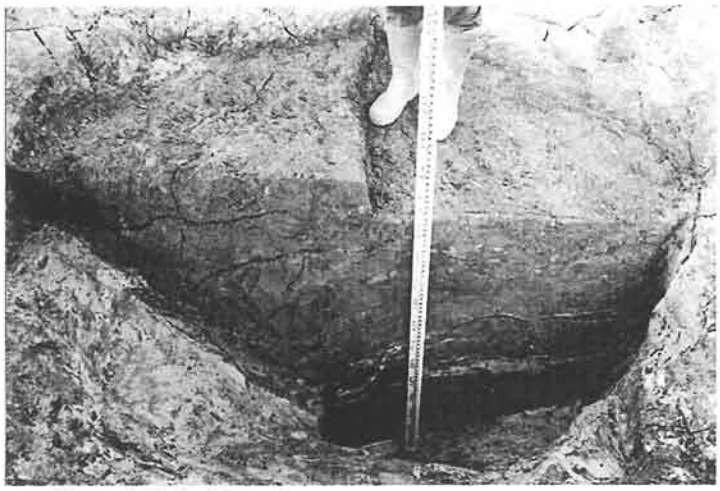
36号土坑　上部掘りあがり(西から)



37号土坑　完掘(東から)

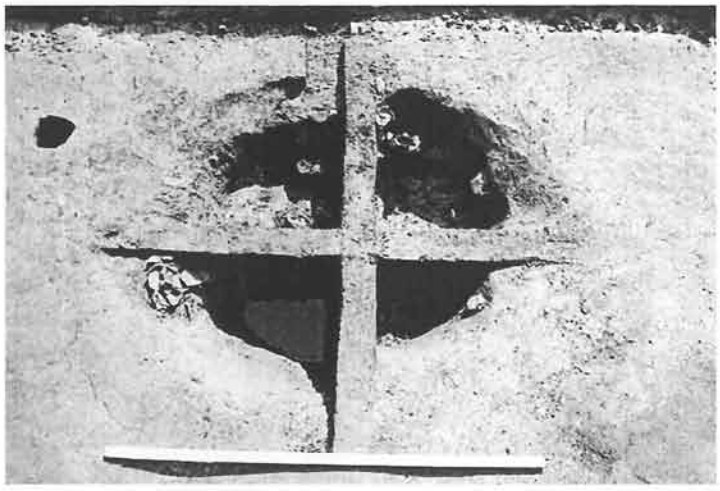


1 号井戸　上層　遺物出土状況(南から)



2 号井戸　土層断面(南から)

1 号井戸　深部掘削時　土層断面(南から)



3 号井戸　遺物出土状況(北から)

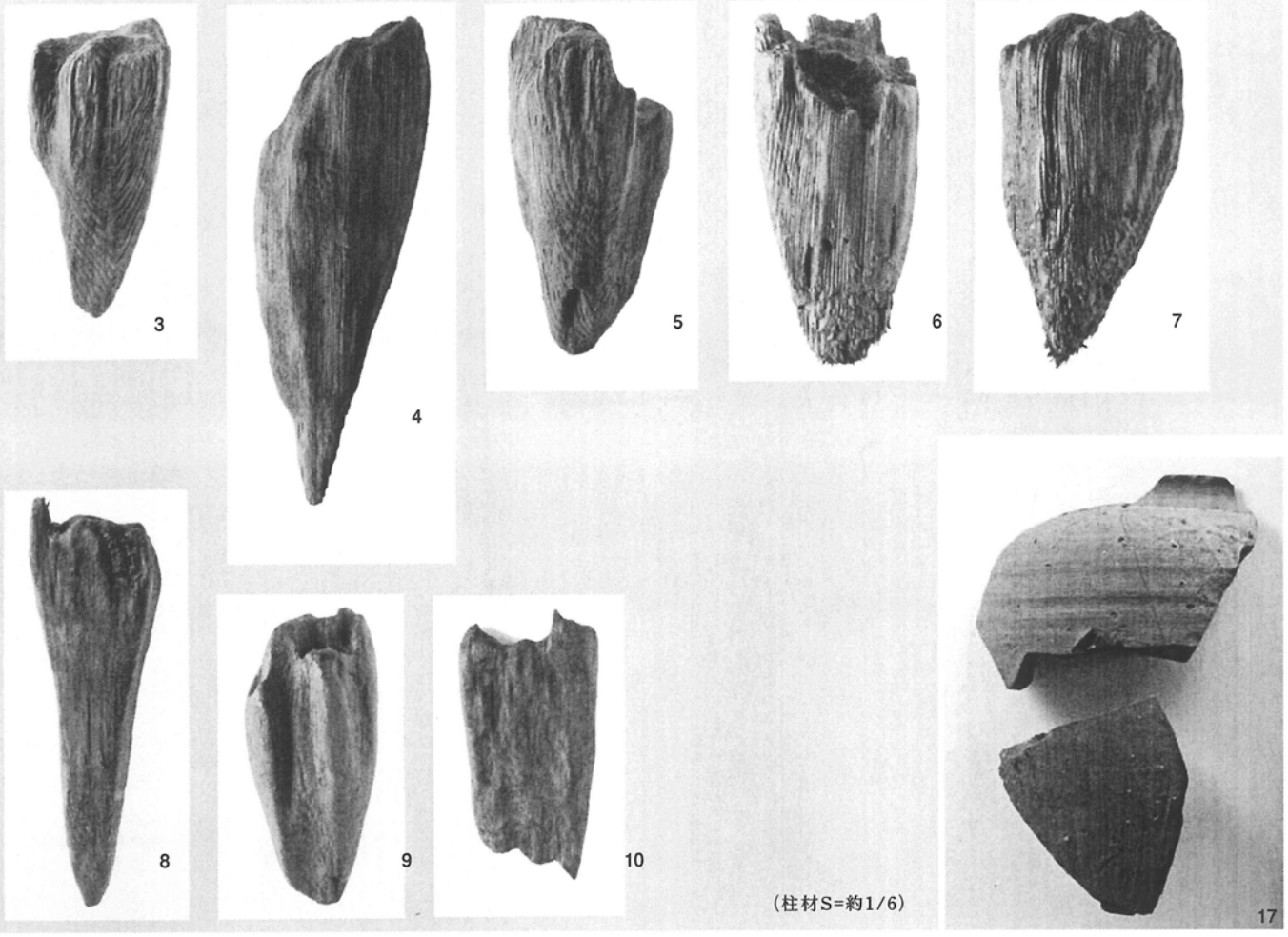
3 号井戸　深部掘削時　土層断面(南から)

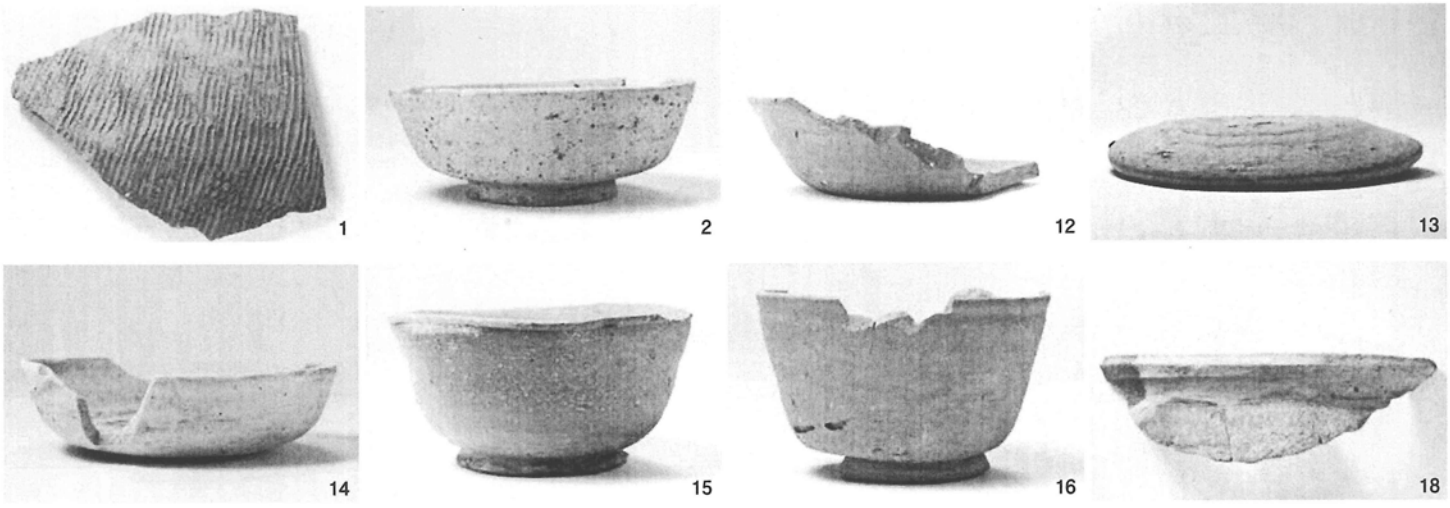
2 号溝　遺物出土状況(北から)

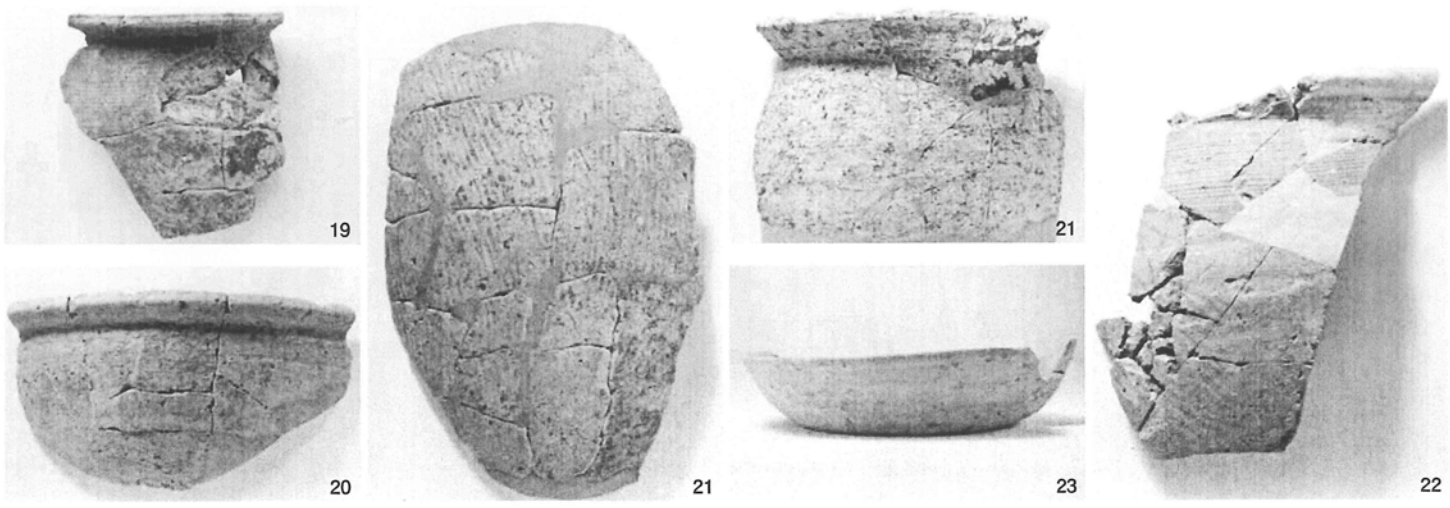
Hb2-3ピット
遺物出土状況(南から)

Ec3-4ピット
遺物出土状況(南から)

図版 22　出土遺物(5) 1～23



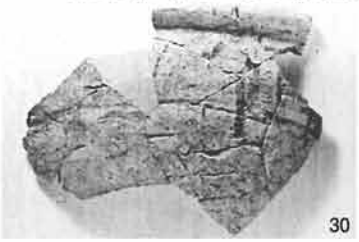


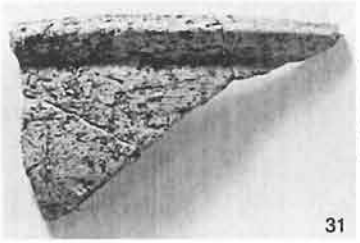


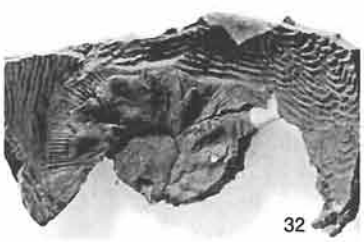
24

26

27

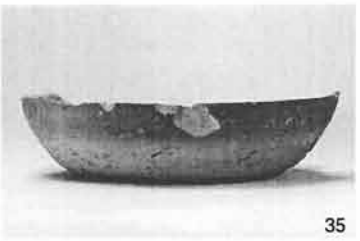

30


31


32

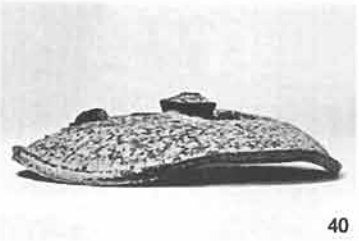
33

34


35

37

38


40

36

41

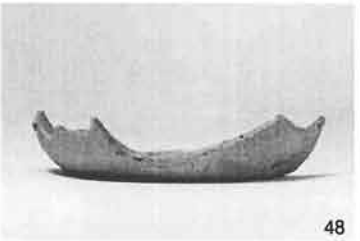
42

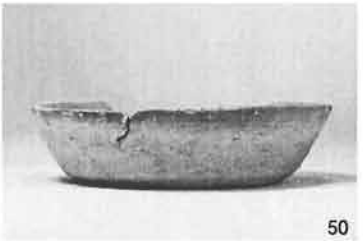
43

44

45

47


48


50

51

52

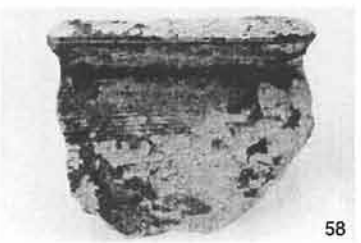
53

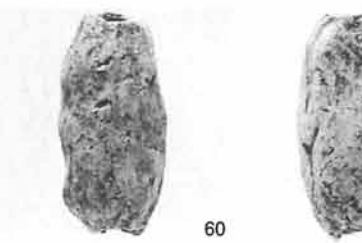
54

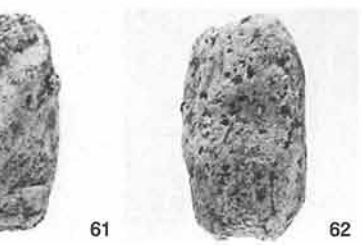
55

56

57


58


60


61

62

図版 24　出土遺物(7) 63～94

63

64

65

67

68

69

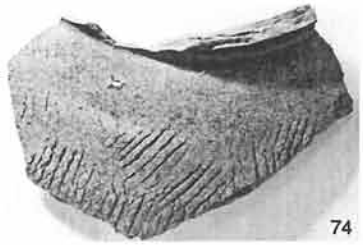
70

70

71

71

73


74

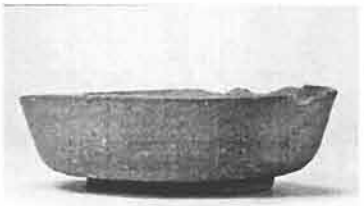
75

80

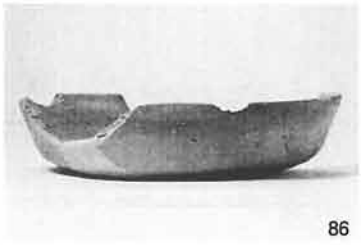
82

83

77

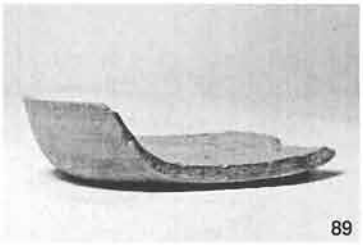

84

85


86

87

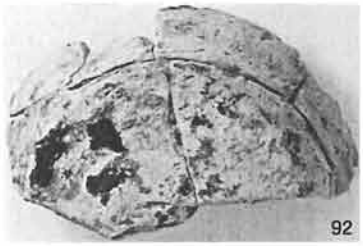
87


89

88

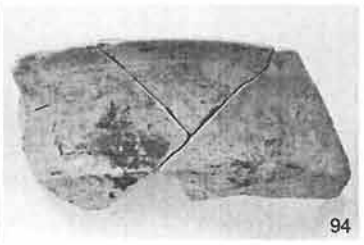
88

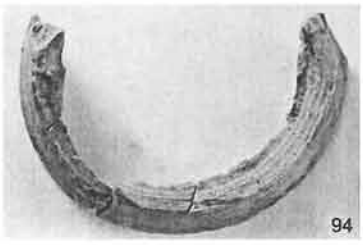
92


92

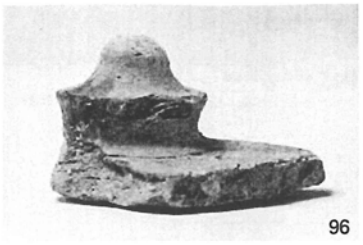
91

93


94


94

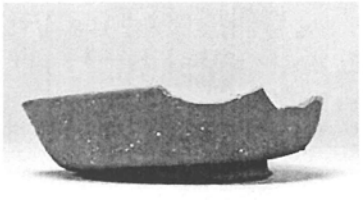
95


96

97

99

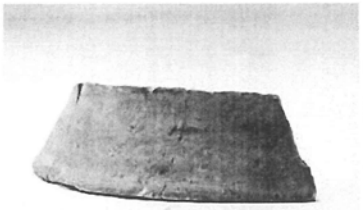
100

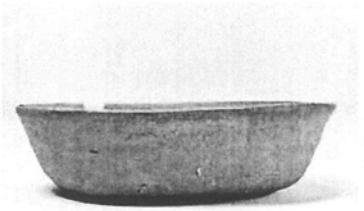

101

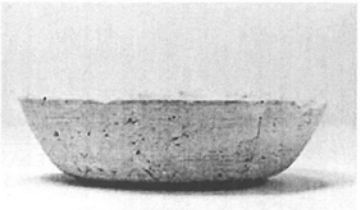
102

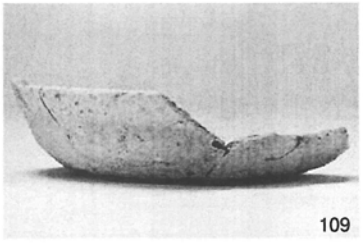
103

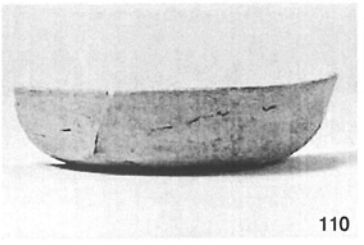
104

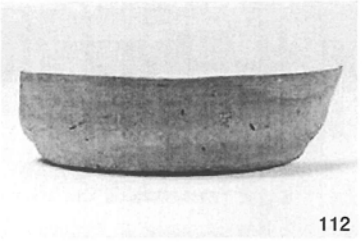

106


107


108


109


110


112

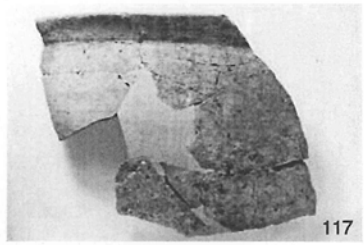
111

111

114

115

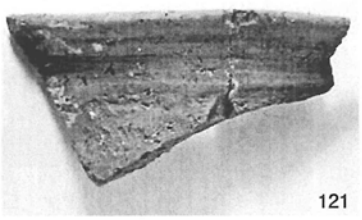
116

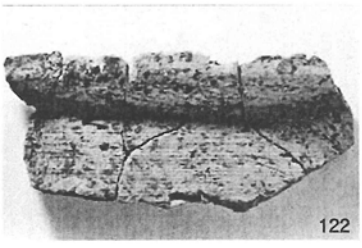

117

119

118

120


121


122

図版 26　出土遺物(9) 123～148

123

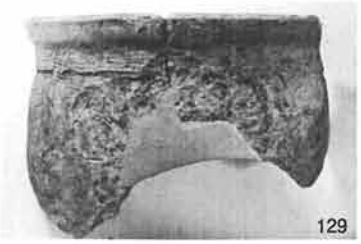
124

125

126

127

128


129

132

133

133

134

130

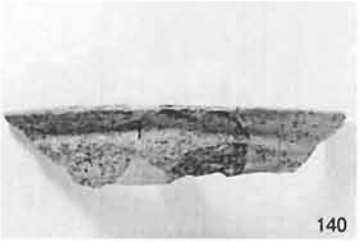
135

136

138

137

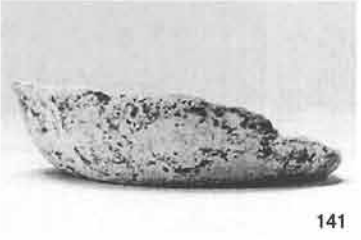
139

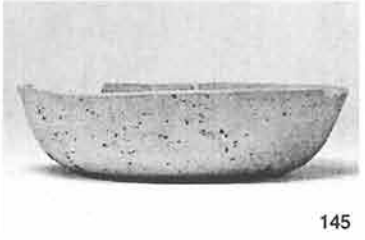

140

142

144

146


141

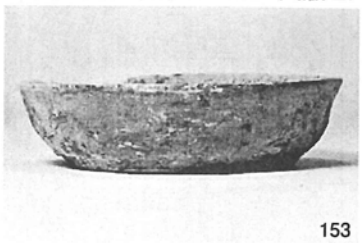

145

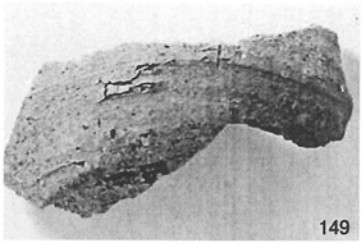
148

147

150

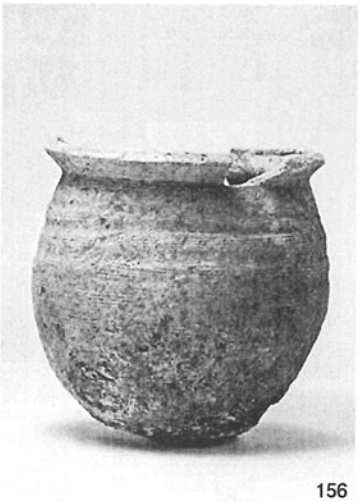
152


153


149

154

155

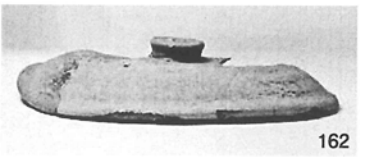

156

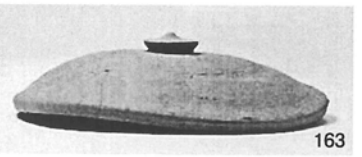
158

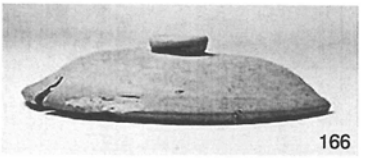
159

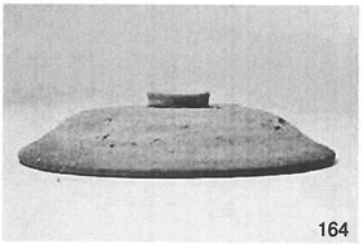
160

161

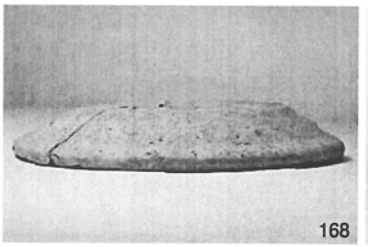

162


163

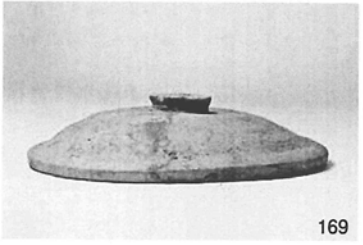

166


164

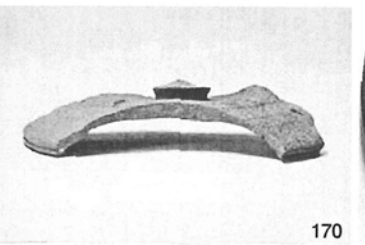
164


168

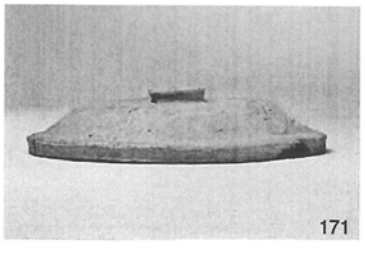
168


169

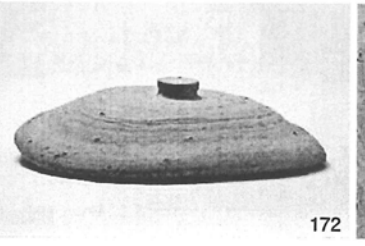
169

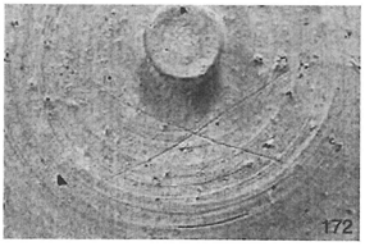

170

170

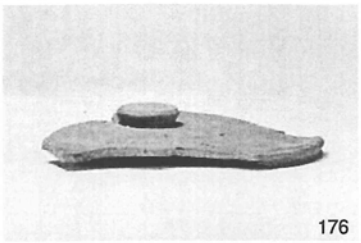

171

171


172

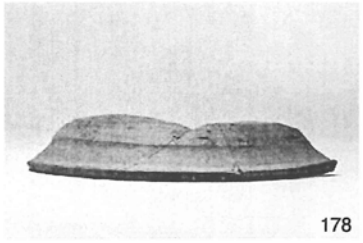

172

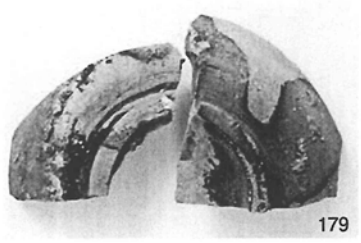
図版 28　出土遺物(11) 176～201

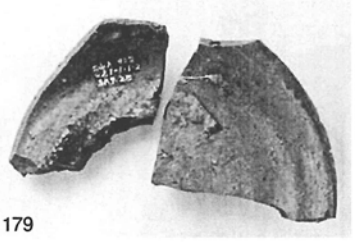

176

177

177


178


179


179

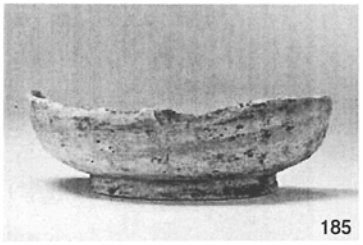
180

182

183

184

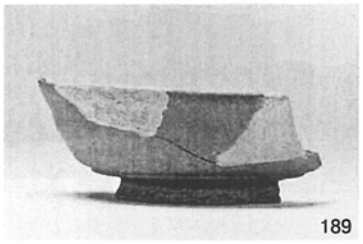
184

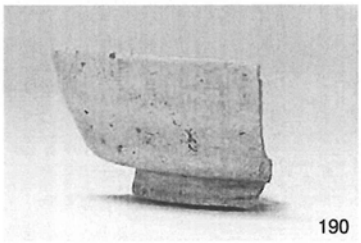

185

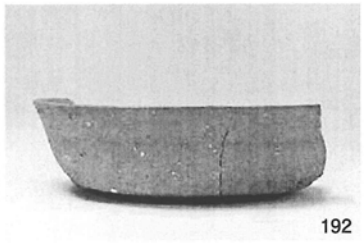
186

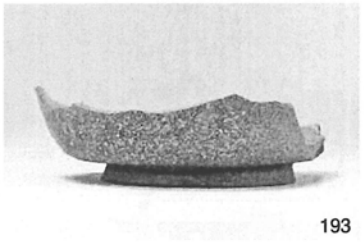
187

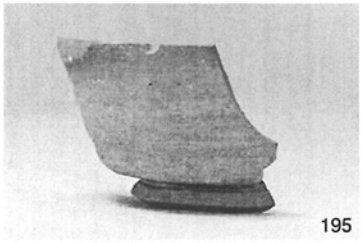
188


189

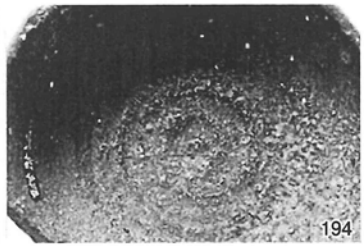

190


192


193

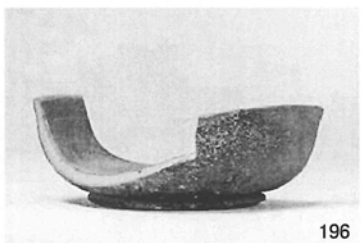

195

194

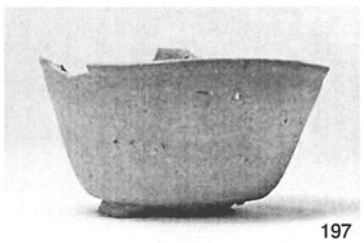

194

194

199

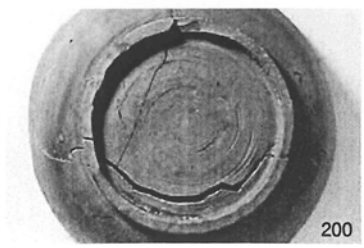

196

196


197

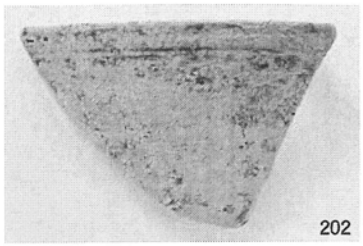
197

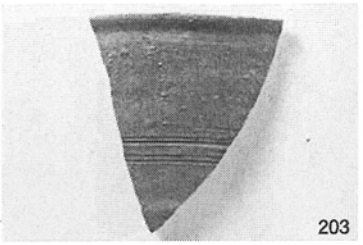
200

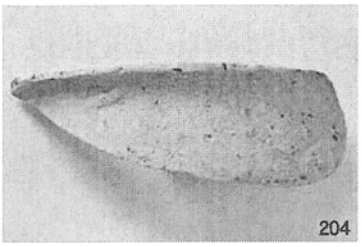

200

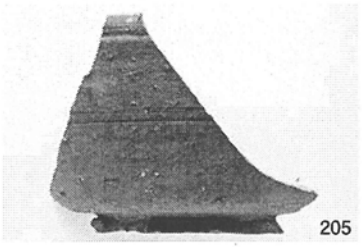
201

201


202

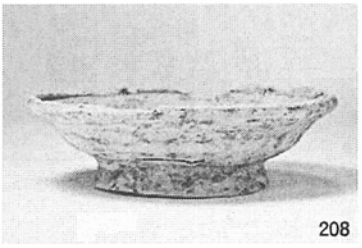

203

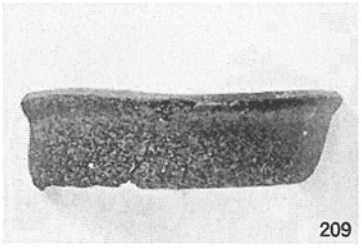

204

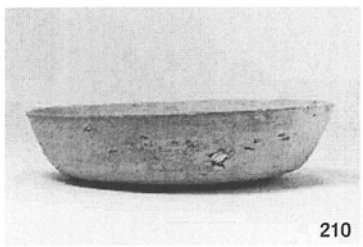

205

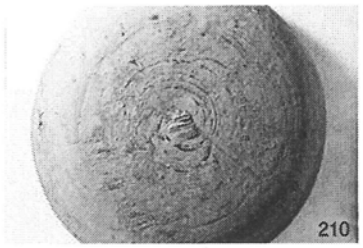
206

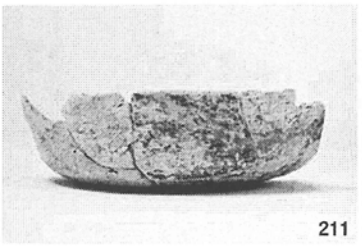
206

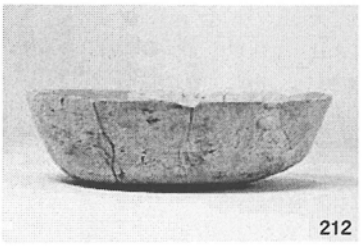

208

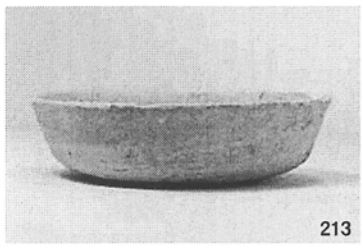

209

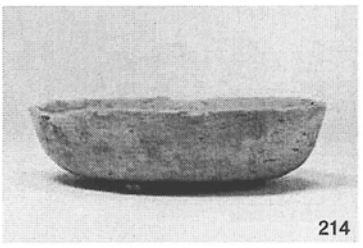

210

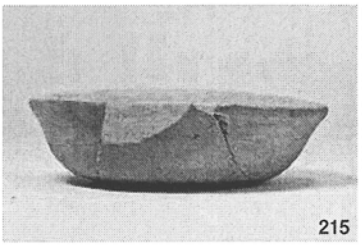

210

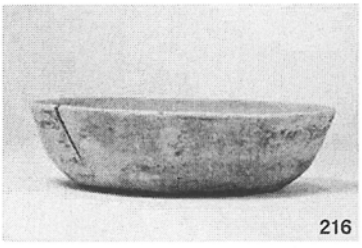

211

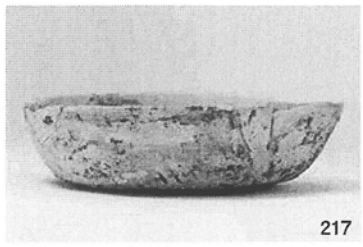

212


213

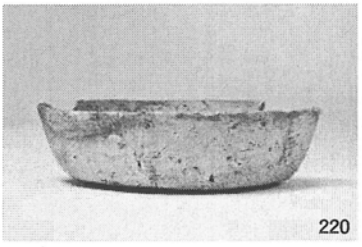

214


215

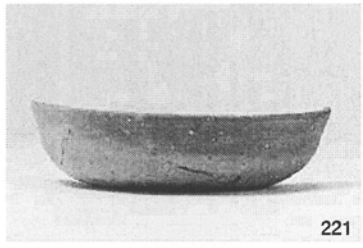

216

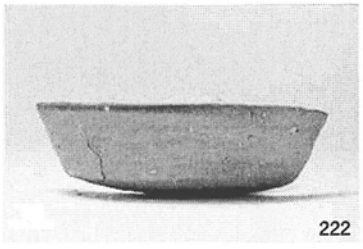

217

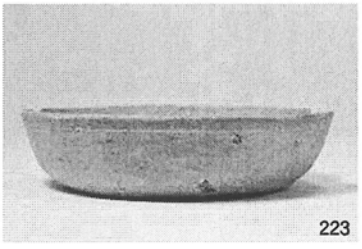
218

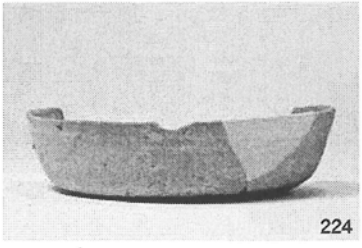

220

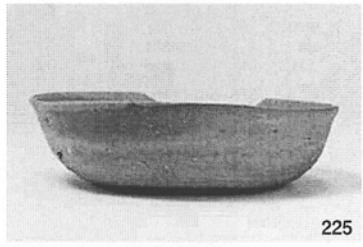
220

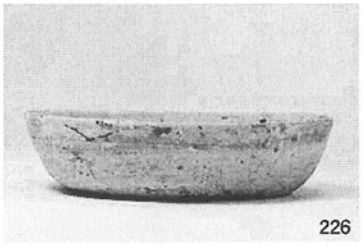

221

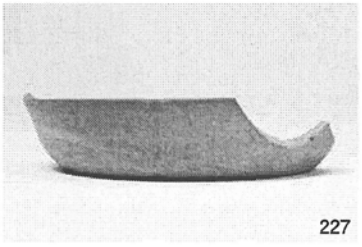

222

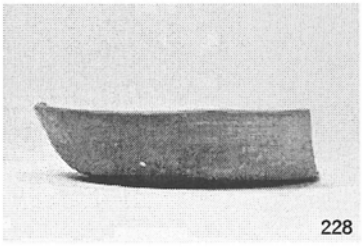

223

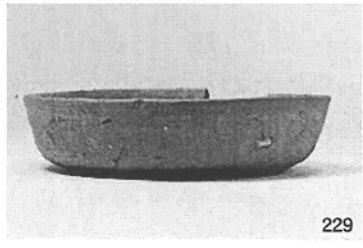

224

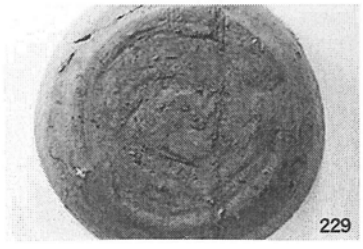

225

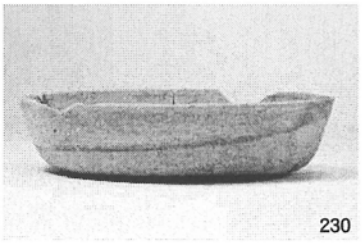

226

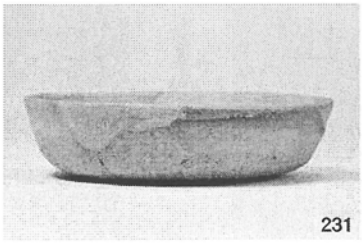

227


228


229

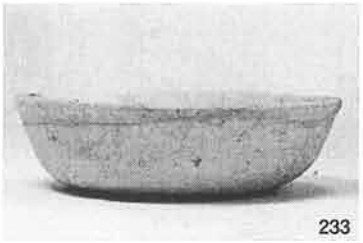

229

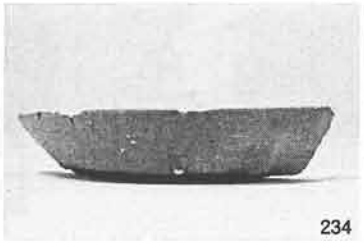

230

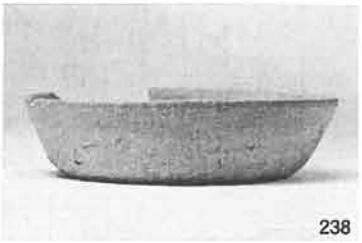

231

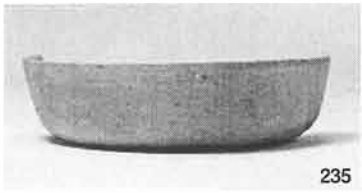
図版 30　出土遺物(13) 232～266

232

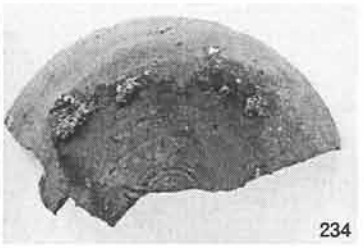

233


234

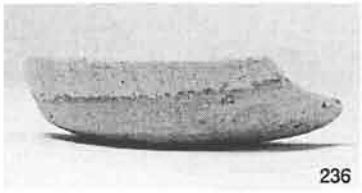

238


235

233

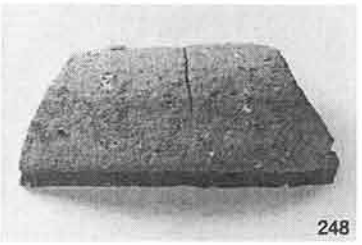

234

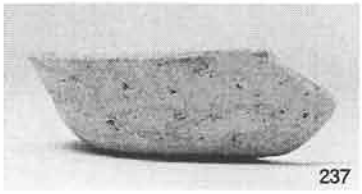
238


236

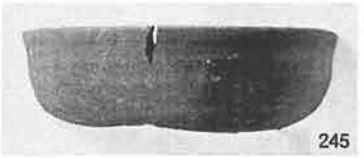
240

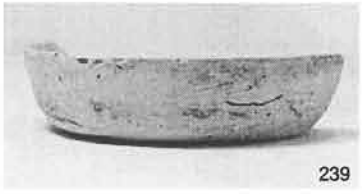
244


248


237

241


245

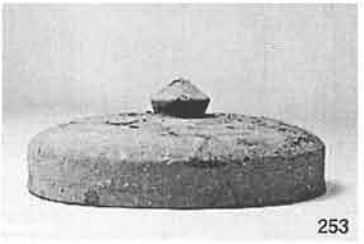

239

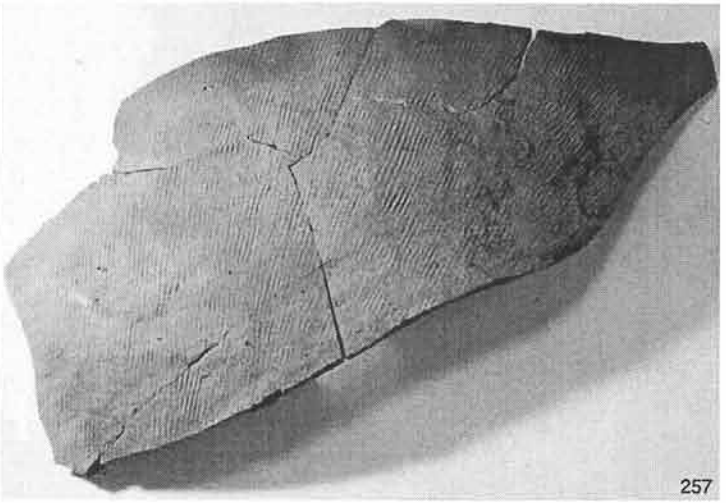
243

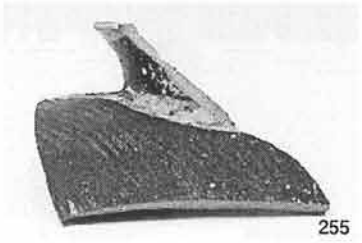
246

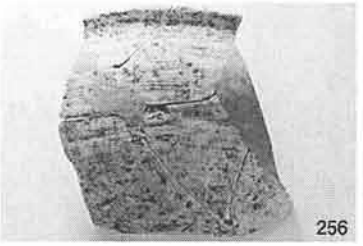
250

252


253


257


255

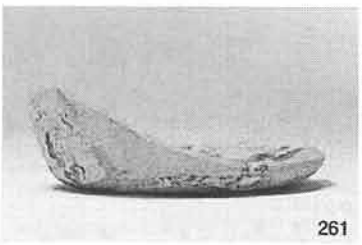

256

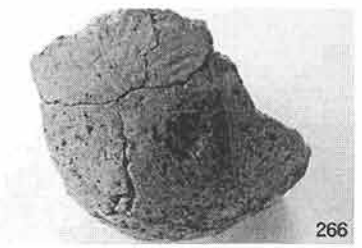
259

262

263

264


261


266

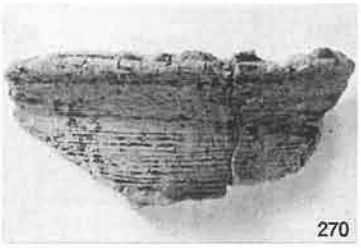
265

267

268

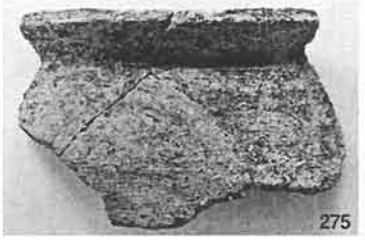
269

265

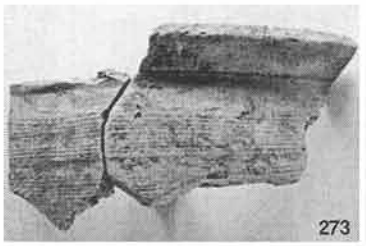

270

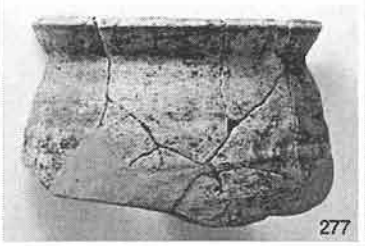
272

274


275

276


273


277

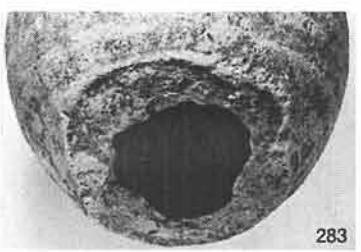
278

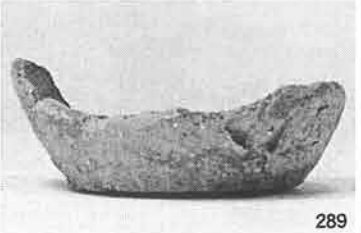
279

281

284

283

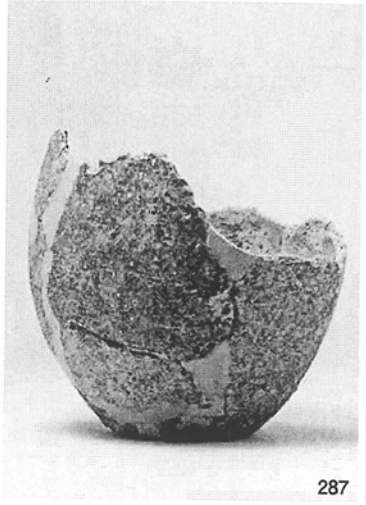

283

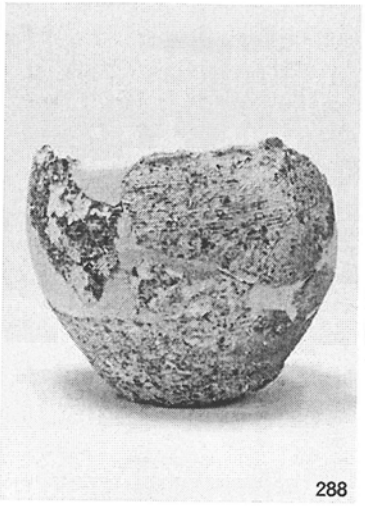

289

285

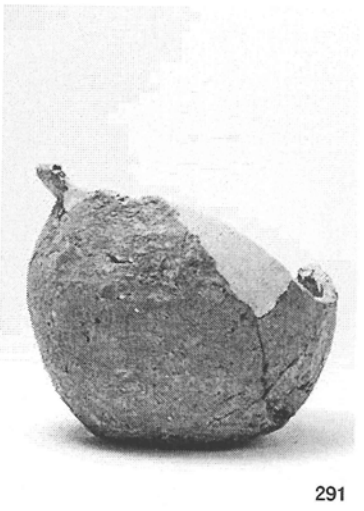
286

図版 32　出土遺物 (15) 287～305

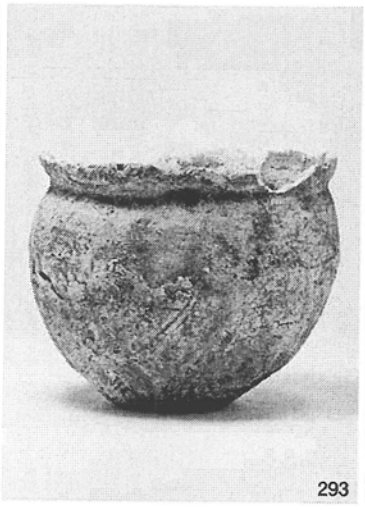

287

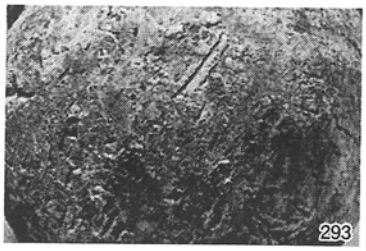

288

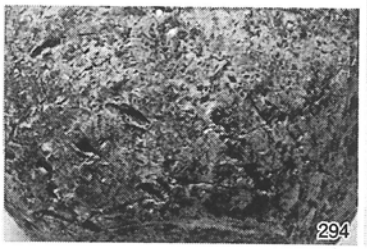
290


291

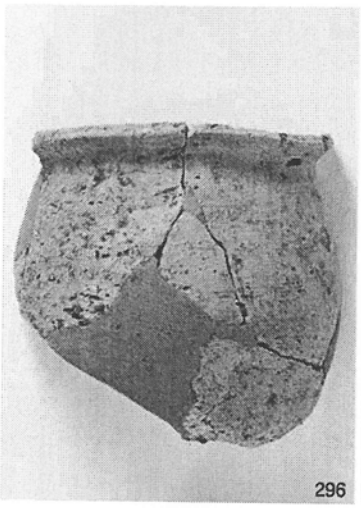
292

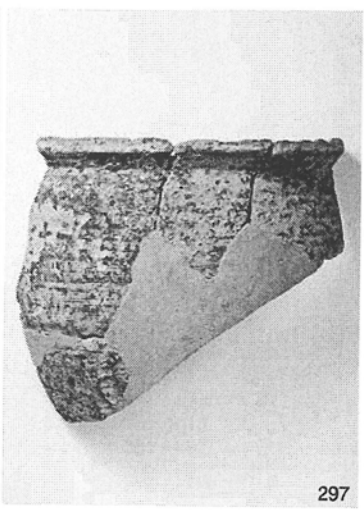

293

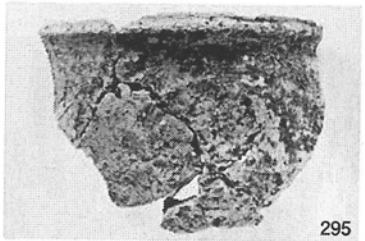

293

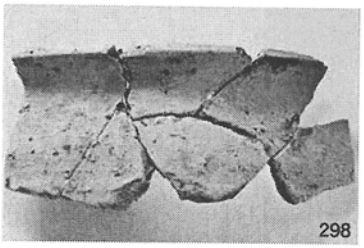

294

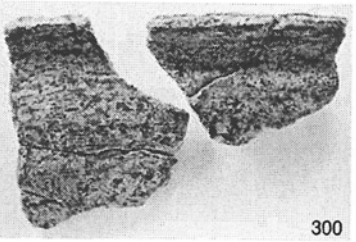
294


296

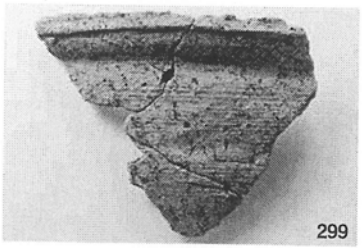

297

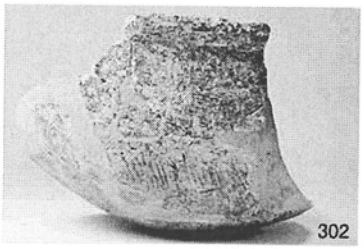

295


298


300

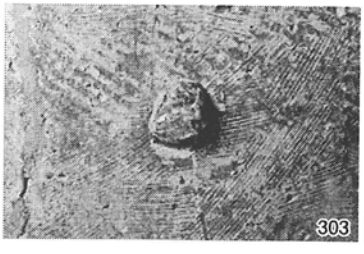
301


299

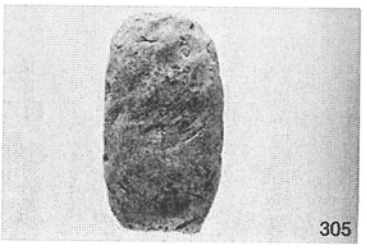

302

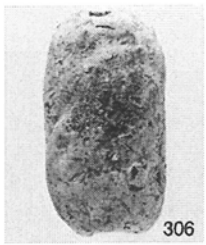
301

303


303

304

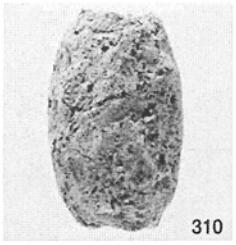

305

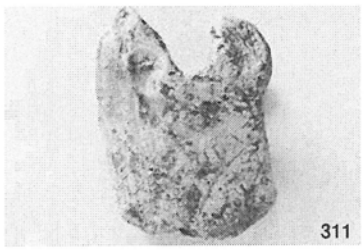

306

307

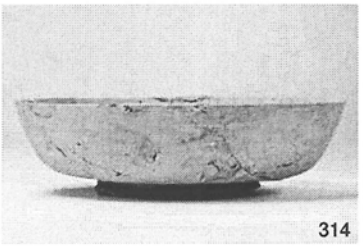
308

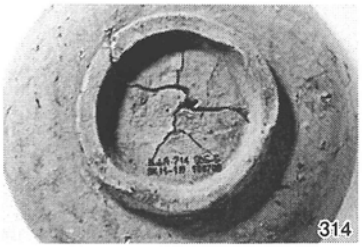
309

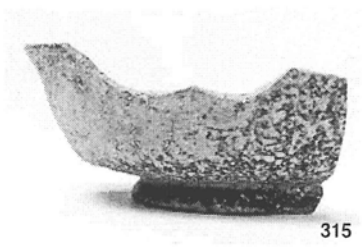

310

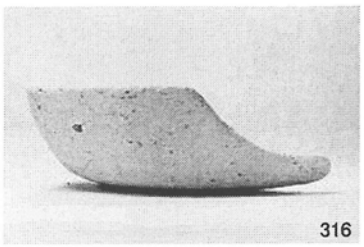

311

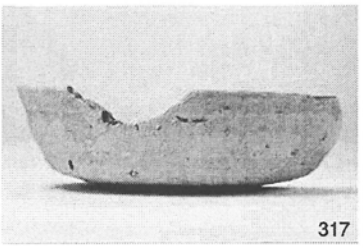
312

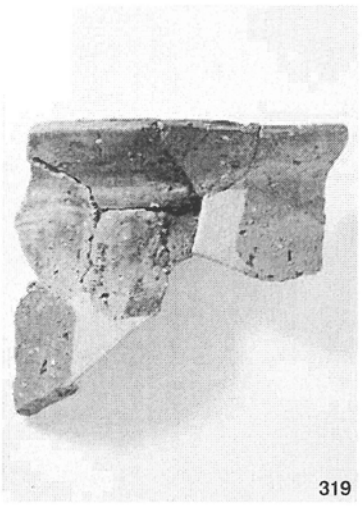

314

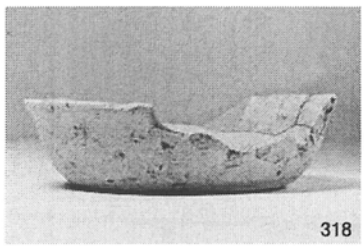

314

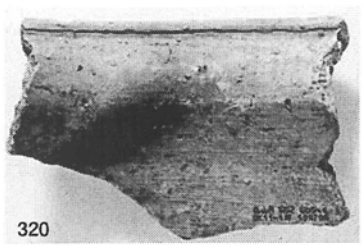

315

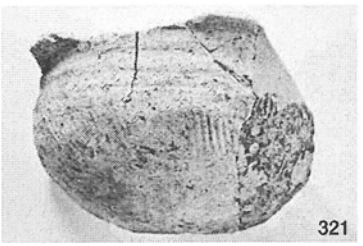

316

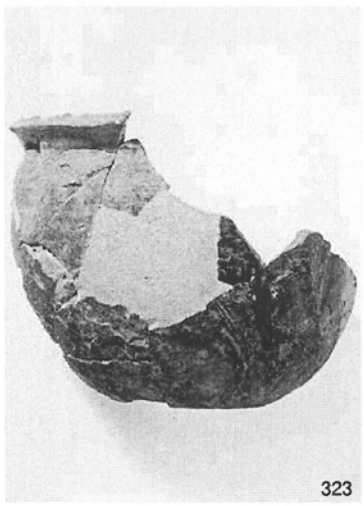

317

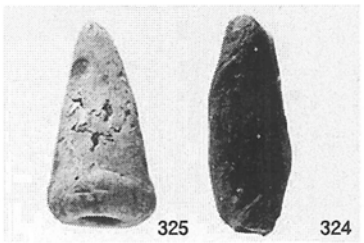

319

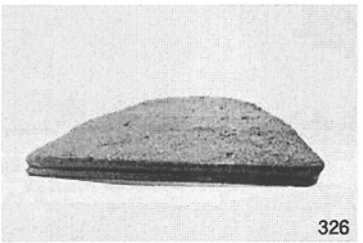

318

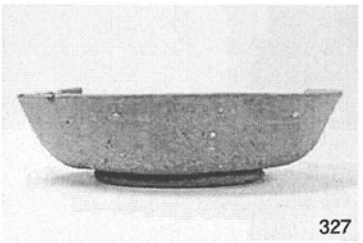

320

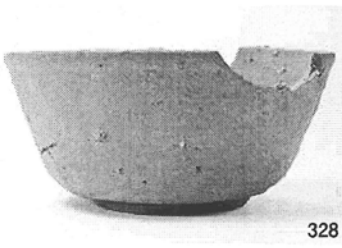

321

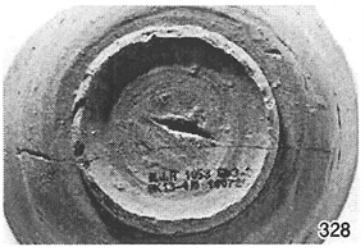

323

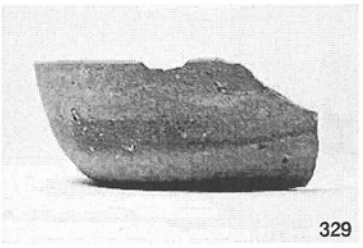

325
324

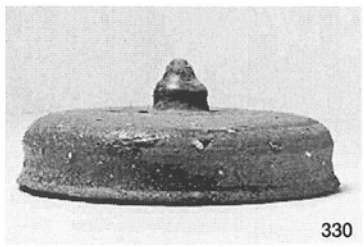

326

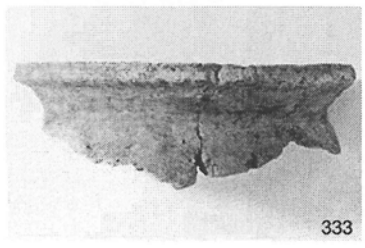

327


328

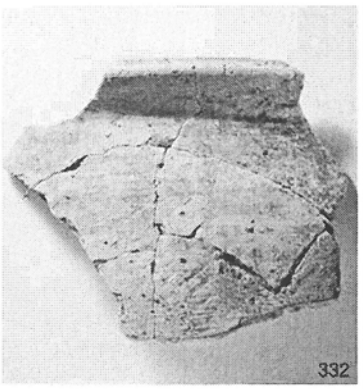

328

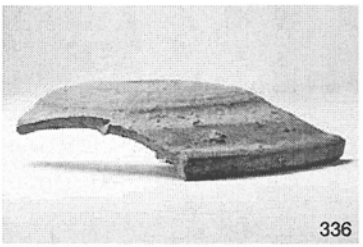

329

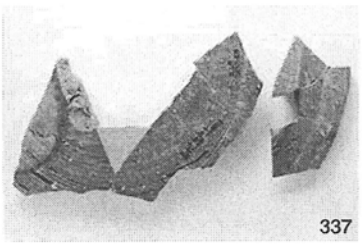

330


333

331

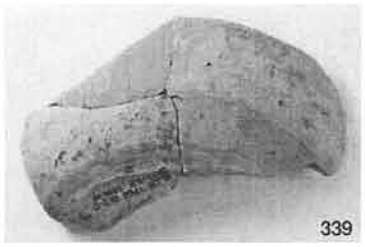

332


336

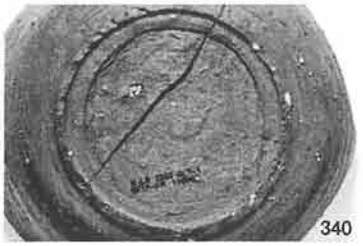

337

図版 34　出土遺物(17) 338～366

338


339

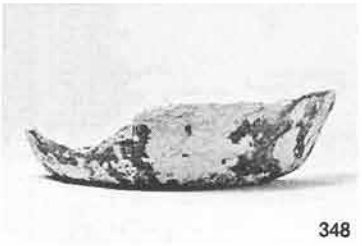
340

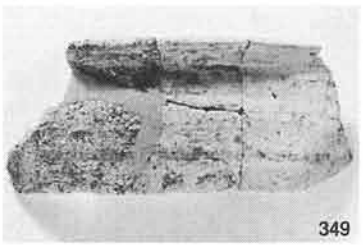

340

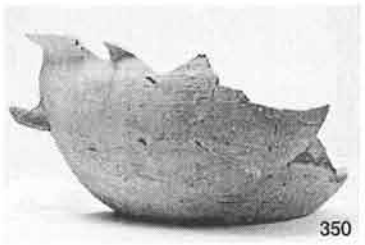
341

343

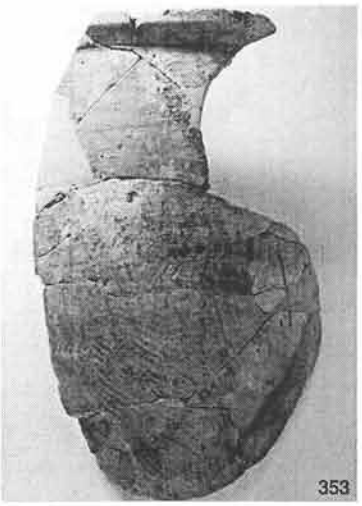
347


348

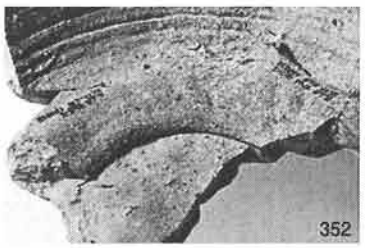

349


350

350


353

351


352

355

354

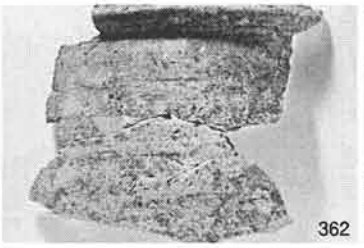
356

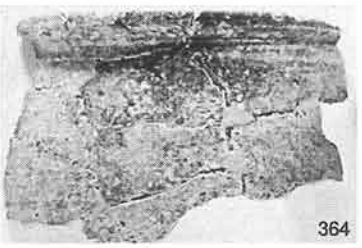
358

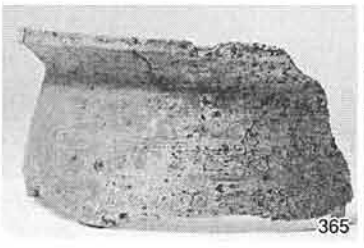
359

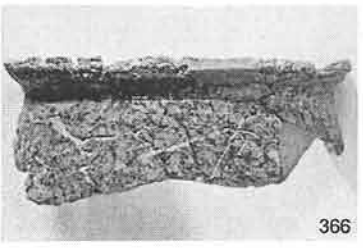
360

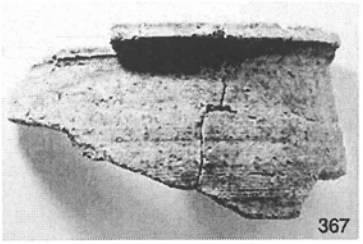
361

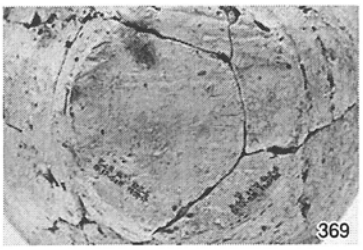

362

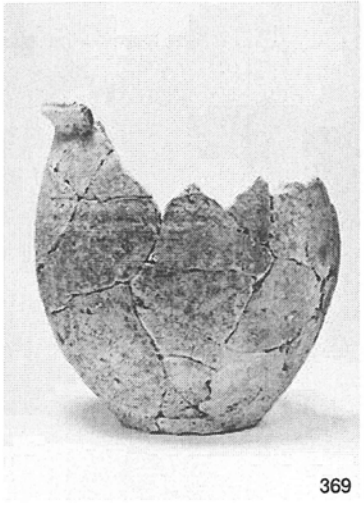

364

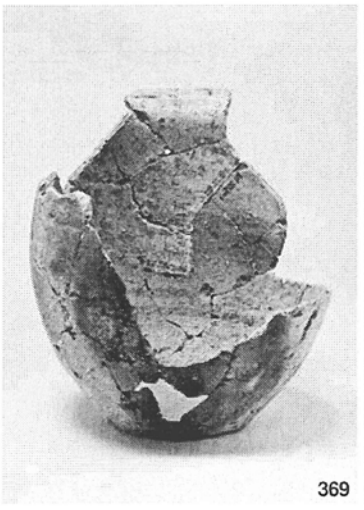

365


366


367


369

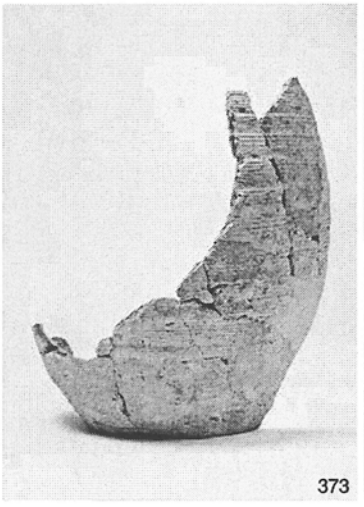

369

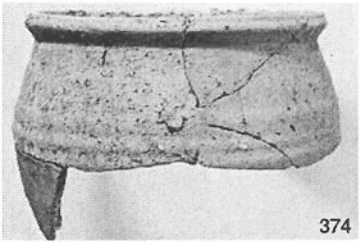

369

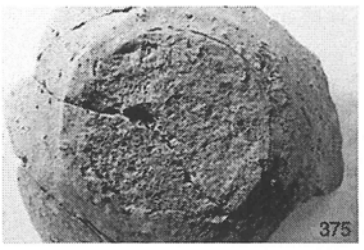
370

371

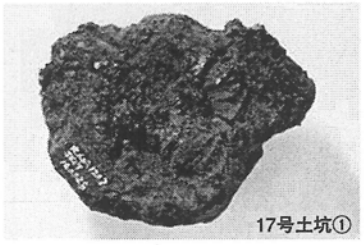
372


373

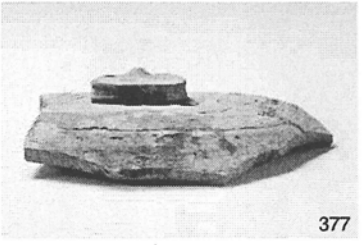

374

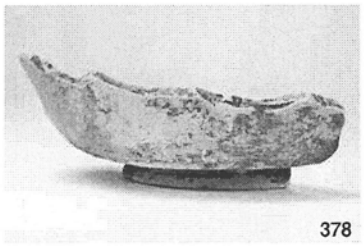

375

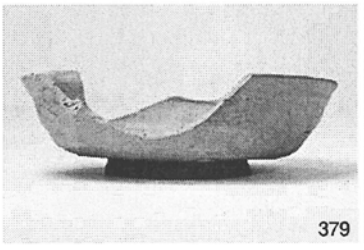
376

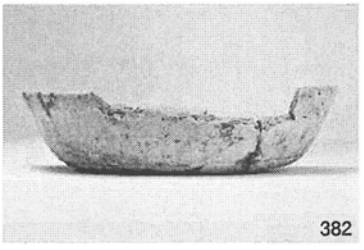

17号土坑①

17号土坑①裏

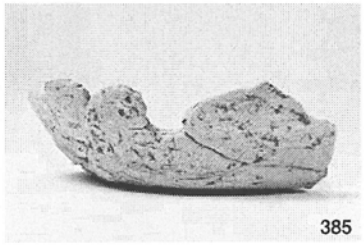

377

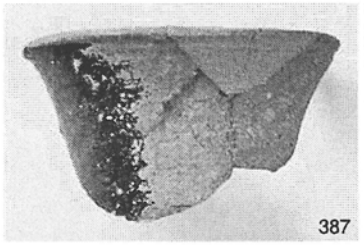

378


379

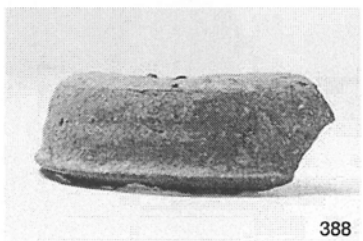

382

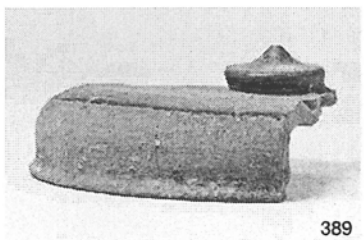
384

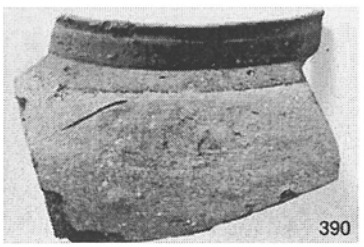

385


387

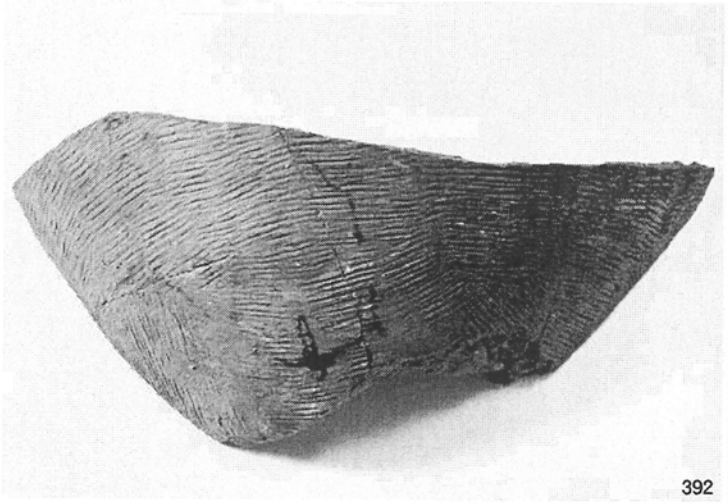
391

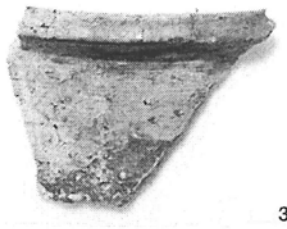

388

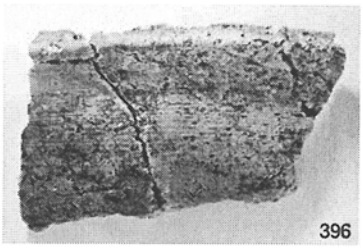

389

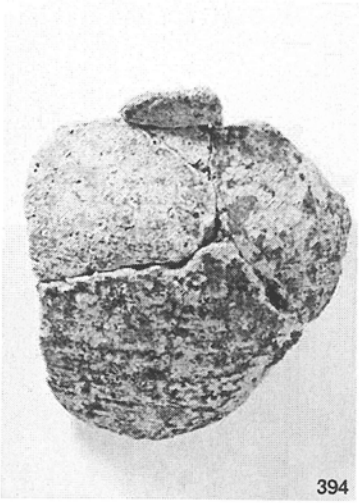

390

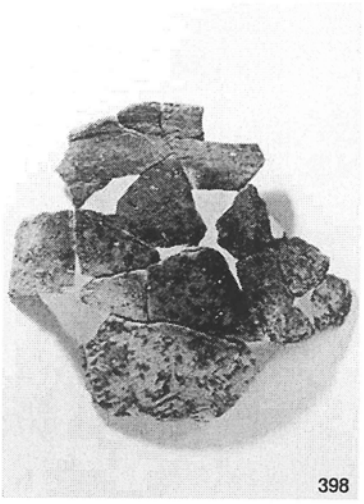
図版 36　出土遺物(19) 392～412


392

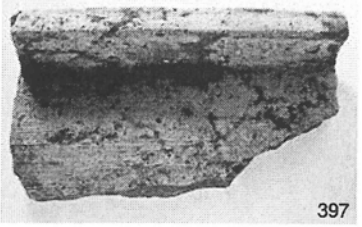

393

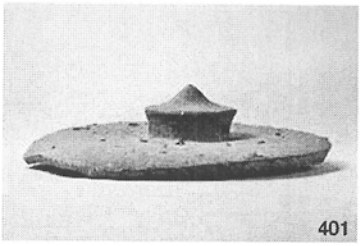

396

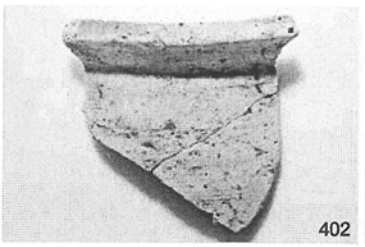

394


398

399

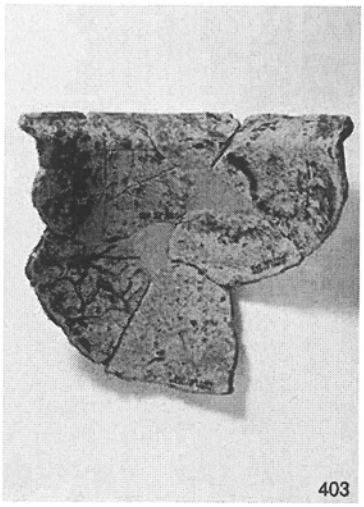

397

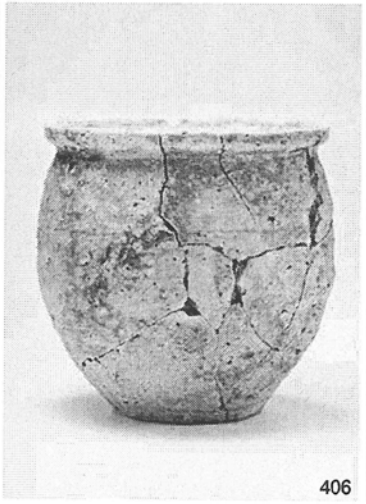

401

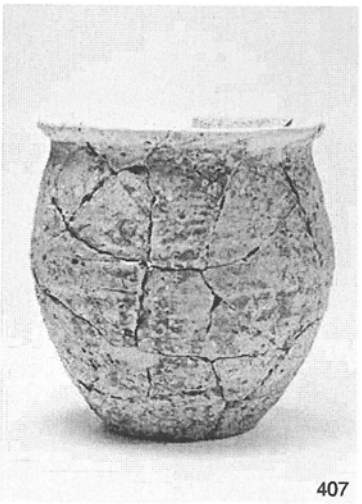

402

404

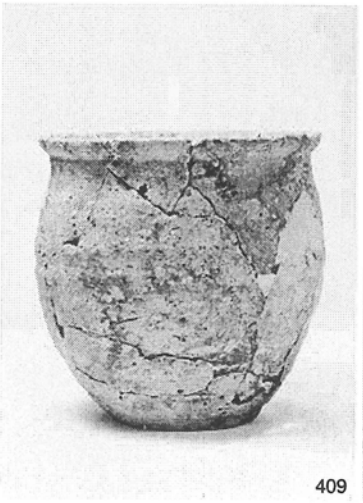
403


403

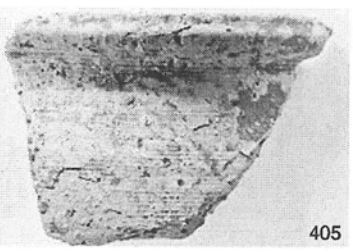

406

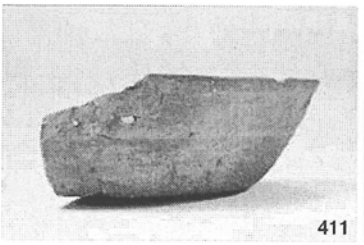

407

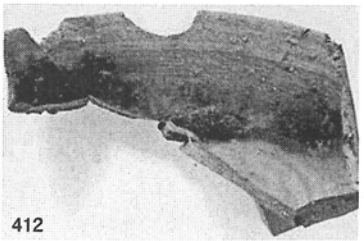
408


409

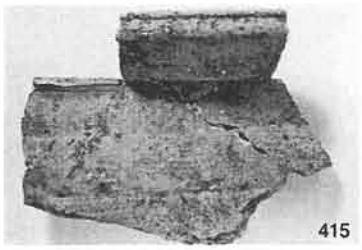
409


405

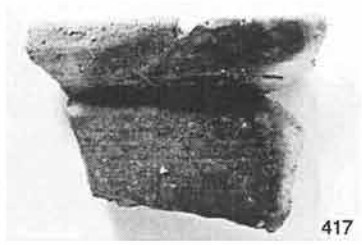

411

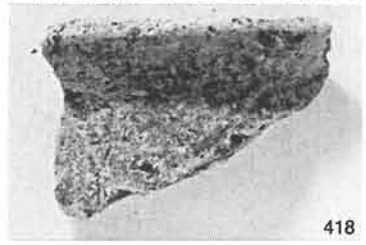

412

414


415

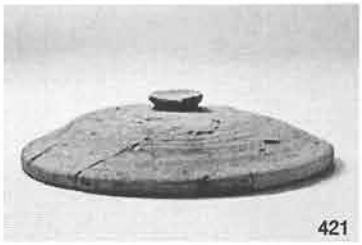
416

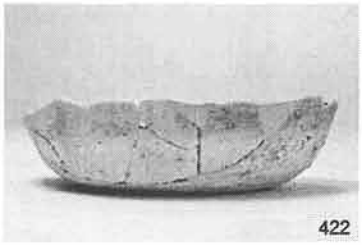

417

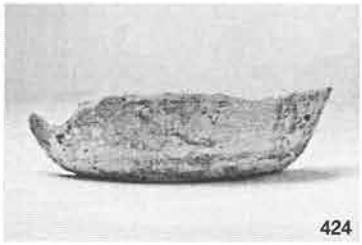

418

419

420


421


422


424

427

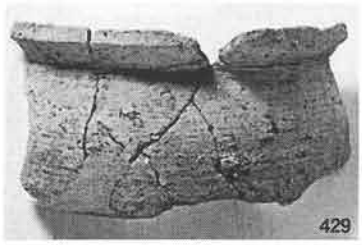
423

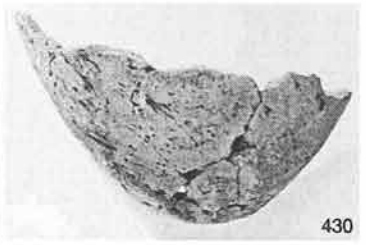
423

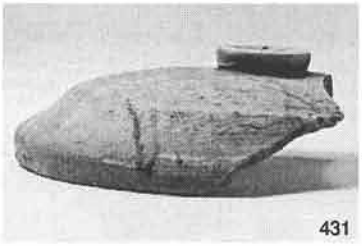
427

426

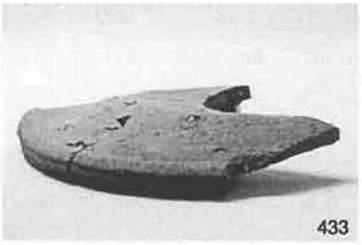
428


429


430


431

432

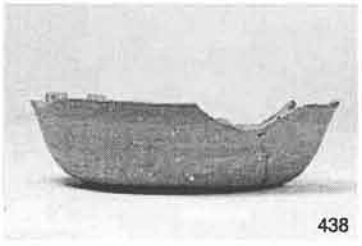

433

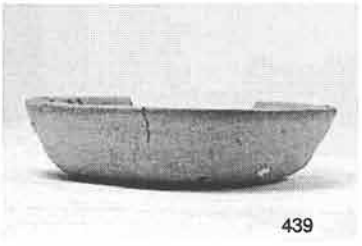
434

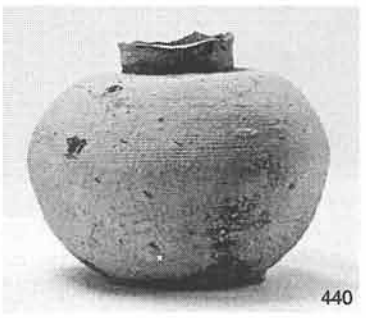
435

436

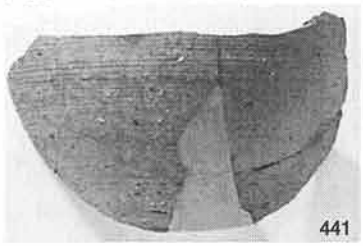
437

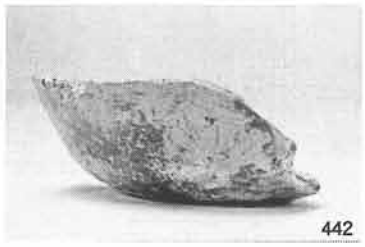

438

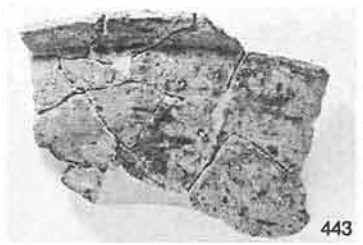

439


440

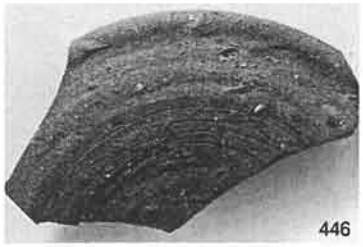
図版 38　出土遺物(21) 441～475

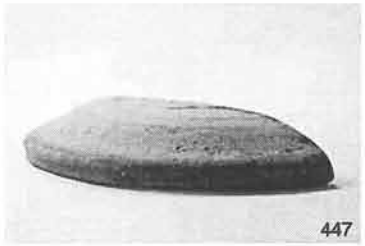

441

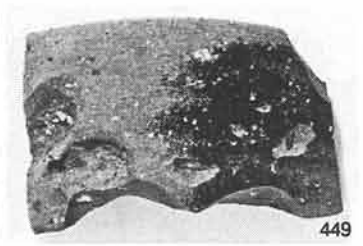

442


443

444

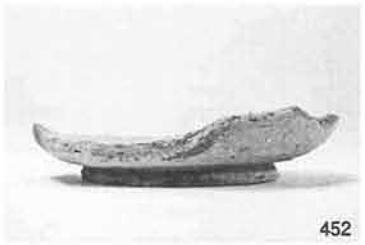

446

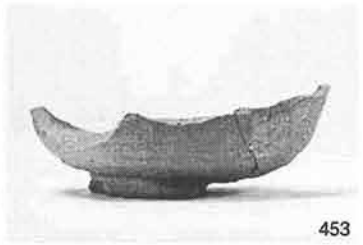

447


449

450

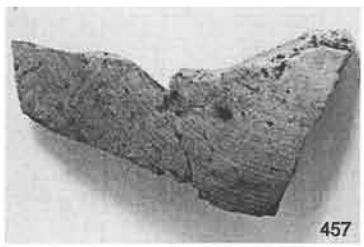
451


452

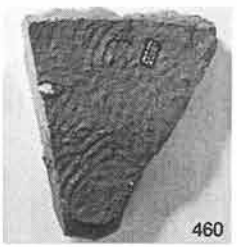

453

454

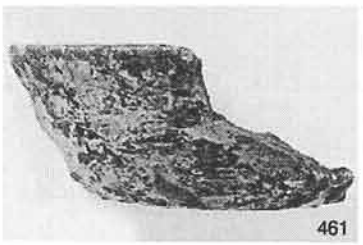
456


457

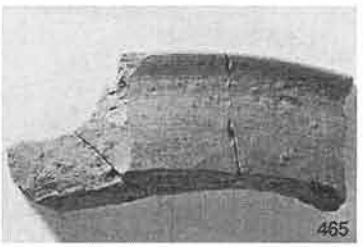
460


460

458

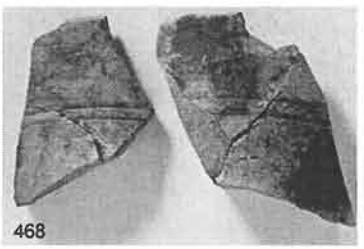

461

463

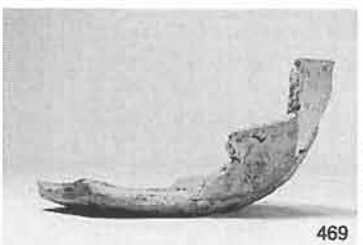

465

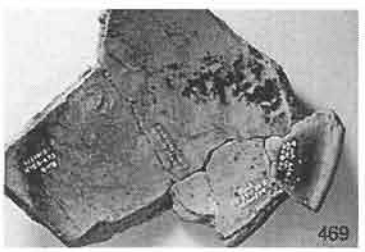
466

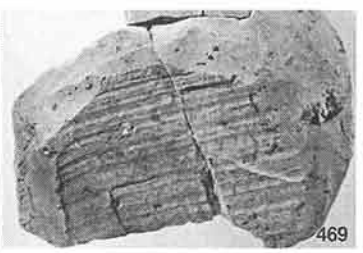
467

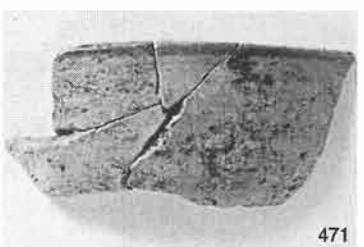

468

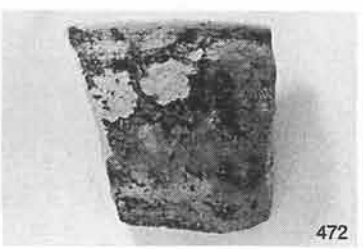
470

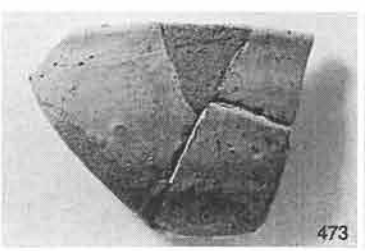

469

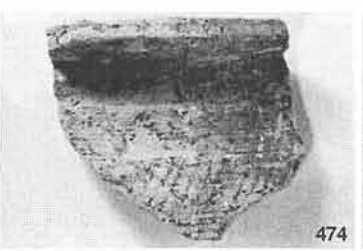

469

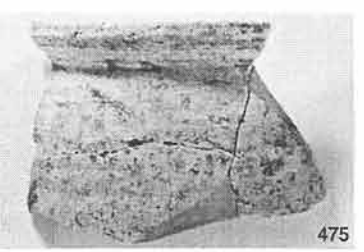

469

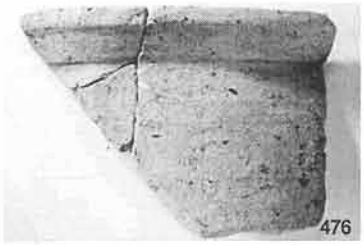

471

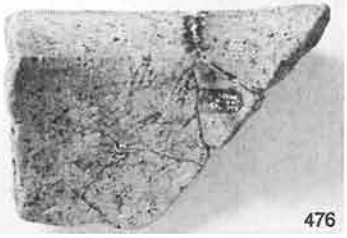

472

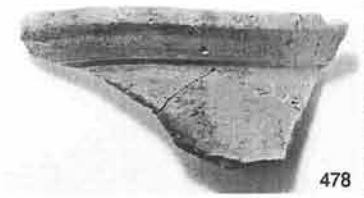

473

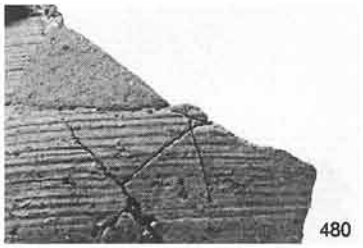

474

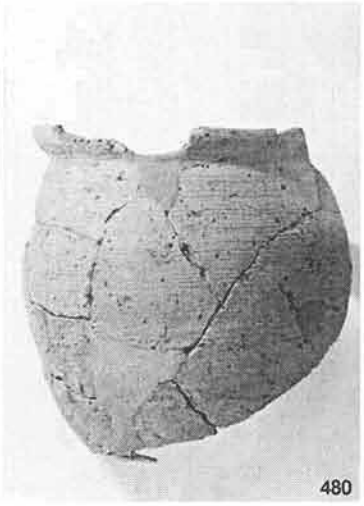

475


476


476

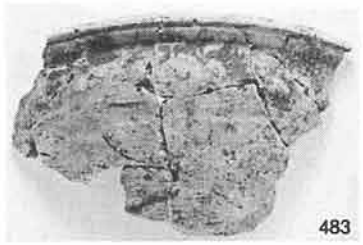

478

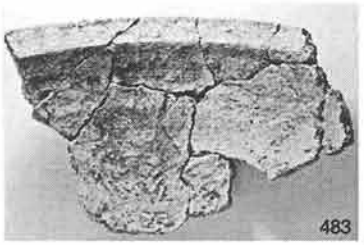

480


480

479

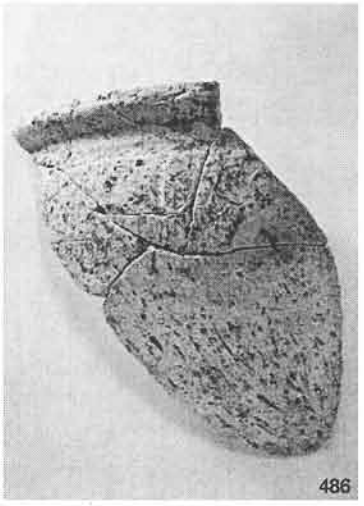
481

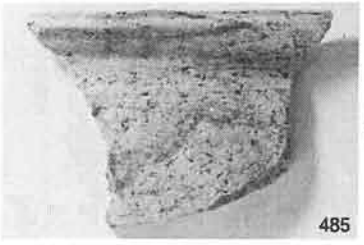

483


483

483

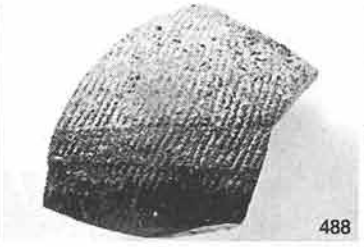
483


486


485

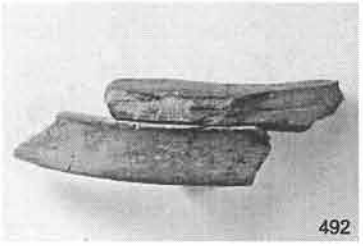
487

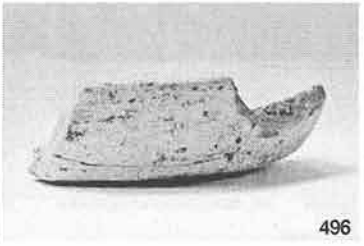
487

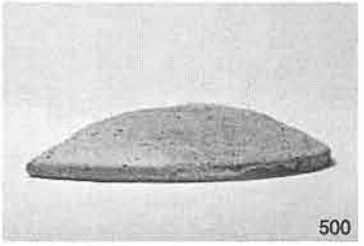

488

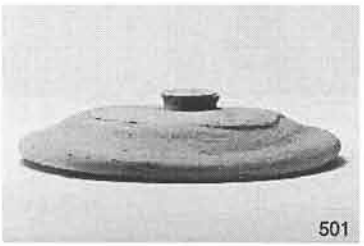
489

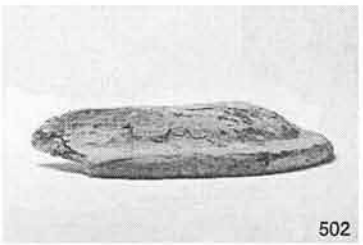
491

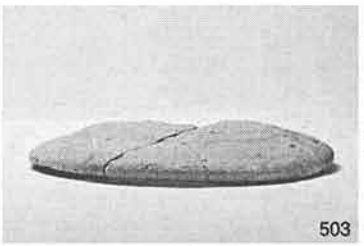

492

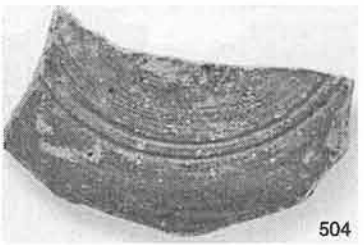

496

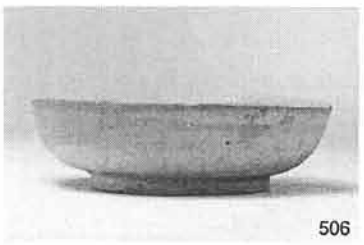

500

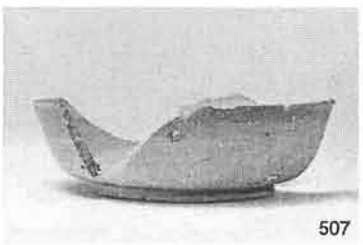

501

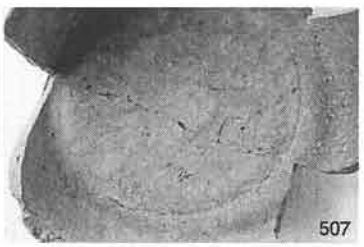

502

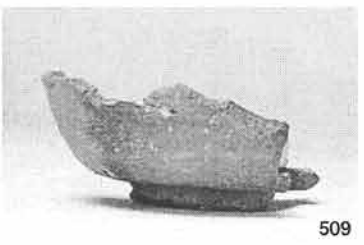

503


504

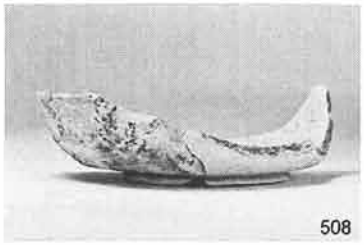

506

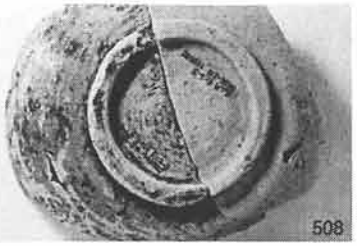

507

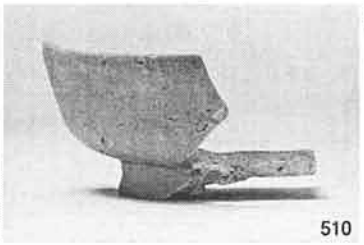

507


509

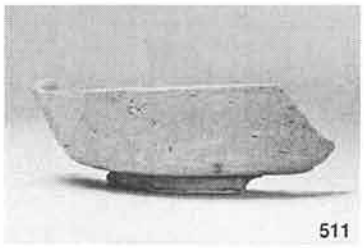
図版 40　出土遺物(23) 508～537

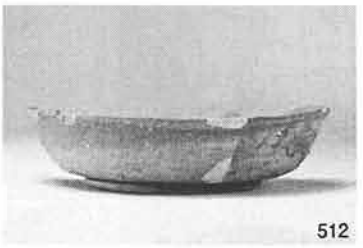

508


508

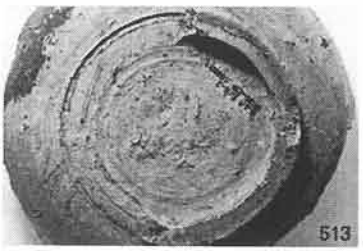

510

510


511

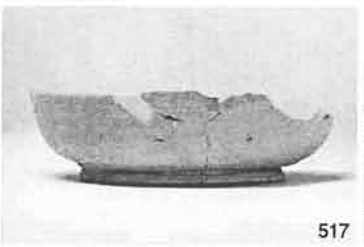

512

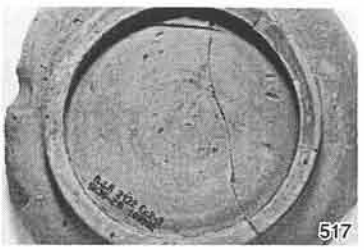
513

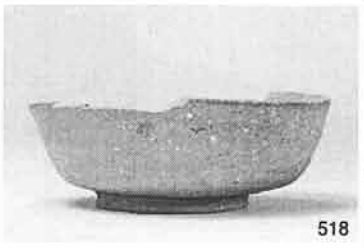

513

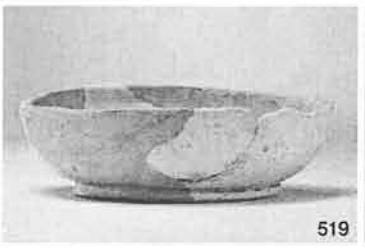
514

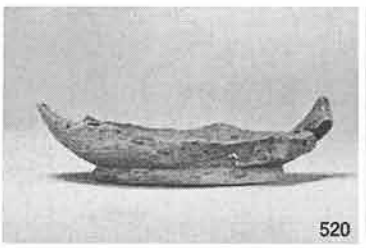
515

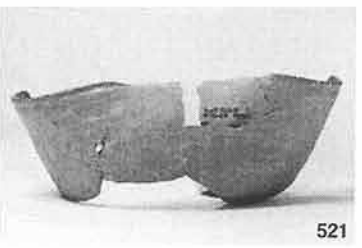

517

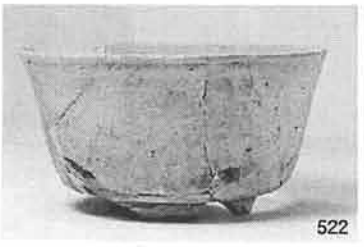

517


518


519


520


521

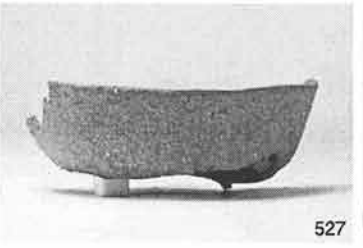

522

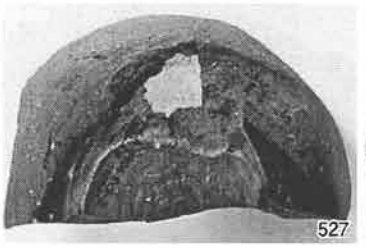
524

525

525

526

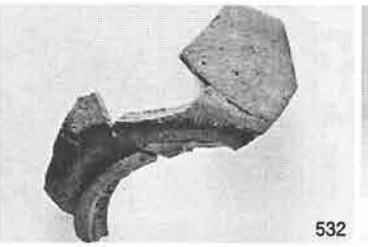

527

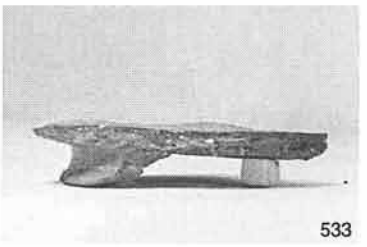

527

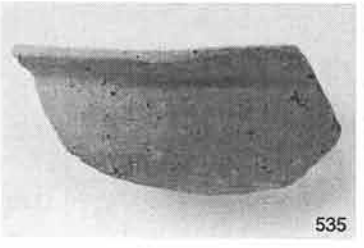
527

528

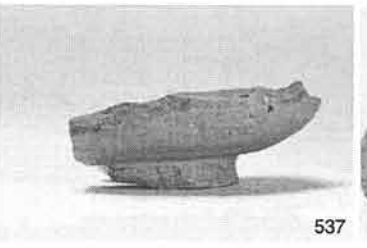
529

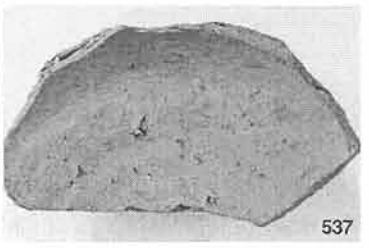

532

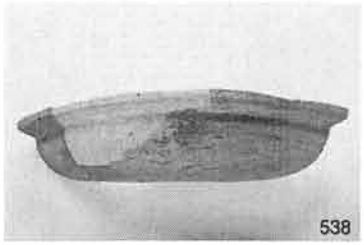

533

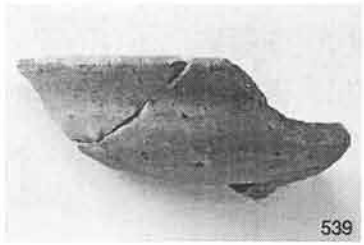

535

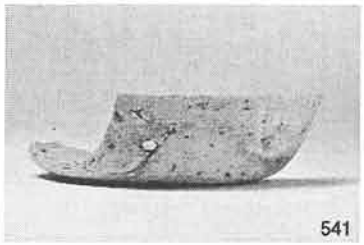
536

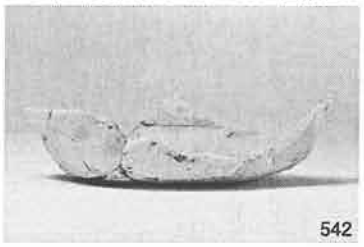

537

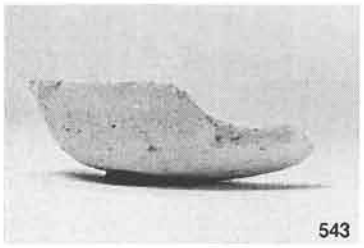

537


538

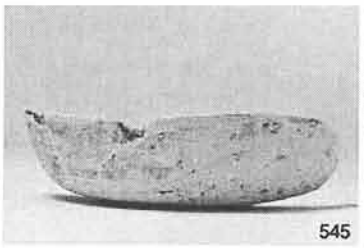

539

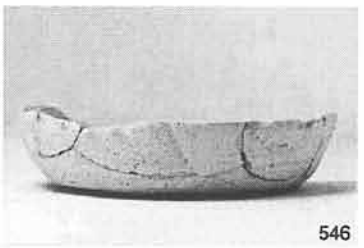

541

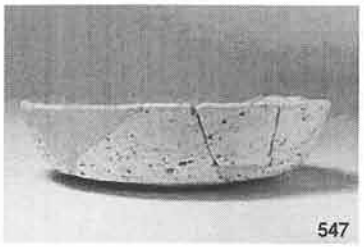

542

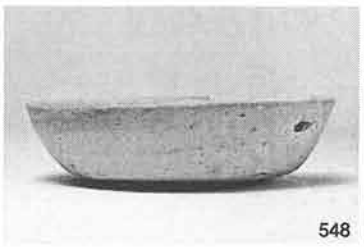

543

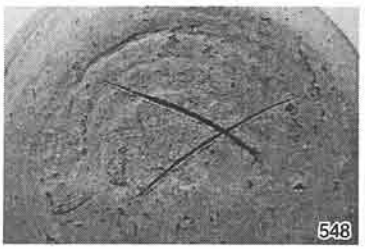
544

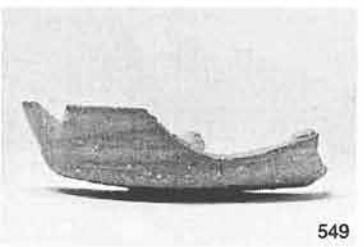

545

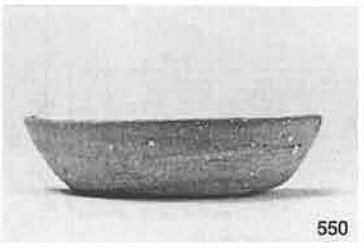

546

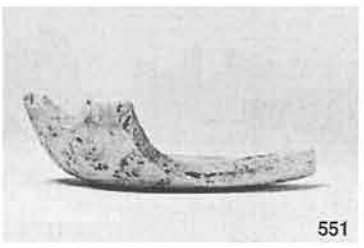

547

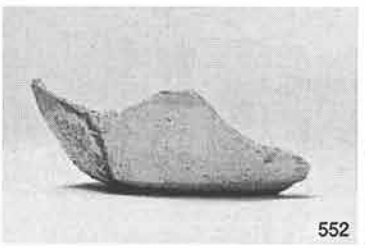

548


548

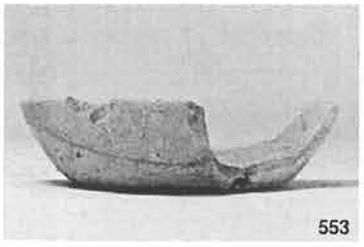

549

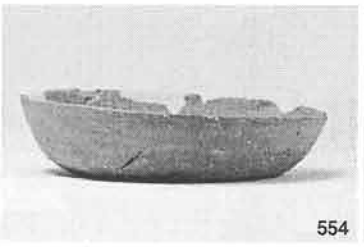

550

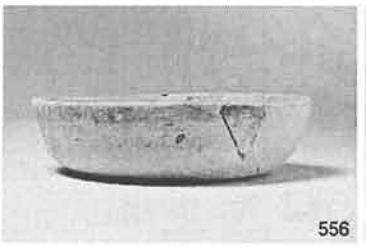

551

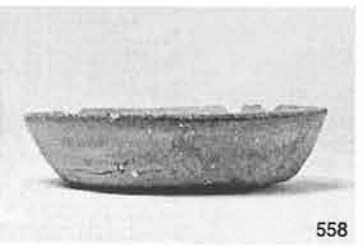

552

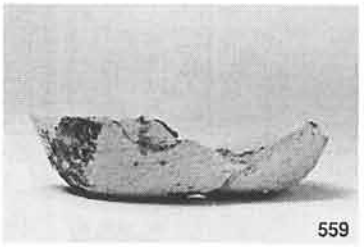
552


553

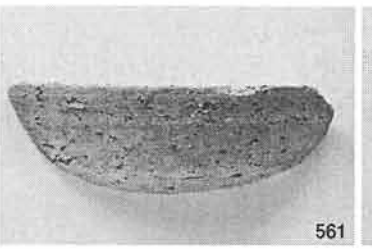

554

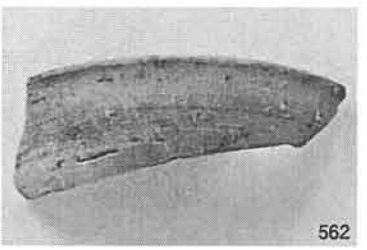

556

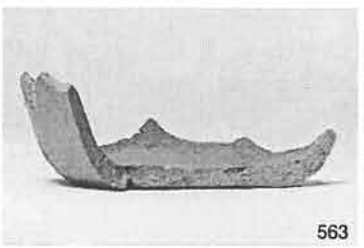

558

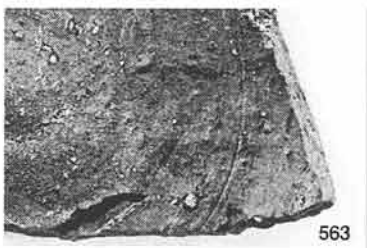

559

560

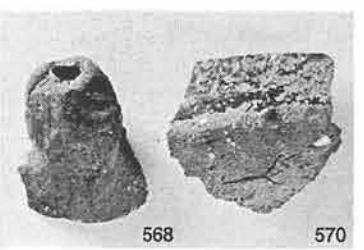

561

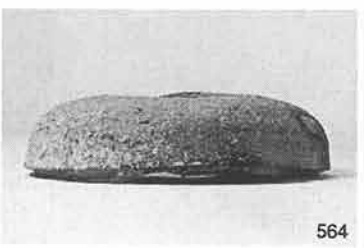

562

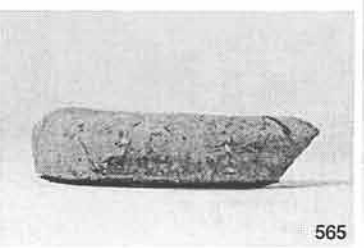

563

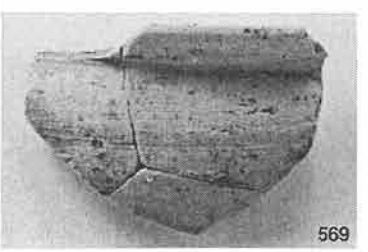

563

566


568 570


564


565


569

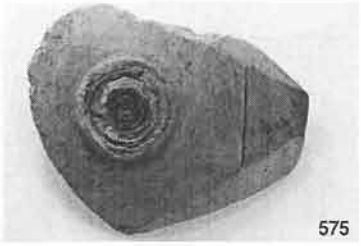
図版 42　出土遺物(25) 573～598

573

573

574

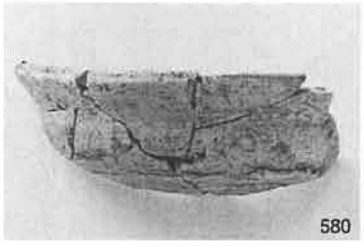
578


575

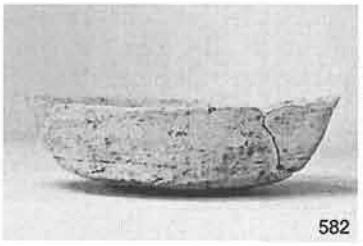
575

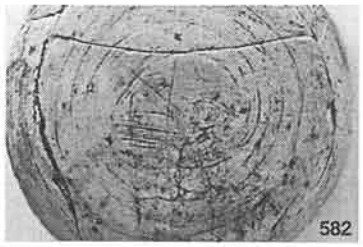
576

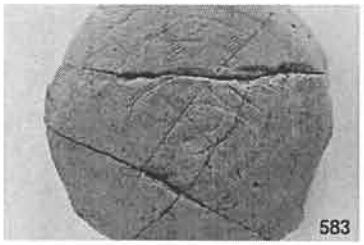
576

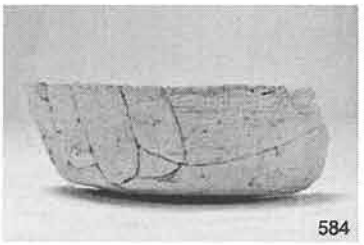

580

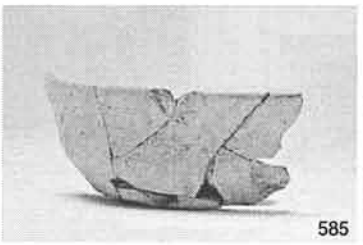
581

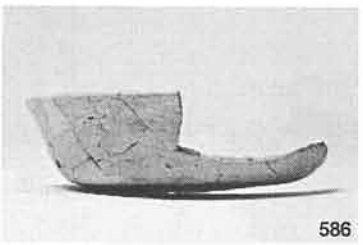

582

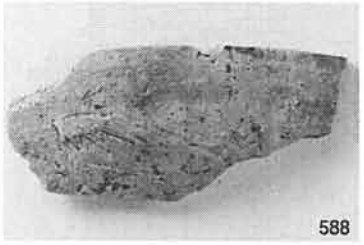

582

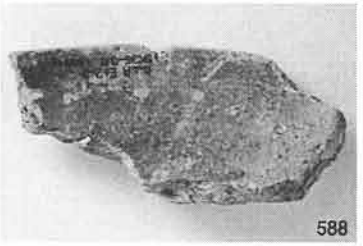

583

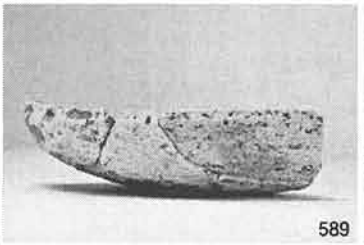

584

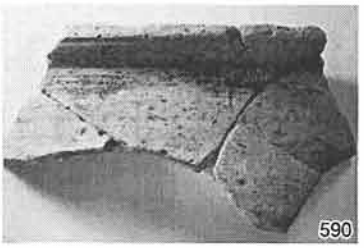

585

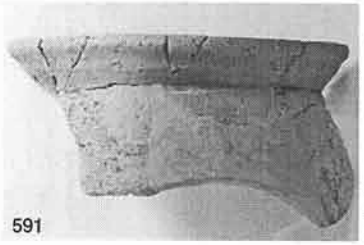

586

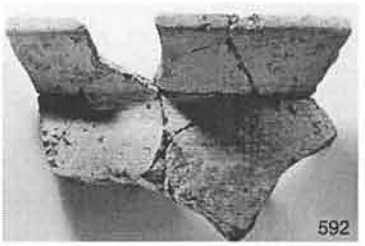

588


588

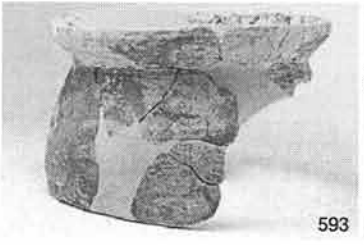

589

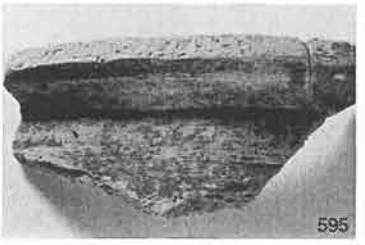

590


591

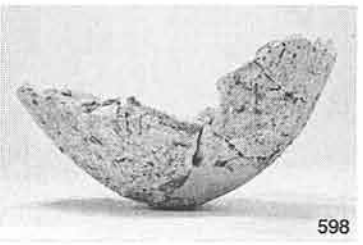

592

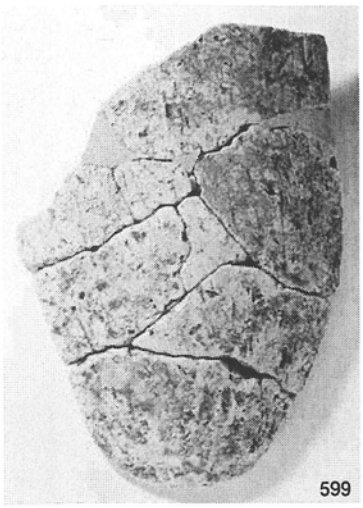
596

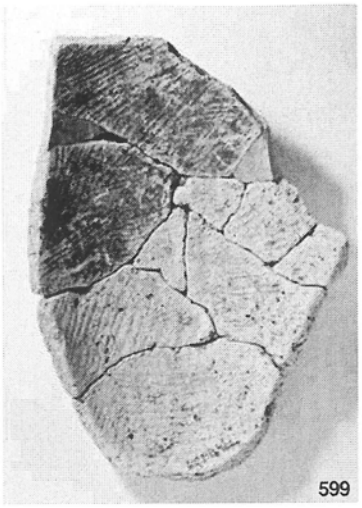

593

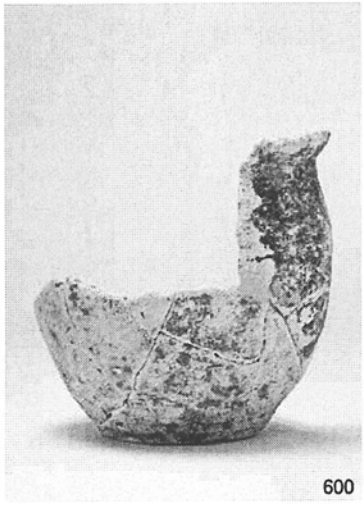

595

594

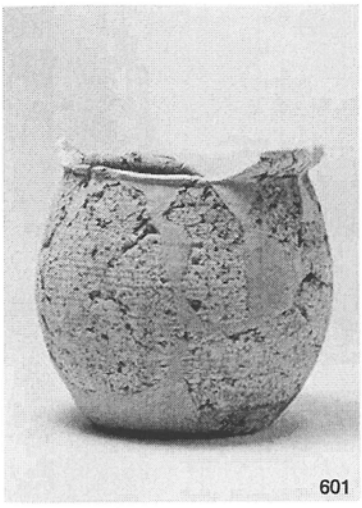

598

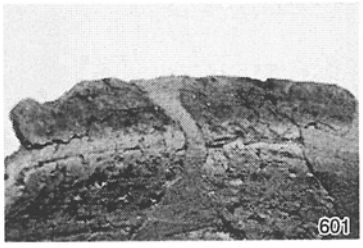

599

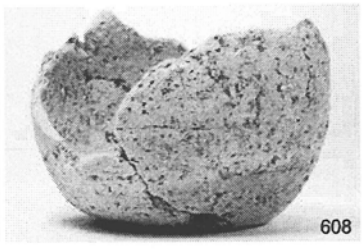

599

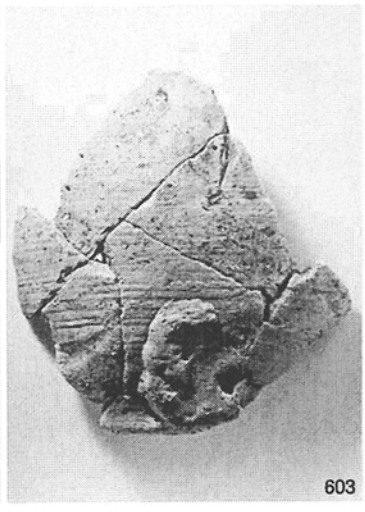

600

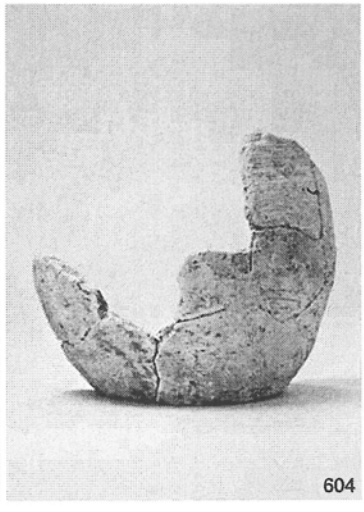
602

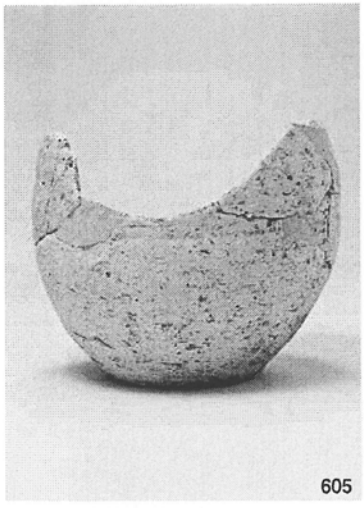

601

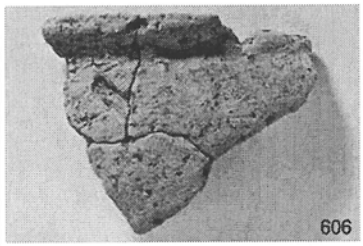

601

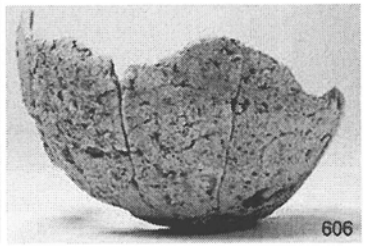

608

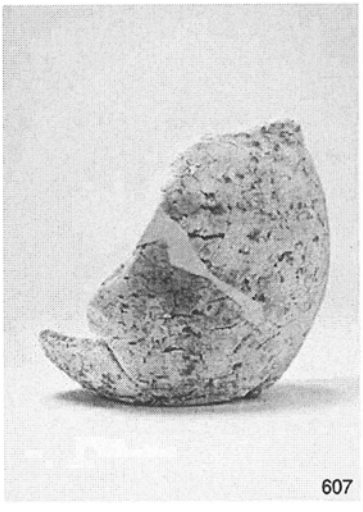

603

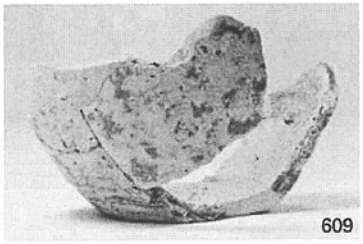

604

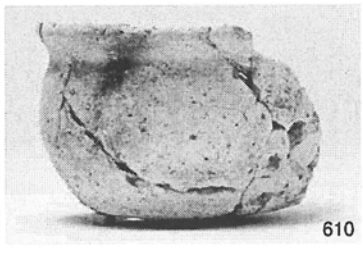

605

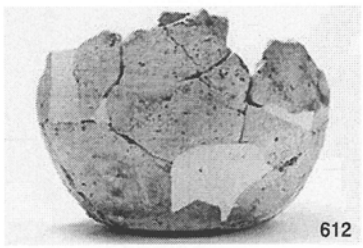

606

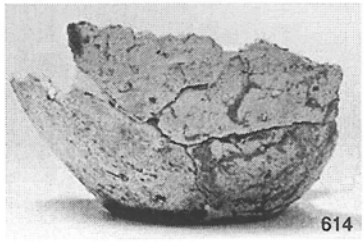

606


607

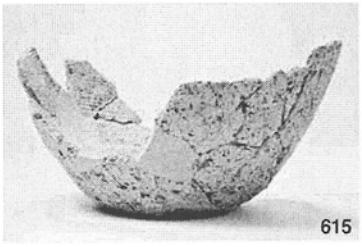

609

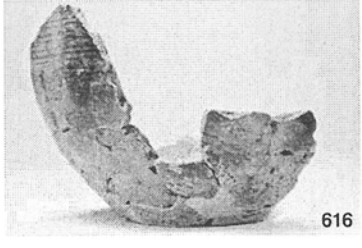

610

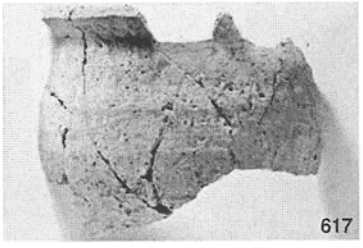

612


614

613

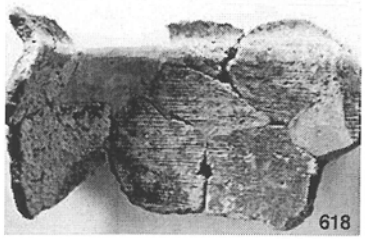

615

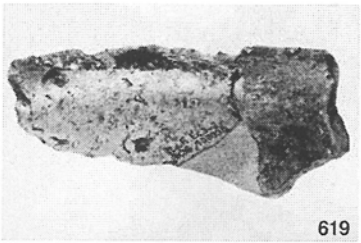

616

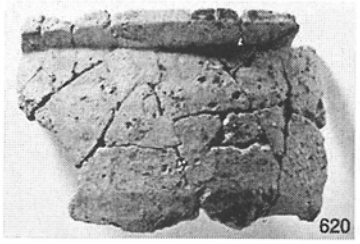

617

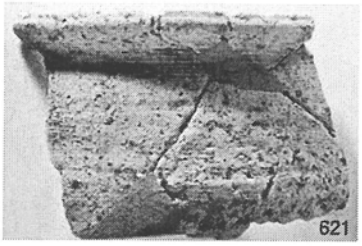
616

図版 44　出土遺物(27) 618～649

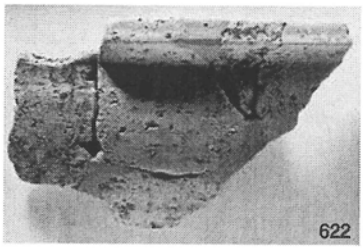

618

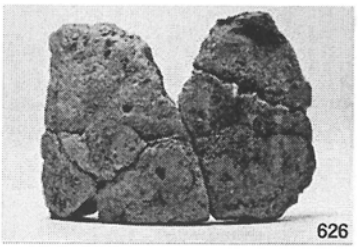

619

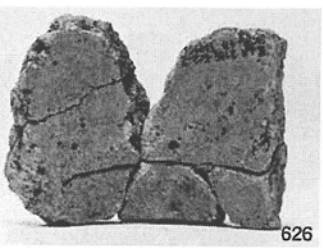

620


621

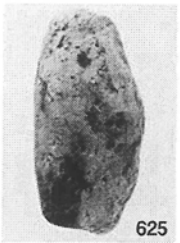
623

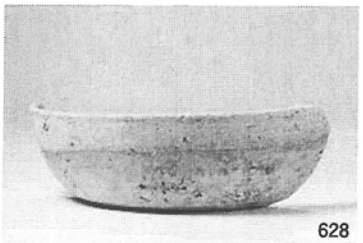

622

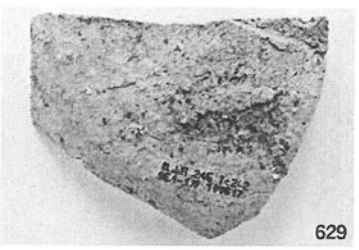

626

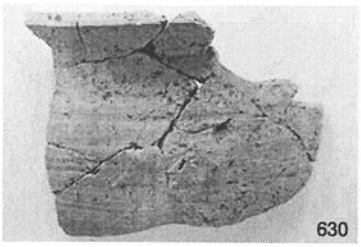

626

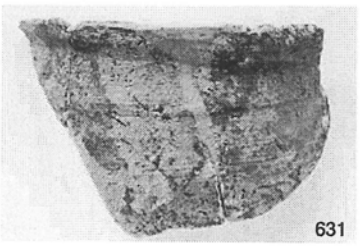
624


625

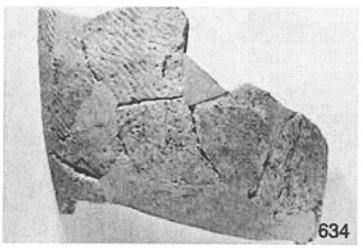

628

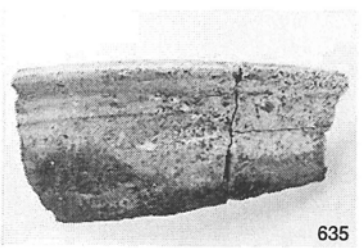

629

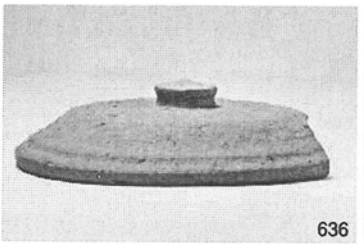

630

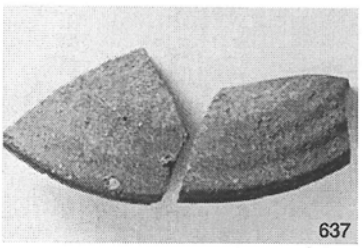

631

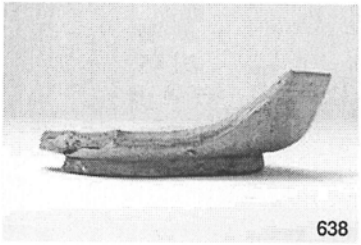
633

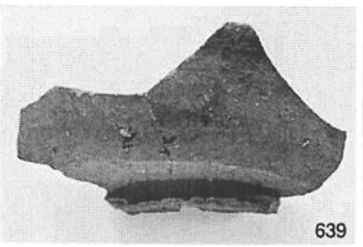

634

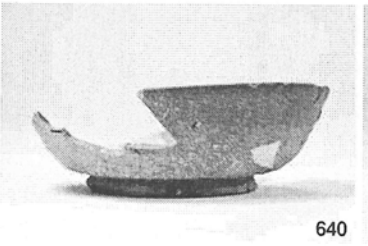

635

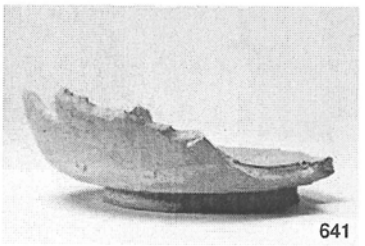

636

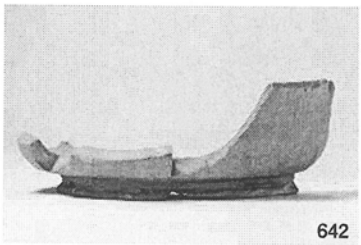

637

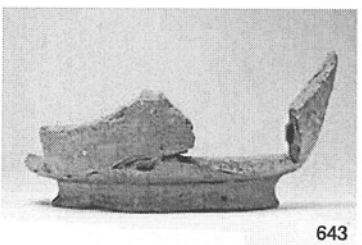

638

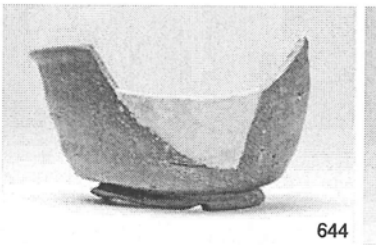

639

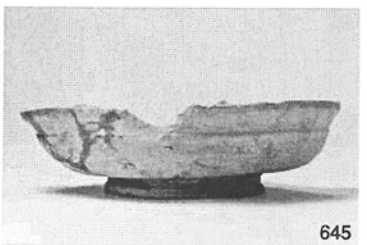

640

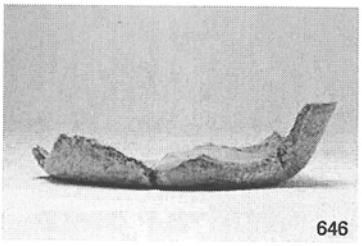

641

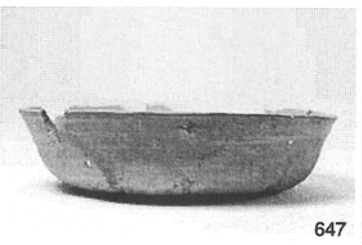

642

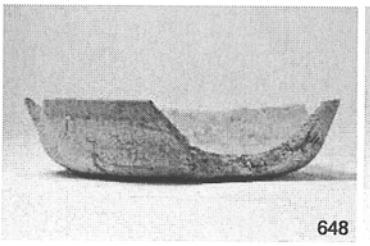

643

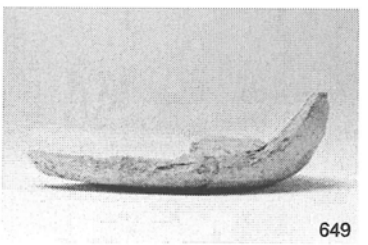

644

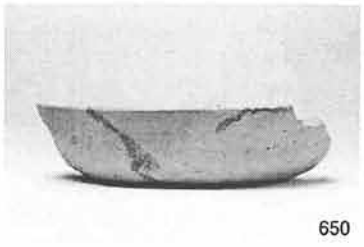

645

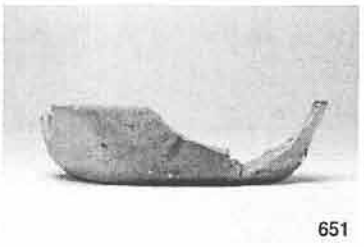

646

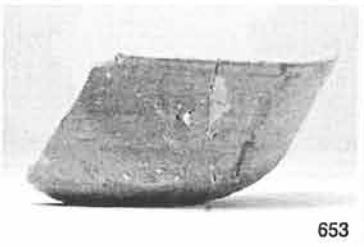

647


648


649

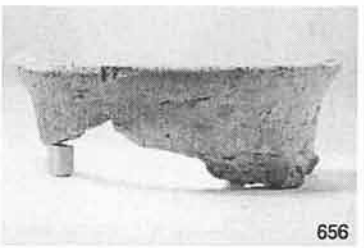

650

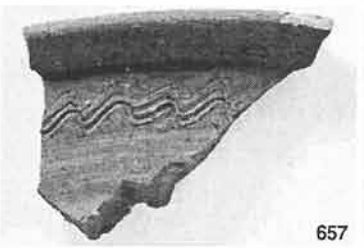

651

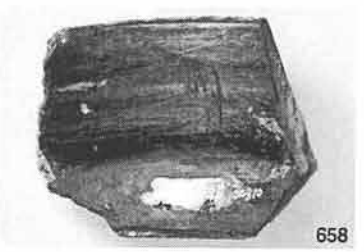

653

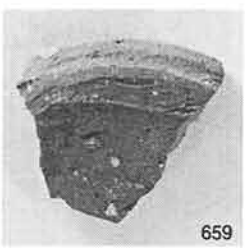
654

655


656

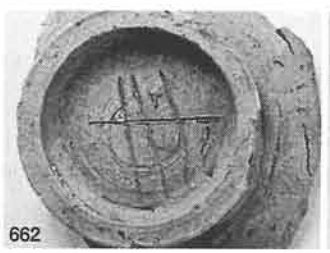

657


658

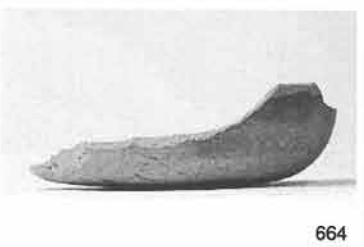

659

660

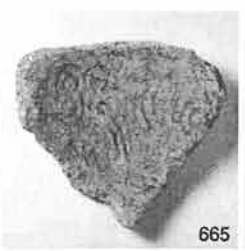
661


662

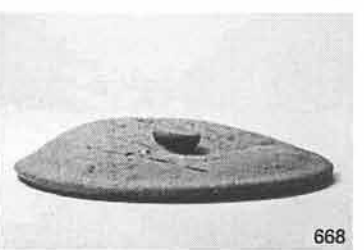
663


664

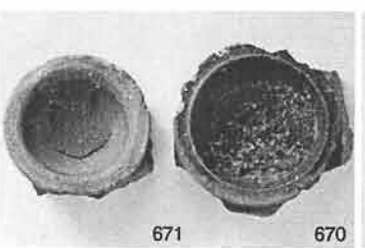
665

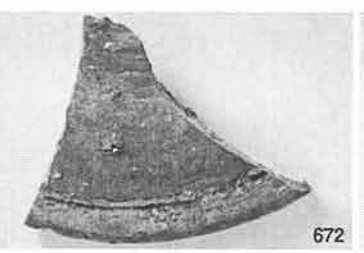

665

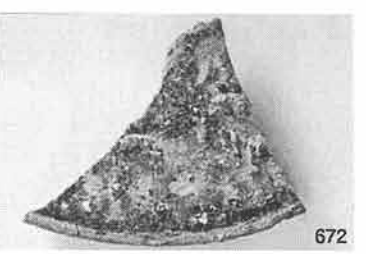
666

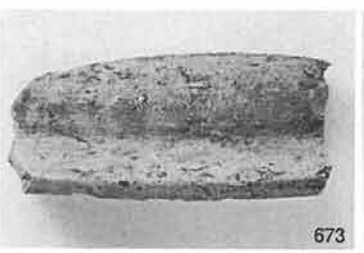

668

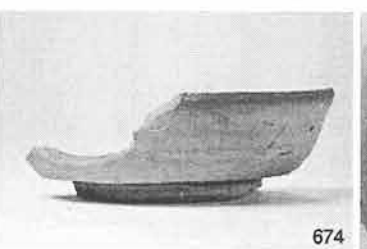
669


671 670


672


672

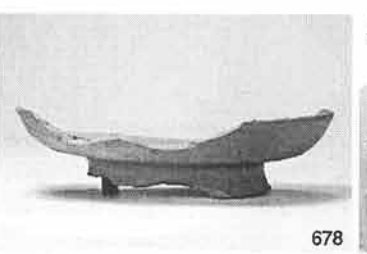

673


674

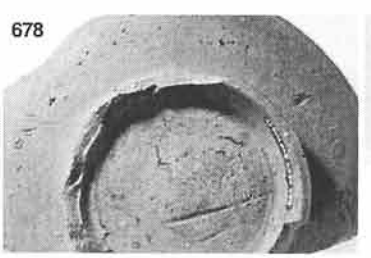
674

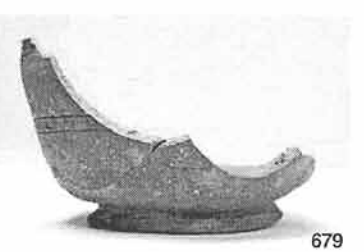
676

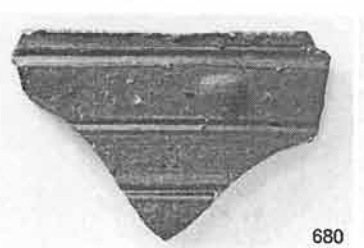
677


678

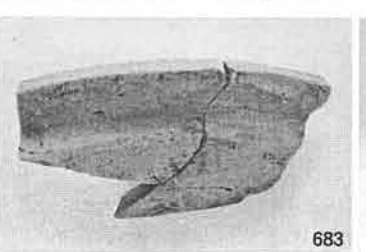
678




679

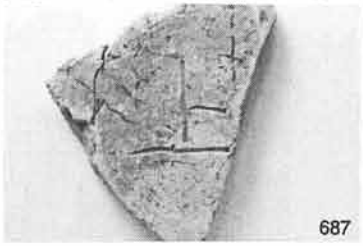

680

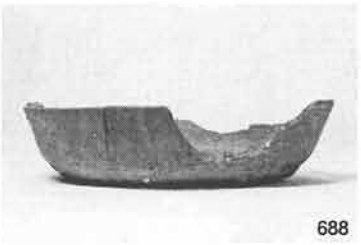
682

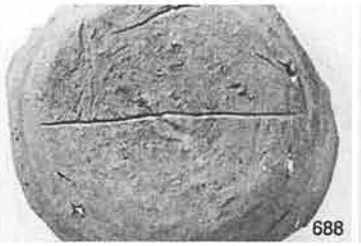

683

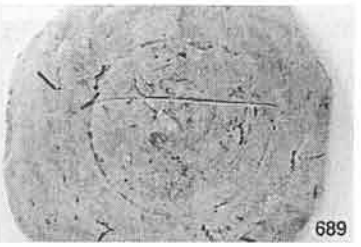
685

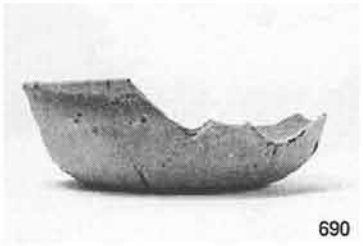
図版 46　出土遺物(29) 687～717

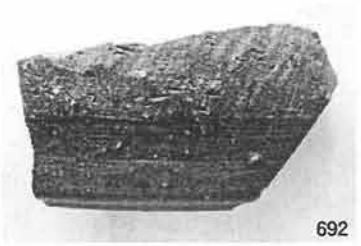

687

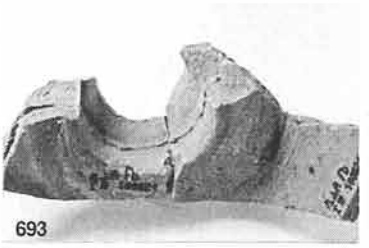

688

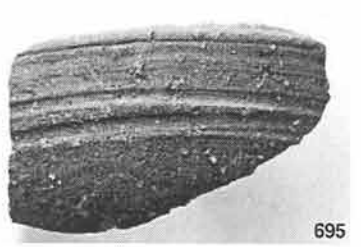

688

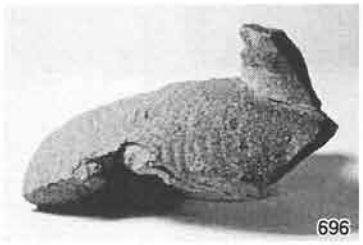

689

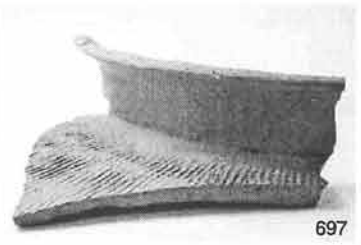

690

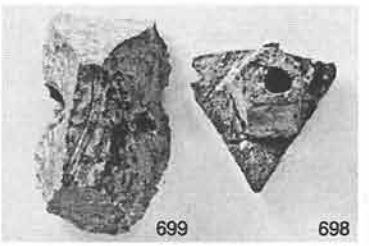

692


693


695

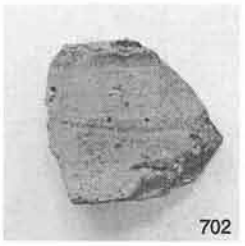

696


697

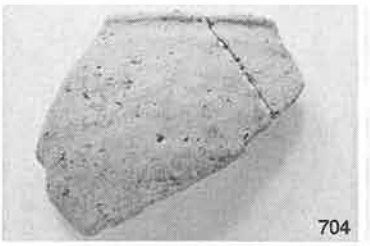

699
698

701

694


702

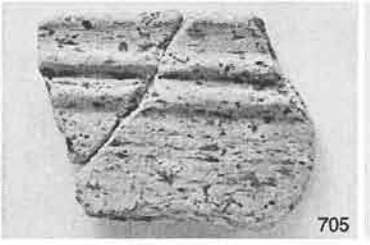
702

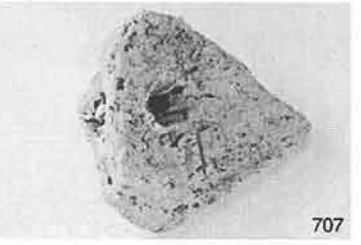

704

701

703

703

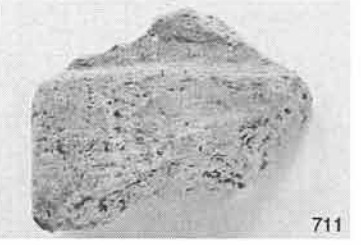

705


707

708

709

710

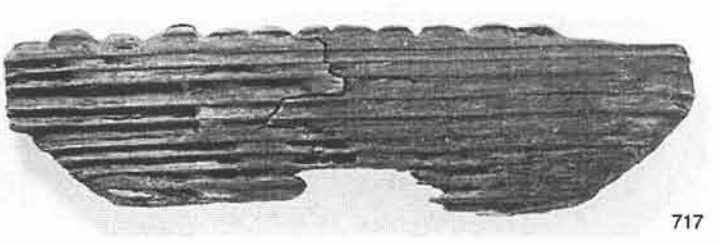

711

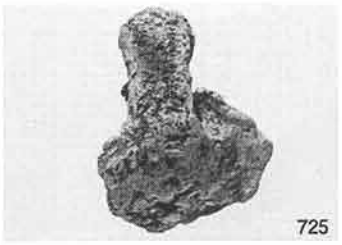
715
714
716

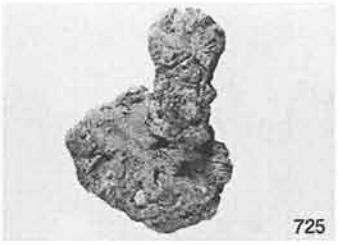
717

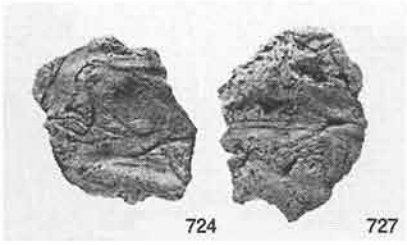
712

713


717

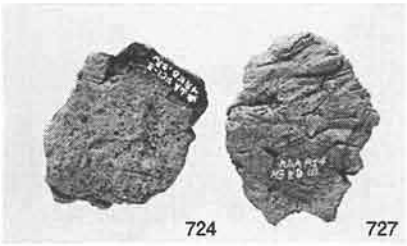

725

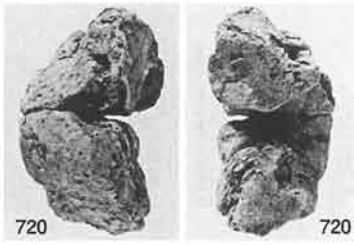

725

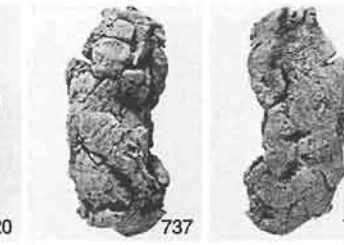

724 727

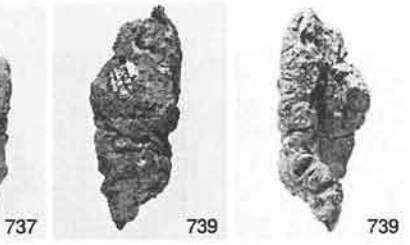
738

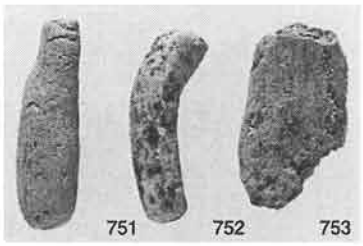
738


724 727

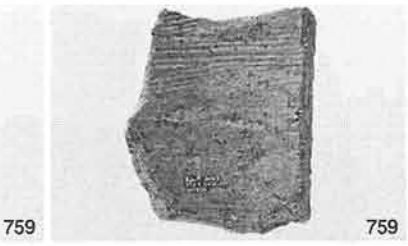

720 720

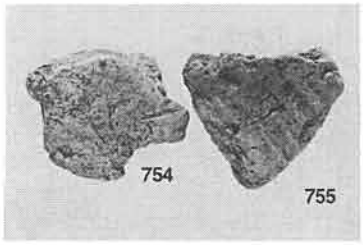

737 737

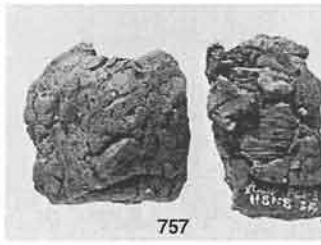

739 739

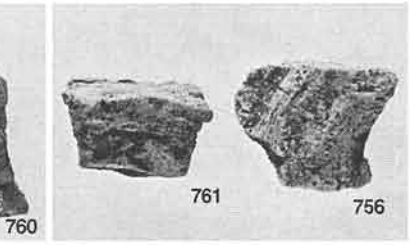

751 752 753

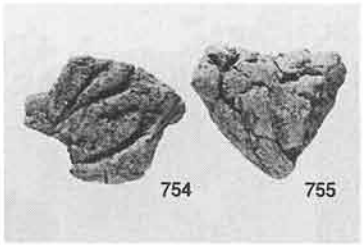
759

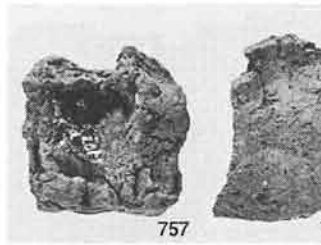

759

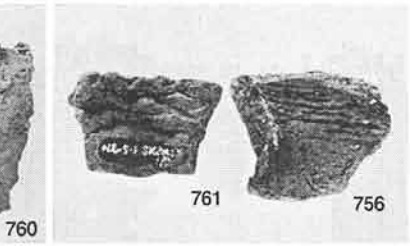

754 755


757 760

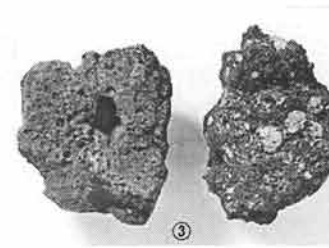

761 756

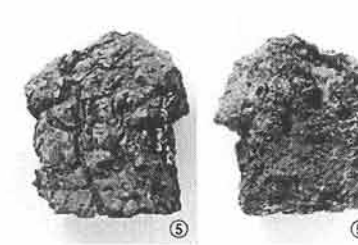

754 755

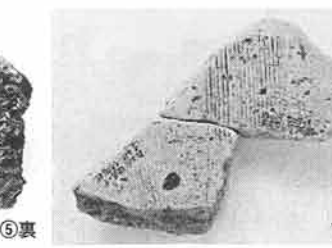

757 760

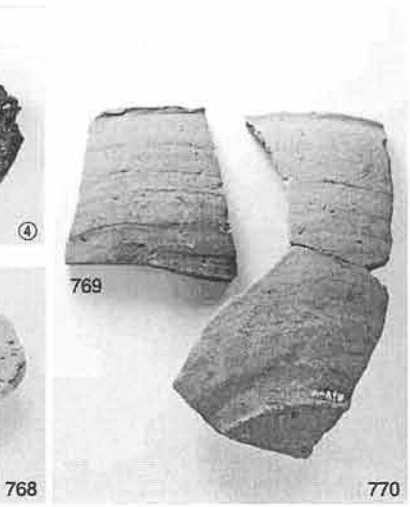

761 756

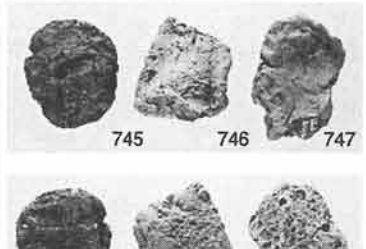
②


③ ④

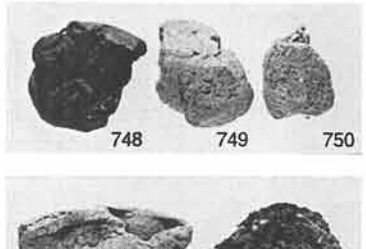

⑤ ⑤裏

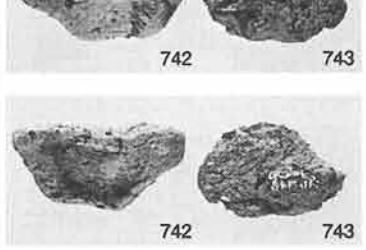

768


769 770

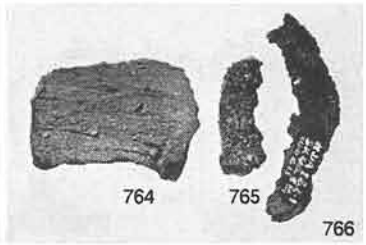

745 746 747

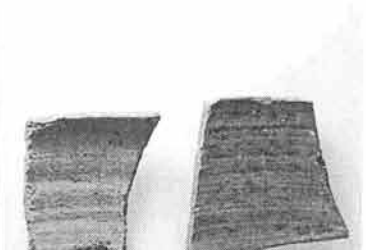
745 746 747

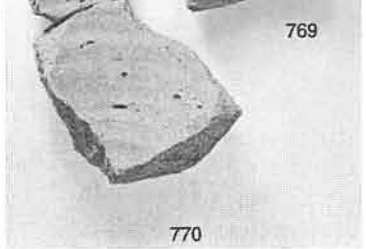

748 749 750


748 749 750

742 743


742 743


764 765 766


764 765 766

報告書抄録

ふりがな	まるやまえーいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　名	丸山Ａ遺跡　発掘調査報告書
副書名	県営ほ場整備事業(蔵光地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	－
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第50
編著者名	渡邊美穂子，笹澤正史，井上 巌，パリノ・サーヴェイ株式会社，(株)加速器分析研究所
編集・発行機関	新発田市教育委員会
所在地	〒959－2323　新潟県新発田市乙次281番地2　　0254（22）9534
発行年月日	西暦2014年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡No.	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まるやまえーいせき 丸山Ａ遺跡	にいがたけん　しばたし 新潟県　新発田市 くらみつあざまるやま 蔵光字丸山4193-1番地ほか	15206	262	37° 57’ 19”	139° 24’ 31”	20100518 ～20101006	950	県営ほ場整備事業(担い手育成型)蔵光地区による

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	奈良・平安時代 (8世紀後半 ～9世紀中頃)	掘立柱建物４棟，土師器焼成坑９基，土坑32基，井戸２基，溝２条，遺物埋納ピット１基を含むピット多数	須恵器(食膳具・貯蔵具・窯道具)，黒色土器(食膳具・貯蔵具)，土師器(食膳具・煮炊具)，製塩土器，土錘，焼成粘土塊，木製品，羽口，鉄滓	須恵器・黒色土器・土師器とも，金属器模倣食膳具を多数出土。
集落跡?	鎌倉時代 (12世紀中葉～13世紀前葉)	掘立柱建物１棟，遺物埋納ピット１基	瀬戸美濃，珠洲焼，須恵器系中世焼物，柱，	赤色顔料容器として使用された，珠洲焼小型双耳壺の埋納あり。

要　約

今回，遺跡面積の一割にも満たない950㎡のみの発掘であったが，多量の須恵器・土師器が出土した。また，掘立柱建物４棟と井戸２基，土師器焼成坑９基，土器埋納土坑１基や遺物大量廃棄土坑を含む土坑32基などを検出した。これらにより本遺跡は，８世紀後半から９世紀中頃にかけて営まれた集落遺跡であり，５期に細分した各期に土師器焼成坑１～２基を伴う，継続的な土師器生産遺跡であることが判明した。また，須恵器生産に関連する遺物も出土，土器埋納土坑の内容も加味すると，近隣に所在するホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡と連携して，土師器・須恵器生産および製品の選別・出荷に関与していたと考えられる。特に前半期は，須恵器・土師器とも金属器模倣器種を多数含むことから，官衙との関連が推測される。

このほか，12世紀中葉～13世紀前半の四面廂掘立柱建物1棟と，珠洲焼小型双耳壺の埋納を検出。近隣に中世加地氏の居館跡(蔵光館跡)などがあり，これとの関連性が推測される。

丸山Ａ遺跡　発掘調査報告書

県営ほ場整備事業(蔵光地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　　平成26(2014)年3月17日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地２　(0254-22-9534)

印　刷　　(株)エンジュ